

福岡空港滑走路増設事業に伴う埋蔵文化財調査報告(3)

雀居 14

— 雀居遺跡第18次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1388集

2020

福岡市教育委員会

福岡空港滑走路増設事業に伴う埋蔵文化財調査報告(3)

S A S A I
雀居 14

— 雀居遺跡第18次調査報告 —

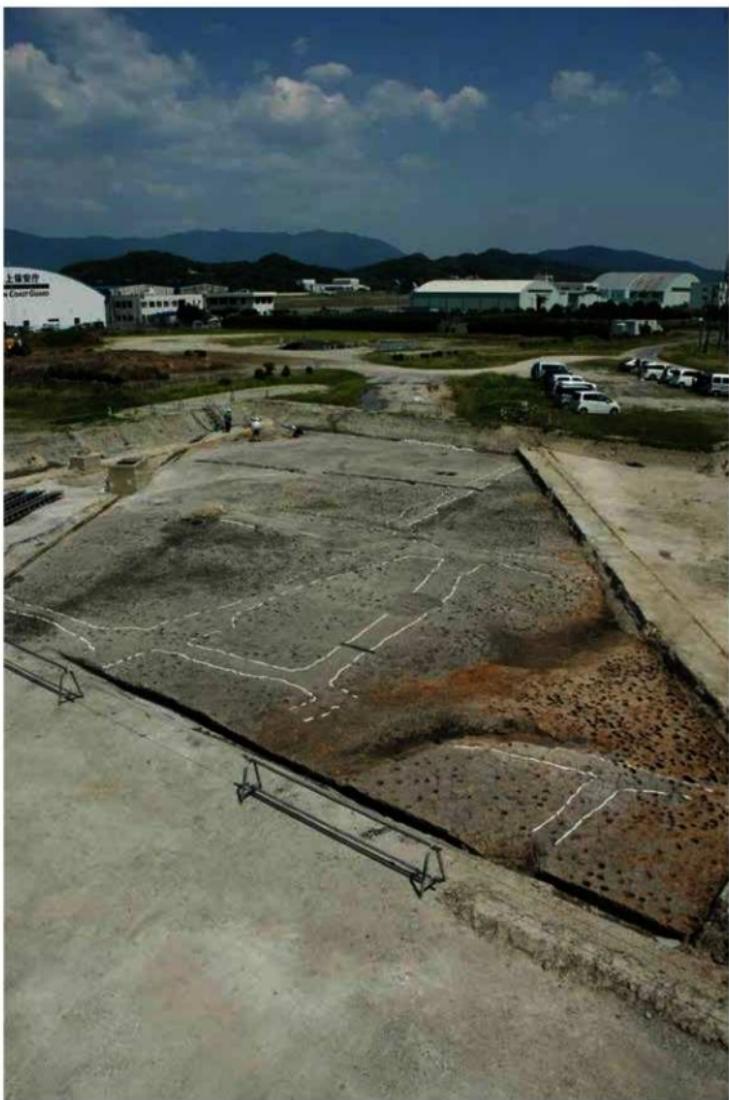
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1388集



遺跡番号 SAS-18
調査番号 1605

2020

福岡市教育委員会



1. 第1面全景（北西から）



2. 第2面土器群（南から）



3. 第2面 SX545 木質遺物出土（北から）



4. 出土玉類 (原寸)

序

玄界灘に面して広がる福岡市は、古くから大陸との玄関口として発展し、市内には多くの歴史遺産が存在します。これらは私たちの暮らしに潤いを与え、豊かな生活環境を作り出しています。

その一方で、毎年新しい開発事業が数多く手がけられ、都市発展の代償として貴重な遺跡を破壊せざるを得ないという厳しい現実があります。本市ではこれらの遺跡については事前に発掘調査を行い、先人の足跡を後世に残せるよう、その記録保存に努めています。

本書は福岡空港滑走路増設事業に伴う雀居遺跡第18次調査の成果を報告するものです。福岡空港は、わが国の国際的窓口のひとつとして盛んに利用される一方で、一本の滑走路としては離着陸数が国内最多となっており、滑走路増設が急務となりました。この地が、交通の要衝であることは古代でも変わらず、福岡空港内には雀居遺跡をはじめとして、貴重な遺跡が多く残っています。今回の調査では、弥生時代から古代にかけての大規模な集落や水田の跡を調査することができました。この調査の成果は、わが国の礎となる文化を育んできた福岡平野の歴史を明らかにする上で貴重な資料になることが期待されます。

本書が文化財保護へのご理解とご協力を得られる一助となるとともに、学術研究の資料としてご活用頂けましたら幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、国土交通省九州地方整備局をはじめとする多くの方々のご理解とご協力を賜りました。ここに心より謝意を表します。

令和2（2020）年 3月25日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例言・凡例

- 本書は、福岡空港滑走路増設事業に伴う自衛隊施設建設に先立ち、福岡市教育委員会が平成28（2016）年4月1日から平成29（2017）年8月31日にかけて実施した雀居遺跡第18次調査（福岡市博多区大字雀居福岡空港内）の発掘調査報告書である。発掘調査および整理報告書作成は、公共受託事業として実施した。
- 本書作成における作業分担は以下の通りである。

遺構実測 板倉有大、服部瑞輝、藤野雅基、田上勇一郎

遺構写真撮影 板倉、服部、田上

遺物実測 土器・土製品：野口聰子、大庭友子、井上加代子、中原三栄子、平川敬治、三浦悠葵、板倉石器・石製品：株式会社九州文化財研究所、萩原博文、板倉

木器・木製品：板倉、服部

金属器・金属製品：比佐陽一郎、板倉

石製・ガラス製玉類：比佐

遺物写真撮影 板倉、比佐

ト レ ー ス 大庭、熊塙御堂和香子、野口、井上、中原、板倉

執筆 第Ⅰ～Ⅳ章・Ⅵ章 板倉

第V章第1節 パリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社古環境研究所

第2節 上條信彦、清水小春（弘前大学人文社会科学部）

第3節 比佐、松園菜穂（福岡市埋蔵文化財センター）

編集 板倉

- 本書に使用した方位は座標北である。磁北は本地域では真北に対し $6^{\circ} 20'$ 西偏する。
- 遺構略号は、SB（掘立柱建物）、SP（柱穴・ピット）、SK（土坑）、SE（井戸）、SC（竪穴建物）、SD（溝）、SS（水田）、SX（落ち込み、包含層等）とする。遺構番号は種類に関係なく連番とした。
- 報告後の遺物・写真・図面の管理は、福岡市埋蔵文化財センターで行う予定である。
- その他調査に関わる基本情報は下表の通りである。

遺跡名	雀居遺跡	調査次数	18次	遺跡略号	SAS-18
調査番号	1605	分布地図幅名	雀居 23	遺跡登録番号	2633
対象面積	182,700 m ²	調査対象面積	2,500 m ²	調査面積	2,407 m ²
調査期間	平成 28 年 4 月 1 日～平成 29 年 8 月 31 日			事前審査番号	26-1-80
調査地	福岡市博多区大字雀居福岡空港内				

本文目次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	2
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	3
第Ⅲ章 調査の方法と経過	5
第Ⅳ章 調査の成果	
第1節 第1面の調査	9
第2節 第2面の調査	31
第3節 第3面の調査	167
第Ⅴ章 自然科学分析	
第1節 木製品樹種、種実、昆虫、骨貝類、岩石、炭素14年代	225
第2節 イネ、イネ圧痕	235
第3節 金属・ガラス・石製品、赤色顔料、被熱粘土塊	237
第VI章 総括	241

挿図目次

第1図 雀居遺跡と周辺の遺跡 (1/50,000)	4	第27図 SP041・110実測図 (1/40)	34
第2図 雀居遺跡の既往調査区 (1/8,000)	5	第28図 SP150・496・607・609・617・918出土土器実測図 (1/3)	35
第3図 雀居遺跡18次調査区と隣接調査区 (1/2,000)	6	第29図 SP120・935出土土器実測図 (1/3)	36
第4図 雀居遺跡18次調査の区割り (1/400)	8	第30図 SP390・609・621・629・632出土土器実測図 (1/4)	37
第5図 第1面遺構全体図 (1/200)	折り込み	第31図 SP041・146出土土器実測図 (1/4, 1/6)	38
第6図 SK004・005・007・008・031実測図 (1/40)	10	第32図 SP120・178・935出土土器実測図 (1/4, 1/2)	39
第7図 SK009・010・027～030実測図 (1/40)	11	第33図 SP110・182・198出土土器実測図 (1/4, 1/6)	40
第8図 SK005・030・031, SD023・025出土土器実測図 (1/4, 1/3)	12	第34図 SK398・556・608・611・613, SE053・937実測図 (1/40)	41
第9図 SD001・002・003実測図 (1/150, 1/80)	14	第35図 SK398・611・613, SE053出土土器実測図 (1/3)	42
第10図 SD011・023・024実測図 (1/150, 1/80)	15	第36図 SE937出土土器実測図 (1/3, 1/4)	43
第11図 調査区南壁土層およびSD025・602断面図 (1/60)	16	第37図 SK121・136・175・441・446・447・448・449・450実測図 (1/40)	44
第12図 SD602出土土器実測図 (1/4, 1/3)	17	第38図 SK038・175・334実測図 (1/40)	45
第13図 SK030, SD003・024・602出土土器実測図 (1/2, 1/3, 1/4)	18	第39図 SK038・121・136・175・176・441・447・449・450出土土器実測図 (1/3)	46
第14図 SS019～022杭列・土層実測図 (1/20)	20	第40図 SK038・121, SE053・937出土土器実測図 (1/3, 1/4)	47
第15図 調査区土層実測図 (1/40)	21	第41図 SP・SK出土土器実測図 (1/1, 1/2, 1/3)	48
第16図 SS017・018出土土器実測図 (1/3)	22	第42図 SK136・176・441・447・611, SE053・937出土石器実測図 (1/1, 1/2)	49
第17図 SS019～022出土土器実測図 (1/3)	23	第43図 SC1472・1473実測図 (1/50)	51
第18図 SS012・018・020出土土器実測図 (1/2, 1/3)	24	第44図 SC248・614実測図 (1/50)	52
第19図 SS021・022出土土器実測図 (1/6, 1/4, 1/2, 1/3)	25	第45図 SC050・1474実測図 (1/50)	53
第20図 第1面下層, SX039・040出土遺物実測図 (1/3)	26	第46図 SC050・248・614出土土器実測図 (1/4, 1/3)	54
第21図 第1面下層, SX039出土土器実測図 (1/8, 1/2, 1/4)	27	第47図 SC1474出土土器実測図 (1/4, 1/3)	55
第22図 第1面出土土器1 (1/1, 1/2)	28	第48図 SC050・614・1474出土土器実測図 (1/3, 1/2)	56
第23図 第1面出土土器2 (1/3)	29	第49図 SC054・1475実測図 (1/50)	57
第24図 第2面遺構全体図 (1/200)	折り込み	第50図 SC1476実測図 (1/50)	58
第25図 SB1460～1465実測図 (1/80)	32		
第26図 SB1466～1471実測図 (1/80)	33		

第51回	SC1475出土土器実測図 (1/4, 1/3)	59	第100回	土器群A出土土器実測図 3 (1/3)	107
第52回	SC054出土土器実測図 1 (1/3).....	60	第101回	土器群A出土土器実測図 4 (1/4)	108
第53回	SC054出土土器実測図 2 (1/3).....	61	第102回	土器群A出土土器実測図 5 (1/4, 1/3)	109
第54回	SC1475・1476出土石器実測図 (1/3, 1/2).....	62	第103回	土器群B出土土器実測図 1 (1/4, 1/6, 1/3)	110
第55回	SD032・033・055・606・663実測図 (1/100, 1/50)	63	第104回	土器群B出土土器実測図 2 (1/4, 1/3)	111
第56回	SD032・663出土土器実測図 (1/3)	64	第105回	土器群B出土土器実測図 3 (1/4, 1/3)	112
第57回	SD032出土石器実測図 (1/2, 1/3)	64	第106回	土器群B出土土器実測図 4 (1/4, 1/6, 1/10, 1/3)	113
第58回	第2面断面図 (1/250)	65	第107回	土器群B出土土器実測図 5 (1/3)	114
第59回	第2面下層出土土器実測図 (1/4, 1/3)	66	第108回	土器群B出土土器実測図 6 (1/4, 1/3)	115
第60回	第2面下層出土石器実測図 1 (1/1)	67	第109回	土器群B出土土器実測図 7 (1/4, 1/3)	116
第61回	第2面下層出土石器実測図 2 (1/2)	68	第110回	土器群B出土土器実測図 8 (1/3)	117
第62回	第2面下層出土石器実測図 3 (1/3, 1/2)	69	第111回	土器群C出土土器実測図 1 (1/4, 1/3)	118
第63回	第2面下層出土石器実測図 4 (1/2)	70	第112回	土器群C出土土器実測図 2 (1/4, 1/6, 1/3)	119
第64回	第2面下層出土石器実測図 5 (1/2)	71	第113回	土器群C出土土器実測図 3 (1/4, 1/3)	120
第65回	第2面下層出土石器実測図 6 (1/3)	72	第114回	土器群C出土土器実測図 4 (1/4, 1/3)	121
第66回	第2面下層出土石器実測図 7 (1/3)	73	第115回	土器群C・D出土土器実測図 (1/3)	122
第67回	第2面下層出土石器実測図 8 (1/1, 1/2)	74	第116回	土器群D出土土器実測図 1 (1/3)	123
第68回	第2面下層出土石器実測図 9 (1/3, 1/2)	75	第117回	土器群D出土土器実測図 2 (1/3)	124
第69回	第2面下層出土石器実測図 10 (1/2)	76	第118回	土器群D出土土器実測図 3 (1/3)	125
第70回	第2面下層出土石器実測図 11 (1/3, 1/2)	77	第119回	土器群D出土土器実測図 4 (1/3)	126
第71回	調査区南西ベルト土層実測図 (1/60)	78	第120回	土器群D出土土器実測図 5 (1/4, 1/3)	127
第72回	SX602・545実測図 (1/80)	79	第121回	土器群E出土土器実測図 (1/4, 1/3)	128
第73回	SX546・547実測図 (1/80)	80	第122回	SX109・112出土鏡形土製品実測図 (1/2)	129
第74回	SX545～547, SX576木質遺物、杭列実測図 (1/150, 1/80)	81	第123回	SX200・669・670・690出土木器実測図 (1/2, 1/4)	130
第75回	SX434・442出土土器実測図 (1/3)	82	第124回	土器群出土石器実測図 1 (1/1, 1/2)	131
第76回	SX545出土土器実測図 1 (1/4, 1/3)	83	第125回	土器群出土石器実測図 2 (1/3, 1/2)	132
第77回	SX545出土土器実測図 2 (1/3)	84	第126回	土器群出土石器実測図 3 (1/2)	133
第78回	SX546・547出土土器実測図 (1/3)	85	第127回	土器群出土石器実測図 4 (1/2, 1/3, 1/4)	134
第79回	SX546上層出土土器実測図 (1/4, 1/3)	86	第128回	土器群出土石器実測図 5 (1/3)	135
第80回	SX546出土土器実測図 (1/3)	87	第129回	土器群出土石器実測図 6 (1/3)	136
第81回	SX547上面出土土器実測図 (1/3)	88	第130回	調査区南トレント土層実測図 (1/60)	137
第82回	SX547出土土器実測図 (1/4, 1/3)	89	第131回	SD604出土土器実測図 1 (1/4, 1/3)	138
第83回	SX434・442上面出土木器実測図 (1/4, 1/3)	90	第132回	SD604出土土器実測図 2 (1/4, 1/3)	139
第84回	SX545出土木器実測図 1 (1/6, 1/4, 1/3)	91	第133回	SD604出土土器実測図 3 (1/3)	140
第85回	SX545出土木器実測図 2 (1/3, 1/4)	92	第134回	SD604出土土器実測図 1 (1/1, 1/2)	141
第86回	SX545出土木器実測図 3 (1/4, 1/6)	93	第135回	SD604出土土器実測図 2 (1/2)	142
第87回	SX545出土木器実測図 4 (1/10, 1/6)	94	第136回	SD604出土土器実測図 3 (1/2)	143
第88回	SX545出土木器実測図 5 (1/6)	95	第137回	SD604出土土器実測図 4 (1/3)	144
第89回	SX545出土木器実測図 6 (1/2)	96	第138回	SX676出土土器実測図 (1/4, 1/3)	145
第90回	SX546・547上面出土木器実測図 1 (1/3)	97	第139回	SX676・777出土土器実測図 (1/3)	146
第91回	SX546・547上面出土木器実測図 2 (1/8, 1/4, 1/6)	98	第140回	SX676出土木器実測図 1 (1/10, 1/6)	147
第92回	SX546出土木器実測図 (1/8, 1/6, 1/4)	99	第141回	SX676出土木器実測図 2 (1/4)	148
第93回	SX547出土木器実測図 (1/3, 1/6, 1/4)	100	第142回	SX718出土木器実測図 (1/10, 1/6, 1/4, 1/3)	149
第94回	SX545出土石器実測図 (1/1, 1/2, 1/3)	101	第143回	SX676出土石器実測図 1 (1/2)	150
第95回	SX546・547出土石器実測図 (1/2, 1/3)	102	第144回	SX676出土石器実測図 2 (1/2)	151
第96回	SX177下・435・SK447出土木器実測図 (1/4)	103	第145回	SX676出土石器実測図 3 (1/2)	152
第97回	土器群範囲実測図 (1/50)	104	第146回	SX676出土石器実測図 4 (1/3)	153
第98回	土器群A出土土器実測図 1 (1/4, 1/3)	105	第147回	SX676出土石器実測図 5 (1/3)	154
第99回	土器群A出土土器実測図 2 (1/3)	106	第148回	SX678出土土器実測図 (1/6, 1/4, 1/3)	155

第149図	SX678出土木器実測図(1/4)	156	第180図	SX435・454・852・853・1038・1405出土土器実 測図(1/4, 1/3)	186
第150図	SX678出土石器実測図1(1/2)	157	第181図	SX1028出土土器実測図1(1/3, 1/4)	187
第151図	SX678出土石器実測図2(1/2)	158	第182図	SX1028出土土器実測図2(1/3)	188
第152図	SX678出土石器実測図3(1/2)	159	第183図	SX実測図4(1/40)およびSX1010実測図(1/20)	189
第153図	SX678出土石器実測図4(1/2)	160	第184図	SX123・596・1249・1320・1360出土土器実測図(1/3)	190
第154図	SX678出土石器実測図5(1/2)	161	第185図	SX121・378・553・749・1076・1356出土土器実測図(1/4, 1/3)	191
第155図	SX678出土石器実測図6(1/3)	162	第186図	第3面SK・SX出土石器実測図1(1/1, 1/3, 1/2)	192
第156図	SX678出土石器実測図7(1/3)	163	第187図	第3面SK・SX出土石器実測図(1/3, 1/2)	193
第157図	SX678出土石器実測図8(1/2)	164	第188図	第3面SK・SX出土石器実測図(1/3, 1/2)	194
第158図	SX678出土石器実測図9(1/3)	165	第189図	SD実測図1(1/80)	195
第159図	SX777出土石器実測図(1/3, 1/2)	166	第190図	SD実測図2(1/80, 1/60)およびSX717断面図(1/60)	196
第160図	第3面遭撲全体図(1/200)	折り込み	第191図	SD559・605・719出土土器実測図(1/3)	197
第161図	第3面SP出土土器実測図1(1/3)	168	第192図	SD719・605出土土器実測図(1/3, 1/2)	198
第162図	第3面SP出土土器実測図2(1/3)	169	第193図	SD1361ほか出土土器実測図(1/3)	199
第163図	第3面SP出土土器実測図3(1/3)	170	第194図	SX717出土土器実測図1(1/4)	200
第164図	第3面SP出土土器実測図4(1/3)	171	第195図	SX717出土土器実測図2(1/3)	201
第165図	第3面SP出土土器実測図5(1/3)	172	第196図	SX717出土土器実測図1(1/2)	202
第166図	SP1043・1119出土木器実測図(1/4, 1/3)	173	第197図	SX717出土土器実測図2(1/2)	203
第167図	第3面SP出土土器実測図(1/1, 1/3, 1/4, 1/2)	174	第198図	SX717出土土器実測図3(1/3)	204
第168図	SX435・454実測図(1/60)	175	第199図	第3面出土土器実測図(1/1, 1/2)	205
第169図	SX435出土木質遺物実測図(1/10)	175	第200図	金属器実測図(1/2)	206
第170図	SK実測図1(1/60)	176	第201図	トンボ実測図(1/1)	207
第171図	SK194・222・224・225・280出土土器実測図(1/3)	177	第202図	玉類実測図1(1/1)	208
第172図	SK1084・1211・1379・1388出土土器実測図(1/3)	178	第203図	玉類実測図2(1/2)	209
第173図	SK202・316・1362出土土器実測図(1/3)	179	第204図	土製鍊輪車実測図(1/2)	210
第174図	SK実測図2(1/60)	180	第205図	土製円盤実測図(1/3)	211
第175図	SK215・262出土土器実測図(1/3)	181	第206図	土製投弾実測図(1/3)	212
第176図	SK196・251・350・781・1201・1358, SX180・ 181出土土器実測図(1/4, 1/3)	182	第207図	土製品実測図1(1/2, 1/3)	213
第177図	SK825・863・886・1334・1339, SX816出土土 器実測図(1/6, 1/3)	183	第208図	土製品実測図2(1/3)	214
第178図	SK・SX実測図(1/60)	184	第209図	土製品実測図3(1/3)	215
第179図	SK392・399・460・461・462・465・483・1189 出土土器実測図(1/3)	185	第210図	土製品実測図4(1/3)	216
			第211図	土製品実測図5(1/3)	217
			第212図	イネ庄祇のマイクロスコープ画像とX線CT画像	236

表目次

第1表	第1面出土土器	13	第9表	出土玉類	223
第2表	第1面出土木器	19	第10表	出土種実	224
第3表	第1面出土石器	30	第11表	出土昆虫	229
第4表	第2・3面出土土器	218	第12表	出土骨貝類	231
第5表	第2・3面出土木器	220	第13表	岩石薄片観察	232
第6表	第2・3面出土石器	221	第14表	炭素14年代測定結果	233
第7表	出土土製品	222	第15表	イネ粒型・粒大的粒数分布	235
第8表	出土金属器ほか自然科学分析対象	223	第16表	福岡市内出土のアマゾナイト玉類	239

図版目次

- 卷頭図版 1 1. 第1面全景（北西から）
卷頭図版 2 2. 第2面土器群（南から）
卷頭図版 3 3. 第2面SX545木質遺物出土（北から）
卷頭図版 4 4. 出土玉類（原寸）
図版 1 1. 1期調査第1面全景 2. 2期調査第1面全景
図版 2 1. 1期調査南壁第1面土層 2. 1期調査西壁第1面土層
図版 3 1. SS019 2. SS022 3. 2期調査東側水田面 4. 2期調査西側水田面 5. 2期調査49区水田面 6. SS015鳥類足跡
図版 4 1. SS019北畦 2. SS020東畦および杭列 3. SS021北畦 4. SS022南畦 5. SS020東畔杭列W 8・9
6. SD002土層
図版 5 1. SK004 2. SK005 3. SK007 4. SK008 5. SK008土層 6. SK009
図版 6 1. SK010 2. SK010土層 3. SK030 4. SK031 5. SS021下層木器（19図61）出土 6. SX039木器（21図80-82）出土
図版 7 1. 1期調査第2面全景 2. 3期調査第2面全景
図版 8 1. 東壁北側土層 2. 東壁南側土層
図版 9 1. 南壁西側土層 2. E6区下層土層
図版10 1. 調査区北ペルト西側土層 2. 調査区北ペルト東側土層
図版11 1. 調査区南ペルト西側土層 2. 調査区南トレントシテ土層
図版12 1. SB1460; SP609 2. SB1460; SP610 3. SB1460; SP612 4. SB1461; SP629 5. SB1461; SP616 6. SB1462; SP631
図版13 1. SB1463; SP632 2. SB1463; SP621 3. SB1464; SP366 4. SB1471; SP672 5. SB1465; SP146 6. SB1465; SP178
図版14 1. SP110 2. SP041 3. SE053土層 4. SE053 5. SE937 6. SE937遺物出土
図版15 1. SK121土層 2. SK136 3. SK441 4. SK450 5. SK175・176 6. SP191
図版16 1. SC1473椚出 2. SC050椚出 3. SC614 4. SC614後土・炭化物 5. SC614漢1・2椚出 6. SC614銅鏡（200図1373）出土
図版17 1. SC614北ペルト土層 2. SC248 3. SD032 4. SD055 5. SD663 6. SD606
図版18 1. SX545木器出土 2. SX545 3. SX545東西杭列W1～5 4. SX546木器出土 5. SX547木器出土 6. SX546・547
図版19 1. SX676杭列 2. SX676杭列
図版20 1. SX676杭列横板（140図883）出土 2. SX676杭列横板（140図884）出土 3. SX545木器（84図469・470）出土 4. SX545木器（85図479～481）出土 5. SX545木器（89図498）出土
図版21 1. SX676W1出土 2. SX678木器（149図943）出土 3. SX678木器（149図946）出土 4. SX678木器（149図945）出土 5. SX678杭 6. SX676・678亮掘
図版22 1. 1期調査土器群 2. SX109・鏡形土製品（122図757）出土 3. 1期調査土器群 4. 1期調査土器群
5. SX113 6. SX115～117
図版23 1. SX119 2. SX119ペルト下 3. SX113石製勾玉（202図1379）出土 4. SX653 5. 3期調査土器群 6. SX690
図版24 1. 2期調査第3面全景 2. 2期調査第3面全景
図版25 1. 3期調査第3面全景 2. 3期調査第3面全景
図版26 1. C・D7～9区第3面全景 2. E～H7～9区第3面全景
図版27 1. D4～6区第3面全景 2. E4～6区第3面全景
図版28 1. A～D1～3区第3面全景 2. E・F1～3区第3面全景
図版29 1. G・H1～2区第3面全景 2. E3区第3面下層
図版30 1. SP975（北から） 2. SP1421（北東から） 3. SP1289（南西から） 4. SP1293（北東から） 5. SP1333（南東から） 6. SP179（南から）
図版31 1. SX435（西から） 2. SX435木質遺物（169図1104）拡大 3. SK225（南西から） 4. SK225土層（南から） 5. SK222（東から） 6. SK1211（南から）
図版32 1. SK1362（北から） 2. SK202（南から） 3. SK316（西から） 4. SK262（東から） 5. SK215（南西から） 6. SK215土層（南東から）
図版33 1. SK350（東から） 2. SK1334（南から） 3. SK816（南から） 4. SK427（南東から） 5. SK392（東から） 6. SX1028（北東から）
図版34 1. SX1066（西から） 2. SX1405, SD1361（南東から） 3. SK1320（北東から） 4. SK123（東から） 5. SK596（東から） 6. SK124（東から）
図版35 1. SK1076（北西から） 2. SK421（南から） 3. SX1010（北から） 4. SX1010土層（南から） 5. SD559（北から） 6. SD605（南から）
図版36 1. SD719・745（南西から） 2. SD851（南東から） 3. SD742（南から） 4. SD1365（東から） 5. SD1337（南から） 6. SX717③（東から）
図版37 出土遺物1
図版38 出土遺物2
図版39 出土遺物3
図版40 出土遺物4
図版41 出土遺物5
図版42 木製品樹種1
図版43 木製品樹種2
図版44 出土種実
図版45 出土昆虫・骨貝類
図版46 岩石薄片1
図版47 1. 岩石薄片2 2. 銅鏡・銅盤の外観および透過X線画像
図版48 1. 銅鏡・銅盤の拡大画像 2. 石・ガラス製玉類の拡大画像

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

福岡市は、土地に埋蔵されている文化財（以下「埋蔵文化財」という）の保存と活用を図るため、各開発関係機関の協力のもと、事業区域内における埋蔵文化財の取り扱いについて調整を行っている。

博多区の福岡空港においても、空港機能充実のための整備事業計画に対して、事前の計画把握・協議・試掘・確認調査を重ね、埋蔵文化財への影響を避けられない工事範囲については記録保存のための発掘調査を実施してきた。平成2（1990）年度以降の福岡空港整備と埋蔵文化財対応、および第13次調査（平成10（1998）年12月終了）までの概要については、『雀居6』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第677集、平成13（2001）年）、『雀居7』（同第746集、平成15（2003）年）などに詳しい。

福岡空港は、近年ますます需要が高まっており、滑走路処理容量の限界など、空港運営の様々な課題を抱えている。国土交通省九州地方整備局（以下「九州地方整備局」という）、大阪航空局、福岡県、福岡市は、市民の意見も取り入れながら、平成15年（2003）度から平成20（2008）年度にかけて「福岡空港の総合的な調査」を実施した。その結果、「現空港における滑走路増設」もしくは「新空港建設」が必要であるとの方向性が示された。これらを踏まえ、国・県・市は、平成21（2009）年に「福岡空港構想・施設計画検討協議会」を設置し、平成24（2012）年3月に「現空港における滑走路増設案」を取りまとめた。

この滑走路増設計画について、九州地方整備局と福岡市は埋蔵文化財の取り扱いについて事前協議を重ねてきた。九州地方整備局が、平成21（2009）年7月17日付で本計画に係る最初の「埋蔵文化財の事前審査について（依頼）」を提出し、福岡市埋蔵文化財審査課（当時）は、平成22（2010）年度から平成26（2014）年度にかけて、計画範囲における埋蔵文化財確認のための試掘・確認調査を行った。その結果、埋蔵文化財への影響を避けられない計画範囲については発掘調査が必要と回答・通知を行い、空港整備工程との調整を図りながら、発掘調査の方法、着手時期などの協議を進めた。本計画に対する埋蔵文化財保護対応の詳細については、『雀居10』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第1281集、平成28（2016）年）を参照されたい。

こうして福岡空港整備および滑走路増設事業に伴う発掘調査が、平成27（2015）年度から行われることとなった（雀居遺跡第14次調査）。滑走路増設事業に伴う発掘調査については、九州地方整備局と福岡市が、平成27（2015）年3月10日付で「埋蔵文化財に関する基本協定書」を取り交わし、以後年度ごとに発掘調査に係る委託契約を締結することとしている。現在までに第19次調査（平成28（2016）年12月終了）まで実施されている。

本書で報告する雀居遺跡第18次調査は、滑走路増設に伴う航空自衛隊施設建設計画地のうち、南側を調査対象とする（平成26年6月23日付「埋蔵文化財の事前審査について（依頼）」（国九整空整第2号）および同年6月26日付「埋蔵文化財の事前審査について（回答）」（経埋審第725号））。北側については、平成27年（2015）度に第16次調査が実施されている。第18次調査は、平成28（2016）年4月1日から平成29（2017）年8月31日まで発掘作業を行い、平成29（2017）年度から令和元（2019）年度まで整理作業を行った。発掘・整理作業の過程では、九州地方整備局港湾空港部福岡空港プロジェクトチームをはじめとした関係各位のご理解・ご協力を頂いた。記して感謝したい。

第2節 調査の組織

発掘の調査・整理報告にあたっての組織は以下の通りである。

調査委託 国土交通省九州地方整備局

調査主体 福岡市教育委員会

(発掘作業：平成28・29 年度、整理報告作業：平成29・30・令和元年度)

(平成28年度)

総 括 埋蔵文化財課 課長 常松幹雄 調査第1係 係長 吉武 学

調 整 事前審査係 係長 佐藤一郎 吉田大輔

庶 務 管理係 係長 大塚紀宣 横田 忍

発掘担当 (4月から9月まで) 調査第1係 板倉有大

(10月から3月まで) 調査第2係 主任文化財主事 田上勇一郎 服部瑞輝

作 業 発掘作業員約50名

(平成29年度)

総 括 埋蔵文化財課 課長 常松幹雄 調査第1係 係長 吉武 学

調 整 事前審査係 係長 本田浩二郎 吉田大輔

庶 務 文化財活用課 管理調整係 係長 藤 克己 松原加奈枝

発掘・整理担当 調査第1係 板倉有大

作 業 発掘作業員約50名 副田則子 三宅恵子 立山睦彦 萩本恵子

(平成30年度)

総 括 埋蔵文化財課 課長 大庭康時 調査第1係 係長 吉武 学

調 整 事前審査係 係長 本田浩二郎 吉田大輔 中尾祐太

庶 務 文化財活用課 管理調整係 係長 藤 克己 松原加奈枝

整理担当 調査第1係 板倉有大

作 業 副田則子 三宅恵子 立山睦彦 萩本恵子

(令和元年度)

総 括 埋蔵文化財課 課長 蒼波正人 調査第1係 係長 吉武 学

調 整 事前審査係 係長 本田浩二郎 中尾祐太 松崎友理

庶 務 文化財活用課 管理調整係 係長 藤 克己 松原加奈枝

整理担当 埋蔵文化財センター 運営係 板倉有大

作 業 三宅恵子 立山睦彦 鈴木諒子 武田祐子 福松智子

協 力 武末純一（福岡大学人文学部）

宮本一夫（九州大学人文科学研究院）

上條信彦（弘前大学人文社会学部）

吉田東明（九州歴史資料館）

井上義也（春日市教育部）

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

雀居遺跡は福岡平野の中央部に位置し、北西に博多湾沿岸砂丘とその後背湿地、東に月隈丘陵、西・南に阿蘇4火砕流堆積物からなる中位段丘を望む。標高は現地表面で約6m（遺構面は標高約4～5m）を測り、遺跡の地山は砂・シルト・粘土質土で、西側を北流する御笠川の氾濫原内に形成されている。周辺には多くの遺跡があり、特に西側に位置する板付、那珂、比恵、博多などの遺跡群は、弥生時代から中世にかけての中心地となる（第1図）。以下、歴史的環境について時代ごとに概要を示す。

旧石器時代 現在の博多湾は、最終間氷期（約10万年前）以降はほぼ陸域となり、後氷期の海水準上昇で博多湾が形成されるのが約8,000年前以降とされる。後期旧石器時代は、板付、麦野A、諸岡B、久保園、井尻B、比恵、桜原、井相田C、高畑、那珂、五十川などの遺跡で、台形様石器、ナイフ形石器、剥片尖頭器、角錐状石器、細石刀核ほか石核・剥片が出土している。

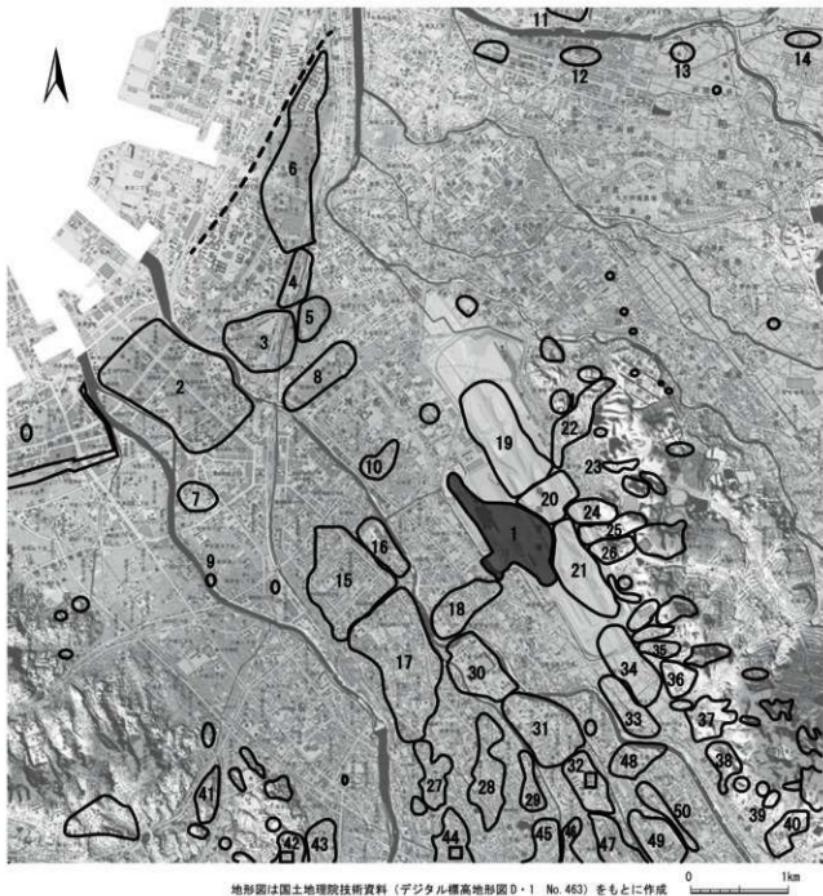
縄文時代 博多湾シルトのボーリング調査による縄文海進最盛期（約6,000～5,000年前）の最大海域の復元では、雀居遺跡の前面まで遠浅の海が広がっていたと推定される。その後、海退および湿地の前進による陸地化が進み、沿岸に海浜性の砂層（箱崎砂層）が形成されるのは3,000～4,000年前とされる。雀居遺跡周辺で縄文時代のまとまった遺構・遺物の確認はなく、後・晩期に、より内陸山側の中村町遺跡、野多目C遺跡、日佐遺跡などで集落遺跡が形成される。御笠川・那珂川という大きな河川の氾濫原に面した地形は、縄文時代の生活域としては指向されなかつたようである。

弥生時代 国内に先駆けて、板付、諸岡、那珂、五十川、雜餉隈、井相田C、下月隈C、下月隈天神森、江辻などの遺跡に農耕集落・墓地が形成され、弥生文化が始まる。中期以降は、板付田端、諸岡、金隈、須玖岡本D地点、宝満尾遺跡などの厚葬墓、久保園遺跡の大型建物などが出現し、中国の史書に記録された「奴国」の様相を示している。大陸から伝來した水稻農耕技術が定着し、その経済基盤のもとに、人口が増加し、社会が複雑化していくプロセスを追うことができる。

古墳時代 弥生時代の社会基盤をもとに、各地方勢力どうしが相互に影響を与え始め、古墳築造に象徴される社会階層化が顕著となる。比恵遺跡群、那珂遺跡群では、近畿の庄内・布留系土器をはじめとした様々な地域の土器が遺跡から出土し、道路状遺構を中心として墓域・集落が形成される。博多遺跡群では初期の鍛冶関連遺物がまとまって出土している。また、比恵遺跡群、那珂遺跡群では6世紀後半の大型建物群が確認され、博多湾岸に設置されたとされる那津官家の関連する施設と考えられている。那珂遺跡群では、初期瓦なども出土し、律令体制成立に向けた胎動がみられる。

古代 高畑、井相田、仲島、下月隈Cなどの遺跡で、8～9世紀前半の墨書き土器や木簡、官道や水田が確認される。663年の白村江の戦い以降、水城、大野城の建造、大宰府の整備などが進む。雀居遺跡周辺は、大宰府と博多湾（鴻臚館・博多）をつなぐ地域として、古代官道が整備され、官衙など公的機関の管理体制下に沿線の開発が進むと考えられる。

中世・近世 国内有数の中世都市遺跡である博多遺跡群のほか、住吉神社、吉塚祝町、箱崎、山王、比恵、那珂、五十川、諸岡B、板付、麦野A、席田青木、天神森、下月隈C、立花寺、立花寺B、大橋Eなどの遺跡で中世・近世集落が展開する。特に戦国時代には、博多の利権をめぐって、戦国大名の大内氏、大友氏などが博多に入り、関連の武家諸氏が博多周辺に居住したと考えられる。



1. 雀居遺跡
2. 博多遺跡群
3. 堅粕遺跡
4. 吉塚本町遺跡
5. 吉塚祝町遺跡
6. 箱崎遺跡
7. 住吉神社遺跡
8. 吉塚遺跡
9. 斎島橋遺跡
10. 東比恵三丁目遺跡
11. 顯孝寺遺跡
12. 多々良込田遺跡
13. 戸原麦尾遺跡
14. 江辻遺跡
15. 比恵遺跡群
16. 山王遺跡
17. 那珂遺跡群
18. 東那珂遺跡
19. 上牟田遺跡
20. 席田平尾遺跡
21. 下月隈D遺跡
22. 席田青木遺跡
23. 中尾遺跡
24. 久保園遺跡
25. 席田大谷遺跡（赤徳ノ浦）
26. 宝満尾遺跡
27. 五十川遺跡
28. 諸岡A遺跡
29. 諸岡B遺跡
30. 那珂君体遺跡
31. 板付遺跡
32. 高畠遺跡
33. 立花寺B遺跡
34. 下月隈C遺跡
35. 上月隈遺跡
36. 上月隈B遺跡
37. 立花寺遺跡
38. 金隈遺跡
39. 影ヶ浦遺跡
40. 持田ヶ浦遺跡
41. 中村町遺跡
42. 三宅遺跡群
43. 大橋E遺跡
44. 井尻B遺跡
45. 笹原遺跡
46. 三筑遺跡
47. 麦野A遺跡
48. 井相田D遺跡
49. 井相田C遺跡
50. 仲島遺跡

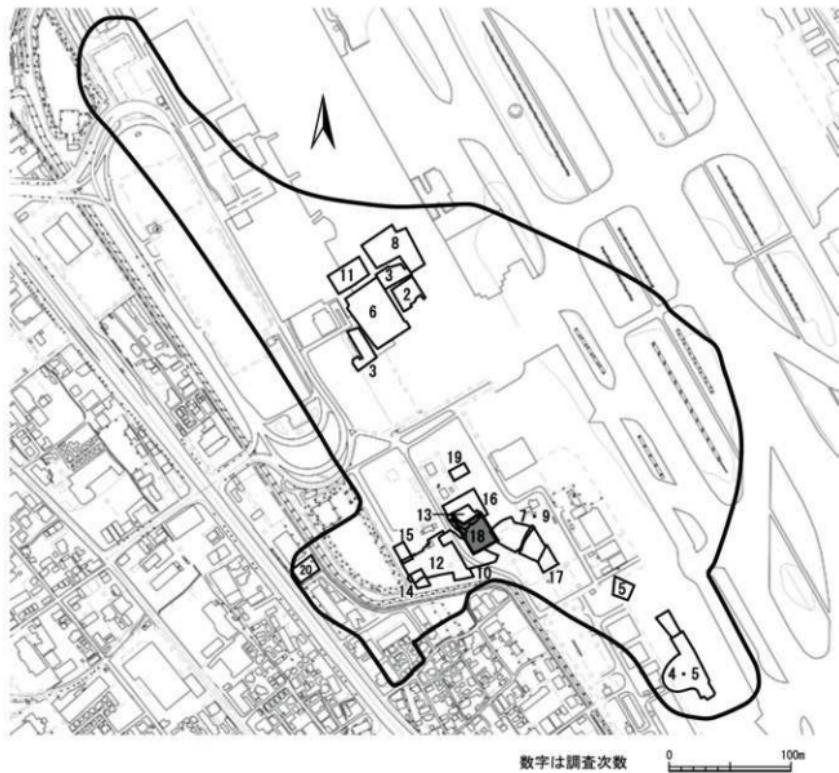
第1図 雀居遺跡と周辺の遺跡（1/50,000）

第III章 調査の方法と経過

雀居遺跡第18次調査区は、福岡市文化財分布地図上の雀居遺跡においては中央やや南に位置する。本調査区は、北側で13・16次調査、西側で10次調査、南東側で7・9次調査が行われており、第1面で古代の水田面、第2面以下で古墳・弥生時代の微高地上集落が検出されることが、ある程度予測できる状況にあった。前年度調査（15・16・17次調査）から、現場事務所や発掘作業員を継続する形で、平成28年4月1日から調査の準備が開始されたが、職員の人事異動に伴い、4月14日付で調査担当が板倉に交代した。

（発掘作業）

本調査区の条件整備等の協議では、調査対象地内地下に存在する燃料供給管および下水管等は残した状態で調査に着手し、調査中に大阪航空局が燃料供給管の撤去工事、下水管等の切り替え工事を行



第2図 雀居遺跡の既往調査区 (1/8,000)



薄いアミ（7・9・10・12・13次）は1994～1998年の調査

濃いアミ（14・19次）は2015～2017年の調査

下図は1979年修正の都市計画図

第3図 鶴居遺跡18次調査区の隣接調査区（1/2,000）

うこととなっていた。そのため、調査区を便宜的に「中央区」「西区」「東区」「北区」に分けて、既設管に囲まれた中央区を最下面まで掘削・調査した後、西・東側の燃料供給管撤去工事および北側の下水管等切り替え工事を行い、その後に西区（10次調査隣接）、東区（7・9次調査隣接）、北区（13次調査隣接）を調査することとした。また、調査面積および遺跡の内容に鑑みて、調査工程がかなり厳しいことが予想されたため、調査迅速化のために電子平板機器を借り上げて使用した。

平成28年4月20日からバックホーで調査区の表土除去を開始し、発掘作業員約50名で遣構検出および掘削を行った。中央区の第3面まで調査を進めた段階で、調査担当者の板倉が東日本大震災復旧・復興に伴う埋蔵文化財発掘調査のための職員派遣に出向くこととなり、平成28年9月30日まで調査を行った（1期調査）。10月1日からは、田上・服部が調査を引き継いだ（2期調査）。その後、中央区第3面の調査を終了し、既設管工事の終わった区画の調査に着手する予定であったが、既設管工事の遅れや追加が生じ、西区・東区・北区の調査着手が3か月ほど遅れた。また、北区の調査区設定において、13次調査の未調査範囲（当時の既設管下）についても調査対象とする判断となり、調査面積が約50 m²増加した。このような状況を受けて、九州地方整備局と協議を行い、当初平成28年度で調査終了の予定であったが、平成29年8月31日まで調査期間を延長することとなった。

平成29年度調査は、職員派遣から戻った板倉が再び調査を引き継いだ（3期調査）。3期調査の終盤は調査工程がかなり厳しい状況にあったため、第3面の調査とバックホーによる埋め戻し作業を並行して行った。そのため、3期調査の第3面は、全景写真を調査区全面ではなく部分的に撮影することになった。大勢の発掘作業員の労苦と比較的好天に恵まれたこともあって、平成29年8月31日に調査を終了した。なお、調査対象地の東端約250m²については、既設の電気管等の輻輳地となっており、毀損すると空港運営に支障をきたす恐れがあったため、下層を調査できなかった。

調査区内は、調査区の形状に合わせて5mピッチでグリッドを設定した。遺構平面図は、電子平板（株式会社CUBIC「遺構くん」）で作成し、福岡空港内に設置された4級基準点をもとに国土座標（世界測地系）を与えた。調査写真は、35mm判と6×7cm判のモノクロおよびリバーサルフィルム、デジタルカメラ（平成28年度：NikonD70s、平成29年度：NikonD5000、他コンパクトデジタルカメラ）で撮影した。全景写真は、高所作業車で撮影した。実測図の縮尺は、1/20電子平板図、1/10・1/20遺構実測図、1/20土層実測図とした。土層注記は新版標準土色帖をもとに担当者の肉眼観察で行った。

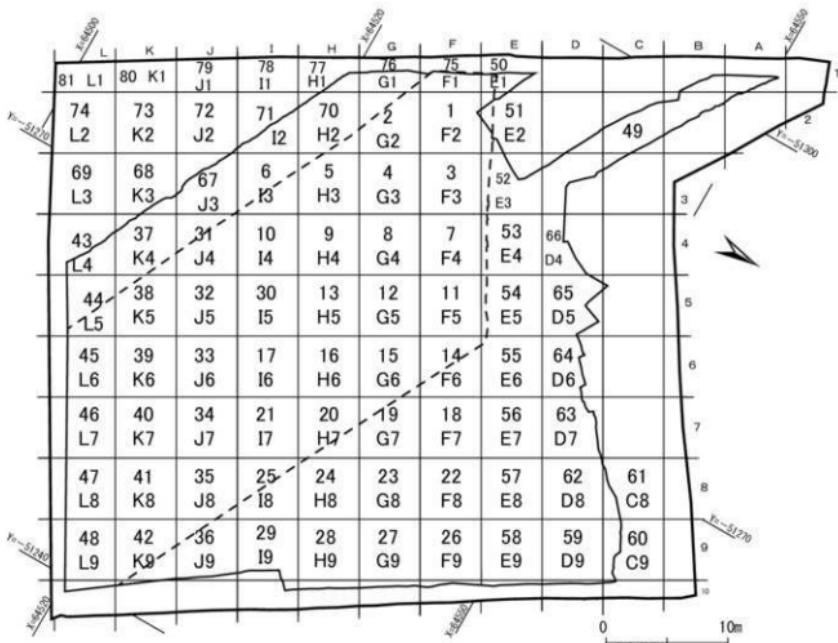
遺構番号は、記録をとった順に通し番号と仮の遺構略号を付け、整理・報告の過程で、遺構略号を決定し、通し番号に付した。出土遺物は平成28年度時点で、先行調査の未洗い遺物が蓄積しており、遺物の洗浄・乾燥・整理の工程に遅れが生じていたため、一部の遺物洗浄・乾燥を株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。平成29年度になって18次調査の出土遺物を洗浄はじめたが、調査期間内に現場で洗い終わらなかっただため、調査終了後に埋蔵文化財センター月隈収蔵庫敷地内で洗浄・乾燥作業を行った。遺構埋土などの有機物を含む腐植土の一部は調査担当者が現場で採取し、洗浄して動植物遺体を抽出した。

（整理作業）

平成29年9月から早良区室見の整理室で整理作業を開始した。整理作業員は、各年度4名で行った。令和元年度に整理室が中央区舞鶴に移転した。

遺物は、土器、石器、木器、金属器、玉類、土製品、自然遺物に分類して作業を進めた。土器は最も多量に出土し（図化遺物約80箱、未図化遺物約550箱）、報告遺物の抽出は最低限のものとした。石器は、黒曜石・安山岩剥片類を除いて、未図化遺物も含めて、器種、推定石材などを一覧表に整理したが、紙数の関係で本書に掲載できなかった。石器の図化作業の一部は平成29・30年度に株式会社九州文化財研究所に委託した。黒曜石・安山岩剥片類については、時間の関係で詳細な整理・報告ができず、遺構ごとに出土点数と重量を測ることしかできなかった。黒曜石剥片類は、16,052点、46.575kg、安山岩剥片類は、77点、1.0379kgが出土している。木器は、石器と同様に、未図化遺物も含めて、器種、樹種同定などを一覧表に作成し、写真撮影も行ったが、本書に掲載できなかった。石器・木器の未図化遺物一覧表および木器写真は埋蔵文化財センターに収藏される予定であるため、活用していただきたい。

木質遺物の樹種、出土種実・昆虫・骨貝類の同定、岩石薄片鑑定、炭素14年代測定などの自然科学发展分析・報告は、パリノ・サーヴェイ株式会社（平成29年度）、株式会社古環境研究所（平成30年度、令和元年度）に委託した（本書第V章第1節）。分析報告は紙数の関係で、詳細情報を掲載できなかった。各社の分析報告書は埋蔵文化財センターに収藏される予定であるため、活用していただきたい。遺構出土の多量の炭化米については、宮本一夫先生（九州大学）に調査・分析を依頼し、科学研究費補助金基盤研究（S）「東アジアにおける農耕の拡散・変容と牧畜社会生成過程の総合的研究」（研究課題番号19H05593、令和元～5年度）に年代測定等の試料として一部を提供した。そのうち、イネ



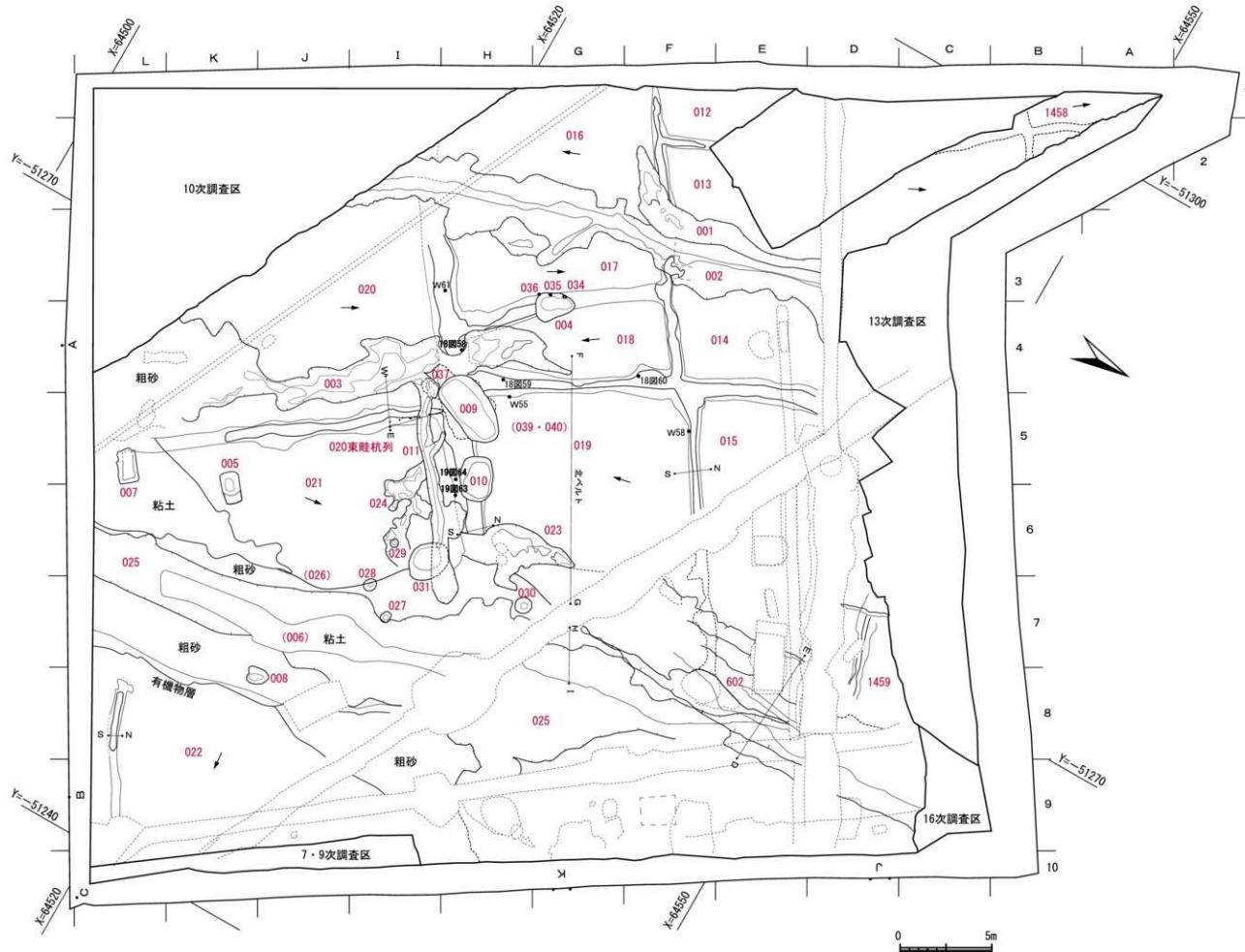
調査時の区割り番号（数字・順不同）と報告用の区割り番号（アルファベット-数字）
破線は平成28年度の調査範囲

第4図 雀居遺跡18次調査の区割り（1/400）

の形態とイネ圧痕粘土塊について上條信彦先生（弘前大学）から報告を頂いた（本書第V章第2節）。炭化米についての他の調査・分析結果については、上記科学的研究費報告で公表される予定である。金属製品（青銅・鉄）、ガラス製・石製玉類、金属滓、被熱粘土塊などは、保存処理、調査・分析を埋蔵文化財センターに依頼した（本書第V章第3節）。その過程で、アマゾナイト製小玉について吉田東明氏（九州歴史資料館）からご教示を頂いた。また、金属滓、被熱粘土塊、不明土製品について、武末純一先生（福岡大学）と井上義也氏（春日市）にご教示を頂いた。

遺構図面作成およびトレースの一部は、図面編集ソフト（株式会社CUBIC「トレースくん」、アドビシステムズ株式会社「Adobe Illustrator」）を使用した。作成したデジタルデータ図面は、編集後の最終版をEPS形式、PDF形式で埋蔵文化財センターに収藏する予定である。また、第1面から第3面までの最終版図面を1/20、A2版で紙出力し、データと紙の両方で保存することとした。

調査区内グリッドは、調査区内で5mピッチという点では調査時から統一したが、着手した調査区ごとに便宜的に番号を付けたため、番号順に並んでいない。報告書では統一を図るため、アルファベットと数字を使ってグリッド番号を付け直している。ただし、現場で作成した遺物カードや遺構図、写真等の記録類は旧グリッド名のままになっており、本報告の一部でも旧グリッド名を使用している。新グリッドと旧グリッドの対応は第4図のとおりである。



第5図 第1面遺構全体図 (1/200)

第IV章 調査の成果

第18次調査区の西側は微高地（自然堤防）となっており、弥生・古墳時代の集落遺構が重複して構築される。東側は河川が北流しており、西側微高地との間に杭列・池状の大型土坑など水利関連遺構が構築される。古墳時代以降は河成堆積が顕著となり、一帯が広く埋没・陸地化し、古代以降に水田が構築される。調査区内の大規模な堆積状況を示す土層図は調査区南壁（第11図）、北ベルト土層（第15図）、調査区東壁土層（第15図）、南西ベルト土層（第71図）である。微高地地山の暗オリーブ灰・褐・黒色砂質粘土（図版9-2、図版10-2、図版29-2）は、遺物の包含がなく、堆積時期を推定するために、炭素14年代測定試料を探したが、土壤が黒色化しているだけで、有機物を見つけることができなかつた。砂質粘土の下層は粗砂で帶水層となっている（第34図SE937地山土層）。本調査における最も古い時期の遺物は、SX545出土の細石刃核（後期旧石器時代）で、最も新しい遺物の時期は8世紀後半である。記録した遺構は1,484基、撮影写真は1,467コマ、出土遺物は約800箱（土器約630箱、木器339点（樹種同定336点）、石器814点、黒曜石・安山岩剥片16,129点、土製品160点、金属器ほか48点、玉類28点、種実・昆虫・骨貝類・岩石など）である。

第1節 第1面の調査

1. 第1面の概要

盛土の下に比較的厚く堆積した粗砂層を重機で取り除いた、粘土面で検出した（巻頭図版1、図版2）。遺構面の標高は、南西4.8m、北西4.784m、南東4.756m、北東4.7mで、西から東（滑走路側）へ傾斜する。遺構の切り合いでは、水田が古く、水路・流路、土坑が新しい。調査区西側では田面の重複は確認できなかつたが、東側は西側に比べて地形が下がっており、粘土と粗砂の互層が西に比べて複雑だった。第15図J土層の6層上面も古代以降の水田面であった可能性がある。この層について調査区壁面などを精査したが、遺物は確認できなかつた。

2. 土坑（SK）

SK004（第6図、図版5-1） 不整形の土坑で、長さ210cm、幅160cm、深さ16cmを測る。埋土は暗青灰色粘土と細砂ブロックの混土で、SS017東畦を切る。出土遺物は小片で、古代の土器を含む。

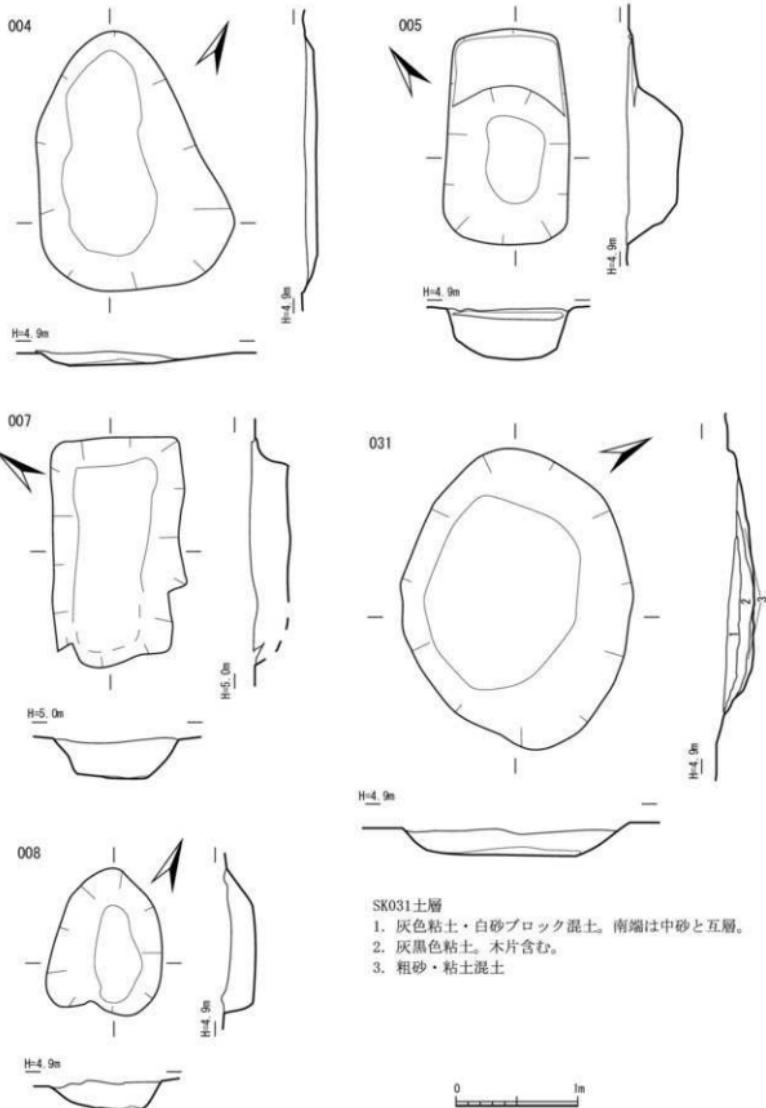
SK005（第6図、図版5-2） 平面隅丸方形の土坑で、長さ176cm、幅100cm、深さ47cmを測る。北東側がテラス状になっている。埋土は暗青灰色粘土と細砂ブロックの混土で、SS021を切る。南東のSK007と同規模で軸を揃える。

出土遺物（第8図） 1は須恵器壺蓋で、返しが退化しつつある。7世紀末～8世紀初頭。

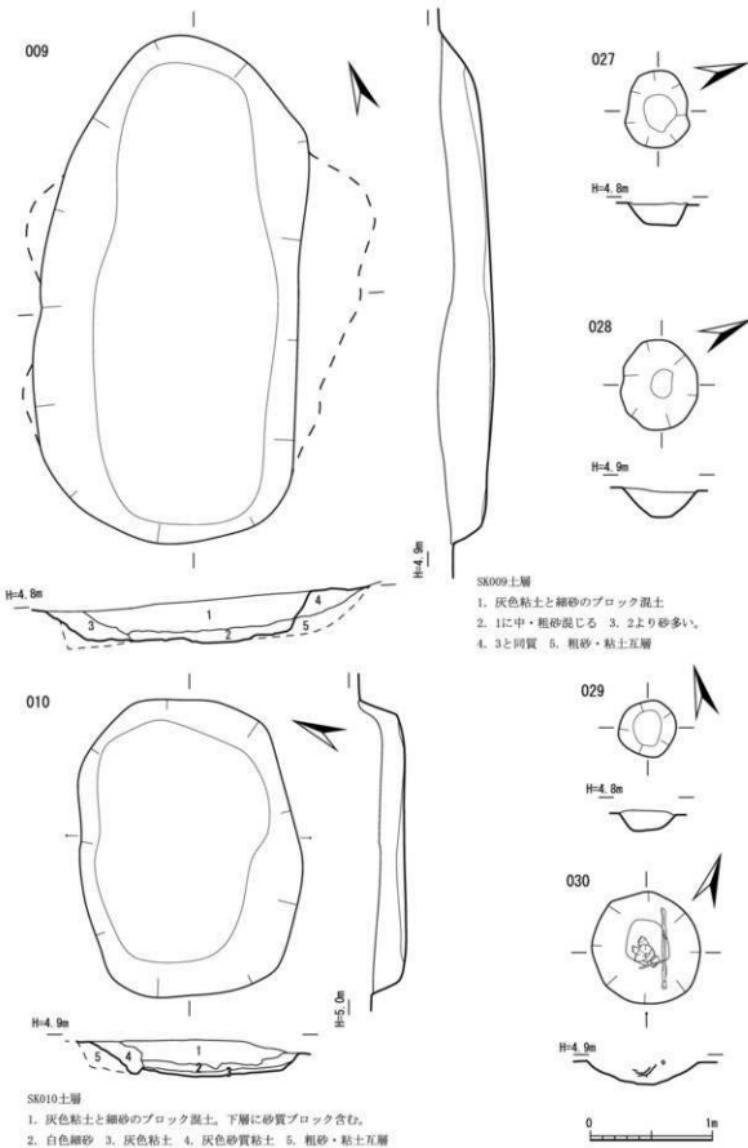
SK007（第6図、図版5-3） 長方形の土坑で、長さ186cm、幅105cm、深さ30cmを測る。埋土は、黒灰色粘土・黄灰色粘土ブロックで下層が砂質となる。SD025の西側粘土を切る。出土遺物は小片で、古代の土器を含む。

SK008（第6図、図版5-4・5） 不整形の土坑で、長さ118cm、幅92cm、深さ26cmを測る。埋土は5～10cmの灰黒色粘土ブロックと白・灰中～粗砂の混土で、SD025の東側粗砂を切る。出土遺物は土器小片である。

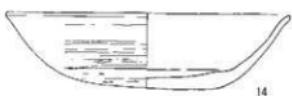
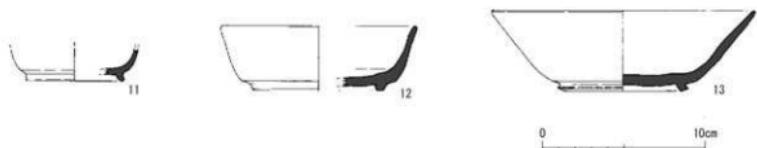
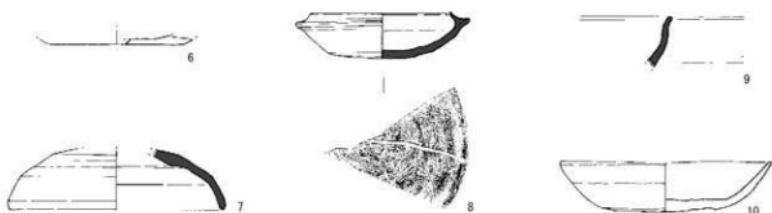
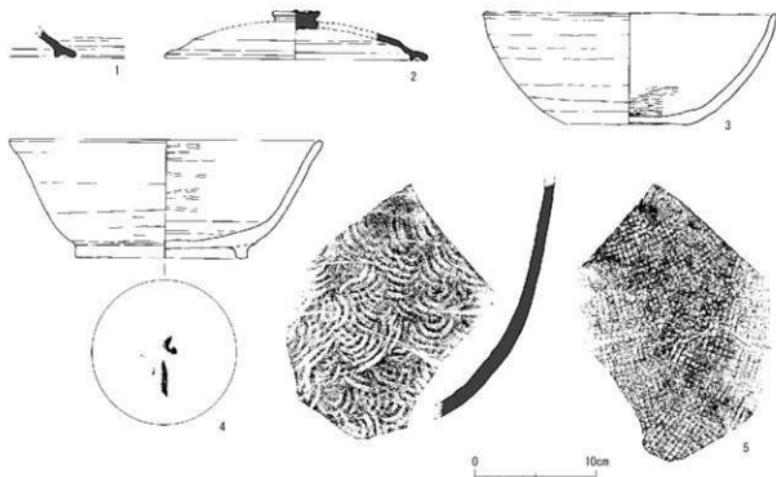
SK009（第7図、図版5-6） 略長方形の土坑で、長さ419cm、幅210cm、深さ43cmを測る。埋土は粘質砂のブロック土であったが、その周辺が粘土・砂の互層堆積で埋土と区別できず、西側と東側の壁は外側に掘り過ぎている。SS020・021北畦、SS018東畦を切る。出土遺物は古代の土器を含む。



第6図 SK004・005・007・008・031実測図 (1/40)



第7図 SK009・010・027～030実測図 (1/40)

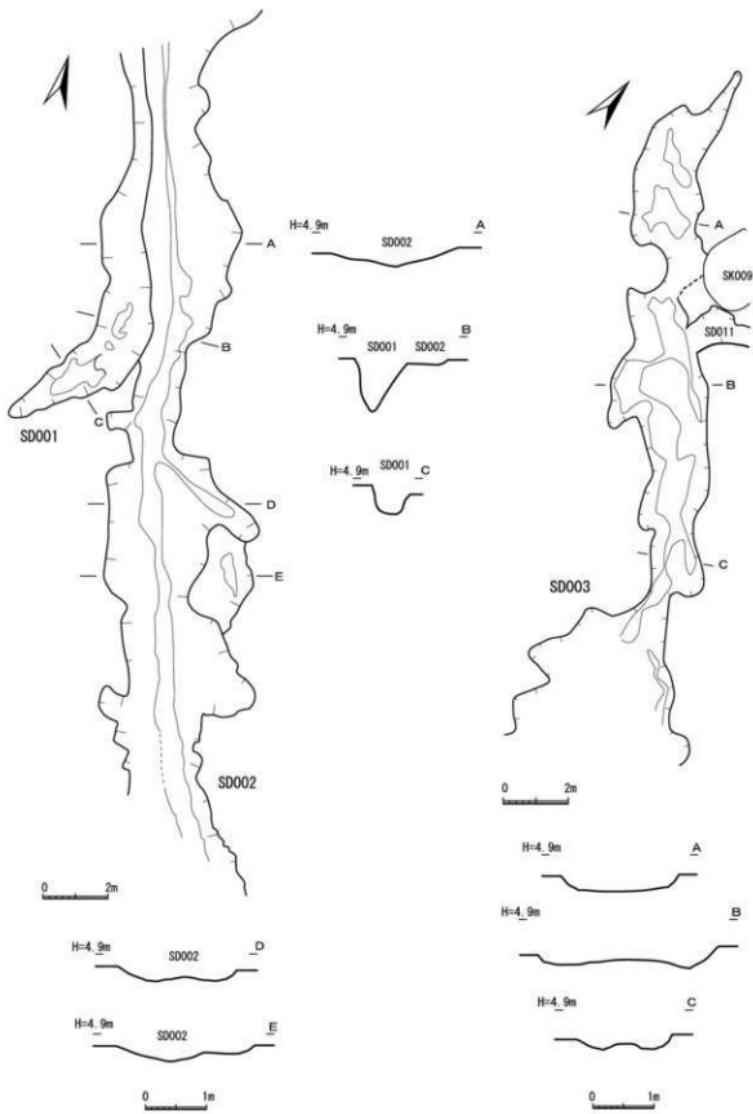


1 SK005 2 ~ 4 SK030 5 SK031 6 SD023 7 ~ 14 SD025

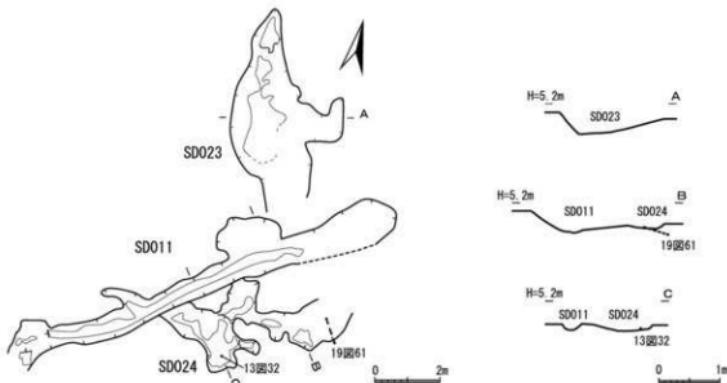
第8図 SK005・030・031、SD023・025出土土器実測図（5は1/4、他は1/3）

第1表 第1面出土土器

地図	番号	遺構・層位	持存	法量 (cm)	断土	色調
8	1	SK005	口縁部片	-	径 1mm 以下長石含む	灰
8	2	SK030	擴口・口縁部	復元口径 16, 器高 1.6	径 1mm 以下長石や多く含む	内外面：灰～暗灰。断面：暗灰
8	3	SK030	/	復元口径 18, 器高 6.8	径 2mm 以下長石。径 1mm 以下赤色粘合物	淡黄褐～に近い黄褐色
8	4	SK030	2/3	口径 19.1, 器高 7.25	径 2mm 以下長石。径 1mm 以下赤色粘合物	灰～に近い黄褐色
8	5	SK031	脚部下半折	-	径 1mm 以下長石少なく含む	灰白～灰黄。他成や少不良
8	6	SD023	底部片	復元口径 8.2	径 3mm 以下長石含む	外面：灰。内面：灰白
8	7	SK026 滴跡	/	復元口径 13, 3.2	径 2mm 以下長石多く含む	内外面：灰。断面：暗灰
8	8	SK096	/	復元口径 10.6, 器高 2.8	径 2mm 以下長石やや多く含む	灰
8	9	SK025	口縁部片	-	径 3mm 以下石英・長石。1.5mm 以上赤色粘合物少ない	明灰灰
8	10	SD025	3/4	復元口径 13, 器高 3.1	径 3mm 以下石英・長石。2.5mm 以下赤色粘合物少ない	外面：淡黄褐。内面：灰白～暗
8	11	1面下 58 区	1/6	復元口径 6	無細な白色少ない	灰
8	12	1面下 58 区	1/5	復元口径 12, 器高 3.95	無細な白色少ない	灰白～灰
8	13	1面下 22, 23 区堆積	1/2	復元口径 16.1, 器高 4.9	無細な白色・黑色粘合物	灰～灰白。外表面自然軸
8	14	東側軒轅 (SD025)	2/3	口径 17.3, 器高 4.75	径 1mm 以下石英・長石。赤色粘合物少ない	外面：浅黄～に近い黄褐色
12	15	SD062	上半部	復元口径 29, 2	径 4.5mm 以下石英・長石多く。無細な白色粘合物少ない	外面：浅黄～に近い黄褐色
12	16	SD062	壳形	口径 14, 器高 5.5	径 2.5mm 以下石英・長石。無細な白色粘合物少ない	外面：浅黄～に近い黄褐色
12	17	SD062	1/2	復元口径 14.8, 器高 3.35	径 2mm 以下石英・長石。1mm 以下赤色粘合物少ない	外面：灰～灰黒。内面：灰白
12	18	SD062	底部	底径 7.55	径 2mm 以下石英・長石。無細な白色粘合物少ない	外面：灰～灰黄
12	19	SD062	高台片	高台高 0.35	径 1mm 以下石英・長石。無細な白色粘合物少ない	灰
12	20	SD062	7/8	脚部 11.3, 器高 4.2	径 4mm 以下石英・長石や多い	灰
12	21	SD062	口縁部 1/4	復元口径 11.3	径 2.5mm 以下石英・長石少。径 1mm 以下赤色粘合物少	淡黄
12	22	SD062	脚部 3/4	復元口径 13, 13.1	径 2.5mm 以下石英・長石少。径 2mm 以下赤色粘合物少	外面：復一灰黃褐色
12	23	SD062	口縁部 1/8	復元口径 18.18	径 3mm 以下石英・長石多。径 1mm 以下赤色粘合物少	灰
12	24	SD062	口縁部 1/4	復元口径 18.2	径 1.5mm 以下石英・長石多く。径 2mm 以下赤色粘合物少	灰
12	25	SD062	口縁部 1/8	復元口径 14.8	径 2.5mm 以下石英・長石多く。無細な金剛輝・角閃石少	外面：灰黄～浅灰
12	26	SD062	1/8	復元口径 10.8	径 4mm 以下石英・長石少	外面：に近い相～灰黄
12	27	SD062	1/4	復元口径 11.4	径 4mm 以下石英・長石多い	灰黄
12	28	SD062	1/4	復元口径 6, 器高 5.7	径 4mm 以下石英・長石多い	外面：に近い黄～暗灰
12	29	SD062	壳形	口径 5.4, 器高 3.45	無細な白色粘合物少。精良	外面：明灰褐色～深灰
12	30	SD062	口縁部 1/4	復元口径 23	径 3mm 以下石英・長石多く。径 1mm 以下黑色粘合物少	外面：灰黄～黑褐色～淡黄
16	35	SS017 南	口縁部片	-	径 3mm 以下長石多く含む	内外面：灰黄～黒褐色。断面：灰
16	36	SS017 南 + SS016 北北	3/4	復元口径 13.4, 器高 4.2	径 3mm 以下長石や多く含む	灰
16	37	SS018 上半部	1/8	復元口径 17, 器高 2	径 3mm 以下石英含む	灰白～灰
16	38	SS018 下層	底部片	復元口径 5.7	径 2mm 以下石英。1mm 以下黑色粘合物。微細な光沢粘合物	淡黄～浅黄・黄灰
16	39	SS018 上半部	1/4	輪孔 2.2, 輪孔高 0.4	無細な白色粘合物少。精良	外面：明灰褐色～深灰
16	40	SS018 東側南 + SS018 上層南	1/3	復元口径 11.3, 器高 3	径 3mm 以下石英・長石長。1mm 以下黑色粘合物少	外面：灰黄～黑褐色～淡
16	41	SS018 東側南	底部片	復元高さ 8.9	径 2mm 以下長石少。1mm 以下黑色粘合物少	灰白。他成や少不良
17	42	SS019 東	1/6	復元口径 16.2, 器高 2.1	径 3mm 以下石英・石英少。1mm 以下黑色粘合物少	灰
17	43	SS019 東	口縁部片	-	径 2mm 以下長石多く含む	灰
17	44	SS019 下層	1/10	脚部 3	無細な白色。黒色細多く含む	灰
17	45	SS03019 下層 + SS018 上層北	2/3	口径 16.35, 器高 2.5	径 2mm 以下石英の長石少なく含む。1mm 以下黑色粘合物少	灰
17	46	SS019 東	底部片	底径 7.5	径 1mm 以下長石・石英や多く含む。無細な金剛輝	外面：に近い黄褐色～灰
17	47	SS020 北東	1/10	脚部 3.1	無細な白色粘合物	灰
17	48	SS020 北東 + 西	脚部片	-	径 3mm 以下石英・長石含む	に近い黄褐色
17	49	SS021 南側下層 +	口縁部片	-	径 3mm 以下石英含む	灰
17	50	SS021 北下層 + 東・東 + SS019 東 + SS026 北	口縁部片	復元口径 20.1	径 2mm 以下長石少なく含む。2mm 以下黑色粘合物少	外面：灰～灰黄（自然軸）
17	51	SS021 南側上層 + 北西上層 + 南側下層 + 北東下層 +	1/3	復元口径 13, 器高 4.5	径 2mm 以下石英。長石含む。1mm 以下黑色粘合物や多く含む。	灰
17	52	SS021 北下層	口縁部片	復元口径 12	径 3mm 以下石英の長石・長石多く含む	灰
17	53	SS021 北東下層	1/3	復元口径 16.2, 器高 1.25	径 2mm 以下石英・長石。1mm 以下の赤色粘合物	外面：に近い相～灰黄
17	54	SS021 北 + 東	底部片	復元口径 11.8	径 3mm 以下石英・長石含む	外面：灰～灰白。内面：灰白
17	55	SS021 北 + 東	1/6	復元口径 14.1, 器高 4.2	径 2.5mm 以下石英。長石多く含む	灰。他成や少不良
17	56	SS022 上層	1/4	復元口径 12.8, 器高 3.95	径 1mm 以下石英・長石。石英や赤色細多く含む	外面：灰～浅黄褐色
29	68	1面下 49 区	底部片	脚部 3.45	径 1mm 以下白色少。無細な白色粘合物少	明灰褐色～灰白
29	69	1面下 71 区	底部片	脚部 3	径 1mm 以下白色少。無細な白色粘合物少	灰
29	70	3面 F 5 - 6 区	底部片	厚さ 2.1	径 3.5mm 以下石英・長石含む。無細な金剛輝少ない	灰～黑褐色～黄褐色
29	71	1面下 8 区	底部片	-	径 3mm 以下石英・長石や多い。1mm 以下赤色粘合物少。無細な金剛輝少	外面：灰～灰白～黑褐色
29	72	1面下 71 区	底部片	-	径 3mm 以下石英・長石や多い。無細な金剛輝。1mm 以下赤色粘合物少。無細な金剛輝少	外面：灰～灰白～明褐色
29	73	SK039 北東	口縁部片	復元口径 16	径 2.5mm 以下石英・長石や多く含む。無細な金剛輝。1mm 以下赤色粘合物少	外面：灰白～灰白
29	74	SK039 西	口縁部片	復元口径 14	径 2.5mm 以下石英・長石や少。無細な赤色粘合物少	外面：浅黄～灰白
29	75	SK040	上半部 1/5	復元口径 16	径 3mm 以下石英・長石や多く。無細な赤色粘合物・黑色粘合物	外面：淡黄～暗灰～黒褐色（スズカリ）
29	76	SK040	下半部	復元口径 14.75	径 4mm 以下石英・長石や多く。無細な赤色粘合物少	外面：淡黄～浅黄
29	77	SK040	1/3	復元口径 12, 器高 6.9	無細な黑色粘合物多く。無細な白色粘合物。角閃石少く少。鐵鉬	外面：に近い黄褐色～黑褐色（鉄鉬？）
29	78	SK040	9/10	口径 9.5, 器高 2.6	無細な黑色粘合物多く。無細な白色粘合物。角閃石少く少。鐵鉬	外面：浅黄～灰白
29	79	SK040	上部片	復元上部径 9.65	無細な黑色粘合物。無細な赤色粘合物少	外面：淡黄～に近い黄褐色



第9図 SD001・002・003実測図 (1/150、1/80)



第10図 SD011・023・024実測図 (1/150, 1/80)

SK010 (第7図、図版6-1・2) 隅丸方形の土坑で、長さ240cm、幅180cm、深さ39cmを測る。埋土はSK090と同質の粘質砂のブロック土で、周辺の粘土・砂の互層堆積と区別しにくい。SS021北畦を切る。出土遺物は小片で、古代の土器を含んでいる。

SK027 (第7図) 円形の土坑で、長さ64cm、幅48cm、深さ19cmを測る。埋土は暗灰色粘質土で、SD025の西側粗砂に切られる。出土遺物は小片で、古代の土器を含む。

SK028 (第7図) 円形の土坑で、長さ74cm、幅62cm、深さ25cmを測る。SD025の西側粗砂に切られる。出土遺物は小片で、古代の土器を含む。

SK029 (第7図) 円形の土坑で、径45~46cm、深さ18cmを測る。SD024に切られる。出土遺物は小片で、古代の土器を含む。

SK030 (第7図、図版6-3) 円形の土坑で、長さ92cm、幅88cm、深さ18cmを測る。SD025に切られる。土器がまとまって出土し、上層から木質遺物が出土した。

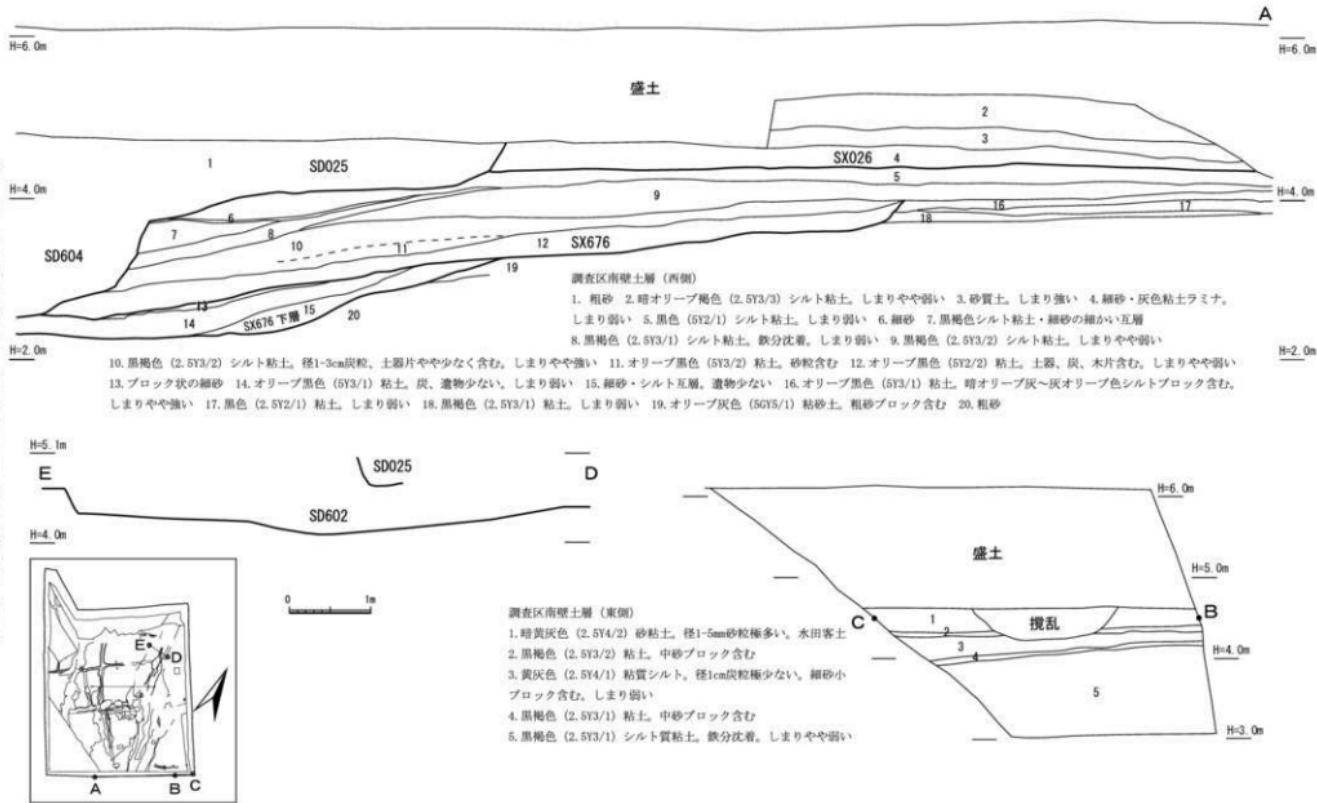
出土遺物 (第8・13図) 土器は8世紀後半を下限とする。2は須恵器壺蓋で、摘みと口縁部は接合しないが同一個体としている。摘み・返しが退化しつつある。7世紀末~8世紀初頭。3は土師器鉢で、回転ヘラケズリ成形後、内外面を回転ヘラナデ、内面下半をヘラミガキで仕上げる。4は土師器楕で、回転ヘラケズリ成形後、内面および外面上半を回転ヘラナデ、内面上半を回転ヘラミガキで仕上げる。高台内に墨書があるが、摩滅のため判読不能である (図版37-1~4)。31は、コナラ属アカガシ亜属Bの板材の破片。

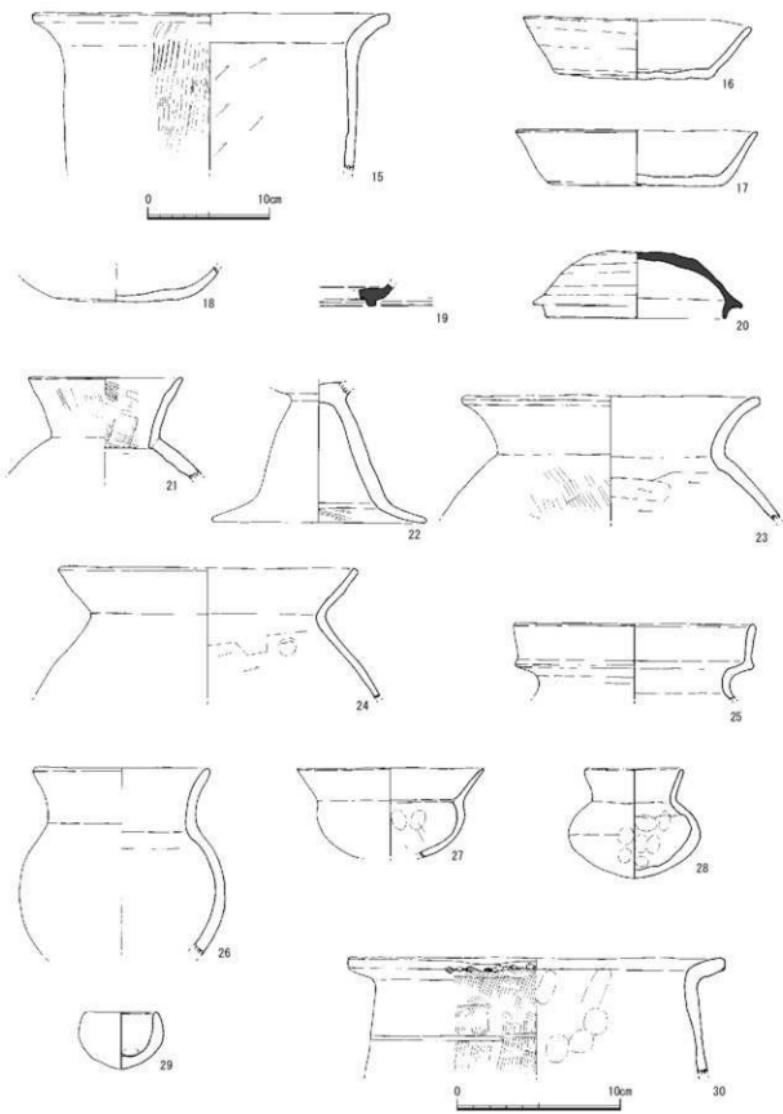
SK031 (第6図、図版6-4) 大型の円形土坑で、長さ250cm、幅190cm、深さ33cmを測る。埋土は粘土と砂の互層自然堆積で、SD025西側の粗砂およびSD011に切られる。

出土遺物 (第8図) 5は須恵器甕で、内面に同心円、外面に格子目のタタキ痕が残る。

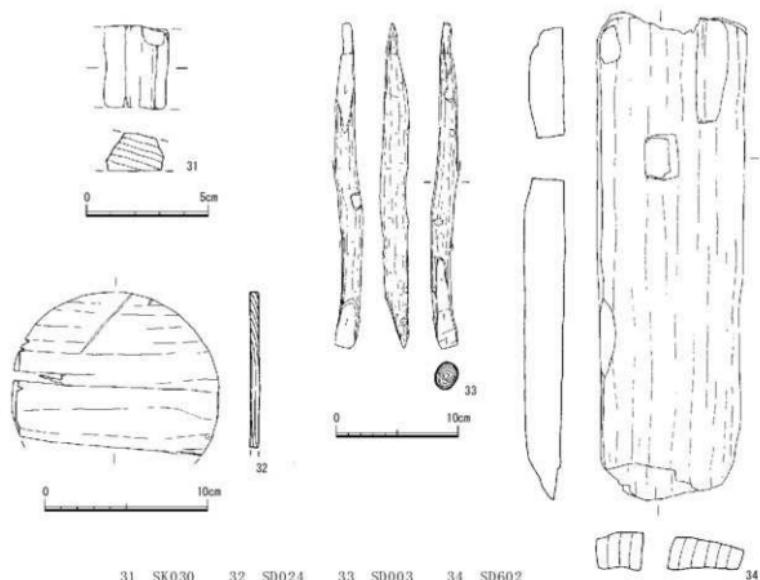
3. 溝・河川 (SD)

SD001 (第9図) 北東向きから北向きに進路を変えて直線的に走る流路で、残存幅130~160cm、深さ10~40cmを測る。覆土は粗砂で、水田面とSD002を切る。北側の13次調査では流路として平面・断面の情報は取られておらず、洪水時に畦畔が流出した状態と捉えられている。SS016北畦沿いを北





第12図 SD602出土土器実測図（15は1/4、他は1/3）



第13図 SK030、SD003・024・602出土木器実測図（31は1/2、32は1/3、他は1/4）

東に流れた流路が、SS017上を北に流れてきたSD002と合流して、SS013に流れ込んでいることが分かる。出土遺物は摩滅した弥生土器、土師器が出土した。

SD002（第9図、図版4-6） 北北西向きに直線的に流れる流路で、残存幅は150～450cm、深さは5～15cmを測る。覆土は粗砂で、水田面を削る。北側については、SD001と合流して、13次調査区まで延びる。また、南側については、10次調査の水田SF070東側を北流する「溝状の流れ」につながる。出土遺物は摩滅した弥生土器、土師器が出土した。

SD003（第9図） 北西方向に直線的に流れる流路で、幅120～300cm、深さ3～18cmを測る。覆土は粗砂で、水田面や畦畔を切る。南側は10次調査の流路と連続する。北側はSS018内で切れている。10次調査区の南東端を北東方向に流れる流路（河川）は、本調査区のSD025に連続すると考えられるが、SD003はその大きな流路（河川）から、北西方向に分岐する流路と考えられる。

出土遺物（第13図） 33はヒサカキの棒材で両端を断面フ字状に削る。端部に顕著な磨滅はない。

SD011（第10図） SD025からSS021上面を北壁に平行して南西方向に直線的に延び、SD003につながる流路である。長さ12.5m、幅0.6～1.38m、深さ9～28cmを測る。SK031、SD024、SS020東壁を切る。遺物は出土していない。

SD023（第10図） SD025から派生して北西～南東方向に直線的に形成された流路で、東側が小さくSD025に張り出す。幅140～200cm、深さ40cmを測る。覆土は粗砂で、SS021北壁やSS019を切る。擾乱のピット2基に切られる。

出土遺物（第8図） 遺物は小片で、古代の土器を含む。6は土師器壺。

SD024 (第10図) SD025からSS021上面を東西方向に蛇行状に流れ、北に分岐した流れはSD023につながり、西の流れはSS021北端で止まる。幅100~130cm、深さ8cmを測る。覆土は粗砂で、SD011に切られる。

出土遺物（第13図） 土器は出土していない。西側から32のスギの曲物底板が出土した。

SD025 (第5・11・15図) 北方向に直線的に流れる流路で、覆土は粗砂とシルト・粘土の互層である。粗砂の堆積の幅は3~6m、深さ2mで、両側の水田SS022を切る。シルトや粘土の堆積(SX026)の幅まで含めると7~11mを測る。南側は10次調査区に連続する。最上層の灰黒色粘土層をSX006、西側の粘土層をSX026として、遺物を取り上げている。

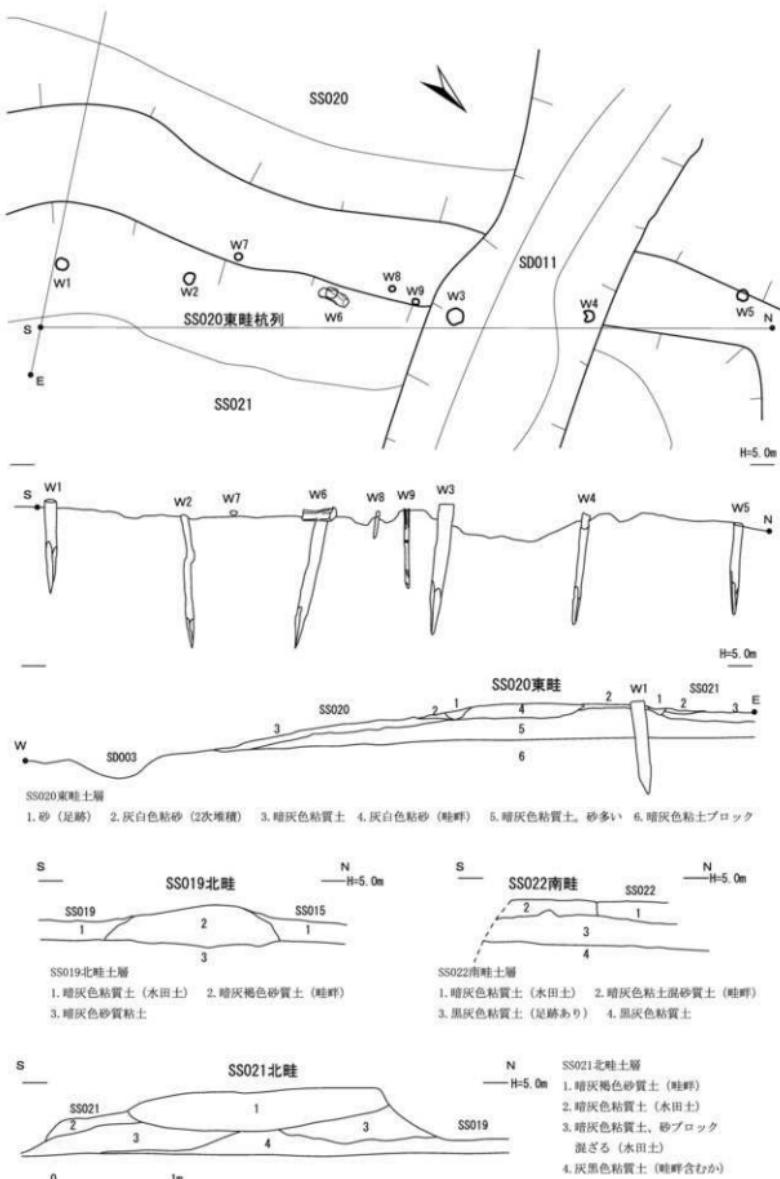
出土遺物（第8図） コンテナケース1箱出土した。土器は7世紀から8世紀後半を主体とする。7はSX026清掃時出土の須恵器壺蓋で、体部と柄の段は無い。7世紀前半。8はSX006出土の須恵器壺身で、外面にヘラ記号の一部とみられる線刻がある。復元口径が10.6cmと小さく、返しが退化しつつある。7世紀前半。9はSD025出土の須恵器壺。7世紀後半。10はSD025出土の土師器壺で、粗い回転ヘラ切り痕を残す。11は58区出土の須恵器の小型壺。12は58区出土の須恵器の高台壺。13は23・27区廃管出土の須恵器の壺。口縁部が開く形態。14は東側粗砂(SD025)出土の土師器の壺。

SD602 北方向に流れる流路で、幅は5m以上と広く浅く流れている。南側は大きな落ち込み（大型土坑）になっている。この大型土坑SX602は、第2面での報告をしているが、形成・堆積時期はSD602と同時期の可能性が高い。

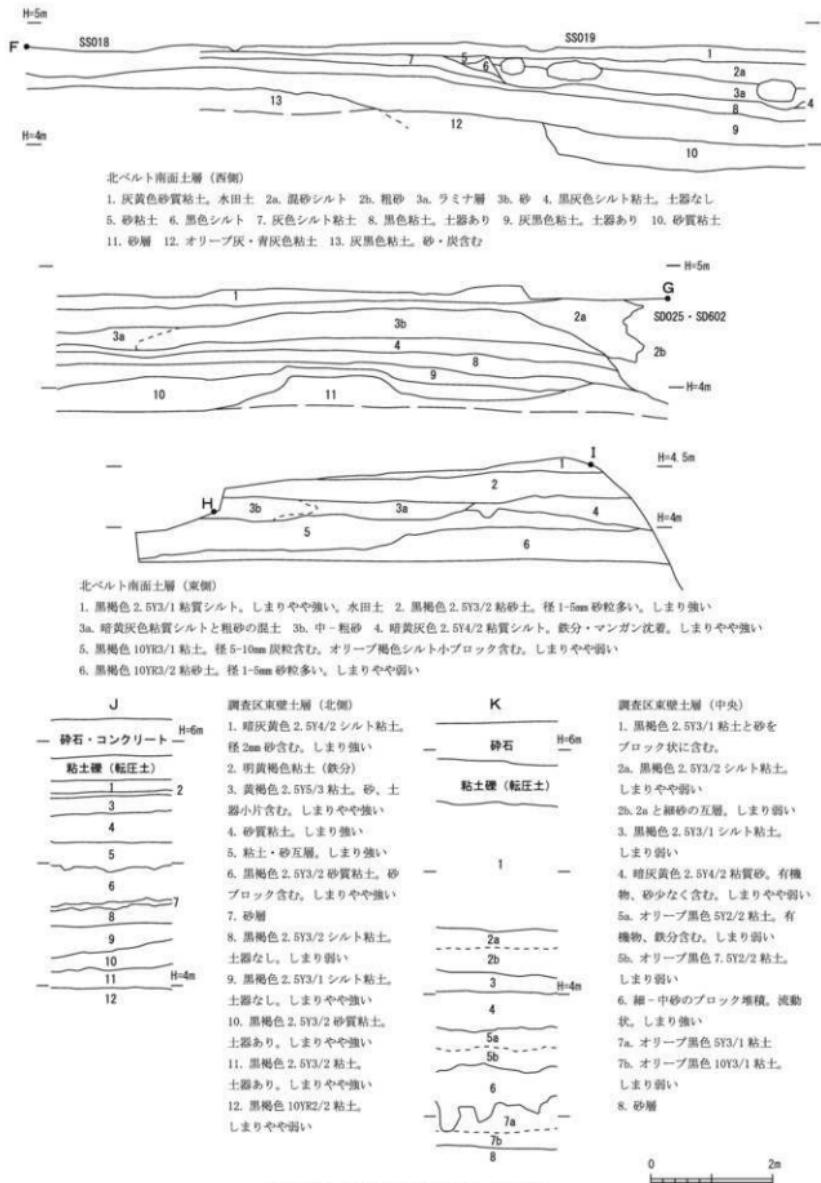
出土遺物（第12・13・23図） 遺物はコンテナケース1箱分出土し、8世紀後半を下限とする。15は土師器甕で、口縁部は比較的薄く外反し、外面は縱方向のハケメ、内面は斜め方向のケズリで仕上げる。16・17・18は、土師器壺で、口縁部は外傾して立ち上がり、底部は回転ヘラ切り、内外面は回転ヘラミガキで仕上げる。19は須恵器の高台付壺で、低く外側にやや張り出す高台が底部端に付く。20は須恵器壺蓋で、小型で壺身の形態をなす。7世紀前半。21は土師器直口壺で、胎土は白色砂をあまり含まない精良なものだが、赤色粒をやや多く含む。内面調整は体部が強いユビナデで、頭・口縁部が丁寧なヨコハケメである。6世紀後半から7世紀代か。22は土師器の高壺で、21と同質の赤色粒を含む精良な胎土である。5世紀代か。23は土師器の甕で、口縁部は外反し、胸部内面は粗く削る。5

第2表 第1面出土木器

番号	遺構・層位	器種	長さ(cm)	木取り	樹種	備考	Wn.
13	31 SS030	板材	3.4	分割材	コナラ属アカガシ属B		1-2
13	32 SD024 R2	曲物底板	12.7	板目	スギ		82
13	33 SD003	棒材	26.6	芯持丸木	ヒサカキ		36
13	34 SD602	板状部材	40	板目	ツヅラジイ		40
18	57 SS012	柱状、粒状	5.5	芯持材	サカキ		51
18	58 SS020 北端 R1	鉋柄把手	13.6	芯持材	ツツジ属福縁管束属		60
-	SS017	小枝束	7.5	芯持丸木	バラ属	国版 37-5	54
18	59 SS018 東端 R1	曲物底板	18.8	板目	モミ属		80
18	60 SS018 東端 R2	棒材	18.7	芯持丸木	シキミ		56
19	61 SS021 北一木脚	一木脚	77.7	延目へ削出丸木	コナラ属アカガシ属(イチイガシ?)	383-474, 485-535calAD	72
19	62 SS021 北・東側	瓶串か	26.3	芯持丸木	スダジイ		73
19	63 SS021 北端 R1	板状部品	10.6	板目	スギ		74
19	64 SS021 北端 R2	小枝束	10	-	梗皮		75
19	65 SS022 東端	棒材	30.2	芯持丸木	サカキ		76
19	66 SS022 東端	棒状製品	24	芯持丸木	ウツギ属		77
19	67 SS022 東端	曲物底板	18.1	板目	ヒノキ		78
21	80 SM039 R2	棒状部品	109.8	板目	シイ属(ツヅラジイ型)		38
21	81 SM039	荷札木箆	10.9	延目	スギ	国版 37-9	39
21	82 SM039 W1	板状	13.8	延目	ヒノキ		37
21	83 1面下上層(砂層)	陽物	18.2	芯持丸木	サカキ	国版 37-10, 426-552calAD	320
21	84 2面上下層(SD064西) W1	陽物	33.2	芯持丸木	広葉樹	国版 37-11, 422-548calAD	101
21	85 2面上 76区 W1	誰	15.8	板目	スギ		100
21	86 1面下 56区	木撻	15	芯持丸木	サカキ		95



第14図 SS019～022 杭列・土層実測図 (1/20)



第15図 調査区土層実測図 (1/40)

世紀代。24は古墳時代前期の甕。25は古墳時代前期・山陰系土器の甕で、複合口縁は直立気味に立ち上がる。26は小型の甕で、摩滅が強く器面調整は不明である。27は古墳時代前期の小型丸底鉢。28はミニチュアの壺。29はミニチュアの鉢。30は弥生土器甕で、強く曲がった如意形口縁の口唇部下端に板状工具で浅く、粗に刻目を施し、口縁部下3cmほどに沈線をめぐらす。板付II式。34はツブライジイの板状部材で、 3.3×2.3 cmの長方形貫孔を設ける。97は凝灰岩製の厚みのある小判形石器で、小型磨製石斧の未成品と考えられる。

4. 水田 (SS)

SS012 (第5図) 北側は13次調査区の水田SF061に連続し、西側は調査区外となる。SF061北畦とSS012南畦の距離は約19mを測る。標高は4.75~4.79m (SF061南側)。足跡が残るが、偏りや方向性は認められない。東畦は、幅64cm、高さ3.6cmを測る。

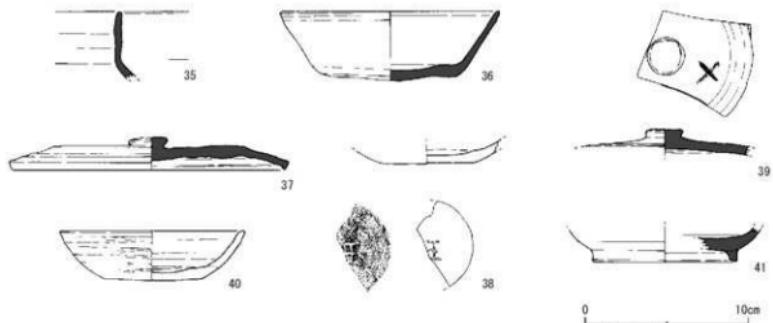
出土遺物 (第18図) 遺物は小片で、古代の土器を含む。57はサカキの柱状木製品で、側面を細かく面取りしている。栓か。他にクリを含む小枝束 (W52) が出土した。

SS013 (第5図) 東側をSD001に削られ、北側は49区 (第13次調査区の未調査部分) 南側に連続する。49区の水田面調査では畦畔の記録をとれていないが、足跡の位置は記録しており、その足跡が分布しない範囲が、西側第13次調査区SF061北畦の位置と対応したため、畦畔として復元した。それに基づくと、北畦と南畦との距離は、19.4mを測る。標高は南側で4.8m、北側で4.73m。足跡の傾向は不明である。北畦の幅は推定47cm。出土遺物は小片で、古代の土器を含む。

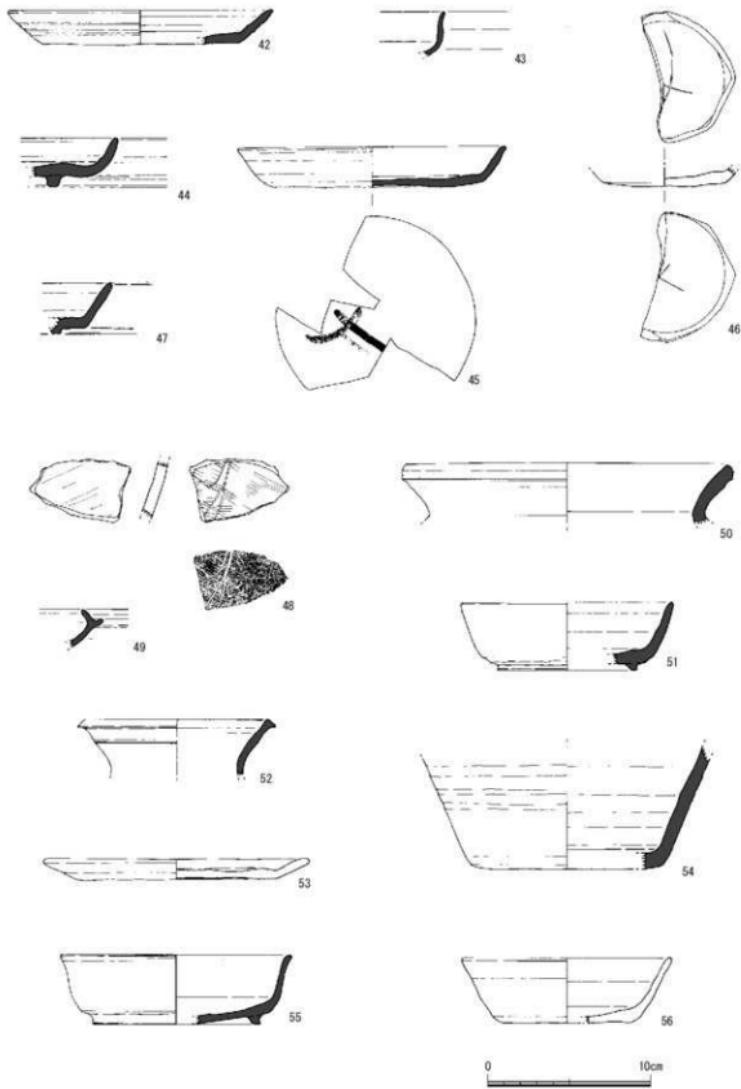
SS014 (第5図) 西側をSD002に削られ、北側は掻乱等の影響で判然としない。SD002下にわずかに畦畔の痕跡があり、それに基づけば南辺は5.34mを測る。標高は4.75~4.8m。足跡は東畦に沿って往来する傾向を見て取れる。東畦は、幅120cm、高さ5.6~10cmを測る。出土遺物は小片で、古代の土器を含む。

SS015 (第5図、図版3) 東側・北側は掻乱で破壊され、判然としないが、第13次調査のSF060に連続すると考える。SF060北畦とSS015南畦の距離は、約10mを測る。標高はSS015南西で4.8m、北東で4.8mを測りほぼ水平である。足跡の傾向は特にないが、大振りな4本指の足跡が確認され、サギなどの鳥類のものと考えられる。出土遺物は古代の土器小片。

SS016 (第5図) 東側はSD002で削られ、西側は10次調査区の水田SF065に連続する。北畦と南畦の間の長さは11.59mを測る。標高は北東で4.81m、南東で4.73m。足跡はとても多く、SD002と北



35・36 SS017 37~41 SS018
第16図 SS017・018出土土器実測図 (1/3)



42~46 SS019 47・48 SS020 49~55 SS021 56 SS022

第17図 SS019~022出土土器実測図 (1/3)

畦を往来する傾向を見て取れる。北畦は幅50~75cm、高さ5cmを測る。

出土遺物（第202図） 1381は天河石の小玉。他にウツギ属を含む小枝束（W53）が出土した。

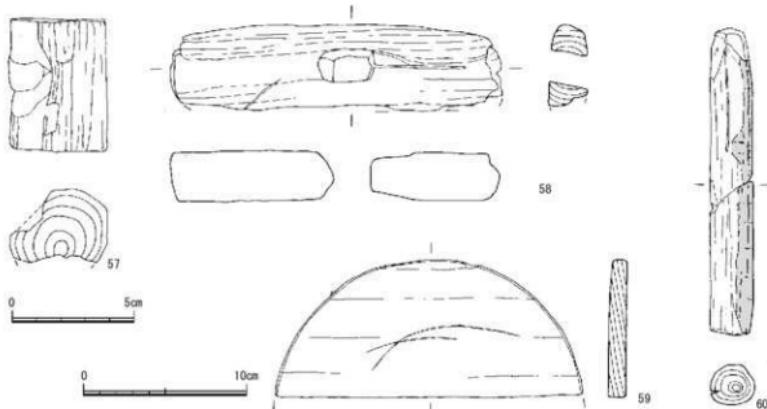
SS017（第5図） 西側をSD002で削られており、SS016と同一田面なのか間に畦畔があったのか不明である。東畦の長さは10.96mを測る。標高は4.72~4.8mで、北西に傾斜する。足跡はSD002沿いとそこから東の畦畔に向かって連続して残されている。東畦は幅53cm、高さ4cmを測る。

出土遺物（第16・202図） 35は須恵器壺で、口縁部端の肥厚がない。7世紀代。36は須恵器壺身で、平底から体部が直線的に立ち上がる。8世紀代。SS016北畦出土の口縁部片が接合した。W54は樹皮で束ねられたバラ属を含む小枝束（図版37-5）。1384は東畦下出土のガラス小玉。1387は碧玉の管玉。

SS017東畦小穴列SP034・035・036（第5図） 灰褐色シルト粘土を埋土とする小穴が3つ並ぶ。径は13~18cm、深さは6~8cm。SS017の上面と、ピットの検出面は20cm近くの差である。杭の跡と考えられ、畦に沿って並ぶ。古墳時代前期のSK136を切る。遺物は、弥生時代から古墳時代の土器・土師器小片が出土した。

SS018（第5図） 北辺3.61m、東辺10.95m、南辺1.2m、西辺10.75mを測る。標高は5.42~5.45mで、南東にわずかに傾斜する。北畦は幅79cm、高さ4cm、東畦は幅70~160cm、高さ4~5cmを測る。足跡の傾向は特にない。SS018とその東畦および東隣のSS019は出土遺物が比較的多い。

出土遺物（第16・18図） 37は須恵器壺蓋で、摘みが扁平で返しの退化した口縁部形態。8世紀代。38は土師器壺で、底部外面に「王」字状の刻書が認められる（図版37-6）。回転ヘラケズリ・ヘラナデの成形・調整で、底部から体部が丸みを持つ。8世紀前半。39は須恵器壺蓋で、体部に「十」の墨書がある（図版37-7）。摘みは扁平で低い。8世紀代。40は東畦と上層出土破片が接合した土師器壺で、底外面に回転ヘラケズリを残すほかは回転ヘラミガキで仕上げる。8世紀前半。41は東畦出土の須恵器高台付壺で、回転ヘラケズリ成形で、高台が弱く外反する。7世紀末~8世紀初頭。59は東畦南側上面から出土したモミ属の曲物底板。弧状の傷がある。60は東畦北側の下層から出土した、シキミの棒状製品で、上端は削ってすぼめ、半面が炭化している。

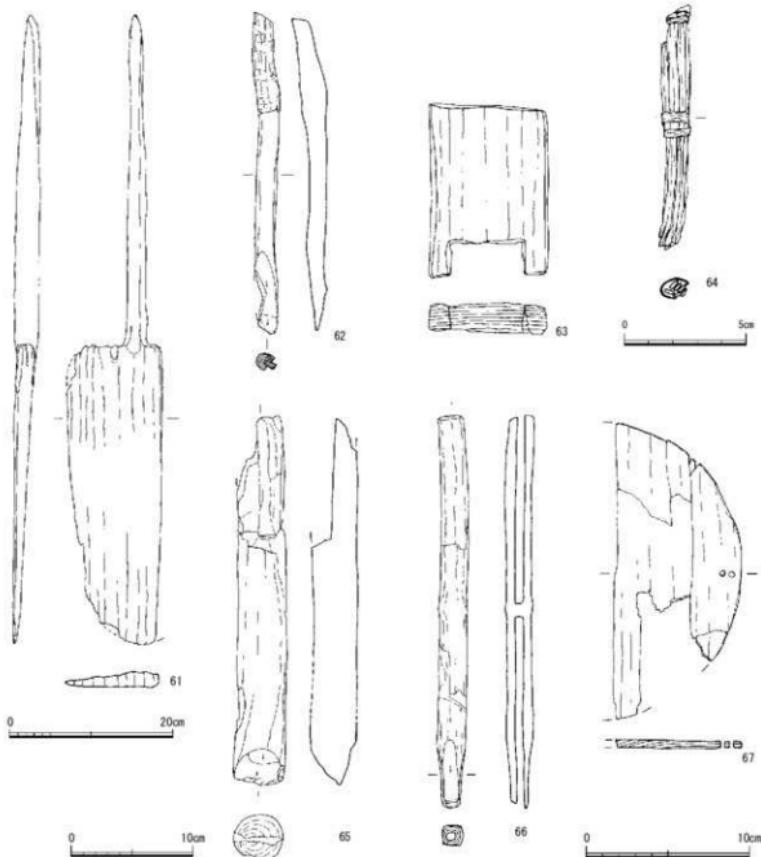


57 SS012 58 SS020北畦 59・60 SS018東畦

第18図 SS012・018・020出土木器実測図 (57・58は1/2、他は1/3)

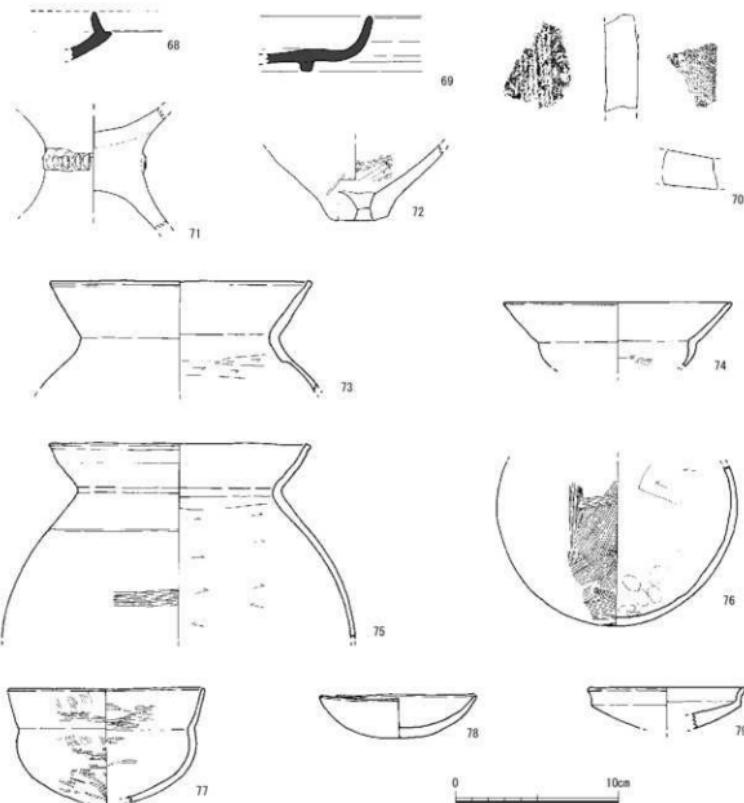
SS019(第5・14・15図、図版3・4) 東側は搅乱やSD025の影響で畦畔の存在を確認できない。SD023の東側が標高4.9mとやや高くなっている、畦畔の名残である可能性もある。北畦と南畦の間は11.53mを測る。標高は4.77~4.86で、南に傾斜する。足跡は、SD023から西に横断して西畦沿いに北上する傾向を見て取れる。北畦は幅70cm、高さ2~4cmを測る。

出土遺物(第17図) 8世紀後半を下限とする。42は須恵器皿で、外面にカキメを施す。45と同型。43は須恵器壺で、器高が低い。44は須恵器高台付壺で、小片のため復元はしないが口径は20cm近くになる大型品。45は須恵器壺で、底外面に「右」「左」に似る三画の文字を墨書きする(図版37-8)。SS021北畦、SS018出土破片と接合した。大型で器高が低い。46は土師器壺で、底内外面に「X」のへ



61~64 SS021 65~67 SS022

第19図 SS021・022出土木器実測図(61は1/6、62・65は1/4、64は1/2、他は1/3)



68~72 第1面下層 73・74 SX039 75~79 SX040

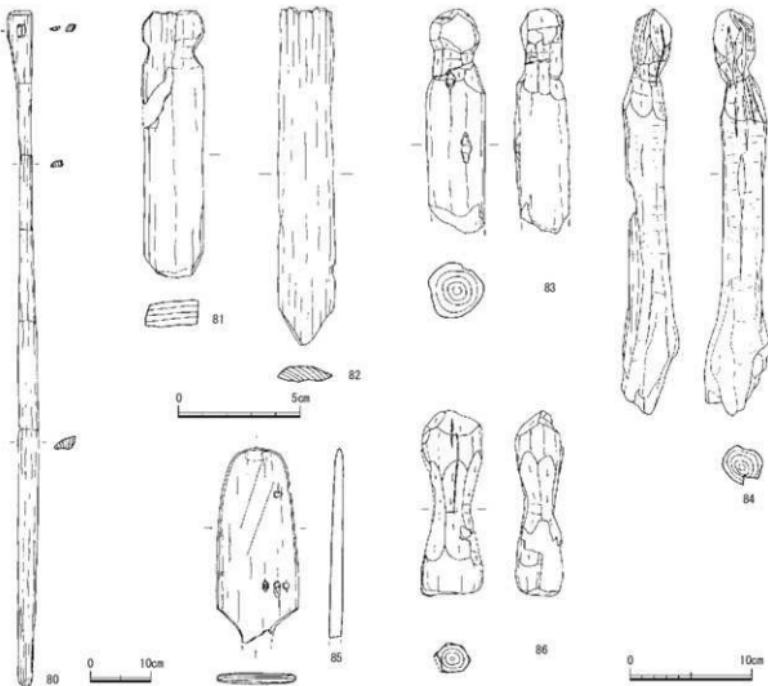
第20図 第1面下層、SX039・040出土遺物実測図 (1/3)

テ記号がある。底径が小さく口縁が開く形態で、部体はヘラケズリ、底外面は粗いヘラナデで仕上げる。

SS020 (第5・14図、図版4) 南側はSD003に削られるが、西側は10次調査区のSF069に連続する。標高は4.7~4.73mで、北西にわずかに傾斜する。北畦は幅180m、高さ7~12cmと大きい。東畦は幅100~160cm、高さ4~8cmを測る。足跡は、SD003西沿いから北畦に至る傾向を見て取れる。

出土遺物 (第17・18図) 47は須恵器高台付坏で、底部と体部の境が角張り、高台が内側に位置して断面方形となる。8世紀前半。48はSS020北畦出土の土師器片で、外面に線刻文様を施す。内面は斜位のケズリ、外面は斜位のハケメで仕上げており、古墳時代後期の鉢と考える。58はマツ属複維管束亜属の棒材で、鋤柄の組み合わせ式把手。

SS020東畦杭列 (第14図、図版4) SS020東畦の北端東側 (SS021北西端) の畦天端に木製杭が7本、直線に並んで確認された。総長は2.8mで、杭間距離は北から、W5-W4間64cm、W4-W3間55cm、



80~82 SX039 83~86 第1面下層

第21図 第1面下層、SX039出土木器実測図 (80は1/8、81・82は1/2、他は1/4)

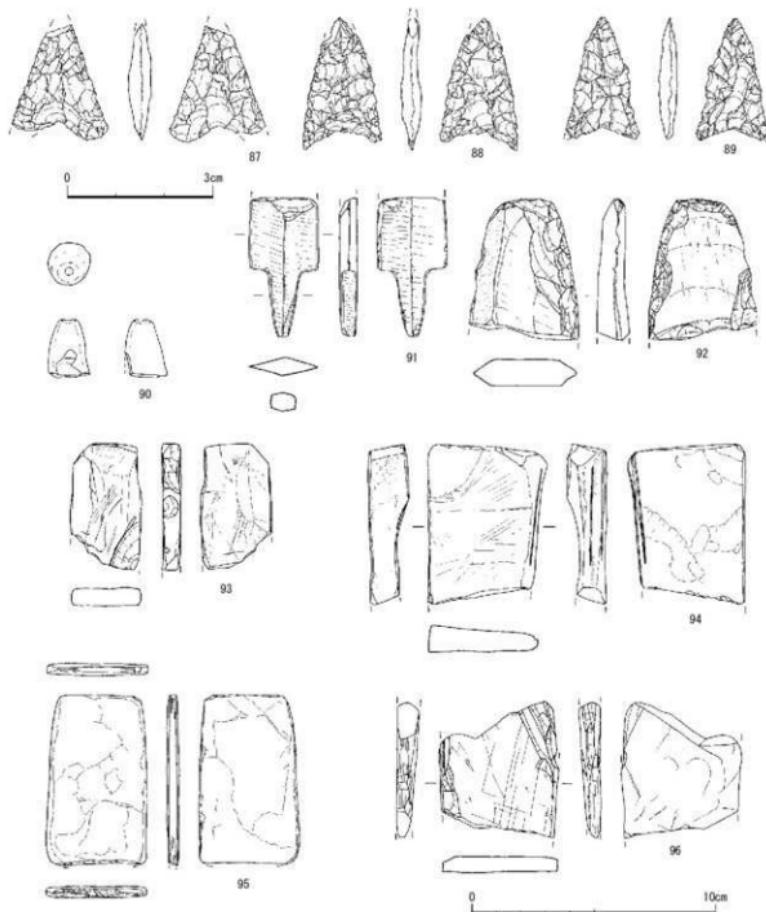
W3-W6間50cm、W6-W2間58cm、W2-W1間52cmを測り、W3-W6間に竹製杭が2本、W6-W2間に小型の木製杭が1本打たれる。中型杭は検出面から35~65cmと比較的深く打ち込まれている。SS021からの浸水を防ぐために横板状のものを渡していたと考えられる。当該箇所は、SD025から導水された水が、SS021北畦に遮られる形で西に進み、SS020に導水するため畦畔を乗り越える場所になる。SS021北畦が大畦畔となるので、それに並走する水流（SD011・024）の量・圧が大きくなりがちであったと考えられ、それによるSS020東畦北側の侵食が強かったために、杭補強されたと解釈される。

出土遺物 中型杭は芯持丸木杭で、先端の片面を大きく削り、その裏面を小さく削って杭先を作り出す。W1・W2・W4はツバキ属、W3・W6はシキミ、W5はスグジイ、W8・W9はタケ亜科の杭。

SS021 (第5・14図、図版4) 東・南側はSD025で削られる。北側はSD011・023に削られる。田面は残存部分で長さ15m、幅8.3mを測る。標高は、4.74~4.86mで、北側に傾斜する。足跡は、SD024南東側から西畦中央付近にかけて横断する形で連続する傾向を見て取れる。北畦は幅170cm、高さ12cmを測る。砂質土で構築された北畦の下面には足跡を含む粘質土とともに灰黒色粘質土の高まりが確認でき、旧畦畔の可能性がある。北畦下から木器63・64が出土した。

出土遺物 (第17・19図) 8世紀後半を下限とする。49は須恵器壺身で、蓋受けの長さから6世紀後

半と考える。50は須恵器甕で、SS019、SX026出土破片と接合した。口縁部の装飾性に乏しい。51は高台付坏で、高台は低くわずかに外反して端部が丸みをもち、体部下半も丸く成形される。7世紀末。SS021北畦およびSS019出土破片と接合した。52は須恵器壺で、50と同様に装飾性に乏しい。53は北畦出土の土師器皿で、底外面は回転ヘラケズリを施すが、内面の回転ヘラナデはやや粗い。54は須恵器鉢。55は須恵器高台付坏で、51と同型で7世紀末。61はコナラ属アカガシ亜属（イチイガシ?）の一木鍬で、先端が磨滅する。炭素14年代は、4世紀後半から6世紀中頃の範囲を示した（第14表）。



87 SX040 88・90・92・93・95 第1面下層 89・91・96 摂乱 94 SS022

第22図 第1面出土石器1 (87~89は1/1、他は1/2)

62はスダジイの棒状製品で、下端をヘラ状に加工しており、掘串の可能性がある。上部は炭化する。63はスギの板状部品。64は小枝6本を樹皮で2ヶ所巻いたもの。

SS022 (第5・14図、図版3・4) 西側はSD025で削られ、東側は7・9次調査区で未調査である。標高は4.68～4.9mで、東側に傾斜する。足跡の傾向は特にない。南畦は幅66cm、高さ3cmを測る。畦畔は砂質土で構築されるが、その下面の粘質土上にも足跡が残っており、一度田面として砂層堆積した後の面上に構築されていると考えられる。

出土遺物 (第17・19・22図) 56は土師器坏で、回転ヘラナデで仕上げられて体部下半は丸みを持つ。8世紀前半。65はサカキの棒材で端部を断面F字状に削る。66はウツギ属の棒状製品。先端を4面削つて尖らせている。67はヒノキの曲物底板。94は砂岩の砥石で、表面は中央に向かって凹み、左・上側面は長軸方向の砥ぎ痕が残る。裏面は粗い研磨で平坦に仕上げる。右辺は表裏面の端に溝状の切り込みがあり、擦り切りによる切り離しが想定される。溝に挟まれた縁辺は丸く磨滅する (図版37-13)。

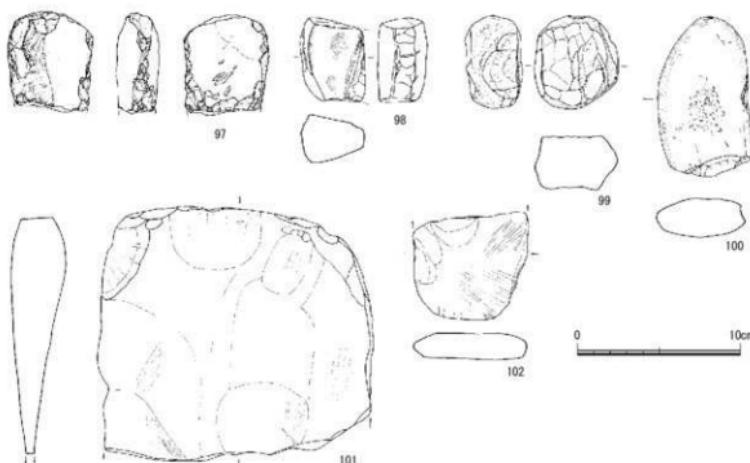
SS1458 (第5図) 西側が第13次調査区のSF057に連続する。SF057北畦とSS1458南畦の距離は11.9mを測る。標高は南側 (SF057南東) で4.7m、北側 (SF057中央東) で4.67mを測る。足跡の傾向は不明である。東畦の幅は推定46cm。出土遺物は古代の遺物を含む。

SS1459 (第5図) 北側が第13次調査のSF059に連続する。SF059北畦とSS1459南畦の距離は、12.9mを測る。標高は4.8m。足跡は南畦から北方向へ連続する傾向がある。南畦は幅58～110cm、高さ14cmを測る。出土遺物は土器、土師器、須恵器など古代の遺物を含む。

その他水田出土遺物 Sトレンチ水田耕作土から出土した100は細粒よりやや粗い砂岩の磨石。磨面の中央に浅い敲打痕を残す。

5. 遺物包含層 (第1面下層)

SX039 (第15図) SS019下層の有機物を含む河成堆積層。第2面土器群の上に堆積する。



97 SD602 98～102 第1面下層

第23図 第1面出土石器2 (1/3)

出土遺物（第20・21・22図） 73は布留式甕。74は古墳時代前期の小型丸底鉢。80はシイ属（ツブライ型）の棒状部品で、頭部を作り出し、方形孔を穿つ。81はスギの板状木製品で、荷札木簡と考えられる（図版37-9）。82はヒノキの板状木製品。

SX040（第15図） 第2面微高地際の黒褐色粘質土と中砂の混土。SX039と同質の堆積である。

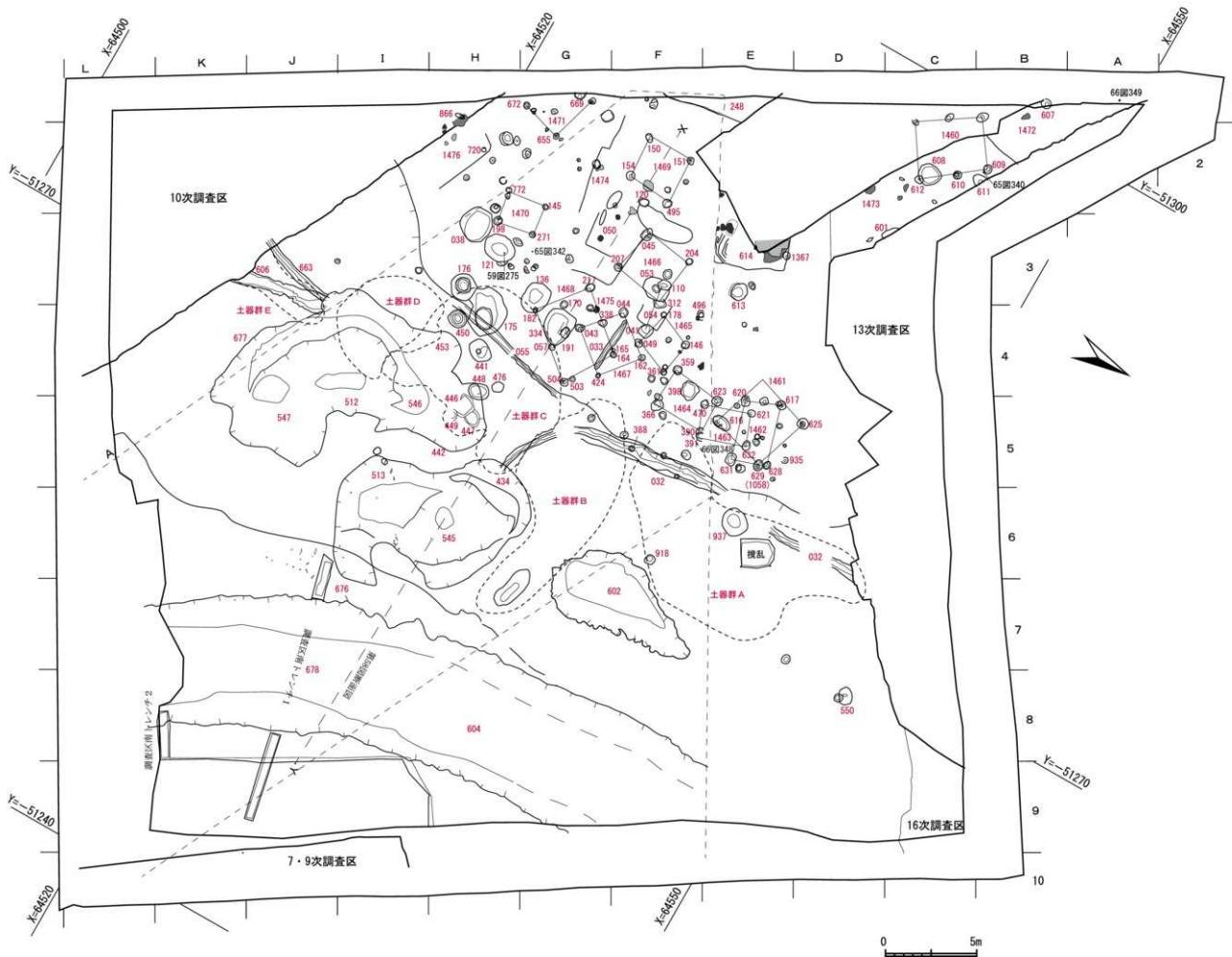
出土遺物（第20・22図） 遺物はコンテナケース2箱で、古墳時代前期と古代の土器が多い。75は布留式甕。頭部から下3cmほどに1条の沈線を施す。76は小型甕。77は古墳時代前期の小型丸底鉢で、外側全体にススが付着する。78は古墳時代前期の甕。79は古墳時代前期の小型器台。87は安山岩製の打製石鐵。

その他第1面下層出土遺物（第20～23・202・203・206・209図） 68は須恵器甕。6世紀後半。69は須恵器高台付皿で、8世紀後半。70は平瓦片。布目痕と繩席文たきが認められる。71は古墳時代土師器の高甕。72は土師器の甕で、底部に穿孔を施す。83はサカキの棒状木製品で、上部に例り込みを入れて頭部を削り出す。陽物か（図版37-10）。84は広葉樹の棒状製品で、頭部が作られる。陽物か（図版37-11）。83・84は炭素14年代で共に5世紀前半から6世紀中頃の年代を示した。85はスギの箋。86はサカキの木鍬。88は黒曜石製の打製石鐵で、後面先端を研磨している。89は黒曜石の打製石鐵。90は斑レイ岩の円錐形石製品で、頭頂部が円形に回む。權か（図版37-12）。91は13次調査理垣土出土の頁岩の大型磨製石鐵。92は安山岩の削器。93は層灰岩の扁平石器。片刃石斧の未完成と考えられる。95はホルンフェルス（岩石薄片No.5）の板状磨製石器。側面の3面を面取りして精巧に仕上げる。表裏面は剥落のため不明。96は廃管部分出土の泥岩の板状砥石で、表面が平滑な研磨面、側面を研磨成形し、裏面は素材面となる。表面には方向の一定しない線状痕・擦痕が残る。石材は緻密やや軟質でへき開が発達する。98はやや細粒の砂岩砥石。3面に砥面が形成され、破断部には擦り切り痕と折断面の粗い調整が認められる。やや軟質の石材。99は石英質の小型敲石。101は中粒の砂岩の砥石で、表裏2面に砥面が形成され、両面の中央が回む。縁邊にも緩やかな凹みの砥面が形成される。102は玄武岩質の砥石。表面に浅い溝状の研ぎ痕の集積が2方向で形成される。粗粒で硬い石材。1390は碧玉の角柱状素材。1396は滑石の中型扁平勾玉。1409は土製勾玉。腹部が幅5mmほどの幅で回んでいる。1411は長方形扁平の土製垂飾で、土器口縁部を転用しており、表裏面を再研磨している。1416・1417は土製管玉。第1面下層71(12)区に玉類の集中がみられる。12区は第2面では微高地落際で、関連しそうな遺構は推定竪穴建物SC1476がある。1484は滴形の投弾。1498はわずかに重心が下がる鉗形の投弾。1521は不明土製品。台形状を呈し、被熱等の痕跡はなく、破面が強く風化・磨滅している。支脚か（図版41-6）。

第3表 第1面出土石器

* 石材の「磁性」はネオジム磁石による。長さ・幅・厚さはcm、重量はg。□内は残存部法量

種別	番号	遺構・位相	石材	磁性	器種	残存	長さ	幅	厚さ	重量	備考	番号
22	87	SMD40	安山岩	中	打製石器	先端・脚欠損	[2.4]	2.0	0.5	[1.6]		25
22	88	1面下層71区	黒曜石	中	打製石器	先端・脚欠損	2.7	1.6	0.4	1.31		69
22	89	複乱16 洗流域	黒曜石	中	打製石器	先端	2.5	1.5	0.4	0.97		130
22	90	1面下層71区	圓形石器	一	円錐形	先端	2.4	1.7	1.7	7.73	回復37-12	F134
22	91	13面埠頭土	頁岩	強弱	大型磨製石器	身部上半欠	[5.7]	2.8	0.7	[14]		129
22	92	1面下43区	安山岩	中	削器か	一部欠	[5.79]	[4.41]	1.33	[39.7]		229
22	93	1面下49区	碧玉	強弱	扁平石斧	刃部欠	[5.14]	2.85	0.75	[20.7]	基部角面取り	383
22	94	SMD22上層	砂岩	一	砾石	先端	6.6	4.9	1.7	61.8	回復37-13	44
22	95	1面下49区	ホルンフェルスS5	強弱	磨製石器	先端	7.01	4.1	0.51	27.1	板状	382
22	96	東側2列目廻管	碧玉	強弱	砾石	破片	5.51	4.85	0.88	25		390
23	97	SMD62	碧玉	強弱	磨製石器未完成	基部片	[6.2]	5.2	2.6	[114]		26
23	98	1面下76～21区西	砂岩	一	砾石	先端	5.09	4.01	2.99	71.8	裏板あり	231
23	99	1面下71～6区	石英質	一	砾石	先端	5.11	5.6	3.49	150.5		230
23	100	南側2列目廻管	碧玉	強弱	磨製砂岩	一部欠	[9.7]	5.8	2.3	[204.8]		343
23	101	1面下中央南側重複砂岩	碧玉質	弱	砾石	先端	16.69	15.51	4.2	1191.3		232
23	102	1面下44区	玄武岩質	弱	砾石	一部欠	[6.59]	7.02	1.68	[117.9]		228



第24図 第2面遺構全体図（1/200）

第2節 第2面の調査

1. 第2面の概要

第1面の水田耕作土を掘り下げ、黒色～黒褐色粘質土の層で遺構検出を行った（図版7）。遺構埋土も黒褐色であり、遺構検出はかなり困難であった。調査区内の5mグリッドごとに遺構検出・掘削・記録、遺物の取り上げを繰り返し、できる限りの情報を記録した。出土遺物は第2面上層（黒色味が強い）、下層（灰色味が強い）で取り上げを分けたが、報告上はまとめて第2面下層とする。第2面遺構の抽出は、古墳時代前期土器を含むこと、遺構の切り合い、遺構の形状、埋土等を基準とした。しかし、出土遺物が小片の場合は、第2面遺構として抽出できていない場合もある。

2. 堀立柱建物（SB）、柱穴（SP）

SB1460（第25図、図版12） 図面上では南西側調査区外（13次調査区）に対応する柱穴を求めることが可能である。1×2間（310×378cm）。桁行の柱間は172cm、206cm。SP609は柱痕跡と、礎板状の板材が残る（図版12-1）。出土遺物（第28・30図）103は布留式甕。127・128はスギの板状部品で、方形の孔があり、表裏面に切り傷や木目様の圧痕がある。

SB1461（第25図、図版12） 南西柱穴は確認できなかった。1×1間（325×327cm）。出土遺物（第30図）土器小片は古墳時代前期。129はSP629出土のモモの棒状礎板（図版12-4）。

SB1462（第25図、図版12） 1×1間（195×343cm）。SP628は柱痕跡を残す。出土遺物（第28図）104は古墳時代前期甕で、ハケメは比較的丁寧だが、口縁部外面、口唇部のユビナデが粗い。

SB1463（第25図、図版13） 1×1間（182×265cm）。SP621は、黒褐色の柱痕跡の下に柱が残っていた（図版13-2）。出土遺物（第30図、第5表）土器は弥生時代、古墳時代前期土器小片。130はサクランボ属の柱で、上端は削り込みがあり、下端は2つの突起を削り出す。131（図版13-1）はヌルデの柱で、下端は断面「コ」字状に突起を削り出す。SP470のW25は広葉樹（環孔材）の柱。

SB1464（第25図、図版13） 1×1間（218×304cm）。2つの柱穴に柱が残っていた。出土遺物（第30図、第5表）土器は古墳時代前期。132はSP390のコナラ属アカガシ亜属Bの柱。炭素14年代で3世紀中頃～4世紀の曆年代が得られた（第14表）。SP366のW22はコナラ属アカガシ亜属Bの柱。

SB1465（第25図、図版13） 1×1間（189×214cm）。出土遺物（第31図）土器は古墳時代前期。133はシャシャンボの柱。134はスギの角棒状礎板。133が134上に組み合った状態で出土した（図版13-5）。138はマツ属複維管束亜属の柱。炭素14年代は2世紀中頃から3世紀中頃を示した（第14表）。

SB1466（第26図） 1×1間（253×292cm）。出土遺物は弥生土器、古墳時代前期土器小片。SP207からは炭化モモ核1点が出土している（第10表）。

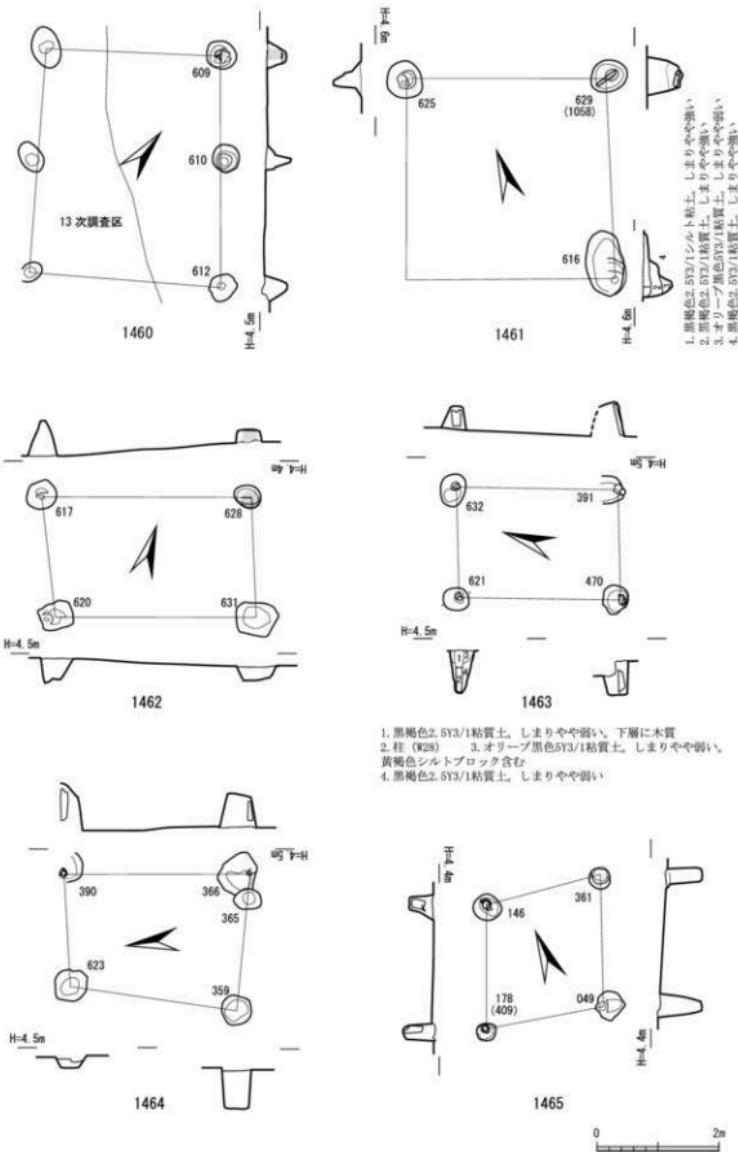
SB1467（第26図） 1×1間（252×270cm）。出土遺物は弥生土器、古墳時代前期土器小片。

SB1468（第26図） 1×2間（319×422cm）。桁行の柱間は204cm、223cm。SP182に杭状の柱が残る。SP164には柱痕跡が残る。柱の通り上でないSP503に柱が残る。出土遺物（第33図、第5表）土器は弥生土器、古墳時代前期土器小片。146はヒサカキの柱。SP503のW26はイスノキの柱。

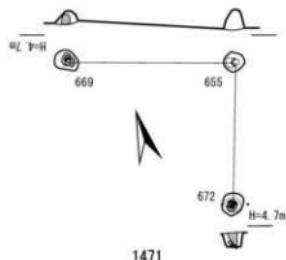
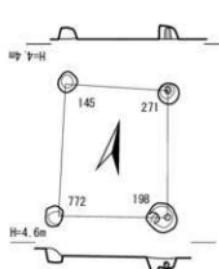
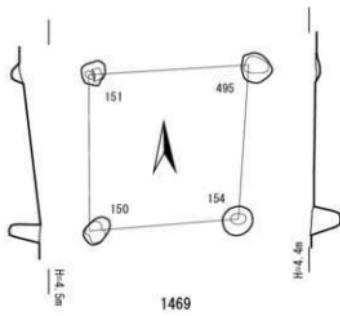
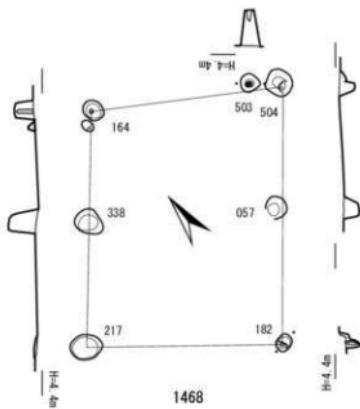
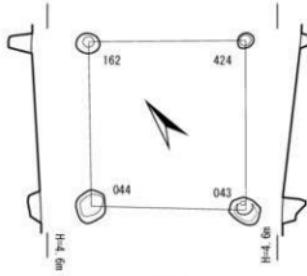
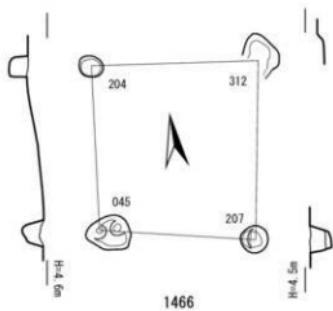
SB1469（第26図） 1×1間（254×264cm）。柱や礎板は残らない。出土遺物（第28・41図）105は布留式甕。189は黒曜石の打製石器。

SB1470（第26図） 1×1間（179×219cm）。SP271に柱痕跡が残る。SP198に柱が残る。出土遺物（第33図）土器は弥生土器、古墳時代前期土器小片。147はエノキ属の柱で上部は折り切られる。

SB1471（第26図、図版13） 南西の柱穴は確認できなかった。1×1間（230×272cm）。SP669に柱痕跡が残る。SP672は柱痕跡を残し、底面で杭状の柱片と根石状に石器が出土した。出土遺物（第41図、第5表）土器は弥生土器、古墳時代前期土器小片。SP672のW308はシイ属（スタジイ型）の杭状の柱。

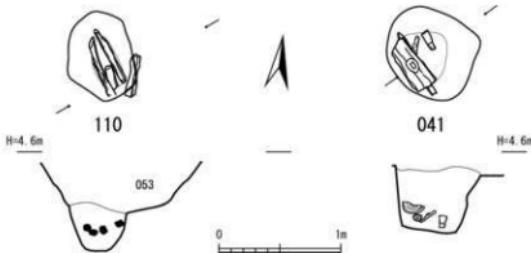


第25図 SB1460～1465実測図(1/80)



0 2m

第26図 SB1466～1471実測図(1/80)



第27図 SP041・110実測図(1/40)

192は凝灰岩の凹石で、正面と側面の中央に敲打に伴う凹みがみられる。

SP041・110(第27図、図版14) 挖立柱建物を構成しない円形ピットで、芯々で2.7m離れて並ぶ。他の柱穴より大きく、木質遺物を複数含むという点で共通する。整理作業の過程で、SP041の135とSP110の144が接合することが判明した(図版37-14)。二本柱など有機的な関係が考えられる。

SP041 径68~76cm、深さ56cmを測る。埋土は黒褐色粘質土とオーリープ灰色シルトブロックの混土。出土遺物(第31図) 土器は古墳時代前期土器小片。135はスギの角棒状礎板。上からの力で折れ裂けている。SP110出土144と接合した。136はエノキ属の半截木に方形の割り込みを入れた礎板。137はヤマグワの棒材で、両端部を粗く面取している。

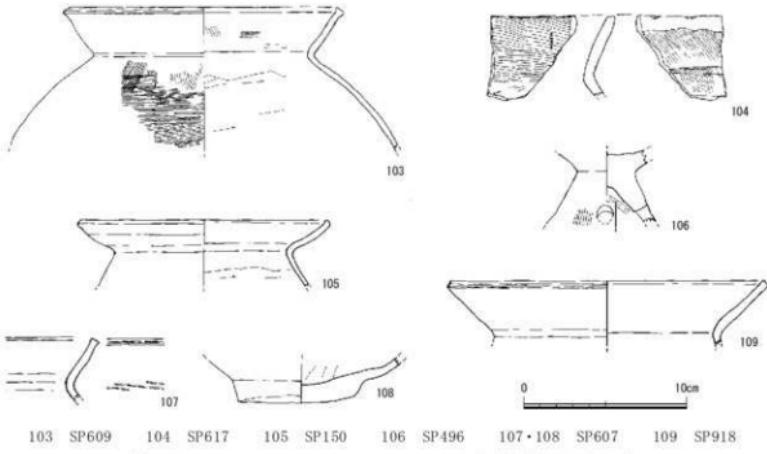
SP110 長さ72cm、幅56cm、深さ74cmを測る。出土遺物(第33図) 土器は古墳時代前期土器小片。142は広葉樹の棒材で、両端部を断面「フ」状に面取りし、側面を削って身幅を揃えている。角棒状礎板。143はスギの角棒状礎板で、下面是舟底状に加工する。144はスギの角棒状礎板でSP041出土135と接合した。145はヤマグワの棒材で、両端部は粗く面取り、樹皮を一部残した状態。

その他SP出土遺物(第24・28・41図、第5表) 106は、E4区・SP496出土の高坏で、脚部に4ヵ所の穿孔がある。107・108はB1区・SP607出土で、107は布留式甕、108は平底の甕。109はF6区・SP918出土の布留式甕。W309はH2区・SP720出土のシイ属(スタジイ型)の杭状柱。188はE3区・SP1367出土の黒曜石の打製石鎚。191はG4区・SP170出土の泥岩の小型磨製石劍。背面は剥落して欠損。193は、H4区・SP476出土の砂岩の砥石で、断面形を逆三角形状に据えた際の上面が砥面で、長軸よりやや左に振れる方向で線状痕が認められる。

SP120 F2区。他の柱穴に比べて出土遺物が多い。出土遺物(第29・32図) 110は脚付鉢。111は平底鉢。112は丸底鉢。113~119は高坏。113・117は胎土に砂粒が多く、焼成もやや軟質。116は脚部下方に径8mmの穿孔を2ヶ所施す。117は脚部下方に径6mmの穿孔を4ヶ所施す。118は上方に縦10mm、横9mmの穿孔を3ヶ所施す。119は脚部上方に径6mmの穿孔を4ヶ所施す。120は小型器台で、脚部上部に径7mmの穿孔を3ヶ所施す。上辺外面にわずかに丹が残る。139はスギの棒状部品で、背面に浅い凹みが5ヶ所みられる。111・112・114・115・116・120は胎土に雲母が多い。

SP935 E5区。他の柱穴に比べて遺物量が多い。出土遺物(第29・32・41図) 121は布留式甕。122は二重口縁壺で、小波状文と竹管文が施される。畿内系。123・126は小型器台。同一個体かどうかは不明。124は小型丸底壺。125は高坏。140はコナラ属アガシ亜属Bの鎌楔。141はスギの小板材。190は細粒砂岩製の砥石で、表面は面的な砥面、裏面には線状の擦過痕が残る。

SP191(図版15) G4区検出の壁面被熱ピット。SK334上に検出された。



第28図 SP150・496・607・609・617・918出土土器実測図 (1/3)

3. 土坑 (SK)、井戸 (SE)

SK611 (第34図) B2区。楕円形土坑で北側は13次調査区に続くが、対応する遺構は不明。幅70cm、深さ10cmを測る。埋土に炭・灰・焼土を含み、洗浄したところ20粒ほどの炭化米が含まれていた。出土遺物 (第35・42図) 148は二重口縁壺。胎土精良、内外面にスス付着。149は高杯で、脚端部にスス付着。198は黒曜石製の両面調整石器で、半月形を呈し、縁辺に潰れや摩滅は顕著ではない。

SK608 (第34図) C2区。長さ118cm、深さ17cmを測る。古墳時代前期土器が出土する。

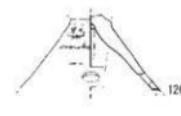
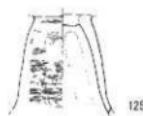
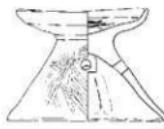
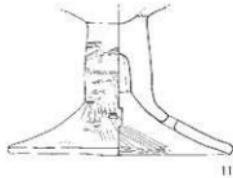
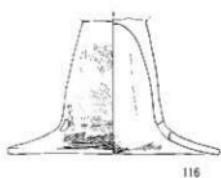
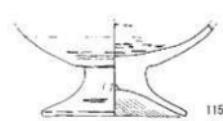
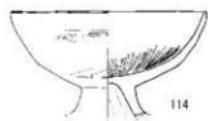
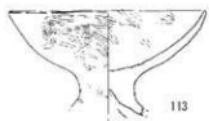
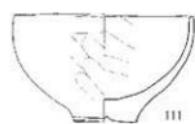
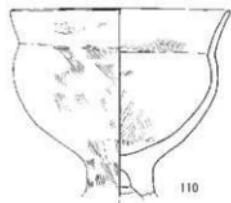
SK550 (第34図) D8区。長さ100cm、深さ33cmを測る。弥生土器小片が出土している。

SK613 (第34図) E3区。径81~97cm、深さ52cmを測る。出土遺物 (第35図) 150は甕。151は小型丸底壺で、口縁部がさほど長くない。古相。

SK398 (第34図) F5区。長さ102cm、深さ19cmを測る。埋土は暗褐色粘質土で、上層に炭化物を含む黒褐色土が堆積する。埋土を洗浄したところ、炭化米15粒ほどと、ナマズ属などの焼けた骨が出土した (第12表)。出土遺物 (第35図) 152は古墳時代前期の小型丸底鉢。153は高杯。

SE053 (第34図、図版14) F3区。長さ147cm、幅118cm、深さ125cmを測る。出土遺物 (第35・40・42図) 154は小型甕。155は小型鉢で幅0.5cmほどの小さな工具でハケメ調整される。西新式。184は広葉樹 (散孔材) の棒状木製品で、両端を斜めに大きく削る (図版37-16)。W2-2はコナラ属アカガシ亜属Bの棒材。203は細粒砂岩の磨製石製品。石錐か。204は結晶片岩の磨製石製品。石剣か。

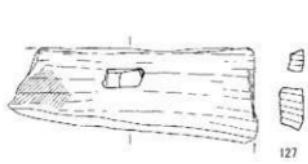
SE937 (第34図、図版14) 径133~148cm、深さ97cmを測る。黒褐色砂質粘土下の粗砂層 (帶水層) まで掘り込んでいる。下層に土器・木器が投棄され、最後に長さ20cmほどの自然礫を投げ込んでいる。出土遺物 (第37・40・42図) 156は布留式甕。157は二重口縁壺で、精良な胎土である。畿内系。158は小型壺の底部で、薄い高台状の底部が貼り付けられている。畿内系。胎土に赤色粒やや多い。159は小型丸底鉢。160は小型丸底壺。直線的に半分に割れる。161は精良胎土の直口壺。162は小型器台。直線的に1/4に破断する。163は小型器台。直線的に半分に割れる。164は小型器台で、脚部は複数個所打ち欠かれる。165・166は完形の甕で、2つとも口縁部の半周は打ち欠きで失われている。186はスギの板材。



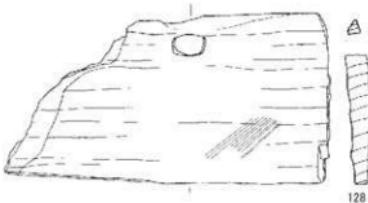
0 10cm

110~120 SP120 121~126 SP935

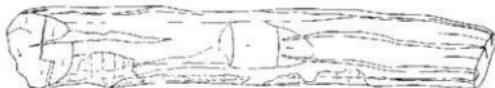
第29図 SP120・935出土土器実測図 (1/3)



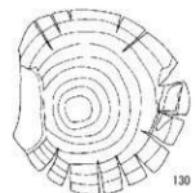
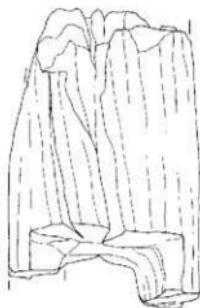
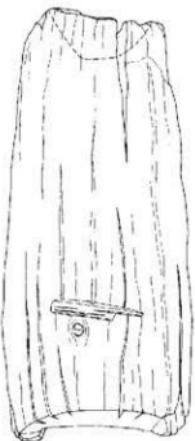
127



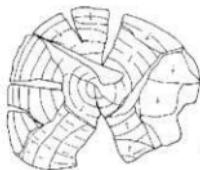
128



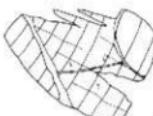
129

0
10cm

130



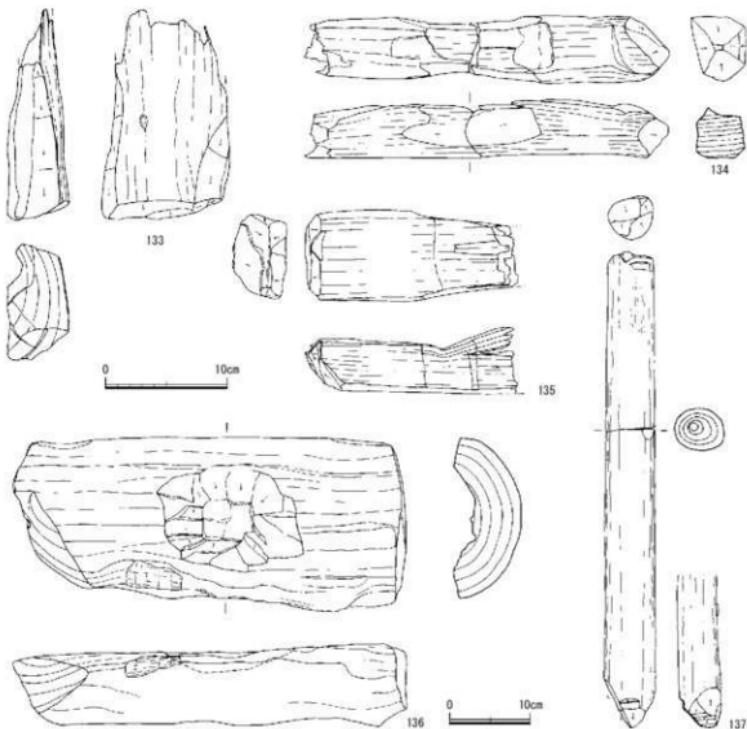
131



132

127・128 SP609 129 SP629 130 SP621 131 SP632 132 SP390

第30図 SP390・609・621・629・632出土木器実測図 (1/4)



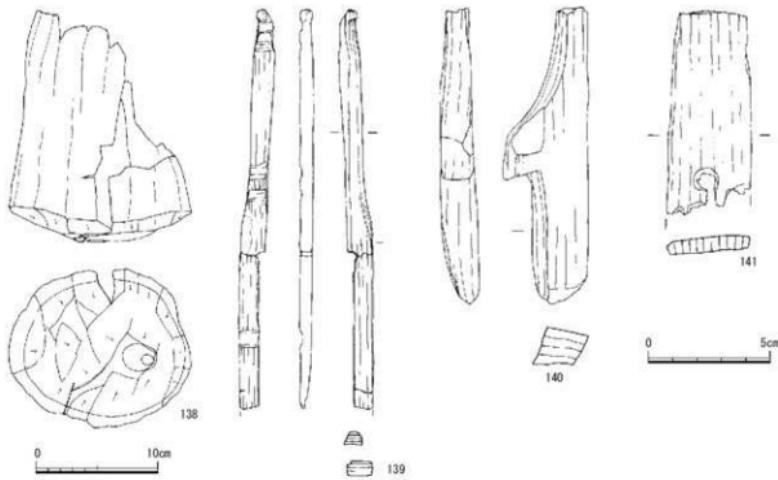
第31図 SP041・146出土木器実測図（136・137は1/6、他は1/4）

205は玄武岩の礫石器で、円盤状の自然縁の縁辺を両面調整で刃部を作り出す。

SK121（第37図、図版15）H3区。長さ176cm、幅138cm、深さ76cmを測る。埋土からカナムグラ、イネ、マクワ・シロウリ型、クスノキの種実が出土した（第10表）。種実は被熱や食痕がない。出土遺物（第39図）167は小型壺で、口縁部は打ち欠き。西新式。168は二重口縁小型甌。山陰系。185はコナラ属アカガシ亜属Aの鋸。他にマツ属複維管東亜属、クリ、ヒノキの材が出土している。

SK136（第37図、図版15）G3区。長さ176cm、幅137cm、深さ64cmを測る。出土遺物（第39・42、209図）169・173は甌。畿内系。170は小型器台。外面丹塗りか（にぶい黄橙色）。171は高坏脚部。胎土に雲母やや多い。172は壺肩部で、羽状・結節繩文が施される。関東系土器と思われるが、胎土や焼成に明瞭な特徴は見出せない。SK175、2面R47、2面下5区、10区から同一個体と思われる破片が出土している（図版37-15）。196は黒曜石製の打製石鐵。199は玄武岩の二次加工円形石器で、縁辺部が潰れ、摩滅している。1519は円柱状の土製品。支脚か（図版41-4）。

SK176（第37図、図版15）H3区。径140～148cm、深さ76cmを測る。第3面で落ち込み状に検出し（SX176）、下面を土坑状に再検出した（SK452）。出土遺物（第39・42図）174は小型の二重口縁壺。



第32図 SP120・178・935出土木器実測図 (138・139は1/4、他は1/2)

200は砂岩の搔器で、短辺の端部が平坦面を持ち、擦痕が認められる。スモモ1点（第10表）。

SK441 (第37図、図版15) H4区。長さ125cm、幅102cm、深さ80cmを測る。埋土は暗褐粘質土で、中央に底面の小ビットに対応した柱痕跡状堆積（木片含むにぶい暗褐粘質土）がある。微高地から河川部に下りて、周りに柱穴がないところなので、柱痕跡状堆積をもつ性格が不明である。出土遺物（第39・42図）175は古墳時代前期の小型鉢。W161はスギ加工材。197は黒曜石製の打製石礫。

SK450 (第37図、図版15) H4区。径95～100cm、深さ32cmを測る。中央で一段深くなる。出土遺物（第39図）176は古墳時代前期の高坏で、胎土、焼成、調整がやや粗雑で、外面にススが付着する。

SK448 (第37図) H4区。長さ111cm、深さ17cmを測る。埋土は灰色砂を含む暗褐色粘質土。

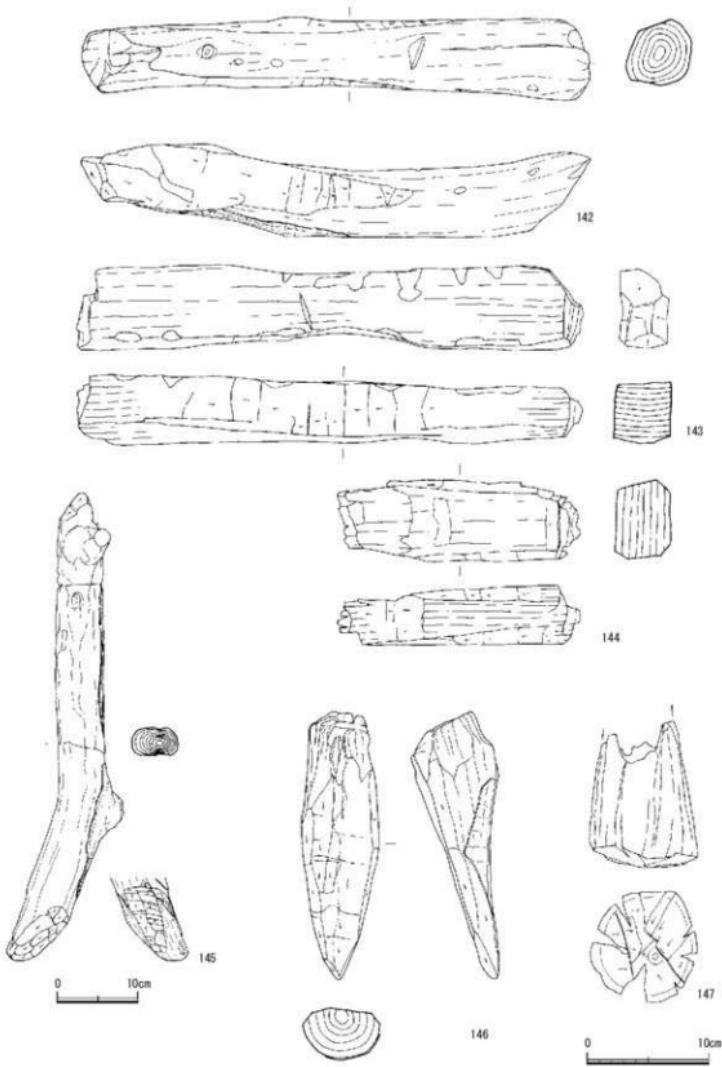
SK447 (第37図) H5区。幅80cm、深さ17cmを測る。出土遺物（第39・96・205図）177は甕。178は平底甕。SK447とSK449の出土土器が接合した。下大隈式。201は砂質泥岩-ホルンフェルス（岩石No.6・7類似）の刃器で、磨製石斧の破片を両面調整や敲打で再形成している。202はホルンフェルス（岩石No.4類似）の石包丁未成品。537はサカキの斧柄で、下端が杭状に尖る。SK447として取り上げられているが、下層のSX442(546)上層に属する可能性が高い。1436は小型の土製円盤で、斜位の沈線文を施す。裏面と断面の焼成・色調が同じ部分があり、土器片の再加工品でない。

SK446・449 (第37図) 埋土は灰色砂と暗褐色粘質土の互層。出土遺物は弥生土器小片。

SK038 (第38図) H3区。長さ187cm、幅170cm、深さ90cmを測る。埋土は上層が暗褐色シルト質粘土と白青灰色シルトのブロック堆積、下層が粘性の強い黒色粘土。出土遺物（第39図）179は古墳時代前期の高坏。180は甕。187はヒノキ科の板状部品で、貫孔を持ち端部は杭状に加工。又首か。

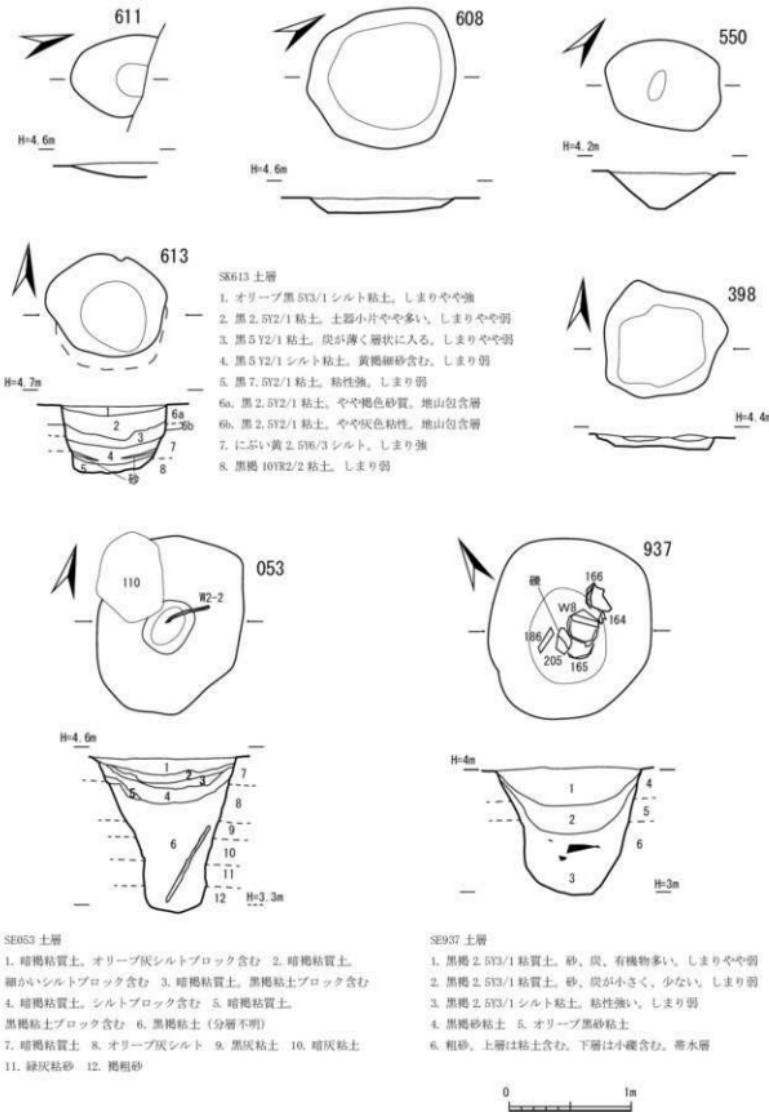
SK334 (第38図) G4区。長さ205cm、幅158cm、深さ40cmを測る。出土遺物（第41図）土器は古墳時代前期土器を含む。195は花崗岩の台石で、半分に割られている。

SK175 (第38図、図版15) H4区。落ち込みとして検出し (SX175)、下面を土坑状に再検出した (SK451)。

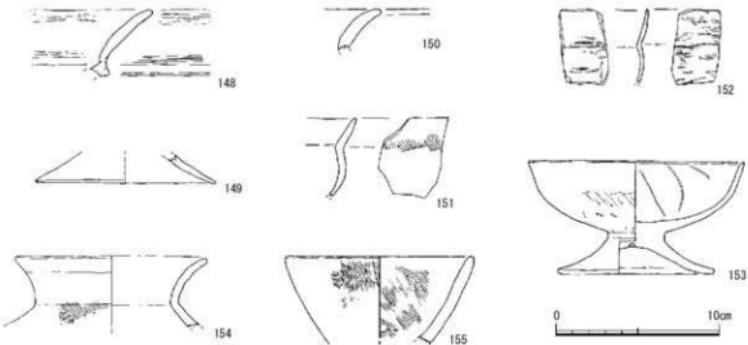


142～145 SP110 146 SP182 147 SP198

第33図 SP110・182・198出土木器実測図 (145は1/6、他は1/4)



第34図 SK398・550・608・611・613、SE053・937 実測図 (1/40)



第35図 SK398・611・613、SE053出土土器実測図 (1/3)

長さ270cm、幅190cm、深さ73cmを測る。埋土は砂質粘土。出土遺物(第39・41図)181は古墳時代前期の高坏。182は小型壺で、外面下半にはスヌが多量に付着し、内底面には粒状炭化物が残る。183は二重口縁壺。194は軽石の小礫で、明らかな加工は見られない。浮子か。他にサカキの棒材(W103・104・106)、シイ属(ツブライジ型)の棒材(W105)、クスノキの板材(W139)が出土している。

4. 窪穴建物 (SC)

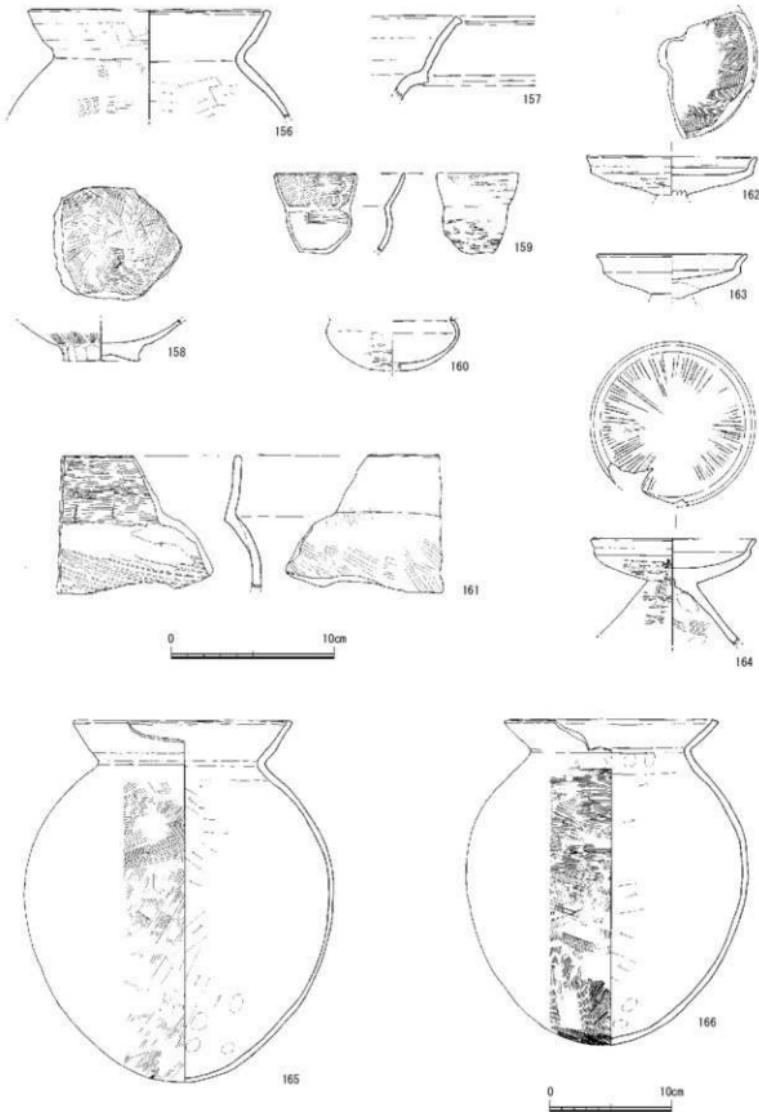
窪穴建物を平面・断面で明確に把握することはできなかった。そのため、焼土・炭・灰の範囲(地床炉)、遺物、大型礫などの位置を、窪穴建物の構成要素として記録した。

SC1472 (第43図) B2区。平面で直線的な埋土の違いが確認され、炭化物の堆積があった。

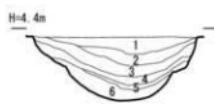
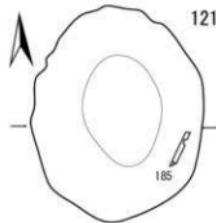
SC1473 (第43図、図版16) D2区。炭化物堆積が3か所、長さ30cmほどの礫が3個検出された。高さを見ると、各堆積間に10cmほどの違いがあるため、堆積時期が異なると考えられる。出土遺物(第54図) 260は閃緑岩?の磨製石斧で、刃部は再生され、端部が摩滅する。礫は花崗岩で、平坦面を持ち、台石として利用されていたと考えられる。

SC248 (第44図、図版17) E1区。直線的な平面形を確認したが、壁や床は明確には判別できなかった。土器がまとまって出土した。出土遺物(第46図) 213は布留式甕。胎土に雲母・角閃石多い。214は土師器の坏。215は弥生土器の壺で、口縁部を折り曲げて平坦口縁を作る。城ノ越式。216は器台。217は高坏で、全体に器壁が薄く、ハケメ後、外面はナデ消している。城ノ越式。

SC614 (第44図、図版16・17) E3区。第2面で方形の平面形を確認したが、壁や床は明確には認識できず、焼土面や炭・灰の広がり、まとまった遺物の出土があった。土層断面からの判断も試みたが、第2面の堆積層と遺構の堆積土がともに黒褐色土で、掘り込みや埋土の違いは判別できなかった。南西角では並行する溝状の平面形を認識したが、埋土は区別できず、延長も追えなかった(図版16-5)。焼土面や炭の堆積レベルに差があり、遺構の切り合いが想定される。灰土を洗浄したところ、20粒ほどの炭化米ほか、被熱したサメ類歯、魚類肋骨片、コムギ、ツブライジ子葉が出土した(第10・12表)。出土遺物(第46・48・200・202・211図) 土器・石器・銅鐵・玉・不明土製品が出土した。206は布留式甕。207は小型甕。208は小型短頸壺で、内面のユビナデは粗く、粘土帶接合痕を残している。209は小型丸底鉢で、口縁は短く外傾する。古相。胎土は精良で赤色粒・雲母多い。210は高坏で、胸部から口縁部

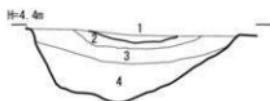
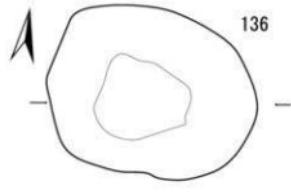


第36図 SE937出土土器実測図（165・166は1/4、他は1/3）



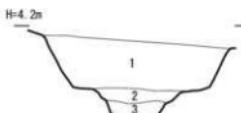
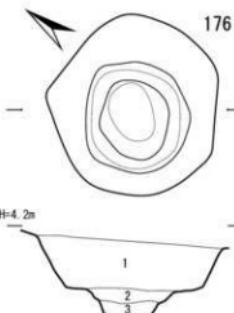
SK121 土層

- 1 ~ 6. すべて黒色粘土
1. 粗砂ブロック少い
2. 粗砂ブロック多い
3. 粗砂ブロック含まない
4. 灰色味強い
5. 有機物屑
6. 薄い。オリーブ灰シルト
ブロック含む



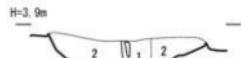
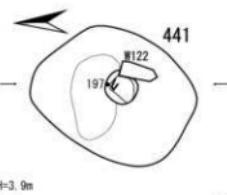
SK136 土層

- 1 ~ 4. すべて黒灰色粘土
1. 約 1cm 塵土ブロック含む。下層に炭堆積
2. 炭含む 3. 層状に中砂を含む 4. 中砂含まない



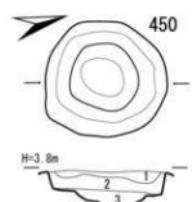
SK176 土層

1. 暗褐色粘砂 2. 暗褐色粘砂。粗砂を多く含む
3. 暗褐色砂質土。苔水層



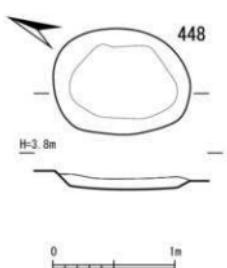
SK441 土層

1. ぶく暗褐色粘質土。木片含む。柱痕跡
2. 暗褐色粘質土。粗砂を層状に含む
3. 灰黄色粗砂

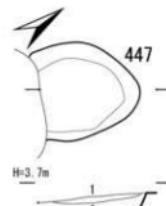


SK450 土層

1. 暗褐色粘砂
2. 灰色砂質土。暗褐色土含む
3. 灰色砂質土。暗褐色土ブロック多い

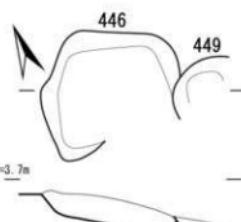


0 1m

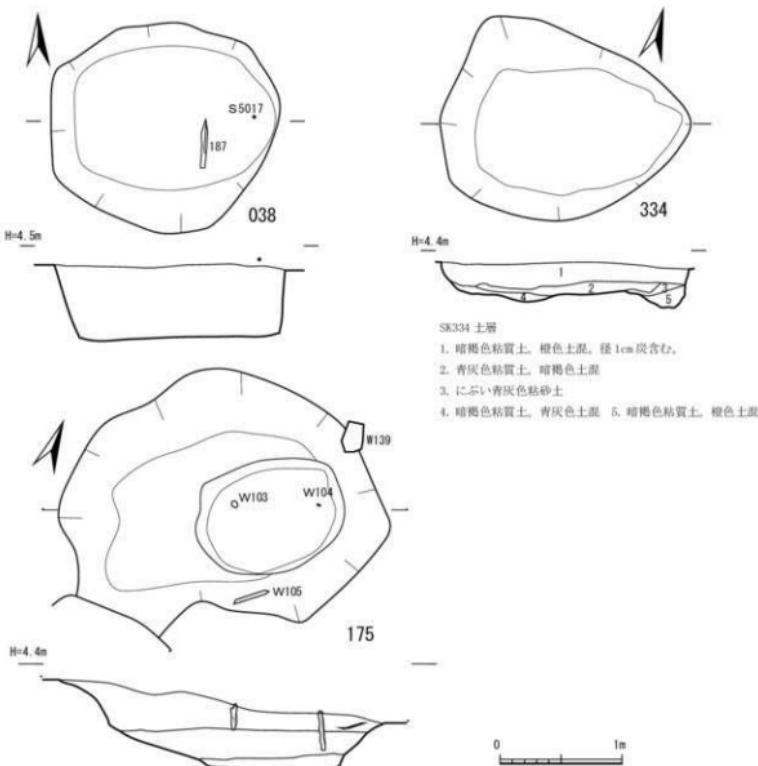


SK447 土層

1. 暗褐色粘質土
2. 暗褐色土混じりの粗砂



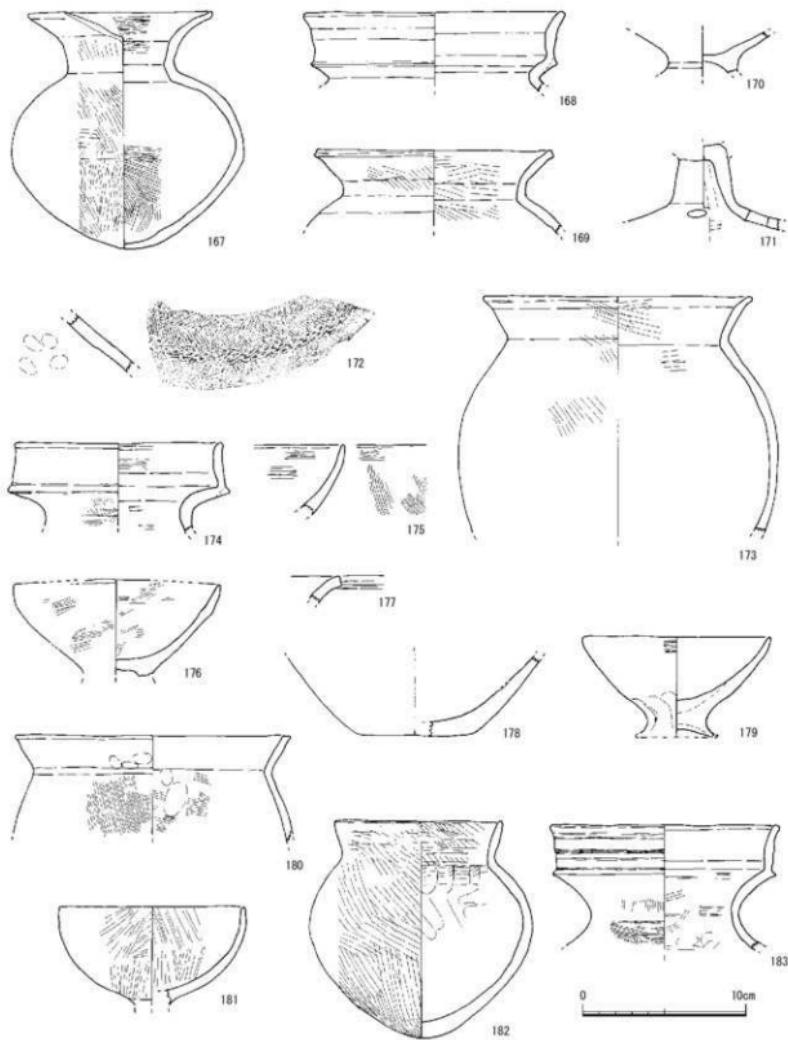
第37図 SK121・136・176・441・446・447・448・449・450実測図 (1/40)



第38図 SK038・175・334 実測図 (1/40)

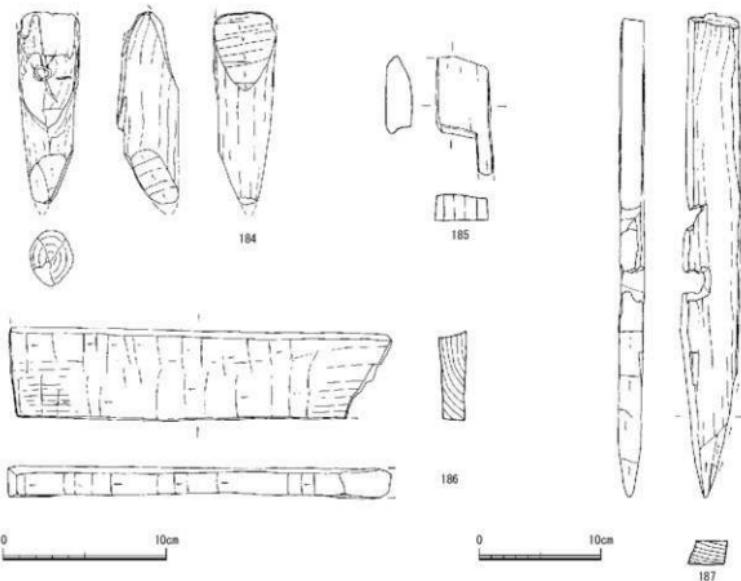
は屈曲せず、口縁部はほとんど外反しない。211は高壺で、径 8 mm の穿孔がみられる。212は小型器台で内外面に炭素が付着した痕跡がある。229は玄武岩の小判形の加工品。扁平片刃石斧の未成品か。230は安山岩の刃器で、短辺は素材面で調整がなく、左辺には片面の調整剝離、右辺は片面の微細剝離が見られる。231は硬質砂岩の叩石。1373は柳葉形銅鏡（図版16-6、第V章第3節）。1382は蛇紋岩？の玉。自然の極小礫に孔を穿つ。1388は碧玉の管玉。1544は器形不明の土製品で、底面と思われる平坦面と、側面と思われる緩やかな曲面から、平底方形としている。外面に対して内面の器面剥落が著しい。胎土・焼成は弥生土器に似る（図版41-13）。

SC050・1474 (第45図、図版16) F2・3区。直線的、方形の平面形を検出した。掘り下げるに焼土や径 30～60 cm の炭集中範囲が確認できる。出土遺物（第46・47・48図） 218は小型壺で、口縁部は短く外傾する。古相。219は高壺。精良胎土。220は壺。221は小型器台。222は弥生土器の甕。須玖 I式。223・224・225は布留式甕。223は肩に波状文が施される。沈線は幅 3～3.5 mm と広く内部が条線状になつておらず、ハケメ工具を使用している。225は、口縁端部の粘土紐が剥落している。226は中型の鉢。227



167・168 SK121 169～173 SK136 174 SK176 175 SK441 176 SK450
177 SK447 178 SK447+449 179・180 SK038 181～183 SK175

第39図 SK038・121・136・175・176・441・447・449・450出土土器実測図 (1/3)

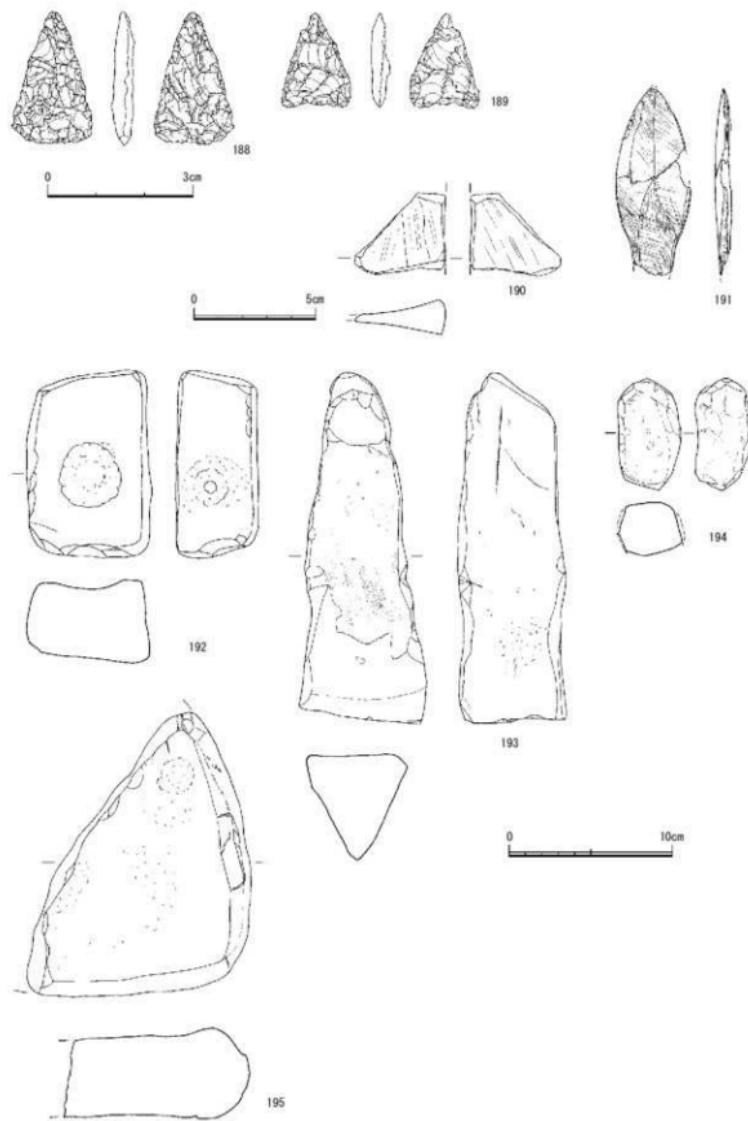


第40図 SK038・121、SE053・937出土木器実測図（187は1/4、他は1/3）

は丸底壺。228はミニチュアの壺。232はホルンフェルス（岩石No.7類似）の削器で、横長剥片の2長辺を剥離・研磨で刃潰しを行い、鋭利な短辺に刃こぼれが認められる。233は層灰岩の柱状片刃石斧で、研磨で丁寧に成形され、刃端部は剥離・摩滅している。234は層灰岩（岩石No.9：緑泥石アクチノ閃石ホルンフェルス類似）の扁平片刃石斧の未完成品。235は頁岩質ホルンフェルスの砥石で、下側短辺の両面に擦り切り痕があり、そこで折断されている。裏面には深い線状の研ぎ痕が残る。236は結晶片岩の紡錘車。破面を再加工している。石錐への転用か。

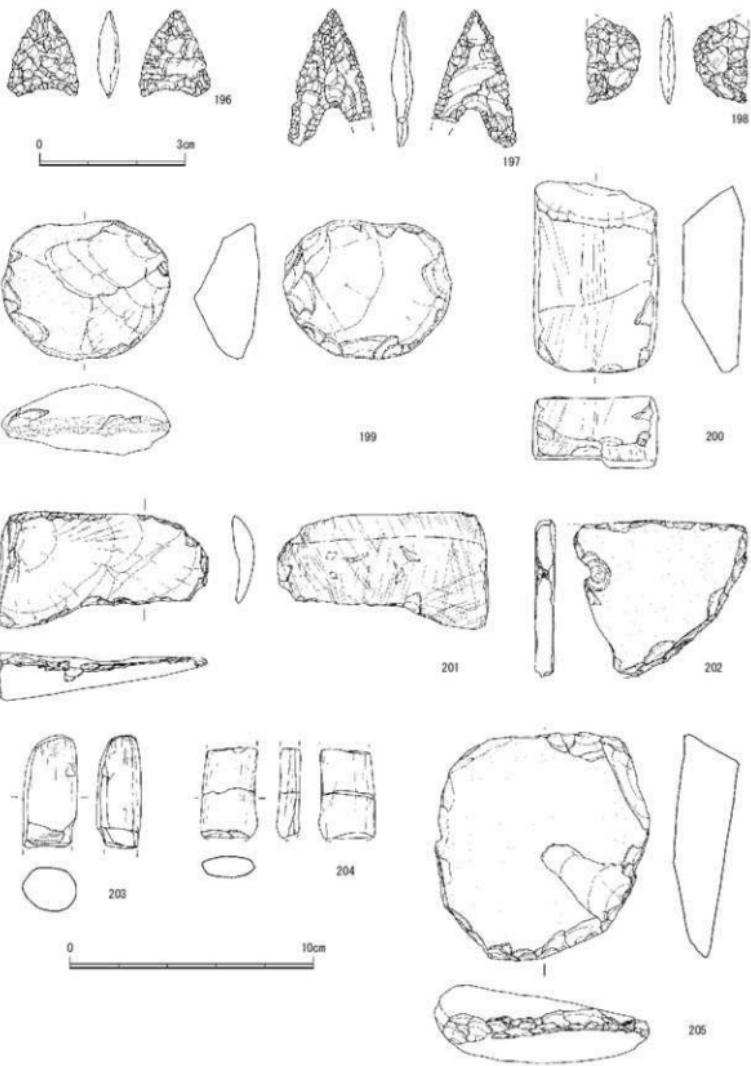
SC1475（第49図）G・F4区。直線的な平面形と、焼土を確認した。出土遺物の高さを見ると、古墳時代前期土器は焼土より上層で、弥生土器は下層から出土している。弥生土器が集中した範囲の下層（第3面）は、SK225の東側で比較的構造がない範囲となっている（第160図）。出土遺物（第51・54図）237・238・239・242は須玖I式の甕。240は城ノ越式の壺。241は須玖I式の壺。243は土師器の小型丸底壺。頭が縮まらず、口縁部は短く弱く外反する。口縁部は強いヨコナデで仕上げられ、頭部付け根に稜が付く。古墳時代前期でも新相が。244・245は土師器の高壺。257はホルンフェルスの石劍で、土器群北（A）出土の破片が接合した。259はホルンフェルス（岩石No.5類似）の大型石包丁。表裏面がすべて剥落していて、成形痕・使用痕が不明である。

SC054（第49図）F4区。直線的、方形の平面と焼土、炭化物を確認した。出土遺物は、甕の形態・胎土・調整が他と異なる。出土遺物（第52・53図）246・247は同型の甕で、口縁端部が直立する。248は甕で、胴部外面に平行タキ痕を残し、口縁端部の細粘土紐の貼り付けと摘み上げが明瞭である。249は甕。250は小型丸底壺。251は小型丸底壺。252は高壺。253は飯蛸壺で、口縁部直下に径0.9cm



188 SP1367 189 SP151 190 SP935
 191 SP170 192 SP672 193 SP476
 194 SK175 195 SK334

第41図 SP・SK出土石器実測図 (188・189は1/1、190・191は1/2、他は1/3)



196・199 SK136 197 SK441 198 SK611
200 SK176 201・202 SK447 203・204 SE053 205 SE937
第42図 SK136・176・441・447・611、SE053・937出土石器実測図（196～198は1/1、他は1/2）

の縦通し孔を穿つ。本例は、平尾和久氏の整理によると、I a類で I 期（弥生時代後期）の類例に近い（平尾2003「福岡県における飯蛸壹形土器の受容と展開」『古文化談叢』50上）。254は甕。255は甌で、外側に平行タタキ痕を残す。内面はヘラナデで仕上げるが、上部に当て具痕がわずかに残る。胴部に「×」のヘラ記号を残す。256は高坏。250・254・256船形に赤色粒が多い。

SC1476（第50図） H2区。直線的、方形の平面形と焼土、炭化物、灰、自然礫を確認した。上層の第1面下層71区（12区）では玉類の集中出土がある。出土遺物（第54・210図） 258は粗粒砂岩の石製品で、大型の石錐にも似るが、体部に平坦な研磨面が形成されており、砥石と考えられる。1535は筒状の土製品で、器台にも似るが、成形や調整、焼成が一般的な器台とは異なる（図版41-9）。下端部の平面形は隅丸三角形状の円形となる。武末純一先生（福岡大学）に実見して頂いたところ、筒を製作する際の軸の痕跡（軸にらせん状に巻き付けた植物質の圧痕）も内面にわずかに残っており、鍛冶に使用する送風管の可能性が高いという所見を頂いた。

5. 溝（SD）

SD033（第55図） G4区。東西方向の直線的な小溝で、長さ316cm、幅35cm、深さ10cmを測る。覆土は黄褐色砂。出土遺物は小片で、古墳時代前期の土器を含む。

SD032（第55図、図版17） 直線的な水路で、幅40～100cm、深さ25cmを測る。南北方向に微高地の縁に沿って構築され、途中で南東に曲がる。覆土は粗砂と細砂。土器群の上に構築される。北側の13次調査区に延びるが、13次調査区では土器溜まり上での溝は検出されていない。出土遺物（第56・57図） 261・262は布留式甕。262は板状工具による横位の刺突を二段で施す。263は坏、264は高坏、266は珪化木の砥石で、表面に明確な砥面が形成される。裏面にも平滑面が形成されるが、砥面かどうかは判然としない。267は花崗岩の円礫で、端部にわずかな潰れが見られ、敲石と思われる。268は凝灰岩の角礫で、左側面に砥面がみられる。他に黒曜石片25点、63gが出土した。

SD055（第55図、図版17） 北方向に直線的に走る溝で、残りの良い南側で幅50cm、深さ24cmを測る。覆土は黄灰白色砂で、土器群と同じ高さで検出した。微高地縁辺をめぐるようで、北側はSD032につながる可能性もある。出土遺物は、古墳時代前期の土器片が少量出土した。

SD663（第55図、図版17） J3区。南北方向の溝で、幅39～53cm、深さ28cmを測る。SD606に切られる。出土遺物（第56図） 265は布留式甕。

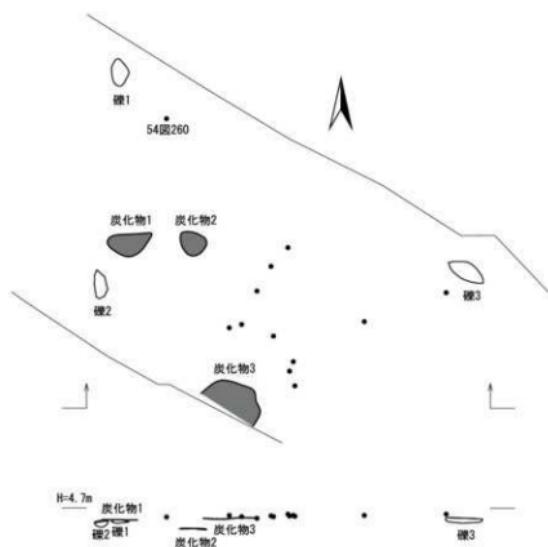
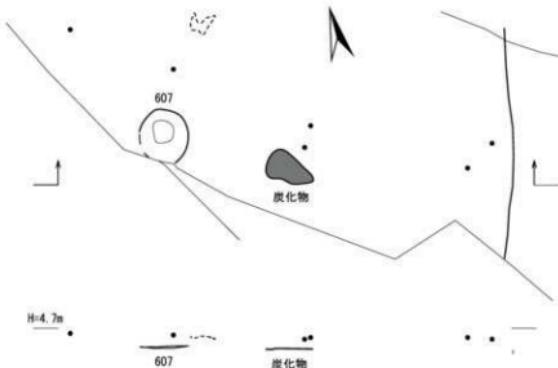
SD606（第55図、図版17） 北北西向きの流路で、幅76～81cm、深さ23cmを測る。覆土は白色粗砂。下層に土器群SX673・674が形成される。遺物は出土していない。

6. 第2面下層（遺物包含層）

第2面の東西断面図は第58図のようになる。以下では、第2面下層出土遺物（微高地部・河川部）、大型土坑SX545ほか、その上に堆積した土器群A～D、弥生時代遺物包含層との重複が大きいSD604、弥生時代を中心としつつ古墳時代遺物を含む遺物包含層SX676・678・777の順で報告する。

<微高地部>（第59～70・200～211図）

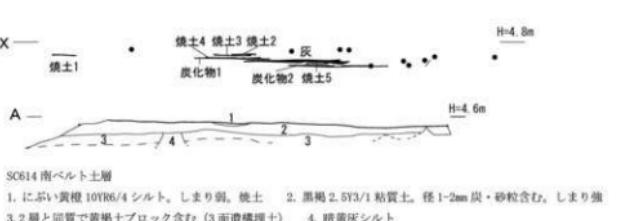
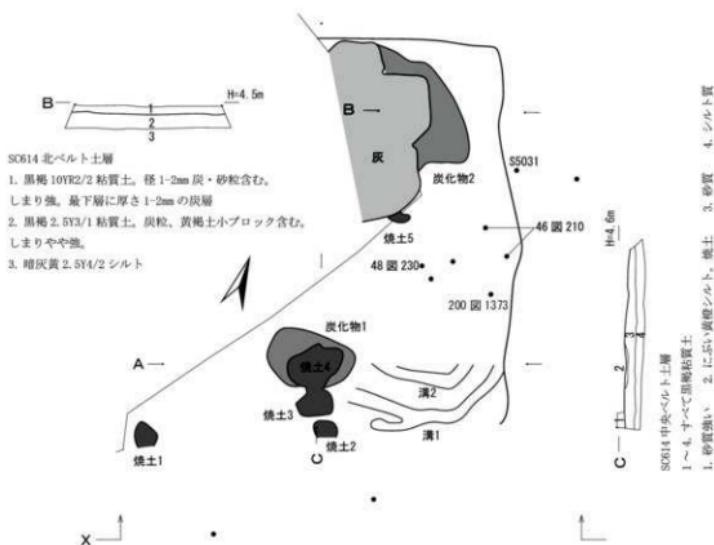
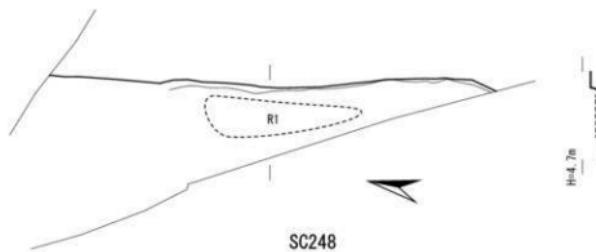
49(A～D-1～3) 区 269はミニチュアの支脚。295は玄武岩の刃器で、長辺部に潰れがみられる。301は砂質泥岩（岩石No.6類似）の磨製石斧片転用石器で、作り出した刃部は刃先角度が小さく、部分的に刃こぼれが認められる。310は安山岩の両面調整石器で、両側縁は潰れ・磨滅で鈍らせてある。打製石斧に形態・調整が似るが、やや整いすぎているところもあり、石剣や石戈の未成品の可能性も考えられる。323は硬質砂岩の球形石器で、複数の敲打面が全面に形成され、多面体をなす。構成面のうち1面だけ平坦面が広く敲打痕がみられない面がある。328は細粒砂岩の小型砥石で、短軸方向の擦痕で平坦面が形成される。側面は面取りされて方形に成形されるというよりは、隅丸の小板状を呈しており、



SC1473

0 1m

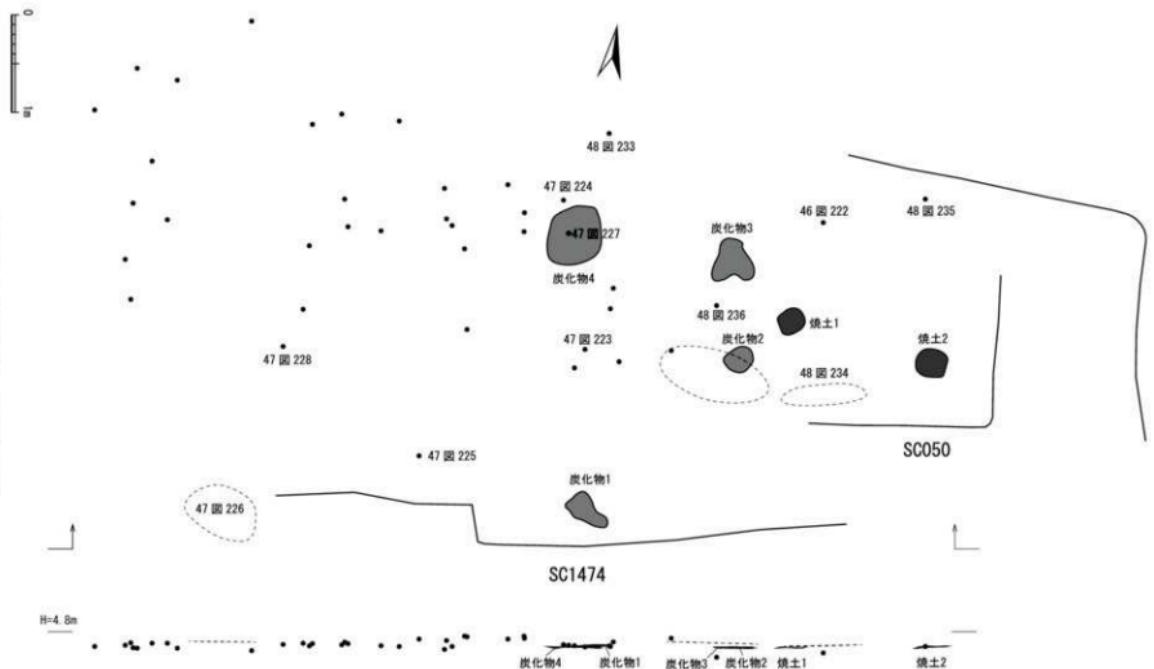
第43図 SC1472・1473実測図 (1/50)



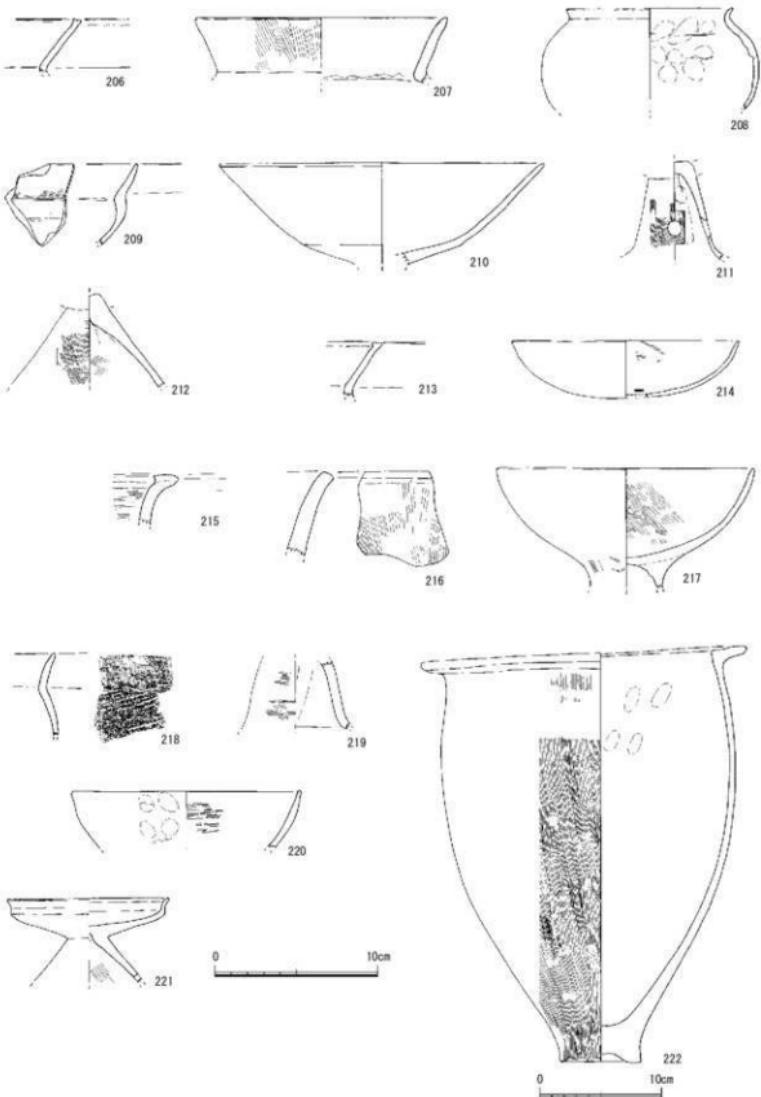
SC614



第44図 SC248・614実測図 (1/50)

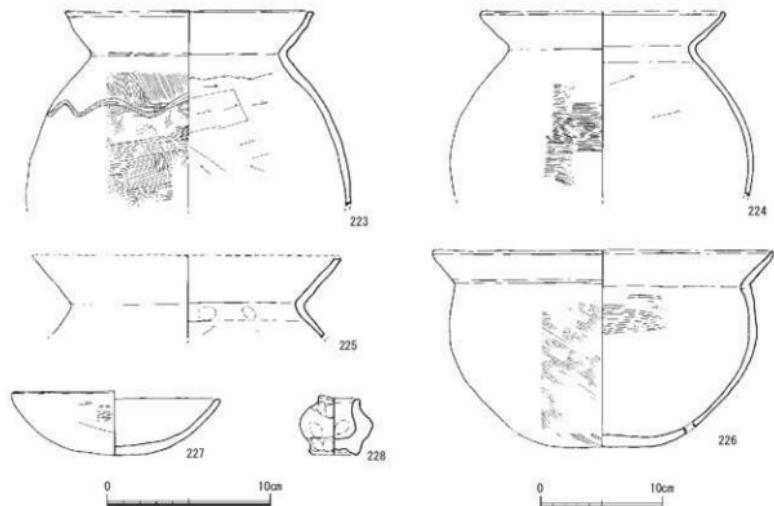


第45図 SC050・1474実測図(1/50)



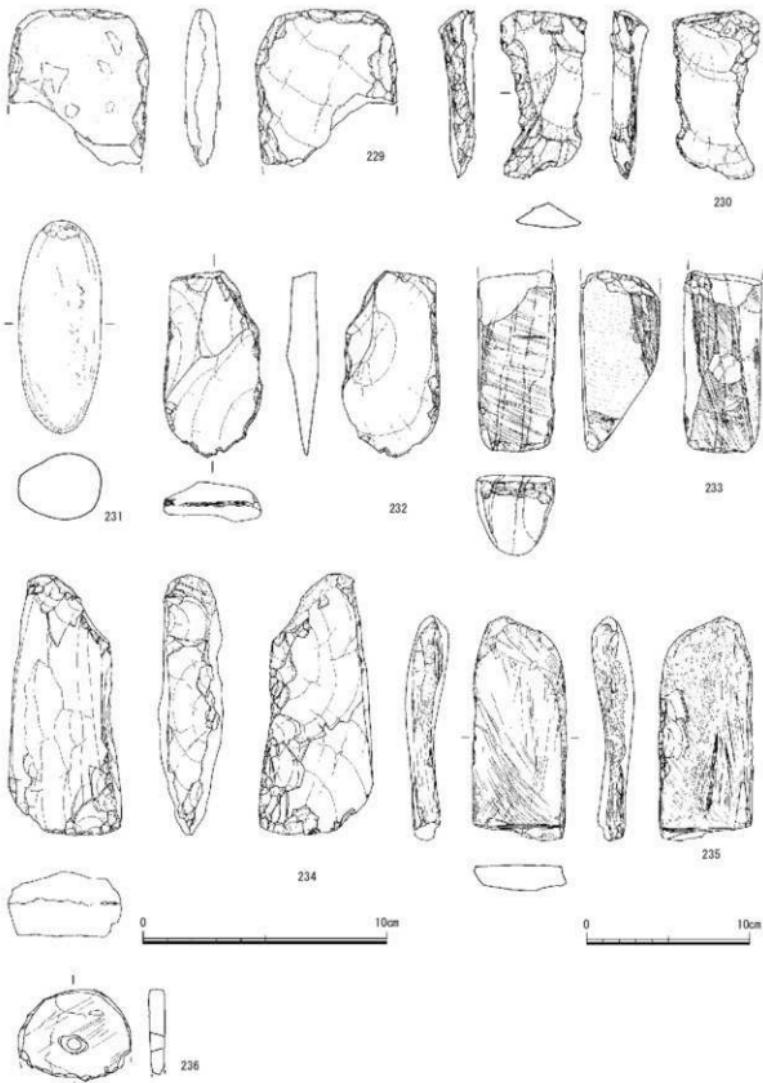
206~212 SC614 213~217 SC248 218~222 SC050

第46図 SC050・248・614出土土器実測図 (222は1/4、他は1/3)

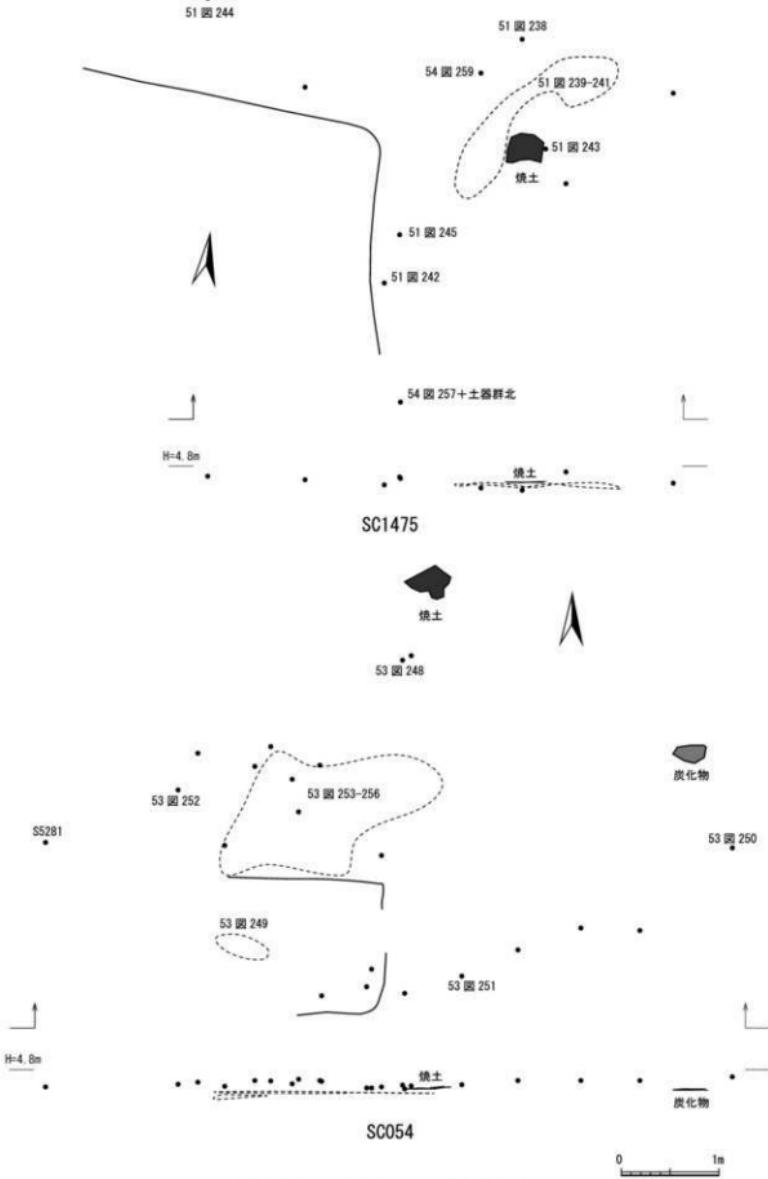


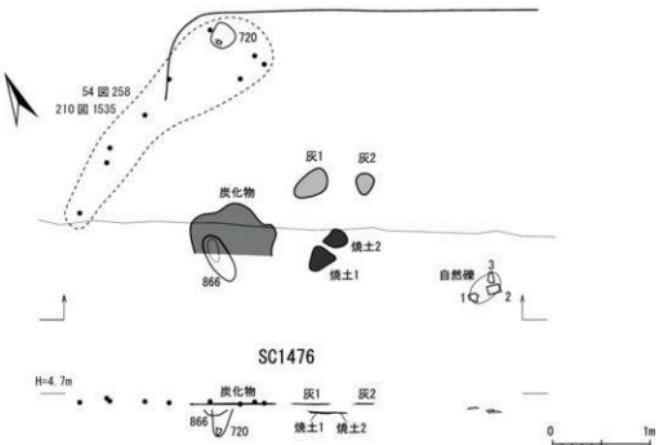
第47図 SC1474出土土器実測図 (226は1/4、他は1/3)

縁辺は砥ぎによって丸みを帯びている。表面が黒ずんで荒れており、被熱していると考えられる(図版37-17)。329は軟質細粒砂岩の小型砥石で、表裏面に研磨面、3側面が研磨で面取り成形される。表裏面の研磨面は概ね長軸方向の擦痕で、わずかに凹む。339は細粒砂岩の砥石で、表裏面に断面U字状の擦り切り溝が形成され、そこから打削されている。表面の砥面は中央がわずかに凹み、斜位の一方向の擦痕が形成される。340は緻密な細粒砂岩の砥石で、表面と右面は長軸方向の擦痕・研磨で弱く凹む。裏面は素材の加工面を粗く研磨して平坦化している。下面は素材面であるが、多方向に深い線状痕が残る。345は花崗閃綠岩の磨石。349は花崗岩の台石で、弱く黒色化・被熱する。支脚石転用か。1383はガラス小玉。1385は碧玉の管玉。1424は土製紡錘車で、側面に沈線をめぐらす。1481・1482・1483・1485・1486は投弾。1481は中央に径7mmの孔を深さ7mm穿つ。1508は大型管状土錐。1524は不明土製品。胎土は比較的緻密で、破面が風化している。1540は不明土製品。口縁部が肥厚する容器類として復元している。65(D5)区 325bは角閃石安山岩の紡錘車。部分的に黒褐色化しており、被熱している。50(E1)区 1442は土製円盤で、側面は無加工。弥生土器片利用。52(E3)区 284・285は黒曜石の打製石鐵。284は表裏面を研磨成形している。300は玄武岩の搔器で、大型石斧破片の転用。314は頁岩のノミ型石斧で、亜円錐の素材形状を生かしつつ全体を研磨成形し、片刃に仕上げる。320は珪化木の石錐で、全体に黒褐色付着物がみられる。330は細粒砂岩の小型砥石で、5面に砥面が形成され、砥面の中央はわずかに凹む。石材は軟質である。332は細粒砂岩の小型砥石で、表面は平坦平滑、側面は面取り成形、裏面は部分的な研磨がみられる。石材はやや軟質で、雲母や石英のような光沢のある微細な鉱物を特徴的に含む。346は石英質砂岩の小型棒状石器で、表面が磨耗面と敲打による浅い凹み。その他の面は素材面もしくは敲打成形による平坦面である。1443は小型土製円盤で、外ハケメの弥生土器・甕の転用。側面研磨。53(E4)区 270はミニチュアの蓋。据の一端を打ち欠く。291は黒曜石の打製石鐵。299は安山岩の剥片石器で、刃部と考えられる1辺はやや凹刃で、刃先角が55度。



229～231 SC614 232・233 SC1474 234～236 SC050
第48図 SC050・614・1474出土石器実測図 (235は1/3、他は1/2)





第50図 SC1476実測図(S=1/50)

刃端部が潰れ・磨滅する。307は頁岩の有孔石製品で、2孔と背部があることから石包丁の再加工品と思われる。破損した穿孔部を再加工で面取りしている。312は層灰岩の柱状石器で、刀部を作り出していない段階の柱状石斧の未成品と考えられる。313は層灰岩のノミ形石斧で、左側が節理面で破断しており、未成品の破損品と考えられる。315は層灰岩のノミ型石斧で、刃端部の幅は7mmの小型品である。331はシルト質砂岩の小型砥石で、砥面は3面、表面は中央に浅い溝状の研ぎ痕が残る。他の2面は側面に研面が形成されるが、やや凸となる。343は玄武岩の円形礫石器で、端部の潰れから、蔽石利用が想定される。344はホルンフェルスの圓石で、背面には剥離調整を残す。1394は滑石の刻目勾玉。1444は小型土製円盤。1487は紡錘形の投弾。下端先端に刻み状の凹みがあるが、どういう由来のものかは判断できない。

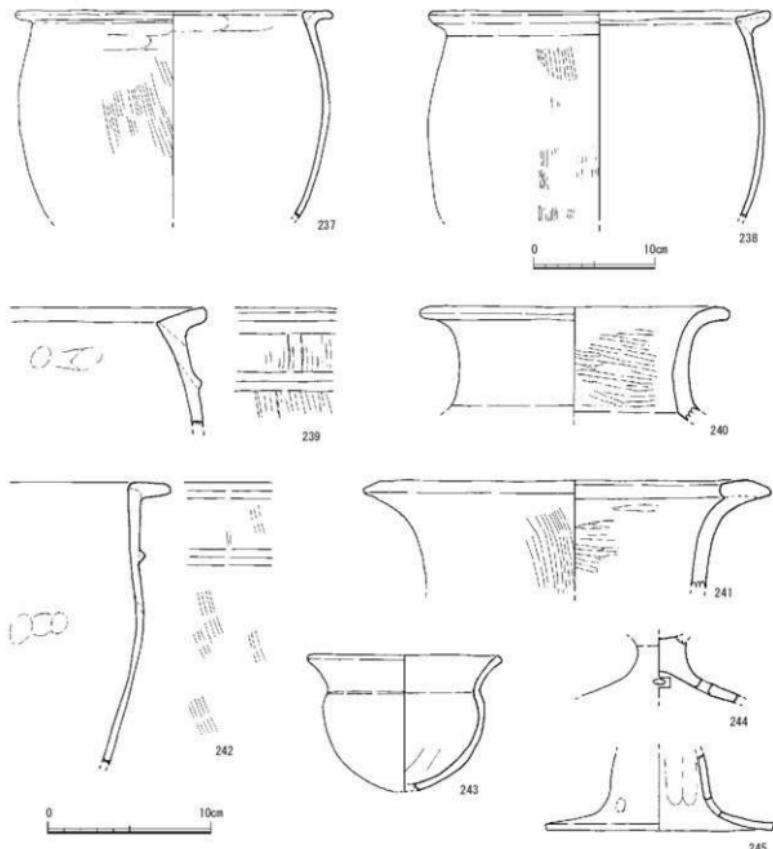
54 (E5) 区 294は黒曜石の打製石鎌。327は砂岩の小型砥石で、短い方柱状を呈す。下端面を除く5面が研磨面になっている。部分的に黒色化しており、被熱している。石材は軟質の砂岩で、結晶鉱物を特徴的に含む。321は珪化木の石錐で、使用部の径は1cmほどである。348は安山岩の磨石で、表裏面は平滑、側面は敲打で平坦に仕上げられ、全体に円筒形を呈するよく使い込まれたものである。しかし、背面に数回の剥離で打ち欠いた痕跡がある。1488は紡錘形の投弾。

1 (F2) 区 278は黒曜石の打製石鎌。316は粗粒砂岩の石錐。317はやや粗粒の砂岩の磨製石製品で、扁平な錐状をなす。使用痕は不明。石材や形状は石錐に似る。SC1476の258(第54図)も同型で、砥石の可能性もある。334は頁岩の小型砥石で、亜円錐の平坦面に線状の研ぎ痕が認められる。350は礫岩の自然角錐で、接地面と思われる平坦面を除いて黒色化・被熱している。支脚石。1445は小型の粘土塊で、表面は比較的滑らかになっている。1489は紡錘形の投弾。1380はメノウ系の玉。他に黒曜石片677点、1861.9g(第3面は黒曜石片72点、244.8g)が出土している。

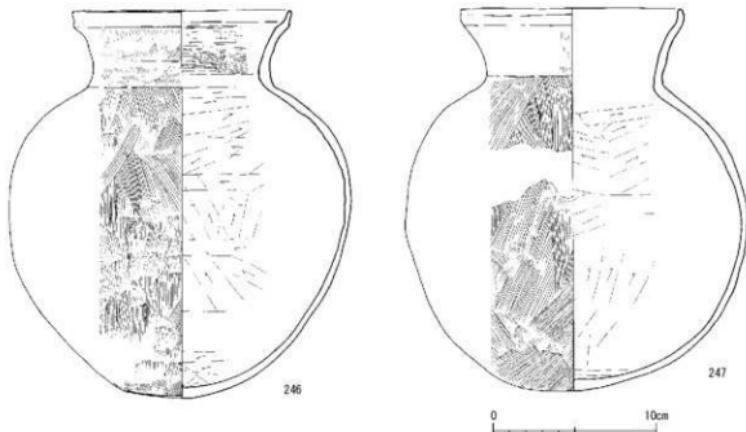
3 (F3) 区 272は精製土師器の器台で、脚中央に焼成前穿孔を2ヶ所施す。280・281・282・283は黒曜石の打製石鎌。298は安山岩の刃器で、刃部に片面の微細剥離が認められる。306は赤灰色粘板岩(岩石No. 24類似)の石包丁。325aは結晶片岩の紡錘車。1377は小板状鉄片。鉄素材か。1386は碧玉の管玉。1407は湾曲した棒状の土製品。勾玉か。他に黒曜石片353点、739.6gが出土している。

7 (F4) 区 288・289は黒曜石の打製石鎌。

290は安山岩の打製石鐵。324は結晶片岩の紡錘車。他に黒曜石片486点、1036.2g（第3面は黒曜石51点、154.1g）が出土している。11(F5)区 293は黒曜石の打製石鐵。305はホルンフェルスの石包丁。338は緻密な細粒砂岩の板状石製品で、表裏面に平滑面が形成されるが、肌理が細かすぎて擦痕が観察できない。左辺は直線的に破断しており、擦切法で折り取られている。1374は銅鑿で、上下端に刃部、胴部中央に挟りがある（第V章第3節）。1446は小型土製円盤で、全体に丸みのある形状をしており、土器片転用ではない。1513は不明土製品で、胎土中に長さ1.3cmの黒曜石小片を含む。破面や表面にはイネ科植物葉状の痕跡がみられる。1529は不明土製品。胎土に赤色粒を特徴的に含む。18(F7)区 1499は紡錘形の土製品で、投弾に類似するが、細身でやや異質である。76(G1)区 277は緑泥石ホルンフェルスの磨製石鐵。2 (G2)区 279は黒曜石の打製石鐵。297は玄武岩の二次加工剥片で、刃部は磨滅して丸みを帯びる。表面に部分的な研磨痕が残る。347は中粒砂岩の石器で、砥石軸



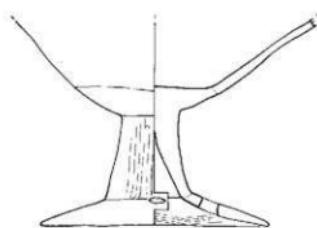
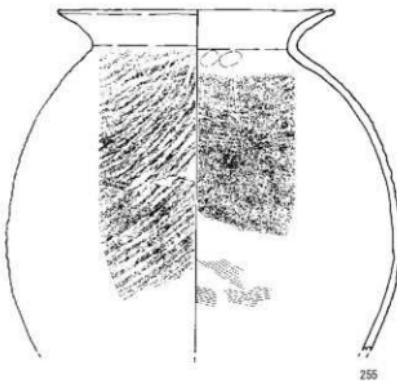
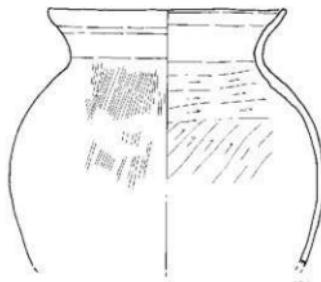
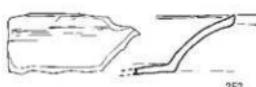
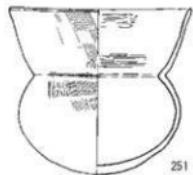
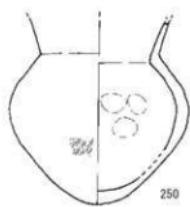
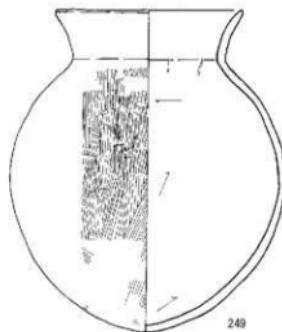
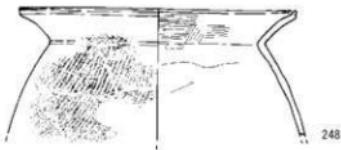
第51図 SC1475出土土器実測図（238は1/4、他は1/3）



第52図 SC054出土土器実測図1 (1/3)

用の凹石。1447は小型土製円盤。側面研磨。他に黒曜石片が436点、1076.7g（第3面は11点、36.1g）出土している。 4 (G3) 区 273は小型丸底鉢。287は安山岩の打製石鎌。302は結晶片岩の石錐で、4辺の中央に打ち欠きを施す。前面には敲打による凹みがみられ、凹石の転用の可能性もある。319は珪化木の小型石錐。322は玄武岩の蛤刃石斧刃部片で、刃端部は面的に潰れ、基部側の破断面は敲打で刃潰しされている。326は結晶片岩の円盤形石製品で粗い剥離で成形している。紡錘車の未成品か。342は頁岩の砥石で、表面には長軸方向の緩やかな凹凸と線状痕、裏面には深いものを含む複数の交差する線状痕、右面は砥面を形成し、左面は面取りのための研磨を施す。1448は小型土製円盤で、弥生土器片の転用。1493・1494は投弾。1401は滑石の玉未成品。他に黒曜石片436点、1047.7g出土している。 8 (G4) 区 292は安山岩の打製石鎌。304は頁岩の小型磨製石剣で、切先は破損後再研磨されている。335は砂岩の砥石で、全面に砥面が形成され、不定形な多面体を呈す。1372は結晶片岩の方形石製品で、扁平素材の縁辺を剥離で方形に成形している。紡錘車の未成品か。1393は滑石の中型扁平勾玉。1449は小型土製円盤。弥生土器片利用。1495は紡錘形の投弾。 70 (H2) 区 286は黒曜石の打製石鎌。309は頁岩質ホルンフェルスの石包丁。341は中粒砂岩の板状砥石で、表面は平滑、側縁に成形研磨面が形成される。表面は中央側にわずかに凹んでおり、互いに直交する線状痕が形成される。裏面は部分的に平滑面も形成されるがほとんど素材面である（図版38-1）。1421は小型土製紡錘車。1451は小型土製円盤で、弥生土器転用。表面に細かい擦痕がある。 5 (H3) 区 274は高坏の脚部。破面が整っており、円盤形として再加工された可能性がある。275は土師器高坏。径1cmの穿孔が4ヶ所施される。296はホルンフェルス（岩石No.7類似）の刃器で、磨製石斧の転用品である。剥離で長方形、摘み部を作り出し、摘み部の反対側の長辺が刃部と考えられ、縦方向の線状痕や潰れがみられ、全体に丸みを帯びて摩滅している。刃部以外の縁辺には刃潰しが施されている。303は砂岩の石錐で、紐掛け部を4カ所作り出す。308はホルンフェルスの小型扁平石器で、側縁の刃潰し、前後面の平滑化を行っている方を基部、二次加工で鋭利な縁辺を作り出している下端を刃部とする削器と考えられる。他に黒曜石片208点、480.8gが出土している。

<河川部> (第59~70・200~211図)



0 10cm

第53図 SC054出土土器実測図2 (1/3)

61(C8) 区 362はホルンフェルス(岩石No.5類似)の円盤形石製品で、紡錘車の未成品と思われるが、厚さが4mmと薄い。 64(D6)

区 271は瘦で、肩部に平行沈線間連点文を施す。 SX676の827(第138図)と同型式。1517は不明土製品で、円柱状の形状を想定できる。支脚か(図版41-2)。

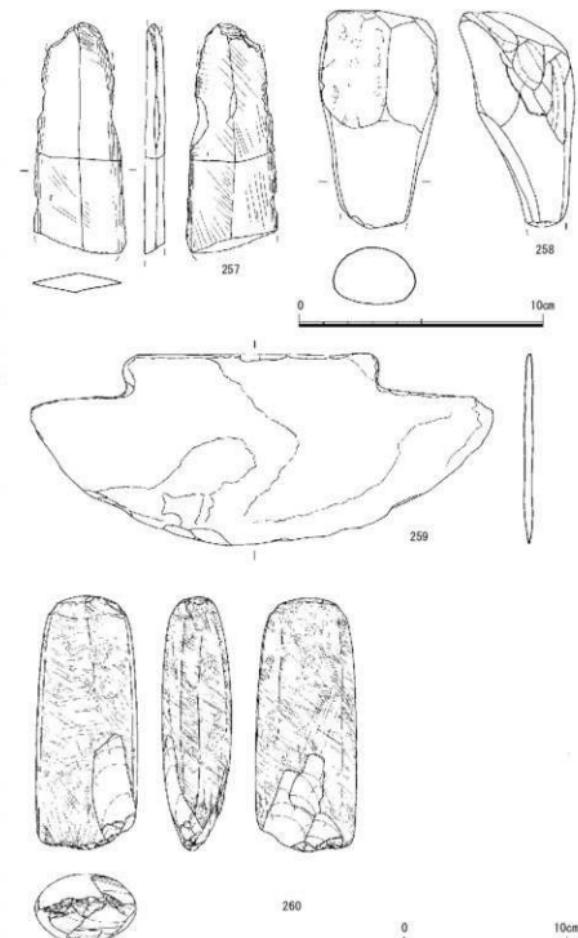
59(D9) 区 364は層灰岩の扁平片刀石斧未成品で、剥離成形後、研磨まで至っていない。 55(E6)

区 368は砂岩の砥石で、大小6面ほどの砥面が形成され、多面体をなす(図版38-2)。1545は不明土製品。

胎土に赤色粒を特徴的に含む。 57(E8) 区 357は砂岩の剥片石器で、薄身の

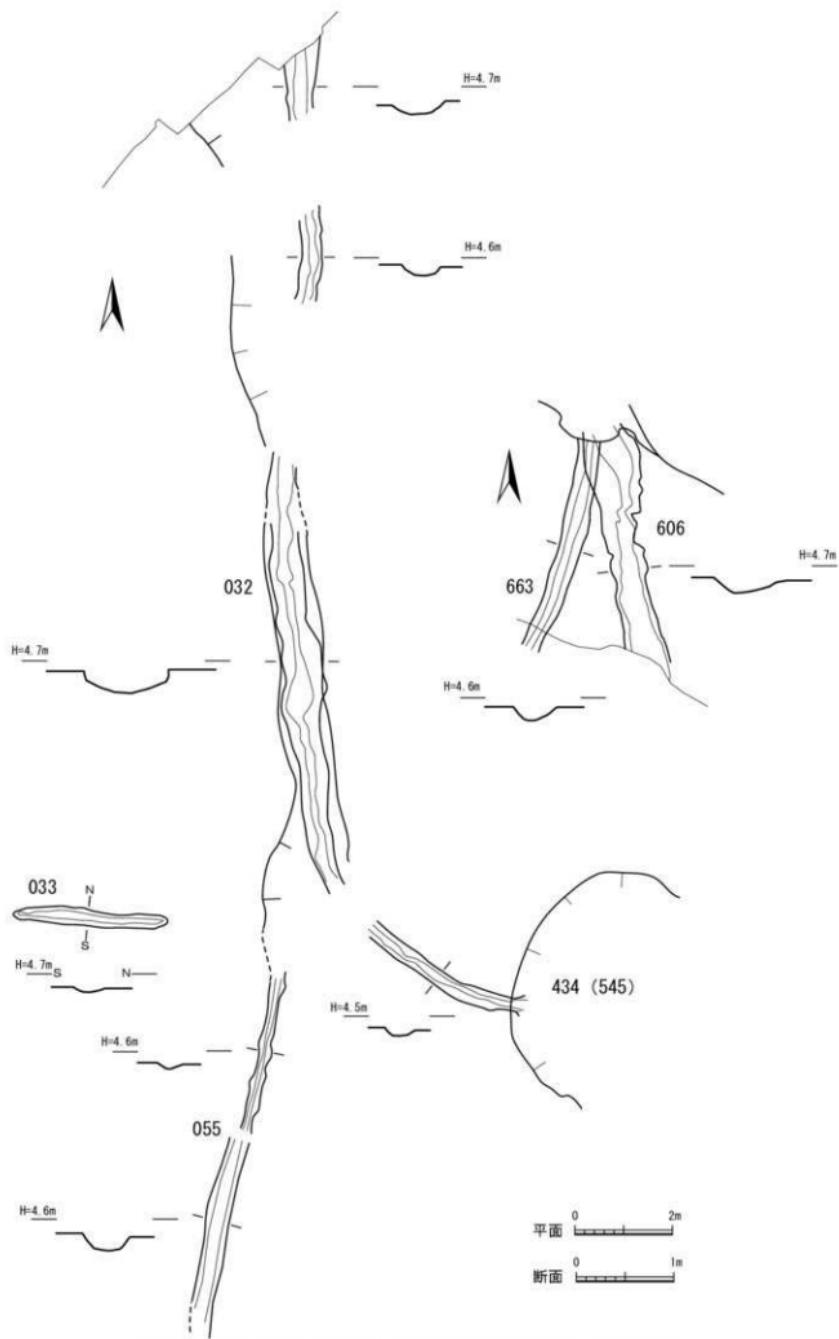
1辺を両面研磨で刃部成形し、端部は刃線に直交する動きで潰れている。插器と考えられる。370は砂岩の砥石で、表裏面の中央が研磨磨耗で凹む。表裏面の縁も浅く凹み、砥面を形成する部分がある。部分的に黒ずんでおり、被熱している。 58(E9) 区 367は砂岩の板状石製品で、表面と側面は研磨され、背面は素材面、他3面は破断面である。表面はわずかな凹凸がみられ、線状痕などは明確でない。石材はやや肌理の粗い硬質な砂岩である。1503は円錐形の小型土製品。ミニチュアの支脚か。

22(F8) 区 1491は滴形の投弾。被熱劣化している。 12(G5) 区 373は玄武岩の削器で、石斧破片の一端に刃潰しを施し、鋭利な一端をそのまま刃部とする。刃端部には両面に微細剥離がみられる。374は砂岩の二次加工剥片で、左・上の破断面に対して、右辺は二次調整、下辺は研磨による刃部作出が認められる。刃部とみられる二辺も使用痕

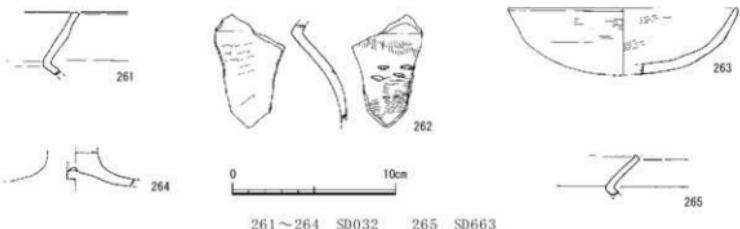


257・259 SC1475 258 SC1476 260 SC1473

第54図 SC1475・1476出土石器実測図 (257・258は1/2、他は1/3)



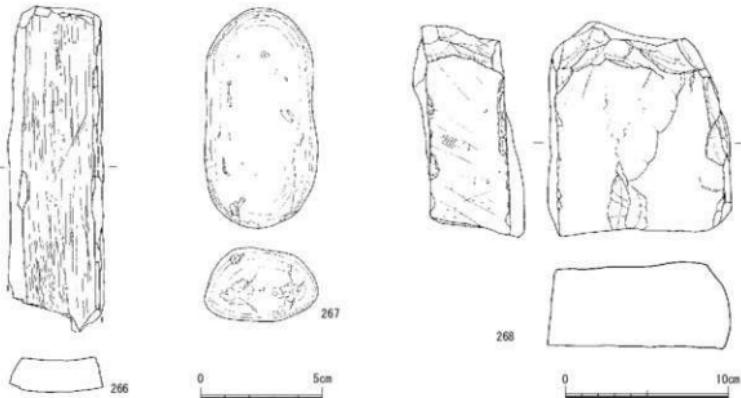
第55図 SD032・033・055・606・663実測図（平面1/100、断面1/50）



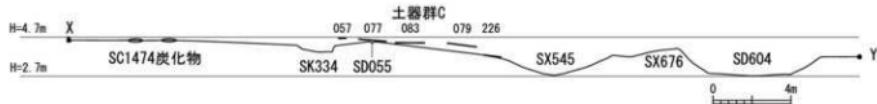
第56図 SD032・663出土土器実測図 (1/3)

は顕著でない。擦切具の可能性もあるが、刃部に対して平行な使用痕は認められない。375は玄武岩の刀器で、片面剥離の刃部を作り出しが、顕著な使用痕は認められない。380は珪化木の石錐で、作用部の直径は5~7mmである。383は細粒砂岩の板状製品で、表裏面に研磨面が形成され、平滑で鏡面状であり、線状痕・擦痕は明瞭でない。側面に研磨成形がみられ、縁が丸みを帯びている。1496は紡錘形の投弾。1509は土器の把手。胎土・調整・焼成・色調は弥生土器に似る。1511は不明粘土塊で、指で握ったような痕がみられる。1512に類似する。1542は不明土製品で、容器状になるのか、天地逆で脚状になるのか分からぬ。1543は不明土製品で、外面は土器の様相に似るが、内面は外面と異なり、直接被熱していない(剥落か)。容器状になるのか、天地逆で脚状になるのか分からぬ(図版41-12)。

15 (G6) 区 372は安山岩の石匙。摘み部から背部にかけて刃潰れがみられる。土器群B下から出土した。377は中粒砂岩の有溝石錐。 19 (G7) 区 351は黒曜石の打製石錐。356はホルンフェルスの石鎌で、穿孔が1ヶ所、穿孔途中が2ヶ所認められる。361は結晶片岩の加工石片で、石錐と考えられるが、石材と形状からは紡錘車未成品の可能性もある。366は層灰岩のノミ型石斧で、全体に粗い研磨でやや片刃に仕上げる。1497は紡錘形の投弾だが、わずかに重心が下がっている。二次的な被熱を受けて暗色化している。 77 (H1) 区 1450は小型土製円盤で、弥生土器片を側面研磨する。 9 (H4) 区 376は玄武岩の石斧刃部の再加工品で、下・左辺の二辺が面的に潰れている。381は細粒ホルンフェルスの小型棒状石製品で、ノミ形石斧の基部が考えられるが、表面の線状痕などを考慮すると、小型砥石の可



第57図 SD032出土土器実測図 (268は1/3、他は1/2)



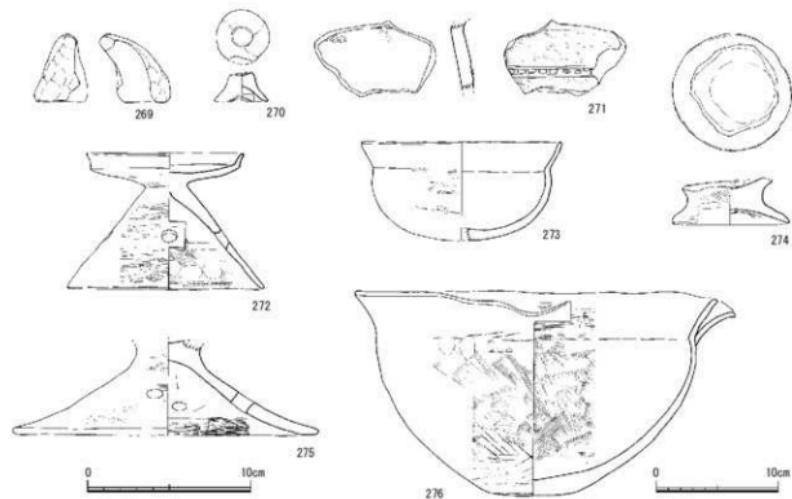
第58図 第2面断面図 (1/250)

能性もある。384はホルンフェルスの小型砥石で、表裏面に線状痕が形成される。385は細粒砂岩の砥石片で、表面に線状痕を伴う砥面が形成される。側面は研磨成形面と破断面があるが、破断面の形状が整っており、研磨成形の側面も丸みを帯びている。擦り切りで分割された可能性がある。388は玄武岩の大型石斧で、刃部の破断面および基端部を再加工し、敲石に転用している。1520は円柱状の土製品。支脚か(図版41-5)。
13 (H5) 区 (SX546) 382は砂岩の方柱状石器で、風化で表面の痕跡が失われているが、形態から小型砥石と考えられる。1527は不明土製品。天地逆でミニチュア甕の可能性もあるが、底部の作りや内面調整がミニチュア土器の甕らしくない。鐸形土製品とも異なる。
71 (I2) 区 1389は碧玉の管玉。
6 (I3) 区 276は大型の片口鉢。353・354は安山岩の打製石鐵。359は安山岩の刃器で、横長剥片末端の長辺部に両面微細剥離が形成される。365は層灰岩の小型扁平片刃石斧で、前面基部側に黒色付着物が残る。斧台に接しない前面部分にのみ付着することから着柄時の膠着材の痕と考えられる。刃端部には使用痕はみられない。1506は注口。1525は不明土製品。鐸形土製品に似るが、器壁が2mmほどと薄く、鐸形を意識した作りと思われる。1526は不明土製品。天地逆で鉢のミニチュアの可能性がある。鐸形土製品とは異なる。1533は円柱状の土製品で、底部は上げ底、体部は傾いている。支脚か。胎土に赤色粒を特徴的に含む(図版41-7)。他に黒曜石片308点、855.5gが出土している。
17 (I6) 区 (SX545) 379は層灰岩の扁平片刃石斧で、刃端部の使用痕は認められない。386はやや粗い細粒砂岩の砥石で、4面とも中央が凹むように研磨磨耗している。下端に断面円形の擦り切り痕がみられ、擦り切りを伴って打削されている。破断面も含めて全体に薄く黒味がかったり。1532は不明土製品。外面は片方の面が被熱し、器面が劣化し、黒褐色化する。鐸形土製品とは異なる。
67 (J3) 区 352は黒曜石の打製石鐵。355はホルンフェルスの磨製石製品で、表裏面に粗い研磨痕を残し、断面菱形、扁平棒状の形態を指向する。磨製石劍の未完成品で、端部が丸く收められていることから、基部側と考えられる。358は安山岩の刃器で、刃端部が弱く磨滅している。360は玄武岩の亜円錐で、長辺部を調整して刃部とし、潰れと擦痕が認められる。369は石英質砂岩の方形石製品で、6面中5面は無加工の素材面、左面だけ鏡面状に研磨されている。371は花崗閃綠岩の磨石で、表面に磨面と敲打による凹みを有する。しかし、縁辺に研磨による小さく緩やかな凹みが複数形成され、平面多角形状をなし、背面も中央が浅く凹んでいる。砥石としても利用されている。
32 (J5) 区 (SX547) 378は玄武岩の船刃石斧転用品で、刃端部が面的に潰れて磨滅する。基部側の破断面は剥離・敲打・研磨で刃潰しする。
33 (J6) 区 387は砂岩で、表面は浅く凹む砥面、側面と裏面は幅狭の溝状砥面が形成されている。
45 (L6) 区 (SX676) 363は玄武岩の小型石斧で、全面を丁寧に研磨されている。刃部が欠損しているため、両刃か片刃かは不明である。

その他第2面下層 311は玄武岩の大型船刃石斧の転用品で、破断面端部を刃潰しし、刃端部は面的に磨滅・潰れがみられる。318は砂岩の石錐。333は安山岩の円形小型砥石で、表裏面中央が凹み、複数方向の線状痕がみられる。336は細粒砂岩の板状石製品で、1辺は直線的な破断面、他は剥離面である。表面は平滑に研磨される。裏面は素材面である。337は粗粒砂岩の有溝砥石破片。

7. 大型土坑 (SX)

微高地と河川部の間の地山粗砂上で検出された。SX545・546・547内からは多量の木質遺物と土器が

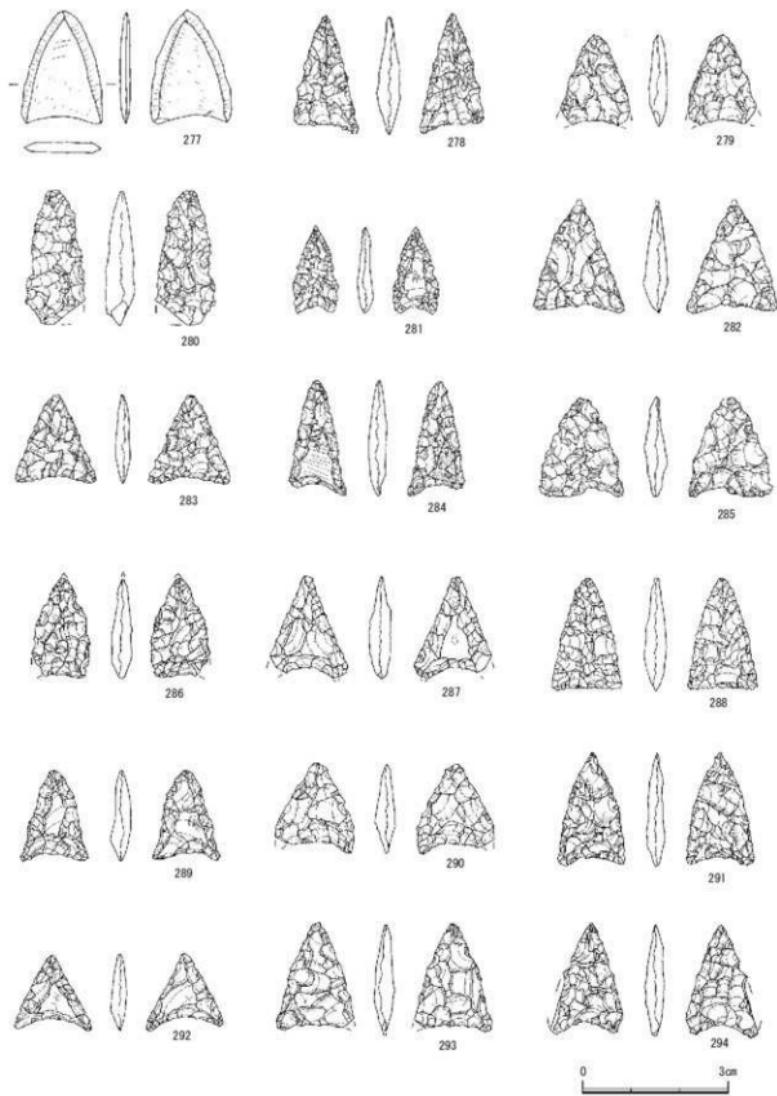


第59図 第2面下層出土土器実測図（276は1/4、他は1/3）

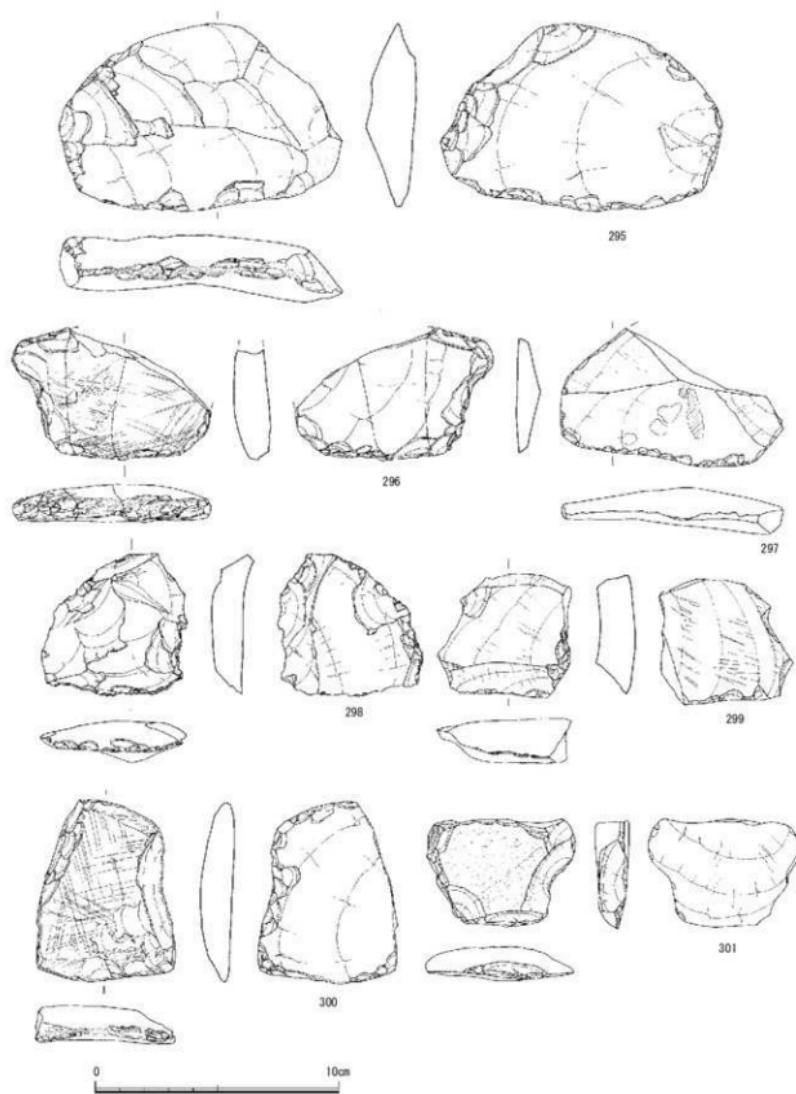
出土した（第74図）。これらは土坑内に自然堆積した状況である。出土木質遺物については、W番号を付して取り上げ、洗浄し、自然木は持ち帰らなかった。また、枝打ち・皮剥ぎ・端部処理等を行っただけの大型部材については、一部はサンプル採取とした。遺物の取り上げでは、第2面下層G～K-4～6区がSX545・546・547の上層にあたり、各土坑最上層の遺物を含んでいる可能性が高い。

SX602（第72図）長さ8.9m、幅4.3m、深さ1.7mを測る。北はSD062、南はSD065と連続するが、SX602の部分だけ深くえぐれた状態になっている。埋土は詳細が記録されていないが、粗砂主体であったよう、南側のSX545・546・547と異なって、木質遺物が出土していない。大型土坑という性格から本項での報告としたが、時期は第1面SD602と同じ8世紀後半と考えられる。

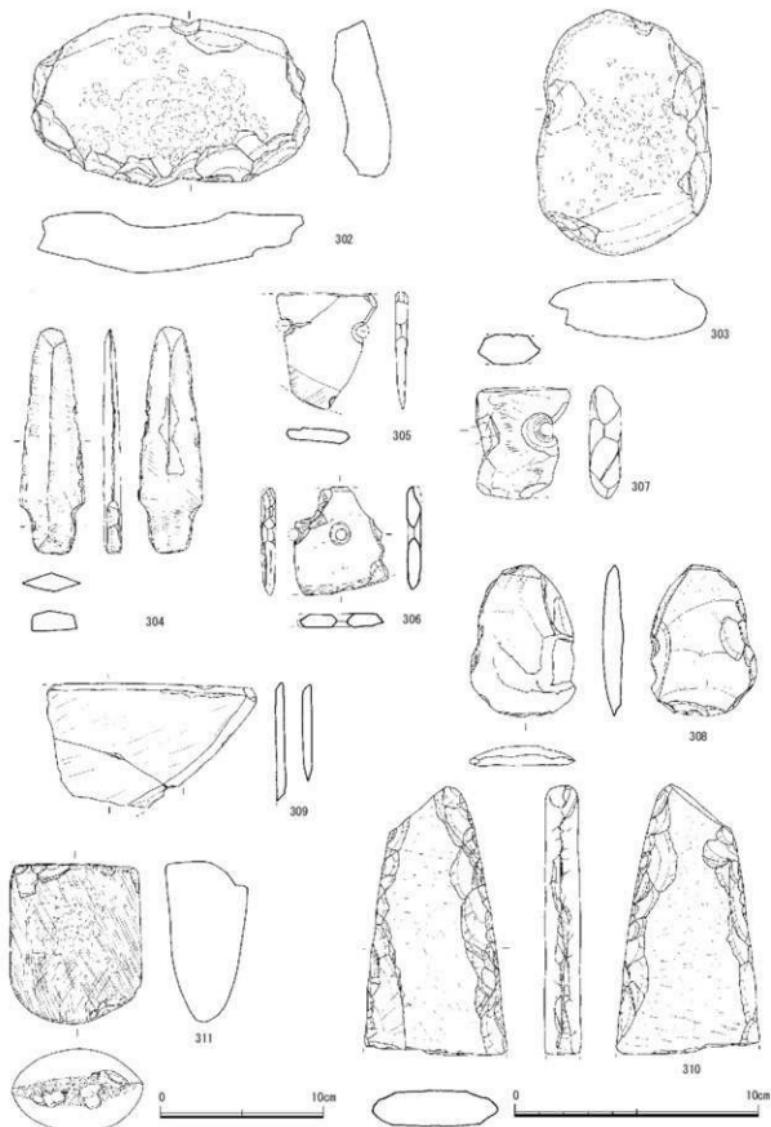
SX545（第72・74図、巻頭図版3、図版18）長さ10.7m、幅6.6m、深さ1.1mを測る。北西に張り出した部分をSX434、南西に張り出した部分をSX513で取り上げている。粘土・砂質土・シルトの互層堆積。東西の壁面に杭が打ち込まれていた（東西杭列）。丸杭中心で、東側は大小、西側は大型杭で構成される。南北方向にも杭列が確認されたが、これらは地山の粗砂まで打ち込まれていない。種実（クスノキ6、モモ1、マクワ・シロウリ型1。第10表）、昆虫（カナブン、コガネムシ科、コガネムシ上科、アカスジキンカメムシ。第11表）も出土した。**SX434・442(13(H5)区)**出土遺物（第75・83図）SX545とSX546の上層遺物。389は布留式甕。肩部外面、粘土帶の縦ぎ目に沈線状の横線があり、左端は斜位の強いナデで消される。1469は投弾。390は布留式甕。391は甕で、口縁部付け根に1ヶ所だけ竹管が刺突される。口唇部は花弁状に打ち欠かれ。392は甕。胎土に雲母多い。466はコナラ属アカガシ亜属Aの広鍔未成品。金属製刃物痕が残る。467はクスノキの板状製品。468はツバキ属の掘串で、ヘラ状に削った下端は磨滅する。**SX545出土遺物**（第76・77・84・85・86・87・88・89・94図）コンテナケース5箱の未図化土器がある。393は中型甕。口唇部をつまみあげて平坦にする。394は土師質の丸瓦片で、内面に竹状模骨痕がみられる（図版38-3）。7世紀後半（混入）。395は布留式甕。肩部に10～13cm間



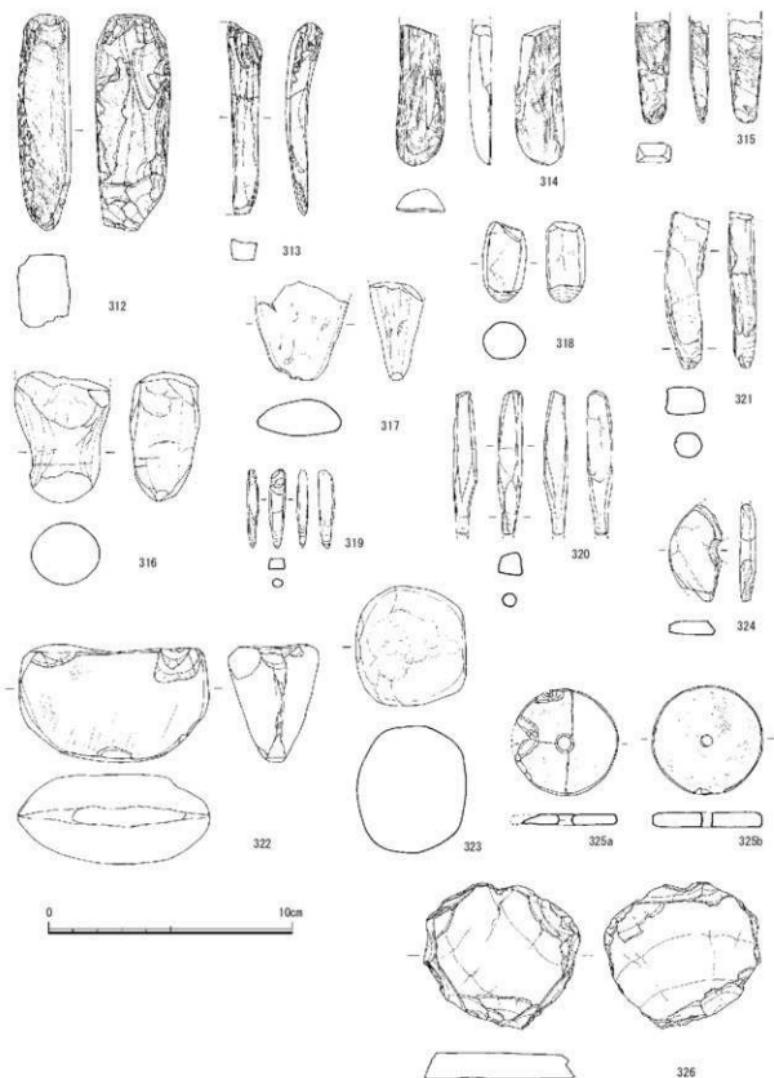
第60図 第2面下層出土石器実測図1 (1/1)



第61図 第2面下層出土石器実測図2 (1/2)

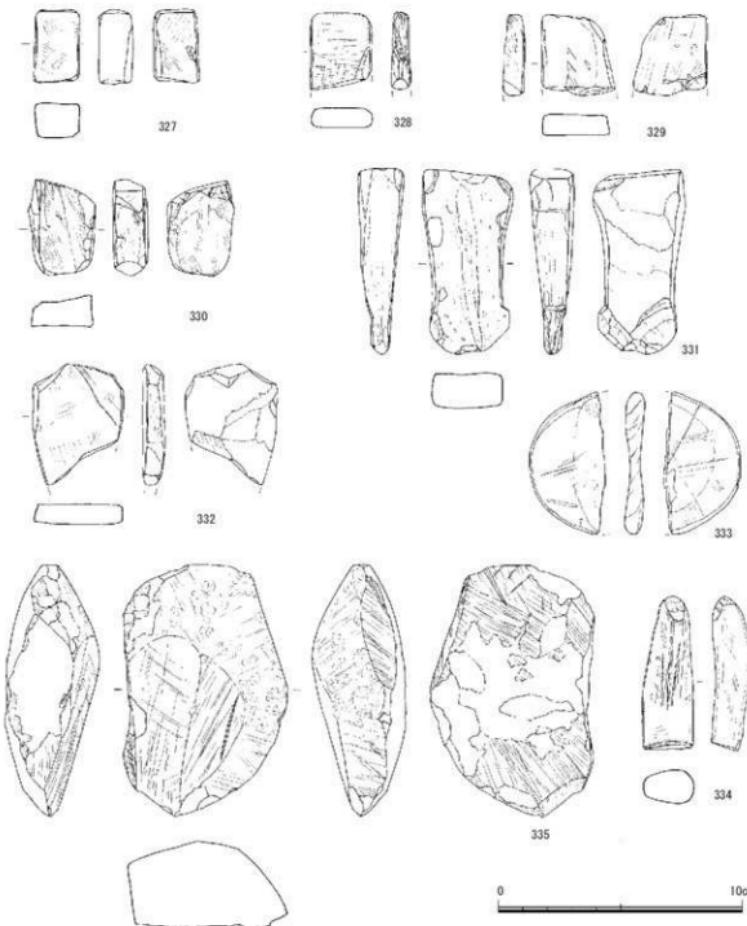


第62図 第2面下層出土石器実測図3 (311は1/3、他は1/2)



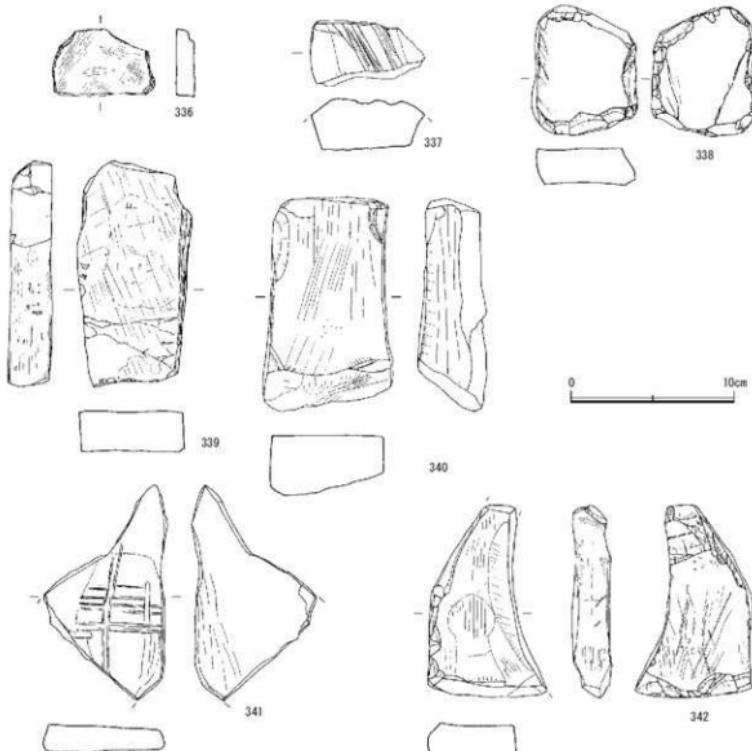
第63図 第2面下層出土石器実測図4 (1/2)

隔で斜位のヘラ刻みを施す。396は中型壺。397は小型壺。398は壺。399は器台で、径1cmの円形浮文を貼り付ける。吉備系。400は小型の壺で、片面にスス・炭化物が多く付着する。401は二重口縁壺で、部分的に被熱黒色化する。402は壺で、端部を10ヶ所程度打ち欠いて上面観が花弁状を呈す（図版38-4）。403は甕で、小平底の中央に焼成前穿孔を施す。外面に平行タタキ、内面にハケメを残す。404は甕で、胴部内面はケズリではなく、ハケメ、ナデで仕上げる。405は小型丸底壺。胎土精良。406は小型丸底壺で、胴部に径3mmほどの小さな焼成後穿孔がある。407は小型丸底鉢。全体に褐色化している。408は大型壺で、内面は縦位のジグザグ状にミガキを入れる。409は甕。410は精製甕。胎土に雲母多い。



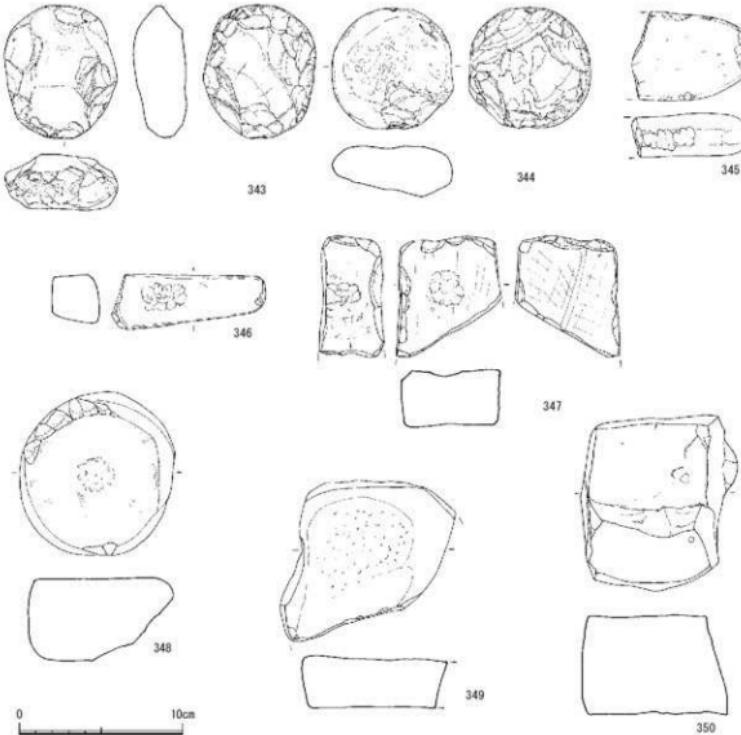
第64図 第2面下層出土石器実測図5 (1/2)

内面に薄い黒色の付着物がある。赤外線画像では黒く映らず、顕微鏡で拡大すると炭の粒子は見られない。炭素成分以外の由来で黒く見えるようである（図版38-5～8）。411は高坏で、欠損した脚部端部が平坦化しており、高台状に再加工している。412は高坏で、脚部に径6-8mmの焼成前穿孔を4ヶ所施す。413は高坏。414は高坏で、径0.8cmの焼成前穿孔を4ヶ所施す。415は高坏で脚部に径1.2cmの焼成前穿孔を3ヶ所施す。416は器台で、上部と脚部は焼成前穿孔でつながる。脚据は花弁状に打ち欠かれる。417は精製の器台で、脚中央に穿孔を2ヶ所穿つ。胎土に雲母多い。469はスギの把手付方形容器で、幅12.6cm、器高6.7cmを測る。被熱で炭化し、破けている（図版38-10）。470はスギの脚付方形容器で、器高8.2cmを測る（図版38-11）。469・470はまとまって出土し（図版20-3）、ともに炭素14年代は2世紀前半から3世紀中頃を示す（第14表）。471・472はクスノキの履物で、被熱して焼けている。473はコナラ属アカガシ亜属Bの丸木状部品で、中央片面に幅1cmの割り込み溝を持つ。474はサカキの棒状製品で、端部・側面が丁寧に面取りされる。475はコナラ属アカガシ亜属Bの銀櫻。476はコナラ属アカガシ亜属Bの棒状製品。477はコナラ属アカガシ亜属Bの二又鋸。478はコナラ属アカガシ亜属Aのナスピ形二又鋸。479はコナラ属アカガシ亜属Aのエブリで、歯は大5、小10と思われるが、左側は再

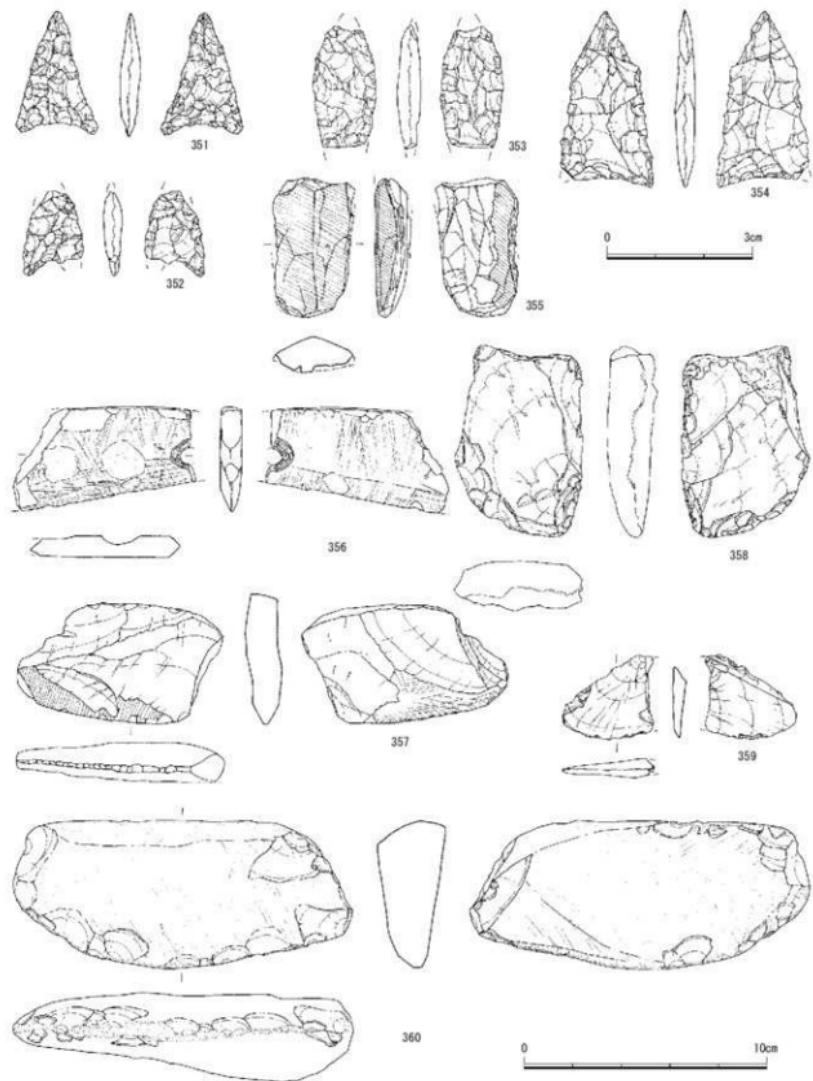


第65図 第2面下層出土石器実測図6 (1/3)

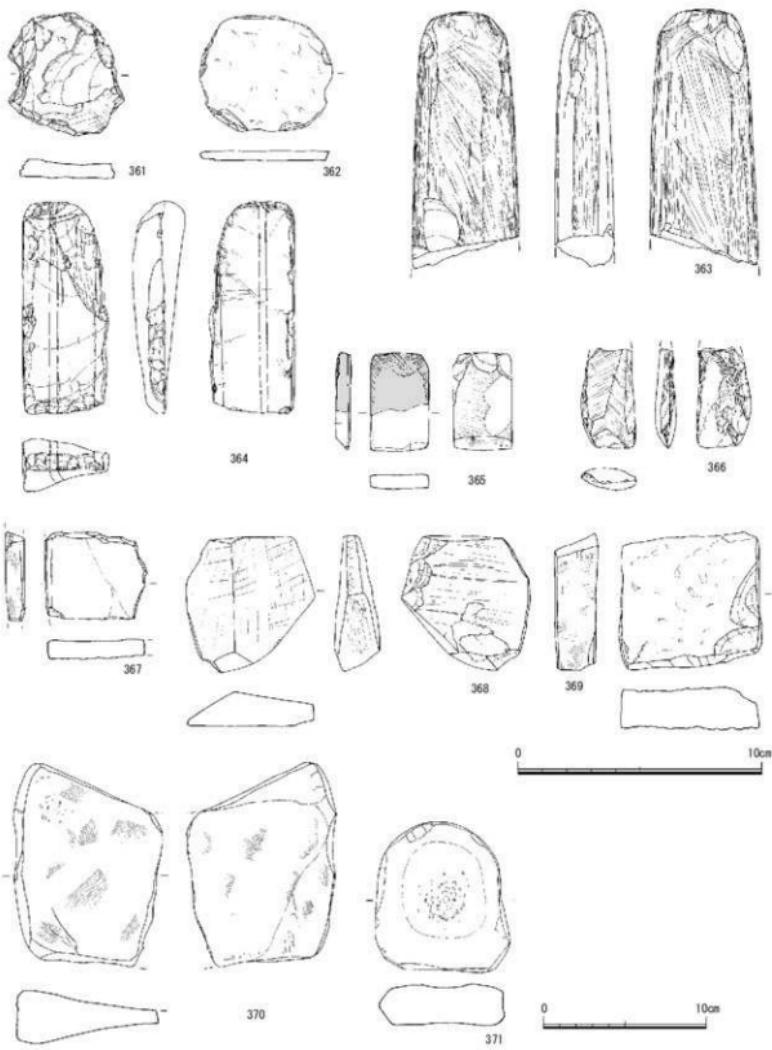
加工のためか、単位が乱れている。480はコナラ属アガシ亜属Bのエブリ柄で、479に着柄して出土した。481はクスノキ科Bの楔で、479に着柄した480を固定するために打ち込まれていた（図版20-4）。482はコナラ属アガシ亜属Aのエブリで、歯が7つ付き、その歯も先が二股に分かれる（図版38-12）。483はツバキ属の横槌で、表裏面に切痕や圧痕が残る。484はモチノキ属の堅杵で、下部は1/3ほど大きく削り取られて、被熱・炭化している。握り部は残りがよくないが突起はないようである。485はサカキの斧柄で、鉄斧に差し込む中子部分は幅3.3cm、厚さ1.9cmを測る。486はサカキの斧柄。487はコナラ属アガシ亜属Bの掘り棒で、下端をヘラ状に削る。全体に弱く被熱・炭化する。488はコナラ属アガシ亜属Aの棒状製品で、下端が磨滅しており、掘串と考えられる。489はツバキ属の棒状製品で、芯持丸木を粗く削って太さを調整し、先端を尖らせており、杭でなければ掘串の可能性がある。490はスギの棒状製品で、持ち手が成形され、体部表面に方形の浅い凹みが残る。491はスギの板状製品で、表面に並行する線状痕がみられる。492はシイ属の棒状部材で、上端部に段と頭部を削り出す。493は492と同型で、接合しない同一固体と考えていたが、樹種同定の結果はサカキで、492と異なっていた。494はタイミンタチバナの柱材で、上端は頭部作り出し、その下に段、下端は杭状に削る。495はシキミの柱材。496はカヤの棒状部材。497はクリの扉で、幅21cm、長さ73cmを測る（図版38-13）。



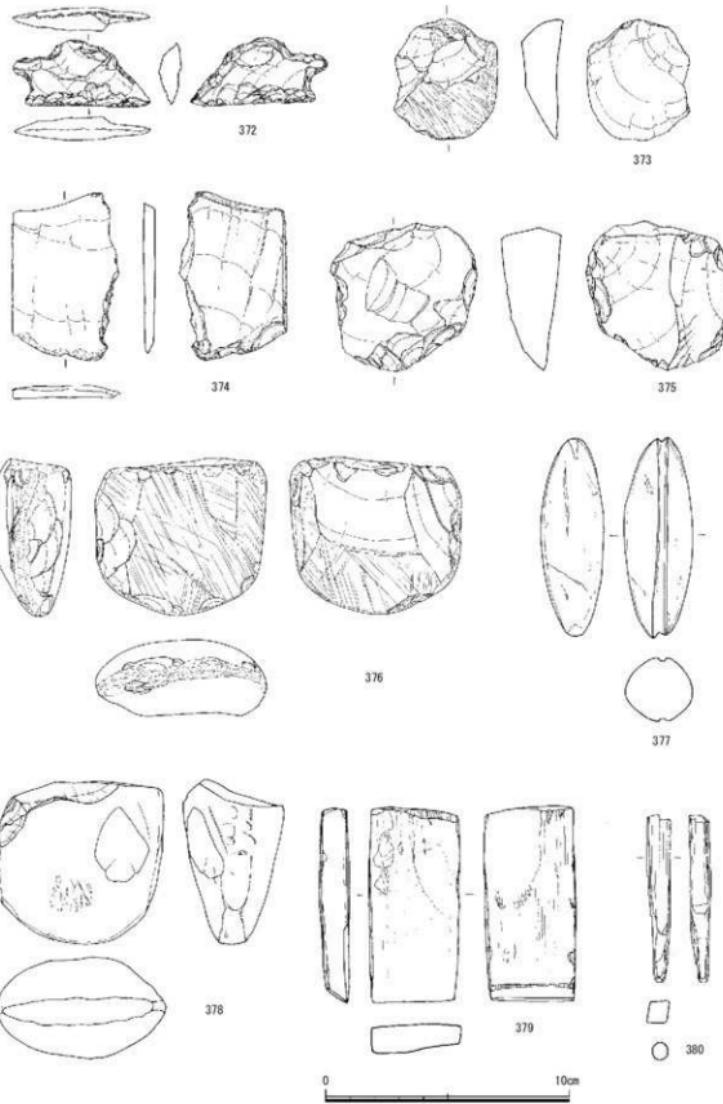
第66図 第2面下層出土石器実測図7 (1/3)



第67図 第2面下層出土石器実測図8 (351～354は1/1、他は1/2)



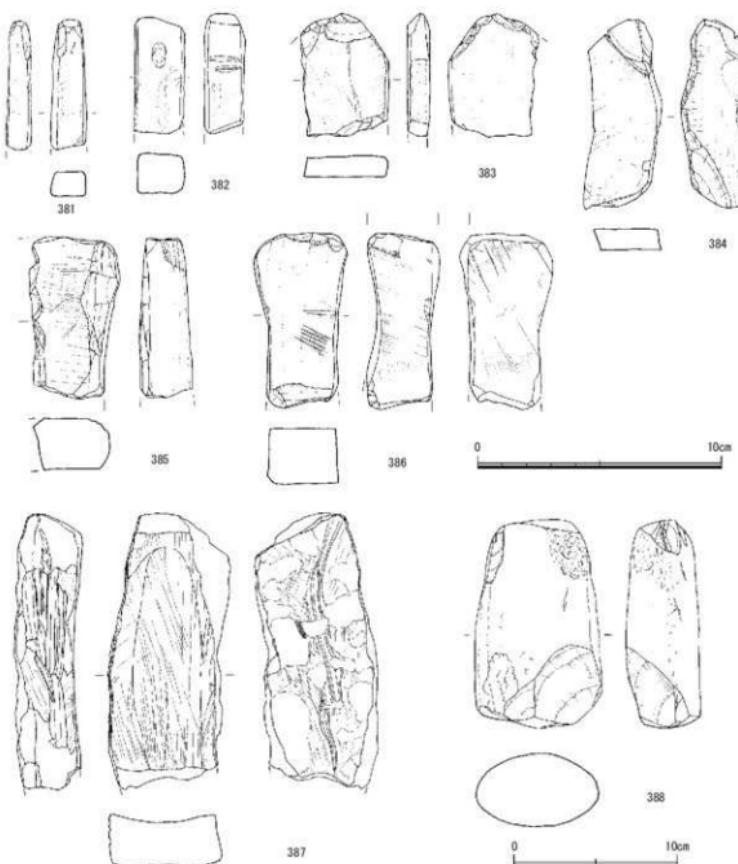
第68図 第2面下層出土石器実測図9 (370・371は1/3、他は1/2)



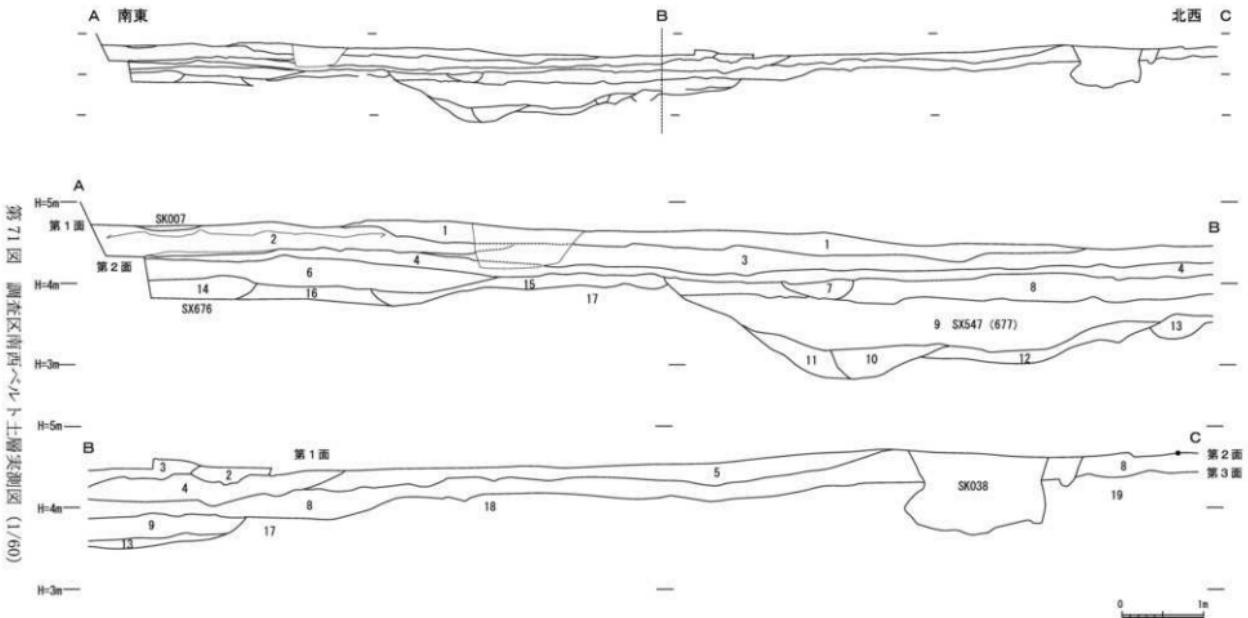
第69図 第2面下層出土石器実測図10 (1/2)

498は編組製品で、マタタビ属を横材、タケ亜科を縦材として編んでいる（図版20-5）。縦材の炭素14年代は3世紀中頃～4世紀中頃を示した（第14表）。526は黒曜石の細石刃核で、角錐形を呈す。527は緑泥片岩（岩石No. 8類似）で、撥形の加工し、刃部に明確な使用痕が認められないため、小型磨製石斧の未成品と考えられる。528は結晶片岩の亜円礫で、平坦な接地面を除いて被熱黒色化する。支脚石。529は砂岩で、剥離・敲打で半月形に成形する。他に長さ30cmの玄武岩礫（R1）が出土している。1437は土製円盤で、外面ミガキ調整の弥生土器・壺の再加工。

SX546・547 (第71・73・74図、図版18) SX546とSX547は南北に三日月状に連続する。長さ15.4m、幅9m、深さ1.68mを測る。北の張り出しをSX442、西の張り出しをSX453、南西の張り出しをSX677、中央部分をSX512として一部の遺物を取り上げている。SX545のような杭列は残っていなかった。種実

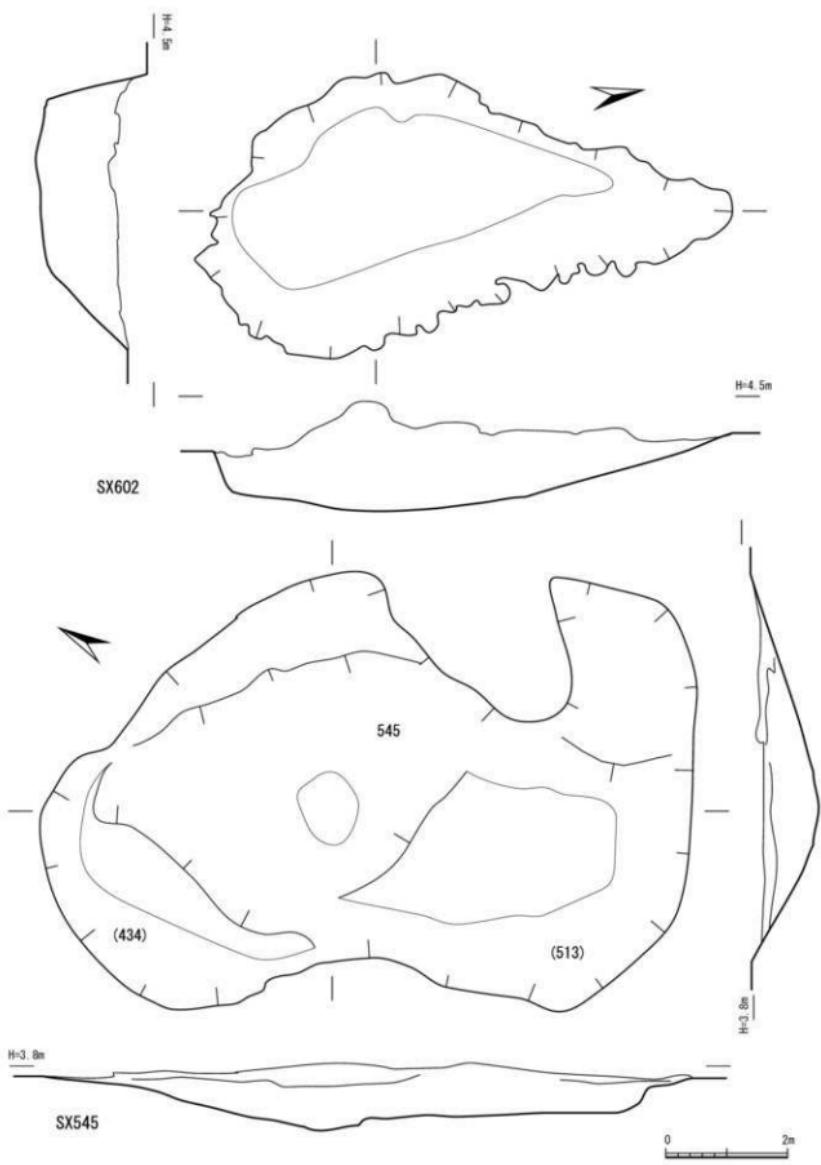


第70図 第2面下層出土石器実測図11 (387・388は1/3、他は1/2)

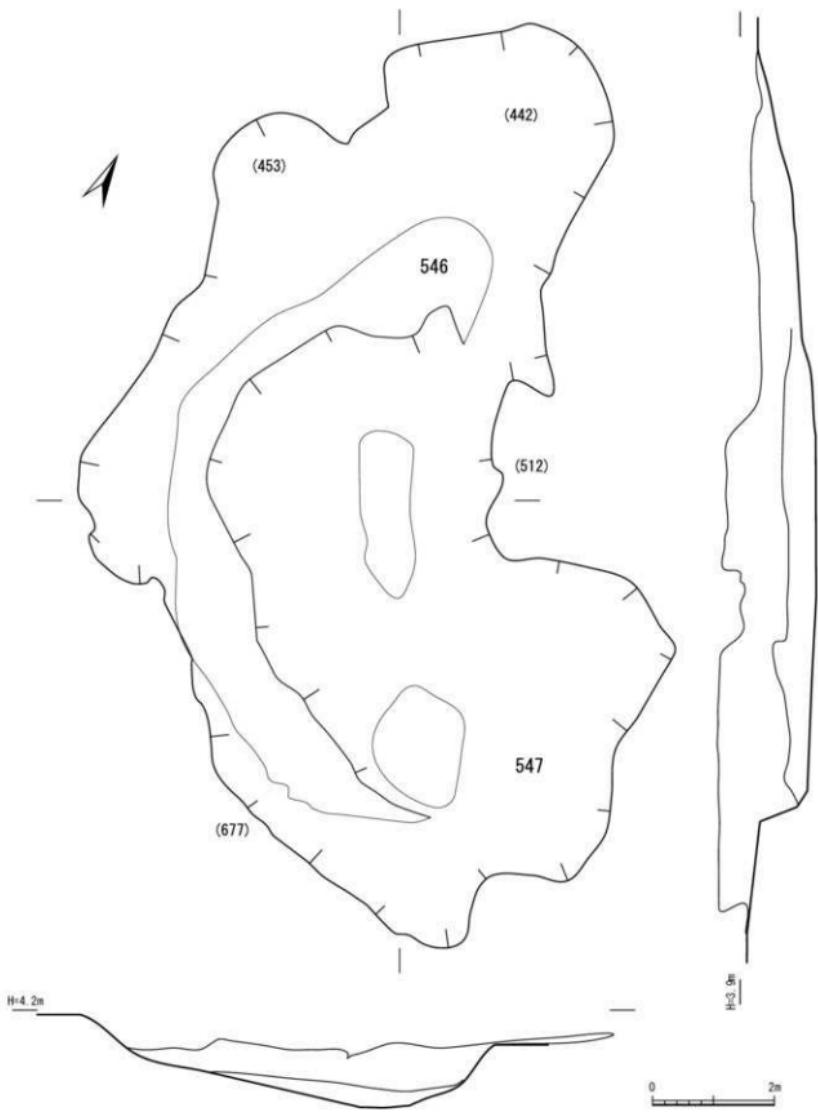


調査区南西ペルト土層

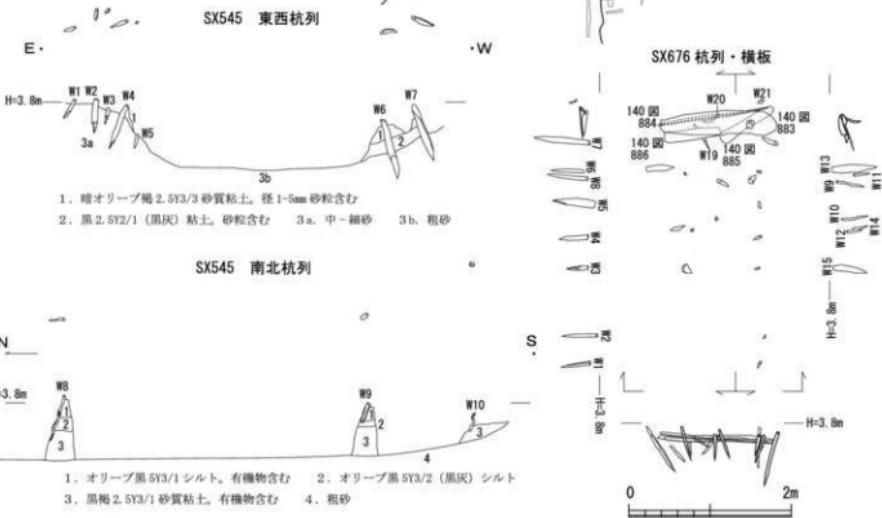
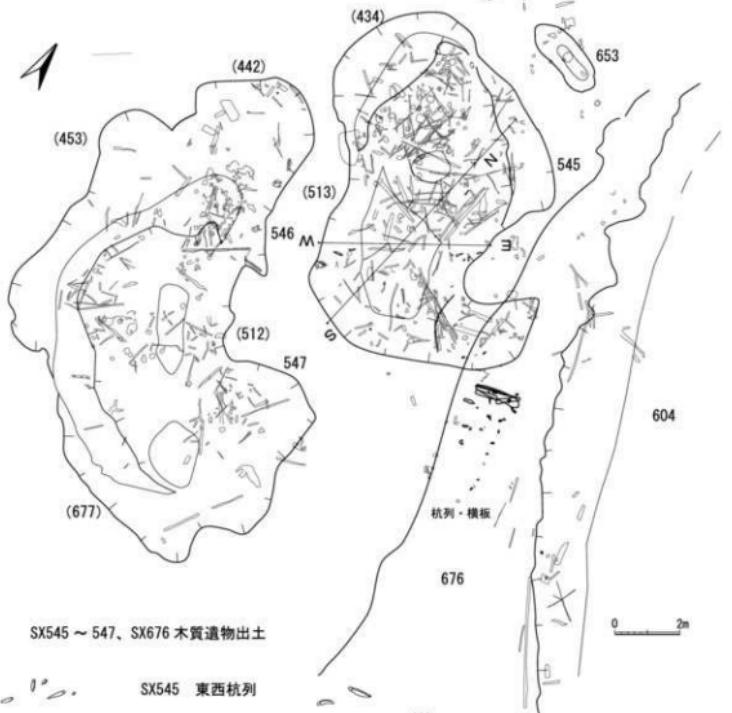
1. 暗灰色砂質粘土 (SS020)
2. 黄白色粗砂、暗灰色粘土、細砂の互層
3. 黒褐色2.5Y3/1～灰褐色シルト粘土。しまりやや強い
4. オリーブ黒5Y3/1粘土。南側はしまり弱く、北側はしまりやや強い
5. 黒褐色砂質土。砂粒多く含む
6. 褐色粘土
7. 暗褐色粘土
8. 褐色粘土
9. 暗褐色粘土
10. 褐色～灰褐色砂質粘土
11. 灰色粘土混白色砂
12. 褐色～灰色砂（汚れた地山）
13. 褐色粘土混褐色～灰色砂（汚れた地山）
14. 暗褐色粘土 (SX676)
15. 灰色粘土・砂混土
16. 褐色粘土
17. 褐色砂（地山）
18. 白色砂（地山）
19. 緑灰色粘土（地山）



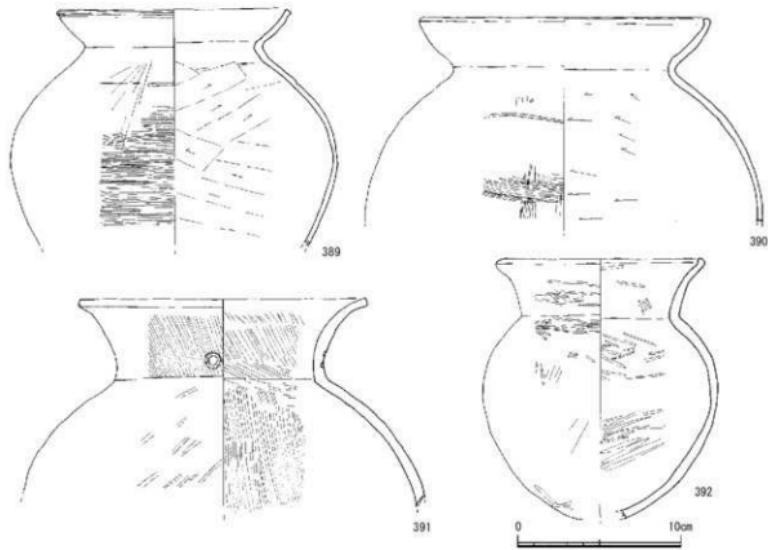
第72図 SX602・545 実測図 (1/80)



第73図 SX546・547 実測図 (1/80)



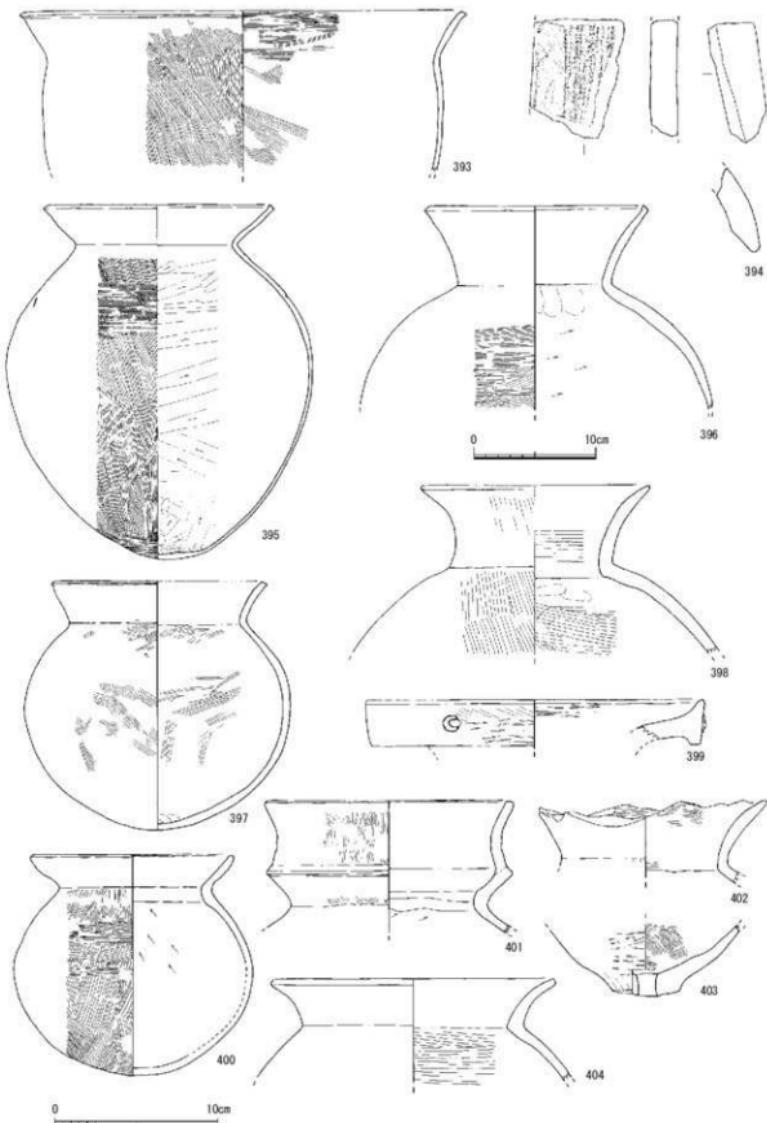
第74図 SX545～547、SX676木質遺物、杭列実測図 (1/150、1/80)



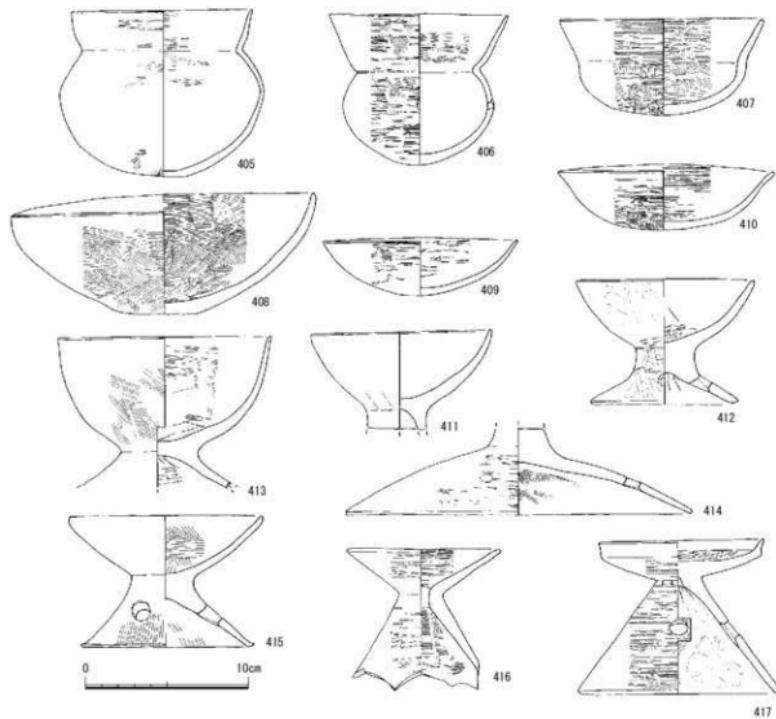
389 SX434 390~392 SX434・442上面

第75図 SX434・442出土土器実測図 (1/3)

(ヒヨウタン。第10表)、昆虫(コホソナガゴミムシ、カメムシ類。第11表)が出土した。SX546・547(10(14)区)出土遺物(第78・90・91・95図) 418は布留式壺。419は小型甕で、外面に平行タタキを残す。420は高壺。421は鉢で、外面に平行タタキを残す。底部に焼成前穿孔を施す。422は鉢で、外面に平行タタキ痕をわずかに残す。423は鉢。424は直口壺。425は高壺。径1~1.3cm脚部焼成前穿孔4ヶ所。426は鉢で、外面は炭素吸着で黒色化する。427は高壺。径0.8~0.9cm脚部焼成前穿孔4ヶ所。428は小型の鉢。429は小型の鉢。外面は被熱・黒色化する。ミニチュアか。430は小型の鉢。口縁部外面の回転ナデは一周した後、上にナデ上げて終わる。ミニチュアか。431は精製の小型丸底鉢。499はクスノキの栓。500はサカキの栓。499と500はほぼ同型である。501はヤマグワの栓で、4面を削つて直方体状に仕上げる。502はコナラ属アカガシ亜属Aの鍛櫻。503はコナラ属アカガシ亜属Bの又鍛。504はスギの箆。505はスギの案脚。炭素14年代は1世紀後半から3世紀前半を示した(第14表)。506は広葉樹の板状部品。507はシキミの棒状部材で、上端に刺り込みがある。梁か。508はシイ属の棒状部材で、上端に段を削り出す。下部は焼けて無くなっている。柱材。509はスギの削出棒材で、木目は密、上部がわずかに幅狭で薄く、下部がわずかに幅広で厚い。510はスギの板状部品で、方形の孔や刺り込み、側面の凹みなどがある。指物部品か。511はスギの槽で、被熱のため全体にわずかに黒色化している。512はヒノキ科の板状部品で、上端は階段状、側面中央に2ヶ所の刺り込み、下端は杭状になる。又首か。530は滑石の紡錘車片。531は玄武岩で、磨製石斧の胸部破片に、円形の刃部と、基部を再加工し、插入器に転用したと考えられる。532は玄武岩の礫器で、刃端部は面上に潰れ、磨滅している。表面に敲打痕が認められ、これも使用痕と考えられる。533は、凝灰岩質砂岩の砥石で、長軸からやや左に振れた線状痕とそれを切る長軸方向の浅い凹みが認められる。SX546出土遺物(第79・80・92図)コンテナ



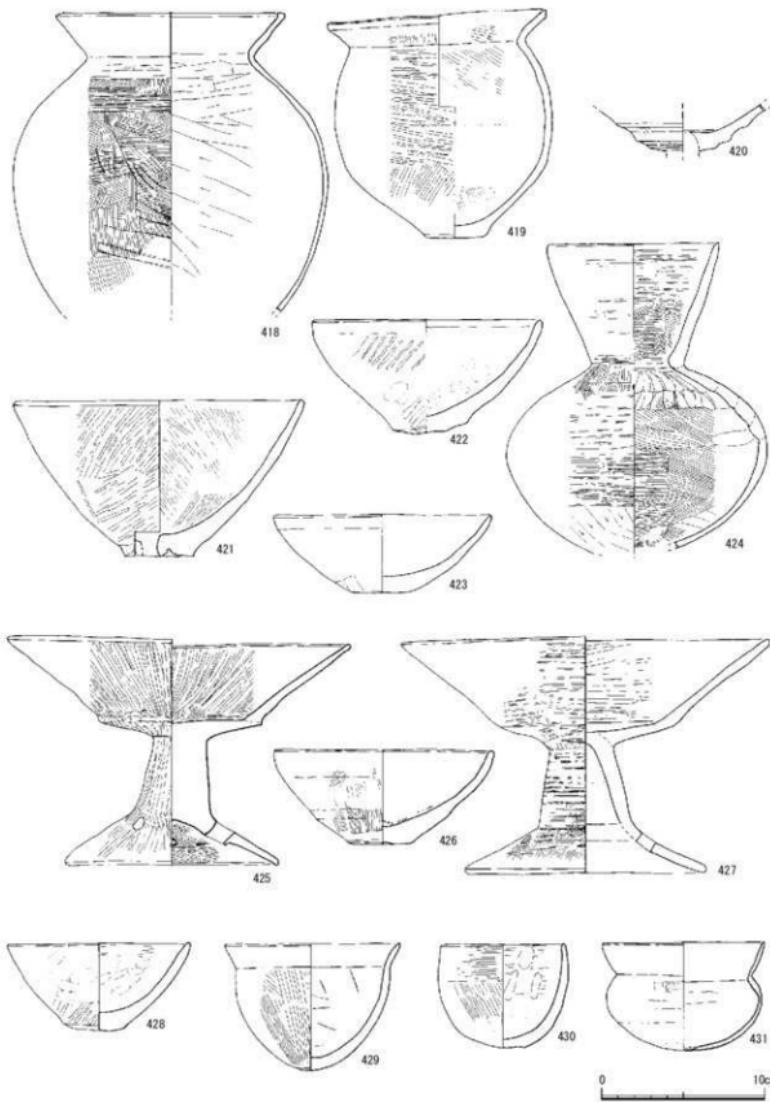
第76図 SX545出土土器実測図1 (393・395・396は1/4、他は1/3)



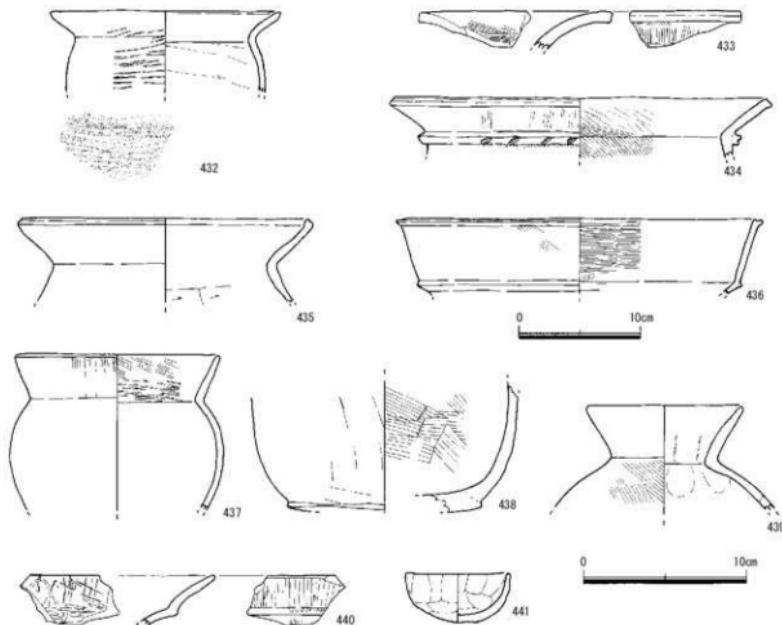
第77図 SX545出土土器実測図2 (1/3)

ケース3箱の未図化土器がある。432は小型甕で、外面に横位平行タタキを残す。433は弥生土器の広口壺。須玖I式。434は甕。西新式。435は布留式甕。436は二重口縁壺。437は小型甕で、胎土精良、外面全体にスヌ・炭化物が付着する。438は甕で、底外面が丸みを帯びた大きな平底を有す。下大限式。439は小型壺。440は高環口縁部で、内外面に暗文のミガキを施す。下大限～西新式。441はミニチュアの鉢。442は甕で、肩部に波状沈線文。443は甕で、外面はタテハケメ後肩部ヨコハケメで仕上げる。444は二重口縁壺で、口縁屈曲部と頸部付け根突带上にハケメ工具での刻み目を施す。10区の破片と接合し、31区破片とは同一個体である。445は中型壺。甕のような砂粒胎土とケズリ調整。446は高坏で、内面に放射状ミガキ。脚部に穿孔3ヶ所。447は小型丸底壺。448は小型坏。449は器台で、脚部に焼成前穿孔を4ヵ所(復元で6ヶ所)施す。513はクリの棒状部材で、上端の段部分は幅4cmほどの鉄製工具で加工されている。全体に被熱・炭化する。柱材。514はアワブキ属の棒状製品。515はアワブキ属の棒状部品で上部は樹皮を残すが、端部は丁寧に面取りされる。梁か。516は針葉樹の棒状製品で、丸い頭部を作り出す。517はスギの板状部材で、貫孔が3ヶ所残る。軸もしくは台輪材か。518はスギの指物部品で、長軸内の幅1cmの溝内に12.1cm間隔で穿孔内に木軸が残る。1378はガラスのトンボ玉で、青緑色の玉に白・青色の同心円文を施す(第V章第3節、図版40-12)。

SX547出土遺物(第81・82・93図)コンテナケース2箱の未図化土器がある。450は二重口縁壺。口縁部内外面と頸部付け根に小波



第78図 SX546・547出土土器実測図 (1/3)

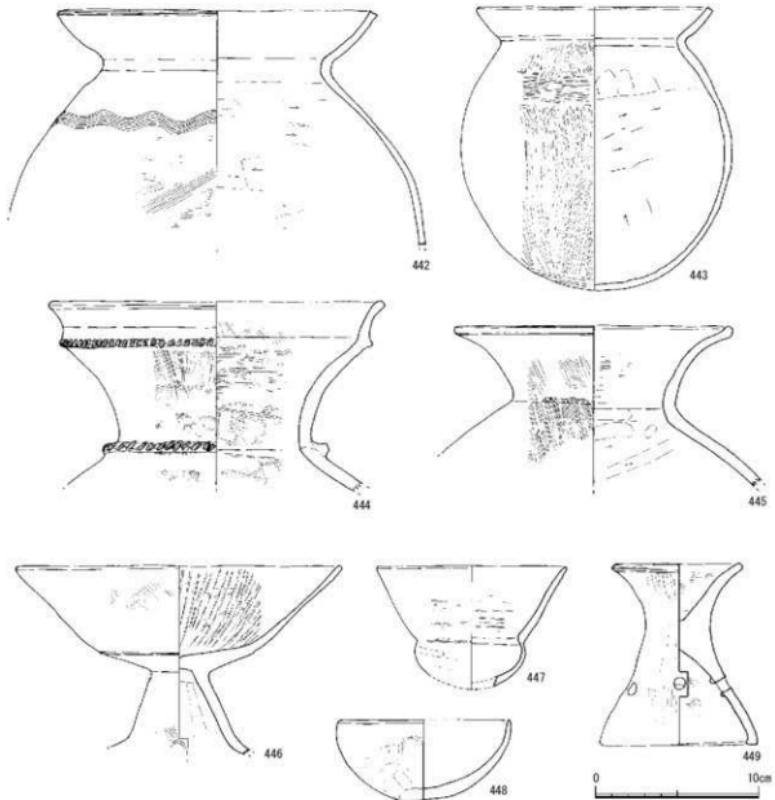


第79図 SX546 上層出土土器実測図 (434・436は1/4、他は1/3)

状沈線文をめぐらす。口縁部内面の波状文は比較的均質だが、外面は幅にバラツキがある。吉備系。451は壺肩部片で、小さい突带上は斜位の刻み目、その下に小波状文を施す。畿内系の弥生中期土器か(図版38-9)。452は壺肩部片で、451と同型だが、小波状文の下に横線文を施す。内外面は浅黄色だが、胎土は黒褐色を呈す。453は甕。454は直口壺で、外面に横位の暗文線を入れる。455は精製の小型丸底壺。456は甕で、肩部に大振りな波状沈線を施し、始点と終点はつなげない。457は中型の壺で、肩部に浅い波状沈線を施す。頭部内面にも全周しない波状の沈線状の痕跡がみられる。458は小型甕で、外面に平行タタキ痕を残す。底部は小平底。459は鉢で、外面に平行タタキを残す。焼成前穿孔を施す。460は鉢で、底部が丸平底を呈す。461は鉢。462は小型鉢で、底外面を中心にはスス・炭化物が付着する。胎土に雲母を多く含む。463は小型丸底鉢。464は高坏、脚部に小さな穿孔3ヶ所。465は精製の器台。519はコナラ属アカガシ亜属Bの鋸櫻。520はスギの掘串で、ヘラ状に削った下端部が磨滅する。521はツバキ属の小型横櫛で、使用面と思われる平坦面が形成される。522はスギの棒状製品で、幅1~2mmの細い溝が3ヶ所刻まれている。523はサカキの棒状製品で、部分的に炭化する。524はチシャノキ属の棒状製品で、頭部を作り出す。525はスギの板状部品で、2つの方形孔を3ヶ所に穿つ。指物部品か。

8. 土器群 (SX)

微高地と大型土坑の間に堆積した土器溜まりである(巻頭図版2、図版22・23)。記録方法としては、土器片の出土状況を図化することも検討したが、工期や調査体制の制約から断念し、省略的な方法として、土器群を「ブロック」(任意の平面的まとまり)として記録・取り上げする方法を探った(第97図)。

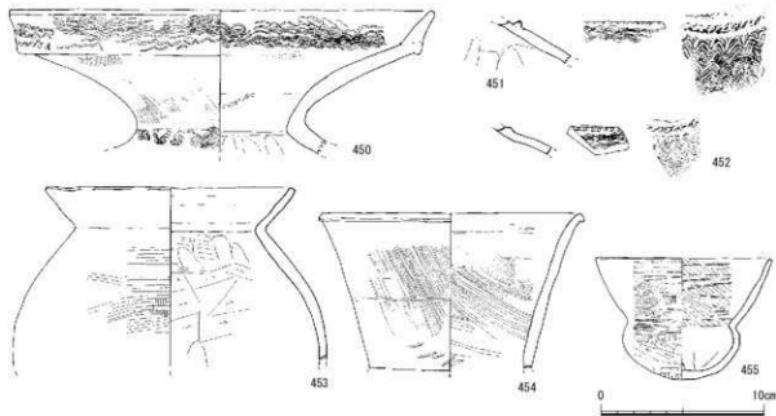


第80図 SX546出土土器実測図（1/3）

ブロック間での土器型式や器種構成の差は多少ありそうだが、詳細に検討していない。長さ10~20cmの縦石器類が各ブロックに含まれるというパターンがあり、投棄された土器の上に投げ込まれたと考えられる（図版23）。土器群全体は、東西で見ると、地形に沿って西から東に傾斜堆積している。南北で見ると、細かい凹部に溜まっている状態で、下層の大型土坑が埋没して起伏がある状態で、土器群の堆積がはじまっている。土器群ブロックは平面的に連続的だが、比較的不連続が設けられそうな範囲で上位の空間的まとまりを設けている（土器群A~E）。土器群からは、モモ22点、オニグルミ4点、イヌガヤ1点、ハクウンボク1点、イチイガシ1点の種実が出土している（第10表）。

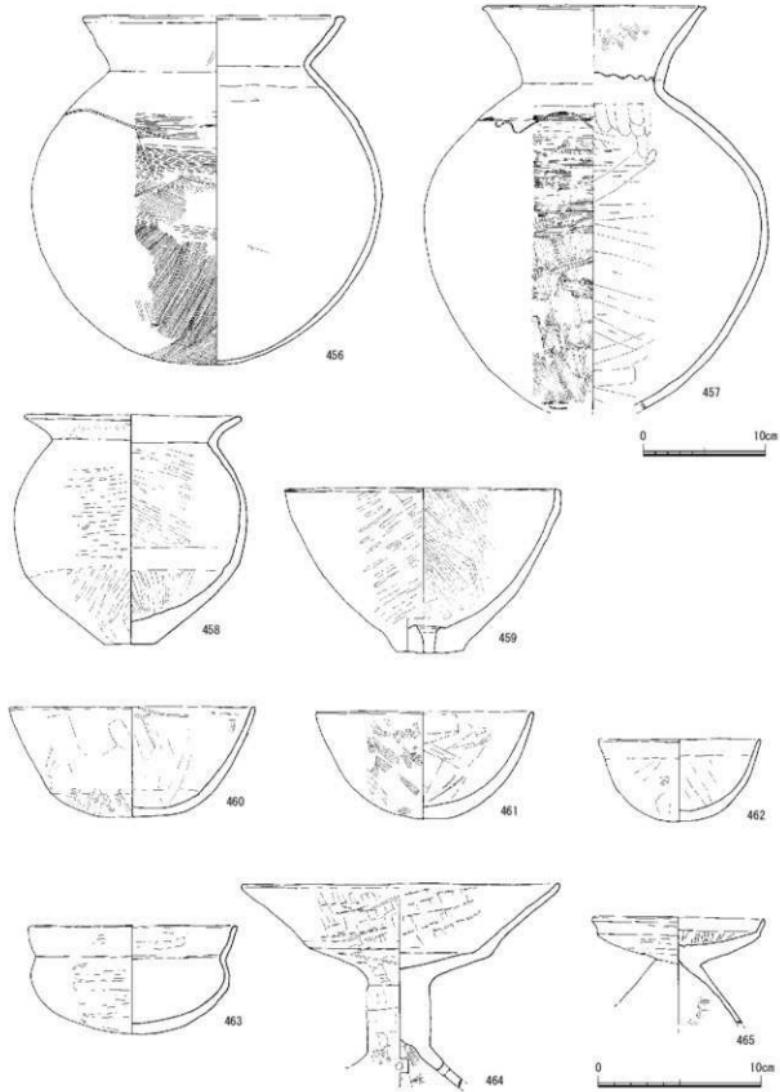
<土器群A出土遺物> コンテナケース24箱の未図化土器がある。

SX664（第98・125・128図）538・539は甕。539は肩部に斜位の刺突文。540は甕で、対をなす鉤状文突帯が剥落する。横位の突帯が剥落した下地には太めの沈線が引かれる（図版38-16）。541は大型の二重口縁壺。胎土に赤色粒や多い。775は層灰岩の挿入柱状石斧。780は玄武岩の磨製石斧。基端部が



第81図 SX547 上面出土土器実測図 (1/3)

直線的な境をもって黒色化しており、着柄時に柄で覆われていなかった基端部が被熱・黒色化したと考えられる。793は砂岩の楕円形大型磨石。SX665(第99図)542は小平底の甌。543は小型甌。544は甌で、底内面から外面にかけてすぼまる形で焼成前穿孔される。底外面の穿孔周りは器面が剥落しており、意図的に打ち欠いて平坦化している。545は高杯で、脚据に径1cmの穿孔を4ヶ所施す。546は平底鉢。SX666(第100・210図)547は二重口縁甌。縁辺部が黒色化しており、二次被熱を受けている。548は小型器台。549はミニチュアの小型丸底甌で、口縁部を打ち欠いている。550は二重口縁甌で口縁部の下端に小さい波状文が施される。1530は不明土製品。錐形土製品とは異なる。SX667(第100図)551は土師器坏で、口縁部が短く外反する。SX669(第123・124・206図)758はコナラ属アカガシ亜属(イチイガシ?)の鉢。766は細粒砂岩質ホルンフェルスの小型磨製石剣。1478は投弾。SX670(第100・123・129図)552は二重口縁甌で、外面に小波状文を施す。胎土に大きな角閃石を含む。SX666の550に類似。553は甌で、肩部に1箇所だけ竹管文が施される。554は小型甌で、肩部にヘラ状工具で斜位の刺突を4ヶ所施す。胎土に雲母・角閃石を含む。555は小型器台で、脚に径0.9cmの穿孔を3ヶ所施す。556は高杯で、脚部に径4~5mmの小さな穿孔を4ヶ所施す。脚部据の1箇所を打ち欠く。759はコナラ属アカガシ亜属のエブリ。刃部側が被熱炭化する。8本歯が想定される。800は花崗岩の自然礫で、広い面が両面、部分的に被熱・黒色化する。支脚石。1528・1531・1539は不明土製品。1528は外面に強い被熱痕跡があり、内面は器面剥落した状態。1531も内面が剥落した状態。1528・1531ともに錐形土製品とは異なる。1539は上面観方形で、口縁部が肥厚する容器状に復元している。外面に比べて内面の胎土は黒ずんでおり、外面と内面で被熱の程度が異なる。胎土は弥生土器と類似するが、混入されている石英・長石が大きく、角張っている。SX690(第101・102・123・127・128図)557は小平底甌。558は甌。559は甌で肩部に端部がつながらない沈線が描かれ、胴部には径6cmほどの大きな打ち欠きがみられる。560は中型甌。561は中大型の甌で、頭部付け根に突帯、肩に多条沈線をめぐらす。562は高杯。563は高杯で、全体に被熱黒色化している。564はミニチュアの高杯で、全体に黒ずんでいる。565は丸底甌。566は小型丸底鉢。567は小型器台。760はクヌキの泥除(国版39-9)。761はスギの角材部材で方形の削り込みを持つ。791は細粒砂岩の大型磨石で、表裏・左面が砥面。表裏2面は

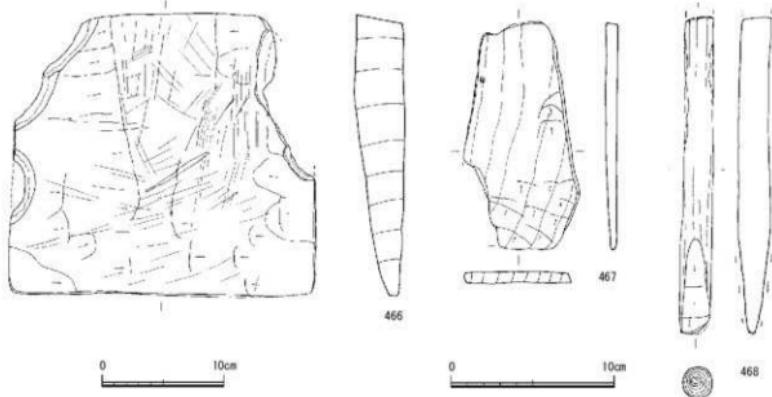


第82図 SX547出土土器実測図（457は1/4、他は1/3）

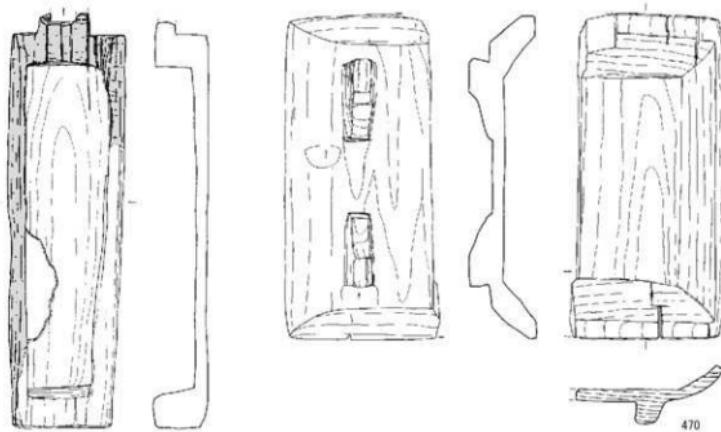
緩やかな凹凸をもつ平坦面を形成するが、左面は長軸方向の線状痕、溝痕を持つ。794は砂岩の楕円形磨石。磨り面の擦痕は長軸方向に形成されている。 SX062 (第102・124・125・128・204図) 568は小型器台で、成形後に上部から脚部に径8~10mmの孔を穿って筒状とする。569は壺で、肩には幅広な粘土帯が貼り付けられ、板状工具で山形文が施される。SX067出土土器に同一個体がある。768は頁岩質ホルンフェルスの磨製石劍。776は砂岩製の厚みのある半月形の石器で、曲線部分は両面調整で刃部様に成形している。一方で背部の直線部分は研磨で平滑にしており、側面の一部にも研磨痕が認められるため、柱状片刃石斧などの未完成品の可能性もある。799は凝灰岩の凹石。重量感があり、両面に径3cm、深さ5~7mmの凹みが形成される。1418は土製紡錘車 (図版40-14)。 SX067 (第102図) 570は土師器の大型壺。 55 (E6) 区 (第102図) 571は高坏で、外面に大小を重ねた円形浮文を連続的に貼り付け、内外面は丁寧なミガキで仕上げる (図版38-17)。1406は勾玉状の土製品で、穿孔はないが垂飾と思われる。 56 (E7) 区 (第205・207図) 1452は大型の土製円盤で、弥生土器の底部円盤。1502は小型管状土錐で、片面に幅1-1.5mmの溝が十字に彫られる。1507は大型管状土錐。 14 (F6) 区 (第102・125・203・206・207図) 572は布留式甕で、肩部に横列沈線と、斜位の刺突を5~7cm間隔で6ヶ所 (推定7ヶ所) 施す。778は層灰岩の扁平片刃石斧片あるいはノミ形石斧未完成品。779は玄武岩の磨製石斧基部で、剥離痕を比較的多く残しており、特に基端部は研磨に至っていない。未完成品の破損品か。1412は算盤玉形土製玉で、径1.5mmほどの小さい穿孔がみられる。全体に磨いて光沢を出している。1479・1490は投弾。1500は径1~2mmほどの小さい穿孔がみられる土製品で、投弾に似た形状をしている。1504は注口。 土器群北 (第124・125・126・127図) 763・765は安山岩製の打製石鎌。771は玄武岩質安山岩の石包丁未完成品。773は細粒砂岩の抉入柱状石斧。774はホルンフェルスの抉入柱状片刃石斧で、刃部上面に偏って微細剥離が形成されており、使用痕を良く残している。783は軽石の浮子か。785はシルト質砂岩の砥石。788は砂岩の有溝砥石。2条の浅い溝が形成される。やや粗く軽い石材。

<土器群B出土遺物> コンテナケース28箱の未図化土器がある。

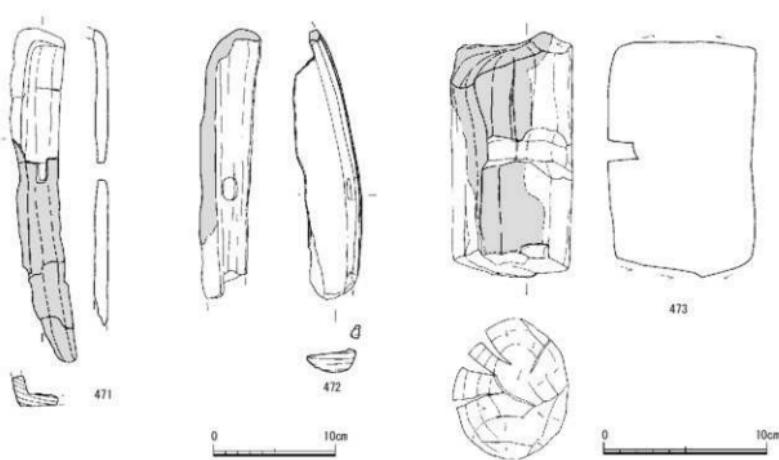
SX058 (第103・129図) 573は二重口縁壺。574は小型壺で、肩に穿孔がある。口縁部は打ち欠く。801は練岩の自然縁で、部分的に被熱・暗色化している。支脚石。 SX066 (第103・127) 575は土師器の壺で、口縁部は比較的長く、下に張り出して頸を持つ形状で、口縁部下半に櫛描きの波状文を施し、四方



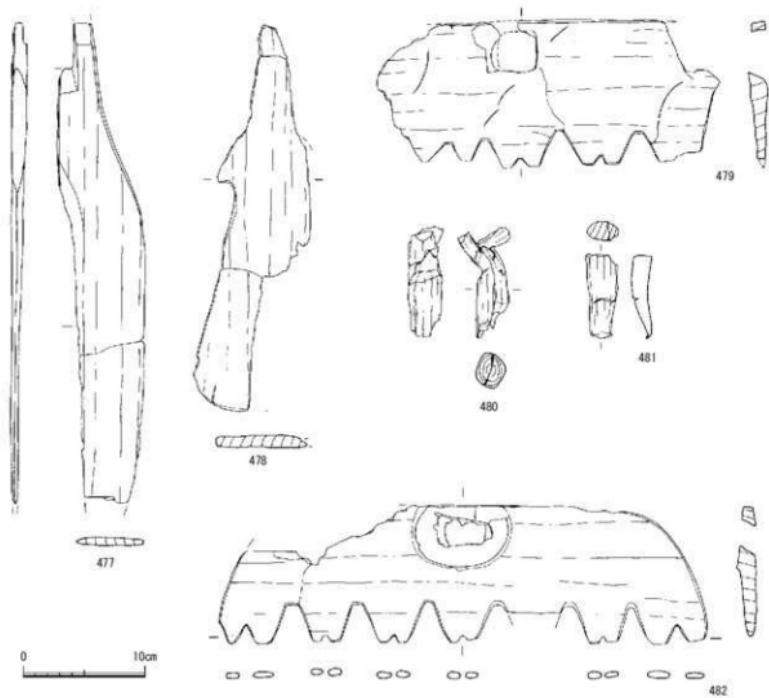
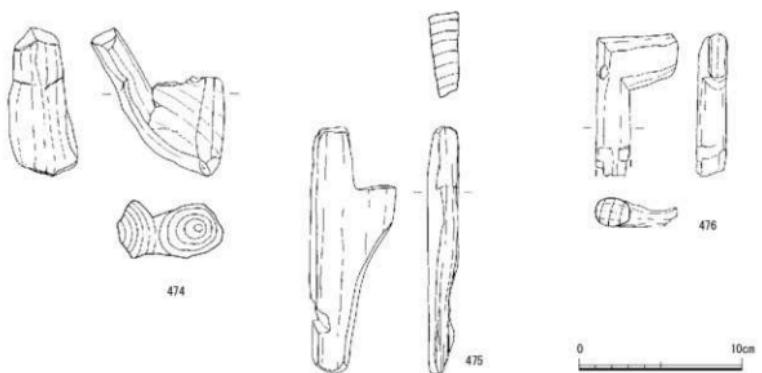
第83図 SX434・442上面出土木器実測図 (466は1/4、他は1/3)



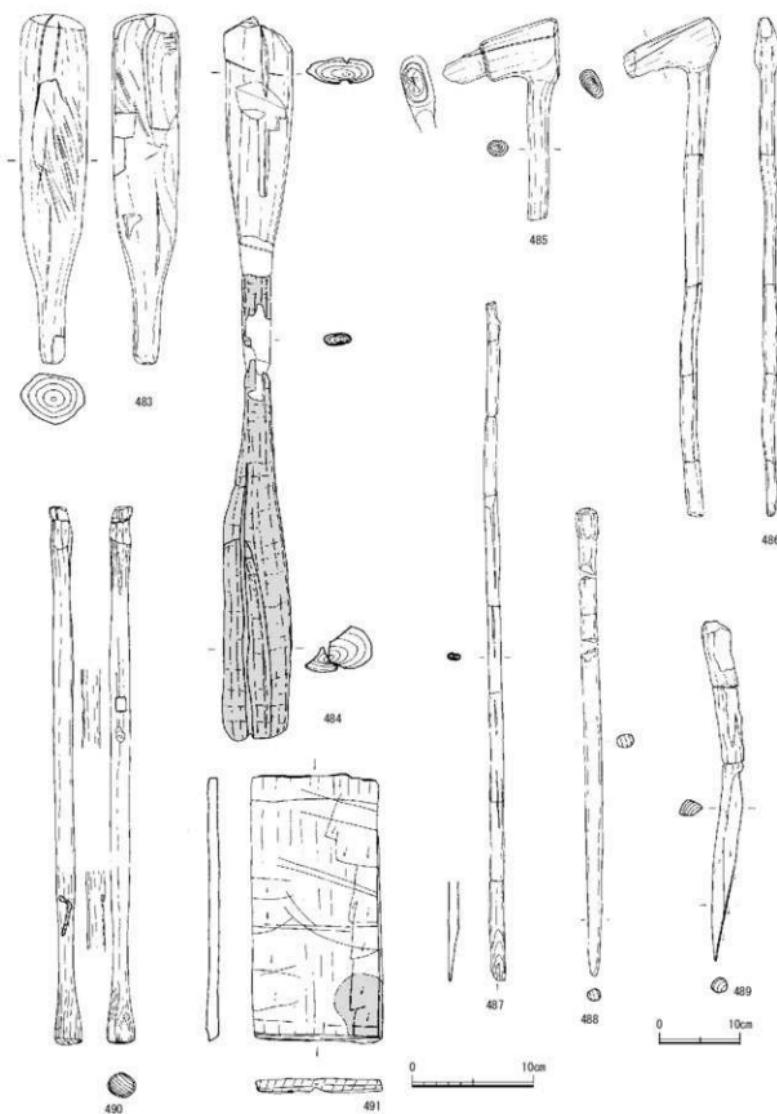
0 10cm



第84図 SX545出土木器実測図1 (469・470は1/6、471・472は1/4、473は1/3)



第85図 SX545出土木器実測図2 (474~476は1/3、他は1/4)



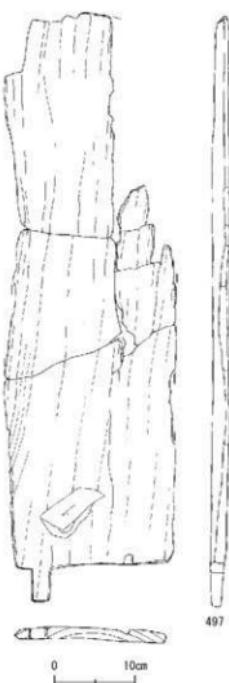
第86図 SX545出土木器実測図 3 (491は1/4、他は1/6)



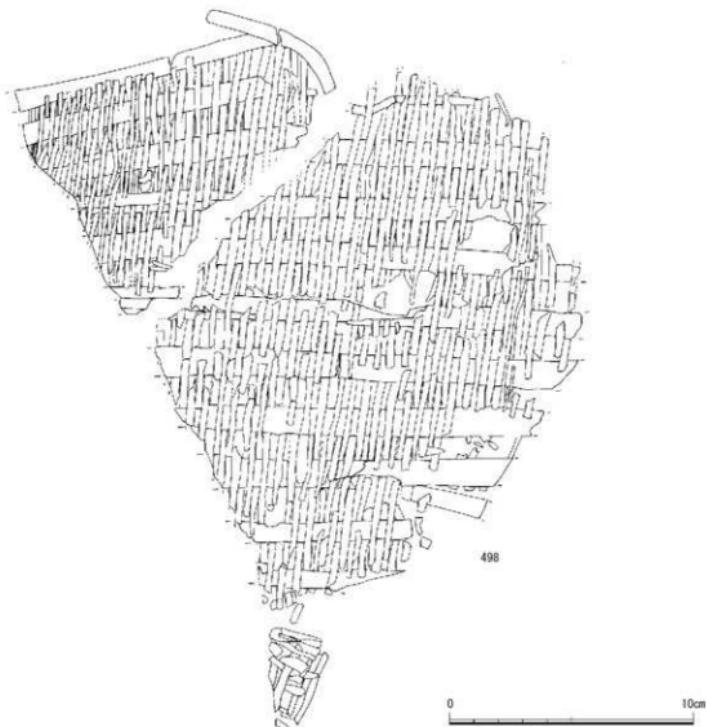
第87図 SX545出土木器実測図4 (496は1/10、他は1/6)

に径1.2~1.3cmの竹菅刺突円形浮文を2つ単位で付ける。畿内系。786は泥岩の小型砥石で、4面に長軸方向の線状擦過痕がみられる。SX068(第103図)576は布留式甕。SX069(第103図)577は小型丸底壺。底外面はケズリ痕をミガキで消している。SX070(第103・104図)578は土師器坏で、回転ミガキ後の口縁部内面に斜位のハケメを施す。579は土師器の壺。胎土に雲母やや多い。580は大型壺。581・582・583は小型丸底壺。583は回転ミガキ後の口縁部内面に斜位のハケメを施す。SX071(第104図)584は大型甕の底部で、底外面にタタキの痕跡を残す。585は中型壺で、口縁部や胴部の一部が欠損しており、打ち欠き等の可能性が高い。586は小型丸底鉢で、胴部に径2mmほどの孔が空いている。孔が小さく、穿孔が焼成前か焼成後が判然としない。注口が外れたものか。587は小型丸底壺で、口縁部は打ち欠き。588は高坏で坏内面に放射状暗文を施す。SX119(第105・106・126・127・129・208図)589は布留式甕で、肩部に横位の刺突文を4点施す。胎土に雲母を特徴的に含む。590は小型甕。591は二重口縁の甕で、肩部に波状沈線を施す。592は畿内系甕。593は鉢。594は二重口縁の広口壺。595は大型の鉢。596は壺。597は小型の二重口縁壺で、胎土には雲母を特徴的に含む。598は頸部に粘土貼り付け後、ハケメ工具で刺突した甕。吉備系か。599は二重口縁壺で、口縁部は直立する。600は広口の壺。601は直口壺。602は完形の壺。603はやや大型の壺。604は大型の甕で、外面のタタキ痕はハケメで消されるが、部分的に残っている。打ち欠き穿孔が肩部と胴部に施される(図版38-18)。605・606・607は丸底鉢で、605内面に丹(赤褐色)が残る。608・609は丸底壺。610は坏で、内面はヨコハケメ後放射状暗文を施す。611・612は小型丸底壺。613は高坏。径2.5mm以下赤色粒やや多い。脚裾の一端が打ち欠かれている。614は直立口縁の高坏。615は高坏脚部。616は小型器台で上部端部に刻み目を施す。617は高坏。618は脚付き鉢。619は小型器台で、台内面の放射状暗文、脚外面の回転ヘラミガキなど非常に丁寧な仕上げが施される。脚の2ヵ所の孔は焼成後に穿たれている。胎土に径1mm以下赤色粒やや多い。781は軽石の線刻縫で、前面を中心にして縦位・斜位の鋭い線刻が施される(図版40-1)。784は玄武岩の二次加工石器で、積極的に刃部と言える部位ではなく、側面の平坦面から砥石利用が考えられる。792は細粒砂岩(岩石No.2類似)の砥石で、表面のみ砥面となる。面の端に辺に沿って砥面が形成されており、中央部分は素材の凹凸が研ぎ残っている。802は礫岩の角縫で、部分的に被熱・黒色化しており、支脚石と考えられる。1518は不明土製品で、底面と思われる平坦面を持ち、内側は剥落する。胎土に赤色粒と植物碎片を特徴的に含む。全体に調整は行わず、焼成時と思われる細かい亀裂が入る。支脚か(図版41-3)。

SX177(SX455)(第96・108・124・125図)620は二重口縁の壺。534はチヤノキ属の把手付方形容器で、短辺部にわざかな突起を作り出す(図版38-14)。炭素14年代は2世紀中頃から3世紀中頃を示す(第

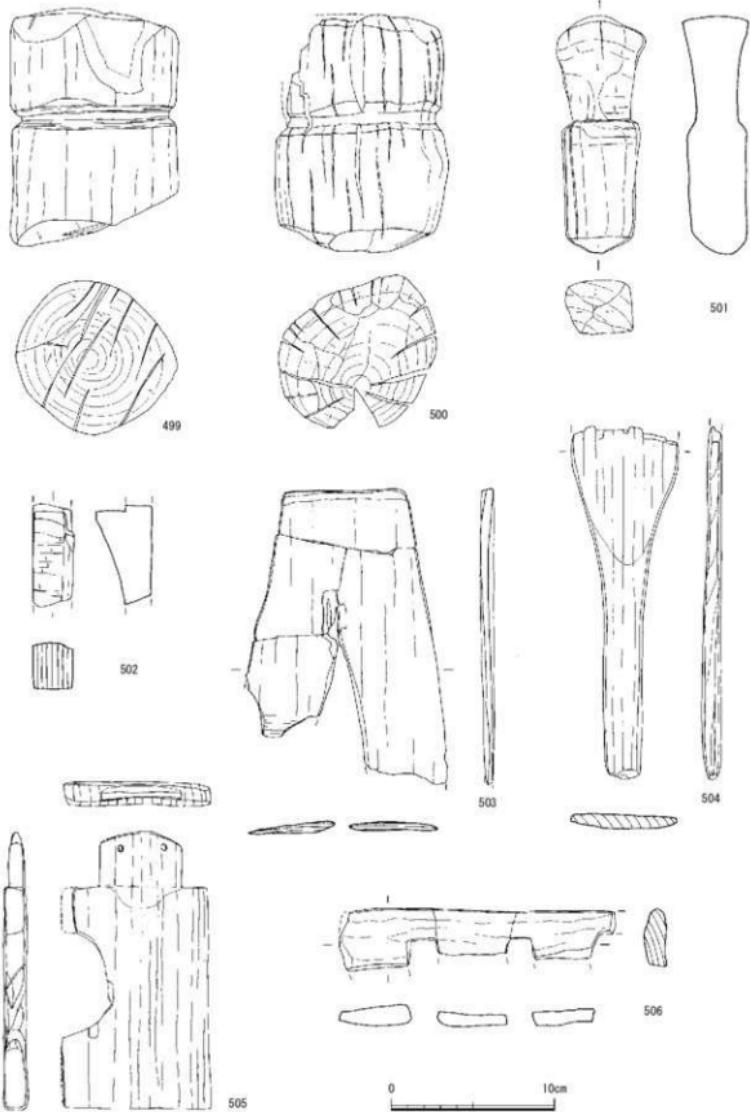


第88図 SX545出土木器実測図5(1/6)



第89図 SX545出土木器実測図6 (1/2)

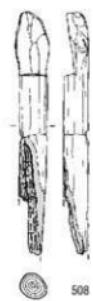
14表)。769は粘板岩の石剣。777は角閃石片岩の砥石片の1辺を刃部として二次加工する。刃端部は摩滅する。 SX653 (第108・124・126・127・128図) 621は壺で、底部に打ち欠き穿孔がみられる。胎土に径5mm以下赤色粒多い。622は甕で、肩に波状文を施す。623・624は二重口縁の甕。山陰系。625は小型丸底壺で、体部と口辺部の境が緩やかで全体にやや粗い作りである。626は小型丸底鉢。口辺部が短い。古相。627は高坏で、脚に径1cmの穿孔を2ヶ所施す。628は小型器台で脚に径7mmの穿孔を3ヶ所施す。770は頁岩の磨製石剣片。782は頁岩の二次加工剥片で、片面に浅く細い線状痕と深く太い線刻が施される。全体に磨滅している(図版40-2)。790は細粒砂岩の大型砥石で、全面が平滑だが、特に表面・右面がよく研がれており、右面が長軸方向の線状痕とともに使い込まれた砥面を形成する。796は花崗岩の亜角礫で、両面に凹みが形成される。部分的に被熱・暗色化する。 SX200 (第109・123図) 629は直口の甕。630は中型の鉢。SX201の破片と接合した。762はヒノキの板状製品で、隅丸楕円形を呈す(図版39-10)。 SX074 (第109・211図) 631は二重口縁壺。632は小型器台で、上部内面に放射状の暗文が施される。1536は不明土製品で、接合しない同一個体小片もあり、最もまとまった個体である。口縁部が肥厚する、上面観方形の容器として復元している。内面だけが器面剥落して強く風化し、縦位・横位の細かい擦痕が形成される(図版41-10)。 SX073 (第109図) 633は小型丸底鉢で、口縁部



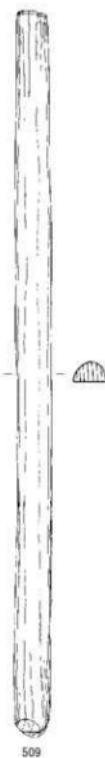
第90図 SX546・547上面出土木器実測図1 (1/3)



0
10cm



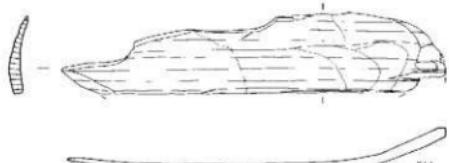
508



509

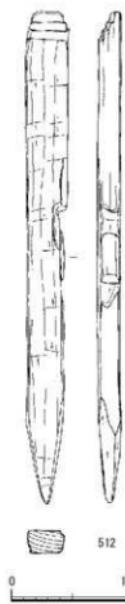


510



511

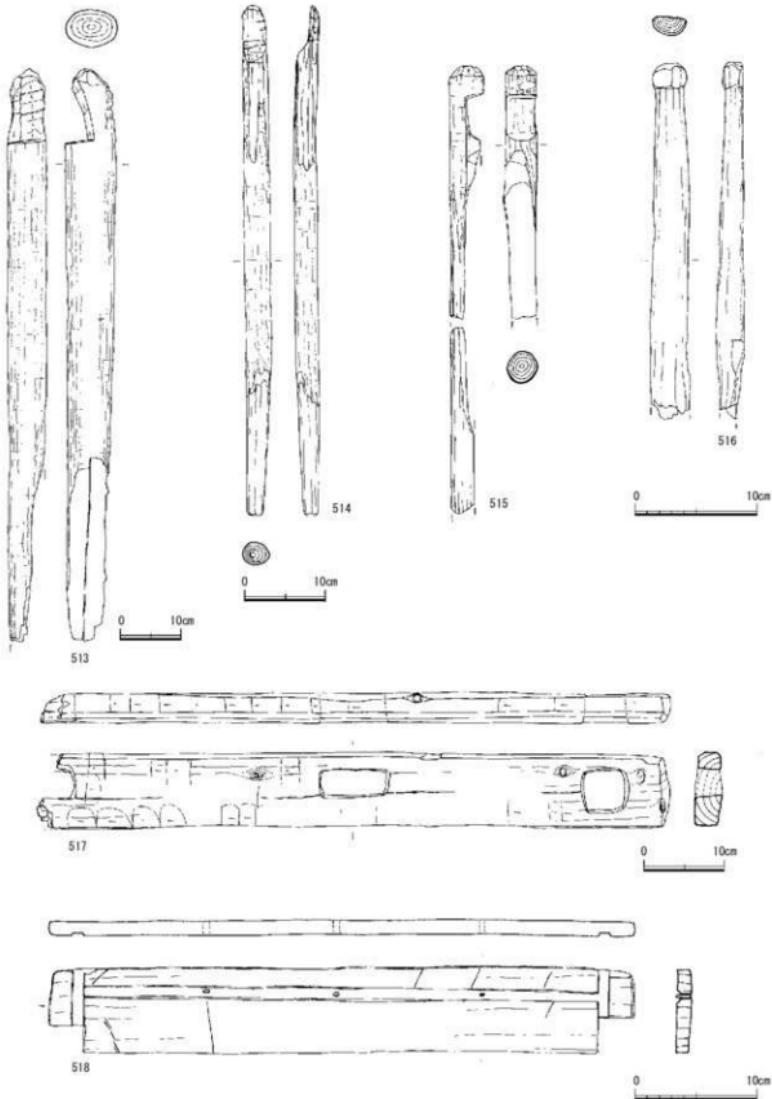
0
10cm



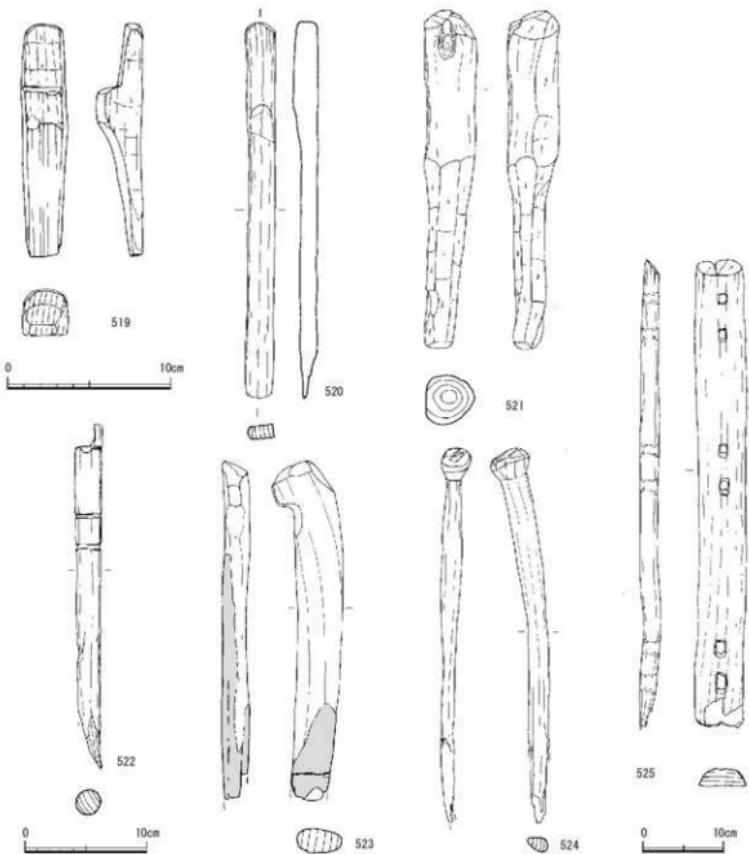
512

0
10cm

第91図 SX546・547上面出土木器実測図2 (507・508は1/8、512は1/4、他は1/6)

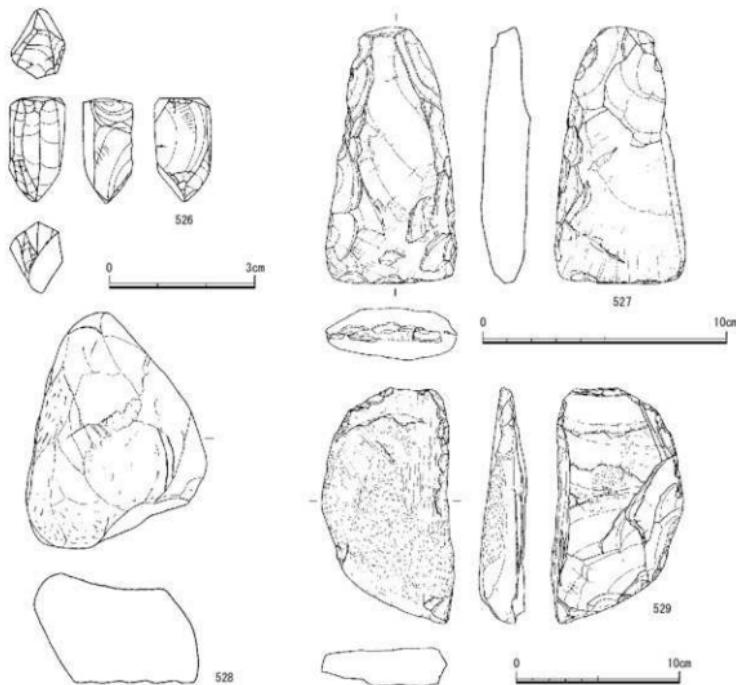


第92図 SX546出土木器実測図 (513は1/8、514・517は1/6、他は1/4)



第93図 SX547出土木器実測図 (519・520は1/3、525は1/6、他は1/4)

と胴部の境は明瞭でなく、ハケメとナデで粗い仕上げである。634は支脚で、頭部が丁寧に作り出されている。SX072(第109・129図) 635は小型器台で、上縁部はやや開く。脚には径1cmの穿孔が3ヶ所施される。636は中型の丸底鉢。口縁が直立する。637は小型丸底鉢で、口径に比べて器高が低く、平たい形態をなす。古墳時代前期土器でも新相を呈す。804は花崗岩の自然縞で、部分的に被熱・変色している。平坦面を接地面とした支脚石と思われる。12(G5)区(第110図) 638は甕で、外面は平行タタキ。胎土に角閃石を特徴的に含む。639は大型の二重口縁壺。640は二重口縁壺。641は二重口縁壺。胎土に雲母多い。642は小型壺。643は精製の高杯で、脚との接合部に連続的に細沈線状の刻みを施している。胎土に雲母多い。644は二重口縁壺の口縁部端片で、内外面に小波状沈線文を施す。SX670の552(第100図)と同型。646は二重口縁壺口縁部で、外面に小波状沈線文を施す。土器群Dの

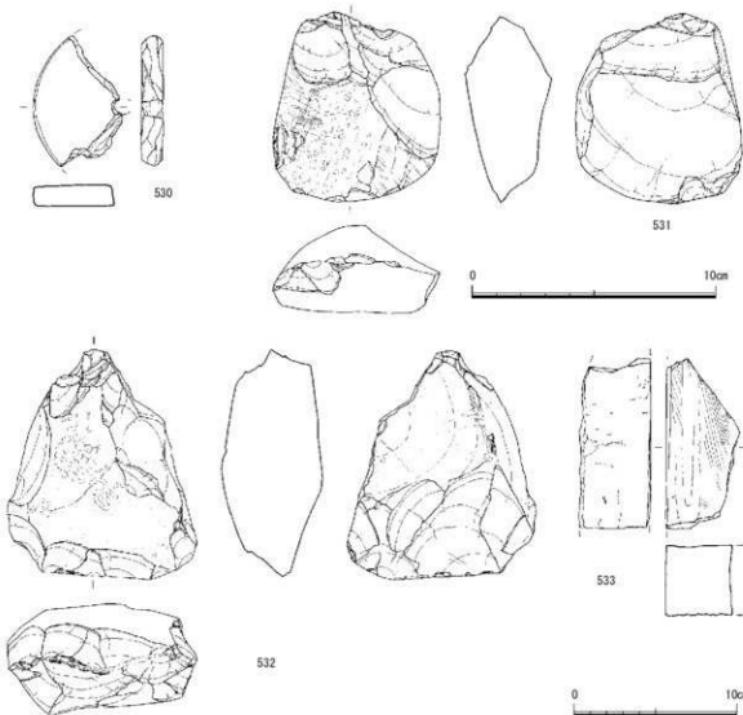


第94図 SX545出土石器実測図（526は1/1、527は1/2、他は1/3）

740（第120図）と同型で、個体は違うが胎土や色調も似る（図版39-1）。647は鼓形器台。胎土に雲母多い。 15(66)区（第110・124・125図） 645は壺で、内面は回転ナダで、上方に跳ね上げて終わる。767は細粒砂岩（岩石No.2類似）の石剣未成品。772はボルンフェルスの挿入柱状石斧未成品。 土器群中（第206図） 1480は投弾。

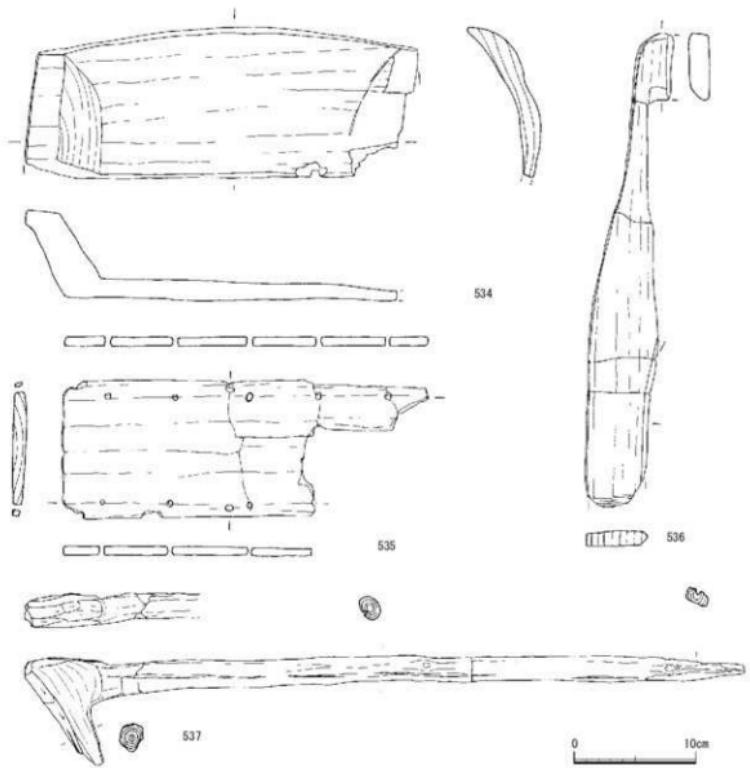
<土器群C出土遺物> コンテナケース21箱の未國化土器がある。

SX076（第127図） 789は頁岩質砂岩の砥石。 **SX082**（第211図） 1538は不明土製品。上面觀闊丸方形の容器状として復元している（図版41-11）。 **SX081**（第111図） 648は土師器の壺。649は小型丸底壺。SX079出土破片と接合した。 **SX080**（第210図） 1534は不明土製品。円盤形で、中央に突起状に残る。円盤の端部は波打った粗い仕上げ。表面の一部にハケメの痕が残り、裏面の上半分が黒色化する。脚裾か（図版41-8）。 **SX226**（第111図） 650は布留式壺で、5箇所の刺突が施される。胎土に灰黄色粘土粒を特徴的に含む。 **SX083**（第111図） 651は土師器の壺で、頸部付け根に幅1mmの沈線をめぐらし、その上下、頸部と肩部にハケメ工具による刺突で羽状文を施している。SX078・086の破片と接合した。 **SX084**（第111図） 652は高壺で、脚部に径7mmほどの孔を4ヵ所穿つ。 **SX087**（第111図） 653は二重口縁壺で、胎土に金雲母を多く含み、褐色を呈すなど特徴的な胎土、色調を示す。SX082出土土器に同一個体が含まれていた。 **SX086**（第111図） 654は小型高壺。脚端に幅5～8mmの小さな打ち欠



第95図 SX546・547出土石器実測図 (530・531は1/2、他は1/3)

きが2ヶ所認められる。 SX085(第111図) 655は小型丸底壺。656は小型丸底鉢。655・656とともに口縁部は短く、わずかに内湾し、底部は平底気味である。古相。 SX090(第111図) 657は小型丸底鉢で、器高が低く、口縁が開いている。658は小型器台で、上縁部はやや直立する。脚部に2ヶ所の穿孔を持つ。新相。 SX089(第112図) 659は布留式壺で、肩部に短斜位の刺突文を6ヶ所施す。右側には連続しないで終わっているが、左側は欠損していて不明。 SX088(第112図) 660は壺で、口縁部を大きく打ち欠いている。661は鉢で口縁部を打ち欠いている。内面はハケメ後、ユビナデで粗く放射状にナデ消す。 SX095(第112図) 662は土師器の壺口縁部で、胎土は精良、調整も回転ヘラナデで精製に仕上げており、器台などと同じような作りになっている。 SX094(第128図) 797は花崗岩の亜角砾で、両平坦面に磨り面が、片面に浅い凹みが形成される。 SX092(第112図) 663は土師器二重口縁壺で、肩部に2単位の円弧文を施す。664は小型丸底壺。665は小型器台で、脚部に径0.9cmの穿孔を3ヶ所施し、台部中央に径0.2cmの穿孔を施し、脚部根の一端を打ち欠いている。666は大型の二重口縁壺。南東側のSX099・102・115・116・117出土破片と接合する。 SX097(第112図) 667は土師器高杯。 SX099(第112図) 668は土師器壺で、二重口縁が退化している。 SX101(第113図) 669は中大型の壺。670は直口壺。671は二重口縁壺で、外面肩部に横位の円弧文、内面に縦位の沈線が認められる。

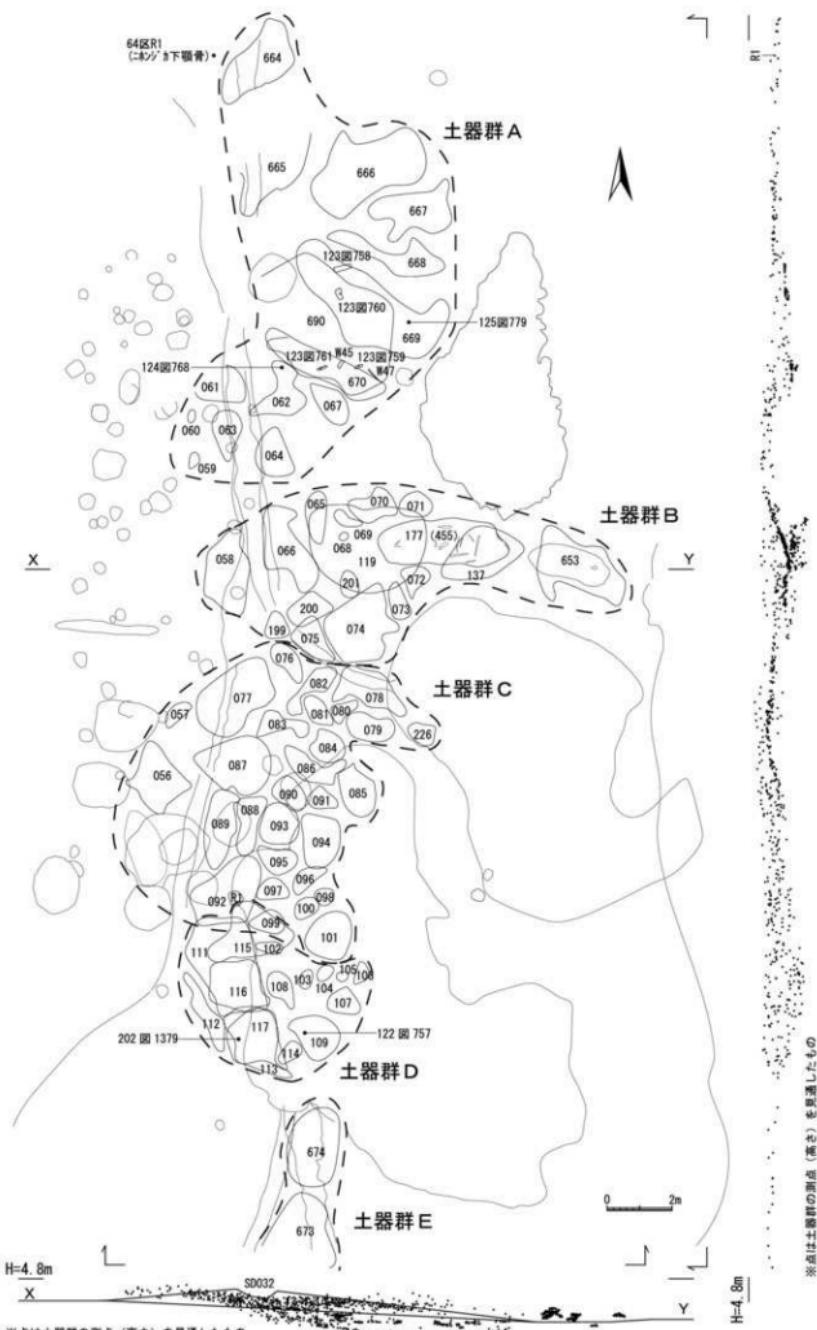


534 SX177下 535・536 SX435 537 SK447

第96図 SX177下・435・SK447出土木器実測図 (1/4)

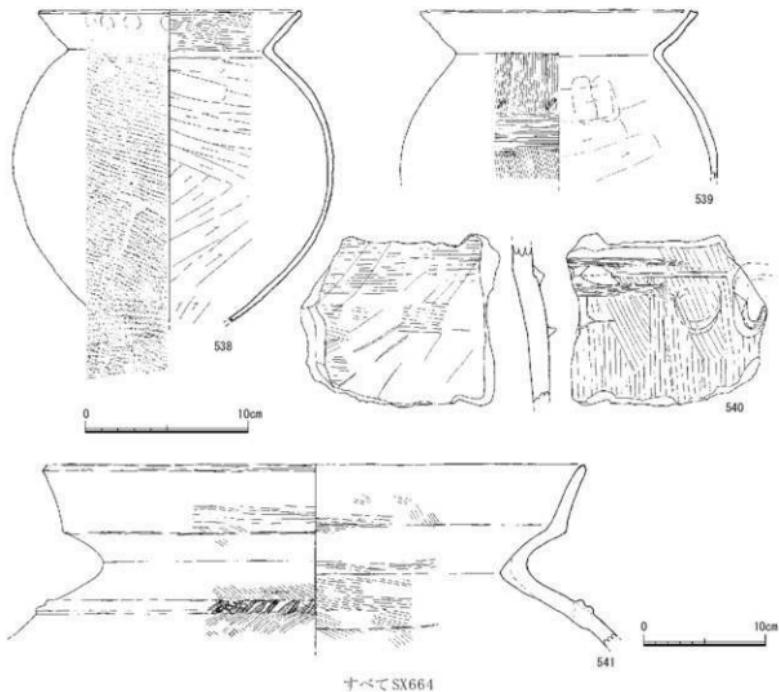
外面沈線はSX092の663(第112図)に類似する。672は大甕(壺)。粘土帯の貼り付けと、粘土帶積み上げの接合部分が対応しており、貼り付け粘土帶は斜位の板状ハケメ工具刺突で押付けられている。673は中型の甕。674は壺。675は小型丸底鉢。676は小型丸底壺。677・678は高壺で、677は壺部が丸みを帯びる。新相。 9(H4)区(第114図) 679は甕で、外面に平行タタキを残す。680・681は二重口縁壺で、3連、4連の円形浮文と小波状沈線文が施される。径2.5mm以下の石英・長石を多く含む(図版39-2)。682は二重口縁の甕。山陰系。683は高壺。684は壺で、口縁部端が剥落する。685・686は二重口縁壺。687は小型鉢。688は小型丸底鉢。689は小型の鉢。690は精製の小型壺。691は弥生土器の器台。 13(H5)区(第115図) 692は高壺。693は完形品の小型高壺。694は壺部の小さい高壺で脚に焼成前穿孔を3ヶ所施す。胎土に雲母多い。 土器群南(第115・205図) 696は鉢か壺で、頸部に粘土紐を巻き付け、ハケメ工具で斜位の刺突刻みを施す。1438は外面炭素吸着した鉢底部を転用した土製円盤。表裏面に細かい擦痕がみられる。

<土器群D出土遺物> コンテナケース21箱の未図化土器がある。



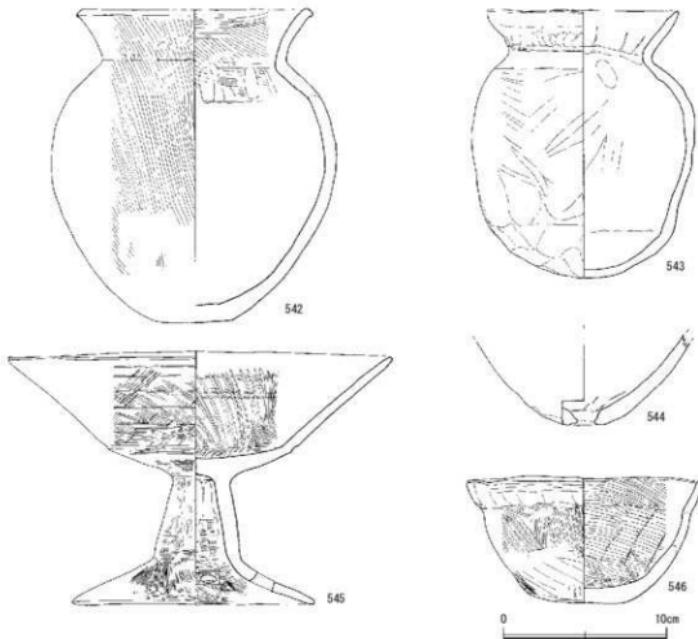
第97図 土器群範囲実測図 (1/150)

SX111 (第116・124・128図) 697は甕で、肩部に斜位の刺突文を不揃いの間隔で施す。698は二重口縁壺。699は壺。700は高坏で、脚部据付け根に径4mmほどの小さい穿孔を4ヵ所施す。701は甕底部で、外面に平行タタキ残る。702は小型丸底鉢。703は高坏で、坏部内面に平行集線ミガキで暗文を施す。764は黒曜石の石鏃。798は砂岩の砥石を転用した回石。表面は研がれて平滑化し、中央が敲打によって凹む。裏面は砥面を形成せず、中央が凹む。 SX102 (第116図) 704は甕で、外面肩部に斜位の刺突文を施す。705は甕で、外面肩部に波状文施す。 SX103 (第116図) 706は鉢で、上げ底状の平底を呈し、外面には縱方向のケズリ痕跡を残す。 SX104 (第116図) 707は丸底鉢。 SX105 (第116図) 708は布留式の甕で、肩部器面の半周分ほどの範囲に弧状の沈線文を施す。 SX115 (第117・200図) 709は布留式甕で、肩部に径2mmの棒状工具による刺突文が施される。710は小型の布留式甕。711は甕で、肩部に5条の細沈線で横位平行文を描くが、部分的に平行が振れ、波状を呈す。712は丸底の鉢で、内面を粗くミガキ調整し炭素吸着で黒色化させている。713は壺。714は小型丸底壺。715は丸底の小型鉢。716は高坏で、坏部、脚部とともに一端を欠く。717は鼓形器台。1376は小板状鉄片で、下端は薄くなる。鉄素材か。 SX116 (第118・128図) 718は小型の甕で、肩部に長さ10cm程度の緩い波状の沈線を描く。719は尖底土器の底部に径1.2~1.3cmの孔を焼成前に穿っている。720は小型丸底鉢で、口縁は直立し、細かく欠損する。795は砂岩の回石。やや粗い密度の石材。 SX108 (第118・129図) 721は布留式甕。



第98図 土器群A出土土器実測図1 (541は1/4、他は1/3)

722は小型壺で底内面にコゲが残る。723は土師器の小型壺で、底部に打ち欠き穿孔が施される。724は小型鉢で、胎土に微細な雲母を含む。805は砂岩の角礫で、部分的に底面が形成され、被熱・変色・劣化を起こしている。砥石転用の支脚石。 SX107(第118図) 725は壺の小平底。古相。726は小型壺。727は壺で、肩部にハケメ工具で6条の沈線をめぐらす。728は高坏で、脚部に2ヶ所の穿孔を施す。坏部内面にはやや右に傾いた放射状の暗文を施す。 SX112(第119・122図) 729は器台の下部。730は土師器の小型壺。外面に平行タタキ痕を残す。756は鏡形土製品で、縁辺の打ち欠きがみられる(図版39-7)。 SX111~114(第119・202・203図) 731はSX114出土の小型の二重口縁壺。1379はSX113出土の蛇紋岩の勾玉(図版23-3)。1410は土製勾玉で、腹部が凹んでいる。1413・1414・1415は土製管玉で、細身で形状がやや歪んでいる。 SX117(第119図) 732は布留式壺で外面には長いストロークのハケメが残る。733は坏。 SX109(第115・119図) 695は丸平底で球胴の壺。734は布留式の壺で、肩部に長さ17cm(1/3周)ほどの横位沈線を施す。735は大型壺。城ノ越式甕棺。736は坏。737は小型丸底鉢。738は台付壺で、体部に打ち欠き穿孔が認められる。757(図版22-2・39-8)は鏡形土製品で、鉢孔は3mmほど。 10(14)区(第120図) 739は二重口縁壺で、口縁部に小波状文をめぐらし、二重の円形浮文を3つ付する。小波状文は上下端の沈線が太く、縁取られている。内面にも小波状文を施す(図版39-3)。740は壺で、内外面ともに灰色化する。肩部に2段の小波状沈線文を施す。その下に「」状の浅い刺突を特徴的に施す(図版39-4)。741は二重口縁壺で、口縁部にハケメ工具での斜位の刺突



すべてSX665

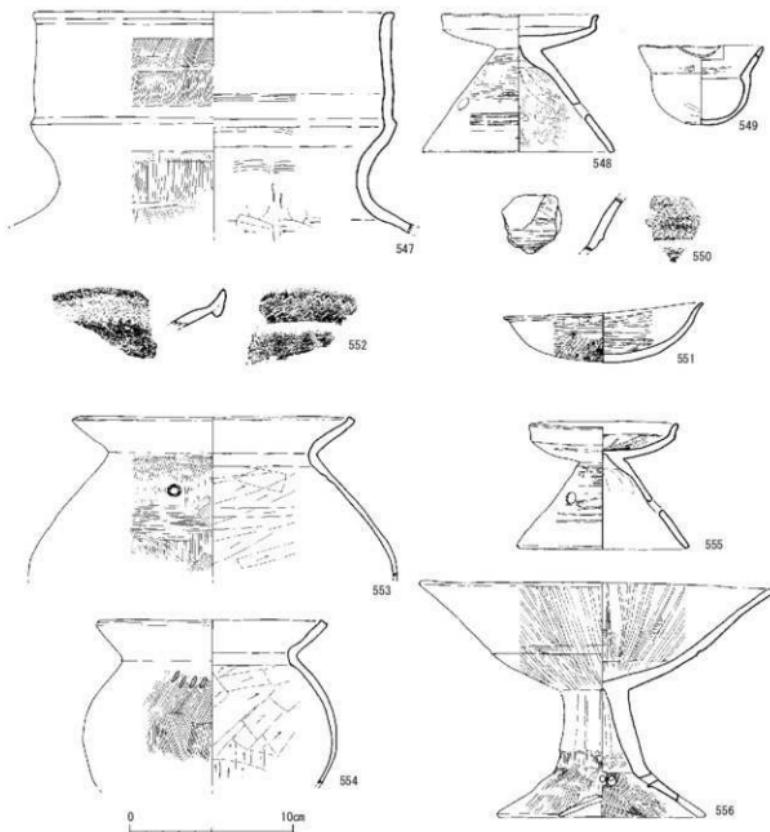
第99図 土器群A出土土器実測図2 (1/3)

文を5ヶ所施す。外面の一部が黒色化し破断面に連続することから、二次的な被熱を受けている。742は精製二重口縁壺の擬口縁部。743は大型の片口鉢（図版39-5）。744は精製土師器の鉢か壺の底部。745は坏。ミニチュアか。746は精製の坏。外面に炭素吸着させる。1515は不明土製品。接地面らしき平坦面はある。

<土器群E出土遺物> コンテナケース4箱の未図化土器がある。

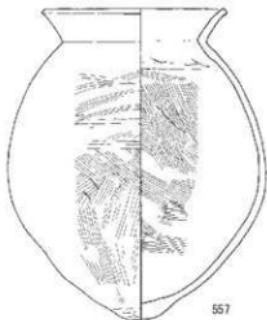
SX673 (第121図) 747は二重口縁壺。口縁部外面上端まで被熱・黒色化している（図版39-6）。752は高坏で、脚に径0.9cmの穿孔を4ヶ所施す。753は大型鉢。 67 (J3) 区 (第121・127図) 748はワイングラス形の精製高坏。787は小型砥石。4面に底面を形成する。シルト質の砂岩で比較的柔らかい。

SX674 (第121・129図) 749は完形の小型丸底鉢。750は小型壺で、肩部に斜位の短細沈線を9ヶ所

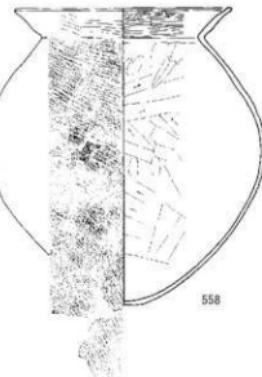


547～550 SX666 551 SX667 552～556 SX670

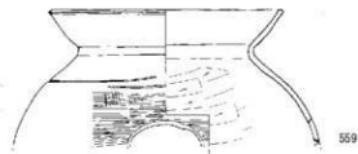
第100図 土器群A出土土器実測図3 (1/3)



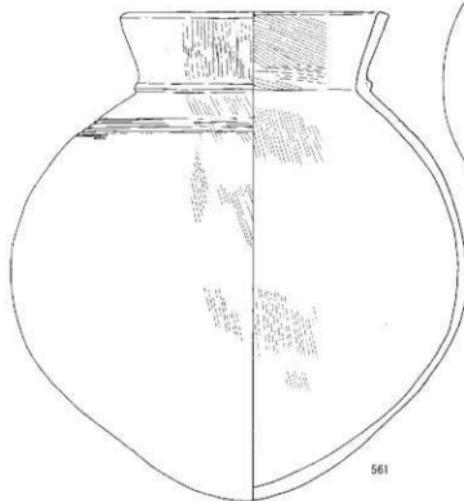
557



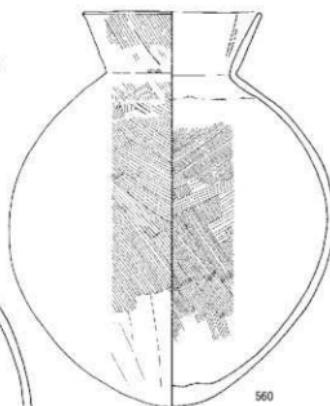
558



559



561

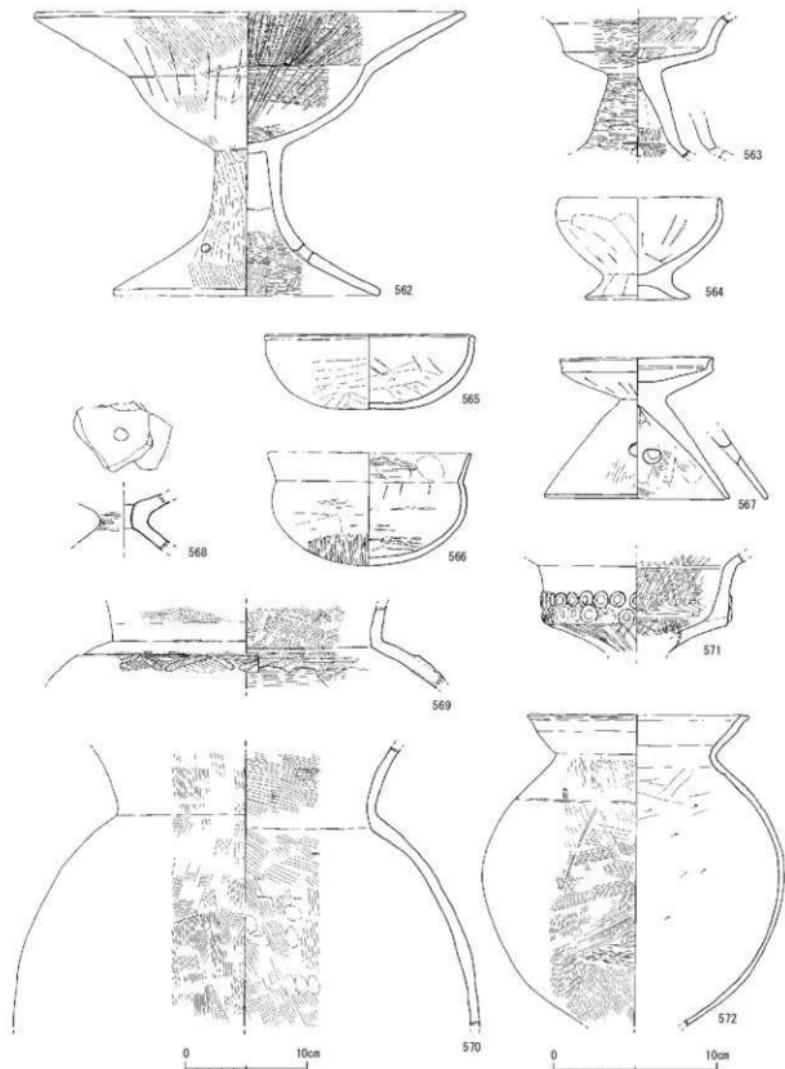


560

0 10cm

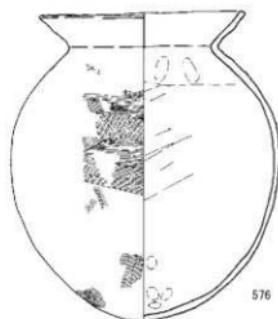
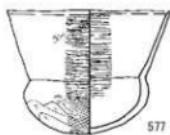
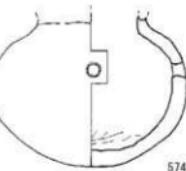
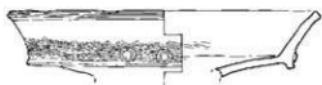
すべてSX690

第101図 土器群A出土土器実測図4 (1/4)

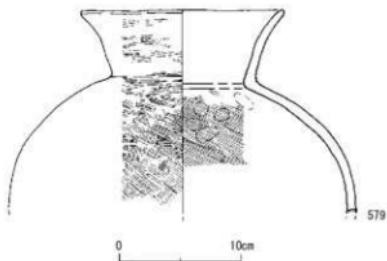


562～567 SX690 568・569 SX062 570 SX067 571 55区 572 14区

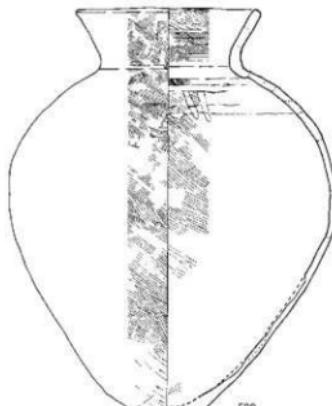
第102図 土器群A出土土器実測図5 (569・570は1/4、他は1/3)



0 10cm



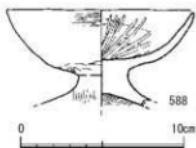
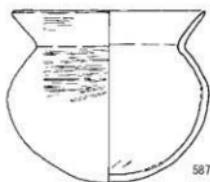
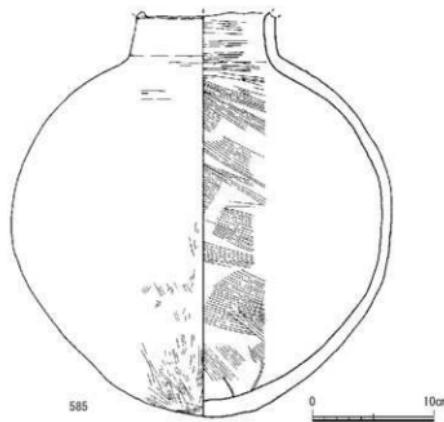
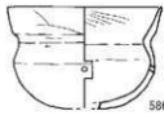
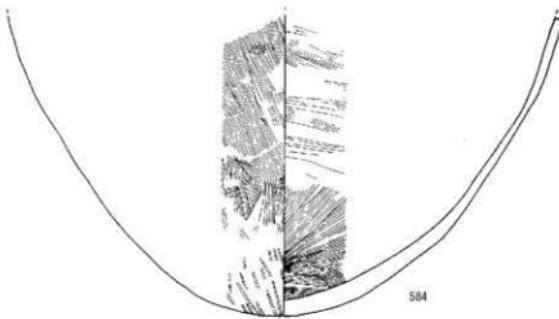
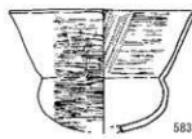
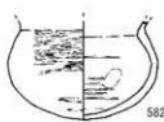
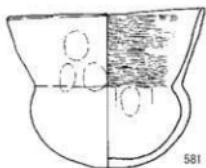
0 10cm



0 10cm

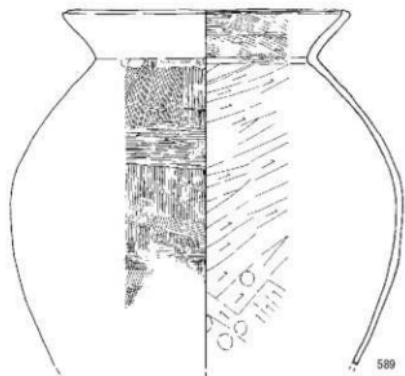
573・574 SX058 575 SX066 576 SX068 577 SX069 578～580 SX070

第103図 土器群B出土土器実測図1 (576・579は1/4、580は1/6、他は1/3)

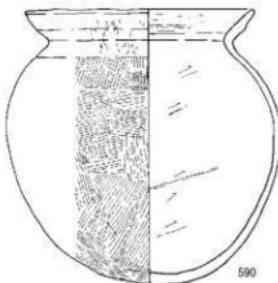


581～583 SX070 584～588 SX071

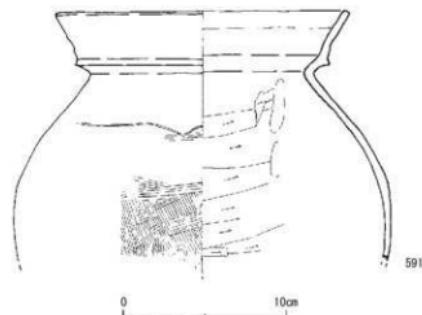
第104図 土器群B出土土器実測図2 (584・585は1/4, 他は1/3)



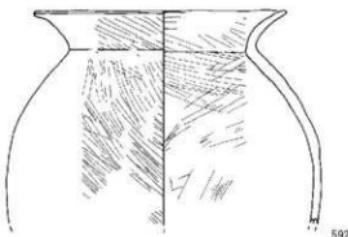
589



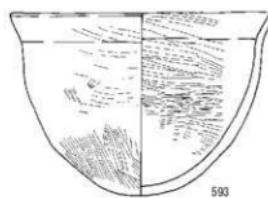
590



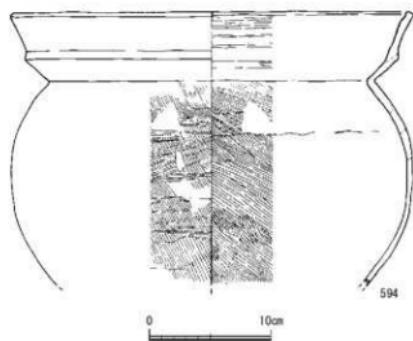
591



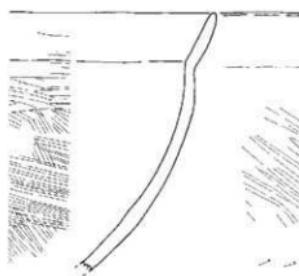
592



593



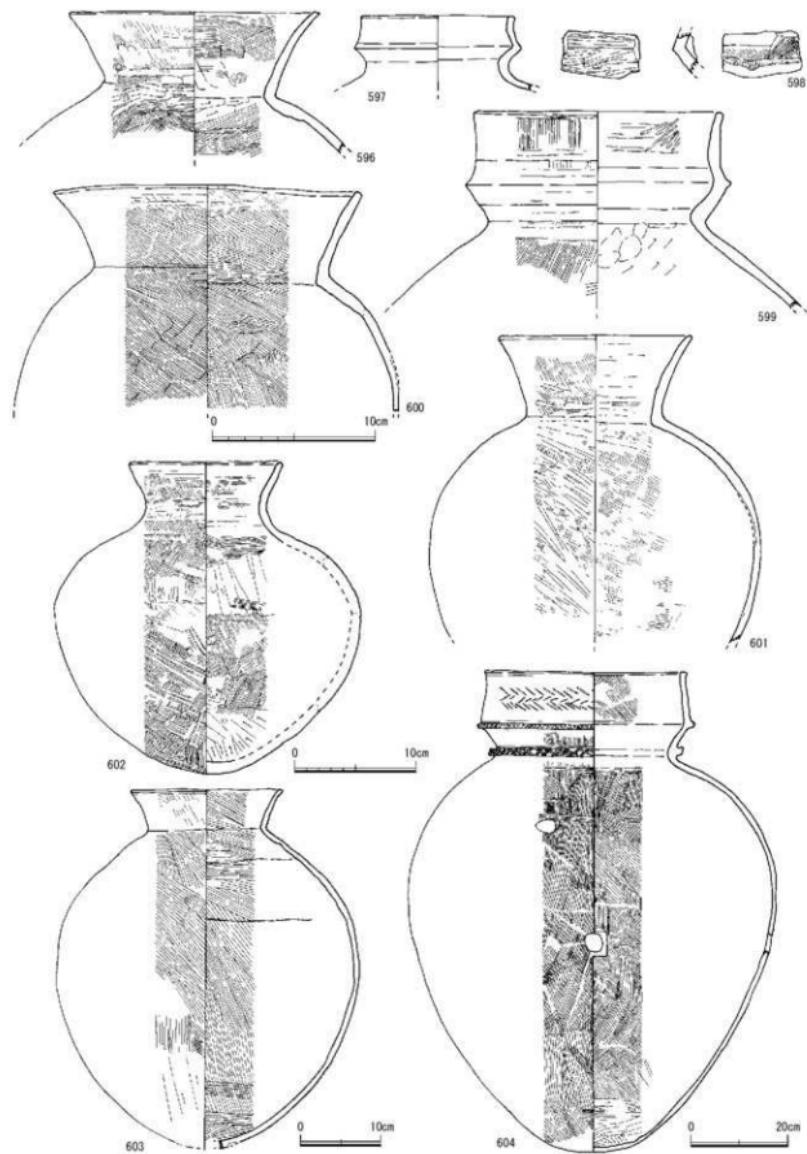
594



595

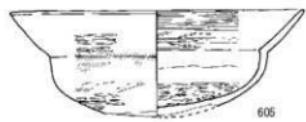
すべてSX119

第105図 土器群B出土土器実測図3 (594・595は1/4、他は1/3)

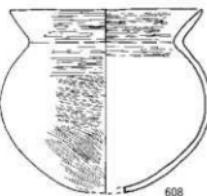


すべてSX119

第106図 土器群B出土土器実測図4 (601・602は1/4、603は1/6、604は1/10、他は1/3)



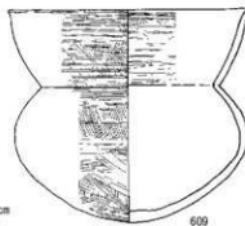
605



608



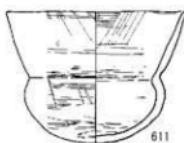
606



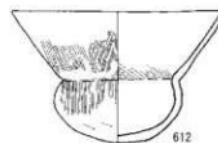
609



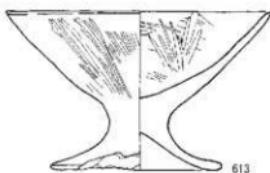
610



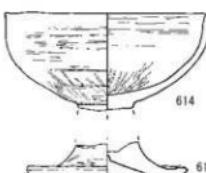
611



612



613



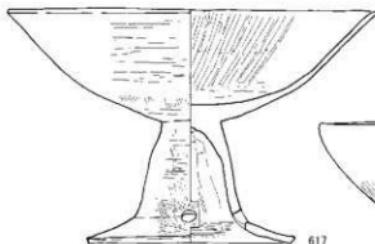
614



616



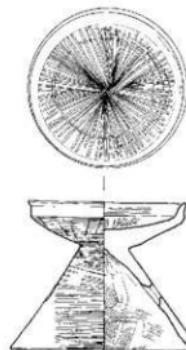
615



617



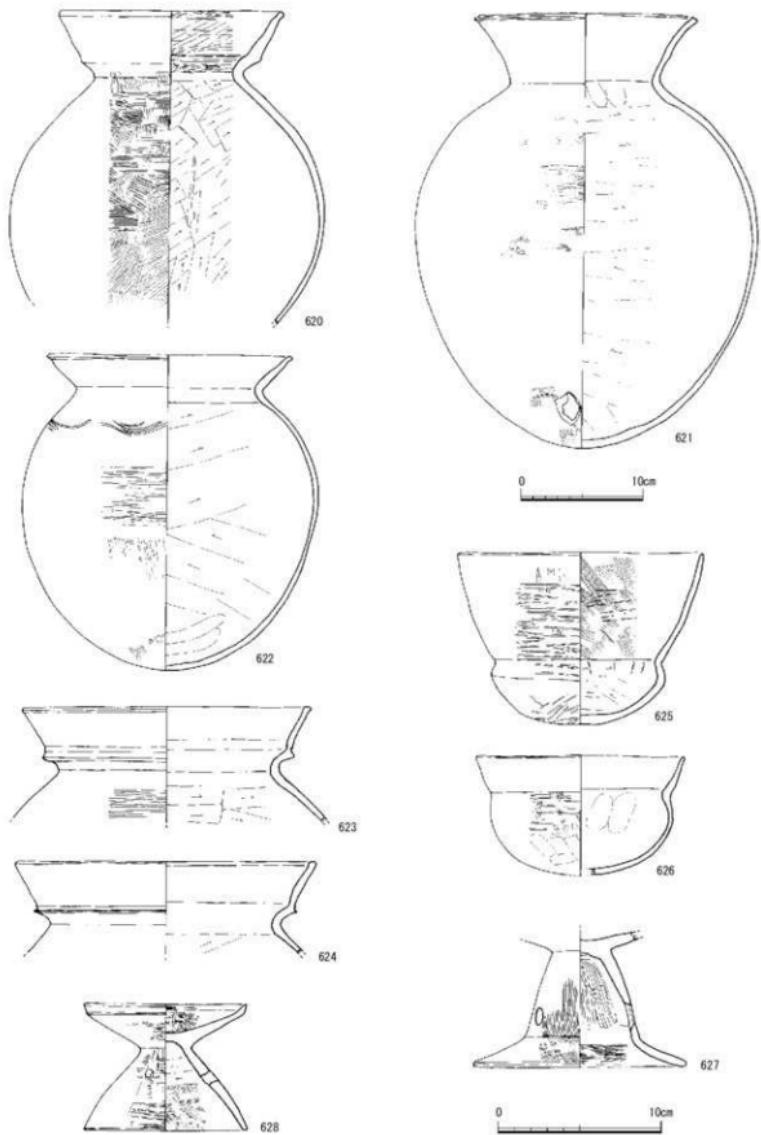
618



619

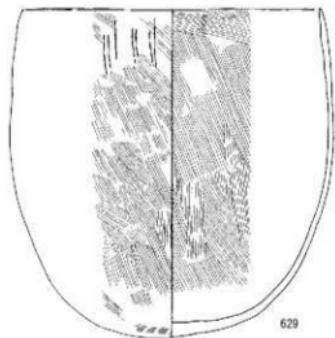
すべてSX119

第107図 土器群B出土土器実測図 5 (1/3)

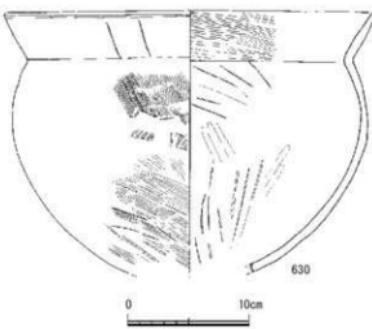


620 SX177 621~628 SX653

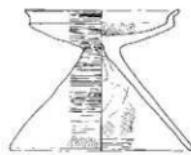
第108図 土器群B出土土器実測図6 (621は1/4、他は1/3)



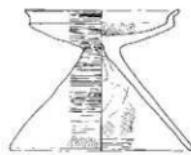
629



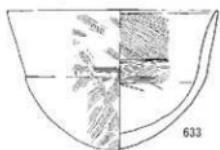
630



631



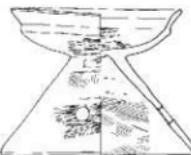
632



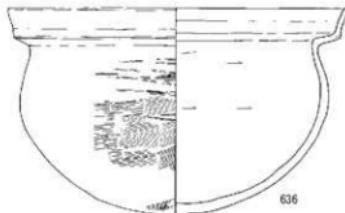
633



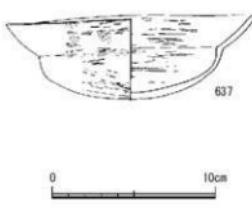
634



635



636

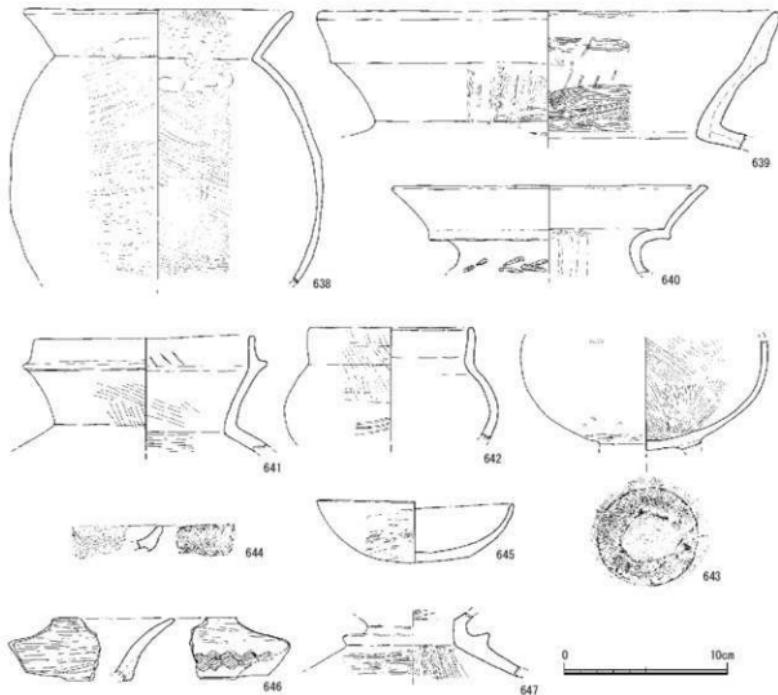


637

0 10cm

629・630 SX200 631・632 SX074 633・634 SX073 635～637 SX072

第109図 土器群B出土土器実測図7 (629・630は1/4、他は1/3)



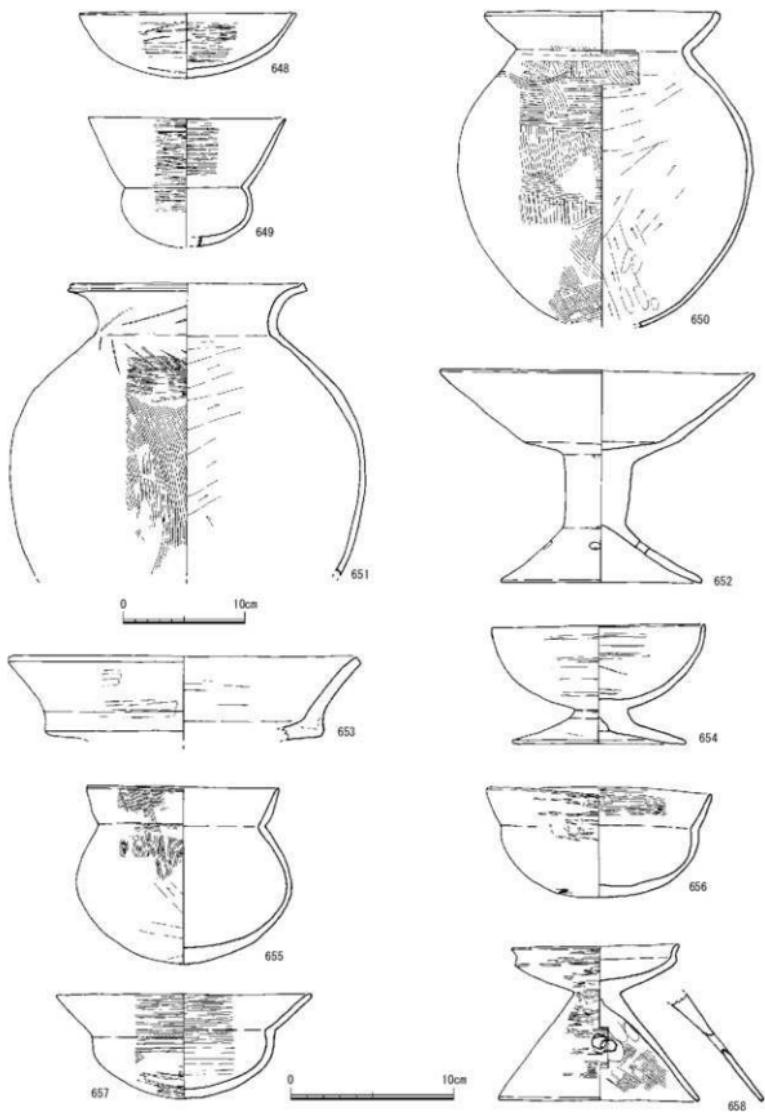
645 15区 その他 12区
第110図 土器群B出土土器実測図8 (1/3)

施す。751は小型丸底壺。754は小型丸底壺で、胴部に径1.3~1.9cmと径0.5~0.8cmの打ち欠き穿孔を施す。他にも胴部外面に径1.6~1.8cmの剥落部分もあり、穿孔に関係すると思われる。755はミニチュアの鉢。803は砂岩の支脚で、全体に被熱・黒色化し、前面が赤色化して破碎している。

9. 大溝 (SD)

SD604 (第24・130図、図版7-2)

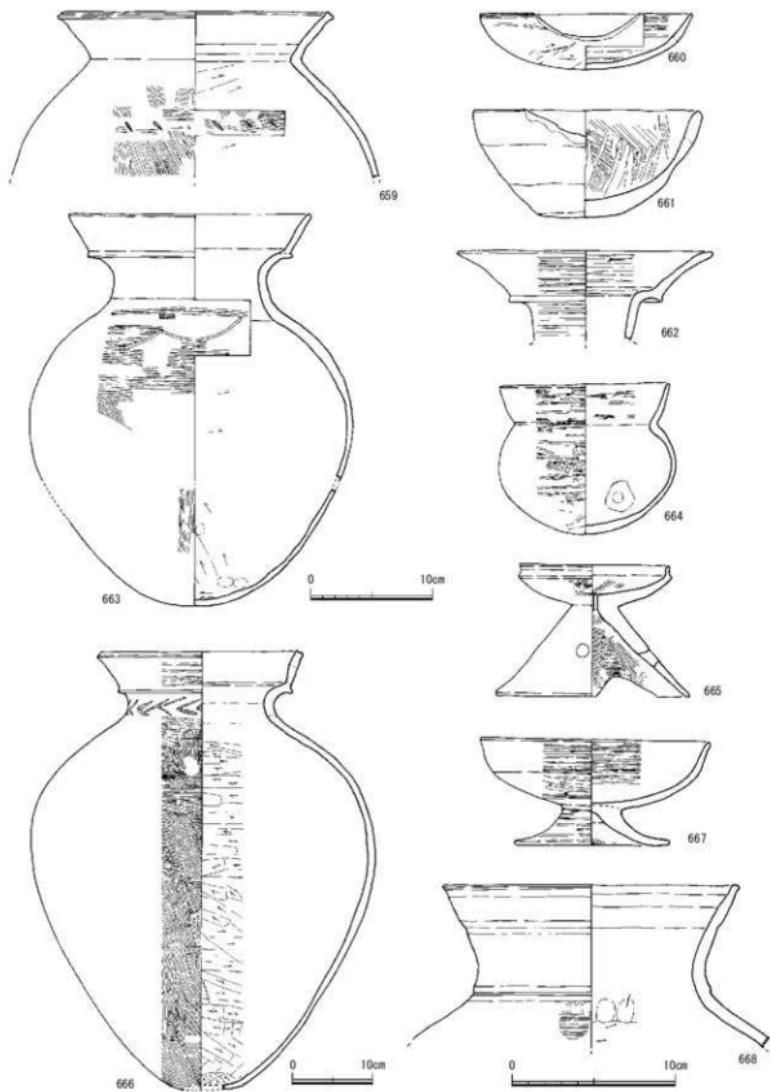
第1面検出の河川SD025に先行する河川で、幅約7m、深さ1.4~1.7mを測る。北西方向に流れ、本調査区で緩やかに北へ向きを変える。SX676杭列を介して、SX545につながる。覆土は粗砂で、粘土をほとんど挟まない。幅が一定なので人工的な水路の可能性がある。遺物の下限は5世紀前半である。出土遺物（第131~137図） コンテナケース18箱の未図化土器がある。806は大甕。伯玄式甕棺。807は甕で、底外面に木葉の圧痕がある。808は大型甕底部。伯玄式か金海式。809は丹塗り（浅黄色）壺。810は大型甕底部。伯玄式か金海式。811は大型壺の底部。812は内領口縁の甕で、口縁部に縦長の刺突文を施す。調整は全体に丁寧なナデ調整で仕上げている。朝鮮半島系無文土器（図版39-11）。813は広口壺。城ノ越式。814は甕。城ノ越式。815は広口壺で、頸部に縦位の暗文。816は城ノ越式甕の台状底部で、外面・内面に焼成後の穿孔途中と思われる凹みがある。817は大型甕。立岩式新相。818は甕



648・649 SX081 650 SX226 651 SX083 652 SX084

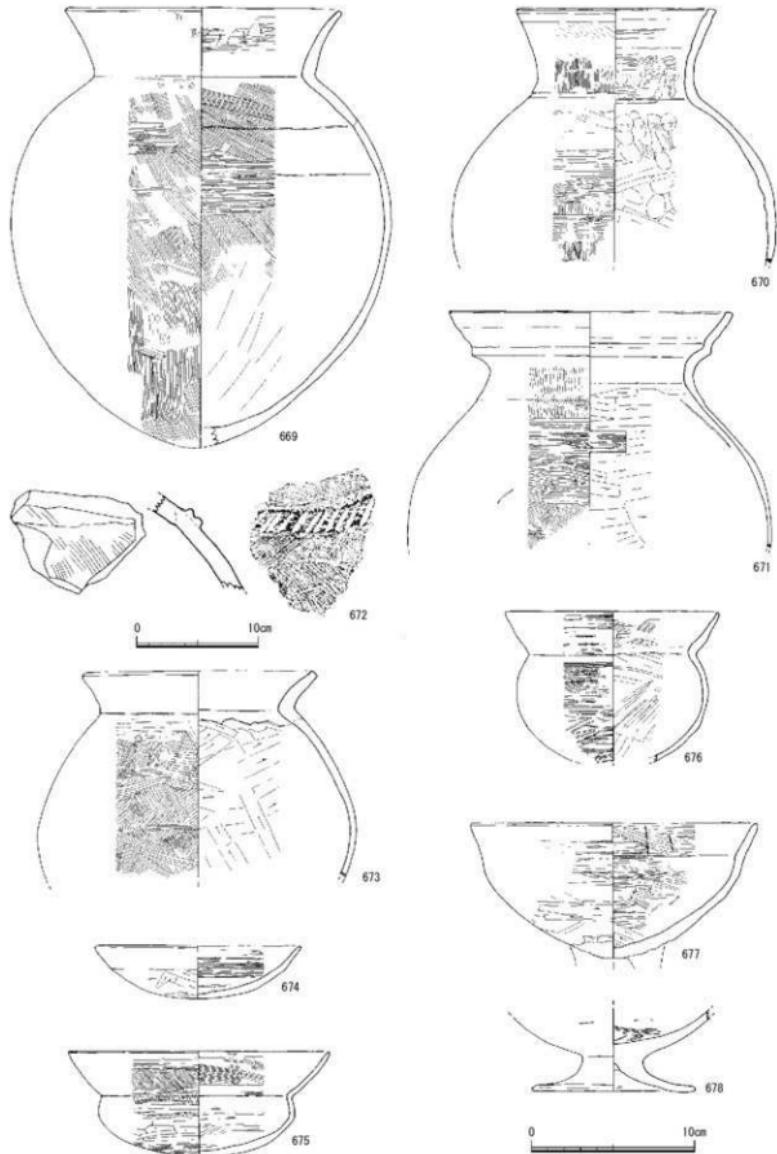
653 SX087 654 SX086 655・656 SX085 657・658 SX090

第111図 土器群C出土土器実測図1 (651は1/4、他は1/3)



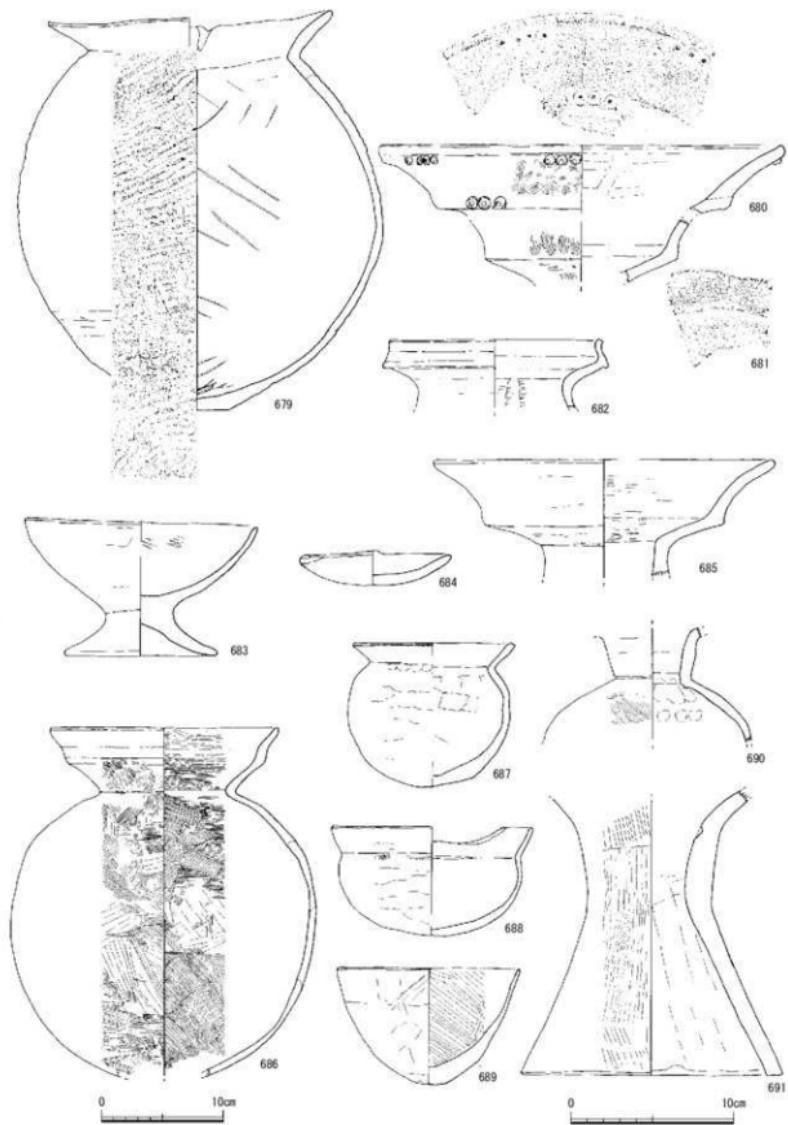
659 SX089 660・661 SX088 662 SX095 663～666 SX092 667 SX097 668

第112図 土器群C出土土器実測図2 (663は1/4、666は1/6、他は1/3)



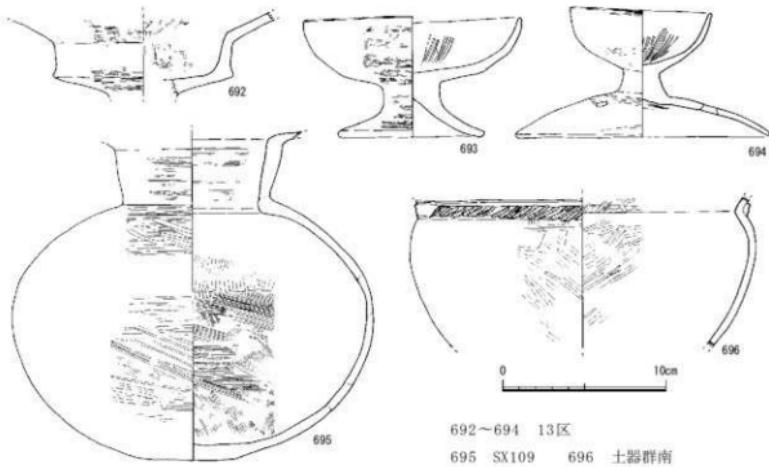
すべてSX101

第113図 土器群C出土土器実測図3 (669~672は1/4、他は1/3)



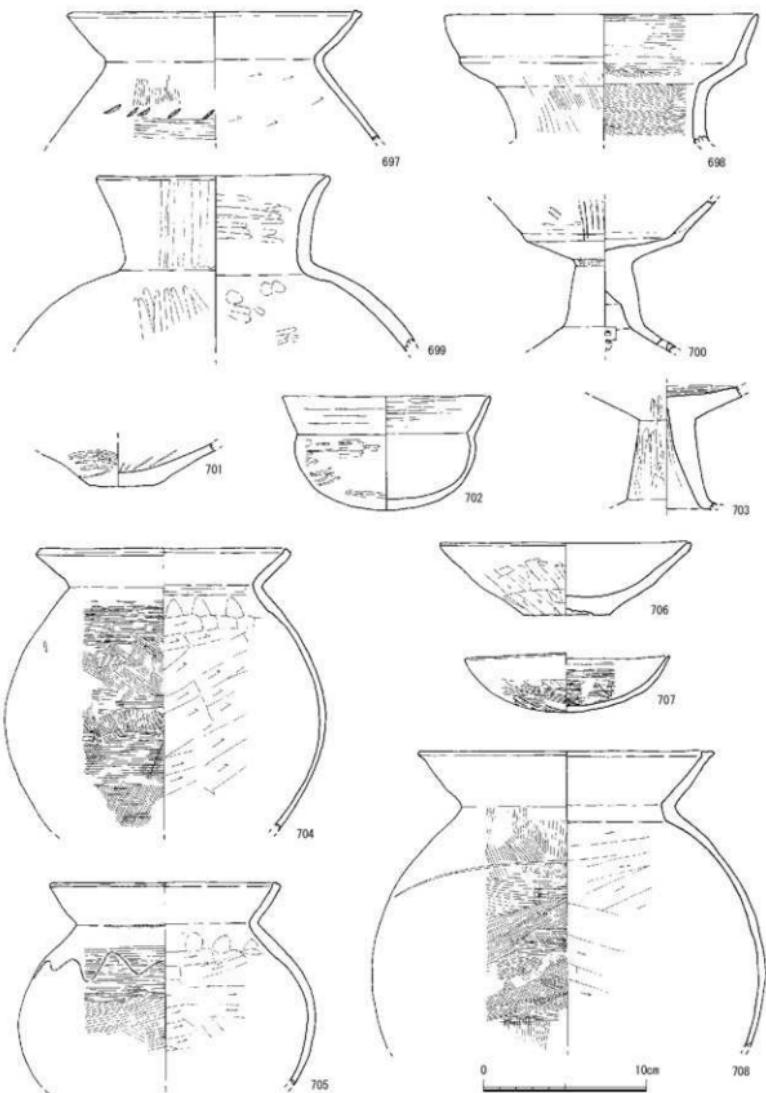
すべて9区

第114図 土器群C出土土器実測図4 (686は1/4、他は1/3)



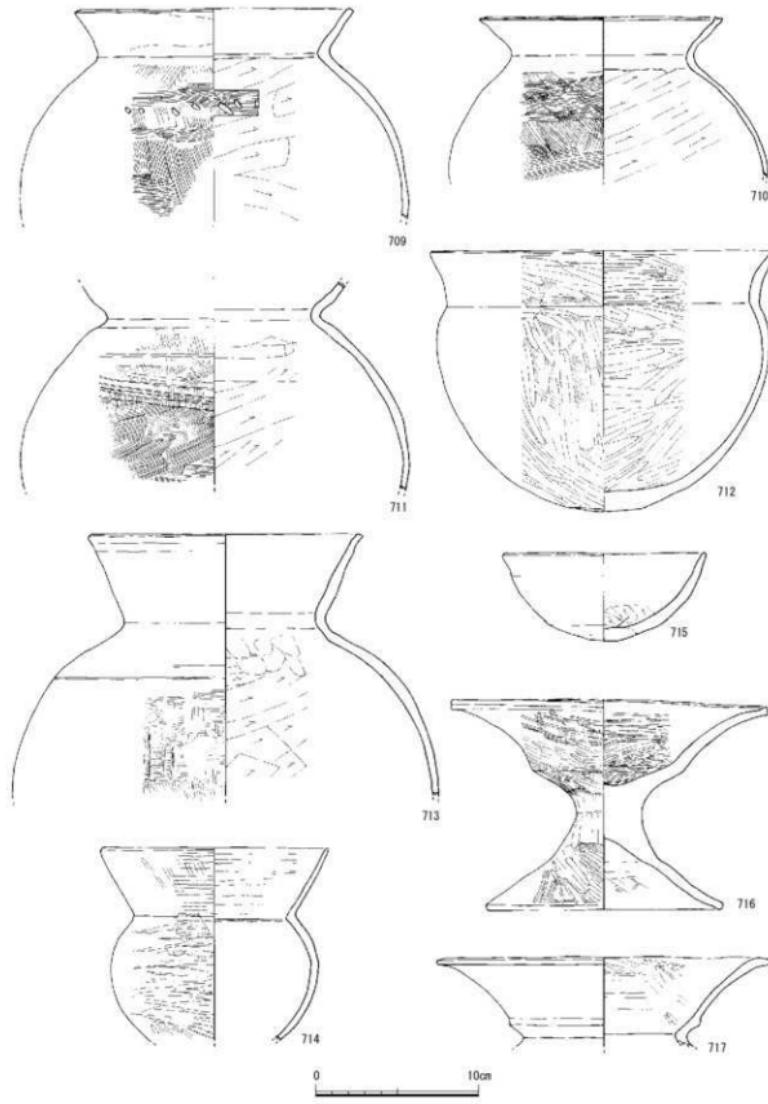
第115図 土器群C・D出土土器実測図 (1/3)

底部。城ノ越式。819は甕底部。須玖I式。820は甕で、底面に径1.7cmの焼成後穿孔がある。須玖式。821は須玖I式の器台。822は布留式の甕で、肩部にヘラ状工具による斜位の刺突を施す。823は布留式甕。824は布留式の甕で、肩部に横位沈線と斜位の刺突文を施す。沈線は途中で終息する。825は土師器の甕で、肩部にヘラ状工具による横位の刺突文を施す。同じ位置の内面には斜位の刺突文がみられる。826は二重口縁壺。827は二重口縁壺。山陰系。828は二重口縁壺。周防系。829は両耳付壺で、肩に扁平方形の耳が付く。朝鮮三国時代土器と考えられるが、耳の孔が垂直でなく、水平方向に穿たれており、外面に多量の炭化物が付着する(図版39-12)。830は高环坏部。硬質の焼成で内外面ともに灰色味がある。831は高环坏部。古墳前期新相。832は小型の鉢。833は小型の鉢。834は土師器の壺。5世紀初頭。835は土師器の小型丸底壺。836は小型丸底壺で、口縁部の長さは胴部の長さと同じ程度に短くなり、やや厚手不整形で内外面にハケメを残す。5世紀初頭。837は土師器の鉢。5世紀前半。838は黒曜石の打製石鐵。839は結晶片岩の円盤形石製品で、紡錘車と同じ形態、大きさだが、穿孔がなく、片面に平行する2本の線刻を描く。840は細粒砂岩(岩石No.2類似)の小型磨製石劍。841は頁岩の石包丁。842は粘板岩(岩石No.24類似)の石包丁。843は細粒砂岩(岩石No.2類似)の石包丁未成品。844はホルンフェルス(岩石No.4)の石包丁未成品。845は砂岩の石錐で、側面を幅4~6mmで研磨し、断面多角形状に仕上げる。846はホルンフェルス(岩石No.9類似)の抉入柱状片刃石斧で、基部・刃部を欠損するが、抉りのある面は非常に丁寧な研磨が施されている。847は凝灰岩の抉入柱状片刃石斧で、刃端部に使用痕とみられる短い線状痕が認められる。848は細粒砂岩の小型柱状砥石で、長軸方向の砥面が形成される。849は層灰岩の小型石器で、柱状石斧未成品の破損品に対して、上下端を再加工し、楔形石器に転用している。上下端には使用に伴う潰れ痕がみられる。850は玄武岩の小型礫器で、素材形状を生かしつつ短冊形に成形し、一短辺が摩耗で丸みを帯び、刃線に直交する擦過痕が認められる。形状と使用痕から搔器と考えられる。851は玄武岩の二次加工石器で、刃部と思われる縁辺は丸く潰れている。852は安山岩の刃器で、上下に礫面を取り込む肉厚な横長剥片の短辺を二次調整した削器である。853は頁岩の搔器で、磨製石斧基部の転用品である。刃部は上下の両端と考えられ、潰れ・摩滅により

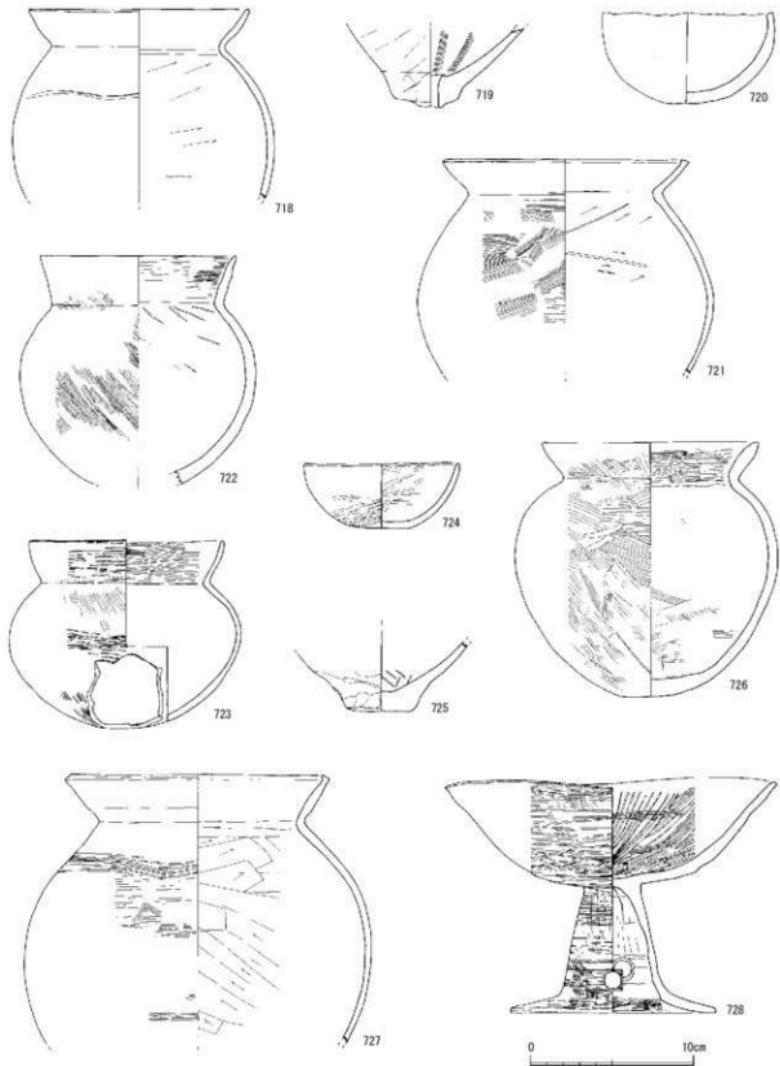


697~703 SX111 704・705 SX102 706 SX103 707 SX104 708 SX105

第116図 土器群D出土土器実測図1 (1/3)

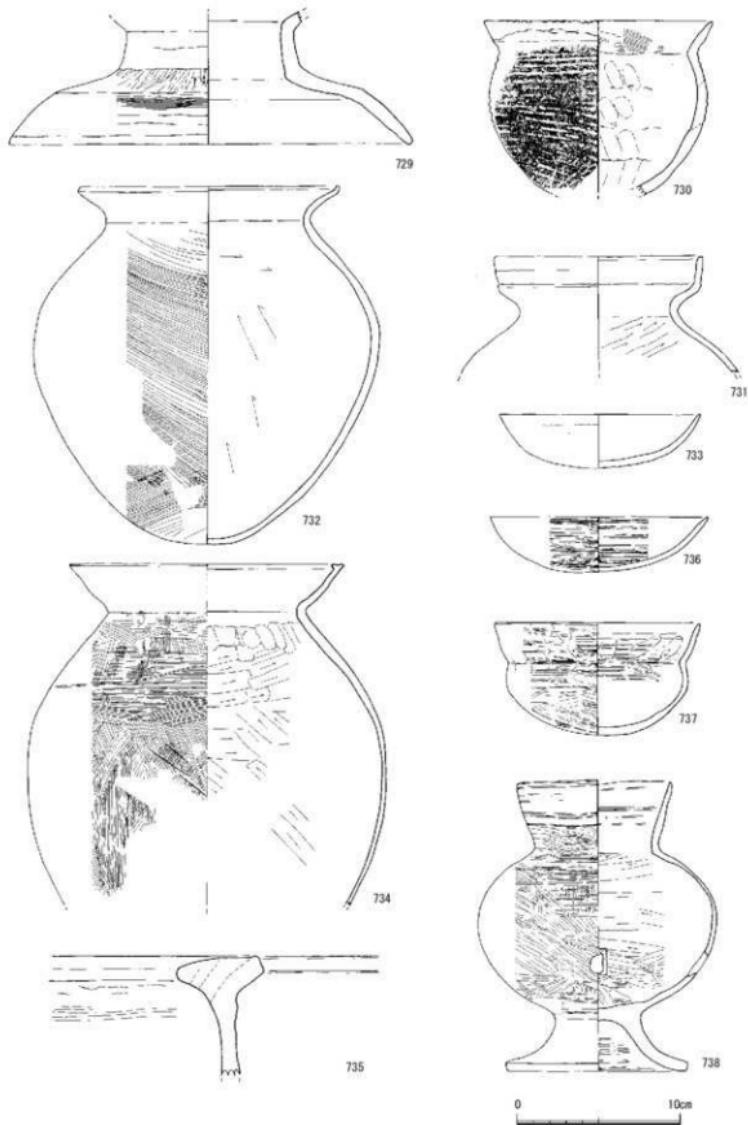


すべてSX115
第117図 土器群D出土土器実測図 2 (1/3)



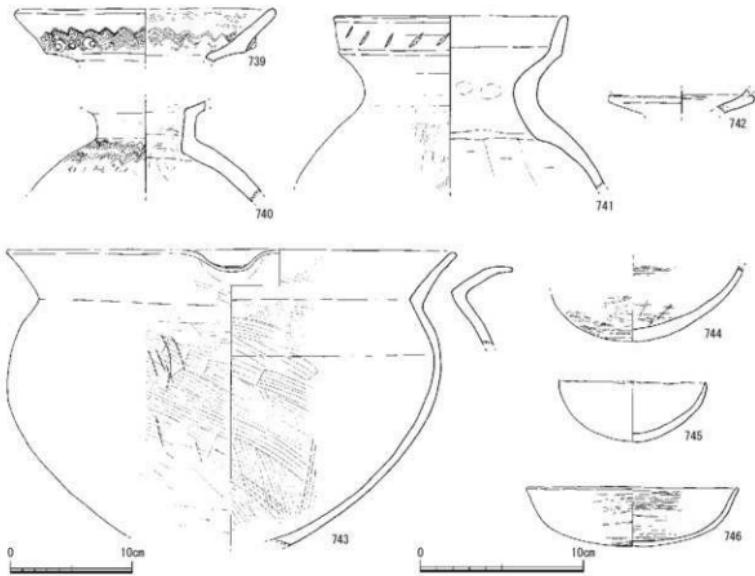
718~720 SX116 721~724 SX108 725~728 SX107

第118図 土器群D出土土器実測図 3 (1/3)



729・730 SX112 731 SX114 732・733 SX117 734～738 SX109

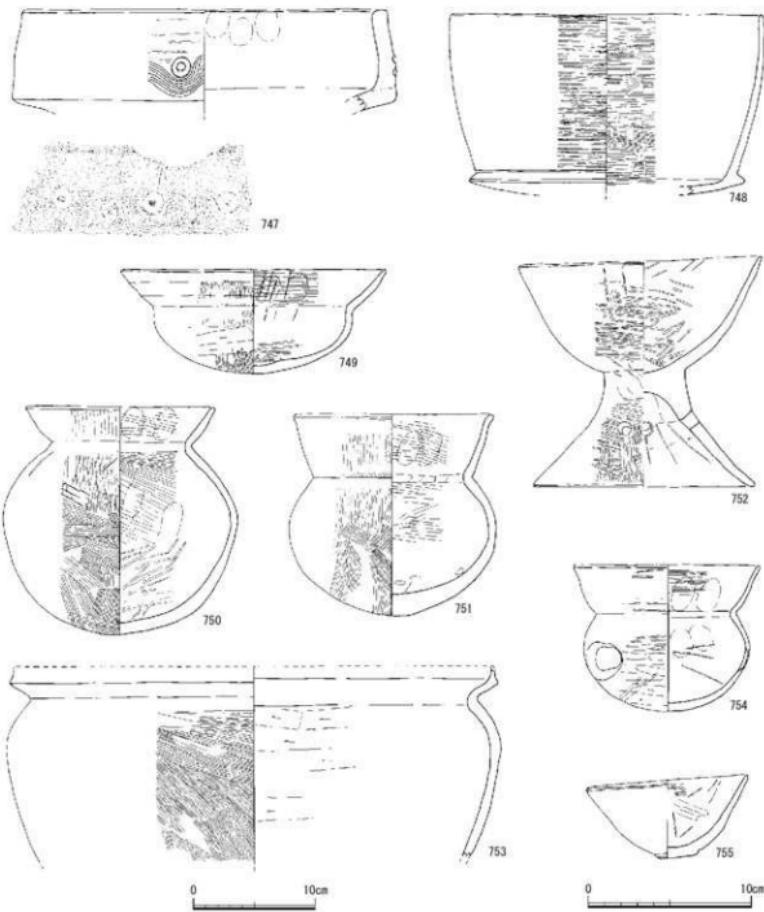
第119図 土器群D出土土器実測図 4 (1/3)



すべて10区

第120図 土器群D出土土器実測図5 (743は1/4、他は1/3)

丸みを帯びている。854は玄武岩の搔器で、幅広剥片を円形に成形している。855は砂質泥岩（岩石No. 6類似）の石器で、磨製石斧の転用品で、比較的鋭角な縁辺を粗く研いで、丸みのある刃部を形成している。856は頁岩質の凝灰岩（岩石No. 11類似）の刃器で、直方体状の素材の長辺部を両面調整で刃部としている。刃端部は潰れて摩滅している。857は砂質泥岩（岩石No. 6類似）の削器で、磨製石斧の転用品である。磨製石斧の側片部を両面調整して刃部としている。刃部に明瞭な使用痕は見られない。858は頁岩の刃器で、剥離成形後、縁辺に直交する擦過痕が見られ、刃潰しの加工と考えられる。表裏面には研磨加工も見られる。刃部はやや摩耗する。入念な刃潰しや研磨加工から手持ちの使用が考えられる。859は玄武岩の礫石器で、磨製石斧の転用品である。裏面の左辺に再加工剥離と調整が認められ、上下端に線状痕を伴う潰れ・摩滅面が形成される。側辺の二次調整部分は刃部というよりは刃潰しと考えられる。860は玄武岩の大型削器で、楕形に成形される。刃部は細かい調整で両刃状に仕上げられ、摩滅して丸みを帯びる。861は凝灰岩（岩石No. 11類似）の磨製石斧未成品。敲打と研磨で形成するが、刃部は作られていない。862は玄武岩の礫器で、一短辺を刃部とする。他の縁辺は剥離と敲打で刃潰しをする。もとは大型蛤刃石斧の未成品だった可能性がある。863は玄武岩の蛤刃石斧転用品で、刃部は面的に潰れ、側面にも部分的に敲打痕が残る。基部側の破断面は敲打で刃潰しされる。864は玄武岩の蛤刃石斧転用品で、刃部は剥離後、磨滅する。基部側の破断面は、粗い研磨で平滑化する。865は灰白色花崗岩の磨石で、表面中央に浅い敲打痕があり、裏面は内側に大きく凹む形状だが、磨面が形成されている。866は中粒砂岩の小型敲石で、表裏面側面に敲打痕があるが、前面は磨面も形成されている。1439・1440・1441は円盤形土器製品。1439はナデ調整の弥生土器片利用。1440は外面にススが多量に付



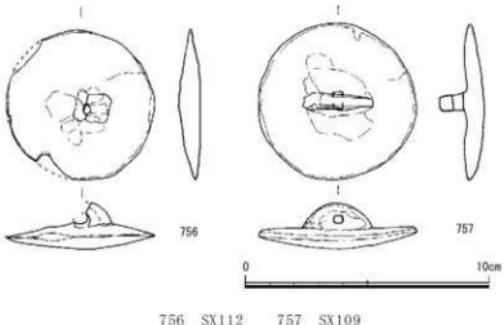
747・752・753 SX673 748 67区 749～751・754・755 SX674

第121図 土器群E出土土器実測図 (753は1/4、他は1/3)

着している弥生土器片利用。1441は大型品で、表裏面ナデ調整の弥生土器片利用。

10. 遺物包含層 (SX676・678)

SX676・718 (第11・24・74・130図、図版7-2・9-1・11) G～L-5～7区で検出したオリーブ黒色粘土・砂の遺物包含層である。平面形は微高地東側に沿って形成され、SD604に切られている。下層にはSX678が堆積する。SD604を挟んだ東側には、SX678上層にSX718が堆積しており、SX676とSX718は同一層と考えられる。調査区南壁土層(第11図)では、第3面の16層以下を切る形でSX676が形成されており、SX676の埋没上に第2面の堆積層(5層)が堆積することから、弥生時代中期と古墳時代前

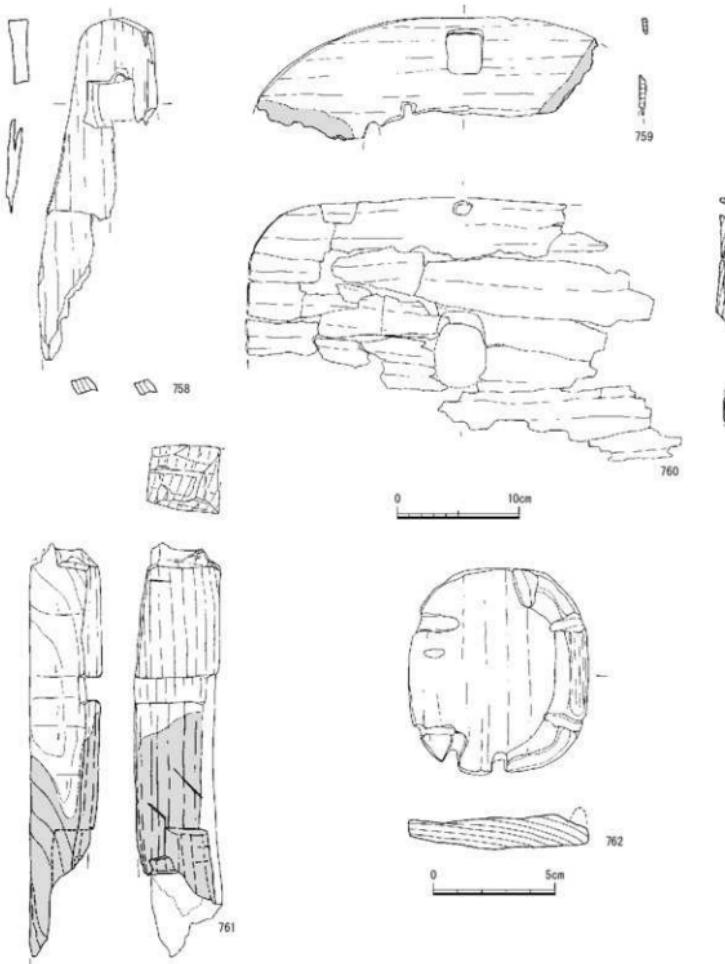


第122図 SX109・112出土鏡形土製品実測図（1/2）

マツ属複維管束亜属2、ハクウンボク1、ツブライジ1、ムクロジ1（第10表）。

出土遺物（第138～147・203～206・209・211図）コンテナケース35箱の未図化土器がある。867は弥生土器の中型壺。868は甌。869は中型壺。870～873は甌底部で焼成後穿孔が施される。870は胎土に角閃石・赤色粒を特徴的に含む。874は壺頭部で、細い突帯の上下に竹管文を施す。一部が明黄褐色胎土で、断面・表面が黒褐色化しており、二次焼成による黒色化と思われる（図版39-13）。SX678・24区から同一個体と思われる接合しない破片が出土している。875は甌で、口唇部下端に浅いヘラ刻み、口縁部下に沈線間刺突文を施す。沈線の断面形は鋭利な「フ」字状を呈す。胎土に角閃石・雲母を特徴的に含む。周防系（図版39-14）。876は壺の肩部。木の葉文。877は壺。878は広口壺。879は小型丸底壺。胎土に砂粒を多く含み、器壁も厚い。880は小型壺。881は台付壺。丁寧なナデ仕上げで、口縁部は打ち欠き。883はサクラ属の分割材で、内寸幅6.4cmの方形貫孔を設ける。梁か。884はクリの板状部材で、方形貫孔を2ヶ所設ける。885・886はマツ属複維管束亜属の板状部材で、885は長方形貫孔を1ヶ所、886は長方形貫孔を3ヶ所設ける。885・886は同一個体の可能性もある。887はヒノキの半裁丸木部材で、側辺に大きな刺り込みを入れる。888はクスノキの諸手鎌で、側方に方形の孔を持つ（図版39-18）。889はコナラ属アカガシ亜属Aの二又鎌。890はコナラ属アカガシ亜属Aの諸手鎌。891はコナラ属アカガシ亜属Aのナスピ形二又鎌。892はスギの棒状製品で、先端に鋭い突起が削り出される（図版39-19）。炭素14年代は2世紀中頃から4世紀中頃を示す（第14表）。893はツバキ属の建築部材。全体に削っている。894はコナラ属クヌギ節の柱材で、樹皮剥ぎ部分は金属製刃物で縱方向に削り、断面形六角形状に形成する。下端は杭状に削る。上端は枝分かれの又部分を削って、平坦な受け部を作っている。895はコナラ属アカガシ亜属Bの一木動で、全体に弱く被熱し、一部炭化する。896はコナラ属アカガシ亜属Bの平鎌。897はコナラ属アカガシ亜属Bの鎌模で、全体に細かく面取りされて丁寧に仕上げられる。後面に溝が彫られる。山口謙治氏の整理によると、888は諸手鎌Aa型（前期）、890は諸手鎌Da型（前期後半から中期前半）、889は二又鎌G型（中期後半以降）、896は平鎌G型（中期後半以降）となる（山口謙治1991「弥生文化成立期の木器」「日本における初期弥生文化の成立」横山浩一先生退官記念事業会）。898は玄武岩の大型剥片で、両側辺に微細剥離と磨滅がみられる。899は安山岩の刃器で、両側辺と下端部は両面調整後に磨滅する。900は安山岩の小型刃器で4辺を直線的に成形し、刃先角の小さい上下縁辺を刃として使用している。901はやや硬質の砂岩の石錐で基部は面取りして断面多角形状に仕上げる。902は層灰岩の扁平片刃石斧で、刃部使用痕は認められない。903は結晶片岩あるいは

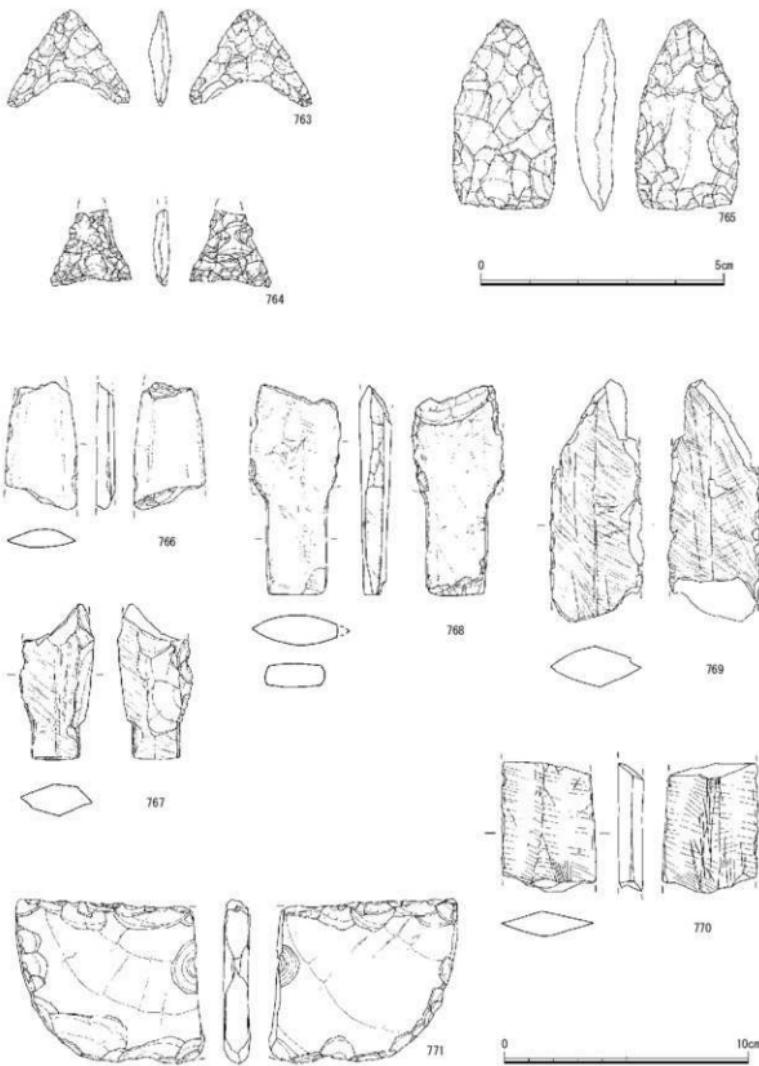
期の間の弥生時代後期を中心には形成されたと考えられる。出土遺物の下限時期も、弥生時代後期末となっている。上層では南北方向に並ぶ杭列を検出した（図版19・20）。丸杭、板杭で構成され、北側に横板が大小4枚渡される。杭は南北方向には比較的の傾きなく真っ直ぐに打ち込まれた状態で、列の中心線から東西方向には傾いている。横板に近いW7やW13が大型で深く打ち込まれている。種実は、クリ6、



758 SX669下層 759 SX670下層 760・761 SX690下層 762 SX200

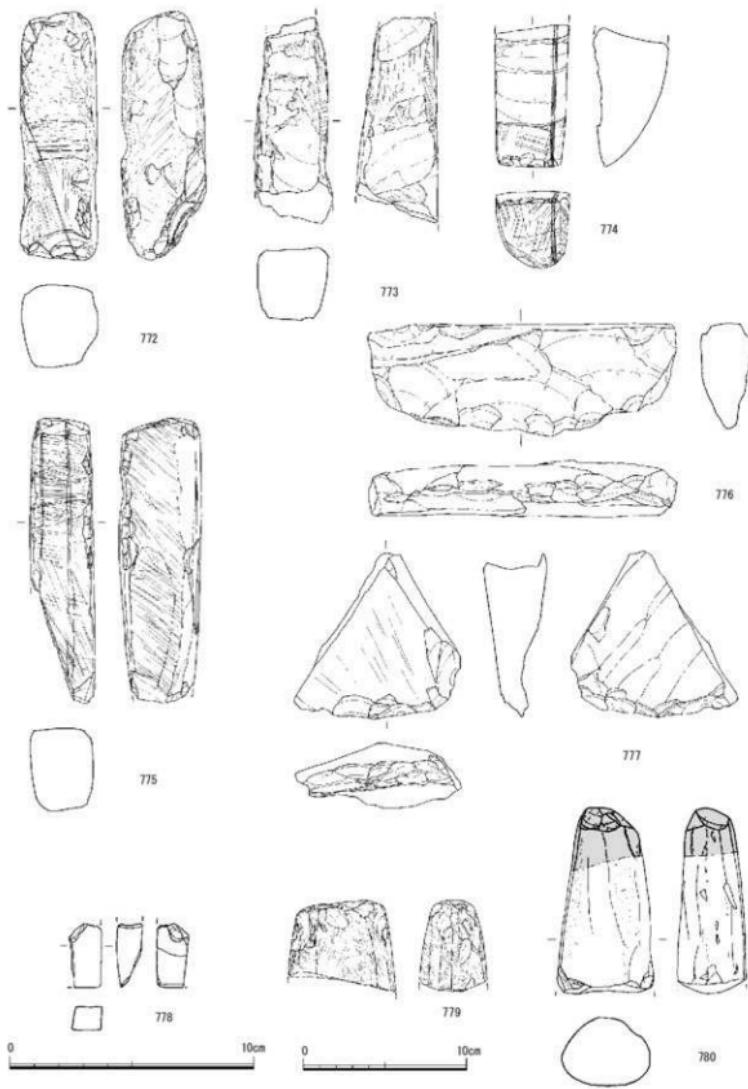
第123図 SX200・669・670・690出土木器実測図（762は1/2、他は1/4）

滑石の紡錘車で、破碎面を削って面取りしている。表裏面は強い線状痕がみられ、側面は丸く磨減する。904は結晶片岩の紡錘車で、片面に擦切状の線状痕が残る。905は緑泥片岩（岩石No. 8類似）の打欠石錐。906は玄武岩の円盤形石器で、側縁一端の打ち欠きとそれに対応する対辺の凹みから打欠石錐の可能性がある。907は玄武岩の剥片石器で、刃端部は銳利ではなく、摩減・擦痕がみられる。908は凝灰岩（岩石No. 11類似）で、二長辺を二次調整し、刃潰れがみられる。909は玄武岩の二次加工石器で、平面形



763・765・771 土器群A・B
764 SX111 766 SX669 767 15区
770 SX653 768 SX062 769 SX177

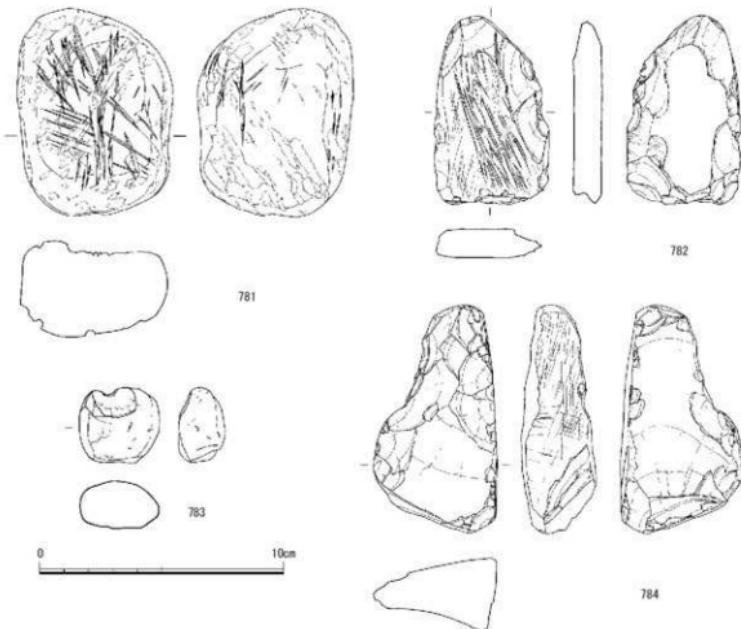
第124図 土器群出土石器実測図1 (763～765は1/1、他は1/2)



772 15区 773・774 土器群A・B 775・780 SX664 776 SX062 777 SX177 778・779 14区

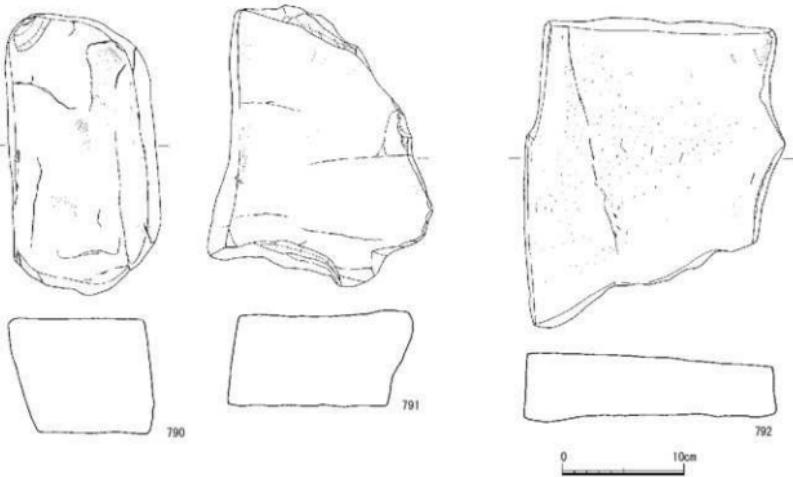
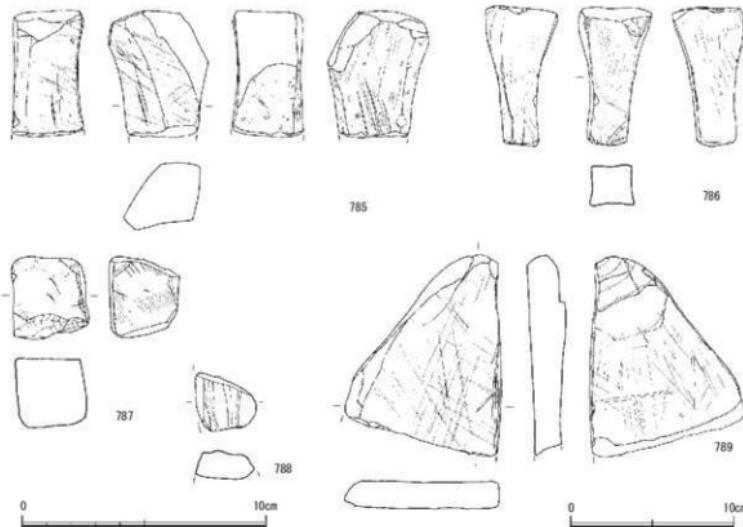
第125図 土器群出土石器実測図2 (779・780は1/3、他は1/2)

が凸になる辺を刃部としたが、刃部に限らず縁辺は面的に潰れ、磨滅している。910は砂岩の石器で、磨製石斧の破片を再加工している。911は蛇紋岩質的部分磨製石器。912は石英質亜角礫の破片で、短辺部を二次加工して刃部としている。913は砂質泥岩の部分磨製石器で、大型の抉入柱状石斧の破損品の転用と思われるが、刃部と思われる短辺は面的に削られ磨滅しており、用途は不明である。914は砂質泥岩（岩石No. 6類似）の礫石器で、大型石斧を転用しており、端部の潰れから敲石利用が想定できる。915は凝灰岩（岩石No. 11類似）の敲石で、全体に敲打痕を形成しながら、全体として隅丸のサイコロ状を呈す。916は玄武岩の大型蛤刃石斧の再加工品で、刃端部には面的な敲き痕が認められる。917は玄武岩の刃器で、大型石斧の転用。918は玄武岩の搔器で、大型石斧からの転用品である。919は凝灰岩の大型石斧を再加工し、刃部に潰れ・摩滅・擦痕がみられる。920は玄武岩の敲石で、端部が面的に潰れている。921は玄武岩の砥石片で、表裏面に擦痕が残る。922は砂岩-ホルンフェルスの板状石製品で、表面に研磨面、側面に成形研磨面が形成される。裏面は剥落で加工痕は不明だが、凹凸があり、素材面と考えられる。表面は中央に向けて緩やかに凹んでおり、研ぎによる磨耗と考えられる（図版39-15）。923は細粒砂岩の砥石で、表面のみ砥面で、他の面は敲打と粗い研磨で成形される。砥面は中央が凹み、縁辺に筋状の砥ぎ痕が複数残される（図版39-16）。924はやや粗粒の砂岩の砥石で、幅狭な砥面は中央が凹み、長軸方向の砥ぎ痕がみられる。その他の面は敲打で成形され、幅狭、腰高の形状をなす。925はやや粗粒の砂岩の砥石で、2面形成された砥面には溝状の砥ぎ痕が認められる。石自体



781・784 SX119 782 SX653 783 784 土器群A・B

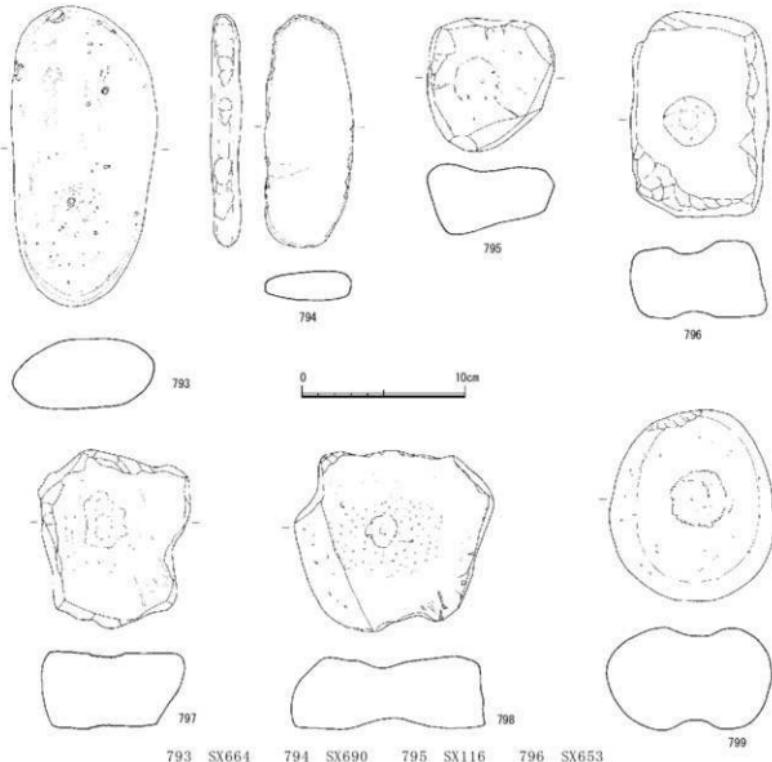
第126図 土器群出土石器実測図3 (1/2)



785・788 土器群A・B 786 SX066 787 67区 789 SX076 790 SX653 791 SX690
792 SX119

第127図 土器群出土石器実測図4 (785~788は1/2、789は1/3、他は1/4)

には大型と微小な二枚貝の化石が残っている。926は細粒砂岩の砥石で、4面長軸方向に中央を中心と磨り減る。927は粗粒砂岩の砥石で、表裏面が砥面となる。中央を中心と浅く凹み、溝状の痕跡もみられる。928は礫岩の亜円礫で、両側辺に敲打で浅い溝状の成形がなされており、大型石錘が中央で破損したものと考えられる。他に21(17)区から、擦り切り痕のある長さ20cmの頁岩質ホルンフェルス礫が出土している。1391は滑石の大型扁平勾玉。1403は滑石の剥片。1425は土製筋錘車で比較的丁寧に作られている。1453～1465は土製円盤。1453は薄く砂粒の少ない胎土。1454は外面ハケメ調整の弥生土器・甕。1455は器壁が厚く、ナデ調整。1456は弥生土器の底部中央を転用している。1457は外面ハケメと沈線がみられる。側面を研磨で平滑に仕上げる。1458は外面に細かい擦痕がみられる。1459は表裏面に細かい擦痕がみられる。1460は外面ハケメの弥生土器・甕。表裏面に細かい擦痕がみられ、研磨している。1461は外面ナデ調整の弥生土器・壺。側面を研磨で平滑に仕上げる。1462は外面ミガキ調整の弥生土器。炭素吸着がある。1463は外面ミガキ調整の弥生土器。1464は内面ミガキ（炭素吸着）、外面ヘラナデの弥生土器。1465は外面にハケメを残す。弥生後期～古墳前期土器。1472～1474は投弾。

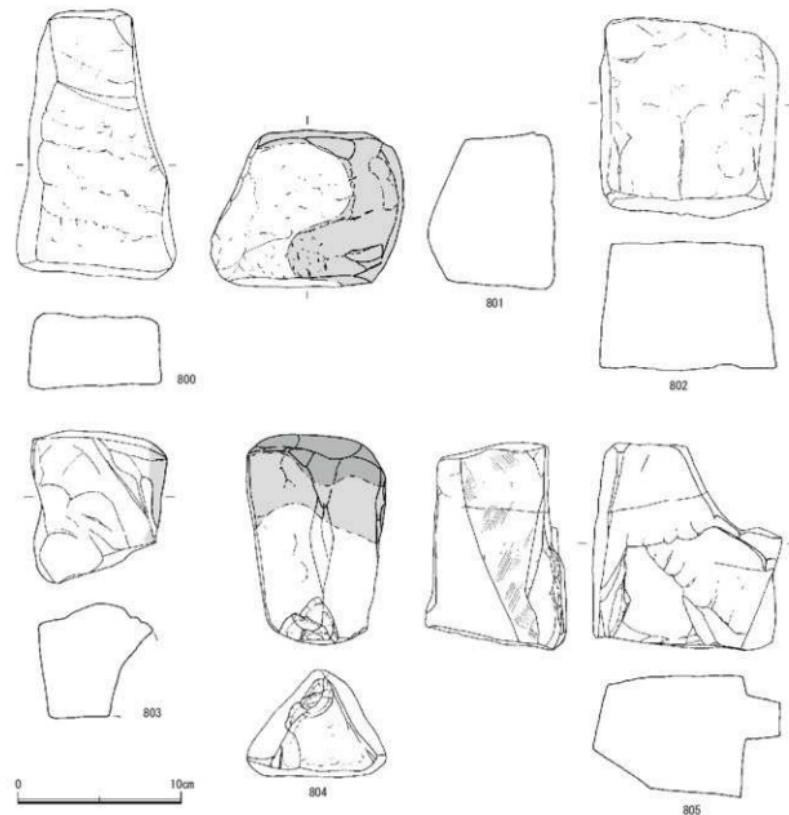


第128図 土器群出土石器実測図5 (1/3)

1522・1523・1537は不明土製品。1522は方柱状で、破面が複数形成されており、粘土の縫合目等で焼成後に離れやすくなっていたように見える。二次的な被熱等はない。1523も方柱状で、胎土は比較的緻密。被熱等の痕跡はない。1537は口縁部が肥厚する容器状に復元している。

SX678 (第24・130図、図版11-2) SD604およびSX676下層で検出されたオリーブ黒色粘土と砂の互層。微高地側集落由来と思われる遺物と腐植土、砂の互層状堆積である。下層は地山の粗砂となる。種実はイネ果序塊状3、モモ、ヒヨウタン、オニグルミ、イチイガシ、アカガシ亜属各1 (第10表)。

出土遺物 (第148～158・203～206・208図) コンテナケース55箱の未陶化土器がある。929は大型壺。伯亥式壺。930は壺で、厚手扁平な突起が付けられている。胎土に径2～3mmの白色砂をやや多く含む。朝鮮半島系の瓶か (図版39-17)。931は小型壺で、肩部に2条沈線間に貝殻腹縁連続刺突文を3段施す。内外面共に炭素吸着・黒色化する。932は大型壺の胴部で、突带上に「十」字、あるいは「×」字状の



800 SX670 801 SX058 802 SX119

803 SX674 804 SX072 805 SX108

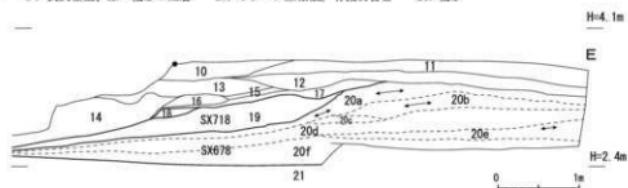
第129図 土器群出土石器実測図6 (1/3)



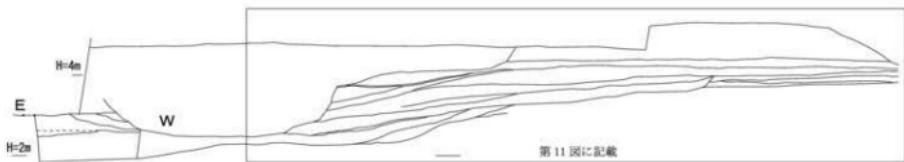
調査区南トレンチ1土層



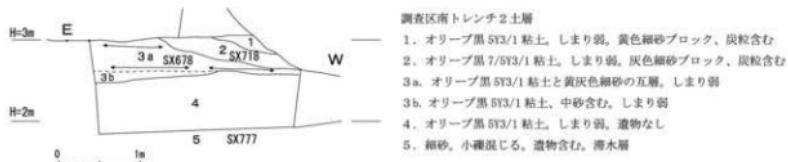
1. 黒褐2.5Y3/2粘質シルト。しまりやや弱
細砂ブロック含む 2. オリーブ黒5Y3/1粘土・細砂の互層 3. オリーブ黒5Y3/1粘土。しまり弱。
細砂 4. オリーブ黒粘土。木質含む 5. 黒褐2.5Y3/2粘質土。砂粒含む 6. 細砂 7. 黒2.5Y2/1粘土
8. 粗砂 9. 黄灰粘土。細～粗砂の互層 20. オリーブ黒粘土。有機物含む 21. 粗砂



10. 暗黄灰2.5Y4/2シルト。しまり強 11. 暗オリーブ褐2.5Y3/3粘質シルト。しまり強 12. オリーブ黒5Y3/2粘質シルト。しまりやや強。
鉄分ブロック状に沈着 13. 暗黄灰シルトと細砂のブロック混土 14. 灰5Y4/1砂質粘土。しまりやや弱 15. オリーブ黒粘土と細砂の互層
16. 白～暗黄色細～粗砂 17. オリーブ黄5Y3/1粘土。しまり弱 18. 細砂 19. オリーブ黒5Y3/2粘土。しまり弱。炭化木少く含む
20a. オリーブ黒粘土と黄灰細砂の互層 20b. 粘土多い 20c. 白色中～粗砂 20d. オリーブ黒粘土。有機物少く含む 20e. 細砂ブロック
20f. 粗砂・粘土混土・互層



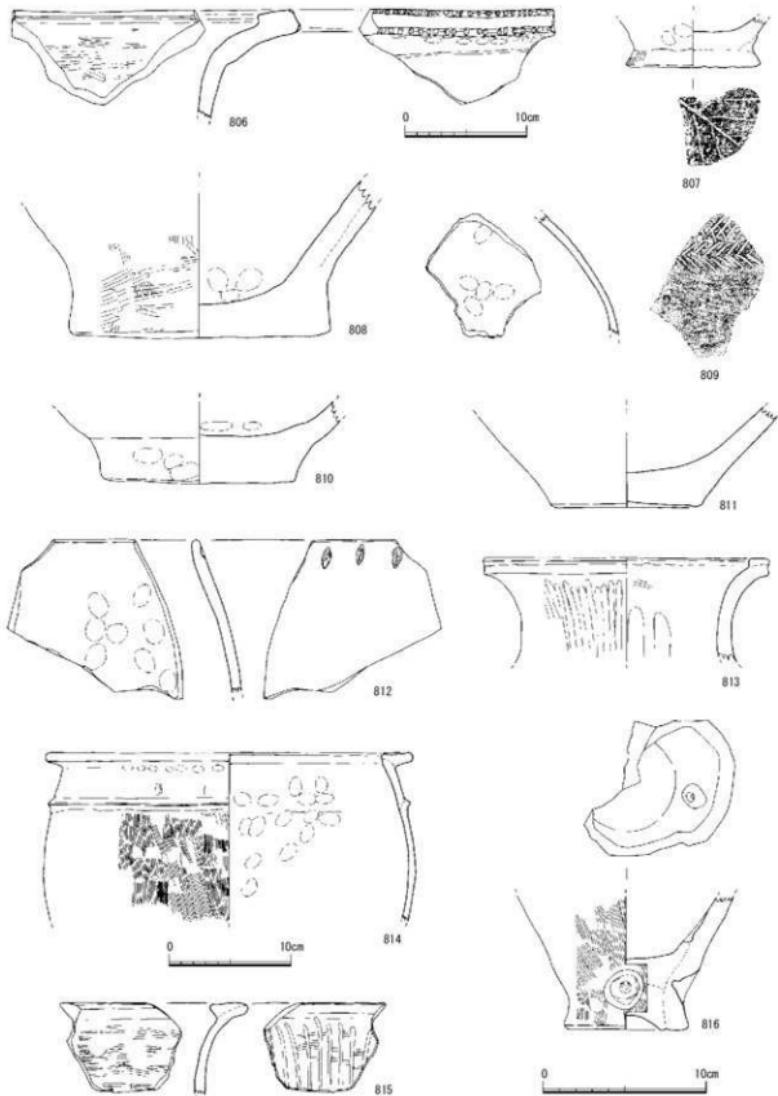
調査区南壁および南トレンチ2土層



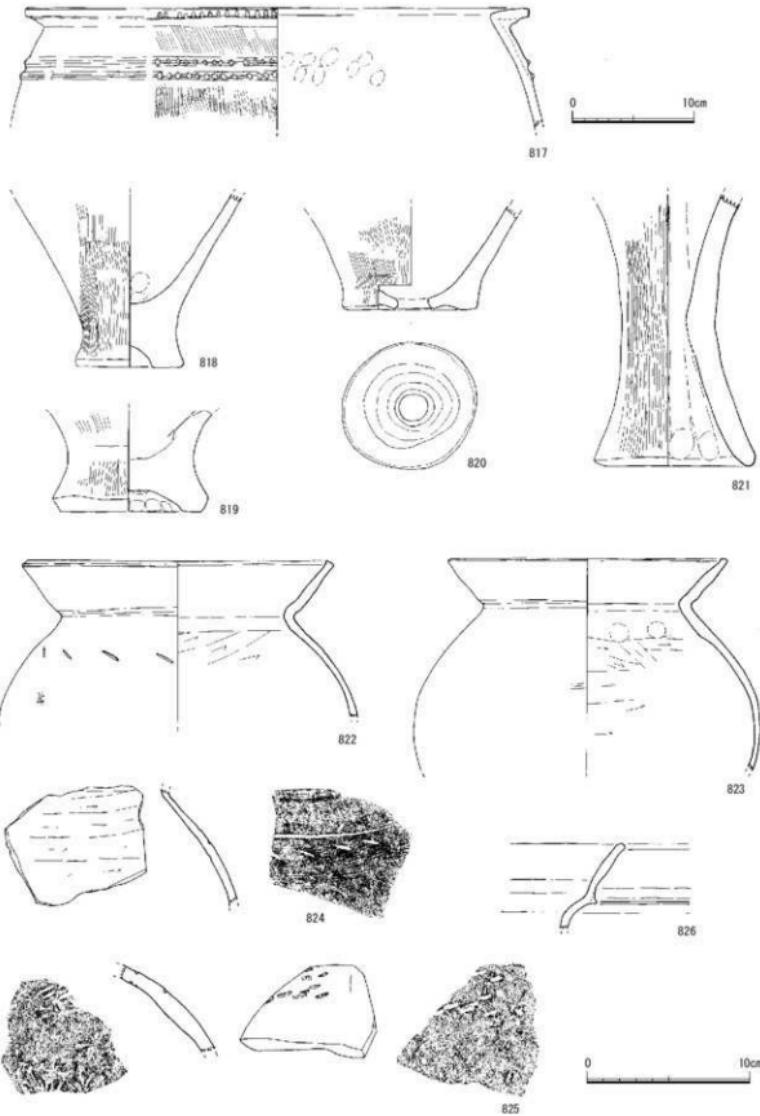
調査区南トレンチ2土層

1. オリーブ黒5Y3/1粘土。しまり弱。黃色細砂ブロック、炭粒含む
2. オリーブ黒7/5Y3/1粘土。しまり弱。灰色細砂ブロック、炭粒含む
3a. オリーブ黒5Y3/1粘土と黃灰色細砂の互層。しまり弱
3b. オリーブ黒5Y3/1粘土。中砂含む。しまり弱
4. オリーブ黒5Y3/1粘土。しまり弱。遺物なし
5. 細砂。小種混じる。遺物含む。海水層

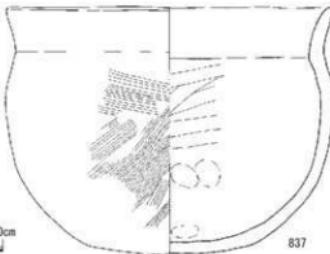
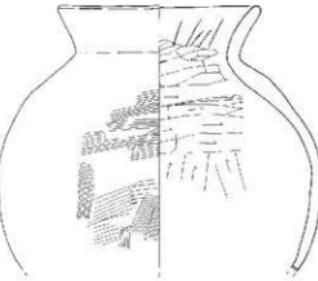
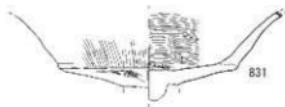
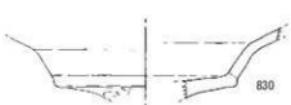
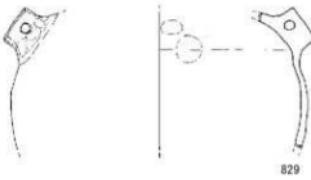
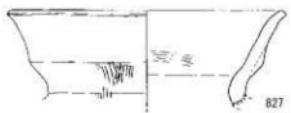
第130図 調査区南トレンチ土層実測図 (1/60)



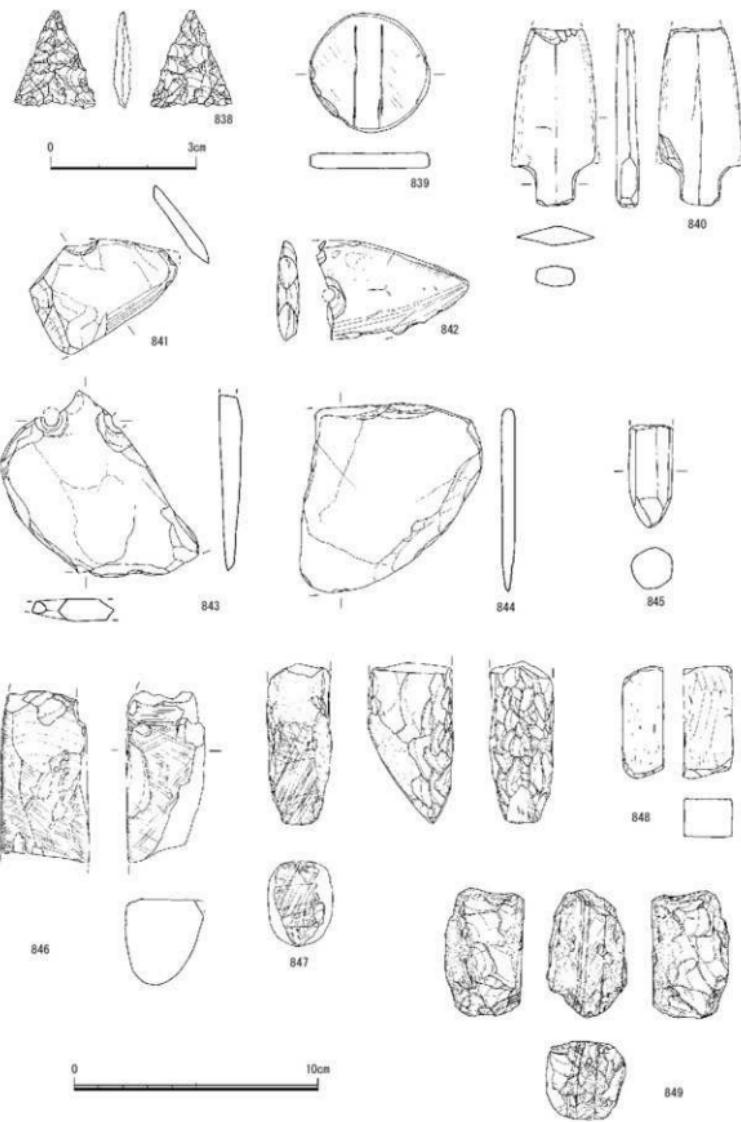
第131図 SD604出土土器実測図 1 (806・814は1/4、他は1/3)



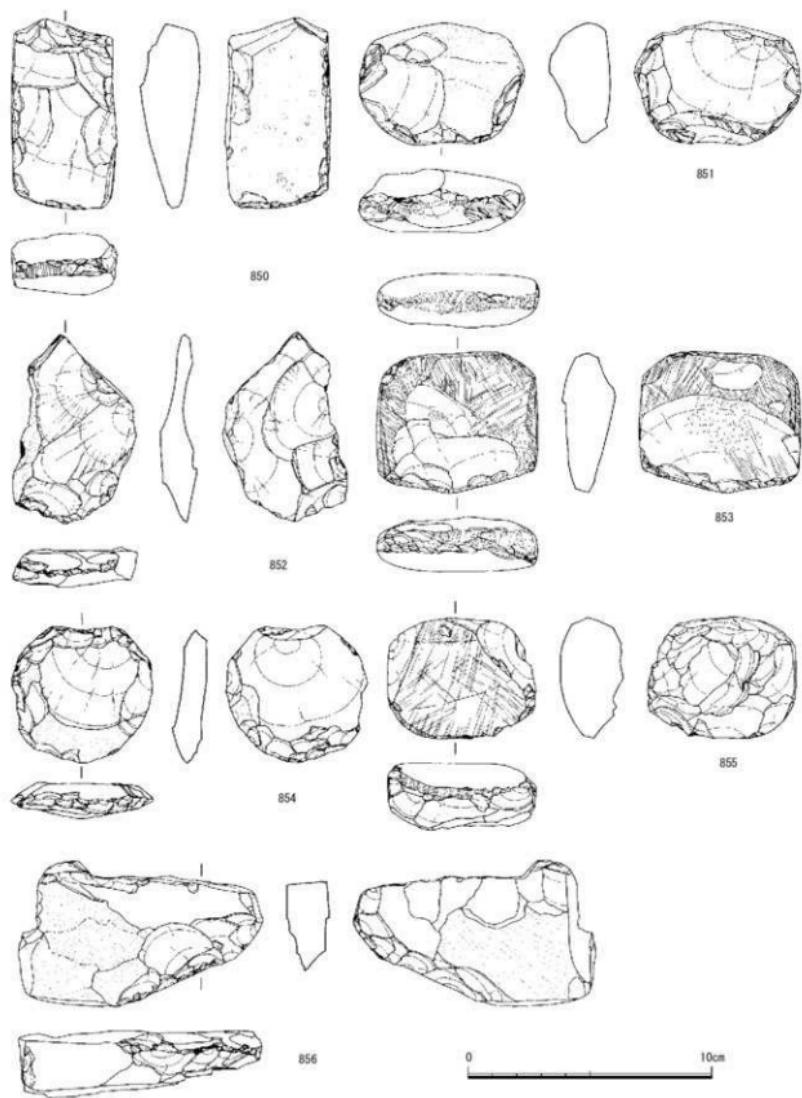
第132図 SD604出土土器実測図2 (817は1/4、他は1/3)



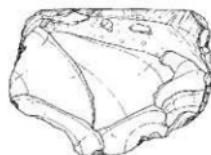
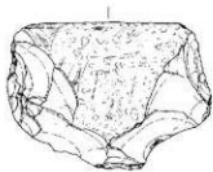
第133図 SD604出土土器実測図3 (1/3)



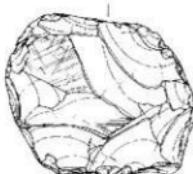
第134図 SD604出土石器実測図1 (838は1/1、他は1/2)



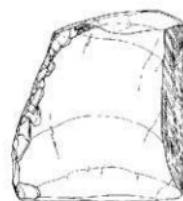
第135図 SD604出土石器実測図 2 (1/2)



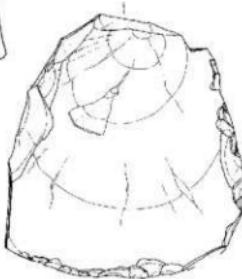
857



858



859



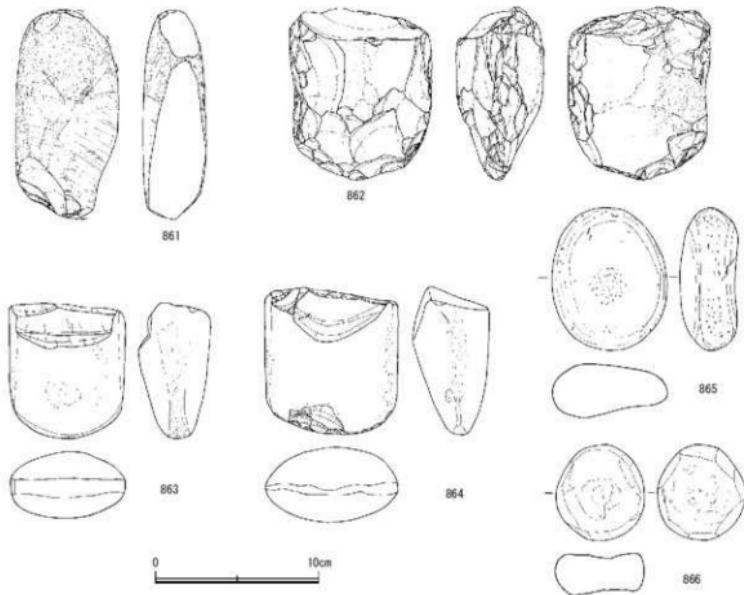
860

0

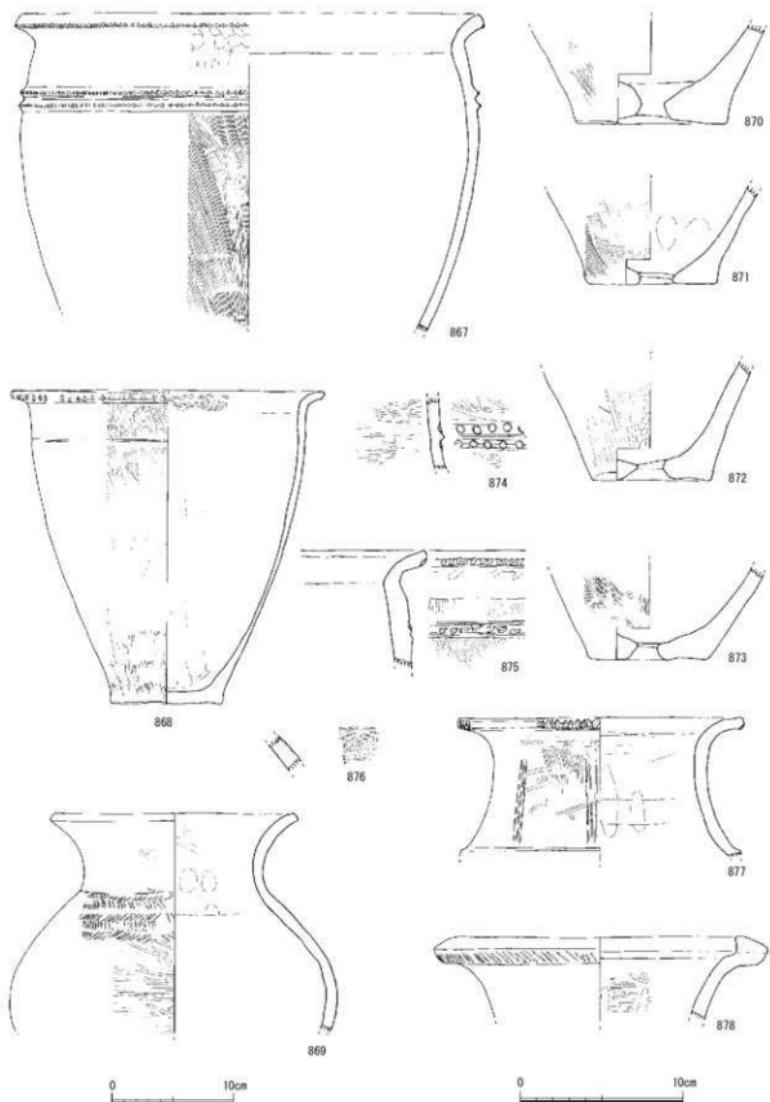
10cm

第136図 SD604出土石器実測図3 (1/2)

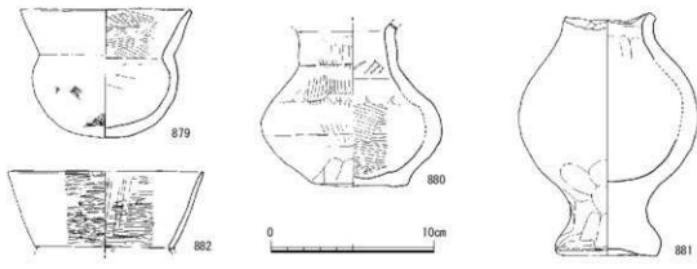
刺突文を施す。933は広口壺で、平坦口縁上面に2条の突帯を丁寧に貼り付け、外面には縱位の暗線文を施す。内外面が褐色を呈す。934は壺口縁部で、内外面に小波状沈線を描く。935は甕底部で外面に3条沈線をめぐらす。沈線の端と端は結合せずに、わずかにずらして終わる。936は小型甕。937は小型丸底鉢。口縁部から胴部にかけて大きく打ち欠かれている。938は支脚で、ハケメの痕跡はみられず、ユビオサエ、ナデ仕上げである。二股の頂部に対して背面部にわずかな突起部分があり、剥落した痕跡がある。山陰系（図版40-4）。939は小型の壺で、口縁部は打ち欠かれて平坦となる。ミニチュアか。940は小型丸底鉢。942はミニチュアの鉢で、平坦口縁が表現されている。941はミニチュアの壺。外面は炭素吸着で、黒色化する。943はコナラ属アカガシ亜属Bの板状製品で、形状から矛形をしている。他に櫂や剣形の可能性もある。棒状部分の端部は丸く収まっている（図版39-20）。炭素14年代は紀元前8世紀中頃から紀元前5世紀を示した（第14表）。944はヒノキ科の横槌で、両側部に方形孔を持つ（図版39-21）。W298はネジキの柱材で、先が杭状に加工される。947は頁岩の小型磨製石劍。948はホルンフェルス（岩石No. 18類似）の小型磨製石劍。949は小型の扁平石製品。平坦面は両面とも摩耗、擦痕がみられ、砥石利用が考えられる。950・951・952・953はホルンフェルス（岩石No. 4類似）の石包丁。952は刃部断面片形刀で、剥離・磨滅する。953は縁辺を再加工する。石鍤転用か。954は頁岩の扁平石製品で、上端は研磨で面取りし、他の2辺は剥離調整後、縁辺が磨滅する。石包丁未成品の再加工か。955はホルンフェルスの扁平石製品で、大型石包丁未成品の破損品か。956は結晶片岩の紡錘車未成品。



第137図 SD604出土石器実測図4 (1/3)

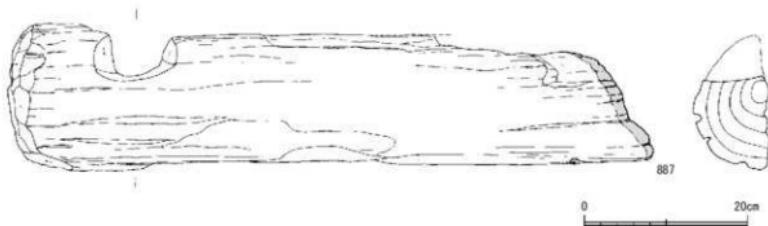
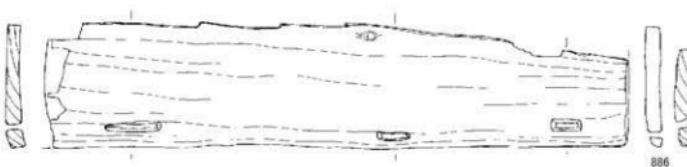
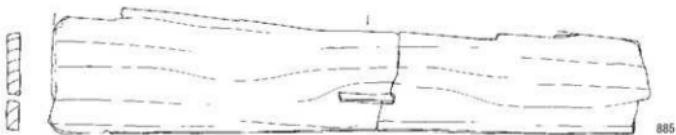
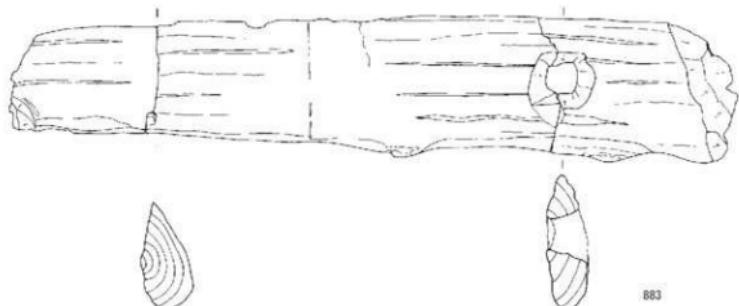


第138図 SX676出土土器実測図 (867~869は1/4、他は1/3)

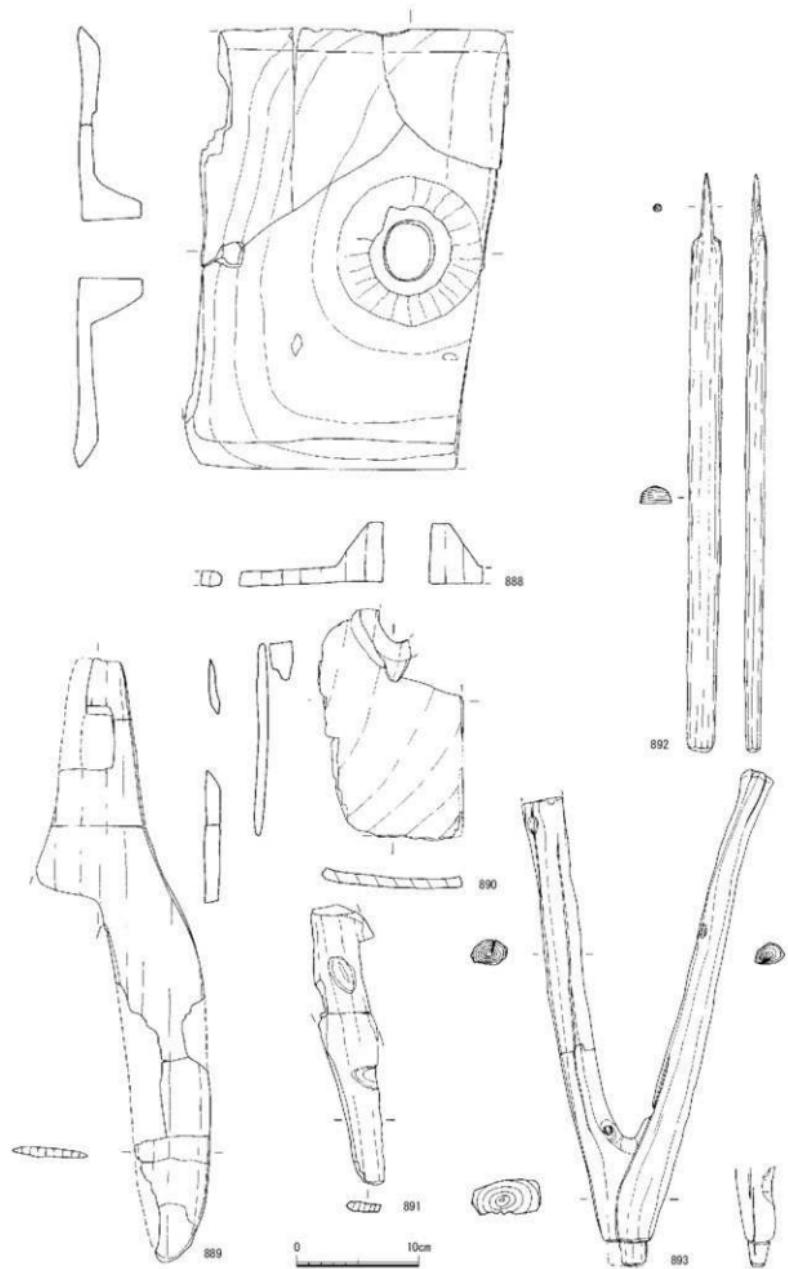


第139図 SX676・777出土土器実測図（1/3）

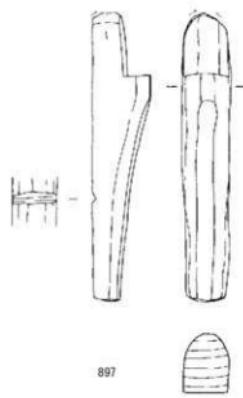
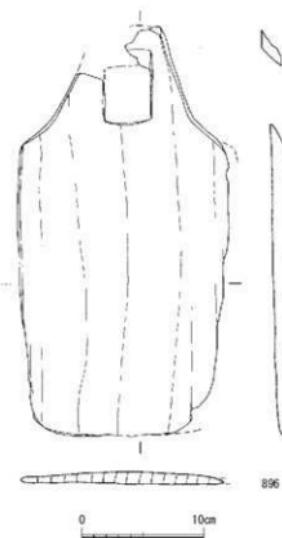
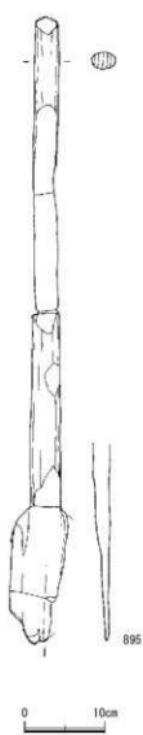
957は緑色片岩の加工石片で、表裏面に線刻が施される。表裏面中央の深い線刻は、擦切状だが、表裏で位置が若干ずれている。それに直交する比較的深い線刻は中央の擦切状線刻に切られている。表面にはより浅く細かい線刻がみられ、不整の円形のものもみられる。擦切や砥ぎによる線刻というよりは、画像的な意味合いを持つと思われる（図版40-3）。958はハリ質安山岩の刃器で、一側辺が鈍角、もう一側辺が鋭角の刀部、先端は磨滅する。959は凝灰岩の削器で先端部を中心に使用による磨滅が見られる。960はホルンフェルス（岩石No. 7類似）の小型刃器で、短辺が磨滅する。961は凝灰岩の磨製石斧破片を転用した刃器で、下端は刃部に直交する線状痕が表裏に残り、二側辺は微細剝離と磨滅がみられる。962は玄武岩磨製石斧の破片転用で、湾曲部分を刃部とする。963は頁岩の刃器で、刃先角が小さく（42~45度）、潰れ、磨滅が顕著でない。964は凝灰岩の刃器で、長辺部に鈍角の刀部を作り出す。965は砂質泥岩（岩石No. 6類似）の抉入柱状片刃石斧。966は層灰岩の扁平片刃石斧。全体に研磨痕が残されるが、刃部に微細な刃こぼれと断面円形の線状痕が認められ、使用の痕跡が認められる。刃部が偏刃であり、刃面も研ぎ分けられて2面を形成する。967はホルンフェルスの小型石斧未成品で、中型石斧を転用している。968は粗粒砂岩の凹石で、5面に凹みが形成される。969は砂岩の石錐で、4ヶ所打ち欠きがある。970は滑石の礫石錐で、中央に両面から円錐形工具で径2cmほどの孔を穿っている。表面が黒ずんでおり、被熱している（図版40-6）。971は凝灰岩（岩石No. 11類似）の大型剥片石器で、下端部に二次加工・摩滅・擦痕がみられる。972はホルンフェルス（岩石No. 7類似）の刃器で、石斧を転用している。973は玄武岩で、大型蛤刃石斧を再加工し、刃端部が摩滅する。974はホルンフェルスで、磨製石斧を再加工し、刃端部が摩滅する。975は砂質泥岩の小型石斧の未成品。976はホルンフェルスで、乳棒状石斧を再加工し、刃端部は潰れる。977は玄武岩の大型石斧の転用品で、基部側を剥離・研磨で再加工して刃部とし、破断した刃部側の縁辺を刃潰している。この面を打面とした楔と考えられる。978は玄武岩の大型石斧で、刃部側を再加工している。刃端部は磨滅する。979は玄武岩の大型蛤刃石斧で、刃部側は斜めに大きく破断した縁辺を剥離調整して刃部としている。刃端部は弱く磨滅する程度の使用状況である。980は玄武岩の大型蛤刃石斧で、刃部側を再加工し、刃部を成形する。刃端部は面上に潰れる。背面には凹石状の凹みもみられる。981は玄武岩の大型蛤刃石斧で、刃部側は再加工で刃部を形成し、基部側は破断面縁辺を剥離で潰し、全体に磨滅して丸くする。刃端部はわずかに磨滅する程度の使用痕跡である。982は玄武岩の大型蛤刃石斧で、基部側破断面の縁辺を再加工（刃潰し）し、刃端部は面上に潰れ・磨耗する。敲石への転用と考えられるが、刃端部の使用状況からは、さほど衝撃の強くない作業に使用したと推測される。983は玄武岩の大型蛤刃石斧転用品で、刃端部が面上に潰れて磨滅する。基部側の破断面は縁辺を潰している。984はホルンフェルスで、中型石斧を再加工し、刃



第140図 SX676出土木器実測図 1 (883・884は1/10、他は1/6)



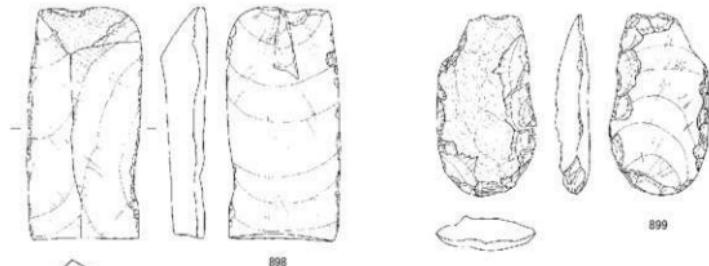
第141図 SX676出土木器実測図 2 (1/4)



0 10cm

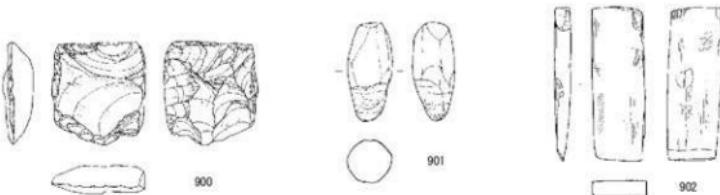
0 10cm

第142図 SX718出土木器実測図 (894は1/10、895は1/6、896は1/4、897は1/3)



898

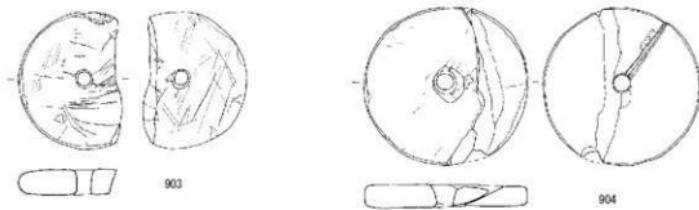
899



900

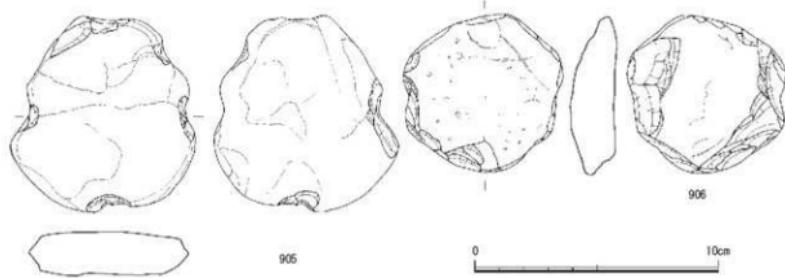
901

902



903

904

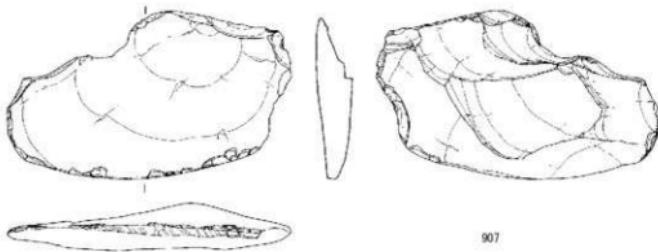


905

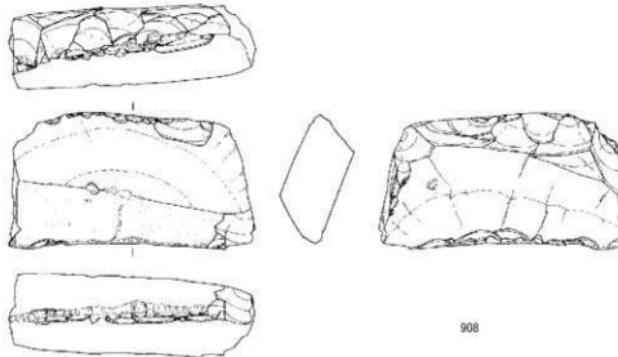
906

0 10cm

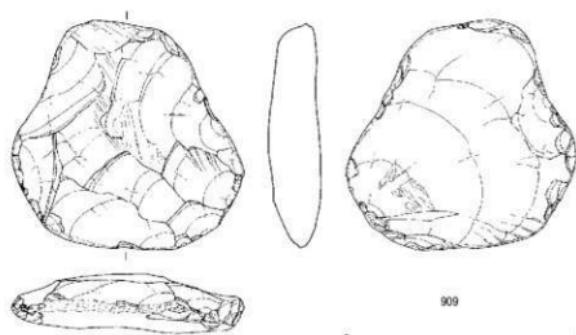
第143図 SX676出土石器実測図 1 (1/2)



907



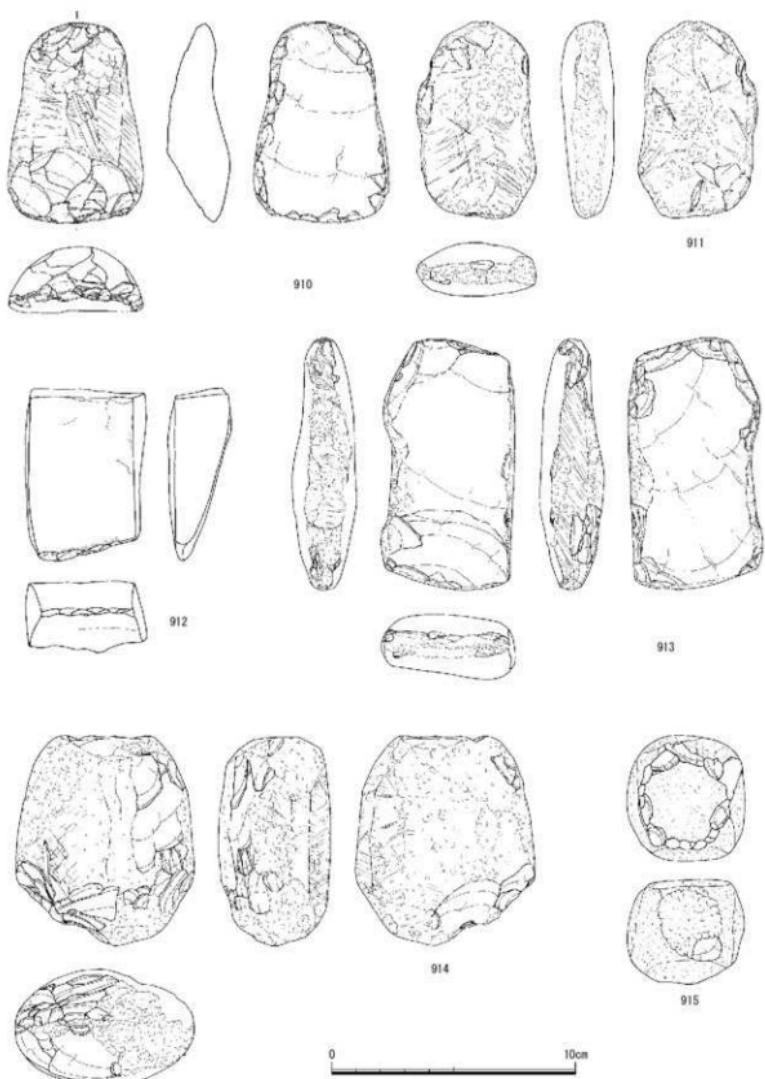
908



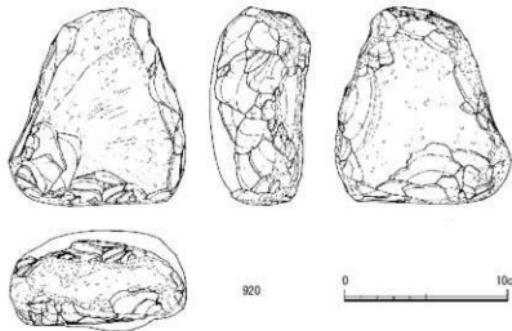
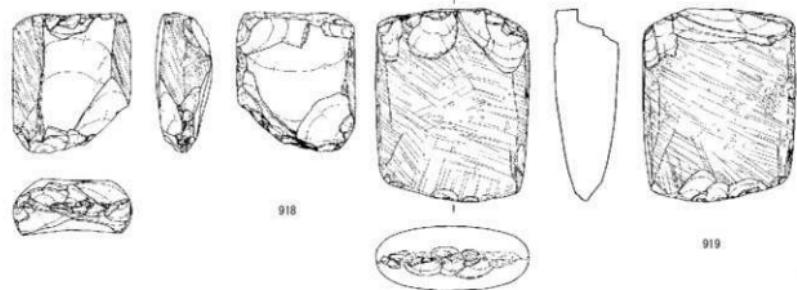
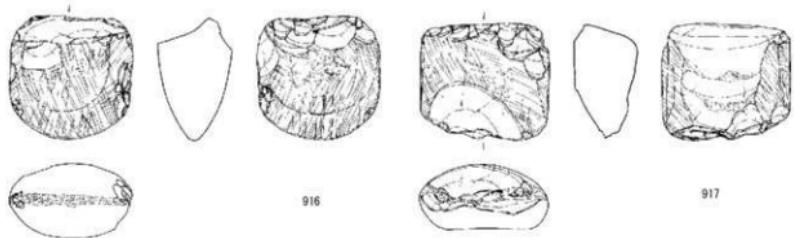
909

0 10cm

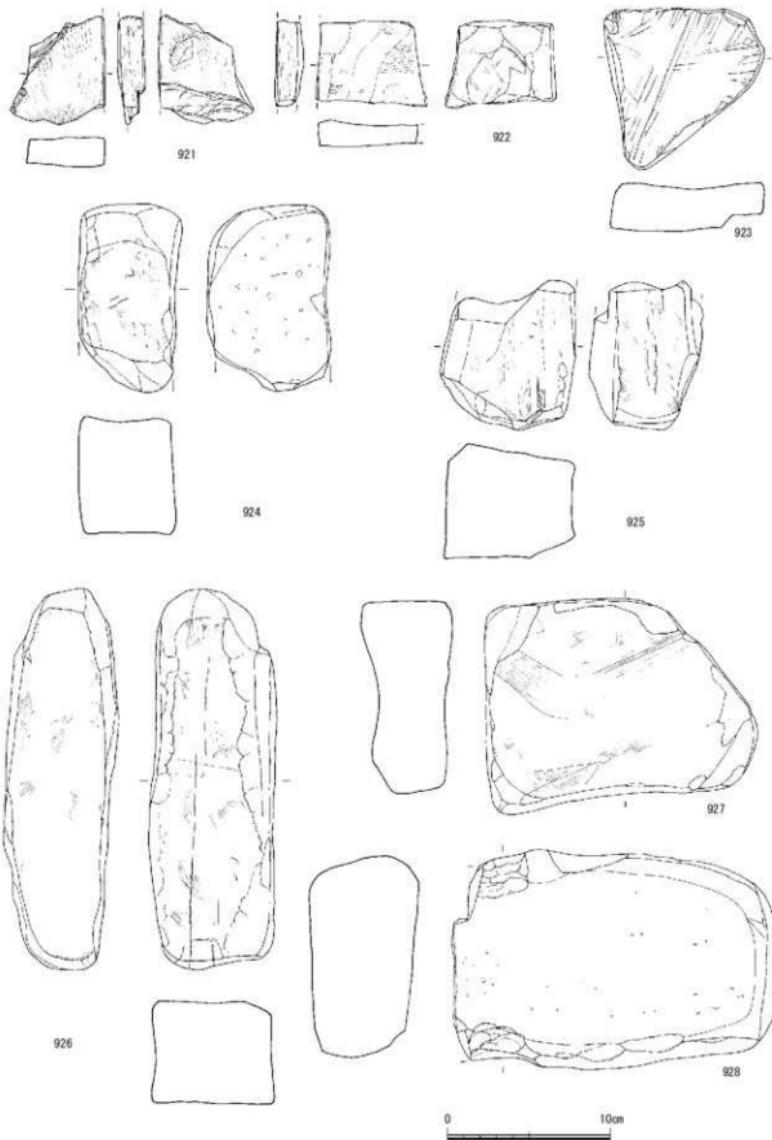
第144図 SX676出土石器実測図 2 (1/2)



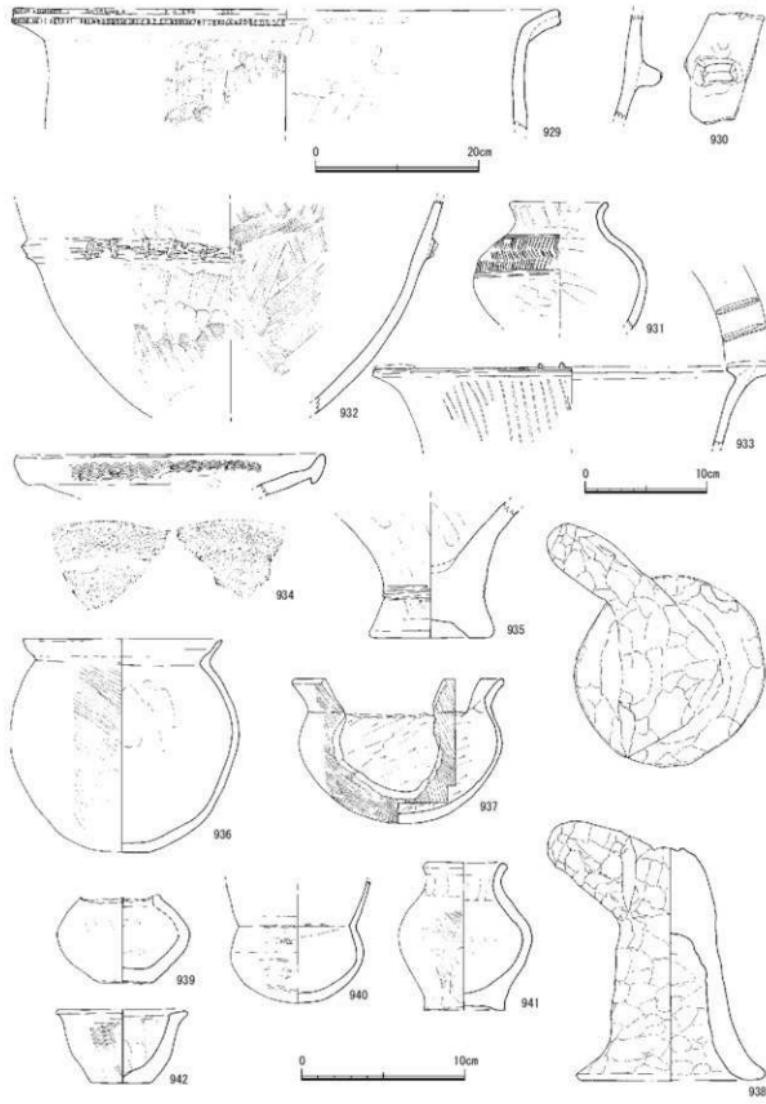
第145図 SX676出土石器実測図3 (1/2)



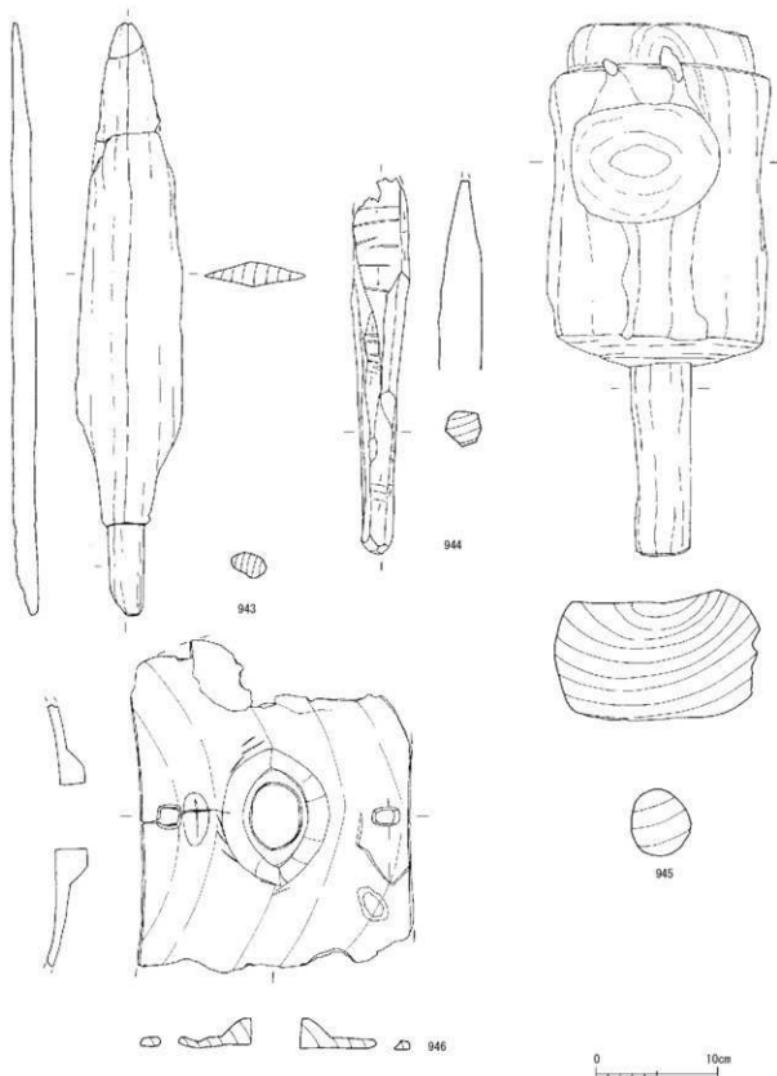
第146図 SX676出土石器実測図4 (1/3)



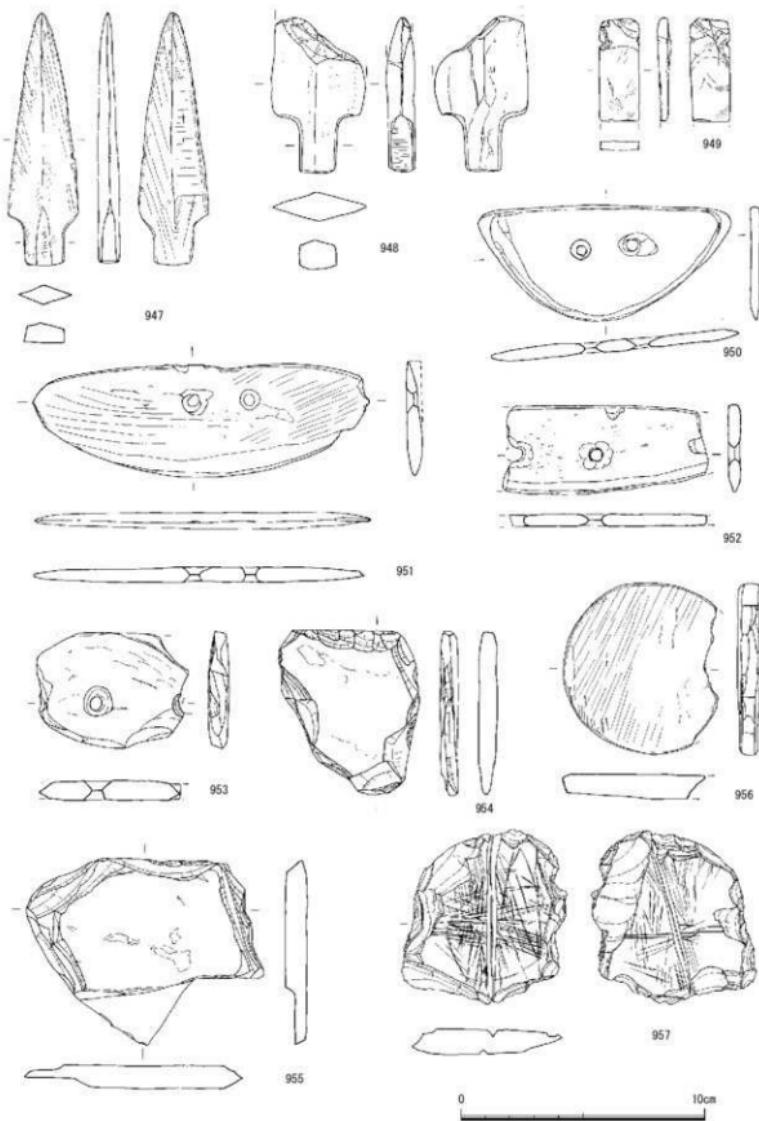
第147図 SX676出土石器実測図 5 (1/3)



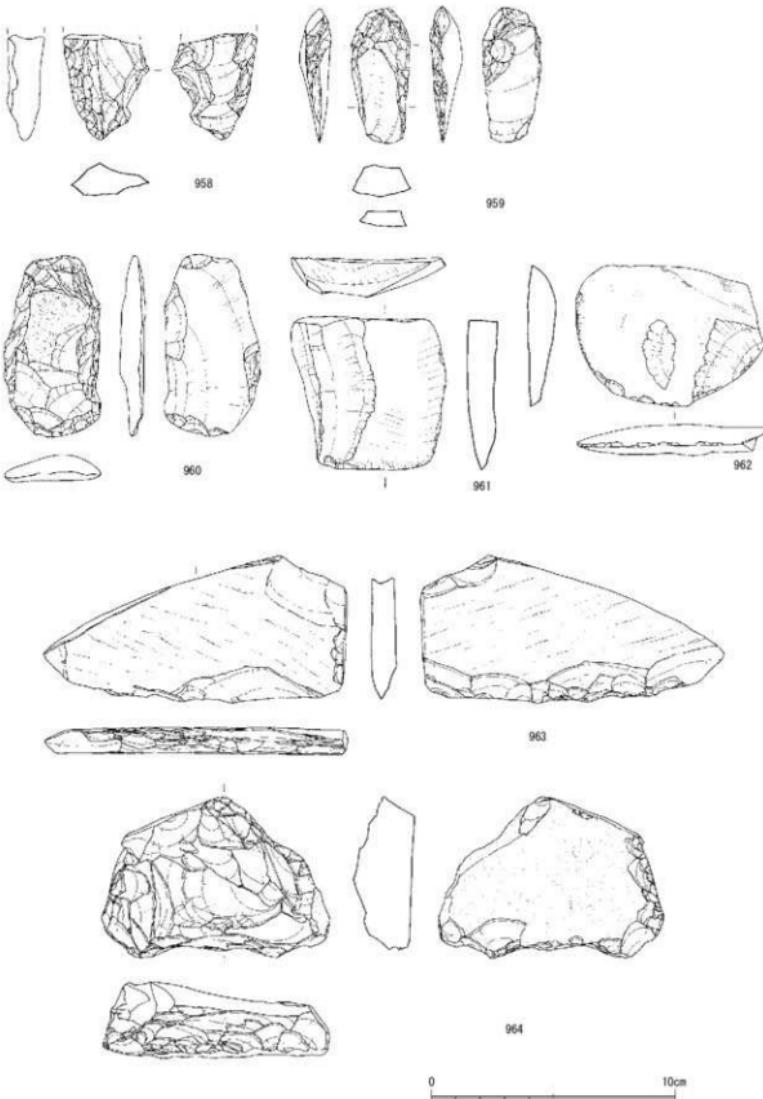
第148図 SX678出土土器実測図 (929は1/6、932・933は1/4、他は1/3)



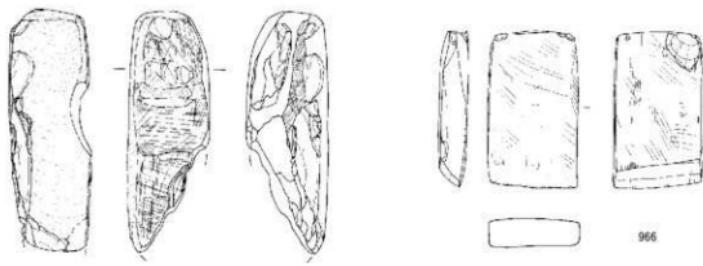
第149図 SX678出土木器実測図 (1/4)



第150図 SX678出土石器実測図 1 (1/2)



第151図 SX678出土石器実測図 2 (1/2)

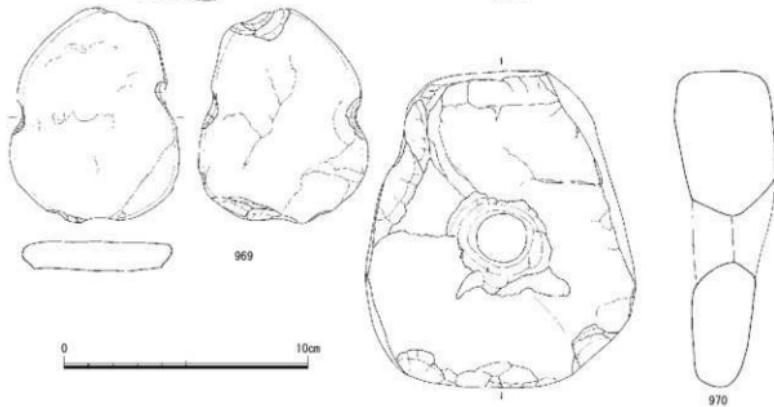
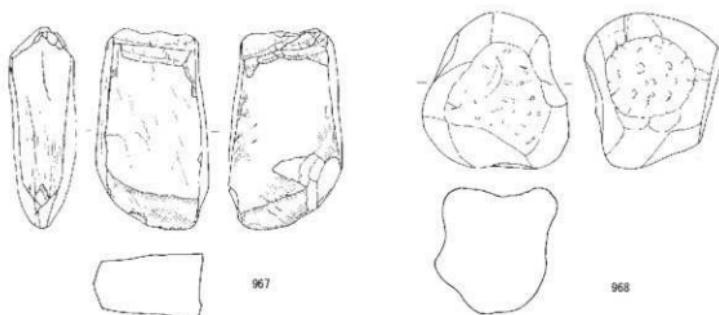


965

966

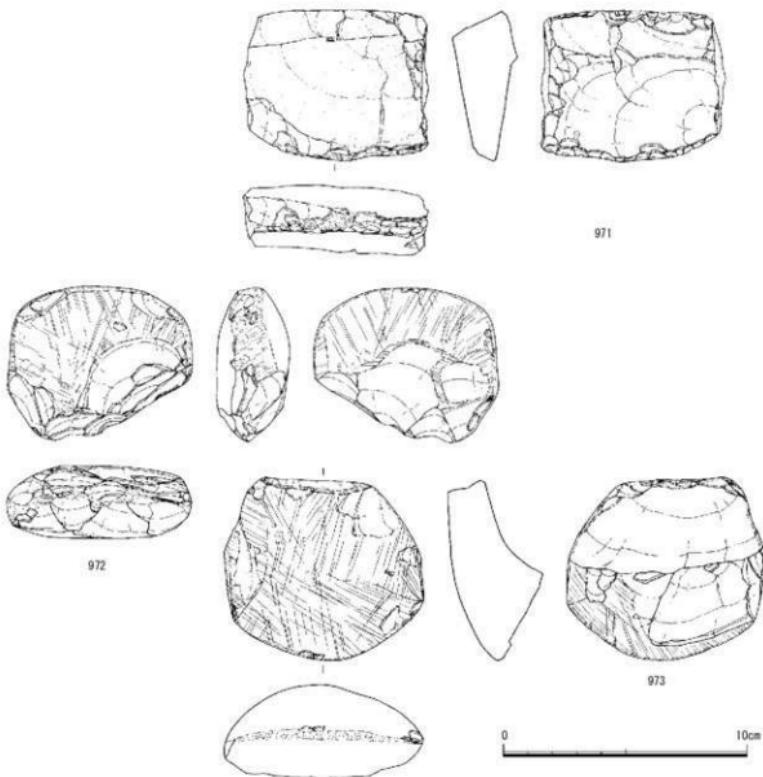
967

968



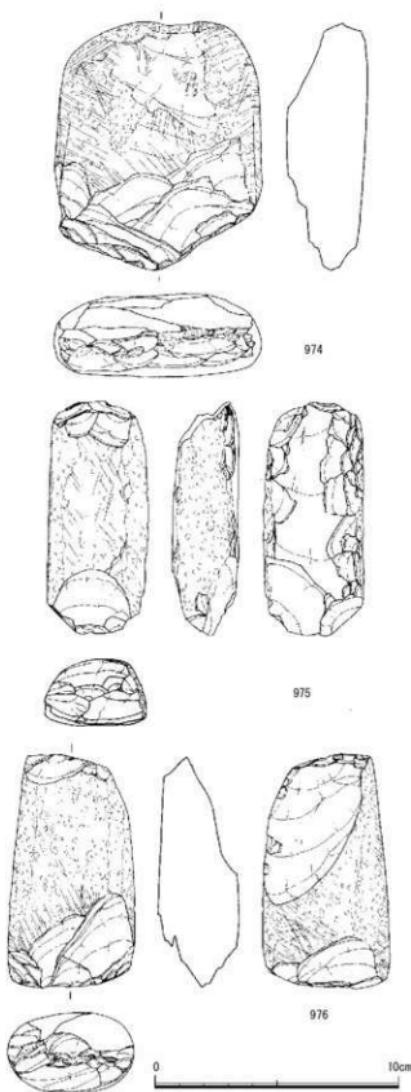
第152図 SX678出土石器実測図3 (1/2)

端部には潰れと、擦痕が認められる。985は玄武岩の大型石斧で、基端部、刃部側に再加工がみられ、刃部側の破断面は研磨されたように磨滅して平坦化している。表面に黒色の付着物があり、斧着柄時の膠着材の痕跡と考えられる（図版40-7）。986は玄武岩の大型石斧の再加工品で、刃部には明確な使用痕が認められない。987は玄武岩の刃器で、大型石斧を転用している。刃端部はわずかに磨滅するが比較的鋭利である。988は粗粒砂岩の小型砥石で4面に砥面が形成され、中央部が橢円形状に磨り減る（図版40-8）。989は黒色ホルンフェルスの砥石で、幅狭の左右面が研磨面となっている。左面は鏡面状に平滑になっており、研磨痕等が観察されない。もう一面は緩やかに湾曲しており、長軸方向の線状痕が認められる。形状だけみると、柱状片刃石斧にも類似するが、柱状片刃石斧の成形技術とは異なっている。石材は緻密で重量感がある。990は砂岩の棒状磨製石器で、長軸方向に全周にわたって擦痕が形成される。やや石英質で緻密な石材である。椎にも似る。991はやや粗粒の砂岩の砥石片で、砥面は4面で、中央がやや凹み、溝状研ぎ痕も形成される。全体に黒ずんでおり、被熱している（図版40-9）。992は細粒より粗い粒子の砂岩で、薄い板状の石製品。縁辺は粗く橢円形状に成形し、表面は全面研磨され、



第153図 SX678出土石器実測図4 (1/2)

内側に梢円形状の浅い段差が形成される。裏面は素材面。表面に砥ぎ痕等の線状痕は明確には認められない(図版40-10)。993は細粒よりもやや粗い砂岩で、底面は4面で、4面ともわずかに中央が凹む。浅い溝状の痕跡も認められる。994は玄武岩の大型蛤刃石斧の刃部片で、上面と右面の破面が同時形成ではないため、刃部が横方向に折れたものが、さらに縦方向に割れたものと考えられる。ただし、破面の打点・リング・フィッシャー等ははつきりとは分からぬ。縦の破面には剥離面内部にフィッシャーの起点がみられ、熱破碎の剥離面に似る。ただし、被熱の痕跡はほとんどない。995は玄武岩の大型蛤刃石斧脛部片で、上下面が大きな破断面になるが、破面のフィッシャーの起点が破断面の中央附近にあり、通常の剥離による剥離とは異なる。表面が部分的に灰赤色化したり、剥落したりしており、被熱している可能性もある。996は花崗閃緑岩の磨石で表裏面が平行に近いほど磨り減り・平滑化している。997は粗粒砂岩の凹石で、表裏面に平滑面とともに中央に凹みを形成する。平滑面は磨りか砥ぎか判然としない。側縁には4ヶ所の磨りによる凹みがあり、砥石的な使用や、紐掛け部としての成形(石錐)も想定される。998は花崗閃緑岩の敲石で、表裏面に浅い凹み、上下端に潰れ・平坦面が形成される。999は玄武岩の敲石で、亜角礫を加工している。使用部は丸く磨滅しており、さほど強い衝撃を受けているようには見えない。1000は花崗閃緑岩の凹石で、表裏面に幅2.5cm、長さ3.5~5.5cmの凹みが形成され、下端は敲打によって潰れ・磨滅している。1001は玄武岩の扁平礫で、片面中央に浅い凹みを有す。1002は粗粒砂岩の砥石で、表裏面が砥面となっており、中央部が凹み、縁辺に幅広の凹み状の砥ぎ痕が形成される。全体に黒褐色化しており、被熱しているとみられ、表面の剥落もある。1003は玄武岩の亜角礫で、全体に被熱して暗黄灰色化、タール



第154図 SX678出土石器実測図5 (1/2)



977



978



980



979



983

981



982

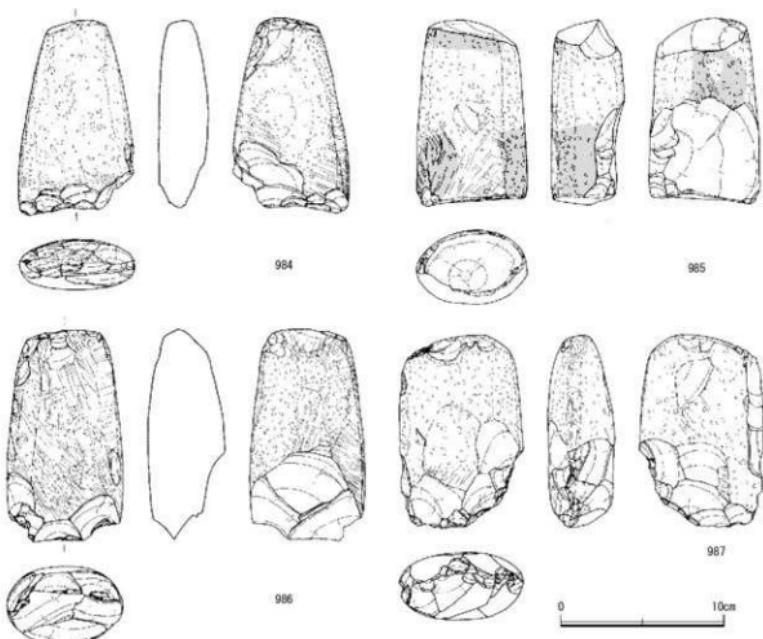


第155図 SX678出土石器実測図6 (1/3)

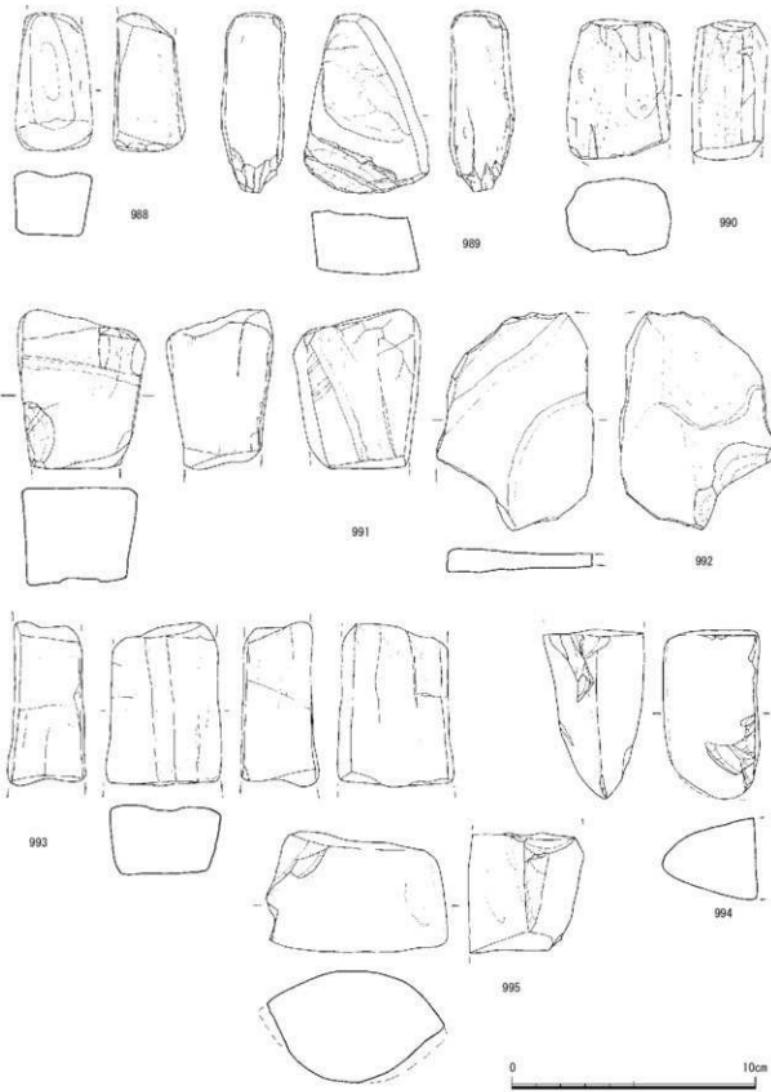
状炭化物の付着がある。接地面と思われる平坦面は被熱・変色していない。支脚。1004は細粒よりはやや粗い粒子の砂岩の砥石で、表裏面は中央が大きく凹み、幅広な筋状の研ぎ痕が形成される。側面には溝状の研ぎ痕が形成される。1005は細粒よりやや粗い粒子の砂岩で、砥面は1面である。砥面は中央が浅く凹み、縁辺に放射状に溝痕が認められる。側面は敲打で平坦に仕上げ、下面是素材の平坦面を生かしている。1392は滑石の大型扁平勾玉。1397は滑石剥片で、縁辺に刻みが入る。1419は土製紡錘車。裾の両面に径1.5mmほどの刺突文を施す(図版40-15)。1423は土製紡錘車。1466は大型土製円盤。弥生土器片転用。1467は土製円盤。弥生土器片転用。1475・1476・1477は投弾。1514は不明土製品。内面に円柱状の凹みがある(図版41-1)。

SX777(第130図、図版11-2) 調査区南壁際はSX678の下層堆積があり、無遺物のオリーブ黒色粘土の下に小礫と石器を含む細砂層を確認した。周りから湧水が流れ込む状況で、十分な掘削はできなかつたが、遺物の時期は上層のSX678とあまり変わらない。小片の弥生土器が出土した。

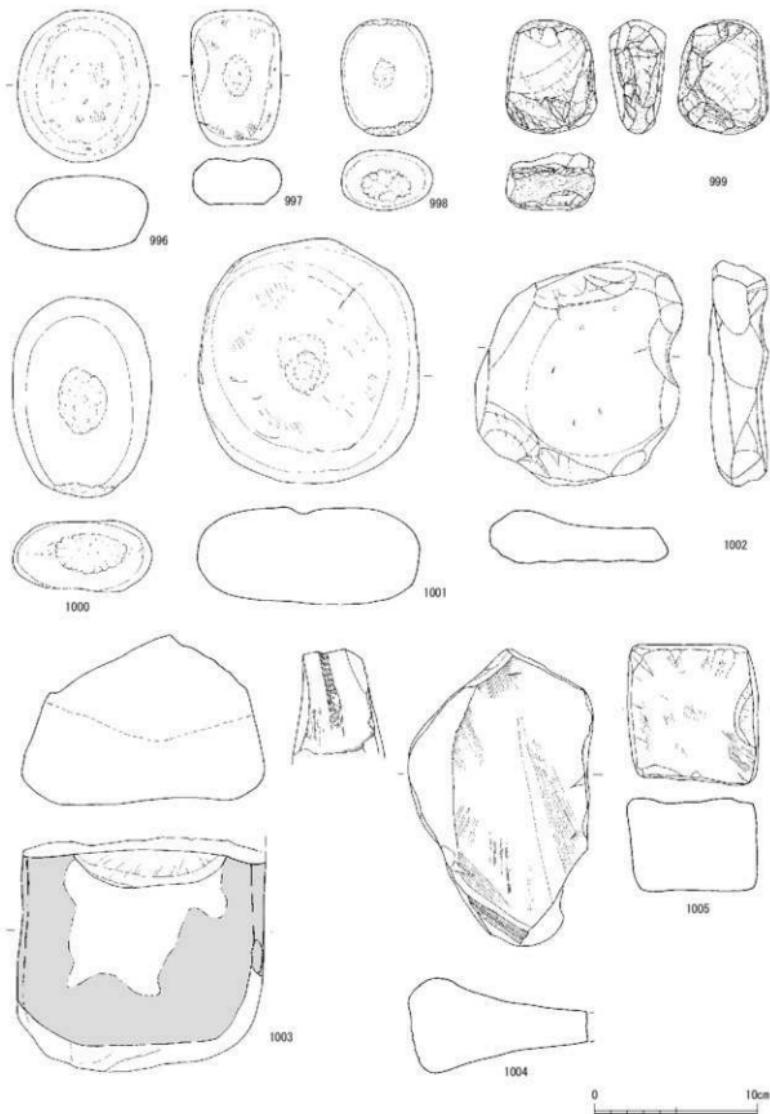
出土遺物(第139・159図) 882は土師器小型丸底壺。掘削時の混入。1006はホルンフェルス(岩石No.4・5類似)の石包丁未成品。1007はホルンフェルス(岩石No.5類似)の石包丁未成品。1008は蛇紋岩質で、磨製石斧を再加工して刃部を作る。刃端部は摩滅する。1009は玄武岩製大型蛤刃石斧の再加工品で、敲石利用。1010は玄武岩で、大型石斧基部を再加工している。



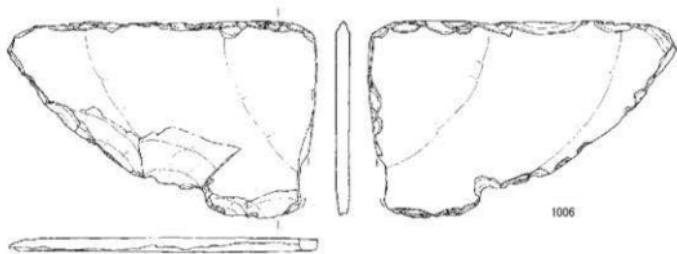
第156図 SX678出土石器実測図 7 (1/3)



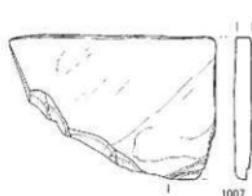
第157図 SX678出土石器実測図 8 (1/2)



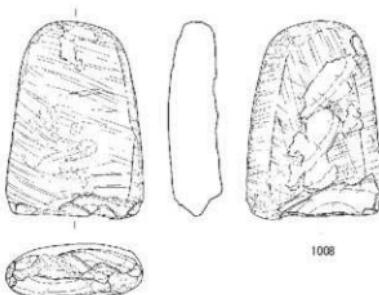
第158図 SX678出土石器実測図 9 (1/3)



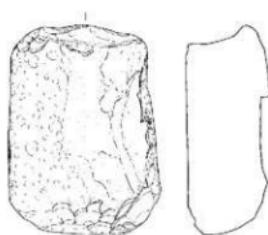
1006



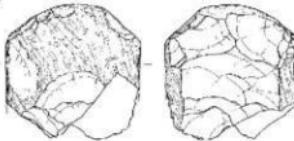
1007



1008



1009



1010

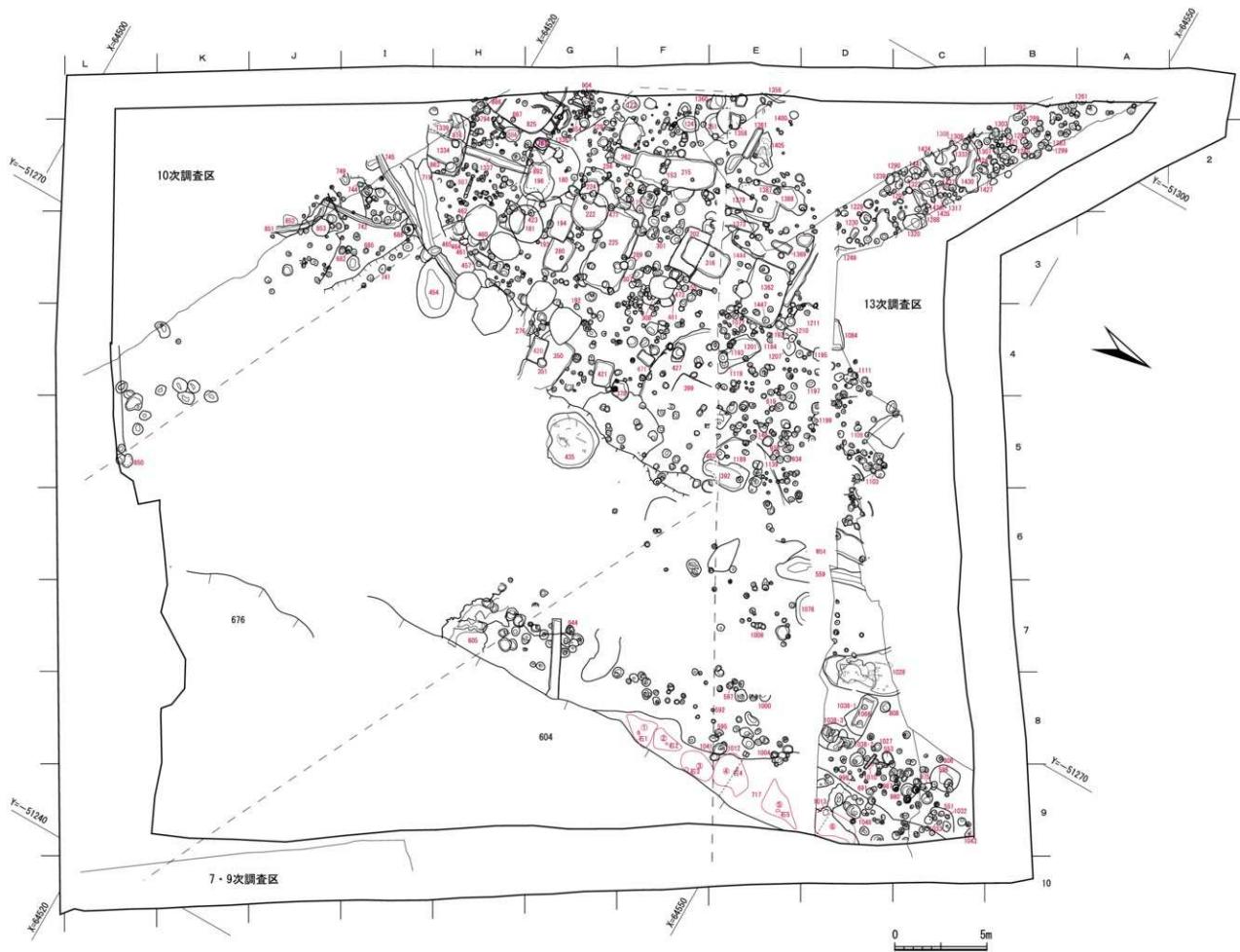


10cm



10cm

第159図 SX777出土石器実測図 (1010は1/3、他は1/2)



第160図 第3面遺構全体図 (1/200)

第3節 第3面の調査

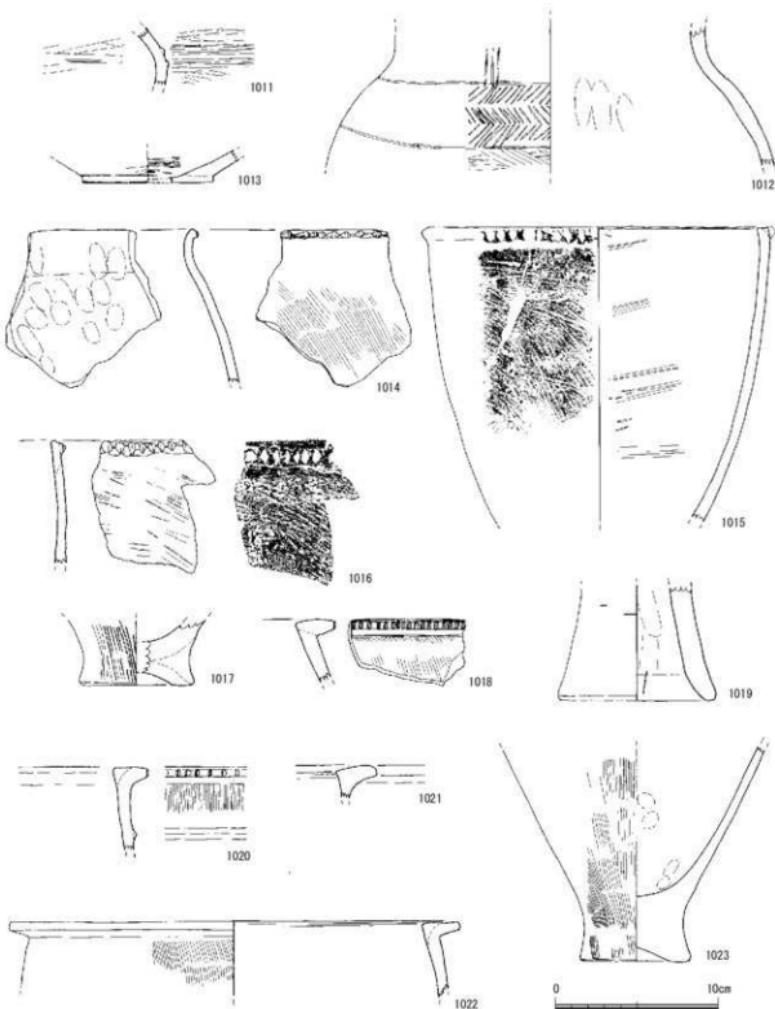
1. 第3面の概要

調査区西側の第2面黒褐色堆積土を掘り下げるに、緑灰色シルト・粘土、白色・褐色砂質土などの不均質な堆積面に達し、黒褐色粘質土埋土の遺構群を検出した。遺構密度は高く、遺構の残りはあまり良くない。調査区東側は、第2面の大型土坑、SD604などで地山まで削られた状態だが、その間のC～H-7～9区は遺構面が残っていた。その東端の落ち（SX717）が、第3面の微高地落ちと考えられ、第3面の微高地（集落域）は、第2面よりも10～20m東に広かつたと考えられる。

2. 柱穴（SP）

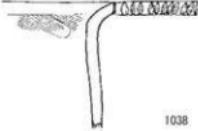
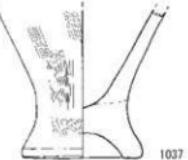
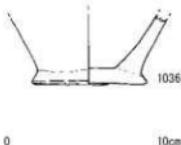
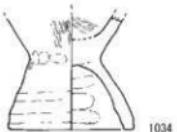
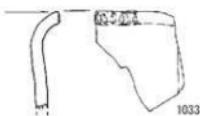
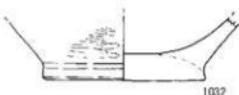
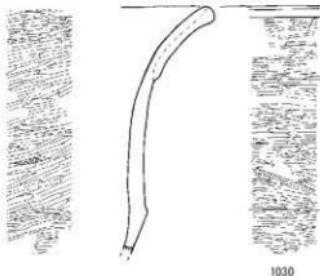
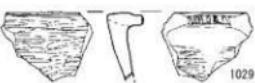
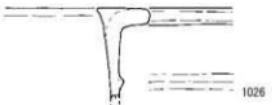
第3面の柱穴は、第2面のような長方形建物はほとんど構成せず、どちらかというと円形に柱穴が関連すると見られる。しかし、類似形態の柱穴3基程度が弧状に並んだとしても、その先が追えず、明確な根拠をもって円形建物を復元することができなかつた。また、弥生時代早期の縦長方形建物も存在した可能性があるが、詳細には検討できなかつた。以下、検出区を北西部、北東部、南西部に便宜的に分けて、柱穴出土遺物を報告する。北西部・南東部については、夜臼式から須玖I式土器まで混在する状況だが、北東部は城ノ越式から須玖I式土器が主体となっている。

北西部（A～E・1～6区）柱穴出土遺物（第161～163・166・167・205図） SP1261・A1区の1011は二条隆線を持つ磨研壺で、外面は炭素吸着の黒褐色化と、丹（赤褐色）の残存がみられる。SP1293・B1区（図版30）のW311はシイ属（スダジイ型）の角材礎板。炭素14年代は2世紀中頃から4世紀中頃を示す。古墳時代（第2面）に属する可能性が高い。SP1283・1298一段下げ・B2区の1012は壺。SP1284・1285一段下げ・B2区の1013は浅鉢で、胎土精良。同1014は甕。板付II式。SP1303～SP1307一段下げ・B2区の1015は甕。夜臼式。SP1333・B2区（図版30）。柱穴底面から出土した木質遺物は現場で取り上げ損ねている。SP1424・B2区の1016は甕。夜臼式。SP1427・B2区の1017は甕。城ノ越式。SP1289・B2区（図版30）のW310はシイ属（ツブライ型）の角材礎板。SP1421・B2区（図版30）のW312はイヌキの柱。炭素14年代は紀元前8世紀中頃から紀元前5世紀を示した（第14表）。SP1309・C2区の1018は甕。城ノ越式。SP1308・C2区はSP1309を切り、被熱したヘダイ？遊離物が出土した（第12表）。SP群1430・C2区の1019は器台。須玖I式。同1101は砂質泥岩（岩石No.6類似）の磨製石斧片で、刃部は使用に伴う剥離が著しい。同1468は投弾。SP1317・C2区の1020は甕。城ノ越式。SP1435・C2区の1021は甕。城ノ越式。SP1436・C2区の1022は甕。城ノ越式。SP1437・C2区の1023は甕。城ノ越式。SP1441・C2区の1024は短頸壺で、口縁部に径3mmの紐通し穴がある。須玖I式。SP1322・C2区の1025は甕。城ノ越～須玖I式。SP1288・C2区の1026は甕。須玖I式。微細な雲母、角閃石、赤色粒を含む。SP1290・C2区の1027は甕。城ノ越式。SP1291・C2区の1028は広口壺。須玖I式古相。SP1434・C2区のW313はイヌキの柱。SP1239・D2区の1029は鉢。板付II式新相～城ノ越式。同1375は棒状鉄製品。下端は錐状で、上端は管状に回む。鉄素材か。他に黒曜石片14点、9.4gが出土している。SP1230・D3区の1030は大型鉢。板付I式。SP1229・D3区の1031は甕。夜臼式。SP1387・E2区の1095は凝灰岩の石包丁。SP1400・E2区の1032は丹塗り（暗赤灰色）磨研壺。SP1447・E4区はSK1362底面で検出した。1033は甕。SP1210・E4区の1034は高杯（台付鉢）で、脚部は楕形で、杯部は鉢状と想定。夜臼式新相。SP1207・D4区の1035は甕で、突带上刻みは貝殻腹縁部による。夜臼式新相。SP1192・E4区の1036は甕。夜臼I式。SP1184・E4区の1037は甕。城ノ越式。SP1072・E4区の1038は甕。SP1193・E4区。1429は土製円盤で、外面ハケメの弥生土器片利用。SP1197・E4区の1039は黒色磨研浅鉢で、口縁部は緩やかな波状を呈す。板付I式。SP619・E5区の1040は壺で、円盤状底部からの立ち上がりは段を持たず、外面ミガキもやや粗い。城ノ越式。SP1199・D5区の1041は小型甕。板付I式。



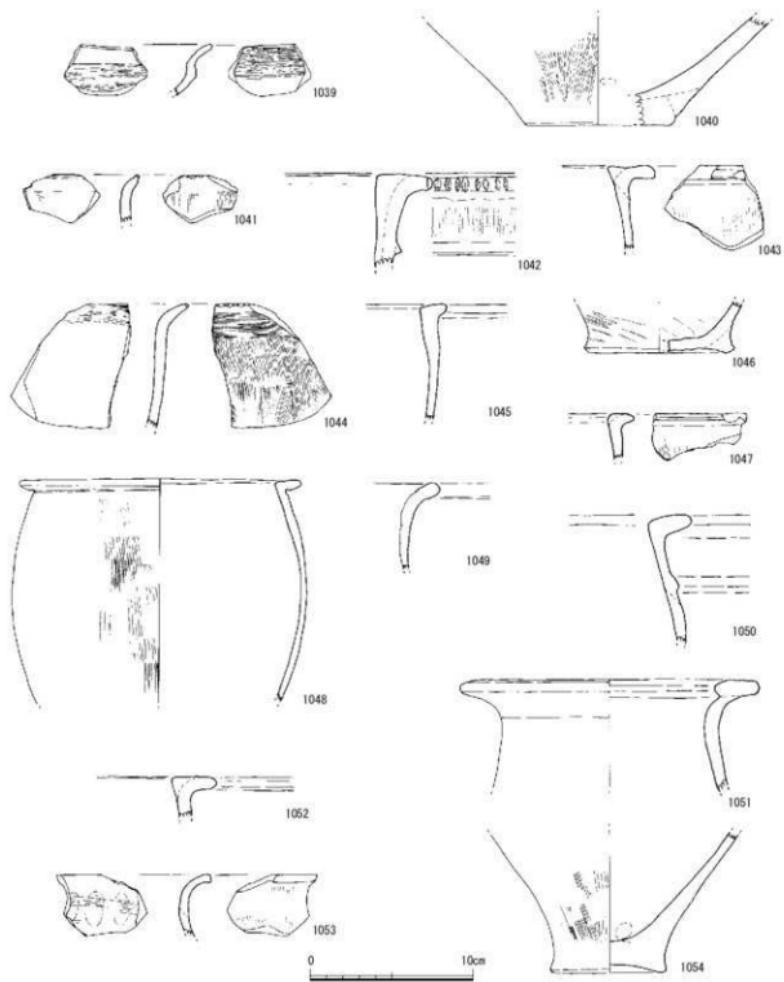
1011 SP1261 1012 SP1283・1299 1013・1014 SP1284・1285 1015 SP1303・1307 1016 SP1424
 1017 SP1427 1018 SP1309 1019 SP群1430 1020 SP1317 1021 SP1435
 1022 SP1436 1023 SP1437

第161図 第3面SP出土土器実測図1 (1/3)

0
10cm

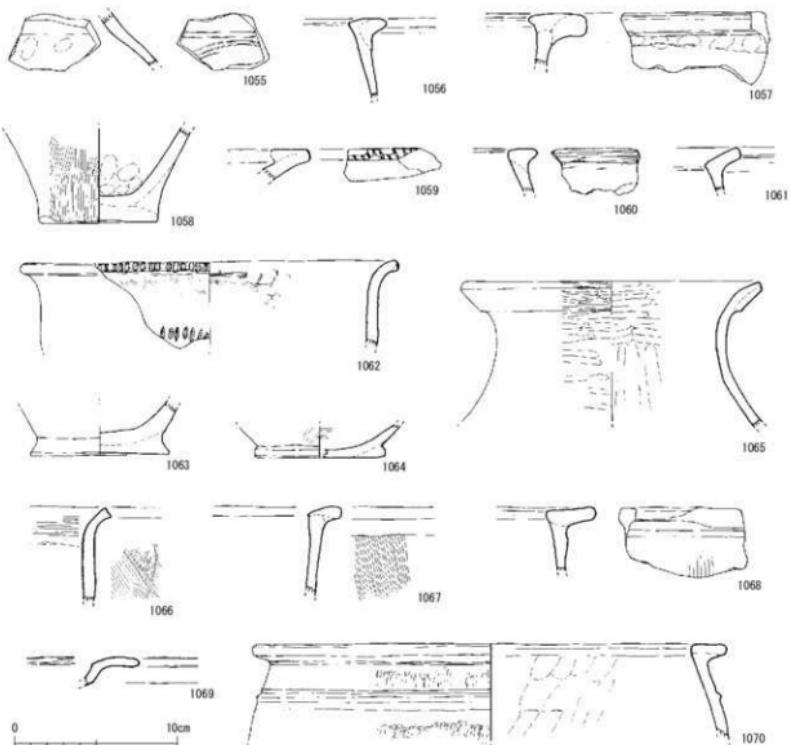
1024 SP1441	1025 SP1322	1026 SP1288	1027 SP1290	1028 SP1291
1029 SP1239	1030 SP1230	1031 SP1229	1032 SP1400	1033 SP1447
1034 SP1210	1035 SP1207	1036 SP1192	1037 SP1184	1038 SP1072

第162図 第3面SP出土土器実測図2 (1/3)



1039 SP1197	1040 SP619	1041 SP1199	1042 SP1148	1043 SP936
1044 SP934	1045 SP808	1046 SP999	1047 SP1013	1048 SP1048
1049 SP1027	1050・1051 SP987	1052 SP980	1053 SP1032	1054 SP1033

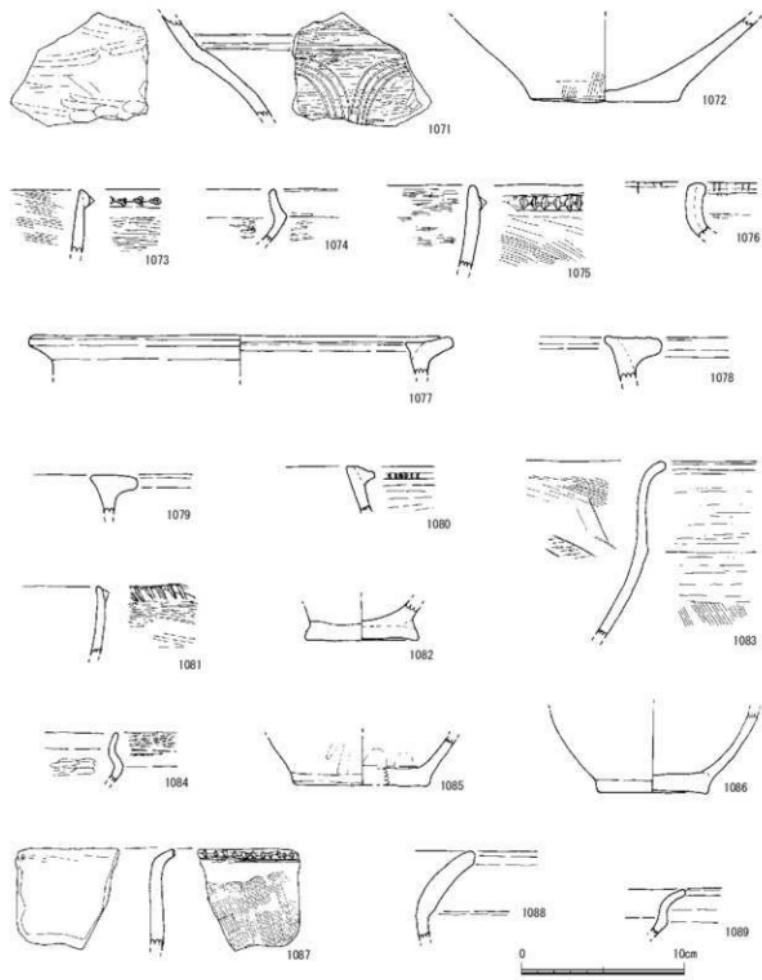
第163図 第3面SP出土土器実測図3 (1/3)



第164図 第3面SP出土土器実測図4 (1/3)

SP1148・E5区の1042は大型甕。同1094は滑石の石製品で、掠り切り状に段が作られている。石棒か。SP936・E5区の1043は甕。須玖I式。SP934・E5区の1044は甕。板付I式。SP1103・D5区の1093は黒曜石の打製石鎌。SP1119・E4区の1091はシイ属(スダジイ型)の柱。SP1139・E5区の1428は土製円盤で、外面ミガキ調整の弥生土器片利用。SP1111・D4区の1096は頁岩の挿入柱状片刃石斧。欠損した刃部に面取の研磨が施される。

北東部(E7・D8・9・C9区)柱穴出土遺物(第163・164・166・167図) SP808・D8区の1045は甕。城ノ越式。SP999・D9区の1046は甕で、外面に貝殻条痕を残し、底外面はヘラケズリで上げ底状に仕上げる。夜臼式。SP1013・D9区の1047は小型甕。城ノ越式。SP1048・D9区の1048は甕。城ノ越式。SP1027・D8区の1049は蓋で、口縁部は肥厚せざりに外反する。外面と内面上部1.2cmほどに丹が残る。城ノ越式。SP987・C9区の1050は甕。城ノ越～須玖I式。同1051はやや広口の蓋。SP980・C9区は土

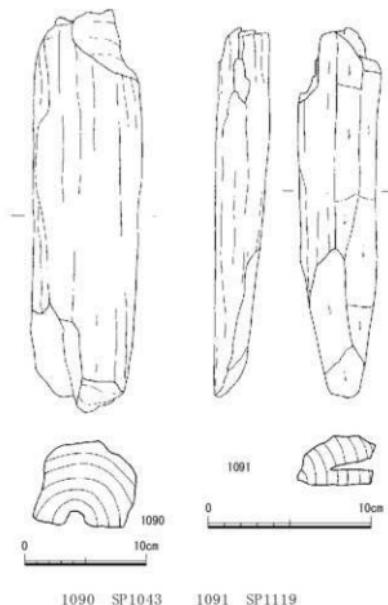


1071・1072 SP351 1073・1074 SP193 1075 SP423 1076 SP944 1077 SP887 1078 SP794
 1079 SP744 1080～1083 SP688 1084 SP685 1085 SP741 1086 SP682 1087～
 1089 SP850

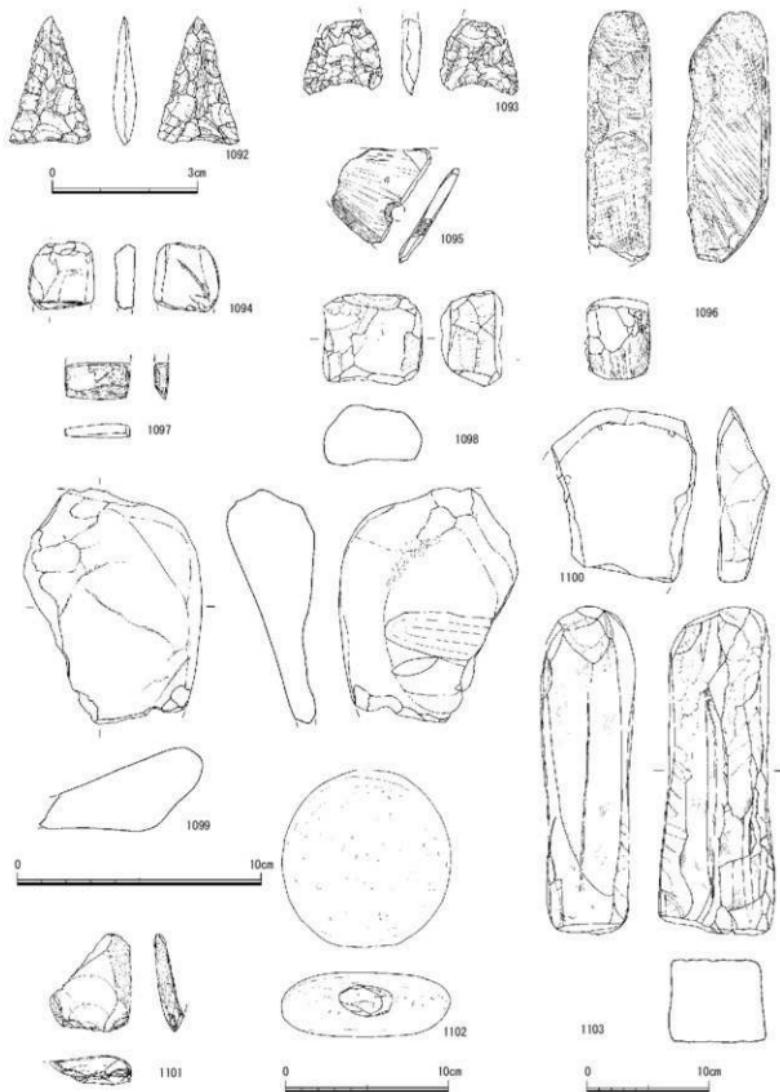
第165図 第3面SP出土土器実測図5 (1/3)

坑に近い大型柱穴で、1052は甕。須玖 I 式。SP1032・C9区の1053は壺で、口縁部は肥厚せず、ハケメや指頭痕を残すなどやや粗い印象。板付 II c式～城ノ越式。SP1033・C9区の1054は甕で、円盤状底部は台状まではいかないが比較的厚く、外面は浅いハケメをナデ消している。板付 II c式～城ノ越式。SP1009・E7区の1055は壺で、平行文・重弧文を先端の丸い工具で暗文風に描く。板付 II 式古相。SP1004・D8区の1056は小型甕。SP1012・E8区の1057は甕。須玖 I 式。同1058は甕で、底部の厚みは比較的薄く、外面のハケメを残す。須玖 I 式。SP1041・E8区の1059は広口壺。城ノ越式新相。SP1000・E8区は西側を擾乱で切られる。1060は小型甕。SP597・E8区の1061は甕。城ノ越式。SP1043・C9区の1090はヒノキ科の柱で、半割材の両端を切り落として角材状に取る。SP592・E8区の1097は層灰岩の小型扁平片刃石斧で、刃部に明瞭な使用痕は認められない。SP595・E8区のW27はアワブキ属の柱。SP691・D9区の1400は滑石の玉未成品。SP806・C8区は、径15cmで先すぼまり杭状の柱痕跡（黒褐色粘土・砂質粘土）を確認した。SP975・C9区（図版30）のW33はイスノキの柱。SP群551・C9区の1092は安山岩の石礫で、表裏の稜部分が磨滅して平坦化する。同1433は土製円盤。弥生土器片利用。

南西部 (F ~ L・I ~ 区) 柱穴出土遺物 (第164・165・167図) SP153・F2区はSK215を切る。1062は甕で、口唇部とその下4cmほどの位置に板状工具による刻目を密に施す。板付 II 式。SP179・F2区（図版30）のW51はツブライジの板材。同W61はスダライジの板材。SP301・F3区の1063は甕。夜臼式。同1098は花崗岩の小礫製品で、4辺に凹みがみられる。石鍤か。SP155・F3区の1064は鉢か浅鉢の底部で、内外面ともに貝殻条痕をわずかに残す。他に瓶の底部小片が出土している。SP473・F3区の1065は壺。板付 I 式。SP289・F3区の1103は粗粒砂岩の置き砥石で、4面とも砥面で、溝状の研ぎ痕が認められる。SP307・F3区は埋土が採取されており、洗浄したところ、炭化米50粒ほどと被熟魚骨（第12表）が出土した。SP308・F4区からは、弥生土器小片と比較的多い炭化米が出土した。土器は小片で図化に耐えないが、貝殻条痕をもつ刻目突帯文の甕や、磨研の浅鉢もしくは鉢の破片で、夜臼～板付 I 式に位置づけられる。SP481・F4区の1427は土製円盤で、弥生土器片利用。SP892・G2区の1066は甕。SP654・G1区の1067は鉢か高杯。同1068は甕。城ノ越式。SP904・G1区の1102は凝灰岩の磨石で、一端が打ち欠かれている。根石状に出土した。SP256・G2区はSK262を切る。1069は高杯。板付 II 式。SP228・G2区の1402は滑石の玉未成品。同1426は土製円盤。ナデ調整の弥生土器片利用。SP477・G3区はSK225を切る。1070は甕。城ノ越～須玖 I 式。胎土に雲母やや多い。SP351・G4区はSK350・420

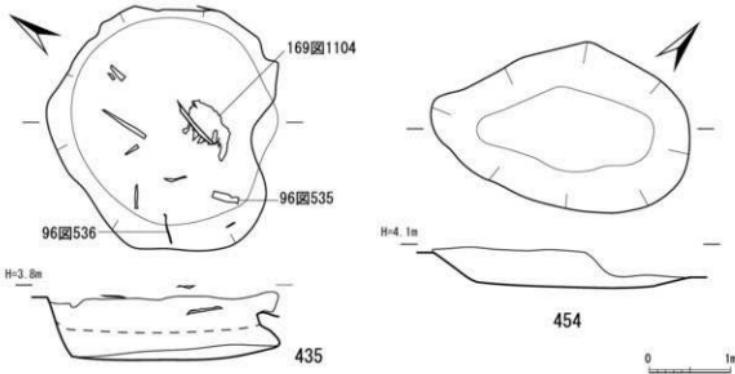


第166図 SP1043・1119出土木器実測図
(1090は1/4、1091は1/3)

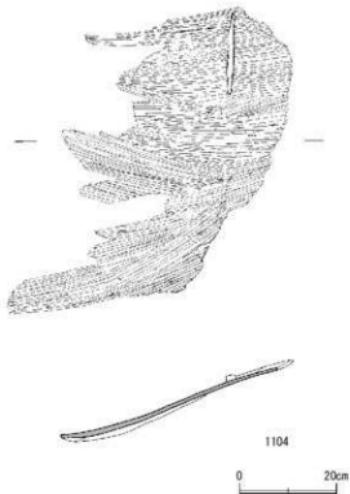


1092 SP群551 1093 SP1103 1094 SP1148 1095 SP1387 1096 SP1111 1097 SP592
1098 SP301 1099 SP351 1100 SP192 1101 SP群1430 1102 SP904 1103 SP289

第167図 第3面SP出土石器実測図 (1092は1/1、1101・1102は1/3、1103は1/4、他は1/2)



第168図 SX435・454 実測図 (1/60)



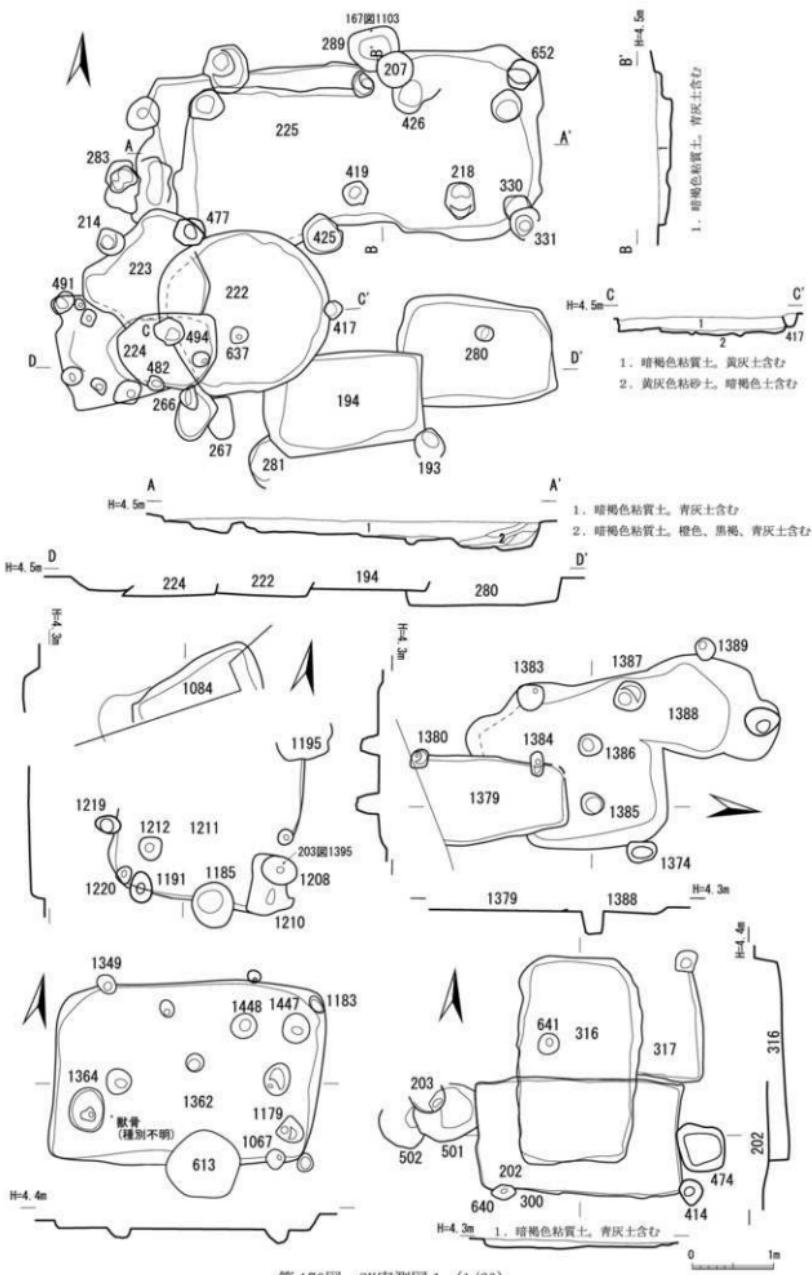
第169図 SX435出土木質遺物実測図 (1/10)

I式から板付II式への移行期の特徴を示す。

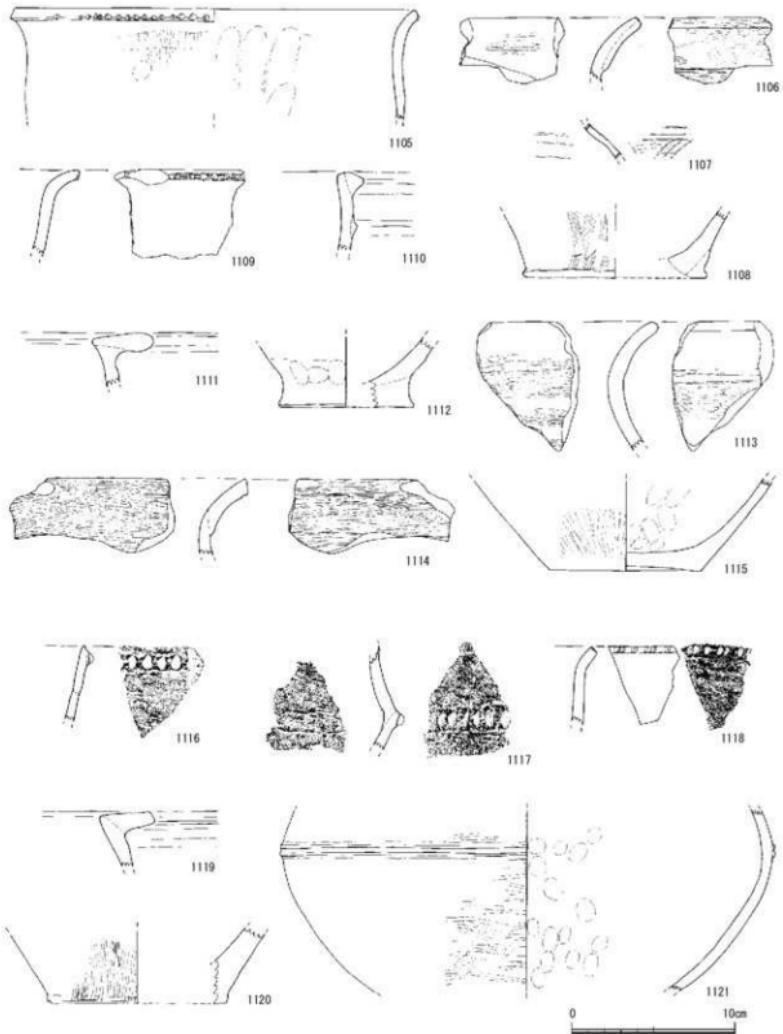
3. 土坑 (SK)

土坑は、平面長方形、方形、円形の3種類があり、それぞれに小型・大型がある。方形・円形の大形土坑は、堅穴建物の可能性も考えられるが、壁溝や柱穴、炉などの施設は確認していない。遺構と

を切る。1071は壺。同1072は壺底部。1071と1072は、接合せず、色調も異なるが、金雲母を少なく含む胎土が共通しており、同一個体と考えられる。同1099は細粒砂岩の砥石破片。SP193・G3区はSK194を切る。1073は甕。夜臼I式。1074は鉢。夜臼式。SP423・G3区の1075は甕で、刻みは粘土を削り取る。胎土に赤色粒や多い。夜臼II式。SP192・G4区の1100は花崗岩の砥石。SP944・G7区の1076は口縁部が肥厚し、端部は断面カマボコ状の突帯を貼り付け、突带上と口縁内端に浅い刻み目を施す。頸部以下がすぼまると想定して、鉢と考える。SP887・H2区の1077は甕。須玖I式古相。SP794・H1区は小型円形溝を切る。1078は甕。須玖I式。SP744・I2区の1079は甕。須玖I式。SP688・I3区の1080は短頸甕。同1081は甕。夜臼式。同1083は鉢で、外面と内面の上半部に丹(明赤褐色)が塗られる。板付I式。SP685・I3区の1084は鉢。夜臼式。SP741・I3区の1085は磨研甕。板付式。SP682・I3区の1086は小型甕。板付式。SP850・L5区の1087は甕。1088は甕で、外面がごくわずかに肥厚する。1089は鉢で、屈曲部分は短い。1087～1089は板付



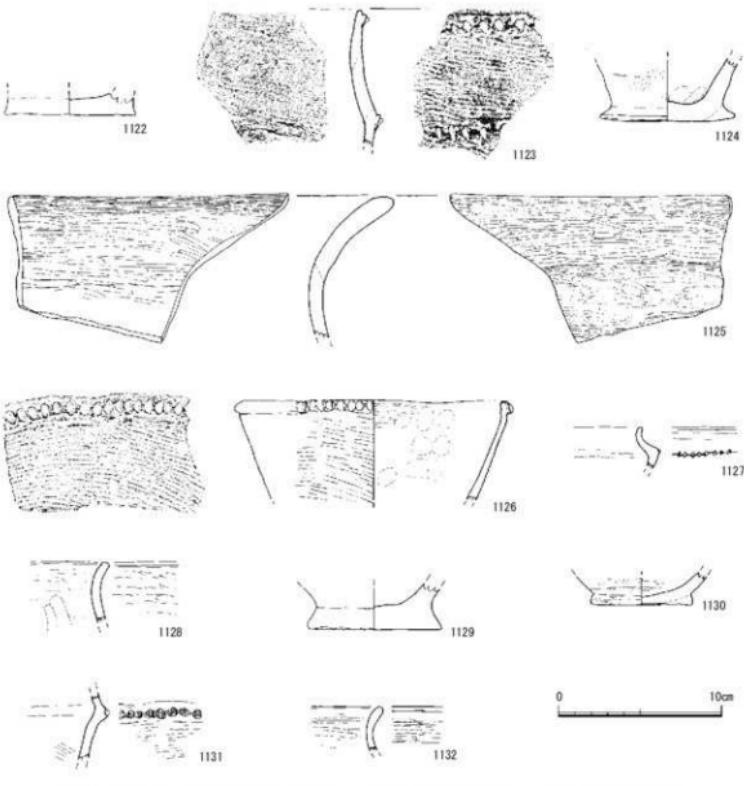
第170図 SK実測図 1 (1/60)



1105・1106 SK280 1107・1108 SK194 1109～1115 SK225

1116～1118 SK224 1119～1121 SK222

第171図 SK194・222・224・225・280出土土器実測図（1/3）

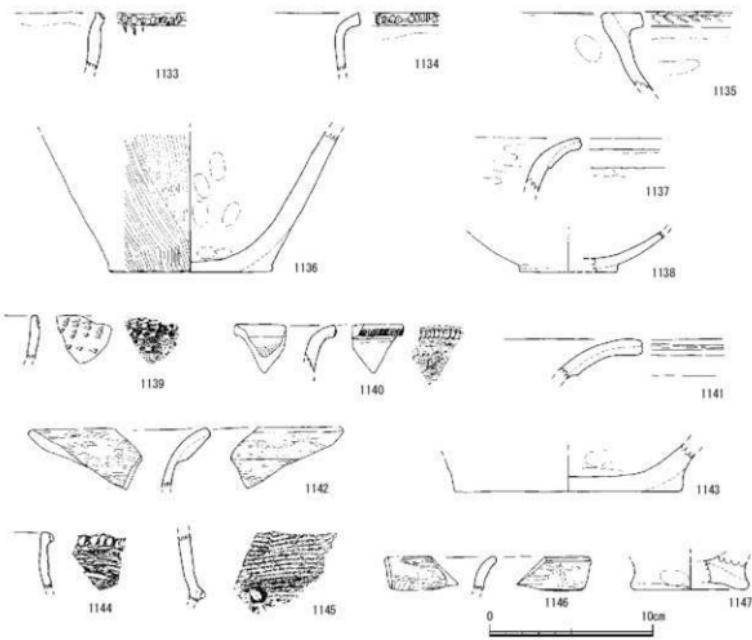


1122 SK1084 1123~1125 SK1211 1126~1130 SK1388 1131~1132 SK1379

第172図 SK1084・1211・1379・1388出土土器実測図 (1/3)

うしの埋土が類似するため、遺構の切り合い把握は難しく、出土遺物の傾向と整合しない結果もあった。微高地際には不定形土坑SX435・454が検出された。これらは第2面の微高地際の楕円形土坑群とともに検出されたが、出土土器が弥生土器に収まると考え、第3面遺構とした。しかし、第2面遺構にも弥生時代後期後半（下大隈式、西新式）に属する可能性のある遺構もある。

SX435（第168図、図版31） 長さ318cm、幅285cm、深さ67cmを測る。出土遺物（第96・169・180・188・205図）1212は壺。城ノ越式。胎土に赤色粒や多い。535はヒサカキ属の板状部品（指物か）で、径3~4mmの孔を両長側辺に沿って穿つ（図版38-15）。536はコナラ属アカガシ亜属Aの二又鋸。1104は長さ30cmほどの広葉樹の枝を同一方向に敷き並べた状態のもの。535と1104の炭素14年代は共に1世紀後半から3世紀前半を示した（第14表）。1104は土ごと現場から切り取り、埋蔵文化財センターに保管されている。1289は磨製石鎌で、石材は頁岩質だが強い磁性を帯びており、特異である。1295は玄武岩の大型蛤刃石斧軒用刀器。1435は土製円盤で、器壁が厚い弥生土器片利用。



1133～1138 SK1362 1139～1143 SK316 1144～1147 SK202

第173図 SK202・316・1362出土土器実測図 (1/3)

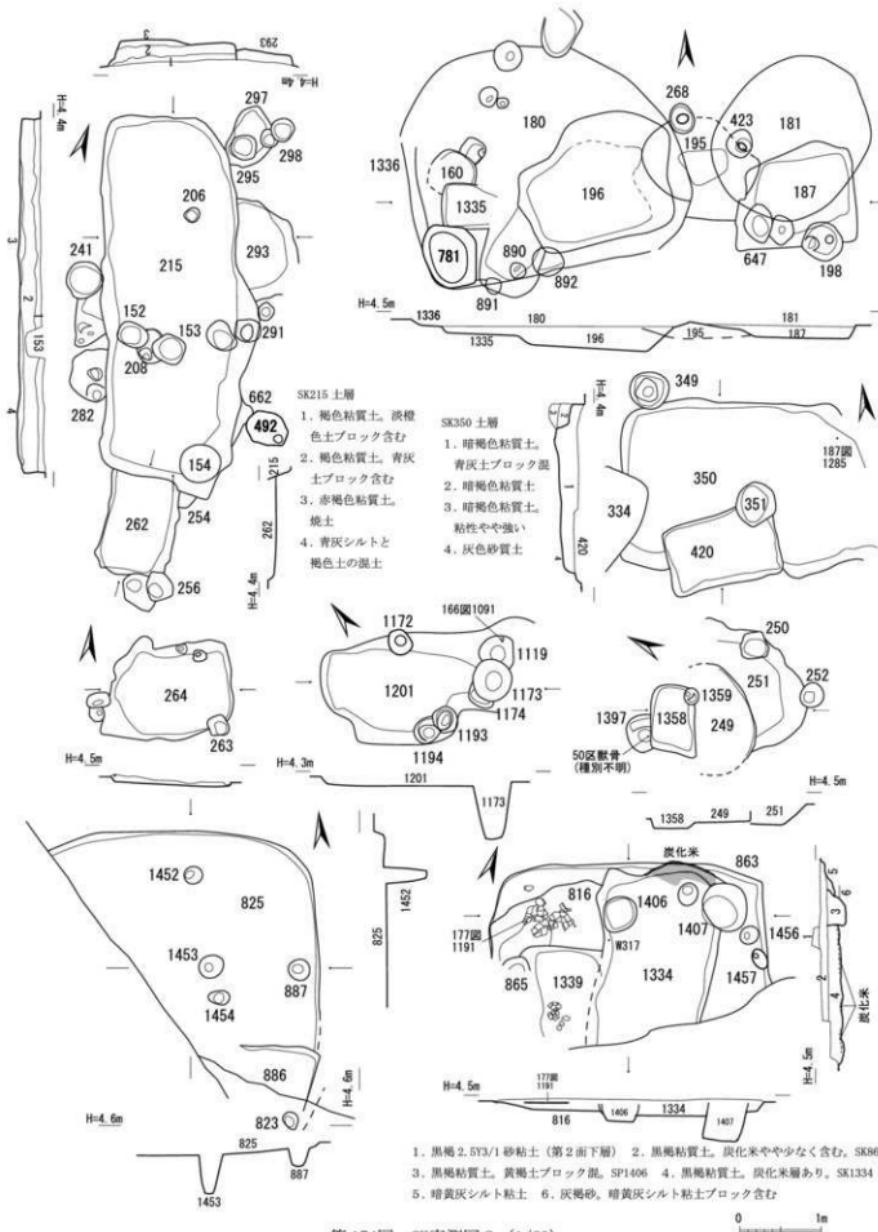
SX454 (第168図) 長さ318cm、幅207cm、深さ56cmを測る。出土遺物 (第180・188図) 1210は甕。須玖I式。1211は袋状口縁壺。調整や成形が粗雑で、須玖式内の初期のものと考える。1290は細粒砂岩の抉入柱状石斧未完成品。1292は玄武岩の搔器。他に黒曜石片27点、114.6gが出土した。

SK280・194・225・224・222ほか (第170図) 概ね長方形 (板付II式) →円形 (須玖I式) という変遷を想定できる。ただし、SK224は切り合いで新しいと記録されたが、出土遺物は板付I式で古い。また、SK225は切り合いで古いが、出土遺物は須玖I式を含み、新しい。

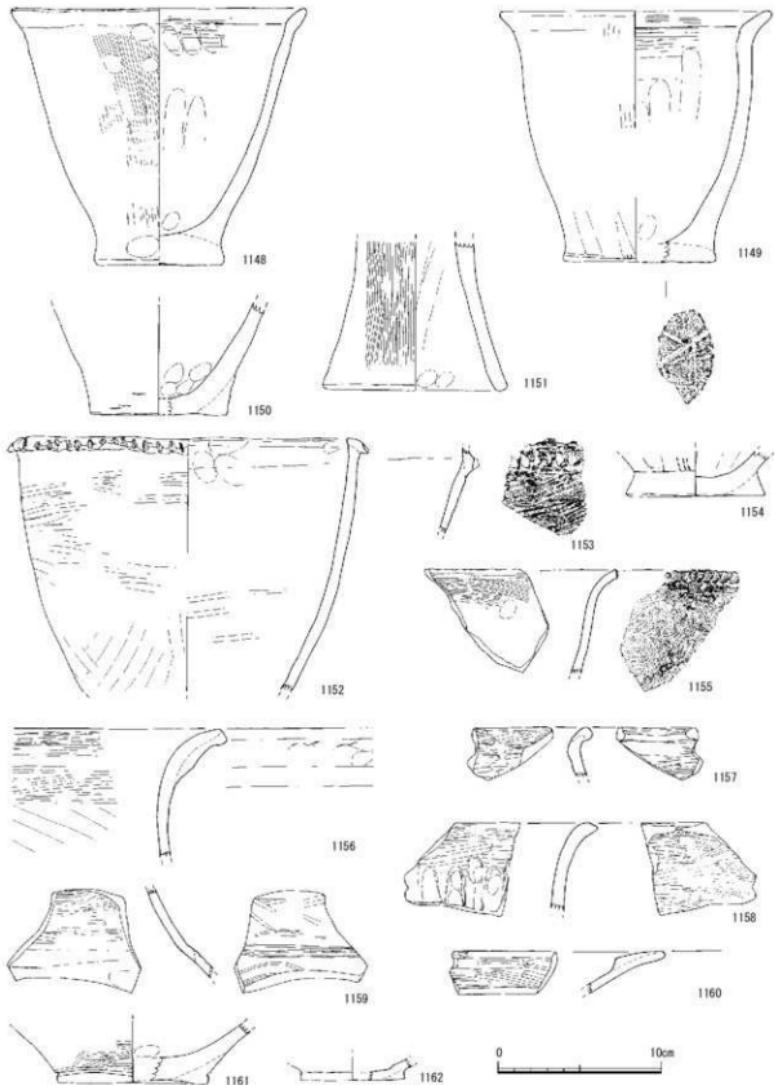
SK280 長さ190cm、幅133cm、深さ36cmを測る。SK194に切られる。出土遺物 (第171・186図) 1105は甕。胎土に赤色粒や雲母を含む。板付II式。1106は大型壺で、1105と同様に、胎土に赤色粒や雲母を含む。1274は砂岩の磨製石器。大型の石錐か。

SK194 長さ196cm、幅120cm、深さ20cmを測る。出土遺物 (第171・186図) 1107は壺で、3条沈線文を施す。板付式。1108は甕で、外面に粗いハケメを残す。1270は片岩の石製紡錘車。

SK225 (図版31) 長さ495cm、幅230cm、深さ49cmを測る。西側に段があり、土坑が重複している可能性がある。周辺構造に多く切られるが、出土遺物は新相。イチイガシ子葉3 (第10表)、イノシシ属基節骨1、被熱獸類骨1が出土した (第12表)。出土遺物 (第171・187図) 1109は甕で、如意形口縁の口唇部下端に薄い突帯を貼り付け、ヘラ状工具による刻目がやや粗に施される。1110は甕。

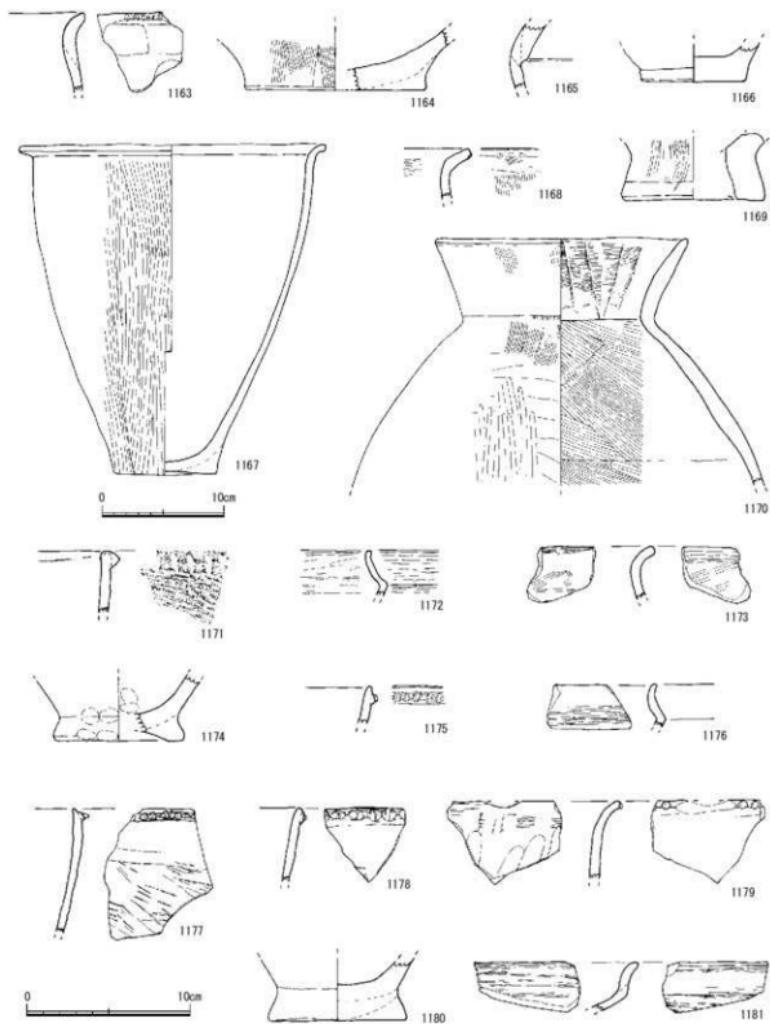


第174図 SK実測図2 (1/60)



1148~1151 SK262 1152~1162 SK215

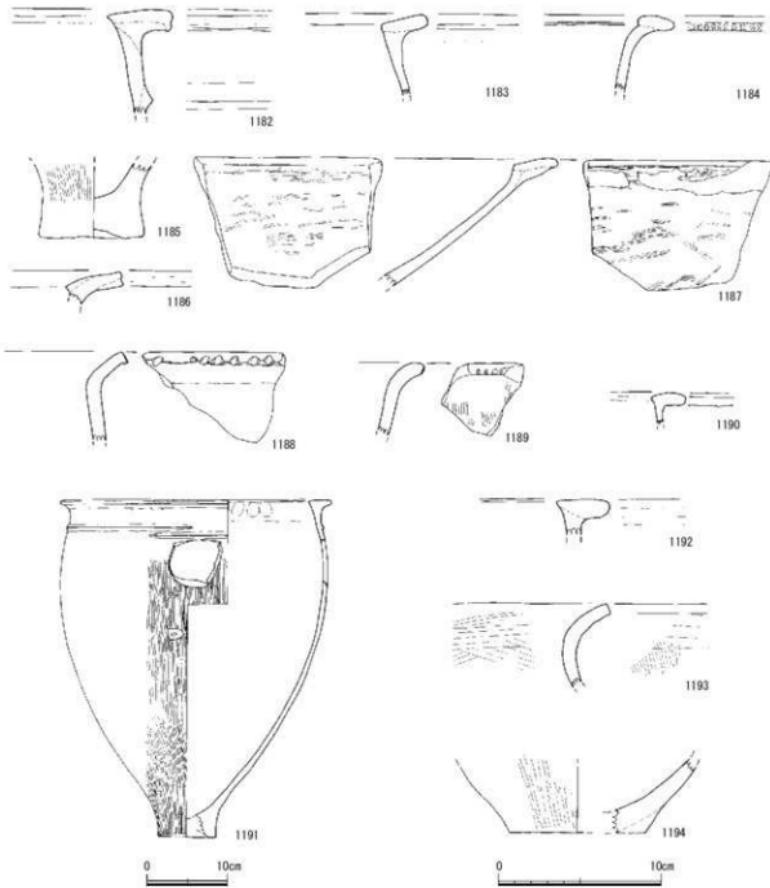
第175図 SK215・262出土土器実測図 (1/3)



1163~1165 SK196 1166 SK781 1167 SX181 1168~1170 SX180 1171~1174 SK251

1175 SK1358 1176~1177 SK1201 1178~1181 SK350

第176図 SK196・251・350・781・1201・1358、SX180・181出土土器実測図（1167は1/4、他は1/3）



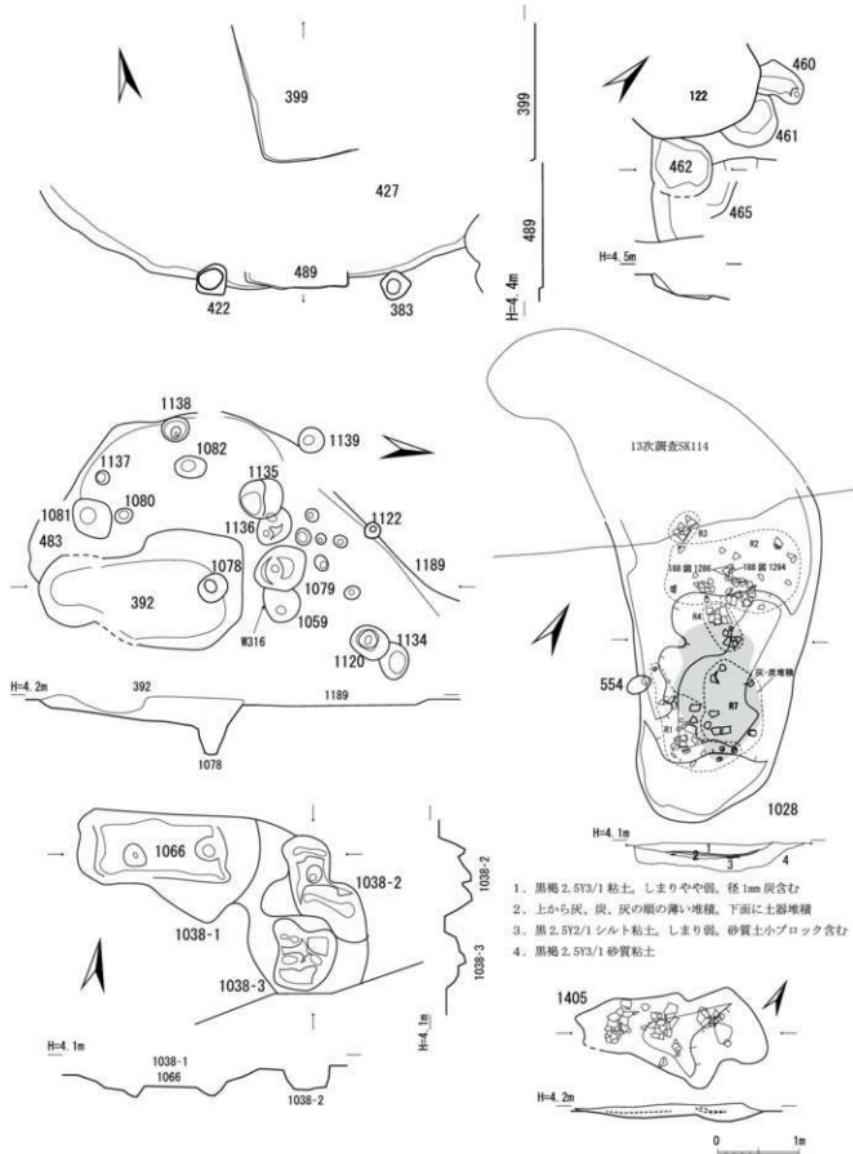
1182~1185 SK825 1186~1187 SK886 1188 SK1339

1189~1190 SK1334 1191 SX816 1192~1194 SK863

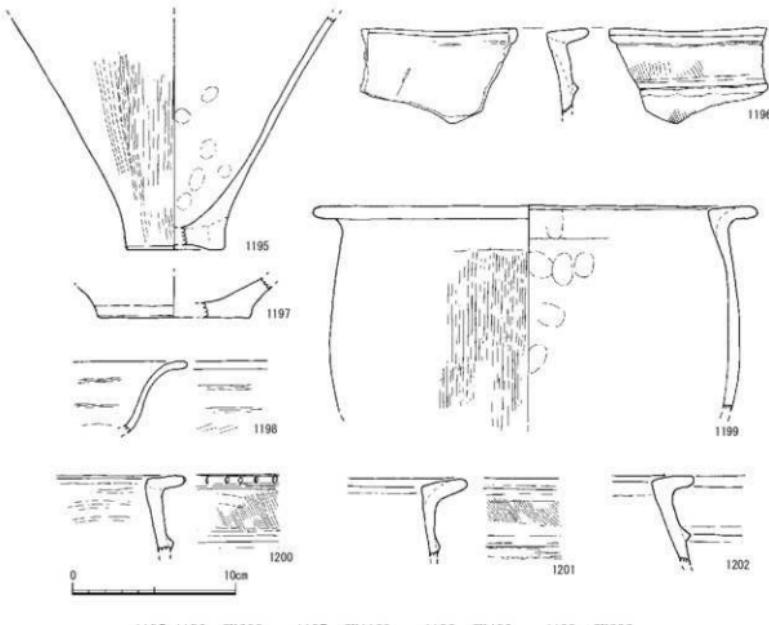
第177図 SK825・863・886・1334・1339、SX816出土土器実測図（1191は1/6、他は1/3）

城ノ越式。1111は甕。城ノ越～須玖Ⅰ式。1112は甕。1113は壺で、口縁部は肥厚しないが、肥厚による段を模したような浅い沈線が2条施される。1114は大型壺で、口縁部はわずかに肥厚し、口唇部が断面方形に成形される。城ノ越式。1115は大型壺の底部で、外面は縱位の暗文風のミガキに近いヘラナデで仕上げる。城ノ越～須玖Ⅰ式。1279は凝灰岩の砥石で、直方体の4面が長軸方向に砥面として使用されている。他に黒曜石片31点、145.5gが出土している。

SK224 長さ135cm、幅90cm、深さ31cmを測る。出土遺物（第171図）1116は甕で、突帯上に棒



第178図 SK・SX実測図 (1/60)



第179図 SK392・399・460・461・462・465・483・1189出土土器実測図（1/3）

状工具で刻目を密に施す。夜臼式。1117は甕で、屈曲の角度は45度に近い。1118は甕。板付I式。SK222（図版31）径200～210cm、深さ29cmを測る。SK194を切る。出土遺物（第171図）1119は甕。須玖I式。1120は甕。1121は大型壺。他に黒曜石片が32点、67.7g出土している。

SK223 長さ147cm、幅130cm、深さ24cmを測る。SK222に切られる。出土遺物は須玖I式土器小片。

SK1084・1211（第170図）若干不成形だが、同一の長方形土坑の可能性が高い。

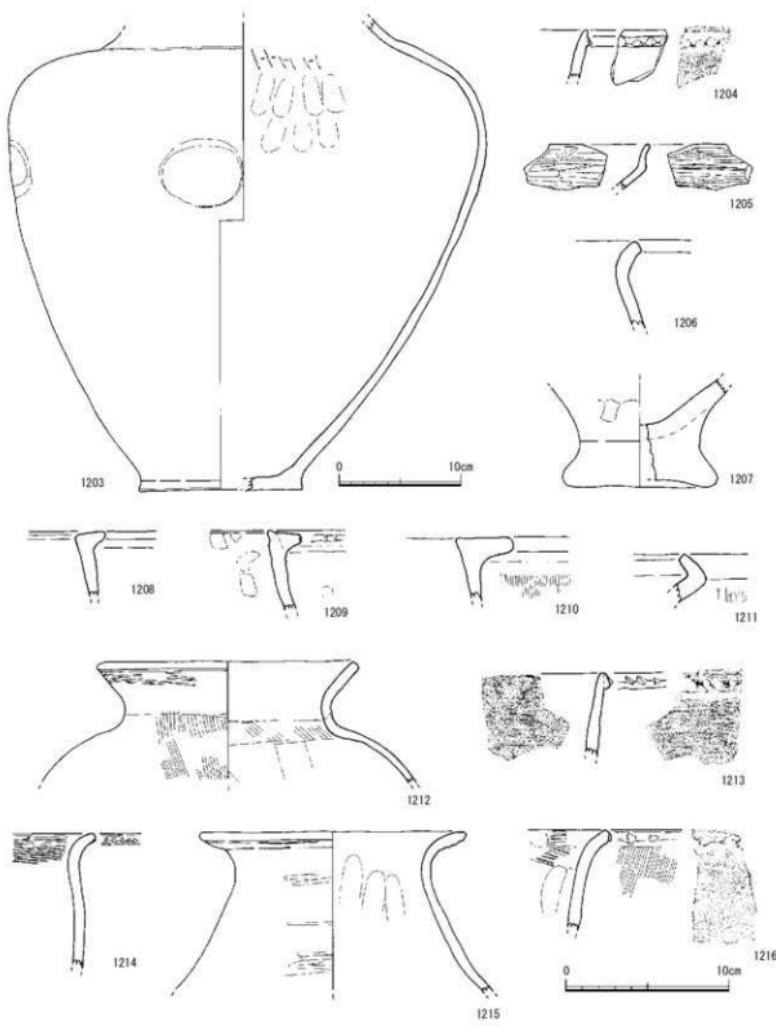
SK1084 13次調査で掘削された分をあわせると、幅約208cm、深さ24cmを測る。出土遺物（第172図）1122は甕底部。板付式。

SK1211（図版31）幅217cm、深さ27cmを測る。出土遺物（第172図）1123は甕。夜臼式。1124は甕で、底部は粘土紐を巻き付け張り出させて平底としている。1125は丹塗りの大型壺で、口縁部の肥厚・段はわずかだが、板付I式と思われる。他に黒曜石片25点、78.3gが出土している。

SK1195 搅乱に切られる。SK1211を切る。出土遺物（第204・205図）1422は表面にケズリ痕跡を残し、側面も細かく面取りして多角形状を呈す。土製紡錘車の未成品と考えられる。1431・1432は弥生土器小片を利用した小型土製円盤。1432は外面ナデ調整の弥生土器片利用。壺か。

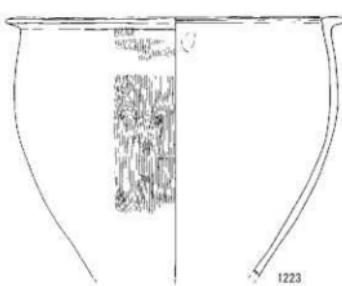
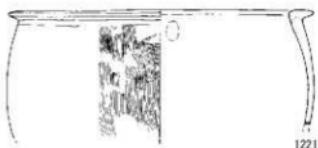
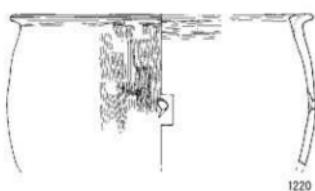
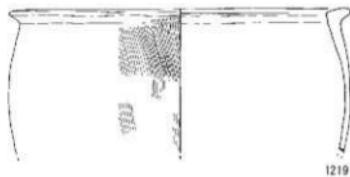
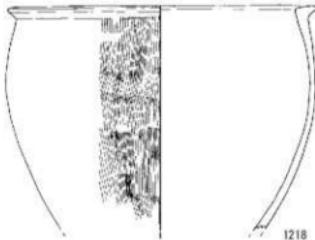
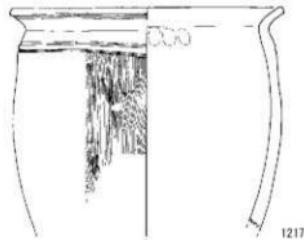
SK1388・1379（第170図）方形土坑を小型長方形土坑が切る。出土土器は夜臼式と比較的古い。

SK1388 小型長方形土坑か。南側の方形土坑と区分できていない。出土遺物（第172図）1126は甕。

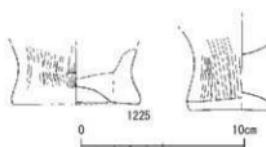


1203～1205 SX1405 1206～1209 SX1038 1210・1211 SX454
1212 SX435 1213～1215 SX852 1216 SX853

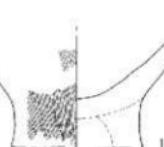
第180図 SX435・454・852・853・1038・1405出土土器実測図（1203は1/4、他は1/3）



0 10cm

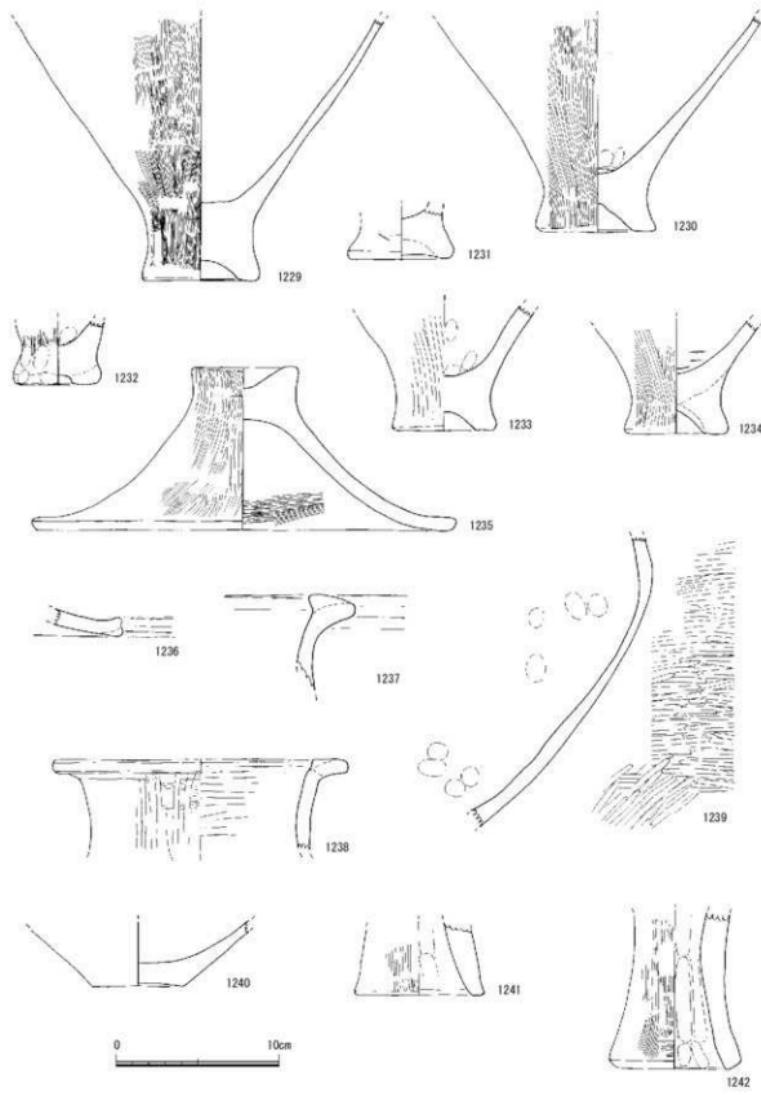


10cm

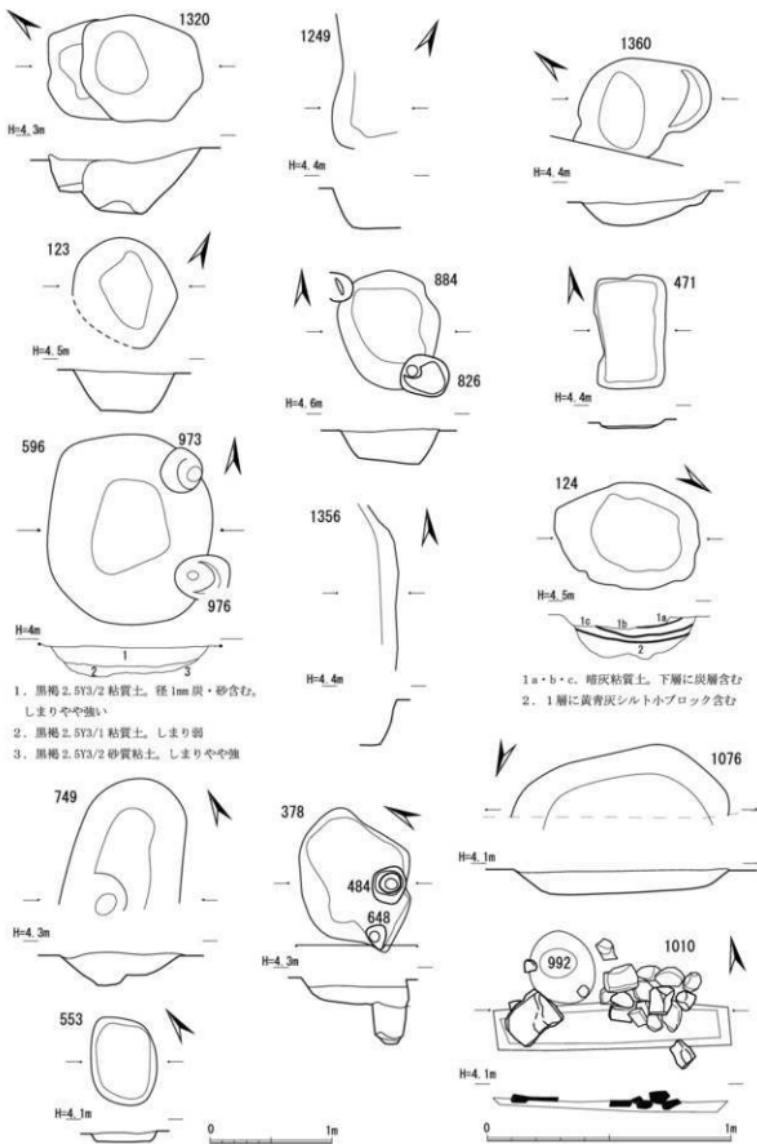


1228

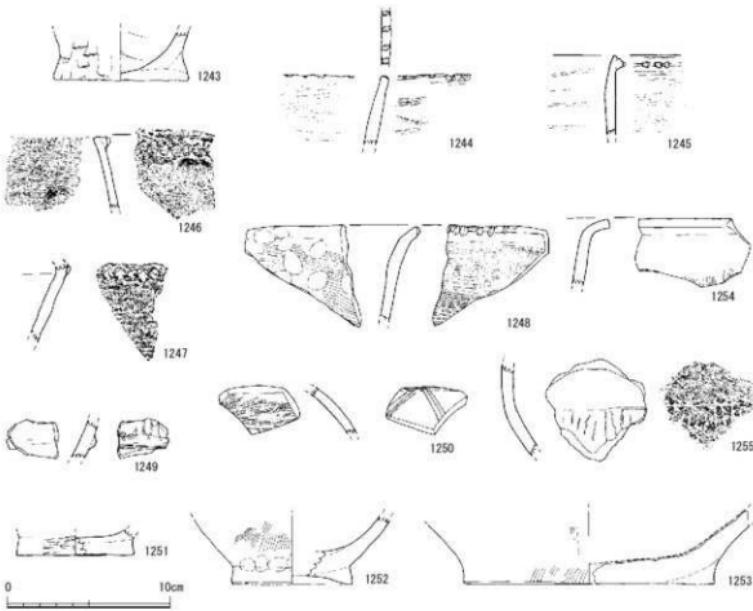
第181図 SX1028出土土器実測図1 (1225~1228は1/3、他は1/4)



第182図 SX1028出土土器実測図2 (1/3)



第 183 図 SK 実測図 4 (1/40) より SX1010 実測図 (1/20)



1243 SK1320 1244 SK1249 1245 SK1360 1246~1253 SK123 1254・1255 SK596

第184図 SK123・596・1249・1320・1360出土土器実測図（1/3）

1127は鉢で、屈曲部に浅く小さな刻みを施す。1128は壺。1129は甕。1130は磨研の鉢。

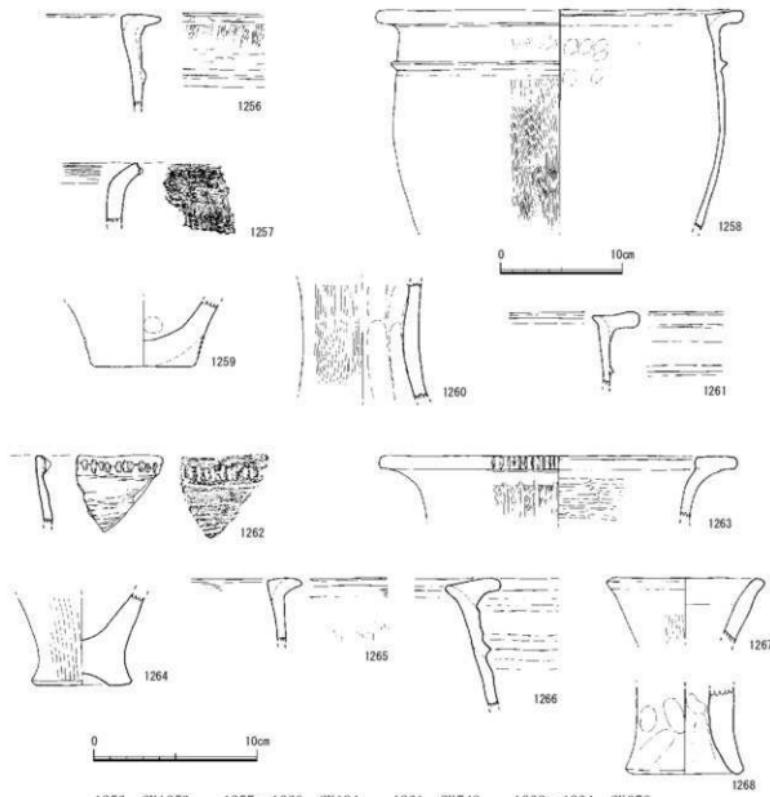
SK1379 幅110cm、深さ19cmを測る。方形土坑を切る。出土遺物（第172・187図） 1131は甕。夜臼式。1132は鉢で、精良な胎土。夜臼式。1282は凝灰岩の砥石破片。

SK1362（第170図、図版32） 長さ327cm、幅225cm、深さ36cmを測る。出土遺物（第173・186図） 1133・1134は甕。1135は短頸壺。1136は甕。須玖I式。1137は壺。1138は浅鉢。1269は黒曜石の打製石鎌。他に黒曜石片30点、128.5gが出土している。

SK316・202・317（第170図、図版32） 遺構の切り合いとは異なり、出土遺物はSK202の方が古い。

SK316 長さ251cm、幅148cm、深さ48cmを測る。埋土はにぶい黄灰色土ブロックを含む暗褐色粘質土。出土遺物（第173・186図） 1139は、縄文土器の深鉢で、横方向の貝殻腹縁部押引文が施される。縄文時代前期・曾畠式の新しい段階の土器と考えられる。1140は甕。板付II式。1142は壺で、胎土に金雲母を含む。1141・1143は同一個体と考えられる壺。板付II式。1278は頁岩質の磨製石斧未完成の軋用刃器で、刃端部は摩滅している。他に黒曜石片43点、220.3gが出土している。

SK202 長さ244cm、幅140cm、深さ17cmを測る。埋土は、青灰色土ブロックを含む暗褐色粘質土。出土遺物（第173図） 1144・1145は甕。夜臼式。1146は黒色磨研の浅鉢で、屈曲部外面に浅い沈線をめぐらす。夜臼式。1147は浅鉢が鉢の底部。比較的緻密な胎土で、雲母・角閃石多い。底外面を削つて上げ底状にする。他に黒曜石片19点、54gが出土している。



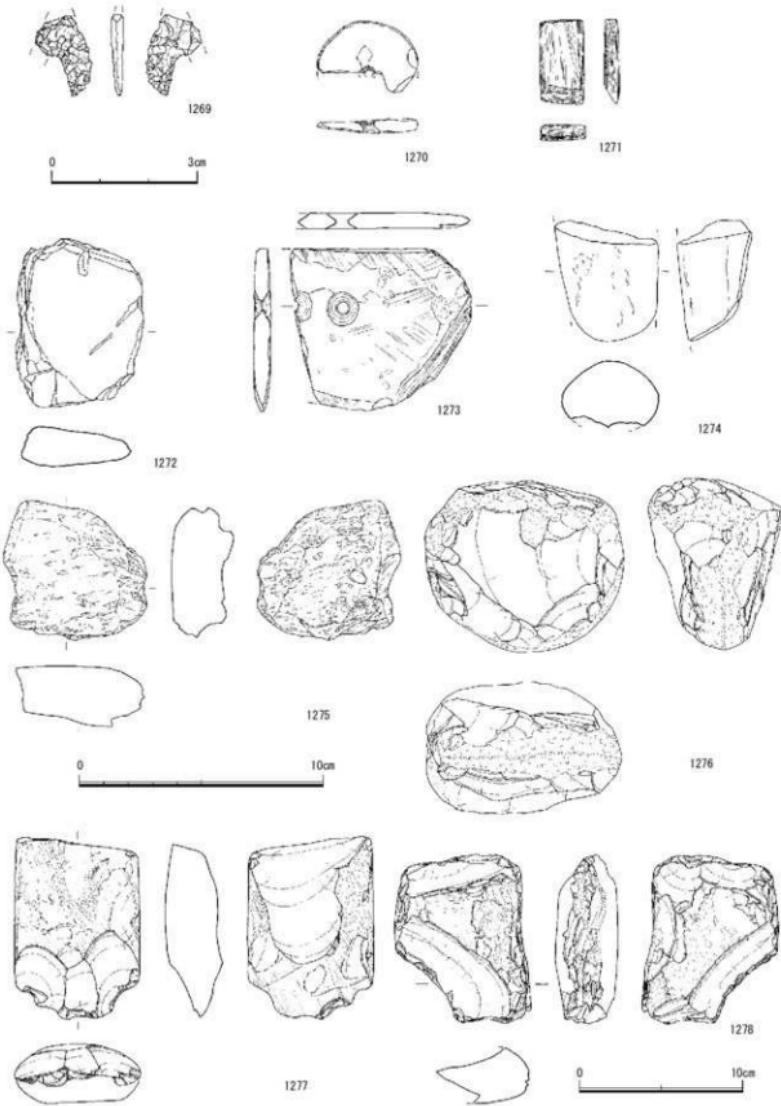
第185図 SK124・378・553・749・1076・1356出土土器実測図 (1258は1/4、他は1/3)

SK317 深さは14cmを測る。SK316に切られる。出土遺物は小片の弥生土器で、板付II式を含む。

SK262・215・293(第174図、図版32) 遺構の切り合い把握とは異なり、出土遺物はSK215が古い。

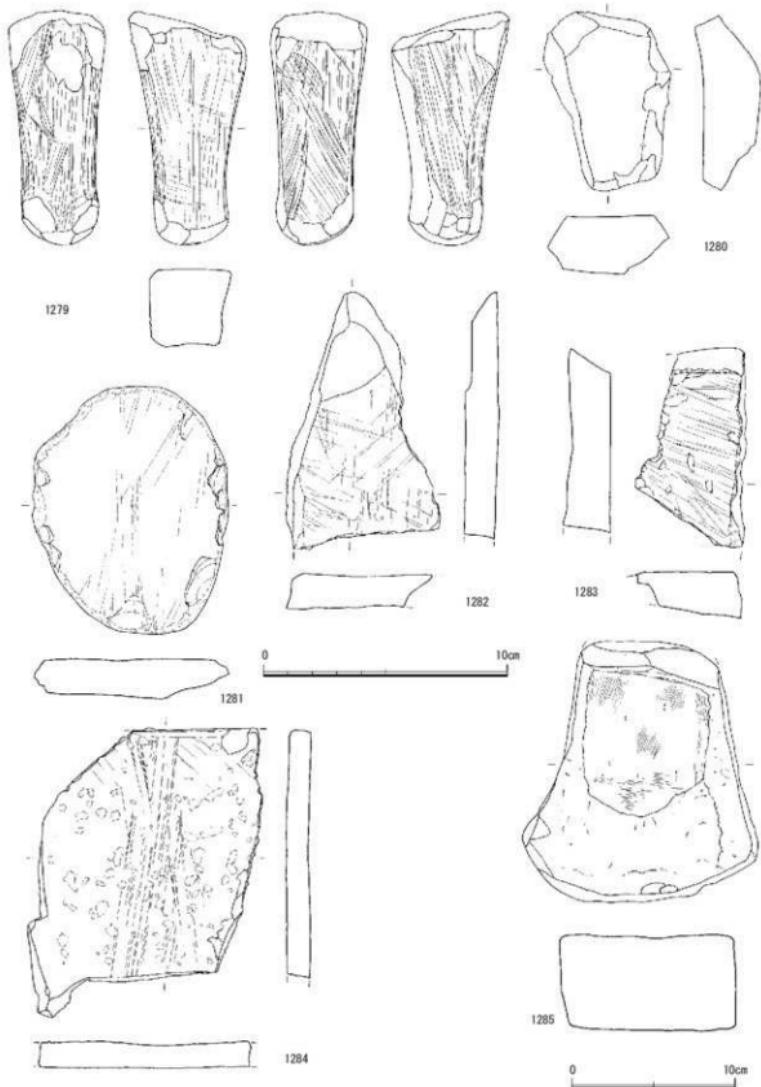
SK262 長さ(残存)123cm、幅85cm、深さ16cmを測る。出土遺物(第175・186図) 1148・1149は鉢に近い小型甕。1150は甕底部で、外面にハケメが残らず、胎土に雲母を特徴的に含む。1151は器台、胎土に雲母やや多い。城ノ越～須玖I式。1276は玄武岩の敲石。

SK215 長さ446cm、幅194cm、深さ44cmを測る。最下面に焼土が堆積する。出土遺物(第175・187・204図) 1152は、口縁端部に突帯を垂れ下がり気味に貼り付け、端部にヘラ状工具で浅い刻み目を施す。1153・1154は甕。夜臼式。1155は甕で、幅1cmほどの板状工具で、外面はタテハケメ、内面は口縁部をヨコハケメ、それ以下はナデ消す。板付I式。1156は大型甕。胎土に雲母・角閃石多い。1157は、黒色磨研の鉢。口唇部は粘土をつけ足した結果、玉縁状をなす。1158は丹塗甕(橙～にぶ



1269 SK1362 1270 SK194 1271 SK378 1272 SK1038 1273 SK1356
1274 SK280 1275 SK399 1276 SK262 1277 SK1336 1278 SK316

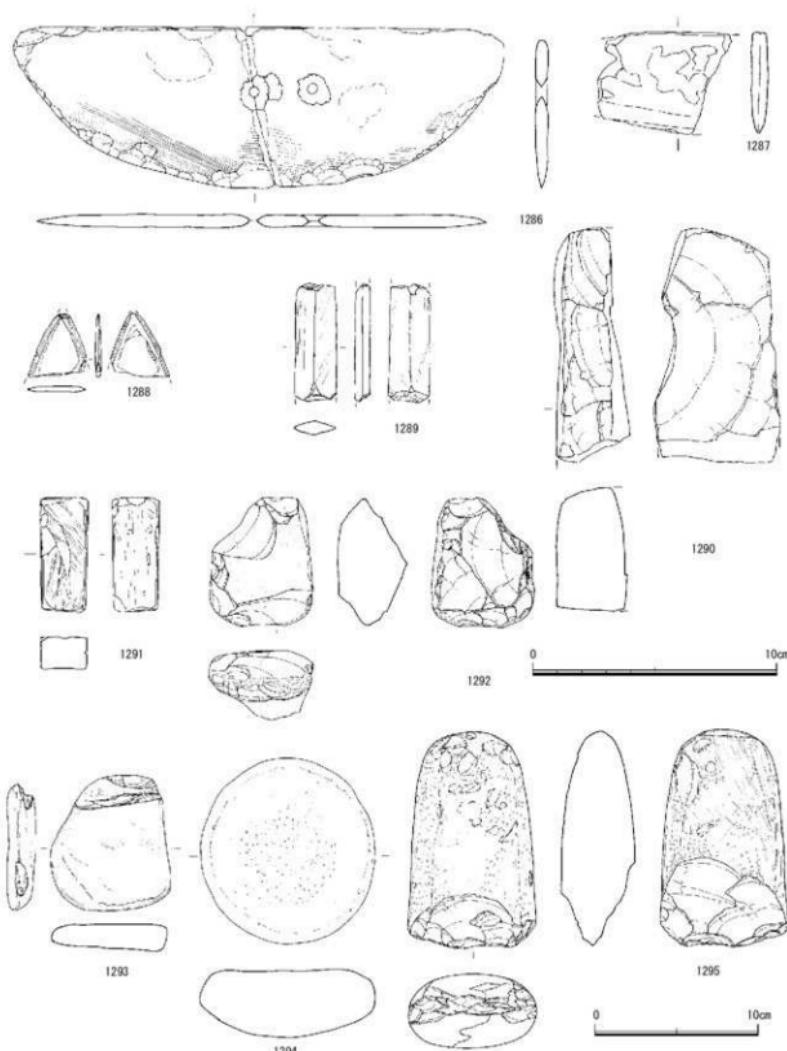
第186図 第3面SK・SX出土石器実測図1 (1269は1/1、1277・1278は1/3、他は1/2)



1279 SK225 1280 SK215 1281 SK596 1282 SK1379

1283 SK123 1284 SK461 1285 SK350

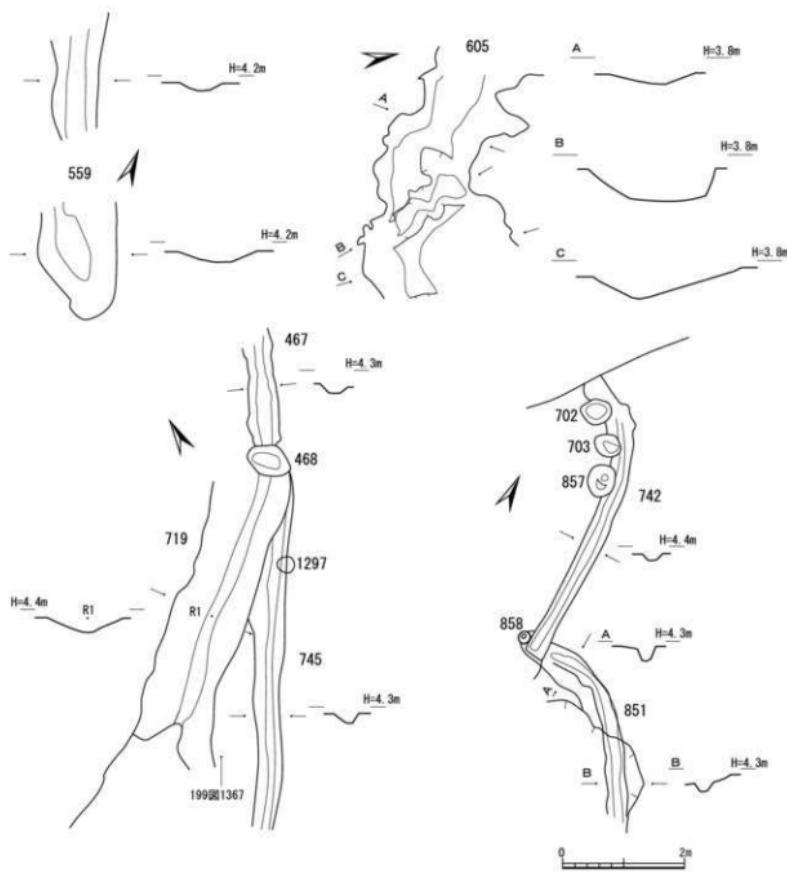
第187図 第3面SK出土石器実測図 (1285は1/3、他は1/2)



1286・1287・1293・1294 SX1028 1288 SK427

1289・1295 SX435 1290・1292 SK454 1291 SK863

第188図 第3面SK・SX出土石器実測図2 (1293～1295は1/3、他は1/2)



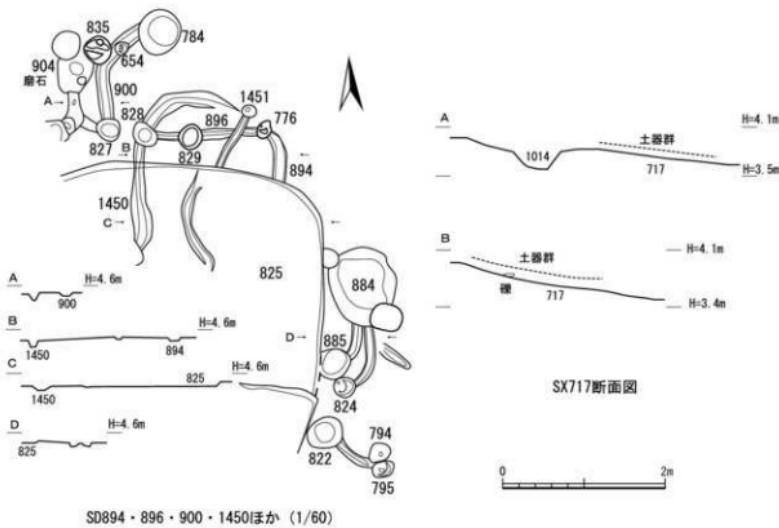
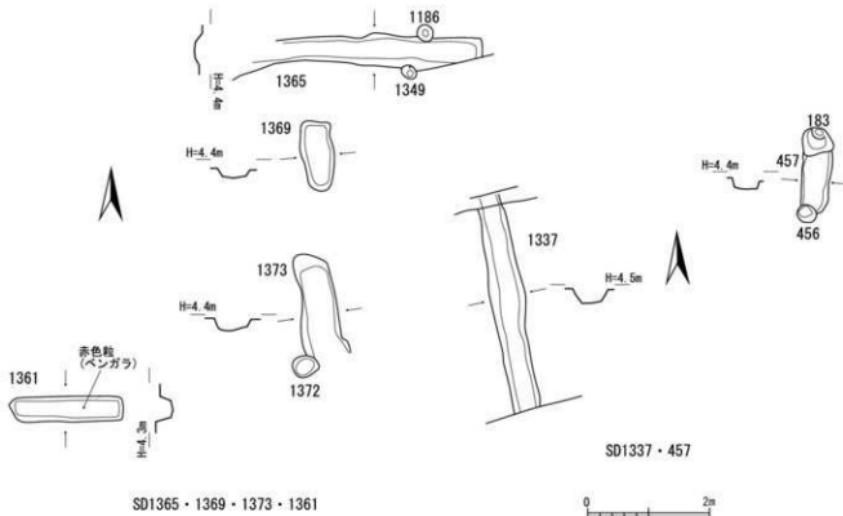
第189図 SD実測図1 (1/80)

い黄橙色)で、口縁部が肥厚しない。1159は壺で、比較的深い3本沈線で半円文を描く。胎土に雲母多い。1160は高壺。外面に丹(橙色)が残る。胎土に雲母・角閃石多い。1161は壺底部で、外面下端に幅2mmの浅い沈線をめぐらす。1162は、磨研の壺底部で、胎土は非常に緻密、色調は外面で灰黄～浅黄色を呈す。1280は砂岩の砥石で、砥面はかなり平滑で緩やかに凹むが、擦痕や研ぎの単位などは観察できない。1420は小型の土製紡錘車。他に黒曜石片67点、487.8gが出土している。

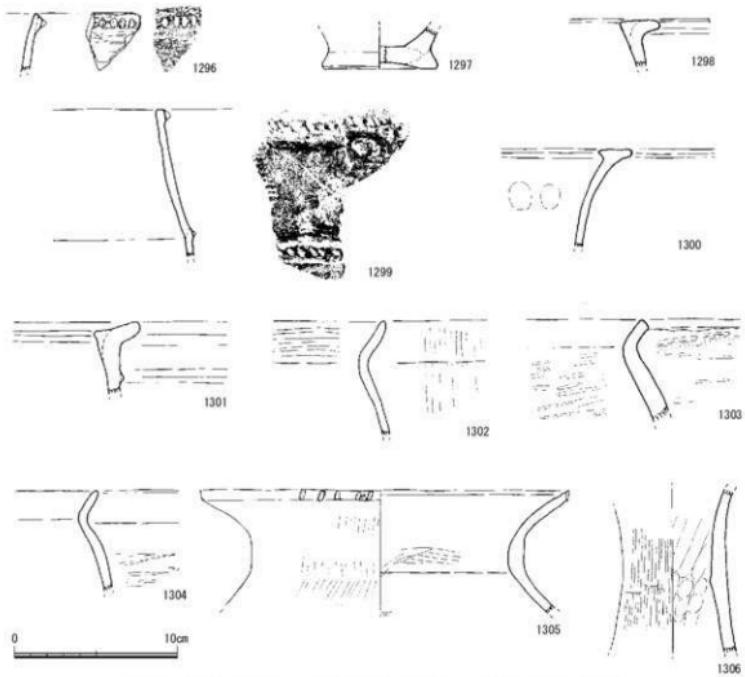
SK293 幅126cm、深さ22cmを測る。SK215に切られる。遺物は板付II式を下限とする小片土器。

SK196・781、SX181・180ほか(第174図) 小型の長方形・円形土坑が重複する上に、SX180・181(弥生時代後期か)が痕跡的に残っている状態。

SK196 長さ176cm、幅117cm、深さ34cmを測る。出土遺物(第176図)1163は甕。胎土に雲母やや



第190図 SD実測図2 (1/80、1/60)およびSX717断面図 (1/60)



1296~1298 SD559 1299~1300 SD605 1301~1306 SD719

第191図 SD559・605・719出土土器実測図（1/3）

多い。板付 I a式。1164は大型壺。1165は大型壺で胎土に雲母多い。黒曜石片13点、63.3gが出土。

SK781 長さ76cm、幅66cm、深さ15cmを測る。出土遺物（第176図） 1166は壺。板付式。

SX181 長さ200cm、幅170cm、深さ20cmを測る。壁や床は明確でない。出土遺物（第176図） 1167は甕で、口唇部無刻み日の如意形口縁。板付II式新相。他に黒曜石片15点、97.9gが出土している。

SK1335 小型の長方形土坑。幅56cm、深さ12cmを測る。弥生土器小片が出土している。

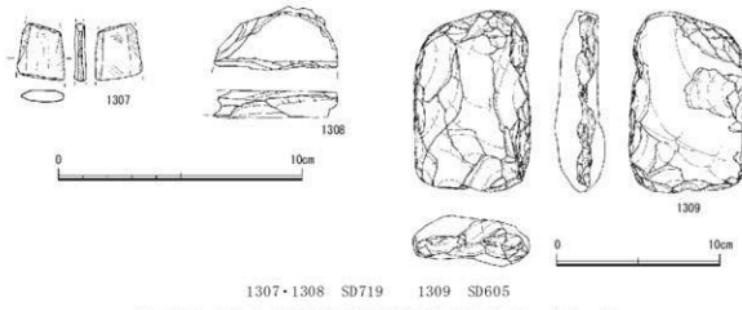
SX180、SK1336 長さ340cm、幅280cm、深さ15cmを測る。中央北区の調査では、円形に検出し、壁や床は判断できなかった（SX180）。西区の調査では隅丸方形で検出し、西側については壁と下端を確認した（SK1336）。出土遺物（第176図） 1168は甕。板付II式。1169は甕底部。城ノ越式。1170は壺で、内外面ともにハケメ後ナデ仕上げで、肩は張らない。弥生後期。1277は玄武岩の太型蛤刃石斧再加工で、刃端部には明確な使用痕が認められない。他に黒曜石片63点、185gが出土している。

SK195 円形の落ち込み。SX180・181に切られる。SK187・196を切る。弥生前期土器を含む。

SK187 長さ143cm、幅120cm、深さ21cmを測る。遺物は弥生土器の小片。

SK251・249・1358（第174図） 円形土坑を小型長方形土坑が切っている。

SK251 深さ29cmを測る。出土遺物（第176図） 1171は甕で、口縁部上端に粘土紐を巻き付けるように貼り付け、ヘラ状工具で刻目を施す。夜白式。1172は鉢。1173は丹塗り（浅黄橙色）の小型壺。



第192図 SD719・605出土石器実測図 (1309は1/3、他は1/2)

1174は鉢底部で、底外面を削って上げ底に成形する。他は黒曜石片13点、55.4gが出土している。

SK249 円形土坑と考えられる。SK251を切る。出土遺物は弥生土器の小片で、板付I式を下限とする。

SK1358 小型方形土坑で、長さ83cm、幅54cm、深さ22cmを測る。出土遺物(第176図) 1175は甕で、断面かまぼこ形の小さい突带上に棒状工具で浅い刻み目を施す。

SK264(第174図) 長さ149cm、幅116cm、深さ19cmを測る。出土遺物は小片で、弥生土器と古墳時代前期土器が含まれる。古墳時代前期土器片は混入と判断する。

SK1201(第174図) 幅137cm、深さ16cmを測る。出土遺物(第176図) 1176は黒色磨研の鉢で、屈曲が緩い。夜臼式新相。1177は甕で、外面調整は貝殻条痕後ヘラナデ。夜臼式新相。

SK350・420(第174図) 大型の長方形土坑が、小型の長方形土坑に切られる。

SK350 長さ300cm以上、幅206cm、深さ51cmを測る。出土遺物(第176・187図) 1178は甕で、突带上の刻みは粘土切り取り。夜臼式。1179は甕、板付I式。1180は鉢底部。1181は磨研の浅鉢で、色調は淡黄色～浅黄色を呈す。1285は砂岩の砥石。他に黒曜石片17点、74.9gが出土している。

SK420 長さ138cm、幅86cm、深さ32cmを測る。SK350を切る。遺物は弥生土器の小片である。

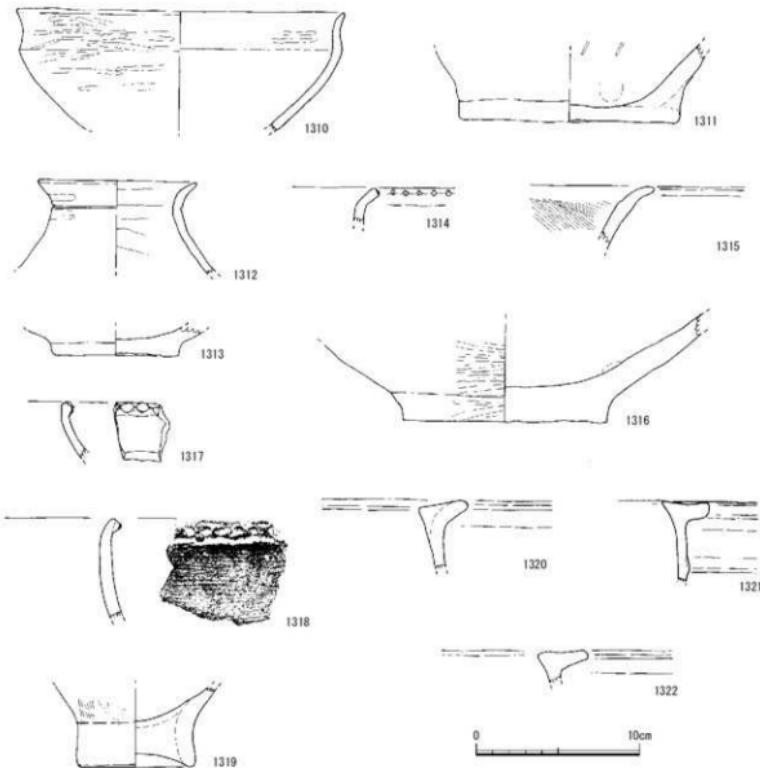
SK421(第160図) G4区。長方形土坑で、長さ137cm、幅100cm、深さ20cmを測る。SK420と同型の土坑である。埋土は暗褐色粘質土で、炭化物を含み黒色土化している。遺物は小片で、古墳時代前期土器を含むが、層位・形状等から弥生時代に属すると考える。

SK825(第174図) 深さ14cmを測る。底面は凹凸。南側は10次調査区のSC08で、長さ約5.8m、幅約3.3mの大型長方形土坑となる。出土遺物(第177図) 1182は甕。須玖I式。胎土に雲母や多い。1183は甕。1184は広口壺。須玖I式。1185は甕。他に黒曜石片15点、41.9gが出土している。

SK886(第174図) 方形土坑の一部を検出した。深さ16cmを測る。SK825を切る。出土遺物(第177図) 1186は広口壺。城ノ越～須玖I式。1187は高坏。断面の粘土帶接合痕の観察からは、口縁部をやや立ち上げた上に粘土帶を逆L字状に組み合わせ、縫ぎ目の外面に粘土を補填して成形している。平坦口縁が鋸先状に内側に張り出さないため、城ノ越式の範疇とも言える。

SK1339・1334・863(第174図) 上面ではSK863大型方形土坑として検出したが、掘り下げるとき、長方形土坑との切り合いが確認された。層位と出土遺物からは、SK1339(板付II式新相)→SK1334(板付II式新相～城ノ越式)→SK863(SX816)(須玖I式)という関係が整理できる。

SK1339 方形の土坑で、深さ19cmを測る。SK1334に切られる。灰・炭・焼土の堆積があり、洗浄したところ、炭化米とイノシシ下顎第2門歯?を検出した。出土遺物(第177図) 1188は如意形よ



1310・1311 SD1361 1312・1313 SD1369 1314～1316 SD1373
1317 SD1337 1318・1319 SD742 1320・1321 SD745 1322 SD851

第193図 SD1361ほか出土土器実測図（1/3）

り屈曲した口縁で、口唇部には下端に棒状工具による浅く、粗い刻みが施される。板付II式新相。

SK1334 長方形土坑で、幅140cm、深さ27cmを測る。北壁と床に貼り付く形で炭化米が残っていた。

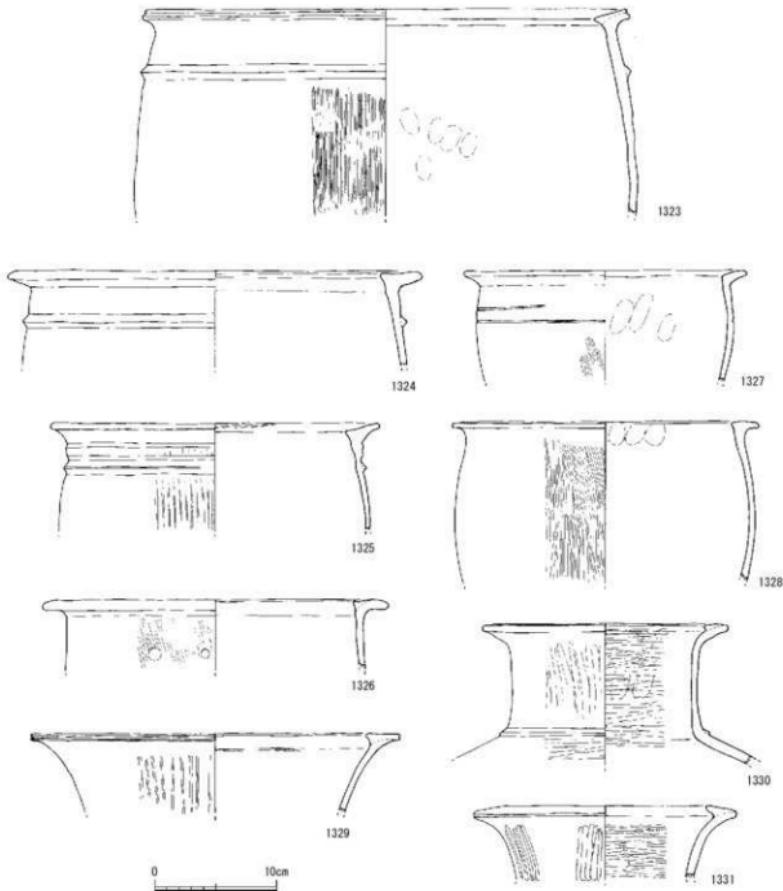
採取土を洗浄したところ、イチイガシ子葉4点も含まれていた（第10表）。出土遺物（第177図）

1189は如意形口縁の甕。板付II式新相。1190は平坦口縁の甕。城ノ越式。

SX816 SK863を掘り下げると、北西側で土器片のまとまった堆積があり、SX816として取上げた。

出土遺物（第177図） 1191は中型甕で、口縁部下の突帯がつながらずに上下にずらしてある。突帯の下の位置に2ヶ所、径6-7cmの打ち欠き穿孔を施す。須玖I式。

SK863 大型方形土坑で、幅340cm、深さ15cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で、炭化米をやや少なく含む。出土遺物（第177図） 1192は甕。須玖I式。1193は土師器甕。上層からの混入。1194は甕底部。外面は灰黄褐色で丁寧なミガキで仕上げる。1291は細粒砂岩の小型砾石。



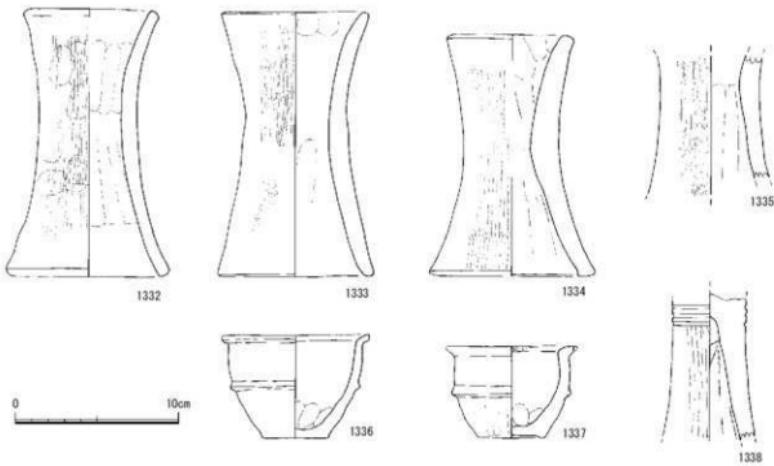
第194図 SX717出土土器実測図1 (1/4)

SK399・427・489 (第178図) SK427は、2期調査で円形の掘り込みとして調査されたが、北側での3期調査では続きを検出できなかった。SK399・489は方形土坑の一部が確認された。

SK399 削平のため南西角しか残っていない。出土遺物 (第179図) 1195は甕。上げ底の台状でない小さめの底部。城ノ越～須玖I式。1196は甕で、口縁の平坦部に丹が残る。城ノ越式。1275は軽石で、両側辺に紐掛けらしき凹みがある。浮子か。他に黒曜石片33点、88.8gが出土している。

SK489 南端だけを残す。出土遺物 (第203図) 土器は弥生土器小片。1404は滑石の玉素材。

SK427 円形の竪穴建物の可能性が想定されたが、関連する柱穴などは不明である。埋土は黒色



第195図 SX717出土土器実測図2 (1/3)

土。出土遺物 (第188図) 1288は層灰岩の磨製石劍切先。

SK1189・483・392 (第178図) SK1189とSK483は別々に検出したが、隅丸長方形の一連の土坑と考えられる。SK392はSK483を切る土坑。埋土は下層が黒褐色粘質土、上層がオリーブ灰色粘質土。

SK1189・483出土遺物 (第179図) 1197は壺。板付式か城ノ越式。1198は古式土師器の高壺。内外面をヨコヘラナデ仕上げる。上層からの混入。

SK392出土遺物 (第179図) 1199は壺。須玖I式。他に黒曜石片23点、70.9gが出土している。

SK460・461・462・465 (第178図) 径40~80cm、深さ20~40cmの小型の土坑。SK461出土遺物 (第179図) 1200は壺。城ノ越式。1284は細粒砂岩の砥石。中央部に擦痕が集中。SK460出土遺物 1201は壺。城ノ越式新相。SK462・465出土遺物 1202は壺。城ノ越~須玖I式。

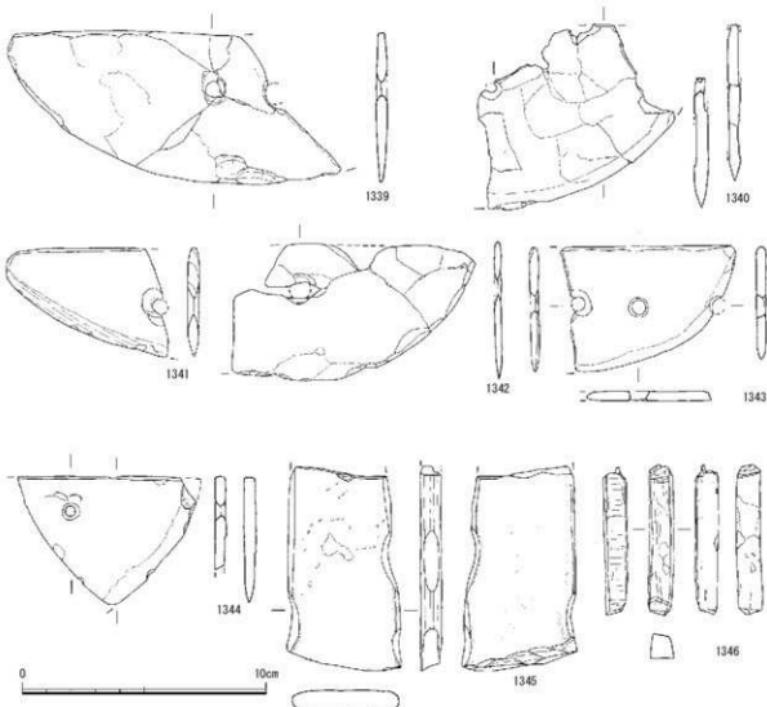
SX1405 (第178図) 長さ221cm、幅120cm、深さ23cmを測る。出土遺物 (第180図) 1203は大型壺で、頸部から肩にかけて丹が残る。胴部に径4~6cmの円形の剥落が4ヵ所ある。板付I式 (図版40-11)。1204は壺。夜臼II式~板付I式。1205は鉢か浅鉢。頸部外面に丹が残る (赤橙色)。夜臼式。

SX1038 (第178図) 三日月状の不整形土坑で、長さ398cm、幅142cm、深さ49cmを測る。SX1038-1下層が長方形をなしたため、SX1066として記録している。出土遺物 (第180・186図) 1206は丹塗り (赤色) 壺。板付II式~城ノ越式。1207は台状底部の壺。城ノ越式。1208・1209は壺。城ノ越式。1272は滑石の加工品で、打欠石鍤あるいは紡錘車未完成。他に黒曜石片36点、65.1gが出土している。

SX852 (第160図) J3区で検出した落ち込み。出土遺物 (第180図) 1213は壺。板付I式。1214は壺。板付II式。1215は壺で、口縁部を強く外反させ平坦口縁を意識している。板付II式~城ノ越式。

SX853 (第160図) J3区で検出した落ち込み。SD851上に堆積する。出土遺物 (第180図) 1216は甕で、口唇下端にヘラ状工具で疊に刻みを施す。板付II式。

SK1028 (第178図) 三日月状の土坑で、幅253cm、深さ40cmを測る。中層で土器・炭・灰が堆積する。北西側は13次調査のSK114に連続する。出土遺物 (第181・182・188図) 1217~1234は壺。城ノ越

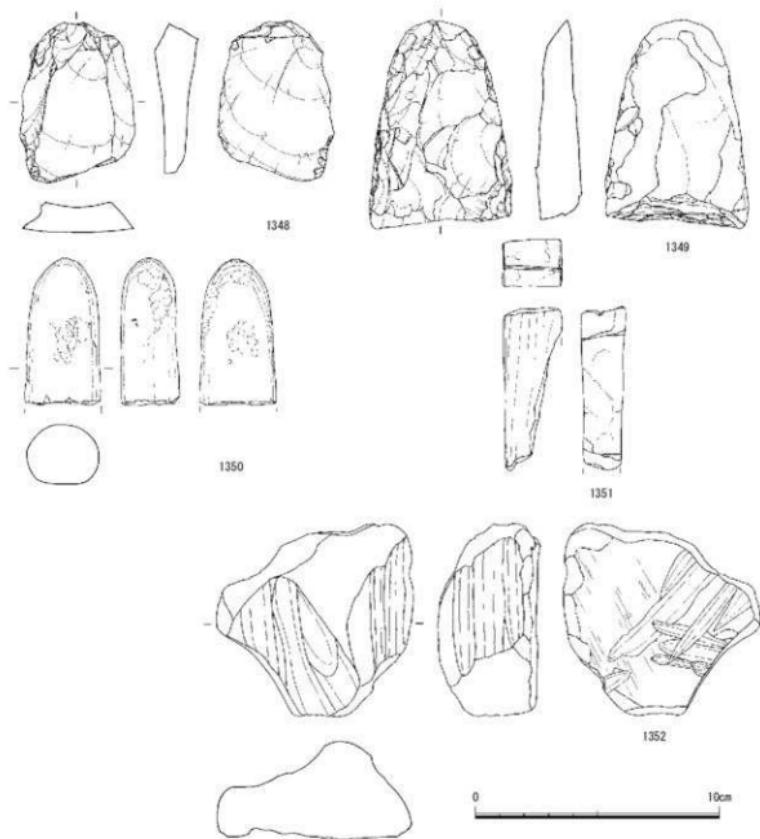


第196図 SX717出土石器実測図 1 (1/2)

式。1217は、口縁部下に2条の沈線が鋭く引かれる。1218は胎土に径2mm以下赤色粒やや多い。1219は1221と同型の甕である。胎土に雲母多い。1220は甕で、胸部上位に径7~8mmの打ち欠き穿孔があり、穿孔部の内面周辺が剥離していることから、外面からの打撃で穿たれていることがわかる。1227の断面観察からは、丸底の底部に粘土帯を巻き付け、内側を粘土で充填して台状の底部を成形している。1235・1236は甕の蓋。1237・1238は広口甕。1238は頸部外面に縱位暗文を施す。1239は大型甕。1240は甕の底部で、胎土・焼成・風化度合いから1237と同一個体の可能性がある。1241・1242は器台。1286はホルンフェルスの石包丁完形品。1287はホルンフェルスの石包丁片で、細身の形状をなし、穿孔は認められない。1293は結晶片岩の打欠石錘。1294は凝灰岩の磨石。1430は小型土製円盤で、片面に一条の沈線を施す。表裏面と側面の焼成・色調が一連であり、土器片転用でなく、円盤形土製品として焼成されたものと思われる。他に黒曜石片66点、171.1gが出土している。

SK1320(第183図) C3区。長さ125cm、幅87cm、深さ55cmを測る。出土遺物(第184図) 1243は甕底部で、外面は粗いハラケザリ痕を残す。夜白式・板付式。他に黒曜石片10点、47.3gが出土。

SK1249(第183図) D3区。方形土坑で、深さ40cmを測る。13次調査区のSK087。出土遺物(第

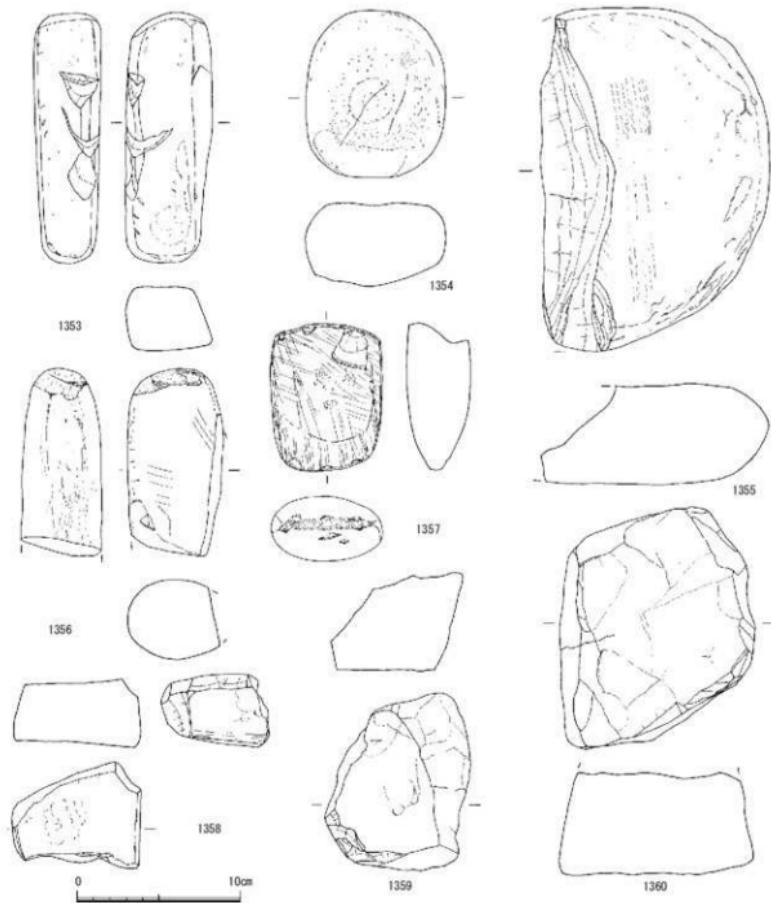


第197図 SX717出土石器実測図2 (1/2)

184図) 1244は甕で、外傾する口縁の口唇部に浅い刻み目を施す。夜臼式古相。

SK1360(第183図) E2区。円形土坑で、長さ108cm、深さ28cmを測る。出土遺物(第184図) 1245は甕で、比較的高い断面三角形の突帯に削り取りで浅い刻み目を施す。

SK123(第183図) F2区。長さ93cm、幅79cm、深さ38cmを測る。埋土は黒色粘土で、上面に炭化物層が形成される。被熱した獣類四肢骨片が含まれる。出土遺物(第184・187・203図) 1246・1247は甕。夜臼式。1248は甕。板付I式。1249は、黒色磨研の壺洞部片で、隆線文をもつ。砂粒を含まない非常に緻密な胎土で、灰色の色調や、ヘラナデと思われる内面調整など、板付式の甕とは明確に異なる。1250は黒色磨研の小型壺肩部で、3本沈線で山形文を描く。1251は黒色磨研の甕もしくは鉢の底部。胎土に雲母多い。1252は形態・調整が甕と壺の中間的で、鉢の底部と考えられる。1253は



第198図 SX717出土石器実測図3 (1/3)

大型壺の底部で、外面に丹（浅黄橙色）が残る。1283は玄武岩の砥石破片。1398は滑石の玉。

SK884 (第183図) H2区。長さ97cm、幅83cm、深さ29cmを測る。遺物は弥生時代前期土器小片。

SK471 (第183図) F4区。長さ90cm、幅53cm、深さ7cmを測る。遺物は弥生土器の小片である。

SK596 (第183図) C9区。長さ156cm、幅134cm、深さ30cmを測る。出土遺物 (第184・187図)

1254は壺で、如意形口縁で口唇部刻みがない。板付II式新相～城ノ越式古相。胎土に赤色粒やや多い。

1255は壺で、口縁部と肩部の境界が明確でない「なで肩」の形態で、大振りな貝殻腹縁刺突文を施す。板付II式新相。1281は花崗岩の石錘で、上下端を打ち欠いて浅い紐掛け部を作り出している。

SK1356(第183図) E1区。方形土坑か。深さ60cmを測る。出土遺物(第185・186図) 1256は甕。城ノ越式。1273は凝灰岩製の石臼丁。

SK124(第183図) F2区。長さ119cm、幅86cm、深さ36cmを測る。出土遺物(第185図) 1257は甕で、口唇部下端に密に刻みが施される。板付II b式。1258は甕で、口唇部と口縁下突帯は刻目がない。城ノ越式。1259は甕底部で、台状を呈さない。1260は器台。城ノ越式でも須玖I式に近い様相。

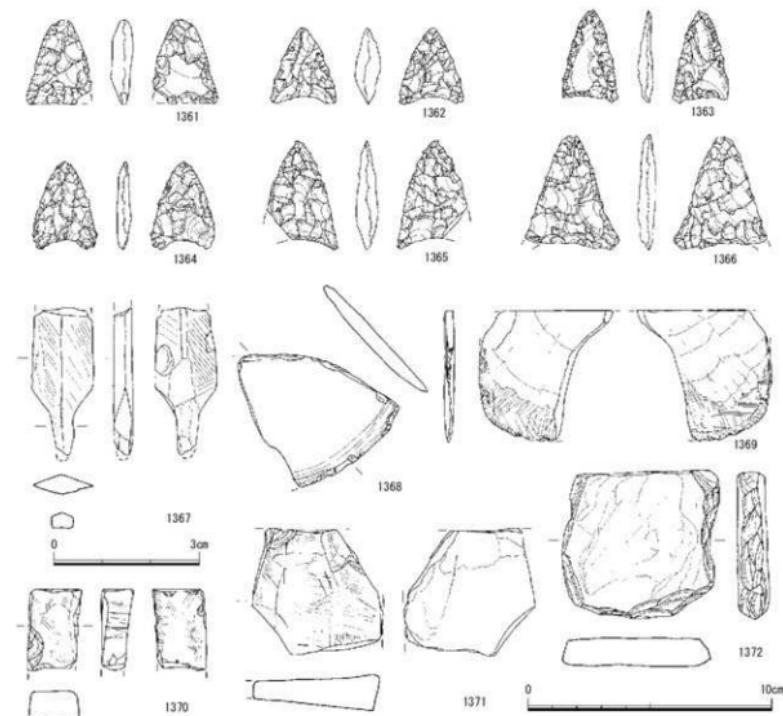
SK749(第183図) I2区。幅47cm、深さ27cm。出土遺物(第185図) 1261は甕。城ノ越～須玖I式。

SK378(第183図) F4区。長さ102cm、幅95cm、深さ21cmを測る。埋土は黄灰色土を含む暗褐色粘質土で、しまり強く、粘性も強い。出土遺物(第185・186図) 1262は甕。夜白式。1263は広口壺で、頸部内面はヨコミガキ、外面は目の細かいタテハケメ後、タテミガキで暗文とする。城ノ越式。1264は甕の台状底部。城ノ越式。1271は頁岩製の小型扁平片刃石斧で、刃部使用痕はみられない。

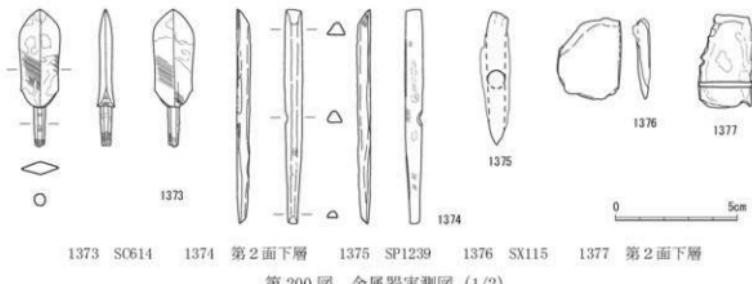
SK1076(第183図) D7区。深さ24cmを測る。出土遺物(第185図) 1265は甕。城ノ越式。

SK553(第183図) D8区。長さ70cm、幅54cm、深さ11cmを測る。出土遺物(第185図) 1266は甕。須玖I式の甕。1268・1267は器台で、同一個体の可能性もあるが、積極的に言える要素はない。

SX1010(第183図) 5～20cm大の花崗岩・砂岩・礫岩などの亜角礫が20個ほど集中して出土した。



第199図 第3面出土石器実測図 (1361～1367は1/1、他は1/2)



第200図 金属器実測図 (1/2)

礫に伴う土坑は確認できず、サブトレーナーを設けて断面観察も行ったが、礫のみの堆積である。

4. 溝 (SD)

第3面の溝は、比較的長い距離を構築された水路状の溝、短く直線的に構築された溝、幅も深さも小さく円形に回る溝、の3種類に整理できる。

SD559 (第189図) 南北方向。幅73cm、深さ15cmを測る。覆土は黒褐色土で、上層が砂質。南側は途中で途切れる。北側は13次調査の自然流路SL01の西肩に連続する。出土遺物 (第191図) 1296は甕。板付I式。1297は甕の底部。上げ底で端部が外側に張り出す。板付式。1298は甕。城ノ越式。

SD605 (第189図) 幅1.4~2.5m、深さ50cmを測る。覆土は白色粗砂で、上層に第2面の土器群SX653が形成される。調査時はSX653と関連する流路と考えられるが、出土遺物は弥生時代前・中期に取まる。

出土遺物 (第191・192図) 1299は甕。夜臼II式。1300は広口壺。須玖I式。1309は玄武岩の礫石器で、粗い剥離で短冊状に形成し、明確な刃部や使用痕が見られない。磨製石斧の未完成品か。

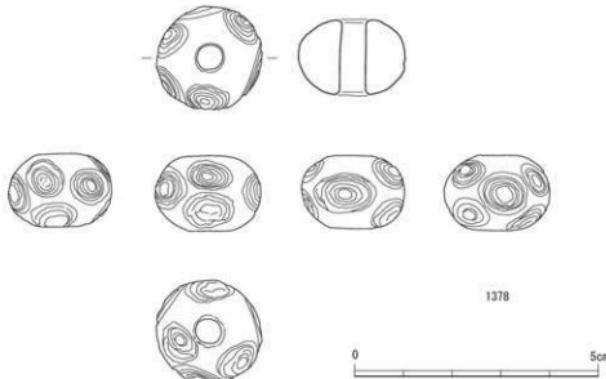
SD719 (第189図) 北東方向の溝で、幅108cm、深さ34cmを測る。SD745を切る。出土遺物 (第191・192・203図) 1301は甕で、胎土に径2mm以下黒色粒・赤色粒やや多い。須玖I式。1302は壺。須玖I式。1303は口縁部の短い壺で、内外面にミガキが施される。1304は口縁部の短い薄手の壺で、内面と口縁部外面はナデ調整、外面にヨコハケメを残す。1305は口唇部に浅い刻み目を持つ壺。須玖I式。1306は器台。1307は凝灰岩の磨製石劍切先。1308は結晶片岩の紡錘車未完成品。1399は滑石の玉未完成品。他に黒曜石片83点、273.2gが出土している。

SD467・745 (第189図) SD467は南北方向の溝。幅47cm、深さ17cmを測る。埋土は暗灰色粘土。南側はSD745につながると考えられる。SD745は幅41cm、深さ26cmを測る。出土遺物 (第193図) 1320・1321は甕。須玖I式。1321はSD745上の落ち込みSX861出土。

SD742、SD851 (第189図) SD742は南北方向の弧状の溝で、幅30~40cm、深さ20cmを測る。SD851は北西-南東方向に弧状に形成された溝で、幅30cm、深さ30cmを測る。出土遺物 (第193図) 1318は甕で、突端は断面三角形で小さく、刻みも浅い。夜臼II式。1319は甕で、底部は厚いが台状というほどではない。須玖I式。1318・1319はSD742出土。1322はSD851出土の甕。須玖I式。

SD1361 (第190図) 短い溝状遺構で、長さ188cm、幅42cm、深さ27cmを測る。埋土中から赤色物が出土した。ベンガラと考えられる (第V章第3節)。出土遺物 (第193図) 1310は鉢または高环坏部。1311は壺底部で、外面にスヌが付着する。

SD1365 (第190図) 東西方向の溝状遺構で、幅約50cmを測る。出土遺物は弥生土器小片。



第201図 トンボ玉実測図 (1/1)

SD1369 (第190図) 南北方向で、長さ114cm、幅55cm、深さ22cmを測る。SD1365に直交する位置関係。出土遺物 (第193図) 1312は壺で、口縁部は肥厚せず、付け根に沈線をめぐらす。1313は壺。

SD1373 (第190図) 南北方向。幅52cm、深さ22cmを測る。SD1369の南側で、同一方向で検出された。出土遺物 (第193図) 1314は甕。板付I式。胎土に雲母やや多い。1315は広口壺。内面の強いハケメ後、上端を丁寧にナデ消す。1316は壺底部。2面下層52区 (SC614下) の破片と接合した。

SD1337 (第190図) 南北方向の直線的な溝で、幅45~60cm、深さ32cmを測る。北側をSK196に、南側をSK863に切られる。出土遺物 (第193図) 1317は甕で、断面三角形の突帯を貼り付け、棒状工具で浅く、粗に刻みを入れる。口縁部と胴部の屈曲は小さく、色調は浅黄橙色。板付I式。

SD457 (第190図) SD1337の東側でやや軸が東に振れて検出された。幅45cm、深さ10cmを測る。底面が東側に傾斜する。埋土は青灰色シルトブロックを含む暗褐色粘質土。SP183、SP456に切られる。遺物は弥生土器小片が出土した。SP183は弥生時代前期土器を主体的に含む。

SD276 (第160図) G4区。東西方向の溝で、幅57cm、深さ47cmを測る。埋土はシルト、砂質土、粘質土の自然堆積。西側をSK136に、東側を河川堆積に切られる。遺物は弥生土器の小片である。

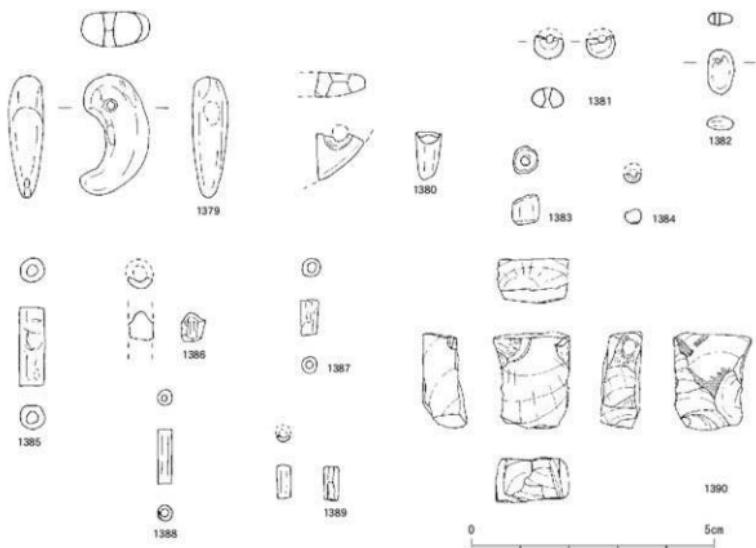
SD877 (第160図) H2区。東西方向の小溝。幅17cm、深さ18cmを測る。SD1337の東側で、直交する方向で検出された。遺物は小片で、板付II式土器を含む。

小型円形溝 (第160・190図) H・G-2区とE3区 (SD1444) で検出された。遺構の残りは悪く、弧状に断片的に検出され、図化に耐えうる弥生土器も出土しなかった。

5. 土器群 (SX)

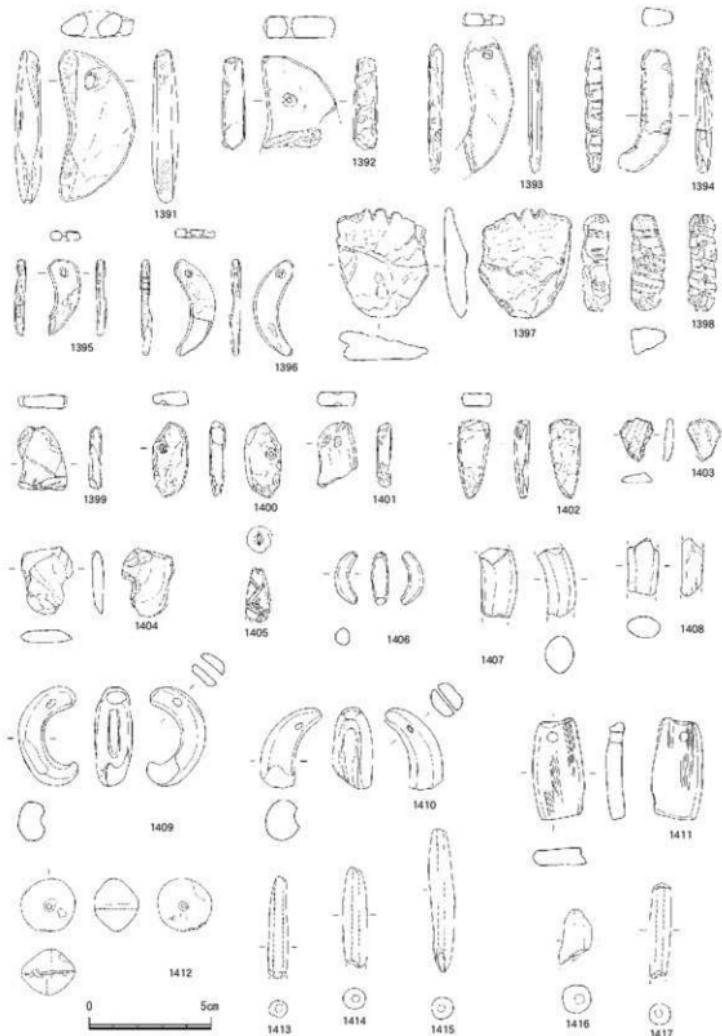
SX717 (第160・190図) 調査区北東部C~F-7~9区の微高地落際で、土器がまとまって出土した。空間的なまとまりから①~⑥に区分でき、それぞれに長さ20cm程の礫が伴っている。

出土遺物 (第194~198・205~207図) 1323~1328は甕。1323は須玖I式。1326は口縁部下に打ち欠き状の不自然な割れを持つ。割れの頂部が丸みを帯びており、穿孔の可能性もある。1327は城ノ越式新相。1329は広口壺で、外面に縦位の暗文を施す。胎土に雲母をやや多く含む。1330は黒褐色の磨研壺。城ノ越式~須玖I式。1331は広口壺で、外面に縦位の集線状暗文を施す。内外面が褐灰色化する。1332~1335は器台。1336~1337はミニチュアの甕で、外面はミガキやナデで丁寧に仕上げる。



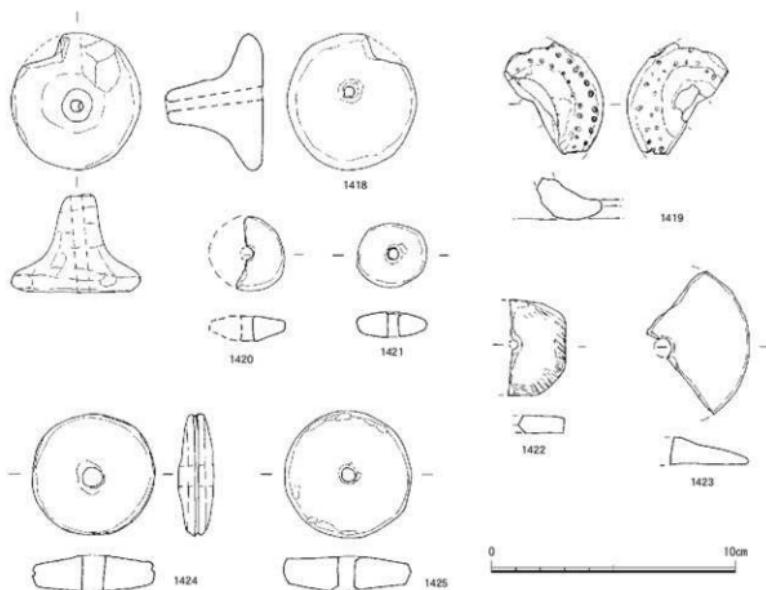
1379 SX113 1380・1383・1385・1386・1389 第2面下層 1381 SS016北畦
1382・1388 SC614 1384・1387 SS017 1390 第1面下層
第202図 玉類実測図1 (1/1)

1338は高杯で、杯の付け根に沈線を3本めぐらす。城ノ越式。1339～1344はホルンフェルス（岩石薄片No. 4類似）の石包丁。1343は刃端部に穿孔痕がみられる。1345はホルンフェルス（岩石薄片No. 4類似）の磨製石器で、下端は折断後二次調整を施し、磨滅しており、刃部として使用した可能性がある。元の形状は側辺に浅い凹みを有す。1346は層灰岩のノミ形石斧未成品。扁平片刃石斧未成品が節理面で折れたものか。1348は凝灰岩の剥片で、縁辺に顕著な使用痕は認められない。1349はホルンフェルスの二次加工剥片石器で、縁辺に顕著な使用痕は認められない。1350は砂岩の小型磨石。1351は細粒砂岩の小型砥石で、短辺面に溝状の砥ぎ痕がみられる。1352は砂岩の砥石で、表・右・裏面に溝砥面が形成される。1353は凝灰岩質の亜円錐で、裏面に平滑面、表面に敲打面を持つ磨棒状の石器である。1354は角閃岩（岩石薄片No. 23類似）の磨石。1355は玄武岩の円錐で、平滑面に比較的粗い擦痕が認められることから砥石と考えられる。1356は凝灰岩の磨製石斧。1357は玄武岩で、大型蛤刀石斧刃部片の破断面を刃潰しし、刃端部には面的な潰れ・摩滅が認められる。1358は凝灰岩質の角礫片で、接地面とと考えられる1面（下面）を除く側面・上面が被熱黒色化する支脚石。接地面側に敲打痕があり、台石等の転用と考えられる。1359は玄武岩の角礫で、側面3面が被熱黒色化し、底面と背面は被熱していない。支脚石。1360は砂岩の亜角錐で、接地面とと考えられる下面以外の側面4面が被熱して黒色化する。他の石器は、石包丁10点、石包丁未成品1点、扁平片刃石斧未成品1点、砥石3点、玄武岩の原石か支脚2点、玄武岩石材1点（5032～5048）、黒曜石片280点、885.3gが出土している。1434は土製円盤。鉢の底部転用。1470・1471は投弾。1501は有溝管状土鍤。



1391・1403 SX676 1392・1397 SX678 1393・1394・1401・1407・1412 第2面下層 1395・1405・1408 第3面
 1396・1409・1411・1416・1417 第1面下層 1398 SK123 1399 SD719 1400 SP691 1402 SP228
 1404 SK489 1406 土器群A 1410・1413～1415 SX111～114 (土器群D)

第203図 玉類実測図2 (1/2)



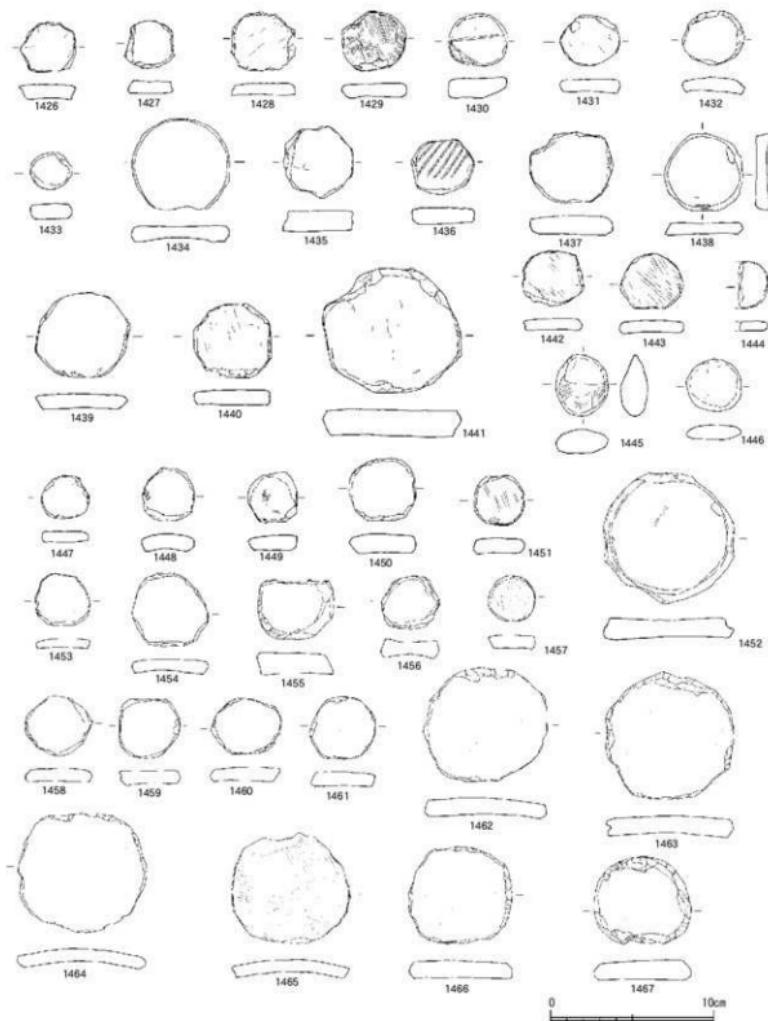
第204図 土製紡錘車実測図 (1/2)

6. その他

第3面上出土遺物 (第199・203・207図) 1361～1366は黒曜石の打製石鎌。1367は頁岩の磨製石鎌。1368は層灰岩の石包丁未成品。1369はホルンフェルスの刃器で、擦切具の可能性があるが、刃部に平行する線状痕は認められない。1370は細粒砂岩の小型砥石で、方柱状を呈す。平滑面はわずかに凹む。側面には断面半円形の溝痕が残る。石材はやや軟質。1371は細粒砂岩の砥石で、板石状を呈し、中央が凹む。砥面は表面のみで部分的に線状痕が残る。1372は結晶片岩の二次加工剥片で、紡錘車の未成品の可能性がある。1395は滑石の小型扁平勾玉。1405は線刻のある小型棒状土製品で、幅1mmほどの沈線で鋸歯状文を描く。先端にも刻み状に沈線を入れる。縄文時代晩期から弥生時代早期の石刀に類似する (図版4-13)。1408は土製勾玉の胴部か。1512は不明粘土塊で、表面は指で握ったような細かい凹凸があり、裏面は平坦滑らかで、中央だけ磨滅が強い。1516は不明土製品で、1面だけ平坦面を持つ (下面)。破面と思われる面にも溝状、穿孔状の痕跡がある。他、黒曜石片528点、2080.8gが出土している。また、第3面では、微高地側で地山に打ち込まれた杭を5か所確認した。杭の性格は不明で、時期も第2面に属する可能性もある。杭の樹種はW84: イヌガヤ、W85: サカキ、W86: アワブキ属、W87: シイ属 (スダジイ型)、W88: クスノキ科Bと推定される。

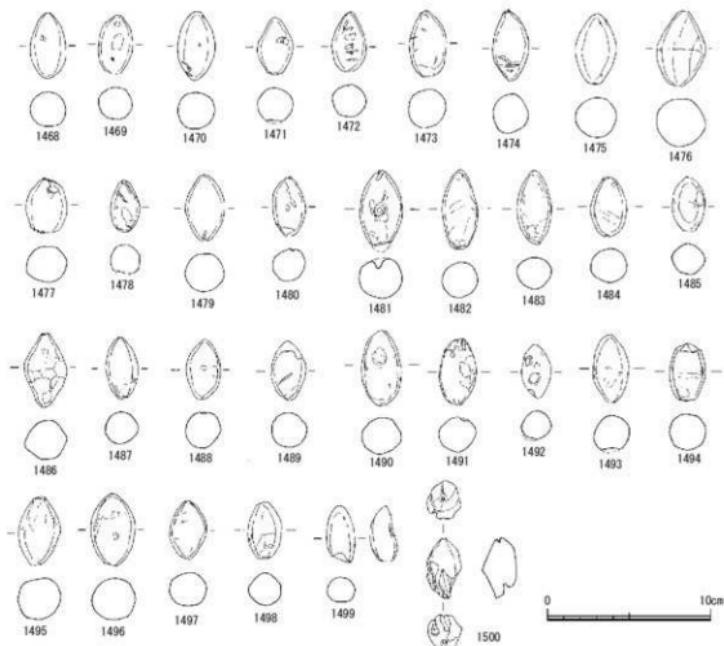
7. 第1・2・3面出土金属器・玉類・土製品

本調査で出土した金属器・玉類・土製品は、遺構出土は少なく、遺物包含層や後世遺構から出土したものが多い。種類ごとの傾向を把握するために、上記土器・木器・石器とは別にまとめる。



1426 SP228 1427 SP481 1428 SP1139 1429 SP1193 1430 SK1028
 1431・1432 SK1195 1433 SP群551 1434 SX717 1435 SX435 1436 SK447
 1437 SX545 1438 土器群南 1439～1441 SD604 1442～1452 第2面下層
 1453～1465 SX676 1466・1467 SX678

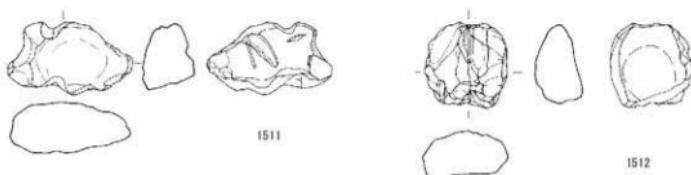
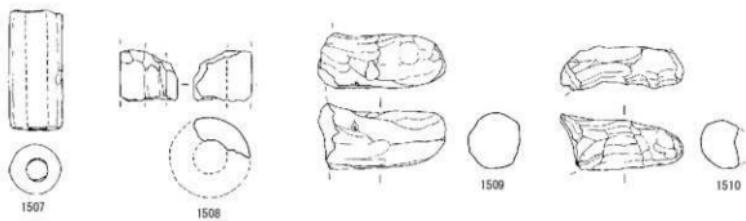
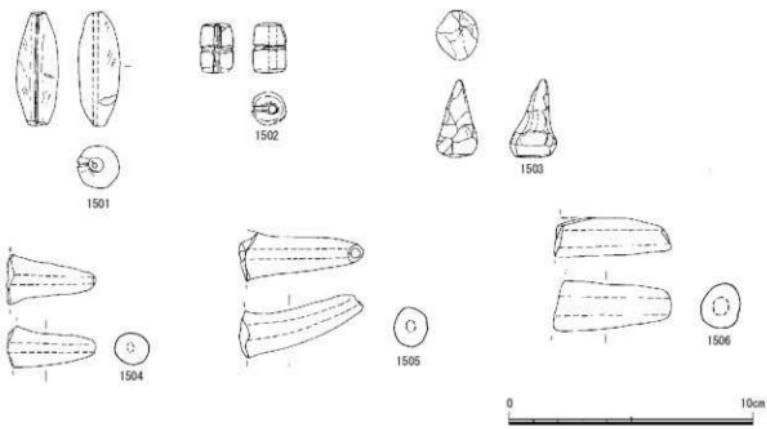
第205図 土製円盤実測図（1/3）



1468 SP1430 1469 SX434 1470・1471 SX717 1472～1474 SX676 1475～1477 SX678
 1478 SX669(土器群A) 1479 土器群A 1480 土器群B
 1481～1483・1485～1491・1493～1497・1499・1500 第2面下層 1484・1492・1498 第1面下層

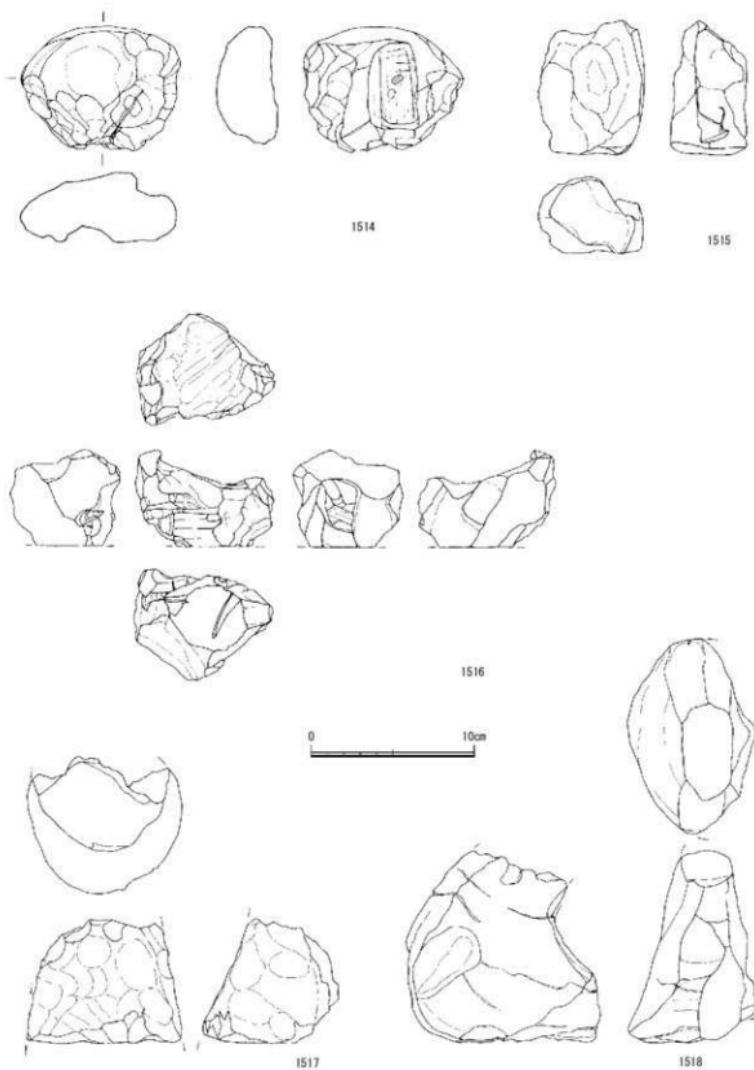
第206図 土製投弾実測図 (1/3)

金属器 (第200図、第8表、図版41・47・48) 明確な製品は銅鏃と銅鑿だけである。鉄製品は3点出土したが、いずれも器種不明で、鉄素材と言われる資料に類似する。1376は古墳時代前期の土器群SX115出土、1377は弥生時代から古墳時代遺物を含む第2面下層出土、1375は柱穴出土で、板付II式新相～城ノ越式の土器と共に伴する。他に融解した金属質・ガラス質の小塊片を金属滓として抽出した。武末純一先生(福岡大学)、井上義也氏(春日市)からは「青銅滓ではなさそう」という所見をいただき、埋蔵文化財センターによる成分分析でも青銅滓を示す成分は検出されなかった。出土傾向としては、弥生時代の堆積層からごく少量、古墳時代堆積層、特に土器群から少量、古代水田層から1点出土している。また、関係があるかどうか不明だが、触感が重く、磁性が強い磁鐵鉱質と思われる小礫が第2面微高地側とSX676から少量出土している。第2面微高地側では、焼土面・炭化物・灰の集中などがみられ、鍛冶作業が行われた可能性はある。ただし、炉と思われる焼土面は特殊な構造を持たない「地床炉」の状況で、火処利用としては鍛冶炉に限定できる状況ではない。出土石類の中には、被熱した自然亜角礫が一定量あり、石材・サイズ・被熱面の傾向から、支脚石と認定した。これらは、土器を支えたカマド的な利用も想定できるが、鍛冶炉に関係することも考えられる。ただし、金属滓



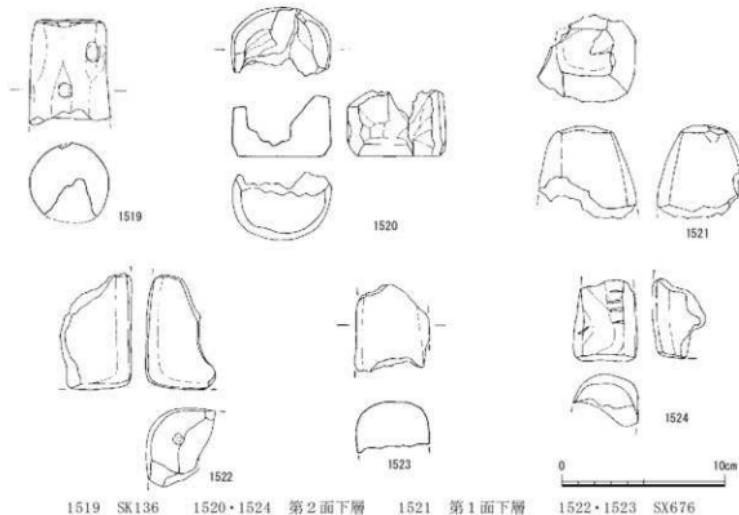
1501 SX717 1502・1503・1505～1511・1513 第2面下層 1504 土器群A 1512 第3面

第207図 土製品実測図1 (1501～1506は1/2、他は1/3)



1514 SX678 1515-1517 第2面下層 1516 第3面 1518 SX119(土器群B)

第208図 土製品実測図2 (1/3)

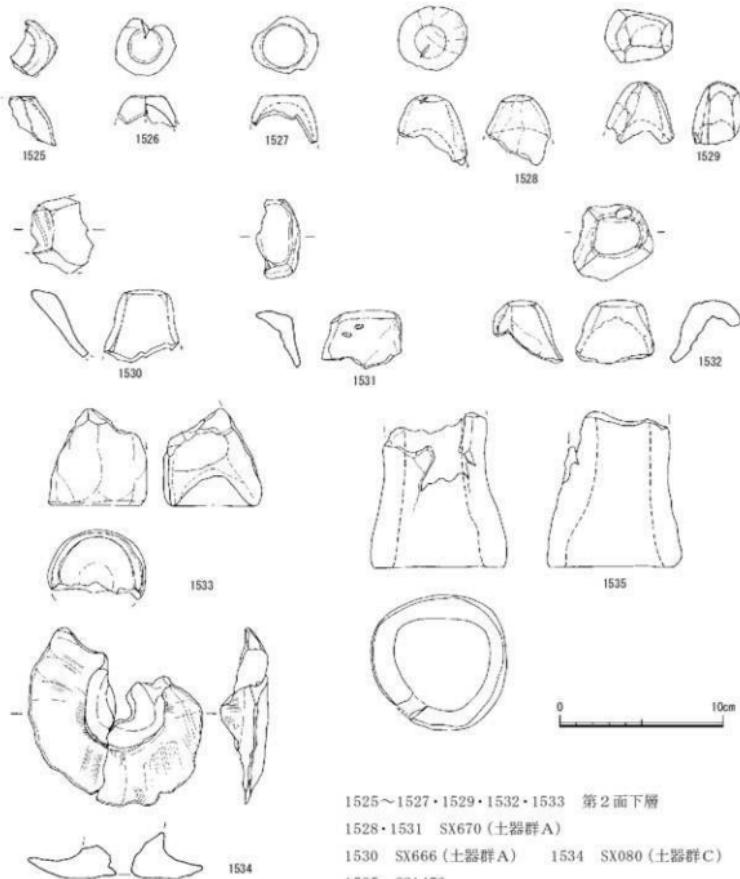


第209図 土製品実測図3 (1/3)

等の付着は認められない。他に、被熱粘土塊が出土している。これらは、SX678・676、第1・2面下層から弥生～古墳時代前期土器と共に出土している。埋蔵文化財センターで分析を行ったが、金属やガラス加工に関わる成分は検出されなかった(第V章第3節)。強く被熱して表面が発泡した大型甕口縁も出土している(図版41-14)。被熱痕跡のない粘土塊は第2・3面から一定量出土している。

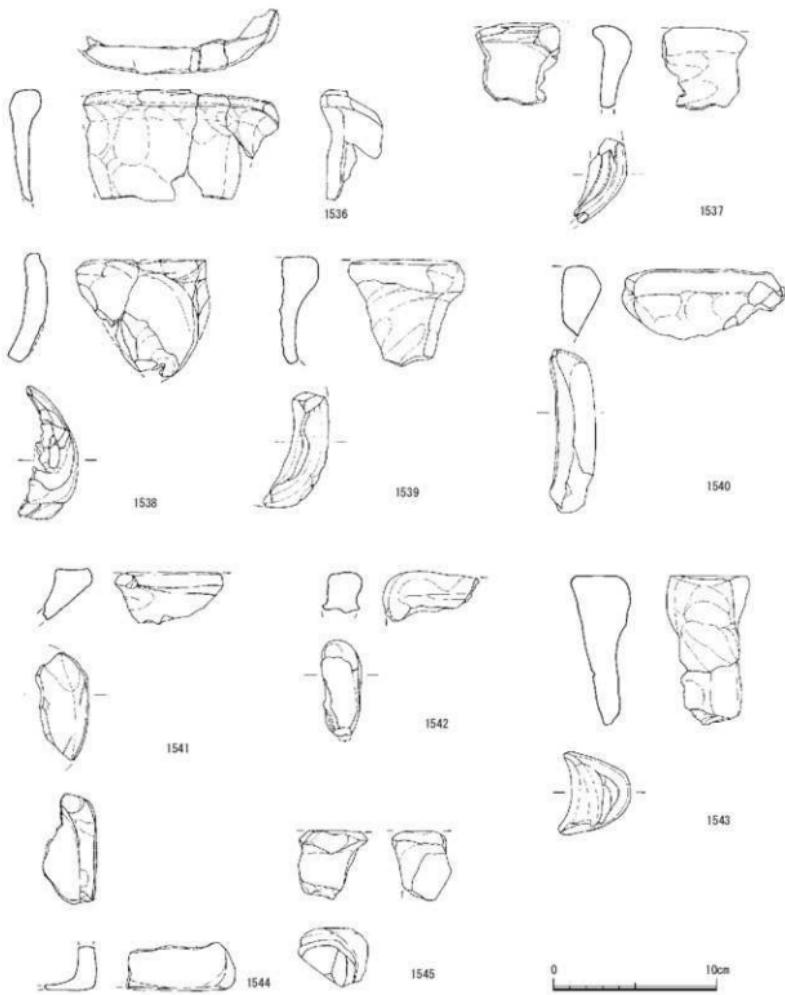
玉類(第201・202・203図、第7・8・9表、巻頭図版4) 1378トンボ玉はSX546・547上層(SX512)から出土し、堆積は古墳時代前期であるが、弥生時代遺物も含む。1395・1398・1399・1400・1402・1404の出土層位から、小型滑石製品は弥生時代の所産の可能性がある。1379・1382・1388・1406・1410・1413～1415の層位から、蛇紋岩勾玉や碧玉管玉、土製玉類は古墳時代前期に属する可能性がある。碧玉管玉1389、滑石勾玉1396、土製玉類1409・1411・1416・1417は71(I2)区出土で、石製・土製玉類の集中がみられる。12区は第2面では微高地落際で、関連しそうな遺構は古墳時代前期の推定竪穴建物SC1476である。また、玉素材の可能性がある小円窓が出土している(第8表)。摩耗した堆積岩や変成岩類で、有色で光沢があり、1382のように穿孔を施せば、装身具に使えそうな石製素材である。ただし、調査区内の河川堆積層や遺物包含層に含まれる自然小砾との区別は難しく、1382の存在から抽出対象としたが、それが無ければ抽出対象にもならず、発掘作業中に取り上げられていないものもあると思われる。抽出対象としたものは、第2面微高地側を中心に出土している。

土製品(紡錘車、円盤、投弾、土錘、注口、不明)(第204～211図、第4表) 1420はSK215(夜白・板付I式)、1422はSK1195(弥生)、1418は土器群SX062(古墳前期)。石製紡錘車は未成品も含めて20点出土しており、1270がSK194(板付I・II式)、1308がSD719(須玖I式)、1372が第3面、236がSC050(古墳前期)、他は第2面下層、SX547、SX676・678から、弥生～古墳時代前期土器と共に出土している。土製円盤は、1430・1434・1435・1436が弥生時代遺構出土で、他は第2面下層などから弥生～古墳時代前期土器と共に出土している。円盤自体はハケメやミガキ調整の弥生土器片の再加工



第210図 土製品実測図4 (1/3)

が多い。大小の二型があり、径6～8cmの大型品は、微高地側よりも河川部側から出土する傾向がある。投弾は、1468・1470・1471が弥生時代遺構から出土し、他は第2面下層などから弥生～古墳時代前期土器と共に出土している。形態は紡錘形あるいは滴形、球形はない。傾向として、第2面下層など微高地側出土が多く、河川部側が少ない。注口は小型でやや粗雑な作りで、小型土器に付属していたと考えられるが、接合した状態で出土していない。本調査では、SX071出土の586(第104図)が最も注口が付いていた可能性が高い。1509・1510は土器把手で朝鮮半島系の瓶に付属していた可能性がある。SP155・F3区から瓶底部小片が出土している。不明土製品は、1518・1519・1528・1530・1531・1534・1535・1536・1538・1539・1541・1544・1545などから、概ね古墳時代前期の所産と考えられる。



1536 SX074 (土器群B) 1537 SX676 1538 SX082 (土器群C) 1539 SX670 (土器群A)

1540・1542・1543 第2面下層 1541・1545 土器群A 1544 SC614

第211図 土製品実測図5 (1/3)

第4表(1) 第2·3面出土土器

第4表(2) 第2·3面出土土器

第5表 第2·3画出土木器

第6表 第2・3面出土石器
長さはcm。重量はg。
〔〕内は残存法量

器種	年号	器種	長さ	幅	厚さ	器種	長さ	幅	厚さ	器種	長さ	幅	厚さ		
41	194	打制石器	2.5	1.5	0.5	60	244	刮削器	4.0	12.0	0.5	137	949	刮削器	2.2
42	195	打制石器	3.8	0.84	0.5	60	245	刮削器	7.0	12.0	0.5	137	950	刮削器	1.5
43	196	刮削器	13.4	14.82	0.5	60	246	刮削器	9.1	15.5	0.5	137	951	刮削器	2.1
44	191	刮削器	7.40	15.91	0.5	60	247	刮削器	12.4	16.0	0.5	137	952	刮削器	1.5
45	192	刮削器	11.3	7.93	2.0	60	248	刮削器	9.2	16.0	0.5	134	941	刮削器	4.2
46	193	刮削器	21.3	10.87	2.0	60	249	刮削器	9.4	16.0	0.5	134	942	刮削器	4.2
47	194	刮削器	6.7	19.2	2.0	60	250	刮削器	10.5	16.0	0.5	134	943	刮削器	4.2
48	195	刮削器	7.4	11.0	2.0	60	251	刮削器	10.5	16.0	0.5	134	944	刮削器	4.2
49	196	刮削器	1.6	8.83	2.0	60	252	刮削器	8.7	16.0	0.5	134	945	刮削器	4.2
50	197	刮削器	7.6	1.11	2.0	60	253	刮削器	12.5	16.0	0.5	135	946	刮削器	4.2
51	198	两面刮削器	1.7	0.94	2.0	60	254	刮削器	3.6	16.0	0.5	134	947	刮削器	4.2
52	199	刮削器	5.7	13.17	11	60	255	刮削器	15.7	16.0	0.5	135	948	刮削器	4.2
53	200	刮削器	7.8	16.07	15	60	256	刮削器	4.3	16.0	0.5	135	949	刮削器	4.2
54	201	刮削器	6.0	16.07	15	60	257	刮削器	10.5	16.0	0.5	135	950	刮削器	4.2
55	202	刮削器	6.0	16.07	15	60	258	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	951	刮削器	4.2
56	203	刮削器	1.6	16.07	15	60	259	刮削器	5.2	16.0	0.5	135	952	刮削器	4.2
57	204	刮削器	6.0	16.07	15	60	260	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	953	刮削器	4.2
58	205	刮削器	6.0	16.07	15	60	261	刮削器	5.0	16.0	0.5	135	954	刮削器	4.2
59	206	刮削器	1.6	16.07	15	60	262	刮削器	8.7	16.0	0.5	135	955	刮削器	4.2
60	207	刮削器	6.0	16.07	15	60	263	刮削器	5.2	16.0	0.5	135	956	刮削器	4.2
61	208	刮削器	6.0	16.07	15	60	264	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	957	刮削器	4.2
62	209	刮削器	6.0	16.07	15	60	265	刮削器	5.0	16.0	0.5	135	958	刮削器	4.2
63	210	刮削器	6.0	16.07	15	60	266	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	959	刮削器	4.2
64	211	刮削器	6.0	16.07	15	60	267	刮削器	5.0	16.0	0.5	135	960	刮削器	4.2
65	212	刮削器	6.0	16.07	15	60	268	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	961	刮削器	4.2
66	213	刮削器	6.0	16.07	15	60	269	刮削器	5.2	16.0	0.5	135	962	刮削器	4.2
67	214	刮削器	6.0	16.07	15	60	270	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	963	刮削器	4.2
68	215	刮削器	6.0	16.07	15	60	271	刮削器	5.0	16.0	0.5	135	964	刮削器	4.2
69	216	刮削器	6.0	16.07	15	60	272	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	965	刮削器	4.2
70	217	刮削器	6.0	16.07	15	60	273	刮削器	5.2	16.0	0.5	135	966	刮削器	4.2
71	218	刮削器	6.0	16.07	15	60	274	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	967	刮削器	4.2
72	219	刮削器	6.0	16.07	15	60	275	刮削器	5.0	16.0	0.5	135	968	刮削器	4.2
73	220	刮削器	6.0	16.07	15	60	276	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	969	刮削器	4.2
74	221	刮削器	6.0	16.07	15	60	277	刮削器	5.0	16.0	0.5	135	970	刮削器	4.2
75	222	刮削器	6.0	16.07	15	60	278	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	971	刮削器	4.2
76	223	刮削器	6.0	16.07	15	60	279	刮削器	5.2	16.0	0.5	135	972	刮削器	4.2
77	224	刮削器	6.0	16.07	15	60	280	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	973	刮削器	4.2
78	225	刮削器	6.0	16.07	15	60	281	刮削器	5.0	16.0	0.5	135	974	刮削器	4.2
79	226	刮削器	6.0	16.07	15	60	282	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	975	刮削器	4.2
80	227	刮削器	6.0	16.07	15	60	283	刮削器	5.2	16.0	0.5	135	976	刮削器	4.2
81	228	刮削器	6.0	16.07	15	60	284	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	977	刮削器	4.2
82	229	刮削器	6.0	16.07	15	60	285	刮削器	5.0	16.0	0.5	135	978	刮削器	4.2
83	230	刮削器	6.0	16.07	15	60	286	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	979	刮削器	4.2
84	231	刮削器	6.0	16.07	15	60	287	刮削器	5.2	16.0	0.5	135	980	刮削器	4.2
85	232	刮削器	6.0	16.07	15	60	288	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	981	刮削器	4.2
86	233	刮削器	6.0	16.07	15	60	289	刮削器	5.0	16.0	0.5	135	982	刮削器	4.2
87	234	刮削器	6.0	16.07	15	60	290	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	983	刮削器	4.2
88	235	刮削器	6.0	16.07	15	60	291	刮削器	5.2	16.0	0.5	135	984	刮削器	4.2
89	236	刮削器	6.0	16.07	15	60	292	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	985	刮削器	4.2
90	237	刮削器	6.0	16.07	15	60	293	刮削器	5.0	16.0	0.5	135	986	刮削器	4.2
91	238	刮削器	6.0	16.07	15	60	294	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	987	刮削器	4.2
92	239	刮削器	6.0	16.07	15	60	295	刮削器	5.2	16.0	0.5	135	988	刮削器	4.2
93	240	刮削器	6.0	16.07	15	60	296	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	989	刮削器	4.2
94	241	刮削器	6.0	16.07	15	60	297	刮削器	5.0	16.0	0.5	135	990	刮削器	4.2
95	242	刮削器	6.0	16.07	15	60	298	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	991	刮削器	4.2
96	243	刮削器	6.0	16.07	15	60	299	刮削器	5.2	16.0	0.5	135	992	刮削器	4.2
97	244	刮削器	6.0	16.07	15	60	300	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	993	刮削器	4.2
98	245	刮削器	6.0	16.07	15	60	301	刮削器	5.0	16.0	0.5	135	994	刮削器	4.2
99	246	刮削器	6.0	16.07	15	60	302	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	995	刮削器	4.2
100	247	刮削器	6.0	16.07	15	60	303	刮削器	5.2	16.0	0.5	135	996	刮削器	4.2
101	248	刮削器	6.0	16.07	15	60	304	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	997	刮削器	4.2
102	249	刮削器	6.0	16.07	15	60	305	刮削器	5.0	16.0	0.5	135	998	刮削器	4.2
103	250	刮削器	6.0	16.07	15	60	306	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	999	刮削器	4.2
104	251	刮削器	6.0	16.07	15	60	307	刮削器	5.2	16.0	0.5	135	1000	刮削器	4.2
105	252	刮削器	6.0	16.07	15	60	308	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	1001	刮削器	4.2
106	253	刮削器	6.0	16.07	15	60	309	刮削器	5.0	16.0	0.5	135	1002	刮削器	4.2
107	254	刮削器	6.0	16.07	15	60	310	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	1003	刮削器	4.2
108	255	刮削器	6.0	16.07	15	60	311	刮削器	5.2	16.0	0.5	135	1004	刮削器	4.2
109	256	刮削器	6.0	16.07	15	60	312	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	1005	刮削器	4.2
110	257	刮削器	6.0	16.07	15	60	313	刮削器	5.0	16.0	0.5	135	1006	刮削器	4.2
111	258	刮削器	6.0	16.07	15	60	314	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	1007	刮削器	4.2
112	259	刮削器	6.0	16.07	15	60	315	刮削器	5.2	16.0	0.5	135	1008	刮削器	4.2
113	260	刮削器	6.0	16.07	15	60	316	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	1009	刮削器	4.2
114	261	刮削器	6.0	16.07	15	60	317	刮削器	5.0	16.0	0.5	135	1010	刮削器	4.2
115	262	刮削器	6.0	16.07	15	60	318	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	1011	刮削器	4.2
116	263	刮削器	6.0	16.07	15	60	319	刮削器	5.2	16.0	0.5	135	1012	刮削器	4.2
117	264	刮削器	6.0	16.07	15	60	320	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	1013	刮削器	4.2
118	265	刮削器	6.0	16.07	15	60	321	刮削器	5.0	16.0	0.5	135	1014	刮削器	4.2
119	266	刮削器	6.0	16.07	15	60	322	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	1015	刮削器	4.2
120	267	刮削器	6.0	16.07	15	60	323	刮削器	5.2	16.0	0.5	135	1016	刮削器	4.2
121	268	刮削器	6.0	16.07	15	60	324	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	1017	刮削器	4.2
122	269	刮削器	6.0	16.07	15	60	325	刮削器	5.0	16.0	0.5	135	1018	刮削器	4.2
123	270	刮削器	6.0	16.07	15	60	326	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	1019	刮削器	4.2
124	271	刮削器	6.0	16.07	15	60	327	刮削器	5.2	16.0	0.5	135	1020	刮削器	4.2
125	272	刮削器	6.0	16.07	15	60	328	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	1021	刮削器	4.2
126	273	刮削器	6.0	16.07	15	60	329	刮削器	5.0	16.0	0.5	135	1022	刮削器	4.2
127	274	刮削器	6.0	16.07	15	60	330	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	1023	刮削器	4.2
128	275	刮削器	6.0	16.07	15	60	331	刮削器	5.2	16.0	0.5	135	1024	刮削器	4.2
129	276	刮削器	6.0	16.07	15	60	332	刮削器	7.9	16.0	0.5	135	1025	刮削器	4.2
130	277	刮削器	6.0	16.07	15	60	333	刮削							

第7表 出土土製品

種類	番号	通稱・位置	種類	法線(cm, g)	種類	番号	通稱・位置	種類	法線(cm, g)
神國	776	SX012	鏡形	径6.1, 厚さ0.9, 重畳24.07	神國	1479	上部群14区(北)	投錐	径2.4, 高さ3.15, 重畳16.92
125	757	SX009-N	鏡形	径6.4, 厚さ0.8(鉢), 重畳29.79	206	1480	上部群1区(北)	投錐	径2.5, 高さ3.2, 重畳12.64
203	1405	3面下3DC	鏡形棒状	径1.1	206	1481	2面下削49区(北)	有孔投錐	径2.65, 高さ4.6, 重畳20.28
203	1406	上部群15区	勾玉	長さ2.1, 径0.6-0.7, 重畳1.02	206	1482	2面下49区(北)	投錐	径2.2, 高さ4.9, 重畳19.39
203	1407	2面下3DC②	勾玉	径1.7, 厚さ1.2	206	1483	2面下49区(北)	投錐	径2.15, 高さ4.6, 重畳14.49
203	1408	3面下3DC	勾玉	径1.3, 厚さ0.9	206	1484	1面下49区(北)	投錐	径3.6, 厚さ2.2, 重畳13.75
203	1409	1面下71区	勾玉	長さ3.2, 幅1.6, 厚さ3, 重畳9.74	206	1485	2面下49区(南)	投錐	径2.2, 長さ3.3, 重畳9.9
203	1410	SX111-114	勾玉	径1.7, 厚さ1.4	206	1486	2面下削49区	投錐	径2.6, 長さ3.6, 重畳20.79
203	1411	1面下71区	傘形	長さ3.2, 幅2.2, 厚さ0.7, 重畳18.38	206	1487	2面下削53区	投錐	径2.2, 長さ3.8, 重畳11.65
203	1412	2面下F14区	算盤形	径3.2, 厚さ1.9, 重畳8.8	206	1488	2面下削54区	投錐	径2.1, 長さ3.7, 重畳14.52
203	1413	SX111-114	管玉	径3.6, 厚さ0.8, 孔径0.3-0.4	206	1489	2面下F1区	投錐	径2.15, 高さ3.6, 重畳14.48
203	1414	SX111-114	管玉	径3.9, 厚さ0.8	206	1490	2面下14区	投錐	径2.5, 高さ3.7, 重畳20.13
203	1415	SX111-114	管玉	径3.9-1.1, 高さ1.1, 重畳4.57	206	1491	2面下削22区	投錐	径2.3, 長さ3.4, 重畳17.26
203	1416	1面下71区	管玉	径1.2, 孔径0.8	206	1492	2面下F26区	投錐	径3.6, 高さ3.6, 重畳17.26
203	1417	1面下71区	管玉	径3.2, 孔径0.8	206	1493	2面下4区	投錐	径2.2, 長さ3.4, 重畳14.95
203	1418	SX062	鏡形	径5.2-5.6, 厚さ0.5, 重畳66.95	206	1494	2面下4区	投錐	径2.2, 長さ3.5, 重畳17.89
203	1419	SX678-40区	鏡形	径3.0-3.7	206	1495	2面下8区	投錐	径2.6, 長さ3.6, 重畳22.91
203	1420	SX105-6区	鏡形	径3.5-3.8, 厚さ1.4	206	1496	2面下F12区	投錐	径2.7, 長さ3.4, 重畳25.47
203	1421	2面下70-79区	鏡形	径3.0-3.1, 高さ1.1, 重畳6.32	206	1497	2面下19-20区	投錐	径2.3, 長さ3.6, 重畳11.77
203	1422	SX105	鏡形	径3.8, 厚さ0.7	206	1498	2面下71区	投錐	径20.5, 厚さ3.5, 重畳14.29
203	1423	SX105-41区	鏡形	中径3.5, 厚さ1.2	206	1499	2面下7-18区	投錐(不規則)	径1.5-1.7
203	1424	2面下70-79区	鏡形	径3.0-3.1, 高さ1.1, 重畳34.91	206	1500	2面下7-14区	有孔投錐	径3.3, 高さ2.1
203	1425	SX678上層39区	鏡形	径3.2, 厚さ1.4, 重畳29.21	—	—	—	—	—
203	1426	S P 23区	円盤形	径1.1-1.4, 厚さ0.65, 重畳11.64	—	—	—	—	—
203	1427	S P 48区	円盤形	径1.9-2.0, 厚さ0.75, 重畳8.43	—	—	—	—	—
203	1428	DP1139	円盤形	径2.6-2.9, 厚さ0.6, 重畳12.91	—	—	—	—	—
203	1429	DP1193	円盤形	径3.7-4.2, 厚さ0.8, 重畳14.08	—	—	—	—	—
203	1430	SX028-6	円盤形	径2.2-3.5, 厚さ1.2, 重畳16.63	—	—	—	—	—
203	1431	SX1195	円盤形	径3.5-3.7, 厚さ1.0, 重畳11.13	—	—	—	—	—
203	1432	SX1195	円盤形	径3.4-3.5, 厚さ0.65, 重畳12.33	—	—	—	—	—
203	1433	SPM 55-67区	円盤形	径2.2-2.5, 厚さ0.9, 重畳6.47	—	—	—	—	—
203	1434	SX17	円盤形	径3.0-3.7, 厚さ0.7, 重畳34.42	—	—	—	—	—
203	1435	SX345	円盤形	径3.4-4.4, 厚さ1.2, 重畳27.98	—	—	—	—	—
203	1436	SX347	円盤形	径1.3-3.9, 厚さ0.7, 重畳15.3	—	—	—	—	—
203	1437	SX345-36.3K	円盤形	径3.4-5.2, 厚さ1.1, 重畳29.98	—	—	—	—	—
203	1438	12群群 南	円盤形	径3.7-4.8, 厚さ0.7, 重畳16.44	207	1501	8317区	土鍬	径1.7, 高さ3.7, 重畳13.55
203	1439	SX064 北	円盤形	径5.2-5.8, 厚さ0.9, 重畳29.62	207	1502	2面下削96区	土鍬	径1.4, 長さ2.2, 重畳4.11
203	1440	SX064 南	円盤形	径4.4-4.7, 厚さ0.9, 重畳25.04	207	1503	2面下削94区	土鍬	径1.7-2.0, 高さ3.7, 重畳1.6
203	1441	SX064 南	円盤形	径7.6-8.5, 厚さ1.6, 重畳13.14	207	1504	土鍬群 A 14区	土鍬	径3.6, 高さ3.4, 重畳0.4
203	1442	2面下30区	円盤形	径1.6, 厚さ1.0, 重畳9.66	207	1505	2面下49区(南)	土鍬	径3.1, 高さ1.9, 重畳0.4
203	1443	2面下52区	円盤形	径3.1-3.9, 厚さ0.7, 重畳10.59	207	1506	2面下6区(西)	土鍬	径3.5, 高さ2.0, 重畳0.7
203	1444	2面下53区	円盤形	径3.2-3.9, 厚さ0.8, 重畳10.59	207	1507	2面下56-19区	土鍬	径3.7-4.6, 高さ3.2, 重畳0.99
203	1445	2面下 F 1区	円盤形	径3.2-3.9, 厚さ1.6, 重畳16.95	207	1508	2面下49区(南)	土鍬	徑元孔丸2, 滾元直孔5
203	1446	2面下 11区	円盤形	径3.2-3.5, 厚さ0.8, 重畳16.22	207	1509	2面下 F 12区	土鍬	径3.7-8.0, 高さ3.3-3.5
203	1447	2面下 F 2区	円盤形	径2.6-2.8, 厚さ0.75, 重畳6.49	207	1510	2面下削67区	土鍬	径3.7-5.5, 高さ3.4
203	1448	2面下 1区	円盤形	径3.2, 厚さ0.9, 重畳11.92	207	1511	2面下 F 12区	土鍬	径3.4-4.4, 高さ3.2, 重畳50.56
203	1449	2面下 F 3区(2)	円盤形	径3.5, 厚さ1.1, 重畳16.13	207	1512	2面下 F 3区	土鍬	径3.5-5.2, 高さ3.1, 重畳44.42
203	1450	2面下 F 7区(2)	円盤形	径3.8-4.1, 厚さ1.5, 重畳24.1	207	1513	2面下 F 11区	土鍬	径3.2-3.5, 重石小穴六合
203	1451	2面下 F 7区(2)	円盤形	径3.2-3.5, 厚さ1.0, 重畳11.7	207	1514	2面下 F 16区	土鍬	径3.6, 高さ4.6, 高さ8.1
203	1452	2面下 F 7区(2)	円盤形	径5.2-5.8, 厚さ0.8, 重畳30.1	207	1515	2面下 F 10区	土鍬	径4.6, 高さ4.6, 高さ8.1
203	1453	SX676-136.3K区	円盤形	径3.3-3.4, 厚さ0.5, 重畳2.79	207	1516	2面下 F 3区	土鍬	徑元孔丸2, 滾元直孔3
203	1454	SX676-136.3K区	円盤形	径4.6-4.7, 厚さ0.8, 重畳23.1	207	1517	2面下 F 1-7区	土鍬	径9.3, 高さ2.5
203	1455	SX676-136.3K区	円盤形	径4.7-4.8, 厚さ1.0	207	1518	2面下削64区	土鍬	徑元孔丸2, 滾元直孔3
203	1456	SX676-136.3K区	円盤形	径4.7-4.8, 厚さ1.0, 重畳49.97	207	1519	2面下 F 6区	土鍬	徑元孔丸2, 滾元直孔3
203	1457	SX676-34区	円盤形	径3.3-3.6, 厚さ0.75-1.1, 重畳13.41	207	1520	2面下 F 13区	土鍬	徑元孔丸2, 滾元直孔3
203	1458	SX676-34区	円盤形	径3.5-3.8, 厚さ0.75, 重畳6.49	207	1521	2面下 F 9区	土鍬	徑6.1
203	1459	SX676-34区	円盤形	径3.6-4.1, 厚さ0.8, 重畳12.68	207	1522	2面下 F 71区	土鍬	上端長さ3.8, 幅3.5
203	1460	SX676-34区	円盤形	径3.9-4.5, 厚さ0.8, 重畳14.75	207	1523	2面下削34区	土鍬	徑存高7.1
203	1461	SX676-136.3K区	円盤形	径3.4-4.4, 厚さ0.85, 重畳14.83	207	1524	2面下削39区	土鍬	幅4.5
203	1462	SX676-136.3K区	円盤形	径3.3-4.4, 厚さ0.85, 重畳15.7	207	1525	2面下 F 1区	土鍬	幅4
203	1463	SX676-136.3K区	円盤形	径3.7-4.6, 厚さ0.7, 重畳65.77	207	1526	2面下削6区	土鍬	徑存高3
203	1464	SX676-34区	円盤形	径2.8-2.9, 厚さ1.1, 重畳49.97	207	1527	2面下削13区	土鍬	上端斜2.5
203	1465	SX676-136.3K区	円盤形	径7.0-7.7, 厚さ0.7, 重畳16.14	207	1528	SX676	土鍬	徑8.2-3.3, 高さ5.9-6.4
203	1466	SX676-136.3K区	円盤形	径6.2-6.7, 厚さ0.7, 重畳47.19	207	1529	2面下削33区	土鍬	徑6.5-7.5, 高さ4.5
203	1467	SX676-35区	円盤形	径5.9-6.4, 厚さ1.1, 重畳57.06	207	1530	2面下削34区	土鍬	徑存高5.8
203	1468	SX676-35区	円盤形	径5.3-5.6, 厚さ1.1, 重畳46.98	207	1531	SX676	土鍬	上辺3.5, 高さ3.7, 高さ3.5
203	-	SX676-上層33区	円盤形	径7.7, 厚さ1.1, 重畳73.17	207	1532	2面下 F 17区	土鍬	上辺3.5-3.7, 高さ2.7
203	-	SX676-上層39区	円盤形	径4.5, 厚さ0.8	207	1533	2面下削6区	土鍬	幅6
203	-	2面30区	円盤形	—	207	1534	SX666	土鍬	幅6
203	-	2面下削30区	円盤形	径7.5, 厚さ1.5	207	1535	SX676-12面下77区(1)	土鍬	徑3.7, 高さ2.5, 高さ5.8
203	1469	SP1430	投錐	径3.2, 厚さ3.4, 重畳17.19	207	1536	SX676-12面下77区(2)	土鍬	徑8.2-3.3, 高さ5.9-6.4
203	1470	SX3434	投錐	径5.1, 厚さ3.6, 重畳14.72	207	1537	SX676-12面下77区(3)	土鍬	徑3.7, 高さ2.5, 高さ5.4
203	1470	SX3437	投錐	径5.2, 厚さ3.4, 重畳19.39	207	1538	SX676	土鍬	幅4, 斧刃4.4, 高さ9.1
203	1471	SX3437	投錐	径5.3-5.5, 厚さ3.5, 重畳13.02	207	1539	SX666	土鍬	幅3.7, 中間30.1, 高さ6.6
203	1472	SX676-24区	投錐	径3.1, 厚さ3.6, 重畳11.6	207	1540	SX676	土鍬	幅3.7, 厚さ2.3, 高さ6.5
203	1473	SX676-24区	投錐	径3.3, 厚さ3.4, 重畳17.23	207	1541	SX676	土鍬	幅3.7, 厚さ2.3, 高さ6.5
203	1474	SX676-上層39区	投錐	径3.9-4.5, 厚さ1.1, 重畳17.1	207	1542	SX676	土鍬	幅3.7, 高さ2.5, 高さ5.4
203	1475	SX676-34区	投錐	径5.2, 厚さ4.2, 重畳20.42	207	1543	SX676	土鍬	幅3.7, 斧刃4.4, 高さ9.1
203	1476	SX676-35区	投錐	径3.5, 厚さ4, 重畳20.26	207	1544	SX676	土鍬	幅3.6, 高さ2.6, 高さ4.3
203	1477	SX676-40区	投錐	径2.5, 厚さ3.4, 重畳16.1	207	1545	SX676-12面下77区(4)	土鍬	徑3.6, 高さ4.5, 高さ2.7
203	1478	SX676-34区	投錐	径3.6, 厚さ3.5, 重畳6.9	207	1546	2面下削50区(1) (土鍬群A)	土鍬	徑存高1

第8表 出土金属器ほか自然科学分析対象

No.	報告	遺構・部位	内容	時期	No.	報告	遺構・部位	内容	時期
1	200 紙 1373	SC614 中東K	鉄錠	古墳前期	23	SP968		金屬滓か	弥生
2	200 紙 1374	2面下 11K	鉄錠	弥生～古墳前期	24		3面下 4 K	金屬滓か	弥生
3	200 紙 1375	SP1239	鉄製錠状製品	弥生・中期	25		SM376 上層 40 K	金屬滓か	弥生～古墳前期
4	200 紙 1376	SK115	鉄製小板状製品	古墳前期	26	回復 41-16	2面下 71・8 K	金屬滓か	弥生～古墳前期
5	200 紙 1377	2面上 3区⑤	鉄製小板状製品	古墳前期	27		2面上 61・62 K	金屬滓か	弥生～古墳前期
6	212 紙	SK626 34 K	イギリス銅鏡	伊左美・古墳前期	28	回復 41-16	土器群中 (B)	金屬滓か 4 点	古墳前期
7	V ■ 3 脂	SP1361	赤色顔料	弥生・前期	29	回復 41-16	土器群 C (C-B)	金屬滓か 6 点	古墳前期
8	V ■ 3 脂	2面 R26	赤色顔料	弥生～古墳前期	30		SM111-114 (土器群D)	金屬滓か	古墳前期
9	回復 41-14	2面下 39 K (SK3676)	被熱石・型壓	弥生～古墳前期	31	回復 41-16	土器群 E 67 K	金屬滓か	古墳前期
10		SP1275・1276 一段下7	被熱石・塊	弥生	32		SS916	金屬滓か	8世紀
11	回復 41-15	SK626 40 K	被熱石・塊	弥生～古墳前期	33		3面 49 K	砂岩質石材	弥生
12	回復 41-15	SK626 41 K	被熱石・塊	弥生～古墳前期	34		2面 F 52 K	砂岩質石材	弥生～古墳前期
13	回復 41-15	SK626 上層 40 K	被熱石・塊	弥生～古墳前期	35		2面 53 K	砂岩質石材	弥生～古墳前期
14	回復 41-15	SK626 上層 40 K	被熱石・塊	弥生～古墳前期	36		2面下層 54 K	砂岩質石材	弥生～古墳前期
15	回復 41-15	SK626 下層 34 K	被熱石・塊	弥生～古墳前期	37		SM376 34 K	砂岩質石材	弥生～古墳前期
16		2面下層 39 K (SK3676)	被熱石・塊	弥生～古墳前期	38		SM314 魚子 3北西K	骨身長石材か	古墳前期
17		2面下層 39 K (SK3676)	被熱石・塊	弥生～古墳前期	39		2面下 4 K ②-1	骨身長石材か	弥生～古墳前期
18		2面下 23 K (SK3676)	被熱石・塊	弥生～古墳前期	40		2面下 4 K ②-2	骨身長石材か	弥生～古墳前期
19	回復 41-15	1面 F 39 K (SK3676)	被熱石・塊	弥生～古代	41		2面下層 54 K	骨身長石材か	弥生～古墳前期
20	回復 41-15	1面 F 45 K (SK3676)	被熱石・塊	弥生～古代	42		2面下 10 K	骨身長石材か	弥生～古墳前期
21		SC614 中東K	不明熱土塊	古墳前期	43		2面下 11 K	骨身長石材か	弥生～古墳前期
22	回復 41-16	SP1168 一段下7	鰐洋か	弥生	44		2面中層 39 K (SK3676)	骨身長石材か	弥生～古墳前期

第9表 出土玉類

図番号	遺構・部位	器種	材質	調査	重積 (g)	水中重量	比重	XRF (蛍光 X線)		XRD (X線回折)	
								青碧: ◎ Si / ● Pb, Fe / ○ Al, Ga, Be, Cu	白: ◎ Si / ● Pb, Fe / ○ Al, Ca, Be, Cu / △ Mg, K	白青: ◎ Si / ○ Pb, Cu, Be, Al, Ca, Fe	Analcite もしくは Barite
1378	SK512	トンボ玉	ガラス		10,483						
1379	SK113 R-1	匁玉	鉱物質		2,951	1,108	2.66	◎ Si / ● Fe / ○ Mg, Al, Cr, Ni	○ Si / ● Al, Fe / △ Ti	Clinohalite, Analcite	
1380	2面下 14G ②	匁玉? 片	白雲母		0.465	0.169	2.75	◎ Si / ● Al, Fe / ○ Cr / △ Ti	○ Si / ○ K, Fe / ○ Al, Cr, Be, Cu	Muscovite	
1381	SM316 北東 I	小玉	アマゾナイト		0.110	0.042	2.62	○ Si / ○ K / ○ Al, Rh / △ Fe	○ Si / ○ K, Fe / ○ Al	Amethyst	
1382	SM014 南東 I	鶴平玉	鈦鉄		0.198	0.077	2.57	○ Si / ● Fe / ○ Mg, Cr, Ni / △ Al	○ Si / ○ K, Fe / ○ Al	Antigorite	
1383	2面下層 49 K	小玉	ガラス		0.176			○ Si / ○ Cu, K, Fe, Al / △ Ph, Ga			
1384	SS017 東南 I	小玉	ガラス	青色斑	0.016			○ Si / ○ Mn, Fe, K, Al / △ Ca, Ti			
1385	2面下 49 K	管玉	鵝卵		0.638	0.251	2.54	○ Si / ○ K, Fe, Al, Ti	○ Si / ○ K, Fe, Al, Ti	Quartz, Orthoclase	
1386	2面上 30 K	管玉	鵝卵		0.065	0.024	2.71	○ Si / ○ K, Fe, Al	○ Si / ○ K, Fe, Al	Quartz, Orthoclase	
1387	SM017 南	管玉	鵝卵		0.133	0.054	2.46	○ Si / ○ K, Fe, Al			
1388	SM014 南東 I	管玉	鵝卵		0.150	0.057	2.63	○ Si / ○ K, Fe, Al / △ Ti			
1389	2面下層 71 K	管玉	鵝卵		0.040			○ Si / ○ K, Fe, Al, Ti		Quartz, Orthoclase	
1390	1面 F 53 K	鉢玉	鵝卵		3.971	1,325	2.52	○ Si / ○ Fe, K, Al			
1391	SM376 上層 39 K	半月形勾玉状	滑石	明灰緑	33.491	11,903	2.81				
1392	SM376 34 K	半月形勾玉状	滑石	明灰 (緑)	18,680	6,675	2.80	○ Si, Fe / ○ Mg, Cr, Ni, S, Al, Ca	Talc		
1393	2面 F 8 K	鶴平玉	滑石	暗灰緑	8,917	3,248	2.75			Clinochlore	
1394	2面下 53 K	装飾品	滑石	灰緑	8,684						
1395	3面上 53 K R-1	鶴平勾玉状	滑石	淡黄緑	2,632	0,941	2.80	○ Si, Fe / ○ Mg, Ni, Cr / Al, S	Talc		
1396	1面下層 71 K	鶴平勾玉状	滑石	黒灰	3,279	1,175	2.79	○ Fe / ○ Si, Al, Mg, Ca, Mn / △ Ti	Clinochlore?		
1397	SM376 25 K	未製品?	滑石	粉み有り	20,266			○ Fe / ○ Si, Mg, Al / △ Ca, Mn			
1398	SK123	装飾品	滑石	灰緑	8,494						
1399	SM719 西区	鶴平勾玉状	滑石	灰緑 (透)	4,756			○ Fe / ● Si / ○ Si, Mn, Mg, Al			
1400	SP91	装飾品	滑石	灰緑	4,589						
1401	2面 F 4 K	鶴平勾玉状	滑石	灰緑 (透)	4,566						
1402	SP226	装飾品	滑石	灰緑 (透)	3,830						
1403	SM376 上層 40 K	鉢	滑石	灰緑	0,950						
1404	SK189	鉢	滑石	灰緑	3,676						
-	SM094 R-1	鉢	滑石	灰緑	1,011						

第10表 出土種実一覧

分類 年度	No.	遺構・層位・位置	栽培種		栽培種(変化)		その他本種		木本(現化)	草本 カラムラ ナラムラ	ツブリジット ナラムラ	原木 カラムラ	時期
			年号	季節	年号	季節	年号	季節					
1	SS000	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
6	SS0012	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7	SS0014	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
8	SS0018 上層 北	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
9	SS0019 上層 南	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
10	SS0018 東端下 北	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
11	SS0019 東端 西	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
12	SS0020 北	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
13	SS0020 東端 北	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
14	SS0021 上層 北	-	18	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
15	SS0021 上層 南	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
16	SS0022 上層 北	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
17	木炭焼けた 5トレー	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
18	SS0025 (30096) 北	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
19	SS0026 芝	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
20	SS0029 芝	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
21	SP007	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
22	SS0076	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
23	2面下層 3216	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
24	2面下2-1116	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
25	2面下 1118	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
26	SS0094	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
27	SSX111	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
28	SSX115-116-117	-	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
29	SS0076	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
30	SS0074	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
31	SS0090	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
32	2面下 15 区 (土器群 A 上)	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
33	25-14 区 (土器群 A 上)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
44, 45	26-18 区 (土器群 A 上)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
43, 47	2 面下 9 区 (土器群 C 上)	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
48	2 面下 12 区 (土器群 C 上)	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
36, 39	2 面土器群 中	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
27	2面下 土器群 南	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
41	2面下 F 17 区 (SS0045)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
50	9.18. (SS0046)	-	-	117	300	-	-	-	-	-	-	-	-
49, 51	19.18. (SS0046 + 547 上面)	-	-	-	40cc	270	-	-	-	-	-	-	-
32	1面下 F 21 区 (SS0047)	-	-	6	100	-	-	-	-	-	-	-	-
52	SS0048	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
53	SS0049 芝	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
54	SS0050 芝	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
55	SS0051 芝	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
56, 27	SS0070 上層 40 区	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
56, 57, 58	SS0070 25 区	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
29	SS0070 25 (S84)	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-
28	SS0070 40 区	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
30	SS0070 上層 40 区	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
23	SS0070	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2	SS0075	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
11	木炭上 40 北側	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
12	木炭上	-	-	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
08	1面砂質 37-43 区	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
17	1面 49 区 北	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7	SS0025 22-23 区	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
16	1面 22 区 (SS0025)	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
13	木炭下 施東清掃	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
19	1面下 16 区 (SS0039)	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
20	1面下 49 区	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
21	1面下 56 区	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
22	1面下 58 区	-	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
23	1面下 77-78 区	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
27	2面上砂 62 区	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1	SP000 (S2)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2	SS0121 有機物	-	1	-	-	1	2	-	-	-	-	-	65
3	SS0011 土	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
5	SP0027 斜面	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
6	SS0015 土	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
25	2面上砂 49 区	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
29	2面下 49 区	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
30	2面下 49 区 南	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
24	2面下 77-78 区	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
9	SS0069 土	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
26	2面上砂 55 区 (土器群 A)	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
10	土器群 14 区	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
21, 22	2面下 17 区 (SS0045)	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
28	2面下 17 区 9 区 (SS0046)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
14	2面 31 区 上層 30 区	-	12	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
15	SS0026 上層 30 区	-	-	-	-	-	-	-	-	40	1	1	-
4	SS0109 土・紡土	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
33	SS0124 土	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-
8	SS0005 白色陶砂	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-

第V章 自然科学分析

第1節 木製品樹種、種実、昆虫、骨貝類、岩石、炭素14年代

パリノ・サーケイ株式会社（平成29年度）
株式会社古環境研究所（平成30年度、令和元年度）

1. 木製品樹種（第2・5表、図版42・43）

（1）分析方法

平成29・30年度に樹種同定を行った。以下、両年度で分析方法は共通する。資料の木取りを観察した上で、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本產木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本產木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995-1999）を参考にする。

平成30年度分析試料のうち、477は、明らかに異なる2点の木製品が確認されたため、2点から試料を採取する。また、1104は、多数の小枝状の木材で構成されており、径の違いも見られたため、径の異なる3点から試料を採取する。

（2）結果

同定結果は第2・5表に記載する。各分類群の解剖学的特徴の詳細は紙数の関係上割愛する（詳細を記した分析報告書は埋蔵文化財センター収蔵予定）。平成30年度試料のうち、184、142、W25、84、506は広葉樹、W92は針葉樹であるが、組織の保存状態が悪く、種類の同定はできなかった。また、1104の3点は、いずれも同じ広葉樹の当年枝であるが、種類は不明である。W200、323の2点は樹皮であった。外観からサクラ属の樹皮と考えられるが、組織の観察では確認できなかった。

- ・マツ属複維管束亜属 (*Pinus sylvestris* *Diploxylon*) マツ科
- ・モミ属 (*Abies*) マツ科
- ・マキ科 *Podocarpaceae* マキ属のイスマキあるいはナガミ属のナギであるが、两者を組織的に区別することは難しかったため、マキ科とした。
- ・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属 (II29)、ヒノキ科スギ属 (H30)
- ・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属
- ・ヒノキ科 *Cupressaceae* 分野櫻孔は保存が悪く観察できない。スギ除くヒノキ科のいずれかと考えられるが、分野櫻孔が観察できないため、種類不明である。
- ・イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight ex Forbes) K. Koch イヌガヤ科イヌガヤ属
- ・カヤ *Torreya nucifera* (L.) Sieb. et Zucc. カヤ科カヤ属
- ・シキミ (*Illicium anisatum* L.) シキミ科シキミ属 (II29)、マツバサ科シキミ属 (III30)
- ・クスノキ科 *Cinnamomum camphora* (L.) Presl クスノキ科クスノキ属
- ・クスノキ科 *Lauraceae* 柔細胞に油滴胞が顯著に認められる試料（クスノキ科A）と油滴胞が目立たない試料（クスノキ科B）があるが、それぞれの種類は詳細不明である。
- ・タケ亜科 *subfam. Bamboideae* イネ科 切片を作製する過程で組織が崩壊してしまうが、各破片に認められる組織の特徴を総合すると、以下のようになる。原生木部の小径の道管の左右に大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを厚壁の織細胞（維管束鞘）が囲んで維管束を形成するが、織細胞は放射方向に広く、接線方向に狭いため、全体として放射方向に長い変形となる。維管束は柔組織中に散在し、不齊中心柱をなす。いわゆるタケ・ササ類である。節が残る試料もあるが、保存状態が悪く、節の形状からタケ類、ササ類の区別はできなかった。

- ・タケ亜科 (*subfam. Bambusoideae*) 原生木部の小径の道管の左右に1対の大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを厚壁の織細胞（維管束鞘）が囲んで維管束を形成するが、織細胞は放射方向に広く、接線方向に狭いため、全体として放射方向に長い変形となる。維管束は柔組織中に散在し、不齊中心柱をなす。いわゆるタケ・ササ類である。節が残る試料もあるが、保存状態が悪く、節の形状からタケ類、ササ類の区別はできなかった。
- ・アワブキ属 *Melicastrum* アワブキ科
- ・イヌノキ *Bistylis racemosa* Stevold et Zucc. マンサク科イヌノキ属
- ・ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch. アサ科ムクノキ属
- ・エキノキ属 *Celtis* アサ科
- ・ヤマグワ *Morus australis* Poiret クワ科ヤマグワ属
- ・サクランボ *Cerasus* バラ科
- ・モモ *Prunus persica* (L.) Batsch バラ科モモ属
- ・シモツケ亜科 *subfam. Spiraeoideae* バラ科 木材組織の特徴から、ナナカマド属やナシ属等と考えられるが、組織的な区別が難しいため、シモツケ亜科とした。
- ・クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科クリ属
- ・シナノキ *Castanopsis* ブナ科 穗孔材へ放射孔材。道管は接線方向に1~2個幅で放射方向に配列する。穂孔材としてみた場合の孔部は3~4列、孔部外で急速に径を減じる。晚材部では多數が集まつて火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔は單一、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、單列、1~20細胞高。集合へ複合放射組織が認められる試料と認められない試料があり、認められる試料をツブライジ型、認められない試料をスダジイ型として分類した。ツブライジ型は、ツブライジ

(*Gastanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky)である。一方、スダジイ型にはツブライジとスダジイ (*Gastanopsis sieboldii* (Makino) Hatun. ex T. Yamaz. et Mashita subsp. *sieboldii*) が混在する可能性もある。これは、ツブライジの集合～複合放射組織の出現率が個体によって異なり、現生標本でもほとんど確認できないことがあるため、集合～複合放射組織を持たないスダジイと出現頻度の低いツブライジの区別が困難なためである。

・コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Gerris* ブナ科 放射組織は同性、單列、1～20細胞高のものと複合放射組織がある。

・コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prymula* ブナ科 放射組織は同性、單列、1～20細胞高のものと複合放射組織となる。

・コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Oclobalanopsis* ブナ科 放射孔材。道管は單独で放射方向に配列する。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、單列、1～15細胞高のものと複合放射組織がある。アカガシ亜属には、道管径の大きさが異なる試料が認められた。そこで、能城ほか(2012)の同定基準を参考にして、接線方向の最大径が200 μmを越える道管を持つ試料をアカガシ亜属A、200 μm未満あるいは保存が悪くて正確を測れない試料をアカガシ亜属Bとして分類した。アカガシ亜属Aはイチイガシやハナガシとを考えられる。一方、アカガシ亜属Bは様々な種類が含まれる可能性がある。平成29年度分析試料のうち、W72 (61)、W44 (758) の2点は、道管径が大きいことからイチイガシの可能性がある。

・スダジイ (*Gastanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シノキ属

・ツブライジ (*Gastanopsis cuspidata* (Thunberg) Schottky) ブナ科シノキ属 放射組織は同性、單列、1～20細胞高のものと集合～複合放射組織がある。

・シラギ *Neeschinia japonicum* (Siebold et Zucc.) Esser. トウダイギサ科シラギ属

・ヌルズ *Rhus javanica* L. var. *chinensis* (Mill.) T. Yamaz. ウルシ科ヌルズ属

・ハゼノキ類 *Toxicodendron* ウルシ科ウルシ属 2点あるが、それぞれ特徴が異なることから、ハゼノキ類A,Bとした。ハゼノキ類(A/W211)は、年輪幅が広く、やや懸掛的的是道管配列となる。ハゼ

(3) 考察

<弥生時代> 柱材はヒノキ科、サクラ属、イスノキ、アカガシ亜属、アワブキ属、シイ属、ヒサカキ、エノキ属に同定された。針葉樹のヒノキ科は耐水性・防虫性、広葉樹のイスノキやサクラ属は強度等の材質から柱として利用されたと推定される。南側の低丘陵上に位置する板付遺跡では、弥生時代前期の矢板、丸木杭、角杭等にシイ属が多数利用されている(伊東・山田, 2012)。雀居遺跡のこれまでの調査では、弥生時代後期～古墳時代初頭とされる柱材でスダジイやツブライジを主体として、スギが混じる結果が確認されている(伊東・山田, 前掲)。一方、本遺跡の南東側に位置する下月限C遺跡では、弥生時代前期～古墳時代前期とされる柱材にクリ、コナラ節、アカガシ亜属、スダジイ、ツブライジ、ウメ、アワブキ属、タブノキ属、クスノキ科、ツバキ属、スギ、マツ属複維管束亜属、弥生時代中期～後期とされる柱材にクリ、クヌギ節、アカガシ亜属、ツブライジ、スダジイ、クロモジ属、サカキ、カキノキ属、ヤマビワ、チシャノキ、ヒノキ、マキ属が確認され、雀居遺跡に比べて難多種類構成となっている(三村・高橋, 2005)。サカキやエノキ属の利用は、下月限C遺跡の利用例に似ている結果である。888の諸手鏡は、材質的に重硬とは言えないクスノキを利用している。

<古墳時代> 敲き具や槌では、サカキ、クリなどの強度の高い木材、柄やヘラでは、ヒノキ科、スギなどの加工性の高い木材が利用されている。鍔・錫やその部品等にアカガシ亜属を利用する結果は、周辺地域の既存の報告例(伊藤・山田, 2012)とも整合的である。容器はいずれも底面が板目となる割物容器で、針葉樹のスギと広葉樹のチシャノキ属を利用している。拾六町ツイジ遺跡(古墳時代中～後期)の柄にシイ属やクスノキ、羽根戸遺跡(古墳時代前期)の鉢形にクスノキ、四箇遺跡(古墳時代前期)の容器にチシャノキ等の例がある(伊

ノキ類(B/W211)は、年輪幅が狭く、年輪界付近で急激に径を減じるほか、道管の分布密度がハゼノキ類Aよりも低い。現生標本との比較では、ハゼノキ類Aがヤマハゼ、ハゼノキ類Bがハゼノキに似ているが、組織の特徴の違いが種の違いを示すかは不明である。

・ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. ムクロジ科ムクロジ属

・サカキ *Cleyera japonica* Thunb. サカキ科サカキ属

・ヒサカキ属 *Eurya* サカキ科

・タイミンタチバナ *Myrsine seguinii* R. Levl. タクランソウ科ツルミツヨウ属

・ツリヤキ属 *Camellia* ツバキ科

・ハノヤキ属ハノヤキ属 *Symplocos* sect. *Lodhra* ハノヤキ科

・マタタキ属 *Actinidia* マタタキ科 資料の木取りと大きさの関係から放射断面の切片は採取できなかった。

・リョウブ *Clethra barbinervis* Siebold et Zucc. リョウブ科リョウブ属

・ネジキ *Lyonia ovalifolia* (Wall.) Drude var. *elliptica* (Siebold et Zucc.) Hand.-Mazz. ツツジ科ネジキ属

・スノキ属 *Faccinum* ツツジ科

・チシャノキ属 *Ehretia* ムラサキ科

・トネリコ属トネリコ属 *Fraxinus* sect. *Fraxinaster* モクセイ科

・モチノキ属 *Ilex* モチノキ科

・タブノキ属 *Persea* クスノキ科

・ツバキ属 *Camellia* ツバキ科

・サカキ *Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc. ツバキ科サカキ属

・ヒサカキ (*Eurya japonica* Thunberg) ツバキ科ヒサカキ属

・ウツギ属 *Deutzia* ユキノシタ科

・バラ属 (*Rosa*) バラ科 放射組織は異性、單列で1～10細胞高前後のものと、10細胞以上、60～100細胞高以上の大型のものとがある。

・シャシャンボ (*Faccinum bracteatum* Thunb.) ツツジ科スノキ属 放射組織は異性、單列で8細胞高前後のものと5～7細胞幅、30～60細胞高のものがある。放射組織には輪状細胞が認められる。

・ハノヤキ属ハノヤキ属 *Symplocos* sect. *Lodhra* ハノヤキ科

藤・山田,前掲)。栓は広葉樹のサカキ、クスノキ、ヤマグワが同定され、重硬・緻密なサカキ、重硬で耐久性の高いヤマグワ、軽軟ではあるが耐水性の高いクスノキなどが利用されている。

建築部材には比較的重硬な広葉樹が多いが、針葉樹も混在し、弥生時代と同様の傾向がある。杭も種類が多く、周辺で入手可能な様々な木材を利用したと推定される。一方、材質面からみると、強度が高いか耐朽性・耐水性の高い木材の利用が多い。木取りと樹種についてみると、クリは分割材であるのに対し、それ以外の樹種は大部分が芯持丸木か芯持材であり、利用状況が異なる。D6区・W84の杭はイヌガヤの削出丸木であるが、杭として利用するために削出丸木に加工するとは考えにくく、他の用途に利用された木材の転用の可能性を考えられる。129の角材礎板はモモで、渡来栽培種のモモが果実だけではなく木材も利用されていたと推定される。135と143の角材礎板は、同じ角材ではあるが、形状や大きさが異なる。2点とも礎板としての機能には関係が無いと思われる端部加工も認められることから、転用材が利用されたと考えられる。元の用途は不明であるが、スギ材が利用されることから、加工性等を利用した製品と考えられる。W161の分割加工された加工材もスギであり、同様に加工性を利用した製品と考えられる。

今回の分析対象資料の中には、樹皮の残る木材が4点(495,W223,W239,W240)認められた。これらの樹皮付き木材について、最外年輪の観察を実施した(図版43)。環孔材となるW223(クリ)とW239(クスノキ)では、いずれも早材部(春材部)の形成が終了し、晩材部(夏材部)も形成されている。道管が形成を終了しているか否かの判断が難しいが、少なくとも観察した範囲で形成途中の道管は認められなかったため、形成終了後の秋以降～活動を再開する翌年の初春前に枯死あるいは伐採された木材と考えられる。散孔材となる495(シキミ)とW240(クスノキ)は、早材部と晩材部の区別が難しいため、季節性の判断はできなかった。しかし、前年と比べても主年分の年輪が形成されており、観察した範囲で形成途中の道管や木織維などの組織が全く確認できない状況は、環孔材の2点と同様であり、同じく秋以降～冬季に枯死あるいは伐採された可能性がある。

<古代> 61の一木鋤は、身部分が柵目板、柄部分が削出丸木状となる。身部分が柵目板となる木取りや、アカガシ亜属が利用される結果は、古墳時代前期の鉢と同様の木材利用である。本遺跡周辺では、下月隈C遺跡で古墳時代後期～奈良時代とされる二又鋤や鍬頭にアカガシ亜属が利用されている(三村・高橋, 2005)。また、棒状とされる試料の中で、削出丸木状を呈するW57(SS019)は、樹種がアカガシ亜属であること、木取りと大きさを考慮すると、鍬や鋤の柄に由来する可能性がある。容器は、曲物底板が3点(32, 59, 67)ある。いずれも板目板であり、モミ属、スギ、ヒノキが利用されている。樹種は異なるが、分割加工が容易な針葉樹材を用いている点では共通する。また、板目板は、年輪が層状に入るため、衝撃に対する耐性や耐水性が高いとされる。用途を考慮すれば、液体を入れるために耐水性の高い木取りで用いている可能性がある。土木材の杭は、タケ亜科に同定された2点(W70, W71)を除く資料が芯持丸木となる。先端加工は資料によって異なる。樹種は、スダジイ、ツバキ属、シキミ、ハイノキ節が認められ、全体的に強度の高い木材が多い傾向がある。点数に対して種類数が多い結果は、特定の木材を利用したのではなく、遺跡周辺に生育し、入手可能な木材を利用した事を示唆する。樹皮紐は、組織学的に樹種を同定することはできなかったが、外観的な特徴からいわゆる桜皮と考えられる。桜皮は丈夫であり、曲物などの継縫に利用される。本遺跡でも曲物の底板が出土していることから、側板を継ぐ目的に利用された可能性がある。小枝束は、小径の枝材が集中しており、各資料の最も大きい枝材を樹種同定の対象とした。いずれも目立った加工痕は認められない。クリ、ツツジ属、バラ属が認められ、複数の種類で構成されることが推定される。樹皮紐は、細い板状の樹皮をまとめて2箇所を樹皮の継縫で縛っている。縛れている細い板状の樹皮は、外観や組織の特徴から針葉樹の樹皮と考えられる。木鍤は芯持丸木でサカキが利用され、比較的比重の高い木材を利用したと推定される。

2. 種実(第10表、図版44)

(1) 分析方法

平成29・30年度に同定を行った。以下、分析方法は共通する。試料を肉眼および双眼実体顕微鏡下で観察する。未洗浄試料は、面相筆とピンセットを用いて、弱水流下でクリーニングを実施し、種実遺体に付着する砂泥を可能な限り除去する。種実遺体の同定は、現生標本や藤下(1984)、佐藤(1988)、石川(1994)、中山ほか(2010)、鈴木ほか(2012)等を参考に実施し、結果は部位・状態別の個数を一覧表で示す。また、各分類群の写真を添付し、一部の種実遺体の大きさをデジタルノギスで計測した結果等を一覧表に併記して同定根拠とする。分析後は、種実遺体を分類群別に容器に入れ、約70%のエタノール溶液で液浸保存する。

(2) 結果

・平成29年度

裸子植物2分類群(マツ属複維管束亜属、イヌガヤ)3個、被子植物12分類群(オニグルミ、イチイガシ、アカガシ亜属、コナラ属、ツブラジイ?、クスノキ、スマモ、モモ、ハクウンボク、エゴノキ、イネ、ヒヨウタン類)

808個、計811個が同定され、イチイガシ、アカガシ亜属、コナラ属、ツブライジイ?、一部のモモ、イネに炭化が認められた。栽培種は、果樹のスモモ、モモ、穀類のイネ、果菜類のヒヨウタン類の計781個が確認され、全体の96.3%を占める。ヒヨウタン類の種子が最も多く、果実を共伴する。次いでモモが多く、頂部が丸い核や尖る核が確認された。ただし、塊状炭化物を構成する粒数を推測すると、モモよりもイネが多いと考えられる。

栽培種を除いた分類群は全て木本で、針葉樹で常緑高木のマツ属複維管束亞属、常緑小高木～低木のイヌガヤ、広葉樹で常緑高木のイチイガシ、アカガシ亜属(イチイガシ・アラカシ以外)、ツブライジイ?、クスノキ、常緑または落葉高木のコナラ属、落葉高木のオニグルミ、落葉小高木のハクウンボク、エゴノキの、計30個が確認された。

以下、イネとヒヨウタン類の形態的特徴を記す。他の栽培種の形態的特徴等は紙数の関係上割愛する(詳細を記した分析報告書は埋蔵文化財センター収蔵予定)。

・イネ: №29の果実序(福地)の塊状炭化物は、最大で長さ6.2cm、幅3.6cm、厚さ2.6cm、重量4.76g(国版番号16)。ふ毛が残る穂果や小枝梗がほぼ同一方向に配列する(国版番号16)。イネ以外の種実や虫類等の混入物は認められなかった。胚乳(炭化米)は長さ4.09mm、幅2.25mm、厚さ2.01mmを測り、粒大(長さ×幅)・粒形(長さ/幅)(佐藤, 1988)は、極小型(9.20)・短粒(1.82)である(国版番号18)。

・ヒヨウタン類: №51の果実は残存長16.7cm、幅9.9cm、厚さ4.6cm(国版番号20)、圧密を受けつぶれているが頂部が細まる球体を呈し、頂部先端を欠損する。基部は共伴する破片(国版番号22)と接合し、花落ち痕は径5.50mm、ほぼ完全な形状を留め、多量の内果皮片や形状が似る種子(国版番号25, 26)を共伴することから、同一果に由来する可能性が高い。№57の花落ち痕は径12.40mmで№51よりも大きい。№49の果実は頂部が細長い形状を呈す(国版番号21)。これらの果実本体の形状は不明であるが、№51とは別系統の可能性がある。種子の計測値は、№32(n=75)が長さ10.5～13.7(平均11.9±標準偏差0.6)mm、幅5.3～6.3(平均5.8±0.2)mm、厚さ1.1～2.5(平均1.8±0.3)mm、№50(n=100)が長さ10.6～12.6(平均11.5±0.4)mm、幅4.7～5.7(平均5.1±0.2)mm、厚さ2.0～2.8(平均2.4±0.1)mm、№51(n=100)が長さ12.1～15.0(平均13.8±0.5)mm、幅4.9～6.1(平均5.6±0.2)mm、厚さ2.2～3.6(平均2.8±0.3)mmであり、出土位置による種子サイズ群の違いが認められた。№50や№51の種子は縫線が明瞭であるのに対し、№32は不明瞭な種子が多いことから未熟果に由来する可能性がある。

・平成30年度

被子植物14分類群(オニグルミ、イチイガシ、ツブライジイ、クスノキ、モモ、ムクロジ、エゴノキ、イネ、キビ、コムギ、ホタルイ属、カナムグラ、ヒヨウタン類、マクワ・シロウリ型)148個が同定され、イチイガシ、ツブライジイ子葉、一部のモモ、イネ、キビ、コムギに炭化が認められた。栽培種は、果樹のモモ、穀類のイネ、キビ、コムギ、果菜類のマクワ・シロウリ型、ヒヨウタン類の計56個が確認された。モモが最も多く、頂部が尖る核や丸い核がみられる。栽培種を除いた分類群は、木本は全て広葉樹で、常緑高木のイチイガシ、ツブライジイ、クスノキ、落葉高木のオニグルミ、クリ、ムクロジ、落葉小高木のエゴノキの、計25個が確認された。草本は、抽水植物のホタルイ属の果実、中生植物のカナムグラの核の、計67個が確認された。

・イネ: 脳乳(炭化米)の粒大・粒形(佐藤, 1988)は、№2が小型(13.67)・短粒(1.92)(国版番号11)と小型(14.64)・短粒(1.56)、№4が極小型(10.97)・短粒(1.59)(国版番号12)と極小型(10.15)・短粒(1.56)と小型(12.96)・短粒(1.48)であった。

(3) 考察

栽培種は、スモモ、モモ、イネ、キビ、コムギ、マクワ・シロウリ型、ヒヨウタン類が確認され、平成29年度試料では全体の96%を占める組成を示した。本遺跡に比較的近い下限C遺跡や久保園遺跡でも、栽培種の種実が弥生時代～古代の遺構から多く出土しておらず(鈴木, 2004; 佐藤ほか, 2005; 新山, 2005; 新山・植田, 2006; バリノ・サーヴェイ株式会社, 2012)、周辺域での普遍的な利用が示唆される。また、モモの一部、イネ、キビ、コムギは炭化していることから、火を受けたとみなされる。今回最も多く確認されたヒヨウタン類は、各層位・遺構から異なる複数形状の果実や種子が出土した。特に、10区(SX546・547上)からは、ほぼ完全な形状を留めた果実と多量の内果皮片、形状が類似する種子が共伴する状況が確認されたことから、同一果に由来する可能性が高い。出土種子の一部の大きさを検討した結果、10区(SX546・547上)出土種子群が最も大きく、9区(SX546)出土種子群や1面下層31区(SX547)出土種子群とは区別される傾向が認められた。これらの要因として、果実の大きさや系統等に由来する可能性が挙げられる。特に、10区(SX546・547上)は果実の形状と種子の計測値が対応している可能性がある。ヒヨウタン類に次いで多産したイネは、短粒極小～小型で、SX678よりふ毛が残る穂果や小枝梗の配列が揃う塊状炭化物が確認された。果実序(福地)の状態で火を受けたとみなされ、炭化後の保存状態が極めて良好な条件下で埋積したと示唆される。SK121出土胚乳は糊が残ることから、脱稃(だつぶ; 粗穀を取り去る)前の段階で火を受けたと推測される。本遺跡では、土坑から多量の炭化米が出土しており、第10・12・13次調査の炭化米の粒の大きさおよび形の変異から、本遺跡出土のイネが本州の他の遺跡と同様に大きなばらつきを示し、遺伝的な多様性が保たれていたことが指摘されている(佐藤・柴内, 2003)。イネに次いで多産したモモは、弥生時代～古代の各遺構・層位より出土し、平成29年度試料では、弥生時代～

古墳時代前期のSX678出土核が最大で、平成30年度試料では、2面上層のNo.25の炭化核が最も小さく、8世紀代水田上のNo.12の核が最大で頂部が尖るなど、複数の系統の利用が示唆される。今回の試料は、時代が新しくなると核が大型化する傾向を顕著に捉えることはできなかったが、頂部が丸い形状や尖る形状、同一試料内で類似する形状が確認され、複数の系統の利用や試料別差異が示唆される。

栽培種を除いた分類群は、針葉樹で常緑高木のマツ属複維管束亜属、常緑小高木～低木のイヌガヤ、広葉樹で常緑高木のイチイガシ、アカガシ亜属（イチイガシ・アラカシ以外）、ツブラジイ、クスノキ、常緑または落葉高木のコナラ属、落葉高木のオニグルミ、クリ、ムクロジ、落葉小高木のハクウンボク、エゴノキ、草本で抽水植物のホタルイ属、中生植物のカナムグラが確認された。当時の本遺跡周辺域の照葉樹林や旧御笠川の河畔などに生育していたと考えられる。利用の可能性は、オニグルミ、イチイガシ、アカガシ亜属、コナラ属、ツブラジイが挙げられる。これらの堅果類は、食用可能で収量も多いため、遺跡出土例も多い（渡辺、1975；岡本、1979など）。イチイガシ、アカガシ亜属、コナラ属、ツブラジイの子葉は炭化していることから、火を受けたとみなされる。

3. 昆虫（第11表、図版45）

（1）分析方法

平成29年度に分析を行った。同定は、試料番号1～9において、複数片存在するものは枝番を振り（1-1, 1-2, …, 3）を上層に種類を同定した。土壤がついた試料はできるだけ水洗したが、1, 2の2点に関しては、おそらく同一個体であるため、水洗していない。ただし、1においては、形態的特徴をみるために3片を土壤から剥がし、それぞれ瓶に保存する。これらの試料を双眼実鏡微鏡やルーペを用いて同定を実施する。同定にあたっては、松本浩一氏（東京農業大学）の協力を得た。試料の出土層位は、すべて古墳時代前期を堆積時期の下限とする。

（2）結果

試料番号1は種を同定するのに必要な部位が発見できなかったが、大きさ、色彩、表面構造などからガネムシ科のカナブンと同定する。試料番号2は大型のコガネムシ科の一種の腹側である。特徴の最も表れる背面が不明なので同定できないが、大きさなどからカナブンやシロテンハムガムグリの可能性がある。試料番号3は後脚基部の太さから、大型のコガネムシ上科の一一種と思われる。雄ではクワタムシ類とカブトムシが考えられるが、同定可能な部位がないため、上科までの判断にとどめる。試料番号4は腹側腹板の幅から大型のコガネムシ上科の一一種と考えられる。また、上翅の一部には表面に浅い条溝と点刻が認められ、ヒタクワタガ類の特徴に近い。しかし、上翅中央部と思われる部位からは、条溝と点刻列間にランダムな点刻が認められ、これらの特徴に相違する。これらの形質のみでは種や属を特定することは困難であるため、上科までの判断にとどめる。試料番号5は特徴的な表面構造とカバウム残存した色彩、および部分的に表皮の色彩が欠損する特徴から、カメムシ目のアカスジキンカムシの胸部腹板の一部と同定する。試料番号6はオサムシ科の上理端部である。保存状態が不良で強烈に剥離しており、種の判定に必要な表面の点刻の状態などの観察が困難である。ただし、側脚部の状態、会合部の表面構造、色彩および背面から観察できた点刻からオサムシ科のオゴミムシとされる。試料番号7はコガネムシ科・スジガネ属の一種の上翅の一部で、すべて同一部位である。表面の点刻列の状態、会合部付近の金属光沢と点刻列の幅などからツヤコガネ属のサクラガネ・ツヤコガネ・ヒメガネのいずれかと考えられる。試料番号8はオサムシ科・ナガゴミムシ属のコホソナガゴミムシの左上翅で、上理構造の状態と会合部小条の長さ、基部孔の状態および羽端前屈曲の形状から判断した。試料番号9は体表の構造と金属光沢から大型のカメムシ類の一一種と考えられる。ただし、体側の縁など部位を判定するのに必要な部分を欠き、構造の位置決定が不可能である。小盾板の一部と判定された部位は、その大きさと縁部の形状から判断したが、異なる部位の可能性もある。

（3）考察

種類が判明した昆虫の生態性をみると、カナブンは、本州以南に広く分布し、日本産のカナブン類では最も普通である。成虫はクヌギ・コナラなどの樹液や熟果に集まりこれを摂食する。幼虫は腐植質を摂食し、クズの群落などの腐植の堆積下などでみられる。アカスジキンカムシは、本州以南から台湾まで広く分布する大型のカメムシで、平地から低山地に比較的普通である。幼虫・成虫共にスギ・キブシ・ヤシャブシなどの種子を針状の口器で吸汁する。スジガネ属は、いずれも日本本土に広く分布し、平地の森林から開墾地・畠地などに普通にみられる。いずれも幼虫は植物の根茎を食害し、成虫は植物の葉・花を摂食する。特に耕作地周辺では時に多

第11表 出土昆虫一覽

遺構・部位	試料番号	種類（分類群）	部位
SX545 16区	1-1～3	カナブン	腹部腹板、腹部側板、腹部側面
	2-1～3	コガネムシ科の一種	上理端部、後脚側面、後脚腹板
	2-7	カブトムシ上科の一種	後脚基部、後毛部、後脚腹板の一部
	4-1	カブトムシ上科の一種	上脚先端部、上理り、頭、腹部腹板
第1面下層 31区 (DSM47 上)	5	アカスジキンカムシ	腹部腹板の一部
	6	オサムシ科ガミムシ	上理
	9-1・2	カメムシ類の一種	不明、小盾板？
第2面下層 黒色粘土層 37区	6	アカゴミムシ	上理先端部
第3面 中央北区	7	スジガネ属の一種	上翅の一部

量に発生する。アオゴミムシ類は、主に温暖地の平地の湿地・河川敷・田圃など水湿の地に生息し、地表を徘徊して小型の節足動物や植物の種子を摂食する。コホソナガゴミムシは、北海道から九州の平地部に生息する。湿地・河川敷・池沼などの水辺のアシ原に生息し、地表を徘徊して、小型の節足動物を捕食する。

種まで同定できなかった種類もふくめると、いずれも西日本に普通にみられる種類で、特に人里近くの里山などの明るい林地や、湿地、耕作地などにみられる種類であることから、当時の周辺環境を反映しているといえる。

4. 骨貝類（第12表、図版45）

（1）分析方法

平成29・30年度に分析を行った。以下、分析方法は共通する。土塊状の試料は、乾いた筆・竹串等を用いて可能な限り土壤分を除去する。ただし、土壤を除去すると崩壊が著しく、形態を留めないと判断された試料はそのままの状態とする。試料を肉眼および実体顕微鏡で観察し、形態的特徴から種・部位を同定する。また、必要に応じてデジタルノギスを用いて計測する。

（2）結果

＜平成29年度＞

No.27は、イノシシ属の左下顎第3後臼歯と下顎後臼歯の破片がみられる。また、土塊状の試料は、歯牙の検出状況からイノシシ属の下顎骨の可能性がある。なお、左下顎第3後臼歯は、未出歯牙の可能性がある。歯冠長37.76mm、歯冠幅15.52mmを計る。No.28は、イノシシ属の右上顎第3後臼歯がみられる。また、土塊状の試料は、歯牙の検出状況からイノシシ属の上顎骨の可能性がある。右上顎第3後臼歯は、未出歯牙の可能性がある。歯冠長34.44mm、歯冠幅19.37mmを測る。

＜平成30年度＞

No.13 SK398 土（古墳時代前期） ナマズ属および不明硬骨魚鱗はいずれも体長20cm以下の小形個体である。

（3）考察

＜平成29年度＞

SX718では、イシガイ目の殻皮と思われる破片がみられた。殻本体が分解、消失し、殻皮の一部分のみが残存している可能性がある。イシガイ目は淡水生の二枚貝であり、河川や沼沢地などに棲息する。付近の河川などで採取された可能性がある。2面上層でみられた骨（No.23）は、土塊状であるが、残存する形状からみて鳥類の上腕骨の可能性がある。

ニホンジカについては、角の破片、下顎骨の一部と歯牙片が検出される程度にとどまる。保存状態も悪く、小さな破片であるため詳細不明である。イノシシ属は、いずれも部分的な検出であり、イノシシとブタの区別はできない。これらのイノシシ属では、比較的小型のものが多いことをふまえ、さらに上顎・下顎の第3後臼歯が未出歯牙であるならば、幼獣などの利用も想定される。本遺跡では、第10・12・13次発掘調査においても、弥生時代前期後半を中心で動物遺体が多く出土しており、破片数の約3割をイノシシ類が占め、次いでシカが多い組成が得られている。また、イノシシ類は、野生のイノシシよりも家畜のブタが多かった可能性が高いことが指摘されている（西本ほか、2003）。

＜平成30年度＞魚類はサメ類、ニシン科？、ヘダイ？の海水域に生育するものと、コイ科、ナマズ属の淡水域に生育するものが同定された。サメ類は外洋に分布し、ニシン科、ヘダイは内海から沖合に分布する。なお、ニシン科、ヘダイは現代では定置網などで漁獲される。コイ科は河川の上流から下流域に生育し、ナマズ属は流れの緩やかな河川などに生育し、水草の繁茂する泥底城などにみられる。哺乳類はイノシシ、ニホンジカ？、イノシシまたはニホンジカが同定された。なお、SP1434およびSX1410の試料にはイヌによると考えられる噛み痕が確認されている。イノシシやニホンジカは資源の豊かな山野に生育する動物である。魚類および哺乳類はいずれも食用となる種類である。またSP307、SP1308、SK398、SC614の魚骨などでは被熱している骨片がほとんどで、食用とした後に炉や竈などの火中に投じたものが、二次的に廃棄された可能性がある。

5. 岩石（第13表、図版46・47）

（1）分析方法

平成30年度、令和元年度に岩石薄片作成鑑定を行った。薄片観察は、試料を0.03mmの厚さに研磨して薄片にし、顕微鏡下で観察すると、構成する鉱物の大部分は透光性となり、鉱物の性質・組織などが観察できるようになるということを利用している。薄片を作成するために試料をダイヤモンドカッターにより15×30×15mm程度の直方体（これより小さい試料は適宜の大きさ）に切断して薄片用のチップとする。そのチップをプレバートに貼り付け、#180～#800の研磨剤を用いて研磨機上で厚さ0.1mm以下まで研磨する。さらにメノウ板上で#2500の研磨剤を用いて正確に0.03mmの厚さに調整する。プレバート上で薄くなった薄膜状の試料の上にカバーガラスを貼り付け観察用の薄片とする。薄片は偏光顕微鏡下において観察する。

第12表 出土骨貝類一覧

平成29年度分析

No.	遺跡・層位	種類	部位	部分	左右	数量	備考	時期
17	SX111-112下	ニホンジカ	角	破片	-	6+		
18	SX667下層 34K	魚類	椎體	破片	-	1+	被熱	
22	第2面上層 64K(R1)	ニホンジカ	下顎骨	適合部破片	左	1		
			奥牙	破片	-	27		
			不明?	破片	-	112, 12g	土塊状含	古墳時代前期
23	第2面上層 49K	鳥類?	上顎骨?	破片	-	1	土塊状	
27	第2面下 R96	イノシシ属	下顎骨	破片	-	1+	土塊状	
			下顎第3後臼歯	断続	左	1	未出重#?, 衛冠長37.76, 衛冠幅15.52	
29	第2面上層 76K(R1)	帆鱗	不明	破片	-	2		
19	SX76 上層 40区	イノシシ属	下顎骨	適合部破片	1	被熱		
20	SX718 41K	イシガサ目?	鰓皮?	破片	-	1+	土塊状	弥生～古墳前期
21	SX718 41K	イシガサ目?	鰓皮?	破片	-	1+	土塊状	
16	SP464	帆鱗	四肢骨	破片	-	2.51g		
			四肢骨	破片	-	161.94g	土塊状	
10	SK123	帆鱗	四肢骨	破片	-	1	被熱/一部	
			不明	破片	-	1		
11	SK215 21北・中央	帆鱗	四肢骨	破片	-	4		
			不明	破片	-	8.21g		
12	SK215 41K(南東)	帆鱗	頭蓋骨	破片	-	1		
24	SK1339	イノシシ属	下顎第2後臼?	破片	-	1		
13	SK225 31G(南東側)	帆鱗	第2/3茎節骨	近位端	-	1		弥生時代
14	SK1362	帆鱗	不明	破片	-	1	被熱	
			不明	破片	-	114.99g	土塊状	
15	SP257	帆鱗	四肢骨	破片	-	6		
			不明	破片	-	1	土塊状	
25	第3面 49K(R1)	イノシシ属?	頭骨	破片	左	1+		
26	第3面 49K(骨合)	帆鱗	不明	破片	-	85.05g	土塊状含	
28	SX1410 (3面50区)	イノシシ属?	上顎第3後臼歯	断続	右	1	未出重#?, 衛冠長34.44, 衛冠幅19.37	
30	SX1410 (3面50区) 骨4	帆鱗	不明?	破片	-	2+		
			不明	破片	-	45.9g	土塊状含	

平成30年度分析

No.	遺跡・層位	結果(学名/和名)	部位	部分	左右	点数	備考	時期
		Stilurus ナガズ属	胸椎棘	-	左	1	被熱(白色)	
		Stilurus ナガズ属	胸椎棘	-	右	1	被熱(白色)	
		Stilurus ナガズ属	胸骨	-	左	2	被熱(白色～青灰色)	
		Stilurus ナガズ属	基底頭骨	-	-	1	被熱(白色)	
13	SK309 土	Caprinidae? コシカラ?	脊骨	椎板	-	1	被熱(白色)	
		Caprinidae? コシカラ?	椎骨	椎板	-	2	イノシシ類, 被熱(白色)	
		Caprinidae? コシカラ?	尾椎	尾椎	-	2	イノシシ類, 被熱(白色)	
		Osteichthys 硬骨魚類	椎骨	椎板	-	1	被熱(白色)	
		Osteichthys 硬骨魚類	椎骨	尾椎	-	1	被熱(白色)	
		Osteichthys 硬骨魚類	椎骨	尾椎	-	1	被熱(白色)	
		Osteichthys 硬骨魚類	椎骨	尾椎	-	1	被熱(白色)	
		Unknown 不明	不明	-	-	31	被熱(白色)	
14	SD614 売土	Selachii サメ類	椎	-	-	1	被熱(白色)	
		Osteichthys 硬骨魚類	肋骨	-	-	1	被熱(白色)	
		Unknown 不明	不明	-	-	8	被熱(白色)	
17	第2下面下層 9K SX546 上)	Sus scrofa イノシシ	下顎骨	衛導稜	右	1	被熱(白色)	
18	第2下面下層 10K SX546 上)	Cervus nippon? ニホンジカ カリ	前角?	破片	-	1	破片II, 鉛鉛に覆われる	弥生～古墳前期
16	SD604 南	Sus scrofa イノシシ	上顎骨	W3	左	1		
		Clapidae? ハシケ科?	椎骨	-	-	2	イノシシ類, 被熱(白色)	
		Osteichthys 硬骨魚類	椎骨	-	-	1	被熱(白色)	
9	SF367 土	Unknown 不明	椎	-	-	1	被熱(白色)	
		Unknown 不明	不明	-	-	34	被熱(白色) 30点	
10	SP1240	Unknown 不明	不明	-	-	1		
12	SP1435	Mammalia 哺乳類	大顎骨	骨頭	-	1	噛み痕	弥生時代
11	SP1308	Sporites surinum? ヘダイワ	遊離歯	-	-	1	被熱(白色～青灰色)	
		Sus scrofa / イノシシ/ Cervus nippon ニホンジカ	尺骨	左	-	1		
15	(3面50区)	Mammalia 哺乳類	不明	-	-	19	噛み痕1	

(2) 結果

偏光顕微鏡下における観察から構成物および組織の特徴を明らかにした。構成物の量比は、観察面全体に対して多量(>50%)、中量(20～50%)、少量(5～20%)、微量(<5%)およびさわめて微量(<1%)という基準で目視により判定し、第13表に示した。顕微鏡観察に際しては下方ポーラーおよび直交ポーラー下において代表的な箇所を撮影し、写真図版に示した。観察結果の詳細は紙数の関係上割愛する(詳細を記した分析報告書は埋蔵文化財センター収藏予定)。

第13表 岩石薄片観察表

構成物量比率
◎多量 (> 50%) ○中量 (20 ~ 50%) △少量 (5 ~ 20%) +微量 (< 5%) 土きわめて微量 (< 1%)
No. 1 ~ 15: 年成30年度分析。No. 16 ~ 25: 合成年度分析

1. 火山岩類薄片観察結果

No.	造構・層位・位置	岩石名	斑晶鉱物		石英		重質鉱物		その他の 孔隙
			斜長石	單斜輝石	カリ長石	カリ長石	不透明鉱物	重質鉱物	
3	SD604 北	玄武岩	△	○	+	+	±	+	+
17	SS066	かんらん石单斜輝石玄武岩	+	+	○	+	△	+	+
15	SD604	单斜輝石かんらん石玄武岩	+	○	+	○	△	+	+
14	SD745	单斜輝石かんらん石玄武岩	+	△	○	+	○	△	+
15	SP1239	かんらん石含有单斜輝石安山岩	+	○	+	○	△	△	+

2. 堆積岩類・火山岩類薄片観察結果

No.	造構・層位・位置	岩石名	軽物片						基質	岩片	その他の 孔隙		
			石英	斜長石	黑雲母	白雲母	綠泥石	ジルコイ			多結晶石英	水酸化物	六方柱状結晶
1	SD602	細粒砂岩	○	±	△	±	+	+	△	±	+	+	+
2	SS013	細粒砂岩	○	±	+	+	±	+	+	○	△	△	+
6	SD604 南	砂質泥岩	△	△	△	△	+	○	○	○	○	○	○
10	第2面下層 (主張切り)	凝灰質シルト岩	△	+	○	○	+	○	△	+	○	○	○
11	SS078 29・36 区	凝灰岩	△	+	△	○	+	○	+	○	+	○	○
16	第1面下層 T1 区	泥岩	±	+	○	○	△	○	○	○	±	±	+
20	北ペル・中央・東 2層	凝灰岩	△	+	±	○	±	+	○	○	○	○	○
21	第2面下層 (北溝切り)	凝灰岩	+	+	○	+	△	○	△	+	○	○	○
22	SS078 28 区	泥岩	±	±	△	○	+	○	○	○	+	○	○

3. 变成岩類薄片観察結果

No.	造構・層位・位置	岩石名	構成鉱物						軽物片	岩片	その他の 孔隙		
			石英	斜長石	黑雲母	白雲母	綠泥石	角閃石			石英	斜長石	花崗岩
4	SD604 北	黒雲母董青石ホルンフェルス	△	○	○	○	○	○	○	○	○	+	+
5	SD604 南	黒雲母董青石ホルンフェルス	△	○	○	○	○	○	○	○	○	+	+
7	SD604	ホルンフェルス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
8	SD604 南	緑巖石アクリナイト石ホルンフェルス	○	△	○	○	△	○	△	+	○	○	○
9	SD604 南	緑巖石アクリナイト石ホルンフェルス	○	△	○	○	△	○	△	+	○	○	○
17	SS076 上層 40 区	黒雲母董青石ホルンフェルス	+	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
18	第2面下層 11 区	白雲母黑雲母董青石ホルンフェルス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
19	第2面下層 19 区	緑巖石閃長岩	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
23	SSX17	角閃岩	△	○	○	○	○	○	△	+	±	±	+
24	SS076 F層	パンペリーノ白雲母緑泥石粘板岩	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
25	SS076 下層 34 区	角閃岩	△	○	+	○	○	○	○	○	○	○	○

<平成30年度分析>

- 1) 砕屑状組織 (clastic texture) を示す細粒砂岩
- 2) 砕屑状組織を示す細粒砂岩
- 3) 流理状組織を示す玄武岩
- 4) グラノプラズティック組織を示す黒雲母董青石ホルンフェルス
- 5) グラノプラズティック組織を示す黒雲母董青石ホルンフェルス
- 6) 砕屑状組織を示す砂質泥岩
- 7) ネマトプラズティック組織 (nematoblastic texture) を示すホルンフェルス
- 8) レビドプラズティック組織を示す緑巖石アクリナイト石閃長岩
- 9) 交代状組織 (replacement texture) を示す緑泥石アクリナイト石閃長岩
- 10) 砕屑状組織を示す凝灰岩
- 11) 砕屑状組織を示す凝灰岩
- 12) 流理状組織を示すかんらん石單斜輝石安山岩
- 13) インターグラニュラー組織を示す單斜輝石かんらん石玄武岩

14) 流理状組織を示す單斜輝石かんらん石玄武岩

15) 流理状組織を示す單斜輝石かんらん石玄武岩

<合と元年度分析>

- 1) 砕屑状組織を示す玄武岩
- 2) デカッセイト組織を示す黒雲母董青石ホルンフェルス (泥岩を原岩とする)
- 3) グラノプラズティック組織を示す白雲母黒雲母董青石ホルンフェルス (泥質砂岩を原岩とする)
- 4) 交代状組織を示す緑巖石閃長岩
- 5) 破碎状組織を示す凝灰岩 (珪長質軽物による火山ガラスの置換)
- 6) 破碎状組織を示す凝灰岩 (珪長質軽物による火山ガラスの置換)
- 7) 砕屑状組織を示す凝灰岩
- 8) ネマトプラズティック組織を示す角閃岩
- 9) 片状組織 (schistose texture) を示すパンペリーノ白雲母緑泥石粘板岩
- 10) ネマトプラズティック組織を示す角閃岩

(3) 考察

遺跡周辺には、御笠川および西側の那珂川が流下しており、これら河川の形成により生じた砂礫や河床礫が、石材として利用されたものと想定される。遺跡周辺の地質は、唐木田ほか(1994)にしたがい以下に概観する。

堆積岩類である砂岩・砂質泥岩・凝灰質シルト岩、火山碎屑岩岩類である凝灰岩は、堅硬緻密質の岩相を示し、始新世の槽谷層群や中新世前期の志免層群残島層に由来する石材である。ホルンフェルス類は、遺跡周辺では分布が知られていないため、移入されたと考えられる。このうち、黒雲母董青石ホルンフェルスやホルンフェルスは、対馬南部に分布が知られているため、産地との比較を検討する必要がある。緑簾石アクリノ閃石緑泥片岩、緑泥石アクリノ閃石ホルンフェルス、緑簾石綠泥石緑色岩、角閃岩は、三郡変成帯の塩基性変成岩類に、バンベリー石白雲母緑泥石粘板岩は三郡変成帯の泥質変成岩類にそれぞれ由来すると考えられる。火山岩類である玄武岩類は、本遺跡周辺に確認されず、持ち込まれた石材の可能性がある。これらは、かんらん石や単斜輝石を斑晶としており、流理状組織を示す特徴をもつ。博多湾西部の能古島のほか、瑞梅寺川河口付近に小規模な分布が知られている。

6. 炭素14年代測定 (第14表)

(1) 分析方法

令和元年度に分析を行った。試料は超音波処理、酸-アルカリ-酸処理で前処理・調整を行い、AMS法で測定した。測定は、試料の前処理・調整後、加速器質量分析計(コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH)を用いて行った。

(2) 結果

加速器質量分析法(AMS: Accelerator Mass Spectrometry)によって得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素(¹⁴C)年代および曆年代(較正年代)を算出した。表14にこれらの結果を示す。曆年較正結果(較正曲線)は紙数の関係上割愛する(詳細を記した分析報告書は埋蔵文化財センター収藏予定)。

第14表 炭素14年代測定結果

測定No.	層位	種類	固 気 13 C	曆年較正用年代 (年 BP)	14 C年代 (年 BP)	曆年代(西暦)
(FD-)	岩種	番号	(%)			
39240	1面下層 陶器	サカキ 83	-29.99 ± 0.28	1596 ± 20	1555 ± 20 431-492 cal AD (57.1%) 530-543 cal AD (11.1%)	426-552 cal AD (95.4%)
39229	第2面下層 陶器	庄楽窯 84	-29.59 ± 0.40	1567 ± 24	1565 ± 25 430-493 cal AD (55.6%) 511-518 cal AD (5.4%) 529-537 cal AD (7.3%)	422-548 cal AD (95.4%)
39227	39021 磨 瓦	アカガシ葉 61	-26.86 ± 0.32	1624 ± 22	1625 ± 20 394-429 cal AD (57.8%) 496-507 cal AD (8.6%) 523-529 cal AD (1.8%)	283-374 cal AD (66.9%) 485-535 cal AD (26.7%)
39225	SP1996 柱 瓦	アカガシ葉 132	-26.15 ± 0.28	1729 ± 22	1730 ± 20 317-345 cal AD (25.6%)	250-382 cal AD (95.4%)
39237	SH545 鋼鉄 製品	タケ垂葉 498	-29.84 ± 0.24	1752 ± 20	1750 ± 20 259-261 cal AD (12.5%) 278-327 cal AD (55.7%)	234-345 cal AD (95.4%)
39232	SH434 万葉書22	スギ 969	-25.86 ± 0.23	1797 ± 19	1795 ± 20 145-150 cal AD (2.4%) 170-194 cal AD (14.1%) 211-253 cal AD (46.4%) 304-313 cal AD (5.2%)	135-258 cal AD (84.9%) 296-321 cal AD (10.5%)
39238	SP1293 磚版 K311	シイ葉 4	-28.72 ± 0.28	1785 ± 22	1785 ± 20 218-256 cal AD (40.4%) 284-322 cal AD (37.8%)	138-263 cal AD (62.4%) 275-330 cal AD (33.0%)
38228	SH376 柳吹木製品	スギ 892	-24.61 ± 0.24	1798 ± 20	1800 ± 20 145-151 cal AD (3.2%) 170-194 cal AD (15.6%) 210-252 cal AD (46.9%) 305-311 cal AD (3.3%)	134-258 cal AD (85.3%) 296-321 cal AD (10.1%)
39231	SH434 方形容器	スギ 470	-22.19 ± 0.29	1818 ± 22	1820 ± 20 167-196 cal AD (36.7%) 209-236 cal AD (27.1%)	130-247 cal AD (95.4%)
39233	土器群 方形容器	チシャノキ 534	-29.25 ± 0.30	1820 ± 21	1820 ± 20 149-159 cal AD (16.9%) 166-196 cal AD (27.4%) 258-274 cal AD (24.9%)	130-244 cal AD (95.4%)
39226	SP178 柱 菅束葉葉	マツ葉根群 138	-26.88 ± 0.25	1822 ± 20	1820 ± 20 167-196 cal AD (28.7%) 209-231 cal AD (22.4%) 289-301 cal AD (9.3%)	131-241 cal AD (95.4%)
39230	SH546 + 547 上 家庭	スギ 105	-24.71 ± 0.25	1862 ± 21	1860 ± 20 123-175 cal AD (43.2%) 192-212 cal AD (15.9%)	83-221 cal AD (95.4%)
39234	SH435 仮代 木製品	ヒサカキ葉 535	-29.71 ± 0.33	1851 ± 22	1850 ± 20 128-180 cal AD (44.6%) 166-214 cal AD (23.6%)	86-119 cal AD (7.5%) 117-233 cal AD (87.9%)
39235	SH345 錫器 庄楽窯	169 瓦	-28.38 ± 0.28	1868 ± 20	1870 ± 20 185-196 cal AD (7.8%) 195-209 cal AD (9.2%)	80-217 cal AD (95.4%)
39236	SH3678 瓦 千葉	アカガシ葉 943	-28.10 ± 0.26	2430 ± 21	2430 ± 20 538-546 cal BC (68.2%)	738-868 cal BC (16.2%) 664-647 cal BC (4.2%) 549-407 cal BC (75.0%)
39239	SP1421 柱 K312	イスノキ 2	-28.87 ± 0.25	2464 ± 22	2465 ± 20 750-883 cal BC (30.2%) 668-638 cal BC (12.9%) 599-517 cal BC (25.1%)	763-977 cal BC (90.3%) 463-456 cal BC (0.6%) 445-431 cal BC (1.4%)

1) δ (デルタ)¹⁴C/測定値

試料の測定¹⁴C/¹²C比を補正するための炭素安定同位体比 (¹³C/¹²C)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の¹³C値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正している。

2) 放射性炭素 (¹⁴C) 年代測定値

試料の¹⁴C/¹²C比から、現在 (AD1950年基点) から何年前かを計算した値。¹⁴Cの半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いている。統計誤差 (±) は $\pm\sigma$ (シグマ) (68.2%確率) である。¹⁴C年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、曆年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない曆年較正年代値も併記した。

3) 曆年代 (Calendar Year)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中¹⁴C濃度の変動および¹⁴Cの半減期の違いを較正することで、放射性炭素 (¹⁴C) 年代をより実際の年代値に近づけることができる。曆年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な¹⁴C測定値およびサンゴのU/Th (ウラン/トリウム) 年代と¹⁴C年代との比較により作成された較正曲線を使用した。

¹⁴C年代の曆年較正には0xCal4.3 (較正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、曆年代 (較正年代) は、¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した曆年代の幅を表し、0xCalの確率法により $\pm 1\sigma$ (68.2%確率) と $\pm 2\sigma$ (95.4%確率) で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の $\pm 1\sigma$ 、 $\pm 2\sigma$ 値が表記される場合もある。カッコ内%表示は、その範囲内に曆年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上ののれんは¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

引用文献

【本製品樹種同定】

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所。
- 伊東隆夫, 1995・1996・1997・1998・1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I・II・III・IV・V. 木材研究・資料, 31・32・33・34・35, 京都大学木質科学研究所, 81-181, 66-176, 83-201, 30-166, 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久 (編), 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース, 海青社, 449p.
- 新山雅宏, 2005, 第6次調査出土の大型植物化石, 下月隈C遺跡, 福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第839集, 福岡市教育委員会, 211-217.
- 新山雅宏・植田弥生, 2006, 第7次調査出土の大型植物化石, 下月隈C遺跡VI・福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第881集, 福岡市教育委員会, 242-256.
- 能城修一・佐々木由香・鈴木三男・村上由美子, 2012, 弥生時代から古墳時代の関東地方におけるイチガシの木材資源利用, 植生史研究, 21, 29-40.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz L. and Gasson P.E. (編), 2006, 著名樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐野雅三・安部久・内海泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz L. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 国説木材組織, 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
- ### 【種実同定】
- 藤下典之, 1984, 出土遺体よりみたアリ科植物の種類と変遷とその利用法, 古文化財の自然科学的研究, 古文化財編集委員会編, 同朋舎, 638-654.
- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑, 石川茂雄図鑑刊

行委員会, 328p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2010, 日本植物種子図鑑 (2010年改訂版), 東北大出版社, 678p.

岡本素治, 1979, 遺跡から出土するイチガシ, 大阪市立自然史博物館誌, 第230号, 31-39.

佐藤敏也, 1988, 弥生のイネ・弥生文化の研究2・生業, 金闇惣・佐原 真編, 雄山閣, 97-111.

鈴木庸夫・高橋冬・安延尚文, 2012, ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実, 誠文堂新光社, 272p.

渡辺誠, 1975, 繩文時代の植物食, 雄山閣出版, 187p.

【岩石薄片作製鑑定】

唐木田芳文・富田幸臣・下山正一・千々和一豊, 1994, 5万分の1地質断面「福岡」, 地質調査所, 192p.

【炭素14年代測定】

Bruce Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」, 日本国第四紀学会, p. 3-20.

中村俊夫 (2003) 放射性炭素年代測定法と曆年代較正. 環境考古学マニュアル, 同成社, p. 301-322.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M. and van der Plicht, J. (2013) IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

第2節 イネ、イネ圧痕

上條信彦・清水小春（弘前大学人文社会科学部）

1. 出土イネ形状分析試料と分析方法

福岡市教育委員会より提供されたSK1334（板付II式新相）・1339（板付II式新相、城ノ越式）、SP308（前期か）の3遺構検出の出土イネ各100粒計300粒について形状分析を実施した。試料は採取された種子の入った土壤をフルイによって選別されたものである。方法は、イネ種子1粒ごと200mmのマクロレンズ（Ai AF Micro-Nikkor 200mm f/4D IF-ED、（株）ニコン）を装着したカメラ（FinePix S1 Pro、フジフィルム（株））で撮影した。種子の長さと幅をImage J 1.47（National Institute of Mental Health, USA）を用いて計測した。用語や基準は小泉・上條ほか2020による。

2. 形状分析の結果（第15表）

観察の結果、300粒全てがイネであった。すべて胚乳（玄米）の状態である。

SK1334：種子長は平均 4.16 ± 0.32 mm、種子幅は平均 2.52 ± 0.24 mmで、いずれも正規分布を示す。粒型をしめす長幅比は $1.30 \sim 2.17$ 、平均 1.66 ± 0.15 で中短粒が約5割を占める。粒大を示す長幅積は $4.99 \sim 13.71$ 、平均 10.50 ± 1.50 で小型が8割を占め、極小も一定量ある。

SK1339：種子長は平均 4.10 ± 0.29 mm、種子幅は平均 2.39 ± 0.30 mmで、いずれも正規分布を示す。粒型をしめす長幅比は $1.42 \sim 2.54$ 、平均 1.74 ± 0.20 で中短粒38%、短粒30%である。粒大を示す長幅積は $4.63 \sim 13.05$ 、平均 9.83 ± 1.67 で小型が約8割を占め、極小も一定量ある。

SP308：種子長は平均 4.01 ± 0.33 mm、種子幅は平均 2.44 ± 0.24 mmで、いずれも正規分布を示す。粒型をしめす長幅比は $1.31 \sim 2.20$ 、平均 1.66 ± 0.15 で中短粒が約5割を占める。粒大を示す長幅積は $6.25 \sim 13.41$ 、平均 9.82 ± 1.55 で小型が8割を占め、極小も一定量ある。

3. 遺構間の比較からみたイネの特徴

本分析の結果および、3つの遺構間では中短粒の小型が多く極小粒が一定量しめる点で共通する。特にSK1339とSP308はほぼ同じ傾向を示す。またSK1339とSP308では長粒で極小粒が一定量含まれる点は注意される。これは、弥生時代早期の傾向に類似し、早期から続く雀居遺跡でも前段階の形質が残存していたものと判断される。同じ雀居遺跡の既報告例（佐藤・柴内2003）では前期中葉から古墳前期まで粒型、粒大、ばらつきとともに時間的な変化の傾向はうかがえないが、SK1334はほぼこの範囲内に収まり、分析者による誤差ではなく一定の形質のイネが安定的に栽培されていたことが分かる。

第15表 イネ粒型・粒大の粒数分布

出土地点	粒型	粒大					計
		極小	小	中	大	極大	
SK1334	長粒	0	0	0	0	0	0
	中	0	0	0	0	0	0
	短	3	1	0	0	0	4
	短粒	0	12	0	0	0	12
	中	0	43	10	0	0	53
	短	1	21	5	0	0	27
SK1339	長	1	3	0	0	0	4
	中	0	0	0	0	0	0
	短	0	0	0	0	0	0
	短粒	2	19	0	0	0	21
	中	3	32	3	0	0	38
	短	1	23	6	0	0	30
SP308	長	0	0	0	0	0	0
	中	0	0	0	0	0	0
	短	0	0	0	0	0	0
	短粒	4	7	1	0	0	12
	中	6	36	5	0	0	47
	短	3	29	2	0	0	34
計	長	0	3	0	0	0	3
	中	0	0	0	0	0	0
	短	0	0	0	0	0	0
	短粒	14	77	9	0	0	100
	中	0	0	0	0	0	0
	大	0	0	0	0	0	0

出土地点	粒型	粒大					計
		極小	小	中	大	極大	
SK1339	長粒	0	0	0	0	0	0
	中	1	0	0	0	0	1
	短	7	3	0	0	0	10
	短粒	2	19	0	0	0	21
	中	3	32	3	0	0	38
	短	1	23	6	0	0	30
SP308	長	0	0	0	0	0	0
	中	0	0	0	0	0	0
	短	0	0	0	0	0	0
	短粒	4	7	1	0	0	12
	中	6	36	5	0	0	47
	短	3	29	2	0	0	34
計	長	0	3	0	0	0	3
	中	0	0	0	0	0	0
	短	0	0	0	0	0	0
	短粒	13	79	8	0	0	100
	中	0	0	0	0	0	0
	大	0	0	0	0	0	0

4. 3Dでみた稲圧痕のある粘土塊の観察

(1) 資料と方法

粘土塊は、SX676・34区(170612)の遺物包含層出土で、弥生前期～古墳前期土器を含む。実体顕微鏡観察したところ、稲穂とみられるイネ穎果集合の圧痕が確認できた。圧痕内面にはまだ炭化物が残っていたことから、非接触での観察を試みることにした。方法は①デジタルマイクロスコープ観察と②X線CT観察を実施した。①はデジタルマイクロスコープ(キーエンス社 VHX-2000)に高倍率ズームレンズ(VH-Z100R)を装着して総合倍率20～50倍で実施、画像合成した。②ではX線マイクロCTスキャナー(Bruker Corporation Skyscan1174)を使用した。撮影条件は、X線管電圧:50kV(本装置の最大値)、X線管電流:800 μA、解像度:29.3 μmである。断層像の再構成は、同装置付属のNReconを使用した。断層像の解析は、同装置付属のCTanを使用して、圧痕部分である空洞を三次元可視化した。なお、撮影には片岡太郎講師の協力を得た。

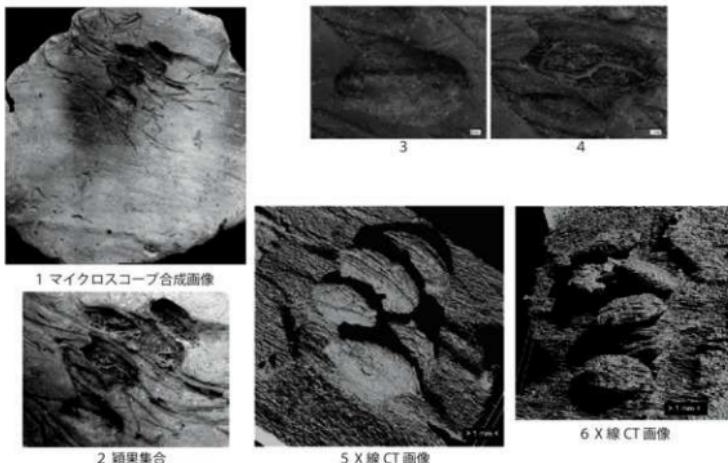
(2) 観察の結果(第212図)

写真1～4はデジタルマイクロスコープ画像を焦点合成したものである。1には板目とみられる筋が残り、その上にあった稲穂の一部が圧痕となったことが分かる。2～4は稲穂を拡大したものである。表皮は顆粒状突起で覆われ、長軸方向に維管束に伴う隆起部、内外顎が明瞭に認められる。少なくとも8粒あり形態が分かる3は長さ5.2 mm、幅3.06 mm、4は4.8 mm、幅2.27 mmの楕円形を呈する。

写真5・6はX線CT画像である。本機器の撮影条件下では、密度が高い粘土層のX線の吸収が大きくX線の透過が不十分であったことから、ノイズの多い断層像となつたが、穎果の形態が明瞭に分かる三次元像が得られた。X線管電圧の高い条件で撮影を行えば、より鮮明な圧痕の三次元像が得られる。本画像からは穎果に厚みがあり、基部には護穎が認められる。大きさ、形状、表皮の特徴から、イネ(*Oryza sativa L.*)の初と判断され、これらの向きが揃っていることから稲穂の状態であったことが分かる。

<参考文献>

小泉翔太・上條信彦・田中克典2020『日本の出土米V』弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター
佐藤洋一郎・柴内佐知子2003『福岡市雀居遺跡の炭化米分析』『雀居9』福岡市教育委員会、33-42頁



第212図 イネ圧痕のマイクロスコープ画像とX線CT画像

第3節 金属・ガラス・石製品、赤色顔料、被熱粘土塊

比佐陽一郎・松園菜徳（福岡市埋蔵文化財センター）

1. 調査方法と使用機器

雀居遺跡18次調査で出土した資料の内、金属やガラス、石製品といった無機物資料について保存科学的調査を行った。保存科学的調査とは、文化財（ここでは考古資料）を対象に、理化学機器を用いて行われる自然科学的調査を指す。これにより、肉眼観察では得られない、資料の材質や内部構造、製作や使用の痕跡といったミクロの情報などを得ることができる。調査対象とした資料は、青銅の鏃と鑿、ガラス製玉類、石製の装飾品や玉類、赤色顔料、被熱粘土塊（不明土製品）などである。

調査には、内部構造の確認として透過X線撮影装置、材質調査には蛍光X線分析装置、X線回折装置、表面細部の拡大観察には実体顕微鏡、デジタルマイクロスコープ、電子顕微鏡を用いた。装置と各仕様について記す。

透過X線撮影装置：YXLON社製MG226／検出器：大型フラットパネル（409,6×409,6 mm）

実体顕微鏡：LEICA社製MZ6／観察倍率：6～40倍

デジタルマイクロスコープ：HIROX社製KH-8700／観察倍率：20～160倍

電子顕微鏡：FEI（現Thermo Fisher Scientific）社製Quanta250FEG／観察倍率：50～2000倍程度

蛍光X線分析装置：AMETEK EDAX社製Orbis／対陰極：ロジウム(Rh)／検出器：シリコンドリフト検出器／印加電圧：20～50 kV・電流値：任意／測定範囲：真空／測定範囲0,3 mm φ／測定時間180秒

X線回折装置：Bruker-AXS社製D8-DISCOVER／対陰極：鋼(Cu)／検出器：リアルタイム二次元検出器／印加電圧：40 kV・電流値：40 μA／測定角度13～77°／測定範囲0,5 mm φ／測定時間900秒

2. 結果と考察

（1）金属製品（第200図、第8表、図版47・48）

鏃（1373）は身の部分に研磨の痕跡が見える。茎は面取りされ、断面は整った六角形を呈する。研磨の傷と、その上を覆うように傷に平行する凹凸が見られる。何か有機物を巻き付けた痕跡にも見えるが、本体の傷の凹凸が鏃に影響したものである可能性も否めない。表面の蛍光X線分析では、銅を主体として鉛、錫が含まれていることから、青銅製であることが分かる。

鑿（1374）は両側に刃が付く。それぞれ幅が異なっており、目的に応じて使い分けている可能性がある。材質分析では銅を主体に鉛、錫を含む青銅であり、鋳造品であることが分かる。刃は片刃で両方とも概ね50°程度の角度で付けられている。軸の断面は頂部の丸い三角形を呈し、側縁部は両側とも丁寧に面取りされている。軸中央付近には側面が凹んだ部分があり、鋳造時の欠損と見られる。この部分には整形や研磨が及んでおらず、錫肌がそのまま残っている。

銅鑼は、弥生時代の資料としては、福津市今川遺跡や山口県井ノ山遺跡では銅剣を再加工したもののが知られている（酒井1981・石井2005）。雀居の資料は、弥生前・中期の土器も混じる古墳前期の包含層から出土した資料である。一見すると積極的に再加工品とする痕跡は見出せないが、福岡大学武末純一氏からは銅戈の関部分の可能性も指摘されている。用途については、刃の角度や形状は柱状片刃石斧との類似性を想起させるが、厚さや幅は異なっている。大きさから何らか細工用であることは想像できるものの、詳細は不明である。

なお、両資料は透過X線撮影を行ったが、全体均質な状態で鼈や亀製など製作に関する痕跡や保存に関する問題点は見られなかった。

(2) ガラス製品（第201・202図、第9表、巻頭図版4、図版48）

ガラス製品は3点出土している。2点は小玉、1点はトンボ玉である。

淡青色の小玉（1383）は、顕微鏡観察では気泡が孔の長軸と平行して並ぶ様子が観察されており、引き延ばし技法（小瀬1987）で製作されたものと考えられる。蛍光X線分析では、珪素、カリウムが顕著に認められ、カルシウムはほとんど検出されていない。このことから基礎ガラスはカリガラスに分類される（肥塚ほか2010）。着色に関する元素としては、強い銅のピークと、弱い鉛のピークが認められた。色調から銅が関与しているものと見られる。

青紺色の小玉（1384）は半欠状態である。製作技法の観察では気泡が孔の長軸に平行して並ぶ様子が確認され、引き延ばし技法で製作されたと考えられる。蛍光X線分析では、珪素、カリウムが顕著に認められ、カリガラスに分類される。着色に関しては不明瞭ながらコバルトのピークが認められ、それに伴う不純物と見られる鉄、マンガンが顕著に現れている。色調と違和感の無い結果といえる。

トンボ玉（1378）は、直径2.1cm、厚さ1.4cmを計る大形品である。青紺色の地に白と青色で同心円の文様を施している。顕微鏡による拡大観察では白色の部分が風化によるものか、針状の結晶となっており、これらの状況から液浸による透過光観察は断念した。材質分析は地の青紺色部分、文様の白色部分、同青色部分、それぞれについて行った。いずれの部分においても、共通してガラスの主成分である珪素と、他に鉛、バリウムが検出された。このことから、鉛バリウムガラスで作られていることが分かる。白色部分の針状結晶はX線回折分析で、Anglesite（硫酸鉛）もしくはBarite（硫酸バリウム）と見られるピークが認められる。これらはいずれにしても風化により生じたものと考えられるが、地や青色文様部分では、風化によるものと見られる凹凸は認められるものの、二次的に生じたような結晶は見られない。白色の部分だけこのような状況になった原因は現状で不明である。

雀居遺跡出土の大形トンボ玉は、重層貼眼珠と呼ばれる種類で、成分や文様が中国戦国時代の資料に共通する（谷一1999）。鉛バリウムガラスは、中国の戦国時代から漢代にかけて、中国で製造されたガラスで、日本では弥生時代前期後半に伝わり、古墳時代初頭頃まで流通するとされる（肥塚2001）。福岡市ではこれまで、管玉を中心とした製品や加工工具の分析事例でその存在を確認しているが（比佐ほか2000・比佐2005・2012）、トンボ玉の事例は初出である。

国内のトンボ玉は古墳時代の例が多く（長瀧2002）、弥生時代に遡る資料は限られるようである（藤田1994）。弥生時代の事例の一つは福岡市の西新町遺跡16次調査で、弥生時代中期中葉の土器片の下から出土した、孔の無い球形で青と白が交互に混じったものがあるが（松浦2005）、形状、文様、風化の状態などが全く異なっている。材質分析でもソーダ石灰ガラスで、雀居遺跡出土資料との共通点は無い。一方、原の辻遺跡では弥生時代中期前葉の甕棺墓から4点のトンボ玉が出土している。大きさは径10mm弱で雀居の例より小ぶりであるが、色調や文様、鉛バリウムガラスという材質は共通している（片多2017）。雀居遺跡出土資料の共伴土器は古墳時代のものであるが、当該遺跡の場合、博多湾岸という立地条件や、弥生時代を中心に栄え、その時期に外部との交流も活発である状況から、古くさかのぼる資料としても違和感は無いものと考える。

(3) 石製品（第202・203図、第9表、巻頭図版4、図版48）

石製品には見た目で大きく滑石、碧玉、その他に区分される。

滑石とした一群は、滑らかな質感とラメ状の光沢といった特徴で共通するが、色調は黒灰色（1396）や淡い黄緑色（1395）、灰緑色の濃（1393、1399、1401、1402）淡（1391、1392、1394、1397、1398、1400、1403）、灰紫色（1404）などに区分できる。特にX線回折ではTalc（滑石）やClinochlore（緑泥石）といった結晶が認められるが、これらはいずれも考古学的に「滑石」とされ

る石材として問題ないと考える（五十嵐2006）。

碧玉（1385～1390）は、製品はすべて管玉で、他に1点、立方体状の未製品、あるいは素材と見られる資料がある。蛍光X線分析では珪素が強いピークとして現れ、他、ピークの高い順に鉄、カリウム、アルミニウムが検出される。X線回折ではQuartz（石英）を主体に、他、Orthoclase（正長石）と見られるピークが得られている。今回分析を行った中では、色調の違いで検出される結晶に違いは見られない。

他、乳白緑色の半月状勾玉と見られる製品（1380）は、蛍光X線分析では珪素が最も強く、次いでアルミニウム、カリウム、他に鉄、チタンが認められる。X線回折分析では、検出されたピークの大半がMuscovite（白雲母）のピークと重なっている。

鮮やかな青緑色の小玉片（1381）は、比重は2.62を計る。蛍光X線分析では珪素の他、特徴的な元素としてカリウム、ルビジウムが認められ、6～10keV付近に同定不明のピークが複数本出る。色調や比重の数値も合わせた結果から、本資料はアマゾナイトと見られる。アマゾナイトの場合、通常のX線回折分析では単結晶のためピークが十分に得られないことから、今回は分析を行っていない。

アマゾナイトは天河石とも呼ばれ、弥生時代前半期に朝鮮半島との関わりで語られる石材として知られている（庄田2006・吉田ほか2018、第16表）。雀居遺跡の事例も出土層位は古代に帰属するが、遺跡の性格上、トンボ玉の存在も合わせ、弥生時代の資料と考える方が違和感がないように思える。

濃緑色の勾玉（1379）は、見た目で蛇紋岩と推測される。比重は2.66である。蛍光X線分析では珪素、鉄を中心に、マグネシウム、アルミニウム、クロム、ニッケルが認められる。特に黒色の部分ではクロムが非常に強く表れる。定性的には滑石とした一部資料と大きく変わるものではない。X線回折でも滑石と同じくClinochloreが検出されるが、同時にAntigorite（蛇紋石）のピークも見られる。ただし、色の黒い部分ではClinochloreのみの検出に止まっている。また、小判形の扁平玉（a17）も、石材は見た目で蛇紋岩と推測される。形状を含め、これまでに類似する資料は見られない。比重は2.57である。蛍光X線の結果は1379の勾玉に近い。X線回折ではAntigoriteという結果が得られている。

（4）赤色顔料（第8表）

R26-2面とSD1361で出土した資料を対象とした。どちらも鮮やかな赤色を呈する粉状の物質が土の中に凝集する状態で含まれている。実体顕微鏡観察では、いずれもやや橙色気味の赤色で、それほど強い光沢は見られない。桃色や赤黒い色調で金属質の光沢を有する朱とは異なっており、ベンガラの特徴を示している。蛍光X線分析でも水銀は検出されず、強い鉄のピークが認められており、観察の結果を裏付けている。

ベンガラにはバクテリアが関与することで、粒子がパイプ状の形状を呈するものが知られており（岡田1997）、電子顕微鏡を用いた観察を行った結果、R26-2面の資料において、このパイプ状の粒子が認められた。ただし、これまで少ないながらも観察を行った経験では、パイプ状ベンガラの場合、

第16表 福岡市内出土のアマゾナイト玉類

遺跡名	福岡市遺物登録番号	出土遺構	資料名	時期	報告書	再載図番号	備考
1 元岡・免原 42次	045111001	伯阿川（P-3-区・土器群 9C）	丸玉	弥生中期末～後期	1275	109-98b	報告書記載は「ヒスイ」、新たに行った分析で判明
2 千手1次	091310077	相穴（区号 SP912）	丸玉？	縄文後期	1117	10-2-5	報告書に分祈報告所収
3 徳永 A7次	112725092	奈牟屋（北部IV層）	小玉	古墳後期～終天	1227	59-8	報告書では分祈結果にあづき天河石と記載
4 今宿 5次	970900167	112号櫛程（個人の可能性有り）	丸玉？	弥生中期後半	654	22-167	報告書記載は「碧玉製」、市報 063集に分析報告
5 免3次	071200414	廣（SB-02?・03 3種）	小玉	縄文後期～弥生初期	1059	27-414	報告書に分祈報告所収
6 有田 36次	800840061	2号櫛程毛筆墨	丸玉	弥生中期後半	96	73-12	報告書記載は「墨玉」、市報 163集に分析報告
7 有田 35次	800720038	住居跡（SC-02）周辺	小玉	古墳中期	173	26-27	報告書記載は「ガラス」、新たに行った分析で判明
8 有田 106次	853801975	住居跡（SC12）北端埋土	小玉	古墳中期	651	29-108	報告書記載は「ガラス」、新たに行った分析で判明
9 有田 152次	895300015	住居跡（SC12）	小玉	古墳後期	265	未開化	新たに行った分析で判明
10 通岡 B3～5次	241000178	野嶋六（区6号窓穴）	丸玉	弥生前期	31	13-5	市報 1117集の分析報告に類似として記載
11 忽津 10次	843620060	廣（SD20）	小玉	古墳中期	115	未開化	新たに行った分析で判明
12 斎店 18次	1605—	SS016 北斜下	小玉	弥生前期～古墳前期	1388	202-1381	本報告

*報告書の数字は「福岡市埋蔵文化財調査報告書」の集数

粒子が密集する状態が観察されていたが、雀居18次の資料ではそれほどの密集状態とはなっていなかった。また、SD1361の資料ではパイプ状粒子は認められず、不定型な板状粒子で構成されていた。更に、X線回折分析も行ったが、両方の資料ともHematite（赤鉄鉱）のピークと一致した。

調査の結果は、赤色顔料のベンガラとして違和感の無い結果が得られている。しかし、これらが人为的に作られ、用いられた顔料か否かの判断に直結するものではない。出土した構造は墳墓や明確な祭祀の場などではない。また、量も少なく、使用に向けた貯蔵の場という状況でもない。低湿地の鉄バクテリアが存在したであろう土壤で何らか土が被熱する状況が起ければ、この様な「ベンガラ」が生成することが十分に考えられる。墳墓や祭祀以外の場で、明らかに外部から持ち込まれたと判断できる朱ではない赤色物質が存在する場合、その解釈は困難を伴う。

（5）被熱粘土塊（第8表、図版41）

本調査では被熱痕跡のある粘土塊が多数出土している。中には青銅器の加工に関わる資料と類似するように見える資料も含まれることから、数点を対象に蛍光X線分析を行った。しかし、いずれも珪素やアルミニウムなど、土壤に含まれる元素しか検出されておらず、金属やガラス加工の痕跡は認められなかった。

＜参考文献＞

- 五十嵐俊雄2006『考古資料の岩石学』パリノ・サーヴェイ株式会社 p.81
石井龍彦（編）2005『井ノ山遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第48集 （財）山口県ひとづくり財團・山口県埋蔵文化財センター
岡田文男1997「パイプ状ベンガラ粒子の復元」『日本文化財科学会第14回大会要旨集』日本文化財科学会
片多雅樹2017『長崎県宅岐市・原の辻遺跡出土ガラス製品の蛍光X線分析』『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第7号 長崎県埋蔵文化財センター
肥塚隆保2001『古代ガラスの材質と鉛同位体比』『国立歴史民俗博物館研究報告』第86集 国立歴史民俗博物館 p.241
肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦2010「材質とその変遷」『月刊文化財』566号 第一法規
小瀬康行1987「管切り法によるガラス小玉の成形」『考古学雑誌』第73巻第2号 日本考古學會
酒井仁夫（編）1981『今川遺跡 福岡県宗像郡津屋崎町今川所在遺跡の調査』津屋崎町文化財調査報告書第4集 津屋崎町教育委員会
庄田慎矢2006「朝鮮半島の玉文化」『季刊考古学』第94号 弥生・古墳時代の玉文化 雄山閣 p.85
谷一尚1999『ガラスの考古学』ものが語る歴史2 同成社 pp.37-45
長庵歳康2002『第IV章 調査のまとめ－白石第18号墳のトンボ玉とその提起する問題－』『白石古墳群 登所地区・中原地区一団体営白石土地改良総合整備事業関係埋蔵文化財調査報告11－』美里町遺跡発掘調査報告書第13集 埼玉県児玉郡美里町教育委員会
比佐陽一郎・片多雅樹・肥塚隆保2000「上月隈遺跡群第3次調査ST007甕棺墓出土ガラス玉の保存処理及び自然科学的調査について」『上月隈遺跡群3－第3次調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第634集 福岡市教育委員会
比佐陽一郎2005「SE-07出土のガラス加工具について」『比恵40－比恵遺跡群第87次調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第857集 福岡市教育委員会
比佐陽一郎2012「春日市須玖岡本遺跡坂本地區出土遺物の保存科学的調査について」『須玖岡本遺跡5－坂本地区5・6次調査の報告及び考察－』春日市文化財調査報告書第66集 春日市教育委員会
藤田等1994『弥生時代ガラスの研究』名著出版 pp.150-151
本田光子1988「弥生時代の墳墓出土赤色顔料－北九州地方にみられる使用と変遷－」『九州考古学』第62号 九州考古学会
松浦一之介（編）2005『西新町遺跡8 西新町遺跡第16次調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第846集 福岡市教育委員会
吉田東明・小嶋篤2018「朝鮮半島から渡來した玉類」『玉－古代を彩る至宝－』ハーベスト出版 pp.153-154

第VI章 総括

雀居遺跡第18次調査では、弥生時代早・前・中期前半の集落、古墳時代前期の集落、8世紀代の水田を確認した。以下では、調査成果を通時に振り返り、報告の補足をしつつ総括に代えたい。

旧石器時代・縄文時代 後期旧石器時代遺物として細石刃核1点（第94図526）を確認した。本報告では、出土した黒曜石剥片類約16,000点について詳細に検討できていない。これらは弥生時代の所産であるが、遊離した旧石器時代や縄文時代の剥片石器が含まれている可能性がある。縄文時代遺物としては、安山岩石匙（第69図372）、曾畠式土器（第173図1139）が出土している。黒曜石剥片類は検討していないものの、それ以外の石器の中から、明確な縄文時代石器を抽出することはできず、周辺での縄文時代の活動は乏しいと考えてよいであろう。

弥生時代早・前・中期前半 土器は夜臼式、板付I式、板付II式、城ノ越式、須玖I式、下大隈式（少量）、西新式（少量）が出土した。出土土器型式は、弥生時代早期から中期前半まで断絶を感じさせないスムーズな変化を示す。夜臼・板付I式期の遺構は微高地西側に多いのに対し、城ノ越・須玖I式期の遺構は微高地西側だけでなく、東側にも広がっている。調査区北東端で検出した土器群SX717は城ノ越・須玖I式期に微高地の縁に土器を投棄した遺構である。この微高地の縁から東側河川部側に向かって腐植土質の遺物包含層SX678・676が形成される。第3面上層の堆積（第2面下層）では、土製投弾が微高地側から多く出土するに対し、土製円盤は河川部から多く出土する傾向がある。特に径6～8cmの大型円盤はSX717、SD604、SX676・678に出土が偏る。土製円盤は大半が弥生土器片の利用であり、意図的に微高地際・河川部へ投棄されたものと考えられる。ただし、それより西側に構築されたSD745、SD719、SD559も微高地際を示す遺構と考えられ、城ノ越・須玖I式期である。この微高地際が二重に形成される様相は、弥生時代中期前半に東側に居住域が拡大されつつも、河川水位上昇期にはSD745・559ほかの辺りまで浸水が及んでいたためと解釈される。その後居住は断絶し、下大隈式・西新式期に第2面の生活面が形成され始めるまでは、微高地上には洪水砂等の堆積ではなく腐植土質層が形成されることから、アシ・ヨシ原のような湿地性の環境で推移したと考えられる。

出土木質遺物の一部で炭素14年代測定を行い、SP1421柱で763-477calBC（93.3%）、SX678出土矛形木製品で549-407calBC（75%）という曆年代を得た。宮本一夫氏による炭素14年代の検討では、夜臼I式の弥生時代早期の始まりは紀元前9～8世紀、板付I b式～II a式移行期の西日本への稻作農耕社会の広がり（弥生時代の始まり）は紀元前6～5世紀とされる（宮本一夫2018「弥生時代開始期の実年代再論」『考古学雑誌』100-2）。第3面の古相が、夜臼I式主体というよりは一段階後の夜臼II式、板付I a式を主体とすることを踏まえると、整合性のある年代測定結果と言える。

本調査では、遺物包含層などに多くの無加工礫が含まれており、被熱痕跡があるものや石器石材（母岩や素材）になり得るものを見分けて持ち帰った。被熱礫については、角礫・亜角礫で1面（接地面）が被熱しないというパターンが見出されたため、火凧に設置されて使用された石（支脚石）と認定した。石器石材と同質の無加工礫の一部は、石材の薄片作成鑑定を委託し、石器石材記述の補助資料とした。岩石薄片No.4・5・7・17・18は「董青石を含むホルンフェルス」で、対馬産の可能性が指摘されている（能登原孝道2007「いわゆる「貞岩質砂岩」の原産地について」『九州考古学』82）。岩石薄片No.9とNo.19はいわゆる「層灰岩」と認識される石材で、それぞれ「交代状組織を示す緑泥

石アクチノ閃石ホルンフェルス」と「交代状組織を示す緑簾石緑泥石緑色岩」と鑑定された。層灰岩は名称や産地に統一的な見解がないとされる（森貴教2013『弥生時代北部九州における片刃石斧の生産・流通とその背景』『古文化談叢』69）。岩石薄片N0.24の赤灰色岩は、いわゆる立岩産石包丁に使用される輝絆凝灰岩で、「片状組織を示すパンペリー白雲母緑泥石粘板岩」と鑑定された。

他にも、隣接10・13次調査成果も含めた弥生時代集落の構造や変遷、隆線文磨研壺（第161図1011、184図1249）、石棒（第167図1094）、有文小型土器（第203図1405）、無文土器（第131図812）、トンボ玉（第201図1378）、アマゾナイト小玉（第202図1381）、広葉樹枝を用いた木質遺物（第169図1104）、不明磨製石器（第196図1345）の評価など、検討すべき多くの資料が得られている。

古墳時代前期 弥生時代中期後半～後期前半の空白期を経て、下大隈式・西新式期から徐々に遺構が形成され始め、古墳時代前期に一気に集落化が進む。大溝SD604の西岸に沿って杭列および横板が検出された（SX676杭列）。これらはSD604から分岐した水路の土留めおよび堰と考えられる。この導水路・堰の先は、大型土坑SX545となっている。SX545・546・547は木質遺物が多数出土しており、貯木土坑の機能も想定できる。SD604が北流してきて、調査区内で東にやや流向を変える点が注目される。降水量増加期など河川水位が上昇した場合、SD604はこの蛇行部分で微高地側へ溢水（いっすい）すると考えられる。その際に、ある程度の水量であればSX676杭列を介してSX545に貯水でき、SX545で足らなければSX546・547に導水することができる（河川氾濫時の緩衝の機能）。これらの大型土坑は底面での湧水もあり、河川安定時は水場として利用されたであろう。なお、SX545の上層西側SX434上の遺構形成面の標高差を見ると、SX434上端標高は3.8mほどで、その上に土器群078が堆積し、その上に構築されたSD032の下端標高が4.25mほどので、SD032構築時にはSX545はほとんど埋没していたと考えられる。この場合のSD032やSD055の機能としては、河川水位上昇時には、SD032・055を介して溢水が微高地・居住域間に逃がされ、水位が下降すれば逆に排水される構造となっている。前述の弥生時代遺構SD745ほかと類似した機能が想定される。

本調査では、鍛冶作業を想起させる遺構・遺物が確認された。村上恭通氏の研究成果を参考にして、その可能性を下記のとおり整理する（村上恭通2007『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店）。

○肯定的要素…掘り込みを持たない焼土、壁被熱ピットSP191、被熱礫（支脚）などが出土し、焼土の数から複数鍛冶遺構の併存が想定できる。集落の縁辺に位置する。SC1473の礫1～3他、出土した台石類は「鉄床石」として利用可能である。大型石斧の敲石転用（槌）も多い。少量ながら被熱粘土塊（炉壁か）や鉄滓が出土する（図版41-15・16）。炭化物土坑（SK611・613・398・136）が確認される。鉄素材（鉄板裁断片か）（第200図1376・1377）、磁鐵鉱小礫（第8表）、鉄器研ぎ用の多様な砥石が出土する（後述）。

○否定的要素…鉄製品自体、轆羽口、微小鉄片・鍛造剥片の出土がない。鍛造剥片等は遺構・包含層掘削中も確認されなかったが、遺構埋土の洗浄でも検出されなかった。

二次加工碧玉素材（第202図1390）、玉素材小礫（第8表）、滑石玉素材・未成品（第203図1399～1404）、玉砥石（第65図337（粗粒砂岩）、第127図788（砂岩））が出土しており、小規模な玉作も行われたと考えられる。

不明土製品（第208～211図）は、多くが古墳時代前期に属すると考えられるが、その全体形状、機能・用途を推定できなかった。共通する特徴として、外面は土器のような焼成・色調であるが、内面が焼成不良あるいは剥落で、摩耗・風化が強く、縁辺部が破断しているのか、生きているのか明瞭でない。金属生産関連の坩埚や取瓶の可能性も検討されたが、そもそも「土器」として完成して機能したもののなかもはつきりしない。表面に金属滓や関連成分などは検出されない。1515～1524は不

定形ながらも支脚の可能性もある（大橋信弥1978「支脚形土製品の系譜」『古代研究』17）。注口（第207図）は本体から離れて出土しているが、土器群SX071出土の丸底鉢（第104図586）は注口が付いていた可能性がある。注口自体も土器群や第2面下層出土で、古墳時代前期の可能性が高い。山陰系土器の中に注口を持つ器種があり、短く先細りの注口部は庄内式・布留式併行期と位置付けられている（藤原敏晃1994「古墳出現前後の注口土器について」『京都府埋蔵文化財情報』51）。

第2面からは砥石が多く出土した。以下、第3面、第1面資料も含めて、砥石の状況を整理する。

第3面出土砥石は、夜白・板付I・II式期が板状・不定形の置砥（1285、1099、1280）なのに対し、城ノ越式期からは小型方柱状の砥石（1291、1351）が見られ、砥石の形態や使用法に変化が見られる。中期前半までの大型で塊状の不定形砥石から、後期の小型で細長い棒状の不定形砥石への変化、後期の定型砥石の増量、使用頻度の増加は、金属器使用との関連が指摘されている（村田裕一2002「工具一砥石」北條芳隆・福井田佳男編『考古資料大観第9巻』、pp197-200、小学館）。

第2面出土の砥石は、遺構から土器を伴って出土したものは少ないが、弥生時代の砥石はあまり含まれていないようである。大まかに分類すると、次のようになる。

I a類：厚さ1.5～2cmの板状。擦切などを伴い打割される…235、266、339、341、385、789、992

I b類：厚さ1～1.5cmの板状。打割され小型化する…190、330、331、332、336、338、367、369、383、384、921、922

I c類：厚さ1.5～2cmの小型・方柱状…327、381、382、848

I d類：厚さ0.5～1.5cmの小型・板状…328、329、949

→ I類はホルンフェルス、細粒砂岩など、比較的緻密な石材が用いられる。

II類：板状で線状痕が集中するもの…782（頁岩）、957（緑色片岩）。cf. 781（軽石、円礫）

III類：自然小円礫を用いるもの…333（安山岩）、334（頁岩）

IV類：錐状…258（粗粒砂岩）、317（粗粒砂岩）

V類：複数の砥面が形成され多面体をなすもの…335（砂岩）、368（砂岩）、990（砂岩、柱状）

VIa類：柱状…785（シルト質砂岩）、786（泥岩）、988（粗粒砂岩）、991（粗粒砂岩）、993（砂岩）

VIb類：厚手板状方形…386（細粒砂岩）、533（凝灰岩質砂岩）、787（シルト質砂岩）。

VIIa類：大型扁平で、広い面が砥面となるもの…370、790、791、792、923、927、1005

VIIb類：礫状で、狭い面が砥面となるもの…193、268、340、342、387、784、805、924、925、926、989、1004

→VII類は細粒～粗粒砂岩など、比較的粗粒な石材が用いられる。

板状砥石については、I a類→I b類→I c・d類という再加工による石器変形の傾向も指摘できる。

I c・d類は面部分だけでなく、角も摩滅して丸みをおびている。II類は砥石というよりは線刻礫の可能性が高い。VIIa類は、平置きして使用したと想定され、広い砥面に多様な砥ぎ痕が残る。VIIb類はそのままでは底面を据わらせることができないので、何らかの方法で固定して使用したと考えられる。

第1面出土の砥石は、弥生時代から古代まで時期幅がある。I a類（94）、I b類（93、96）、I d類（95）、VIb類（98）、VIIa類（101、102）に分類できる。

I類の一部は、中国漢代の文房具である石硯や研石に類似する（武末純一・平尾和久2016「<速報>三雲・井原遺跡番上地区出土の石硯」『古文化談叢』76、柳田康雄2019「倭国における方形板石硯と研石の出現年代と製作技術」『令和元年度九州考古学会総会研究発表資料集』、久住猛雄2019「古墳時代における「板石硯」の展開について（予察）」『前掲資料集』）。例えば336、367、921、922などは方形に成形された板状石製品の一部にも見える。一方「板状砥石」という視点で見れば、金属器、特

に「刃物」を研ぐためにより広い「平滑面」が必要になることや、砥石どうしを砥ぎ合わせて「平滑面」を再生・維持する「砥面直し」のために板状化（軽量化）する、産地が限られる優良砥石材の効率的な流通のために軽量化する、などの説明ができる。砥面の使用は中央部が中心になるため、砥面直しをすると、中央部がわざかに凹んだ状態で再生・平滑化する。小型砥石も、金属器の様々な形状に合わせた「研ぎ」に用いられたと考えられ、優良石材を効率的に利用するために板状砥石の分割（再利用）がなされたと解釈できる。

古代 既往の7・9・10・13次調査は、国土座標を付与されておらず、また、空港内の施設・道路等が調査当時から大きく変更されたため、現況で調査区の正確な位置が分からず状況にあった。そのため、本調査では、7・9・10・13次調査の調査区を一部検出し、調査区形状および水田畦畔や溝などの位置関係から、調査区どうしの位置関係の把握を行った。その結果、本調査で検出した10次、13次調査の調査区形状および水田畦畔、溝等の連続性は概ね整合的なものとなり、相互の位置関係を整理できた（第3図）。第3図では、昭和54（1979）年修正の福岡市都市計画図に照合し、7・9・10・13次調査区と当時の空港内道路などの位置関係にも矛盾がないことを確認した。

水田面ではヒトと偶蹄目の足跡が多数検出された。個体の足跡を追える状況ではなかったが、1期調査では電子平板で足跡の中心点の位置と高さを記録した。2期調査では電子平板の測点をもとに足跡形状の記録まで行っているが、客観的な傾向把握には至らなかった。

河川SD025と水田面の関係は、SD025が一部の水田面を切っている状態で、必ずしもすべての田面とSD025が同時期に機能していたわけではない。SD025からSD023、SD602への分岐の傾向、SD024やSD011を介したSD003との連結の可能性が想定される。また、SD011が横断するSS020東畔に杭列が打たれていることは、SD011による水流の導水と、杭列による畦畔の補強が関連していると考えられる。

SS021北畔では土層断面で旧畦畔を確認できた（第14図）。出土遺物も、6世紀後半から8世紀後半まで時期幅がある。SD024下のSS021耕作土中から出土した一本鋤（第10図、第19図61）の炭素14年代が4世紀後半から6世紀中頃、第1面下層出土の陽物2点が5世紀前半から6世紀中頃の年代を示した（第14表）。6世紀代の土器は、SS020耕作土や第1面下層からも出土している。水田の構築開始年代は、6世紀代まで遡る可能性がある。

水田耕作土の各所から小枝束が出土した（SS012東畔（W52、クリ）、SS016（W53、ウツギ属）、SS017（W54・図版37-5、バラ属）、SS021（19図64、不明））。各小枝の樹種同定が十分でないが、W54にバラ属が含まれることは、注目される。紀貫之『土佐日記』承平5年（935年）元日付に「小家の門の端出之縄の籠の頭、柊いかにぞ」という記述があり、これが現代の「柊籠」風習につながると考えられている。バラ属も葉や茎に棘を持つことから、魔除けの意味が込められていた可能性はある。ヒサカキ（13図33）、サカキ（18図57、19図65、21図83・86）、シキミ（18図60、W58（SS019北畔R1））、ウツギ属（19図66）など、用途不明の棒状製品も水田祭祀に関わる可能性は高い。第1面出土の種実は、モモ64点、オニグルミ7点、エゴノキ3点で、8割以上がモモである（第10表）。水田が古代において、盛んな神事の場であったことが伺い知られる。

以上、発掘作業・整理報告作業とともに十分なものではなかったが、雀居遺跡第18次調査によって、雀居遺跡の豊富かつ重要な資料の一部が新たに取得された。博多湾岸と春日丘陵という歴史の中心エリアに対し、雀居遺跡の位置する席田低地は脇に控える存在だが、その異なる立地・性格からの対比を行うことで、福岡平野内資料の新しい検討も可能になると期待される。

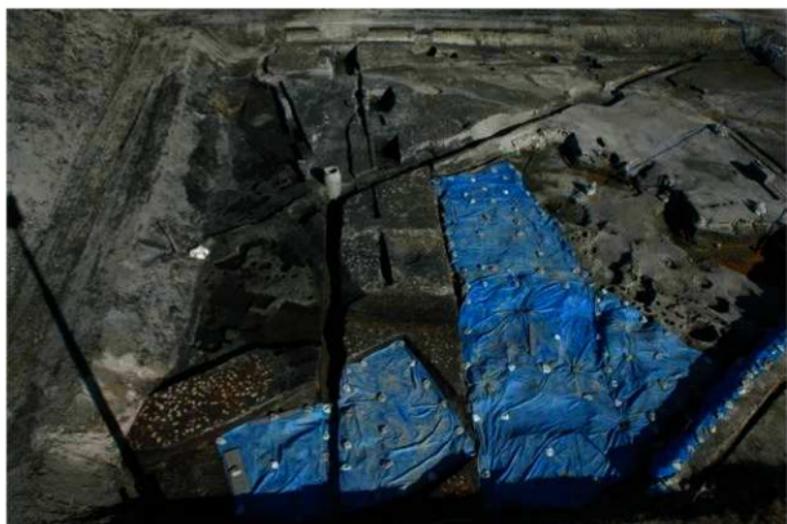
図 版



1期調査第1面作業風景



1. 1期調査第1面全景（北西から）



2. 2期調査第1面全景（南西から）

図版 2



1. 1期調査南壁第1面土層（西から）



2. 1期調査西壁第1面土層（北西から）



1. SS019 (北から)



2. SS022 (南から)



3. 2期調査東側水田面 (南西から)



4. 2期調査西側水田面 (北西から)



5. 2期調査49区水田面 (北西から)



6. SS015鳥類足跡 (東から)

図版 4



1. SS019 北畦（北東から）



2. SS020 東畦および杭列（北西から）



3. SS021 北畦（北東から）



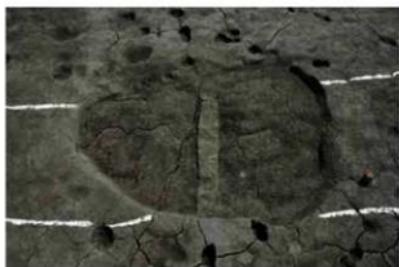
4. SS022 南畦（北東から）



5. SS020 東畔杭列W 8・9（北東から）



6. SD002 土層（北から）



1. SK004 (南西から)



2. SK005 (北西から)



3. SK007 (北西から)



4. SK008 (東から)



5. SK008 土層 (南から)



6. SK009 (西から)

図版 6



1. SK010 (北から)



2. SK010 土層 (西から)



3. SK030 (西から)



4. SK031 (南東から)



5. SS021 下層木器 (19 図 61) 出土 (南から)



6. SX039 木器 (21 図 80・82) 出土 (南西から)



1. 1期調査第2面全景（南東から）



2. 3期調査第2面全景（南東から）

図版 8



1. 東壁北側土層（南西から）



2. 東壁南側土層（南西から）



1. 南壁西侧土層（北西から）



2. E6 区下層土層（南西から）

図版 10



1. 調査区北ベルト西側土層（南東から）



2. 調査区北ベルト東側土層（南東から）



1. 調査区南ベルト西側土層（南東から）



2. 調査区南トレンチ土層（北西から）

図版 12



1. SB1460 ; SP609 (南東から)



2. SB1460 ; SP610 (東から)



3. SB1460 ; SP612 (南から)



4. SB1461 ; SP629 (北から)



5. SB1461 ; SP616 (東から)



6. SB1462 ; SP631 (南から)



1. SB1463 ; SP632 (東から)



2. SB1463 ; SP621 (北東から)



3. SB1464 ; SP366 (北西から)



4. SB1471 ; SP672 (東から)



5. SB1465 ; SP146 (南西から)



6. SB1465 ; SP178 (南から)

図版 14



1. SP110 (北西から)



2. SP041 (北東から)



3. SE053 土層 (北西から)



4. SE053 (南西から)



5. SE937 (南から)



6. SE937 遺物出土 (南西から)



1. SK121 土層（南西から）



2. SK136（南から）



3. SK441（東から）



4. SK450（東から）



5. SK175・176（南東から）



6. SP191（西から）

図版 16



1. SC1473 検出（南東から）



2. SC050 検出（南から）



3. SC614 (南西から)



4. SC614 焼土・炭化物（北から）



5. SC614 溝1・2 検出（北東から）



6. SC614 銅鑓（200 図 1373）出土（北東から）



1. SD614 北ベルト土層（南東から）



2. SC248（南西から）



3. SD032（北から）



4. SD055（南東から）



5. SD663（南から）



6. SD606（南から）

図版 18



1. SX545 木器出土（北から）



2. SX545 (南東から)



3. SX545 東西杭列W 1～5 (北から)



4. SX546 木器出土（北西から）



5. SX547 木器出土（北西から）



6. SX546・547 (南から)



1. SX676 桧列（北から）



2. SX676 桧列（西から）

図版 20



1. SX676 桁列横板（140 図 883）出土（北から）



2. SX676 桁列横板（140 図 884）出土（南から）



3. SX545 木器（84 図 469・470）出土（西から）



4. SX545 木器（85 図 479～481）出土（南から）



5. SX545 木器（89 図 498）出土（北から）



1. SX676 W 1 出土（北から）



2. SX678 木器（149 図 943）出土（南西から）



3. SX678 木器（149 図 946）出土（南東から）



4. SX678 木器（149 図 945）出土（北東から）



5. SX678 杖（北西から）



6. SX676・678 完掘（南から）

図版 22



1. 1期調査土器群（南から）



2. SX109・鏡形土製品(122図757)出土(南東から)



3. 1期調査土器群（南東から）



4. 1期調査土器群（北から）



5. SX113（南から）



6. SX115～117（南東から）



1. SX119 (北から)



2. SX119 ベルト下 (北から)



3. SX113 石製勾玉 (202 図 1379) 出土 (西から)



4. SX653 (南から)



5. 3期調査土器群 (北東から)



6. SX690 (北東から)

図版 24



1・2期調査第3面全景（北から）



2.2期調査第3面全景（北西から）



1. 3期調査第3面全景（南東から）



2. 3期調査第3面全景（北東から）

図版 26



1. C・D-7～9区第3面全景（北東から）



2. E～H-7～9区第3面全景（北東から）



1. D-4～6 区第3面全景（北東から）



2. E-4～6 区第3面全景（北東から）

図版 28



1. A ~ D-1 ~ 3 区第3面全景（北西から）



2. E・F-1 ~ 3 区第3面全景（南西から）



1. G・H-1・2区第3面全景（西から）



2. E3区第3面下層（西から）

図版 30



1. SP975 (北から)



2. SP1421 (北東から)



3. SP1289 (南西から)



4. SP1293 (北東から)



5. SP1333 (南東から)



6. SP179 (南から)



1. SX435 (西から)



2. SX435 木質遺物 (169 図 1104) 拡大



3. SK225 (南西から)



4. SK225 土層 (南から)



5. SK222 (東から)



6. SK1211 (南から)

図版 32



1. SK1362 (北から)



2. SK202 (南から)



3. SK316 (西から)



4. SK262 (東から)



5. SK215 (南西から)



6. SK215 土層 (南東から)



1. SK350 (東から)



2. SK1334 (南から)



3. SX816 (南から)



4. SK427 (南東から)



5. SK392 (東から)



6. SX1028 (北東から)

図版 34



1. SX1066 (西から)



2. SX1405、SD1361 (南東から)



3. SK1320 (北東から)



4. SK123 (東から)



5. SK596 (東から)



6. SK124 (東から)



1. SK1076 (北西から)



2. SK421 (南から)



3. SX1010 (北から)



4. SX1010 土層 (南から)



5. SD559 (北から)



6. SD605 (南から)

図版 36



1. SD719・745 (南西から)



2. SD851 (南東から)



3. SD742 (南から)



4. SD1365 (東から)



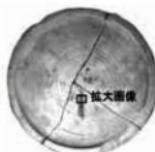
5. SD1337 (南から)



6. SX717 ③ (東から)



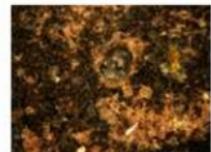
1. 8 図 4



2. 8 図 4 (赤外線画像)



3. 8 図 4 墨書き拡大画像 1



4. 8 図 4 墨書き拡大画像 2



5. W 54 (SS017)



6. 16 図 38



7. 16 図 39



8. 17 図 45



9. 21 図 81



10. 21 図 83



11. 21 図 84



12. 22 図 90



13. 22 図 94



14. 31 図 135 (左)、33 図 144 (右)



15. 39 図 172



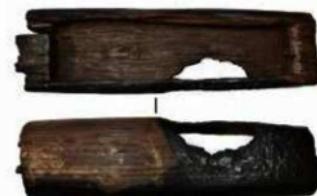
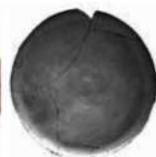
16. 40 国 184



17. 64 国 328

出土遺物 1 (縮尺不同)

図版 38



出土遺物 2 (縮尺不同)



1. 110 図 646 2. 114 図 680 3. 120 図 739 4. 120 図 740



5. 120 図 743 6. 121 図 747 7. 122 図 756 8. 122 図 757



9. 123 国 760 10. 123 国 762 11. 131 国 812 12. 133 国 829



13. 138 国 874 14. 138 国 875 15. 147 国 922 16. 147 国 923 17. 148 国 930



18. 141 国 888 19. 141 国 892 21. 149 国 946

出土遺物 3 (縮尺不同)

図版 40



1. 126 図 781

2. 126 図 782

3. 150 図 957



4. 148 図 938



5. 149 図 945



6. 152 国 970



7. 156 国 985



11. 180 国 1203



8. 157 国 988



9. 157 国 991



10. 157 国 992



12. 201 国 1378



13. 203 国 1405



14. 204 国 1418



15. 204 国 1419

出土遺物 4 (縮尺不同)



1. 208 図 1514 2. 208 図 1517 3. 208 図 1518 4. 209 図 1519 5. 209 国 1520 6. 209 国 1521



7. 210 国 1533 10. 211 国 1536

8. 210 国 1534 9. 210 国 1535 11. 211 国 1538



12. 211 国 1543

13. 211 国 1544

14. 被熟土器口縁部



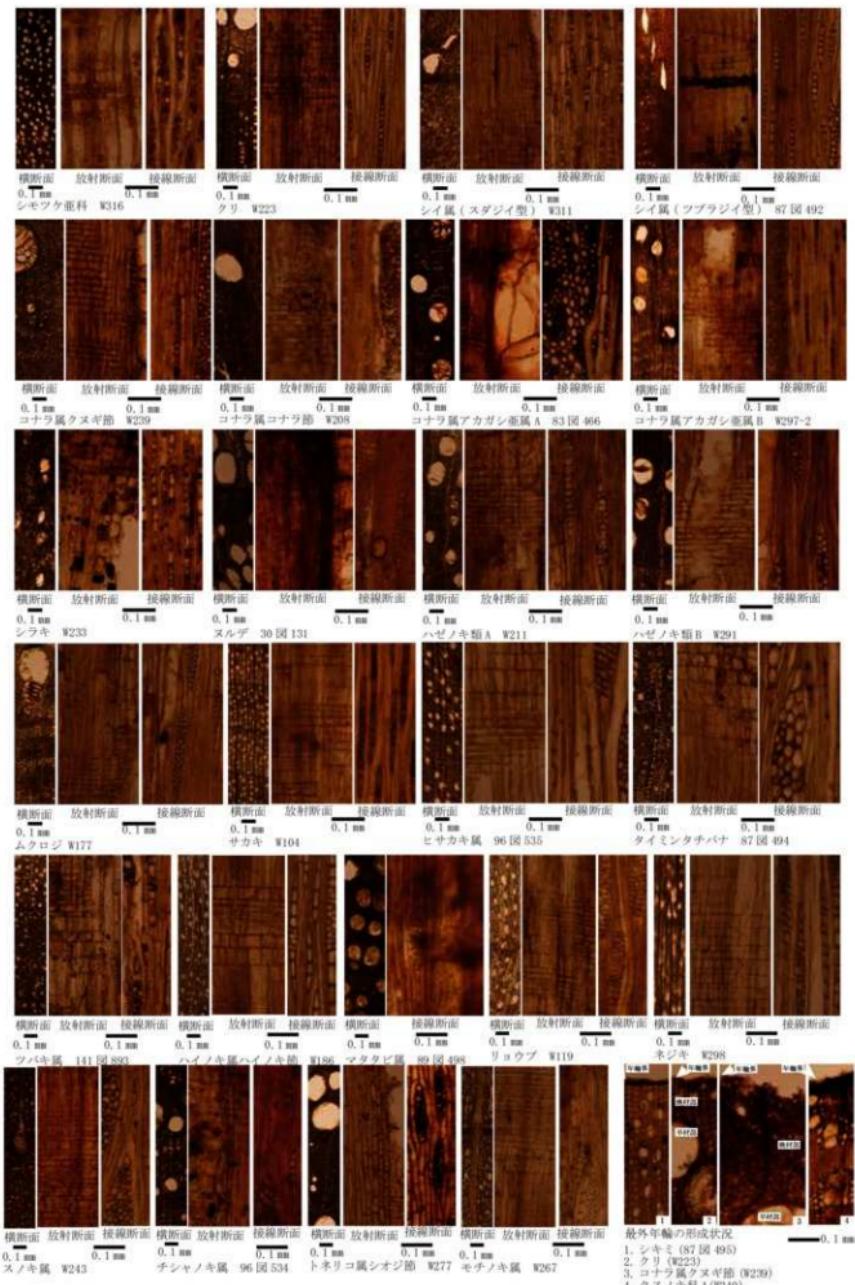
15. 被熟粘土塊

16. 金属滓 (鐵滓分)

図版 42



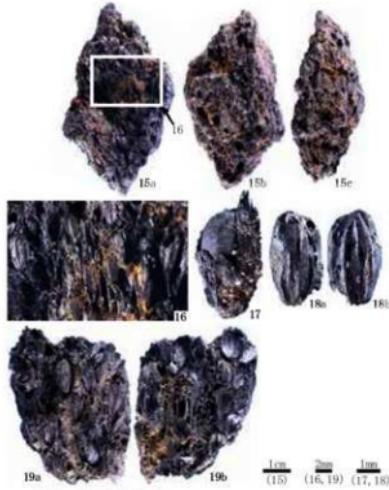
木製品樹種 1



図版 44



平成29年度同定種実 (1)
 1. マツ属複錐管葉果 球果(No.27) 2. イヌガタ 種子(No.59)
 3. オニグルミ 種(No.5) 4. イチイガシ 果実(No.28)
 5. イチイガシ 子葉(No.24)
 6. アカガシ胞殻(イチイガシ・アラカシ以外) 子葉(No.30)
 7. ツブライ? 子葉(No.23) 8. クスクスキ 種子(食糞)(No.53)
 9. スモモ 種(No.22) 10. モモ 種(No.56)
 11. モモ 種(No.14) 12. モモ 種(No.14)
 13. ハクウンボク 種子(No.55) 14. エゴノキ 種子(No.10)



平成29年度同定種実 (2)
 15. イネ 種・胚乳(果実序)(No.29:S3678 35[ER1])
 16. イネ 種・胚乳(果実序)(15a膨大)(No.29:S3678 35[ER1])
 17. イネ 種・胚乳(No.29:S3678 35[ER1])
 18. イネ 胚乳(No.29:S3678 35[ER1])
 19. イネ 種・胚乳(果実序)(No.29:S3678 35[ER1])



平成29年度同定種実 (3)
 20. ヒョウタン類 果実(No.61; (3面) 10[ER])
 21. ヒョウタン類 果実(頂部)(No.49; (3面) 10[ER])
 22. ヒョウタン類 果実(基部)(No.51; (3面) 10[ER])
 23. ヒョウタン類 果実(茎部)(No.50; (3面) 9[ER])
 24. ヒョウタン類 果実(基部)(No.57:S3678 25[ER])
 25. ヒョウタン類 果実(内果皮)・種子(No.51; (3面) 10[ER])
 26. ヒョウタン類 種子(No.51; (3面) 10[ER])
 27. ヒョウタン類 種子(No.50; (3面) 9[ER])
 28. ヒョウタン類 種子(No.52; 1面下層(灰色~黒色粘土) 31[ER])



平成30年度同定種実
 1. オニグルミ 種(No.19) 2. オニグルミ 種(リス類食糞)(No.13)
 3. イチイガシ 子葉(No.33) 4. イチイガシ 果実(No.8)
 5. ツブライ? 子葉(No.6) 6. ツブライ? 果実(No.15)
 7. クリ 果実(No.15) 8. クスクスキ 種子(No.2)
 9. ムクロジ 種子(No.15) 10. エゴノキ 種子(No.19)
 11. イネ 種・胚乳(No.4) 12. イネ 胚乳(No.4) 13. キビ 胚乳(No.4)
 14. ポタルイ属 果実(No.4) 15. コムクジ 胚乳(No.6)
 16. ガナムクワ 種(No.2) 17. ヒョウタン類 果実(No.14)
 18. マクワ・シリコ型 種子(No.31) 19. 不明種実(No.2)



平成29年度同定

1. カナブン 腹部腹板・胸部腹板(試料番号1: SX545 16区)
2. コガネムシ科 上翅先端部・後胸側板・後胸腹板(試料番号2: SX545 16区)
3. コガネムシ科 基部(試料番号3-1: SX545 16区)
4. コガネムシ科 上翅(試料番号3-2: SX545 16区)
5. コガネムシ科 上翅(試料番号3-3: SX545 16区)
6. コガネムシ科 上翅先端部(試料番号4-1: SX545 16区)
7. コガネムシ科 上翅の一部(試料番号4-2: SX545 16区)
8. コガネムシ科 腹部腹板(試料番号4-3: SX545 16区)
9. アカスジキンカメムシ 胸部腹板の一部(試料番号5: SX545 16区)
10. アオグミムシ? 上翅先端部(試料番号6-1面黒色粘土層 37区)
11. スジコガネ属 上翅の一部(試料番号6-2面黒色粘土層 37区)
12. スジコガネ属 上翅の一部(試料番号6-3面 黄中央北区)
13. コボソナガゴミムシ 上翅(試料番号8-1面下下層(灰色～黒色粘土) 31区)
14. コボソナガゴミムシ 上翅(試料番号8-1面下下層(灰色～黒色粘土) 31区)
15. カメムシ科 不明(試料番号9-1面下下層(灰色～黒色粘土) 31区)
16. カメムシ科 小盾板(試料番号9-2: 1面下下層(灰色～黒色粘土) 31区)



平成29年度同定

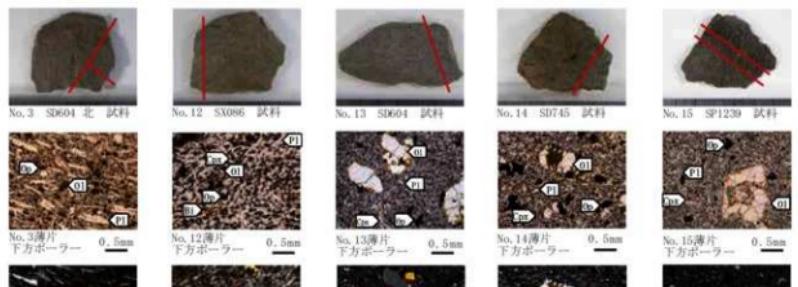
1. 飲類 四肢骨(No.10: SK123)
2. 飲類 不明(No.10: SK123)
3. 飲類 四肢骨(No.11: SK215)
4. 飲類 四肢骨(No.12: SK215)
5. イノシシ属 第2基節骨(No.13: SK225)
6. 飲類 不明(No.13: SK225)
7. 飲類 不明(No.14: SK1362)
8. 飲類 四肢骨(No.15: SP257)
9. 飲類 四肢骨(No.15: SP257)
10. ニホンジカ 角(No.17: SK111 + 112下)
11. 魚類 鰭棘(No.18: SK667下層)
12. イノシシ属 下顎骨(No.19: SK576上層)
13. インガイ目? 鰓皮(No.20: SK718)
14. インガイ目? 鰓皮(No.21: SK718)
15. ニシシカ 左下顎骨(No.22: 上層)
16. ニシシカ 曲歯(No.22: 2面上層)
17. 鳥類? 上腕骨(No.23: 2面上層)
18. イノシシ属 下顎筋2門歯(No.24: SK1339)
19. イノシシ属? 左蝶骨(No.25: 3面)
20. イノシシ属 下顎骨(No.27: 2面下)
21. イノシシ属 左下顎第3臼歯(No.27: 2面下)
22. イノシシ属 下顎後臼歯(No.27: 2面下)
23. イノシシ属 右上顎第3臼歯(No.28: 3面)
24. イノシシ属? 上顎骨(No.28: 3面)

平成30年度同定

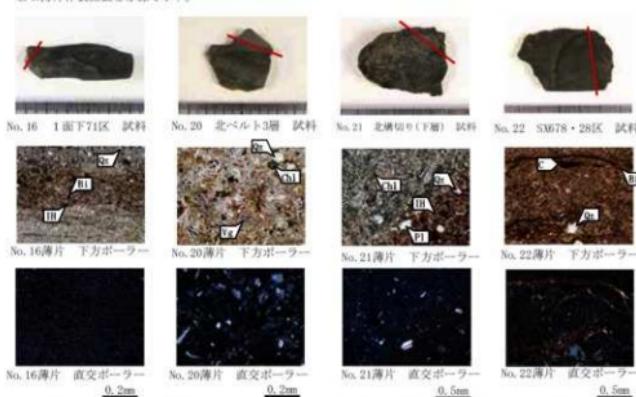
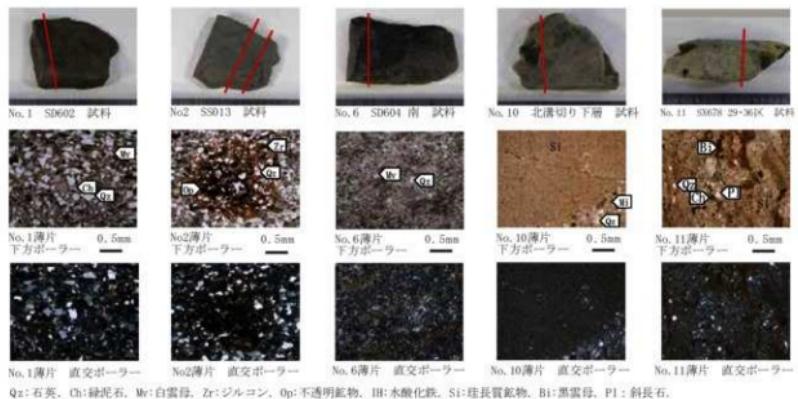


出土昆虫・骨貝類

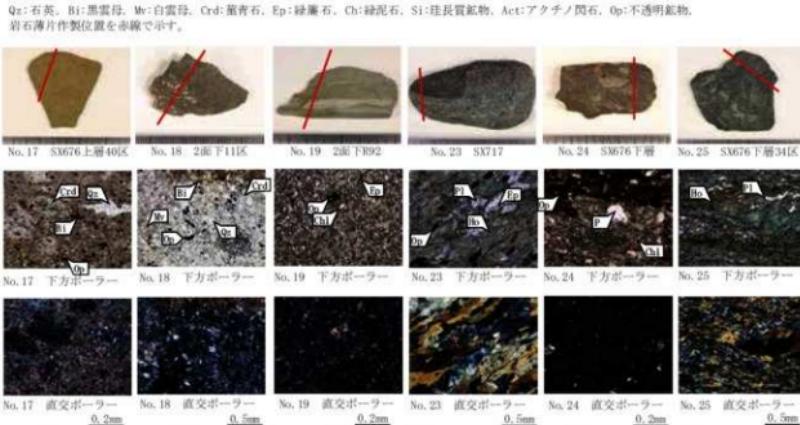
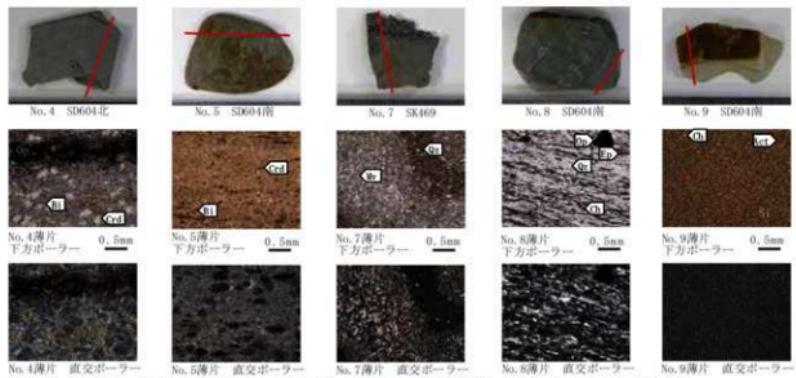
図版 46



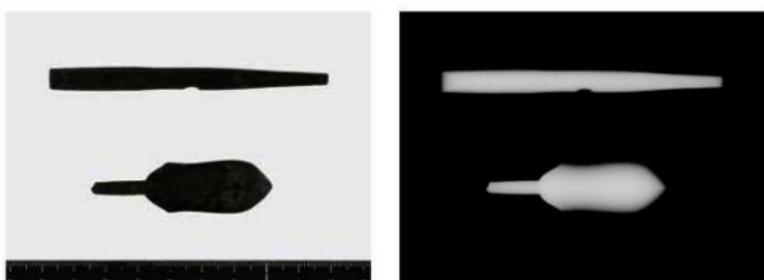
No. 3薄片 直交ポーラー No. 12薄片 直交ポーラー No. 13薄片 直交ポーラー No. 14薄片 直交ポーラー No. 15薄片 直交ポーラー
P1: 斜長石, Ol: カンラン石, Cpx: 单斜輝石, Op: 不透明鉱物, Bi: 黒雲母
岩石薄片作製位置を赤線で示す。



Qz: 石英, Bi: 黒雲母, Pl: 斜長石, Chl: 緑銅石, Vg: 火山ガラス仮像, IH: 木酸化鉄, C: 壩質物。
岩石薄片作製位置を赤線で示す。

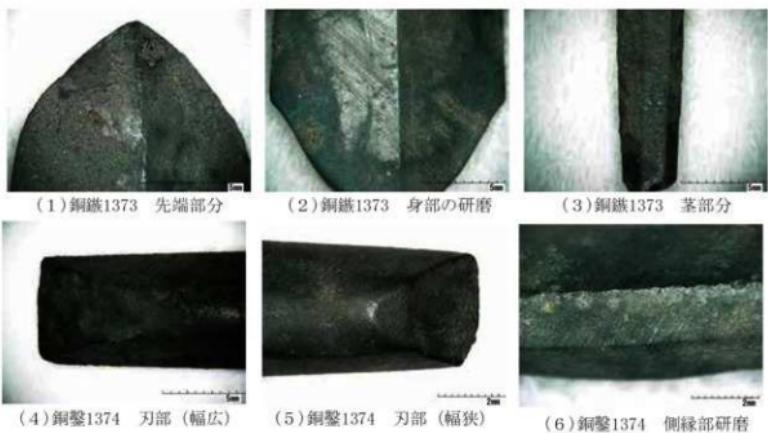


1. 岩石薄片 2



2. 銅鑿・銅鑿の外観および透過X線画像

図版 48



1. 銅鑃・銅鑃の拡大画像



2. 石・ガラス製玉類の拡大画像

報告書抄録

ふりがな	ささい14									
書名	雀居14									
副書名	雀居遺跡第18次調査報告									
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書									
シリーズ番号	第1388集									
編著者名	板倉有大(編) パリノ・サーヴェイ株式会社 株式会社古環境研究所 上條信彦 清水小春 比佐陽一郎 松園菜穂									
編集機関	福岡市教育委員会(福岡市経済観光文化局文化財活用部)									
所在地	〒810-8620 福岡市中央区天神1丁目8番1号 電話: (092) 711-4667									
発行年月日	2020年3月25日									
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因			
ささいいせき 雀居遺跡	ふくおかし 福岡市 <small>はかしこくおおきしきさき</small> 博多区大字雀居	40132	2633	33度34分51秒	130度26分52秒 ～ 20170930	2,407	記録保存調査			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項					
雀居遺跡 第18次調査	集落	弥生時代 早・前・中期	柱穴、土坑、溝、土器群	弥生土器、木器、石器、金屬器、玉類、土製品、自然遺物	・弥生時代早期から中期前半までの連続的な居住痕跡					
	集落	古墳時代前期	掘立柱建物、柱穴、土坑、井戸、堅穴建物、溝、大型土坑、土器群、大溝、杭列	土師器、木器、石器、金属器、玉類、土製品、自然遺物	・集落と河川の関係を示す遺構 ・鍛冶関連遺物 ・多様な外来系土器					
	水田	奈良・平安時代	土坑、溝、河川、水田	土師器、須恵器、木器、石器、玉類、土製品、自然遺物	・水田祭祀関連遺物の出土					
雀居遺跡は、弥生時代から中世の複合遺跡で、福岡平野の中央部、沖積低地内の微高地（自然堤防）上に位置する。第18次調査では、雀居遺跡の中央部南側を調査し、奈良・平安時代の水田（第1面）、古墳時代前期の集落と河川部（第2面）、弥生時代早期～中期前半の集落（第3面）を記録した。										
第1面の調査では、水田区画を検出し、既往の第10・13次調査区を再検出することで、一帯の水田区画配置が正確に復元できるようになった。遺物は、墨書・刻畫土器、瓦片、木簡、一本鉗、小枝束、木製陶器、權形石製品などが出土した。6世紀後半の遺物も出土し、水田構築年代の上限を示す可能性が示唆された。										
第2面の調査では、微高地上の集落と河川部の水利関連遺構を確認し、集落と河川の境界域の様相が把握された。多量の土器・木器とともに、鐵素材や石製玉素材、鐵滓、被熱粘土塊、敲石や砥石、台石、土製・石製支脚などが出土し、炉跡を伴う方形堅穴建物において鍛冶や玉作りが行われた可能性が示唆された。出土遺物には、近畿・関東・山陰・瀬戸内・朝鮮半島など、多様な地域からの影響が見られる。										
第3面の調査では、弥生時代早期から中期前にかけて集落域が東に広がっていたことを確認した。出土遺物には、石棒、隆線文壺、アマゾナイト製小玉、ガラス製トンボ玉、柳葉形磨製石鏡、朝鮮半島無文土器系の土器などが含まれる。										
自然科学分析では、出土木器樹種、種実、昆虫・骨貝類の同定、岩石の薄片鑑定、木器の炭素14年代測定、イネ・イネ圧痕の分析、金属・ガラス・石製品、赤色顔料、被熱粘土塊の分析などを行い、出土資料の基礎情報を得ている。										

要約

雀居 14
—雀居遺跡第 18 次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1388 集

令和 2 年 3 月 25 日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号
電話 (092)711-4667

印刷 ダイヤモンド秀巧社印刷株式会社
福岡市東区松田 3 丁目 9-32
電話 (092)621-8711